筑後西部第２地区遺跡群（Ⅷ）

福岡県筑後市大字常用、水田所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第57集

2004

筑後市教育委員会

筑後西部第２地区遺跡群（Ⅷ）

常用日田行遺跡（第１・2次調査）

常用長田遺跡（第１次調査）

水田上平霊石遺跡（第1・3次調査）

2004

筑後市教育委員会

序

この報告書は、筑後西部第２地区の県営担い手育成基盤整備事業によって、平成8・11年度に筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

当遺跡は、筑後市の南西部に位置した標高7～8m位の低位段丘上にあり、これまでの調査成果によって、周辺には縄文時代から中世までの複合遺跡が多く点在していることが知られていました。今回報告する調査地からは、弥生時代を中心とする遺構や遺物を確認したことによって、貴重な調査成果を新たに加えることができました。

本報告書が地域における文化財保護思想普及の一助として、また、学術研究の資料としてひろく活用されることになれば幸いと存じます。

おわりに、本報告書の刊行にあたり、発掘調査から整理報告に至るまで、多大なご協力を頂きました関係者並びに作業参加者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

筑後市教育委員会
教育長　城戸一男

例　言

1.本書は県営担い手育成基盤整備事業に係る筑後西部第2地区の工事に伴い、福岡県筑後川水系農地開発事務所の委託を受けて、筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2.発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行い、出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会において所蔵・保管をしている。なお、発掘調査並びに整理作業の関係者は「Ⅰ.調査経過と組織」に記したとおりである。
3.調査に用いた測量座標は国土調査法第Ⅰ座標系を基準としているため、本書に示される方位はすべてG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたものである。また、水準はT.P.を基準としている。
4.本書に使用した図面のうち、遺構実測図は永見秀徳、小林勇作、柴田剛、田中剛、野田洋子、江崎貴浩、奥村太郎、末吉隆弥（現川崎町教育委員会）、大塚恵治（現八女市教育委員会）、遺物実測図は平塚あけみ、仲文恵、横井理絵、福井円、佐々木寿代が作成し、図版の浄書は仲、佐々木、横井が行った。また、遺構全体実測図のうち、常用日田行遺跡（第1・2次）、常用長田遺跡（第1次）はアジア航測株式会社に委託した。
5.本書に使用した写真のうち、遺構は永見、小林、柴田、田中、野田、遺物は永見、小林が撮影した。また、遺構の全体写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
6.本書に使用した遺構番号で、遺構の種別記号は下記の略号で表示し、種別記号の前に記した数字は調査次数を表わす。

・○SA○○○―柵列　・○SB○○○―掘立柱建物　・○SD○○○―溝
・○SI○○○―竪穴式住居　・○SK○○○―土坑　・○ST○○○―甕棺墓・土壙墓
・○SP○○○―ピット　・○SX○○○―不明以降

7.本書に使用した遺構の地区は各遺跡の遺構略測図に表す地区番号を使用し、原則として遺構に対して南東隅の測量杭を基準として使用した。
8.本書に使用した遺物図版において、遺物番号の後に（）で表した数値は遺物の縮尺率を表す。
9.本書の執筆は「Ⅲ.調査成果」4・5を永見、その他は小林が担当し、全ての編集は小林が行った。

目 次

Ⅰ.調査経過と組織 …… 1
Ⅱ.位置と環境 …… 3
Ⅲ.調査成果 …… 5
1.常用日田行遺跡（第1次調査） …… 5
(1) はじめに …… 5
(2) 検出遺構 …… 5
(3) 出土遺物 …… 19
(4) 小結 …… 55
2.常用日田行遺跡（第2次調査） …… 61
(1) はじめに …… 61
(2) 検出遺構 …… 61
(3) 出土遺物 …… 71
(4) 小結 …… 88
3.常用長田遺跡（第1次調査） …… 93
(1) はじめに …… 93
(2) 検出遺構 …… 93
(3) 出土遺物 …… 96
(4) 小結 …… 106
4.水田上平霊石遺跡（第1次調査） …… 109
(1) はじめに …… 109
(2) 検出遺構 …… 109
(3) 出土遺物 …… 120
(4) 小結 …… 136
5.水田上平霊石遺跡（第2次調査） …… 145
(1) はじめに …… 145
(2) 検出遺構 …… 147
(3) 出土遺物 …… 147
(4) 小結 …… 147
Ⅳ.まとめ …… 149
Ⅴ.総　括 …… 159

挿図目次

Ⅱ.位置と環境

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）　3

Ⅲ—1　常用日田行遺跡（第1次調査）

Fig.2　常用日田行遺跡第1次調査地点位置図（1/2,500）　5
Fig.3　竪穴住居（1SI040・050）実測図（1/40・1/80）　6
Fig.4　土壙墓（1ST112）実測図（1/40）　7
Fig.5　溝（1SD010・020）土層断面実測図（1/40）　7
Fig.6　土坑（1SK001～003・005・011・013・015・022）実測図（1/60）　9
Fig.7　土坑（1SK023・025・027～029・035・036・038・039・041）実測図（1/60）　11
Fig.8　土坑（1SK042・045・046・048・055・060・065・070・075）実測図（1/60）　13
Fig.9　土坑（1SK080・085・090・101・102・105・106）実測図（1/60）　15
Fig.10　土坑（1SK107～110・115～118・135・140）実測図（1/60）　17
Fig.11　土坑（1SK145・150・158）実測図（1/60）　18
Fig.12　竪穴住居（1SI040、1SP161・162・167、1SI050、1SP151）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）　19
Fig.13　土壙墓（1ST112）出土遺物実測図（1/3）　20
Fig.14　溝（1SD010・020・030）出土遺物実測図（1/3）　20
Fig.15　土坑（1SK001）出土遺物実測図（1/4）　22
Fig.16　土坑（1SK002・003）出土遺物実測図（1/4）　23～24
Fig.17　土坑（1SK005・011・015・017・021・022）出土遺物実測図（1/2・1/4）　26
Fig.18　土坑（1SK023）出土遺物実測図①（1/4）　28
Fig.19　土坑（1SK023）出土遺物実測図②（1/4）　29
Fig.20　土坑（1SK024・027）出土遺物実測図（1/4）　30
Fig.21　土坑（1SK028）出土遺物実測図（1/2・1/4）　32
Fig.22　土坑（1SK029）出土遺物実測図①（1/4）　33
Fig.23　土坑（1SK029）出土遺物実測図②（1/4）　34
Fig.24　土坑（1SK034・037～039・041・042）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）　35
Fig.25　土坑（1SK044）出土遺物実測図（1/2・1/4）　37
Fig.26　土坑（1SK046・048・053・060）出土遺物実測図（1/2・1/4）　39
Fig.27　土坑（1SK061・070・073・075）出土遺物実測図（1/3・1/4）　40
Fig.28　土坑（1SK080・084・086・090）出土遺物実測図（1/2・1/4）　42
Fig.29　土坑（1SK093・099・101・102）出土遺物実測図（1/2・1/4）　44
Fig.30　土坑（1SK105・106）出土遺物実測図（1/2・1/4）　45
Fig.31　土坑（1SK108～110・113）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）　47
Fig.32　土坑（1SK116）出土遺物実測図①（1/4）　48
Fig.33　土坑（1SK116）出土遺物実測図②（1/4）　49
Fig.34　土坑（1SK116）出土遺物実測図③（1/4）　50
Fig.35　土坑（1SK116・117）出土遺物実測図（1/4）　52
Fig.36　土坑（1SK125・127・128・130）出土遺物実測図（1/2・1/4）　53
Fig.37　土坑（1SK152・155・158～160）、撹乱、包含層出土遺物実測図（1/2・1/4）　55
Fig.38　常用日田行遺跡第1次調査遺構略測図（1/300）　57～58
Fig.39　常用日田行遺跡第1次調査遺構全体実測図（1/300）　59～60

Ⅲ—2　常用日田行遺跡（第2次調査）

Fig.40　常用日田行遺跡第2次調査地点位置図（1/2,500）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　61
Fig.41　溝（2SD1001・1023・1028・1031・1032・1041・1058・1060・1064・1067）
土層断面実測図（1/60）　・・・　62
Fig.42　井戸（2SE1035）実測図（1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　63
Fig.43　土坑（2SK1002～1012）実測図（1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　65
Fig.44　土坑（2SK1013～1019・1021・1024・1026）実測図（1/60）　・・・・・・・・・・・・　67
Fig.45　土坑（2SK1033・1038・1039・1045～1049）実測図（1/60）　・・・・・・・・・・・・　69
Fig.46　土坑（2SK1050～1053・1065）実測図（1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　70
Fig.47　溝（2SD1001・1030・1032・1041・1058・1060）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）　72
Fig.48　土坑（2SK1002・1004～1008・1011）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）・・・・・・　74
Fig.49　土坑（2SK1012）出土遺物実測図（1/4）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　76
Fig.50　土坑（2SK1012・1014・1015・1019）出土遺物実測図（1/2・1/4）　・・・・・・・　77
Fig.51　土坑（2SK1024・1033）出土遺物実測図（1/2）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　78
Fig.52　土坑（2SK1035・1037）出土遺物実測図（1/2・1/4）　・・・・・・・・・・・・・・・・　79
Fig.53　土坑（2SK1038・1039）出土遺物実測図（1/2・1/4）　・・・・・・・・・・・・・・・・　81
Fig.54　土坑（2SK1045・1047～1049）出土遺物実測図（1/2・1/4・1/6）　・・・・・・・・・・　83
Fig.55　土坑（2SK1050～1053）出土遺物実測図（1/2・1/4）　・・・・・・・・・・・・・・・・　84
Fig.56　土坑（2SK1073～1075）出土遺物実測図（1/4・1/8）　・・・・・・・・・・・・・・・・　85
Fig.57　土坑（2SK1074・1080）、表土出土遺物実測図（1/2・1/4）　・・・・・・・・・・・・・　86
Fig.58　常用日田行遺跡第２次調査遺構略測図（1/300）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　89～90
Fig.59　常用長田遺跡第２次調査遺構全体実測図（1/300）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　91～92

Ⅲ—3　常用長田遺跡（第1次調査）

Fig.60　常用長田遺跡第1次調査地点位置図（1/2,500）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　93
Fig.61　土坑（1SK200・202・205・208・210・213・219・222・225・242）実測図（1/60）　94
Fig.62　土坑（1SK247・250～252・260）実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　96
Fig.63　溝（1SD300）出土遺物実測図（1/3・1/4）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　97
Fig.64　土坑（1SK200・208・210・213）出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・　98
Fig.65　土坑（1SK221・222・224～226）出土遺物実測図（1/4）・・・・・・・・・・・・・・・　99
Fig.66　土坑（1SK231・243）出土遺物実測図（1/2・1/4）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　101
Fig.67　土坑（1SK245～247・249）出土遺物実測図（1/4）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　102
Fig.68　土坑（1SK250）出土遺物実測図（1/4）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　103
Fig.69　土坑（1SK251・252）、撹乱、表土出土遺物実測図（1/2・1/4）　・・・・・・・・・・　105
Fig.70　常用長田遺跡第1次調査遺構略測図及び遺構全体実測図（1/300）　・・・・・・・・・・・　107～108

Ⅲ—4　水田上平霊石遺跡（第1次調査）

Fig.71　水田平霊石遺跡第１次調査地点位置図（1/5,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　109
Fig.72　溝状遺構実測図①（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　110
Fig.73　溝状遺構実測図②（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　111
Fig.74　1SD001関連土坑実測図①（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　113
Fig.75　1SD001関連土坑実測図②（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　114
Fig.76　土坑実測図①（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　115
Fig.77　土坑実測図②（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　116
Fig.78　土坑実測図③（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　117
Fig.79　土坑実測図④（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　118
Fig.80　掘立柱建物実測図（1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　119
Fig.81　溝状遺構出土遺物実測図①（1/4・2/3・1/3・1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　121

Fig.82　溝状遺構出土遺物実測図②（1/4・2/3・1/2）　122
Fig.83　溝状遺構出土遺物実測図③（1/2・2/3）　123
Fig.84　溝状遺構出土遺物実測図④（1/2・1/4）　124
Fig.85　溝状遺構出土遺物実測図⑤（1/4・2/3）　125
Fig.86　土坑出土遺物実測図①（1/3・1/4）　126
Fig.87　土坑出土遺物実測図②（1/4・1/3）　127
Fig.88　土坑出土遺物実測図③（1/4・2/3）　128
Fig.89　土坑出土遺物実測図④（1/3・1/4・2/3）　129
Fig.90　土坑出土遺物実測図⑤（2/3・1/2・1/4）　130
Fig.91　土坑出土遺物実測図⑥（1/4・2/3）　131
Fig.92　掘立柱建物出土遺物実測図（1/3）　132
Fig.93　柵列出土遺物実測図（1/3）　133
Fig.94　その他の遺構出土遺物実測図①（1/3）　134
Fig.95　その他の遺構出土遺物実測図②（1/2・1/3・2/3）　135
Fig.96　遺構検出時略測図（1/300）　142
Fig.97　遺構全体配置図（1/200）　143～144

Ⅲ—5　水田上平霊石遺跡（第3次調査）

Fig.98　水田上平霊石遺跡第３次調査位置図（1/2,500）　145
Fig.99　甕棺実測図（1/20）　146
Fig.100　出土甕棺実測図（1/8）　148

Ⅳ.まとめ

Fig.101　土坑分類模式図　151
Fig.102～104（平面・立面・底面）形状別グラフ　153
Fig.105～107（A・B・C群）別グラフ　153
Fig.108　土坑分類形態別グラフ　153
Fig.109　甕形土器分類模式図　155
Fig.110　土錘分類模式図　158

Ⅴ.総括

Fig.111　筑後西部第２地区遺跡群発掘調査地点位置図（1/10,000）　160

表目次

Tab.1　常用日田行遺跡（第1次調査）遺構番号台帳　56
Tab.2　常用日田行遺跡（第2次調査）遺構番号台帳　88
Tab.3　常用長田遺跡（第1次調査）遺構番号台帳　106
Tab.4～6　出土遺物（土器）観察表①～③　139～141
Tab.7　出土遺物（土器以外）観察表　141
Tab.8　遺構番号一覧　143
Tab.9・10　常用日田行・長田遺跡竪穴住居一覧表（法量・面積別）　149
Tab.11　土坑一覧表　152
Tab.12　土坑分類区分別比較表　153
Tab.13　土坑分類形態別比較表　153
Tab.14　甕形土器分類一覧表　156
Tab.15　甕形土器分類別集計表　157
Tab.16　土錘分類一覧表　158
Tab.17　筑後西部第２地区遺跡群発掘調査一覧表　160

Ⅰ.調査経過と組織

筑後西部地区遺跡群は、福岡県の南部、筑後市の南西部に位置する。この地区は米や麦を中心とした稲作農耕が盛んに行われており、近年では農業経営の多様化によってハウスでの園芸や栽培といった施設園芸が導入されるようになった。しかし、近代化農業の阻害要因である排水不良や道路の狭小かつ未整備などにより農業機械の導入が困難な状況のままであった。このため、耕地の集団化、区画の整理、農道の整備、用排水の分離をして耕地の汎用化を図り、大型機械の導入による営農体系を確立し、作目選択の自由化、農業経営の近代化と合理化によって農業所得の増大を図ることを目的とした事業が行われることとなった。

この事業に伴い、工事によって破壊される恐れのある埋蔵文化財の取り扱いについて、平成7年度に福岡県筑後川水系農地開発事務所から筑後市教育委員会へ照会があった。これを受けた筑後市教育委員会では、工事着手前の平成8年度に試掘調査を開始し、その結果をもとに協議を行った。協議の結果、埋蔵文化財が確認された場所において掘削・削平の及ぶ箇所を「筑後西部第2地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査」として実施することになり、発掘調査は工事の進行状況に応じて平成8年度・10年度まで実施された。なお、埋蔵文化財発掘調査に係る費用は、国・福岡県から一部の補助を受け、受益者負担分については筑後市が負担し、残る費用については福岡県筑後川水系農地開発事務所において負担した。

発掘調査で出土した遺物の整理と報告書作成については、随時筑後市役所内文化財整理室で行った。

調査組織

報告する調査が多年度にまたがるため、ここで一括して調査体制をあげる。

1.平成8年度調査体制（常用日田行遺跡第1・2次調査、常用長田遺跡第1次調査）

総括	教育長	森田　基之
	教育部長	津留　忠義
庶務	社会教育課長	山口　逸郎
	社会教育係長	本村　正晴
	社会教育係	永見　秀徳
		小林　勇作（調査担当）
		田中　　剛（〃）
		柴田　　剛（嘱託）

2.平成10年度調査体制（水田上平霊石遺跡第1・3次調査）

総括	教育長	森田　基之（～4/6）
		牟田口和良（4/7～）
	教育部長	下川　雅晴
庶務	社会教育課長	山口　逸郎
	文化係長	田中　清通
	文化係	永見　秀徳（調査担当）
		小林　勇作
		上村　英士
		柴田　　剛（嘱託）
		立石　真二（〃）
発掘調査参加者（順不同、敬称略）		
	調査補助員	野田　洋子・永田　佳子
	発掘作業員	浅山　頼子・池末　桂子・井上むつ子・井上　正治・牛島　蓉子・太田黒三枝・大塚　政夫・奥村　太郎・

小野カトリ・小野　清次・小野ミノブ・加藤　礼子・
椛島美恵子・北島　　清・古賀　明美・近藤　　都・
城崎マス代・角　里　子・瀬戸八重子・高野奈緒美・
壇　ちゑ子・土井八重子・平井　正芳・深町　順子・
深町スミ子・馬場　孝司・東　　末子・平尾　仁子・
松木　龍幹・村上　幸子・村上美津子・室園　京子・
本村　修一・吉開　朝子

3.平成15年度体制（報告書作成）

総括	教育長	牟田口和良（～9/30）
		城戸　一男（10/1～）
	教育部長	菰原　　修
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化スポーツ係長	成清　平和
	〃　　係主査	大島　靖彦
	〃　　係	田中　純彦
		永見　秀徳
		小林　勇作
		上村　英士
		立石　真二（嘱託）
整理作業参加者（順不同、敬称略）		
	整理補助員	平塚あけみ
		江藤　玲子
		仲　　文恵
	整理作業員	野間口靖子、馬場　敦子、野口　晴香、湯川　琴美、湊　まど香、佐々木寿代

なお、発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々にご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

佐田茂（佐賀大学）、小林博昭、白石純、（以上岡山理科大学）、佐々木隆彦、中間研至、小田和利、小川泰樹（以上福岡県教育庁）、城戸康利、中島恒次郎、山村信榮、井上信正、宮崎亮一、高橋学、森田レイ子（以上太宰府市教育委員会）、富永直樹（久留米市教育委員会）、赤崎敏男、大塚恵治（八女市教育委員会）、廣坂美保（岡山理科大学院生）、狭川真一（元興寺文化財研究所）

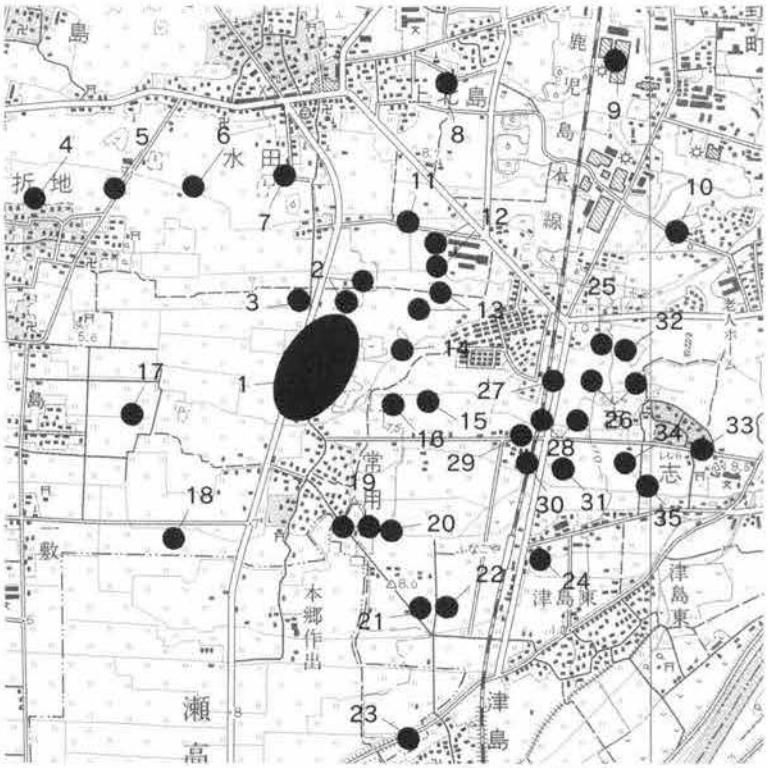
II.位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

当遺跡が所在する常用・水田地区は筑後市南西部の低位段丘上に位置し、多くの文化財が点在する。

最も文化財が集中するのは、菅原道真公を祭祀とする水田天満宮がある水田地区で、筑後市指定文化財の約1/3がここにある。水田天満宮は社名に安楽寺所司神人所、老松宮等の変遷があるとおり、大宰府安楽寺の荘園における経済的な中心（水田荘）として栄えた。直接の支配は菅原氏の一族である大鳥居氏があたっており、後世には菅公末孫の大宰府からの代々隠居の地となった。県指定文化財の「本殿」[註1]は、大宰府天満宮の建築様式を踏襲した柿葺きの三間社流造である。嘉禄3年（1227）に後堀河天皇の勅を受けて菅原為長が造立され寛文12年（1672）に再建したが、現在の建物は平成3年（1991）の台風災害によって解体修理されたものである[註2]。本殿以外の県指定文化財では、肥前形式の構造を呈した「石造狛犬（慶長十五年：1610）」[註3]及び「石造鳥居（慶長十九年：1614）」[註4]、有形民俗文化財である「木造獅子頭（室町期）」[註5]及び「木造火王水王面（天文十年：1541）」[註6]、無形民俗文化財である「稚児風流」[註7]及び「水田天満宮千燈明」[註8]、天然記念物の「水田の森」[註9]があり、季節を通じて筑後市を代表する文化財を楽しむことができる。水田天満宮から少し離れた西側の県道沿いには、茅葺き屋根の建物が目に付く。幕末期に、久留米藩の勤王思想家として著名な水天宮神職の真木和泉守が摘居生活を過ごした「山梔窩（県指定）」[註10]がこれである。明治から昭和にかけての在郷町水田は、県内第一位の生産高を誇る「水田和傘（無指定）」[註11]の生産地として繁栄していたが、戦後は洋傘の普及により年々減少し消滅した。

ここまでは県指定文化財を中心に紹介してきたが、次に当遺跡が所在する筑後西部第2地区遺跡群に



1.常用遺跡群
（常用日田行遺跡・常用長田遺跡）
2.水田上平霊石遺跡
3.水田下平霊石遺跡　4.折地長間寺遺跡
5.水田伊勢ノ脇遺跡　6.水田正吹遺跡
7.水田下桜町遺跡　8.上北島前田遺跡
9.上北島平塚遺跡　10.上北島裏山遺跡
11.水田杉ノ元遺跡　12.水田山伏遺跡
13.水田上仁良葉遺跡　14.常用ニラバ遺跡
15.常用野々下遺跡　16.常用相割遺跡
17.梅島遺跡　18.常用ピンセ田遺跡
19.津島南佛生遺跡　20.津島南笹原遺跡
21.津島北石伏遺跡　22.津島皿ヶ町遺跡
23.津島洲崎遺跡　24.津島西美田遺跡
25.志藪の内遺跡　26.志上婦計遺跡
27.志野添遺跡　28.志下婦計遺跡
29.常用野中遺跡　30.志西田遺跡
31.志西野々遺跡　32.志八反田遺跡
33.尾島東婦計遺跡　34.志前田遺跡
35.志垣添遺跡

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

ついて概観する。分布状況をFig.1並びにTab.1で示すとおり、当地区ではこれまでに多数の調査成果が報告され、各時代における多種類の遺跡が点在していることがわかってきた。時代別にみると、当地区での旧石器時代の痕跡は未だ確認されていないが、縄文時代になると早期の石組炉が検出された「志前田遺跡」「志西野々遺跡」等、志地区を主体として分布しているようである。弥生時代では前期の溜井を確認した「津島九反坪遺跡」、中期の集落跡である「津島皿ヶ町遺跡」と同じく後期の集落跡である「津島北石伏遺跡」、更に弥生終末～古墳時代にかけての集落跡である「津島南佛生遺跡」や「津島南笹原遺跡」等、各期における主要な調査成果が得られている。古墳時代以降、次に画期を迎えるのは下妻荘・水田荘が栄えた中世以降と想定されるが、当該期の調査成果は僅かに「志野添遺跡」「尾島下町裏遺跡」等での報告に止まっている。

さて、今回報告する「常用遺跡」の発見は昭和44年（1969）に遡る。当時、筑後市内の「狐塚遺跡」を発掘調査中であった小田富士雄氏、藤口健二氏の両氏らは、当地から甕棺が発見されたとの報告により踏査を実施したことに始まる。報告書によると、板付「b期に相当する壺棺が斜めに埋葬されている状態が観察され、付近からは前期～中期に及ぶ資料が認められたことから住居跡と墳墓が重複する遺跡であることが知られたとある。一方、今回報告する「水田上平霊石遺跡」のメインである巨石の支石墓（ドルメン）は以前から地元で「いぼ観音」と呼ばれ奉られていた。詳細が記されている「水田校区郷土史」によると、長さ2.4m、幅1.8m、石質は筑肥山塊の石墨片岩質で、昭和29年（1954）に下部を掘削したところ人骨が一部確認されたとある。更にドルメンの一部は江戸時代末に中折地八幡宮境内西南隅に運ばれていることから、他に幾基か存在していた可能性があることを示唆している。

【註】
1.「水田天満宮本殿」　県指定文化財　有形文化財・建造物　昭和36年4月18日指定
2.「水田天満宮本殿保存修理工事報告書」　筑後市文化財調査報告書第53集　筑後市教育委員会　2003
3.「石造狛犬」　県指定文化財　有形文化財・彫刻　昭和36年10月21日指定
4.「石造鳥居」　県指定文化財　有形文化財・建造物　昭和36年10月21日指定
5.「木造獅子頭」　県指定文化財　有形民俗文化財　昭和36年1月14日指定
6.「木造火王水王面」　県指定文化財　有形民俗文化財　昭和36年1月14日指定
7.「稚児風流」　県指定文化財　無形民俗文化財　昭和31年1月19日指定
8.「水田天満宮千燈明」　県指定文化財　無形民俗文化財　昭和35年12月21日指定
9.「水田の森」　県指定文化財　天然記念物　昭和36年10月21日指定
10.「山梶窯」　県指定文化財　史跡　昭和44年10月20日指定
11.「水田校区郷土史」　筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会　昭和56年12月

【参考文献】
『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅰ）』　筑後市文化財調査報告書第21集　筑後市教育委員会　1999
『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅱ）』　筑後市文化財調査報告書第26集　筑後市教育委員会　2000
『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅲ）』　筑後市文化財調査報告書第27集　筑後市教育委員会　2000
『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅳ）』　筑後市文化財調査報告書第34集　筑後市教育委員会　2001
『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅴ）』　筑後市文化財調査報告書第43集　筑後市教育委員会　2002
『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅵ）』　筑後市文化財調査報告書第50集　筑後市教育委員会　2003
『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅶ）』　筑後市文化財調査報告書第51集　筑後市教育委員会　2003

Ⅲ.調査成果

1.常用日田行遺跡（第1次調査）

(1) はじめに (Fig.2)

当遺跡は筑後市大字常用字日田行706外に所在し、標高7～8m位の低位段丘上にある。県営担い手育成基盤整備事業に伴う筑後西部第2地区の工事によって、埋蔵文化財が破壊を受ける部分について発掘調査を実施した。今回は、新設の道路及び排水路の設置予定箇所に面工事によって削平される部分を調査対象範囲として調査区を設置した。なお、調査当時は周辺で行われていた発掘調査を含めて「常用遺跡群」として実施していたため当遺跡は「B区」と称し、遺構仮番号はS—001～S—199を使用した。また調査区は現況道路を境に「北部」並びに「南部」とした。

調査面積は北部と南部で4,185㎡であり、調査は平成8年8月から同年12月までの間実施した。この間、考古学的手法による表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構検出、掘削、実測、写真撮影等の作業を行った。調査は小林勇作が担当し、柴田剛（現：伊万里市教委）、田中剛、野田洋子の協力を得た。

調査の結果、竪穴住居・溝・土壙墓・土坑・ピット等多種における遺構が確認され、弥生土器・土師器・石製品・鉄製品等の遺物を得ることができた。以下は調査区内で確認された主要な遺構や遺物について概述する。

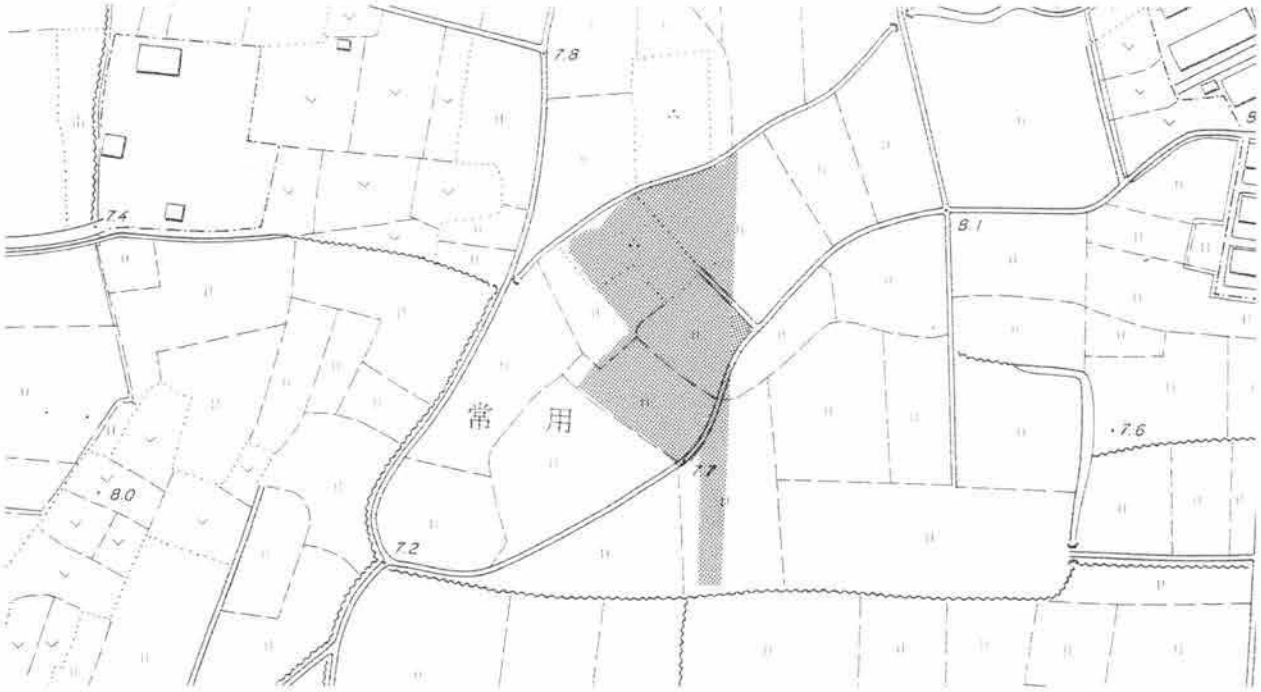


Fig.2　常用日田行遺跡第1次調査地点位置図（1/2,500）

(2) 検出遺構

竪穴住居

1SI040 (Fig.3、Pla.3)

北部調査区の西端、Y10地区に位置する。遺構は1SK080・090・127・158に切られ、南西端部は削平されていた。平面プランはほぼ円形状を呈し、径は6.15m前後を測ることから床面積は約29.7㎡が予測される。検出面から住居底面までの深さは約0.10m程度と残存状況は悪く、床面の状況も不安定であった。住居底面の中央部からは楕円形状の炉が検出され、長軸1.05m、短軸0.60m、住居底面からの深さは0.30mを測る。主柱穴はP1～7の計7穴が検出され、炉を中心にほぼ等間隔で周囲を巡る。規模は径0.30～0.55m、住居底面から柱穴底面までの残高は0.47～0.54mを測る。住居内及び炉からは弥生土器（甕）、石器（石鏃）等の遺物を認めている。

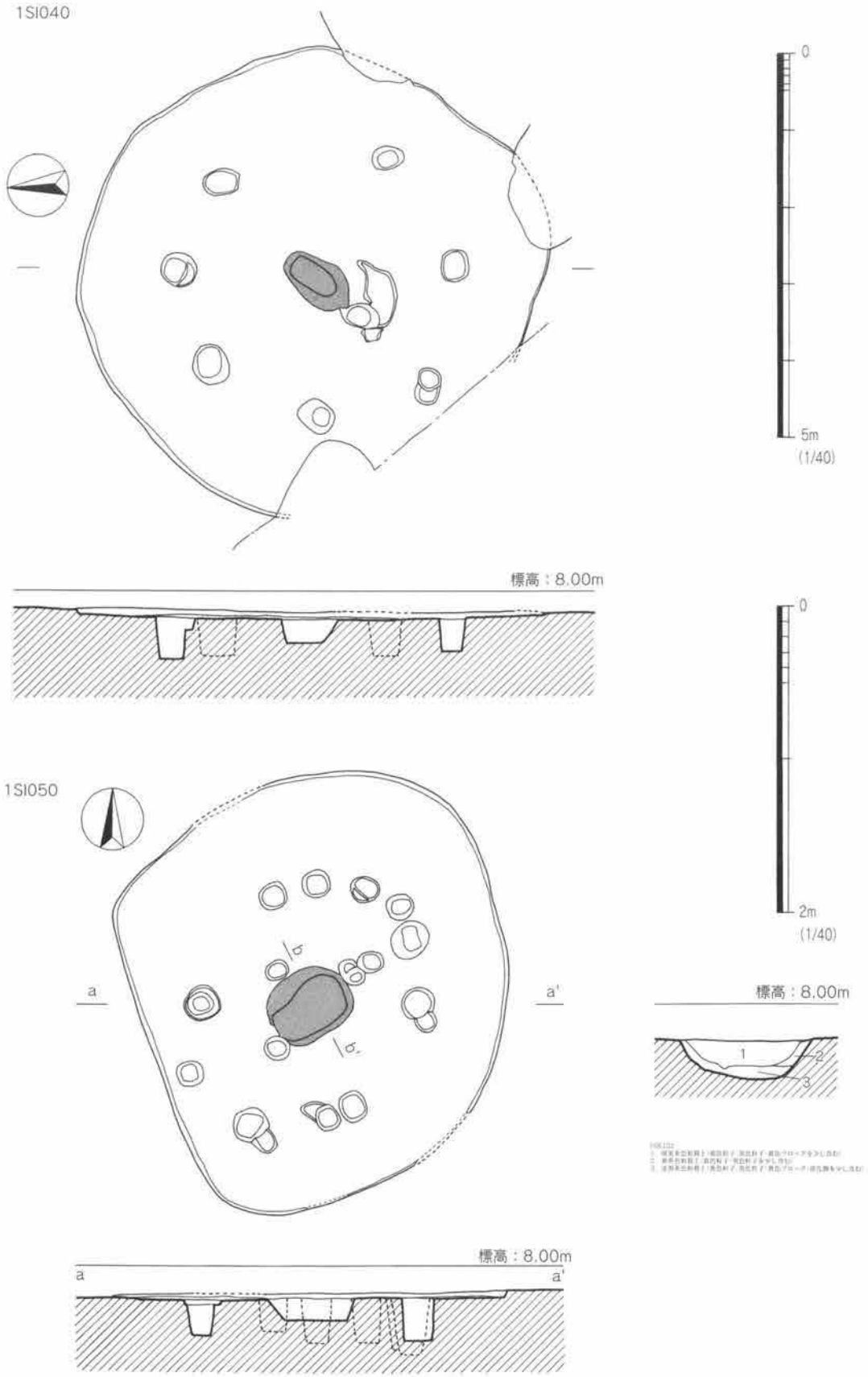


Fig.3　竪穴住居（1SI040・050）実測図（1/40・1/80）

1SI050（Fig.3、Pla.3）

北部調査区の中央部、T15地区に位置する。平面プランが楕円形状を呈する住居を検出したが、調査前は畑地であったため耕作時の撹乱を著しく受けていた。長軸は5.45m、短軸は4.85mを測ることから床面積は約20.8㎡が予測される。検出面から住居底面までの深さは約0.06m程度と残存状況は極めて悪く、床面の状況も不安定であった。住居底面の中央部からは楕円形状の炉が検出され、炉内の底部では炭化物を含む土層が確認されている。炉の規模は長軸1.15m、短軸0.90m、住居底面からの残高は0.25mを測る。主柱穴はP1～13の計13穴が炉を中心に周囲を巡るように検出されたが各々の柱穴における切り合いはない。柱穴の配置状況からは全てが同一時期に設置されたものとは考え難いので、幾度かの建て替えによる柱穴が含まれていると思われる。柱穴の規模は径0.25～0.50m、住居底面から柱穴底面までの残高は0.38～0.74mを測る。住居内からは主柱穴以外で浅いピットを確認したが、掘方による痕跡又は別の性格を有する遺構であるかは不明である。住居内及び炉からは弥生土器（片）、石器（石錐）等が出土した。

土壙墓

1ST112（Fig.4、Pla.4）

北部調査区の南端部、O2地区に位置する。規模は長軸1.28m、短軸0.87m、残高0.46mを測り、主軸はN—37°46′32″—Eを示す。墓壙の平面プランは隅丸長方形状で壁面は斜方へ緩やかに立ち上がり、死床面は中程が若干窪んだ状態で検出された。頭位は掘形幅のやや広い北側が想定される。埋土中からは副葬品と思われる白磁（皿）の完形品が出土したが出土状況については不明である。

溝

1SD010・100（Fig.5）

1SD010は北部調査区の西側、W10地区付近に位置する。南西—北東方向へほぼ直線的に延びる溝で、長さは約31.5m分を確認したが、溝の両端部は地形の影響（調査前は畑地であったため周囲よりも1段高かった）により分断された状態で検出された。溝幅は南西部に従って徐々に広がり最大で1.05mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とする埋土が確認された。遺構の先後関係（新→旧）は1SD010→1SD020、1SK003・120である。一方の1SD100はW26地区付近に位置する。当溝は1SD010から北東方向へ延長した位置にあたり、1SD010と同位を示していることから同一溝である可能性が考えられるのでここで報告することとした。長さ約14.5m分を検出したが、残存状況は極めて悪い状態であった。出土遺物は1SD010で弥生土器（片）、土師器（皿・坏）、石器（片）が認められたが1SD100は皆無であった。

1SD020（Fig.5）

北部調査区の西側、V19地区付近に位置する。北西—南東方向へ直線的に延びる溝であるが、前述の1SD010と同じく現況が畑地であったことから長さ約28m分しか確認できていない。当溝は1SD010に切られ、溝幅は0.40～0.75m、残高は約0.18mを測り、溝の断面形はU

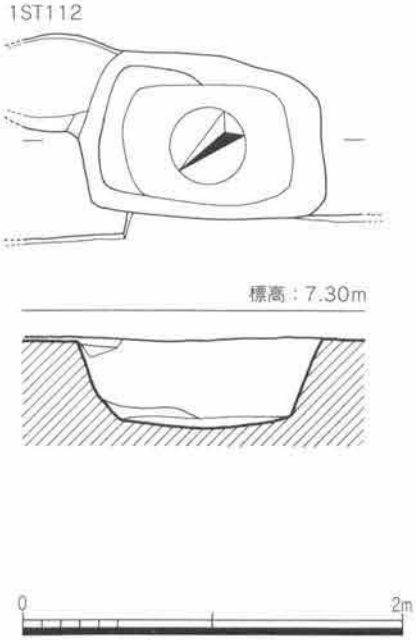


Fig.4　土壙墓（1ST112）実測図（1/40）

Fig.5　溝（1SD010・020）土層断面実測図（1/40）

字状を呈する。黒茶色粘質土を基調とする埋土で遺物は弥生土器（甕・片）、石器（砥石・片）が出土した。

1SD030

北部調査区の西側、Z14地区付近に位置する。東西方向の溝で長さ約16.5m分を確認し、埋土は淡黒茶色土の単一層であった。遺構の先後関係（新→旧）は1SP118→1SD030→1SK011・070・110となる。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（石斧）が出土した。

1SD119

南部調査区の北側、▲A2地区付近に位置する。南西―北東方向の溝で、溝の北東部はほぼ直線的に延びるが南西部は幅広く乱れた状態で検出された。長さは約18m分を検出し、残高は0.16～0.18mを測る。底部は凹凸が著しく断面形は緩やかなU字状を呈する。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（片）が出土した。

1SD121

南部調査区の北側、▲A1地区付近に位置する。南西―北東方向の溝でやや蛇行しながら延びている。長さ約18m分を検出し、幅0.45～0.70m、残高0.18～0.21mを測る。底部はほぼフラットで断面形は緩やかなU字状を呈する。遺物は弥生土器（片）、土師器（片）が認められている。

1SD123

南部調査区の北側▲A9H地区付近に位置する。南西―北東方向を示し、長さ約9.2m分を検出した。幅0.50～0.70m、残高0.05～0.12mを測り、残存状況は極めて悪い状態であった。遺物は弥生土器（片）、土師器（片）が出土した。

1SD174

南部調査区の南側▲H2地区付近に位置する。南西―北東方向の溝でほぼ直線的に延びる。長さは約19.4m分を検出したが、残存状況が悪く部分的に途切れた状態であった。出土遺物は皆無であった。

土坑

1SK001（Fig.6、Pla.4）

北部調査区の北西部、Z19地区に位置する。平面プランは楕円形状で底面はやや凹凸を認め、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸1.79m、短軸1.50m、残高0.75mを測り、主軸はN―69°37′25″―Wを示す。黒茶色土を基調とする埋土で、遺構の構造からは貯蔵穴或いは廃棄土坑として使用された可能性が考えられ、弥生土器（甕・壺・片）、石器（片）等の遺物が多数出土している。

1SK002（Pla.5）

北部調査区の北西部、Y17地区に位置する。平面プランは縦長の隅丸長方形状を呈する。主軸はN―38°05′20″―Eを示し、長軸3.82m、短軸0.95～1.42mを測る。土坑内の底部は南部方向に従って徐々に落ち込み、残高は0.40～0.90mを測る。埋土は黒茶色土を基調とし、南部方向へ流れ込むように堆積していた。遺構の構造からは貯蔵穴として使用された可能性が考えられ、弥生土器（蓋・甕・片）、石器（片）等の遺物が多く出土していることから廃絶後は廃棄土坑であった可能性も考えられる。

1SK003（Fig.6、Pla.5）

北部調査区の北西部、W15地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、遺構の先後関係（古→新）は1SK056→1SK003→1SD010となる。規模は長軸1.95m、短軸1.30m、残高1.05mを測り、主軸はN―44°25′58″―Wを示す。南東の底部にはテラスを有し、底面はほぼフラットな状態である。壁面は斜方へ緩やかに立ち上がる。埋土は黒茶色土を基調とし、遺構の構造からは貯蔵穴或いは廃棄土坑であった可能性も考えられ、弥生土器（蓋・甕・土錘・支脚・片）、石器（すり石・片）等の遺物が出土している。

1SK005（Fig.6）

北部調査区の中央部、P19地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。規模は長軸2.48m、短軸1.13mを測り、主軸はN―18°10′41″―Eを示す。南西の底部にはテラスを有し、残高は南部で0.31m、北部で0.60mを測る。底面はほぼフラットで、壁面は斜方へ立ち上がる。埋土は黒茶色土を基調とし、弥生土器（甕・壺・片）、石器（石鏃・片）等の遺物が出土した。

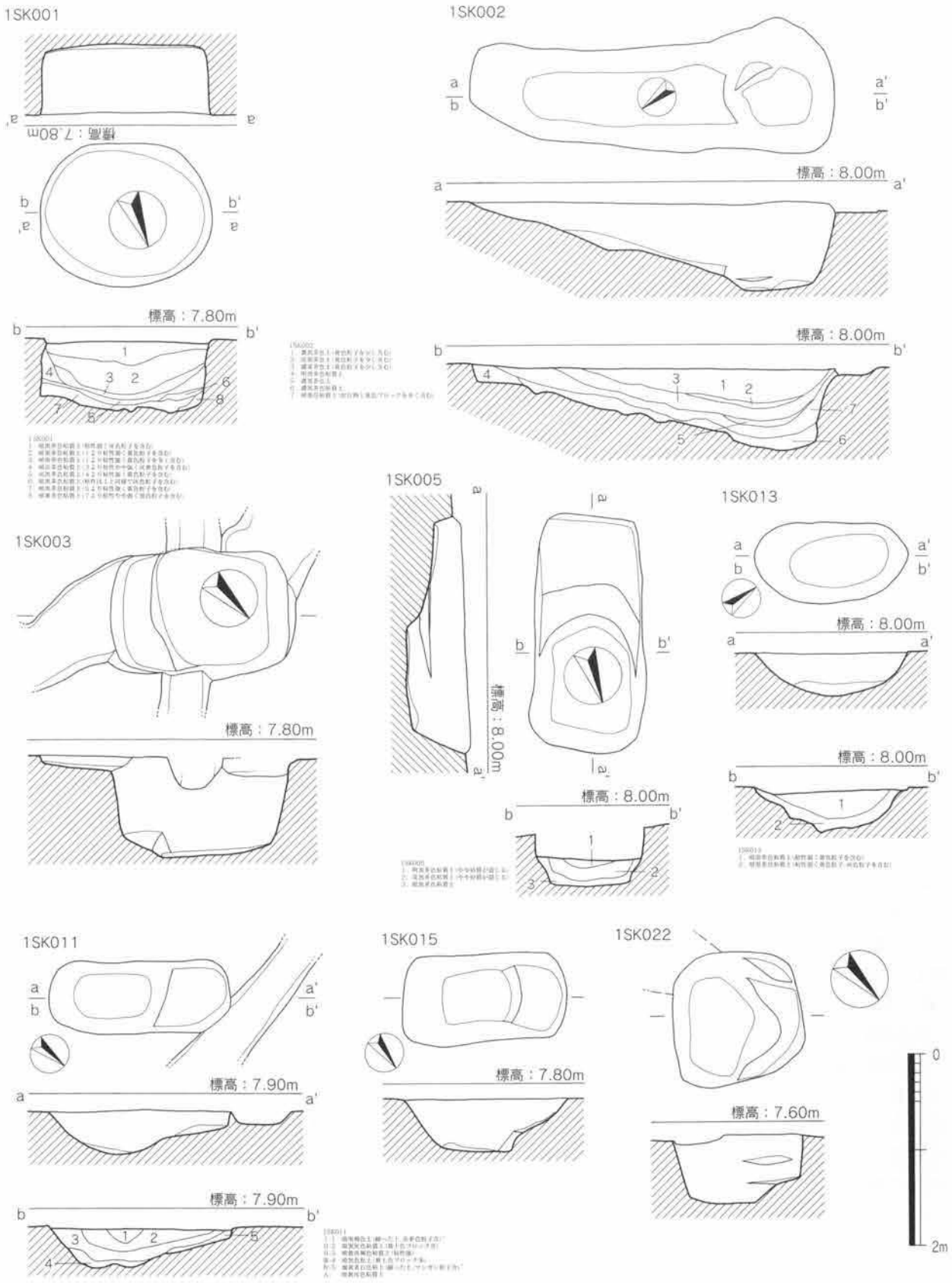


Fig.6　土坑（1SK001～003・005・011・013・015・022）実測図（1/60）

1SK011（Fig.6）

北部調査区の北西部、Y14地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。1SD030に切られ、北西の底部にはテラスを有する。更に深くなった南東部は若干擂鉢状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。規模は長軸1.90m、短軸0.76m、残高は北部で0.22m、南部で0.45mを測り、主軸はN—39°48′20″—Wを示す。黒茶色土を基調とする埋土で弥生土器（甕・片）、石器（石鏃・片）等の遺物が出土した。

1SK013（Fig.6）

北部調査区の北西部、Y14地区に位置する。平面プランは楕円形状、底部は擂鉢状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。規模は長軸1.61m、短軸0.82m、残高は最大で0.45mを測り、主軸はN—35°23′41″—Eを示す。黒茶色土を基調とし、レンズ状に堆積していた。弥生土器（甕棺・片）が出土した。

1SK015（Fig.6、Pla.6）

北部調査区の北西部、Y14地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。北西の底部はテラスを有し、南東部は更に深くなる。底面はフラットで壁面は斜方へ緩やかに立ち上がる。規模は長軸1.71m、短軸0.92m、残高は0.54mを測り、主軸はN—54°14′46″—Wを示す。遺物は弥生土器（蓋・甕・支脚・片）、石器（石鏃・紡錘車・片）が多数出土した。

1SK022（Fig.6）

北部調査区の中央部、M17地区に位置する。平面プランは隅丸方形状を呈し、底部の西はテラスを有する。南東部は更に深くなり壁面は斜方へ立ち上がる。規模は幅1.36m、残高はテラスで0.50m、中程で0.71mを測り、主軸はN—46°41′05″—Wを示す。遺物は僅かに石器（片）が認められた。

1SK023（Fig.7、Pla.6）

北部調査区の中央部、J16地区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、底部中央はその周囲よりも一段深くなっている。底面はほぼフラットで壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸2.10m、短軸1.72m、残高は0.99mを測り、主軸はN—22°45′04″—Eを示す。遺構の構造から貯蔵穴或いは廃棄土坑として使用された可能性が考えられ、遺物は弥生土器（甕・壺・土錘・支脚・片）、石器（石包丁・片）が多数出土している。

1SK025（Fig.7、Pla.7）

北部調査区の北西部、W19地区に位置する。平面プランは隅丸方形状を呈し、底面はフラット、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸1.48m、短軸1.23m、残高は1.00mを測り、主軸はN—35°05′45″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、最下層からは炭化物が少量認められている。貯蔵穴として使用された可能性が考えられ、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（片）が僅かに出土している。

1SK027（Fig.7、Pla.7）

北部調査区の中央部、N13地区に位置する。平面プランは縦長の楕円形状を呈し、底面はほぼフラットな状態である。壁面は袋状を呈することから貯蔵穴として使用された可能性が考えられる。規模は長軸1.96m、短軸1.10m、残高は1.35mを測り、主軸はN—26°01′47″—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、石器（片）が出土した。

1SK028（Fig.7、Pla.8）

北部調査区の中央部、M11地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、南西の底部にはテラスを有する。北部は更に一段深くなり、底面はほぼフラットな状態である。テラス部側の壁面はほぼ垂直に立ち上がるのに対し、一段深いエリアの壁面は袋状に抉れていることから隣接する1SK027と同様に貯蔵穴である可能性が考えられ、テラスは貯蔵する際のステップとして造られていた事が窺える。規模は長軸2.01m、短軸1.37m、残高はテラスで0.50m、中程で0.70mを測り、主軸はN—34°09′35″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、第10層にあたる暗黒茶色粘土からは炭化物及び多くの土器片が出土している。遺物は弥生土器（甕・土錘・片）、石器（石鏃・石包丁・紡錘車・石斧・片）が多数認められた。

1SK029（Fig.7、Pla.8）

北部調査区の南部、M8地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面は中央がやや窪んで

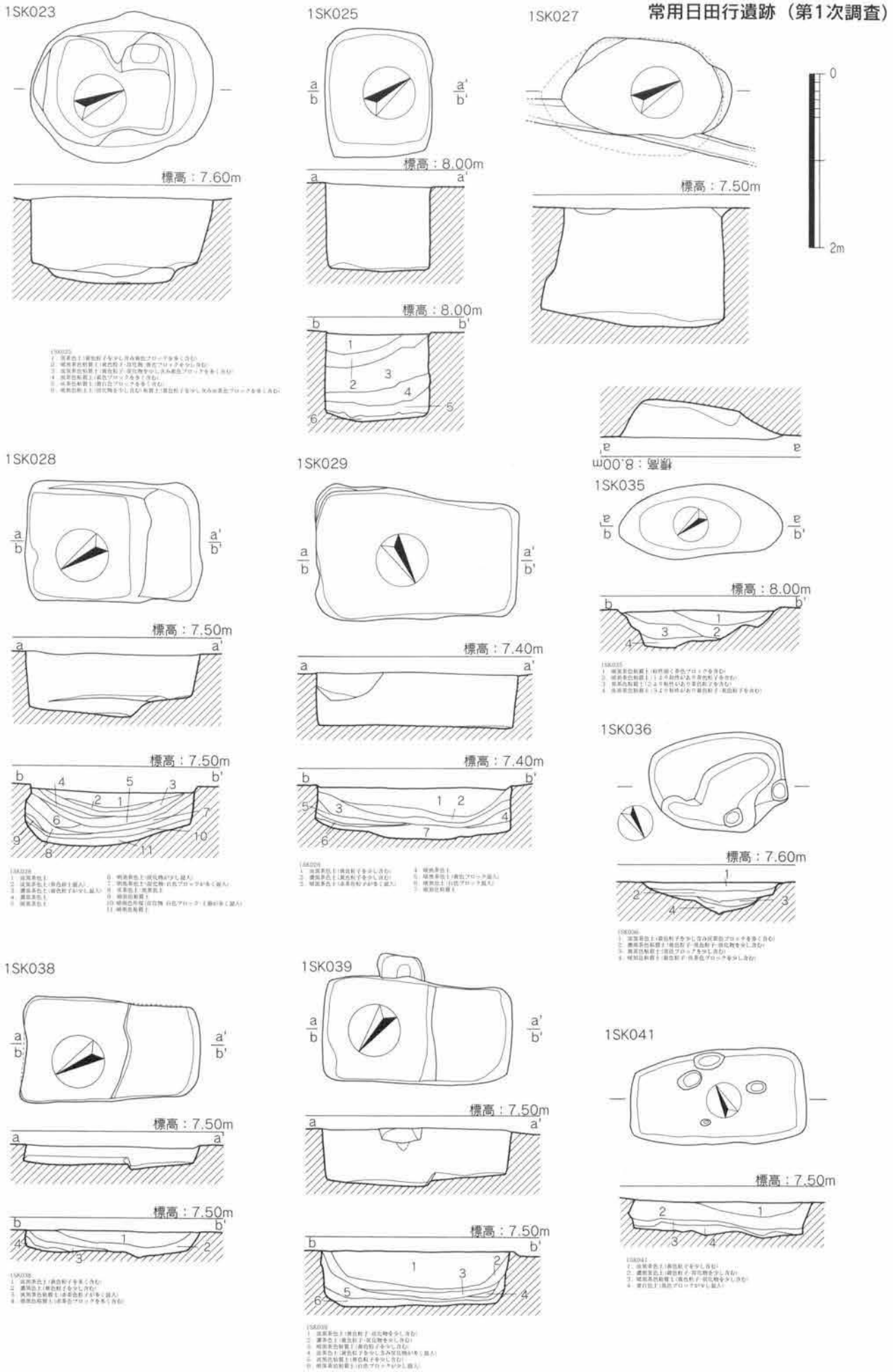


Fig.7　土坑（1SK023・025・027～029・035・036・038・039・041）実測図（1/60）

いるがほぼフラットな状態である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸2.32m、短軸1.41m、残高は0.62mを測り、主軸はN—59°49′35″—Wを示す。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・壺・高坏・支脚・片）、石器（石包丁）が出土した。

1SK035（Fig.7）

北部調査区の北部、T19地区に位置する。平面プランは縦長の楕円形状を呈し、底部は南西から北東方向にかけて徐々に深くなっている。規模は長軸1.89m、短軸0.83m、残高は最大で0.40mを測り、主軸はN—36°52′12″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（片）が僅かに認められた。

1SK036（Fig.7）

北部調査区の南部、L4地区に位置する。平面プランは不整楕円形状を呈し、底部中程は窪んでいる。規模は長軸2.60m、短軸1.15m、残高は最大で0.39mを測り、主軸はN—59°37′15″—Wを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は僅かに弥生土器（甕）が認められた。

1SK038（Fig.7、Pla.9）

北部調査区の南部、L6地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、北東部にはテラスを有する。南西部は更に一段下がるが底面はほぼフラットな状態であった。規模は長軸2.00m、短軸1.17m、残高は0.21～0.26mを測り、主軸はN—31°22′29″—Eを示す。黒茶色土を基調とする埋土が流れ込むように堆積しており、弥生土器（甕・壺・甕棺・片）の遺物が多く認められた。

1SK039（Fig.7）

北部調査区の南部、L5地区に位置し、1SP049を切るように検出した。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面の西部にはテラス状の段差を認めるが底面はほぼフラットな状態を呈する。規模は長軸2.18m、短軸1.21m、残高は0.63mを測り、主軸はN—53°23′35″—Eを示す。埋土は茶色土及び黒茶色土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（紡錘車・石棒）が出土した。

1SK041（Fig.7）

北部調査区の南部、O3地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面はやや凹凸が認められる。規模は長軸2.02m、短軸1.10m、残高は0.41mを測り、主軸はN—62°39′—Wを示す。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・壺）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

1SK042（Fig.8）

北部調査区の南部、O15地区に位置し、平面プランは縦長の楕円形状を呈する。底面の南西部ではテラスを認め、北東方向に向かって落ち込んでいる。規模は長軸2.13m、短軸0.92m、残高は南西部で0.48m、北東部で0.72mを測り、主軸はN—26°01′47″—Eを示す。主に黒茶色土を基調とする埋土は北東部の深い方向に向かって流れ込んでおり、遺物は弥生土器（甕・支脚・片）、石器（砥石・サヌカイト片・黒曜石片）が認められた。

1SK045（Fig.8）

北部調査区の中央部、R19地区に位置し、平面プランは縦長の楕円形状を呈する。底面の北東部及び中央部からは別遺構と思われるピットが認められたが、遺構掘下げ時では判別できておらず、また大別できるような埋土ではなかったので同遺構として掲載した。規模は長軸2.31m、短軸0.98m、残高は浅い部分で0.36m、深い部分で0.60mを測り、主軸はN—33°41′24″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

1SK046（Fig.8）

北部調査区の南部、N5地区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、底面はフラットな状態である。規模は幅1.16～1.26m、残高は0.85mを測る。第8層から上位では黒茶色粘質土を基調とする埋土がレンズ状に堆積し、これより下位では黄白色土の埋土が折り重なるように堆積していた。遺物は弥生土器（壺）、石器（石包丁・凹石・サヌカイト片）が出土した。

1SK048（Fig.8、Pla.9）

北部調査区の北西部、AA12地区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、底面はほぼフラットな

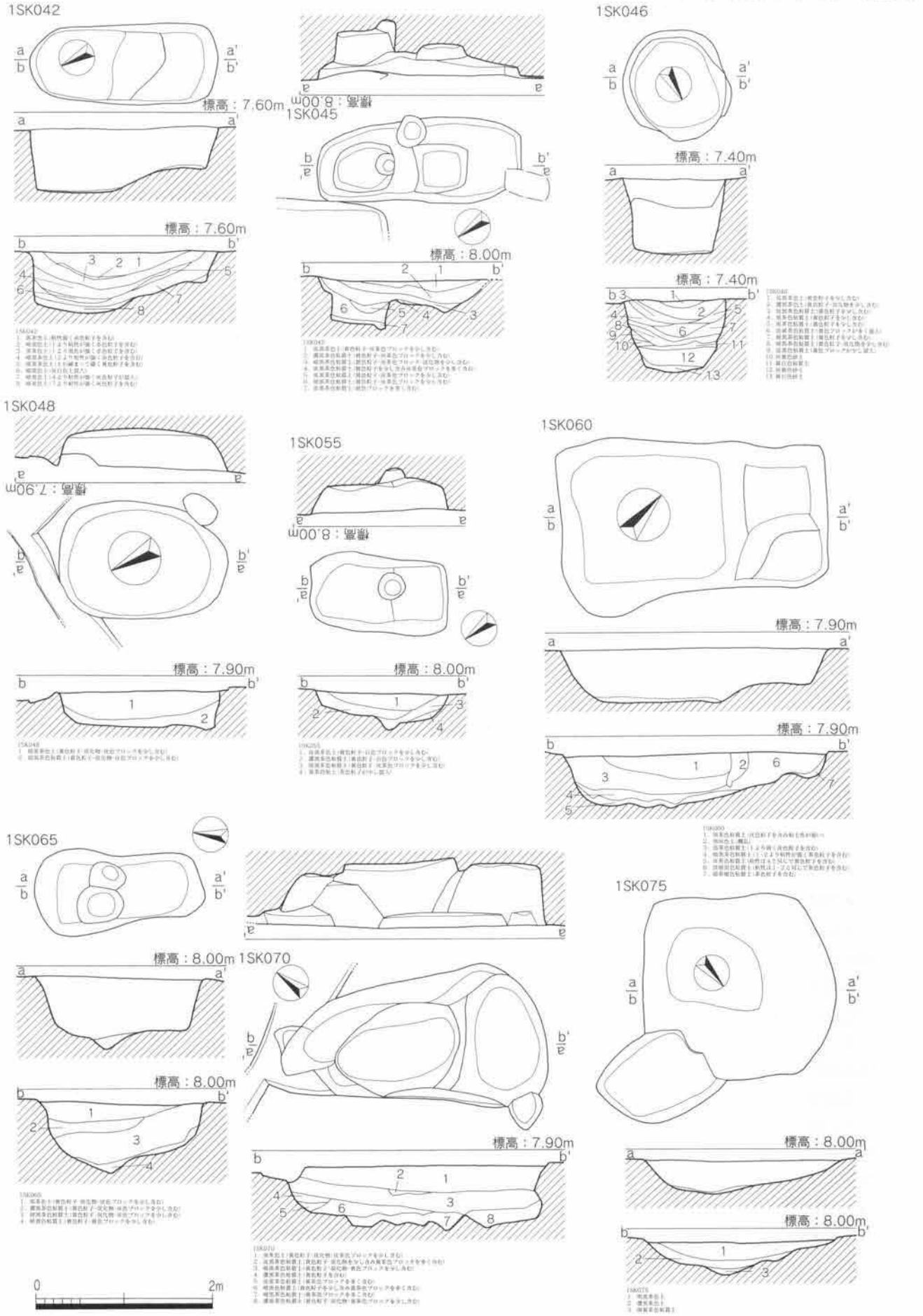


Fig.8　土坑（1SK042・045・046・048・055・060・065・070・075）実測図（1/60）

状態であった。壁面は斜位方向に立ち上がる。規模は長軸1.93m、短軸1.33m、残高は0.43mを測り、主軸はN—27°15′19″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とする2層が認められ、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（石鏃・サヌカイト片）が出土した。

1SK055（Fig.8）

北部調査区の中央部、Q19地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面はほぼフラットな状態であるが、中央部では0.32m幅の小ピットが認められた。規模は長軸1.55m、短軸0.83m、残高は0.31mを測る。小ピットの残高は0.48mを測り、主軸はN—34°01′10″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（片）が多く出土した。

1SK060（Fig.8、Pla.10）

北部調査区の北西部、Y13地区に位置し、平面プランは長方形状を呈する。遺構内の北東部及び北西部には階段状のテラスを認め、南西部は更に深くなっている。テラス・底面はほぼフラットな状態を示している。規模は長軸3.02m、短軸1.66m、底面の残高は0.62mを測り、第1テラスの残高は0.11m、第2テラスの残高は0.44mを測る。主軸はN—48°28′05″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・壺・片）、石器（石包丁・石鏃・サヌカイト片・黒曜石片）が多く出土した。

1SK065（Fig.8）

北部調査区の中央部、Q17地区に位置し、平面プランは縦長の楕円形状を呈する。底面の中央部には東西2穴の小ピットが並列して検出され、幅は0.37～0.54mを測る。規模は長軸1.90m、短軸0.91m、底面の残高は0.58mを測り、ピットの残高は0.82m程度を測る。主軸はN—5°24′34″—Wを示す。埋土は黒色土及び黒茶色粘質土を基調とし、第1～3層では炭化物が含まれていた。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

1SK070（Fig.8、Pla.10）

北部調査区の北西部、Z12地区に位置し、遺構の北部は1SD030に切られる。平面プランは不整楕円形状を呈し、底面は凹凸が著しい。規模は長軸3.04m、短軸1.40m、残高は0.75m前後を測り、主軸はN—37°52′30″—Wを示す。黒茶色粘質土を基調とする埋土で、第1～3・8層では炭化物が含まれていたこと、また南東部の壁面が袋状に抉れていることなどから貯蔵用施設として使用された可能性が考えられる。遺物は弥生土器（甕・甕棺片）、石器（窪み石）が出土した。

1SK075（Fig.8）

北部調査区の中央部、R17地区に位置し、1SK019を切るように検出した。平面プランは隅丸方形状を呈し、規模は幅1.03～1.10m、残高は0.31mを測る。黒茶色粘質土を基調とする埋土で、遺物は弥生土器（甕・壺・土錘・片）が出土した。

1SK080（Fig.9、Pla.11）

北部調査区の北西部、X11地区に位置し、遺構の西部は1SI040を切るように検出した。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面の中央部に向かって落ち込む。規模は長軸2.45m、短軸1.58m、残高0.98mを測り、主軸はN—48°48′51″—Wを示す。黒茶色粘質土を基調とする埋土で、第1・3・6層では炭化物が含まれていた。遺物は弥生土器（甕・壺・投弾・土錘・片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

1SK085（Fig.9）

北部調査区の北西部、R17地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面の南西部ではテラスが認められた。規模は長軸1.77m、短軸0.80m、残高0.40mを測り、主軸はN—45°—Eを示す。壁面は斜方向へ緩やかに立ち上がる。黒茶色粘質土を基調とする埋土で、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

1SK090（Fig.9、Pla.11）

北部調査区の北西部、X10地区に位置し、遺構の西部は1SI040を切るように検出した。平面プランは縦長の楕円形状を呈し、底面はほぼフラットな状態であった。規模は長軸2.00m、短軸1.50m、残高1.23mを測り、主軸はN—23°51′37″—Wを示す。壁面は垂直に立ち上がり、埋土は黒茶色粘質土

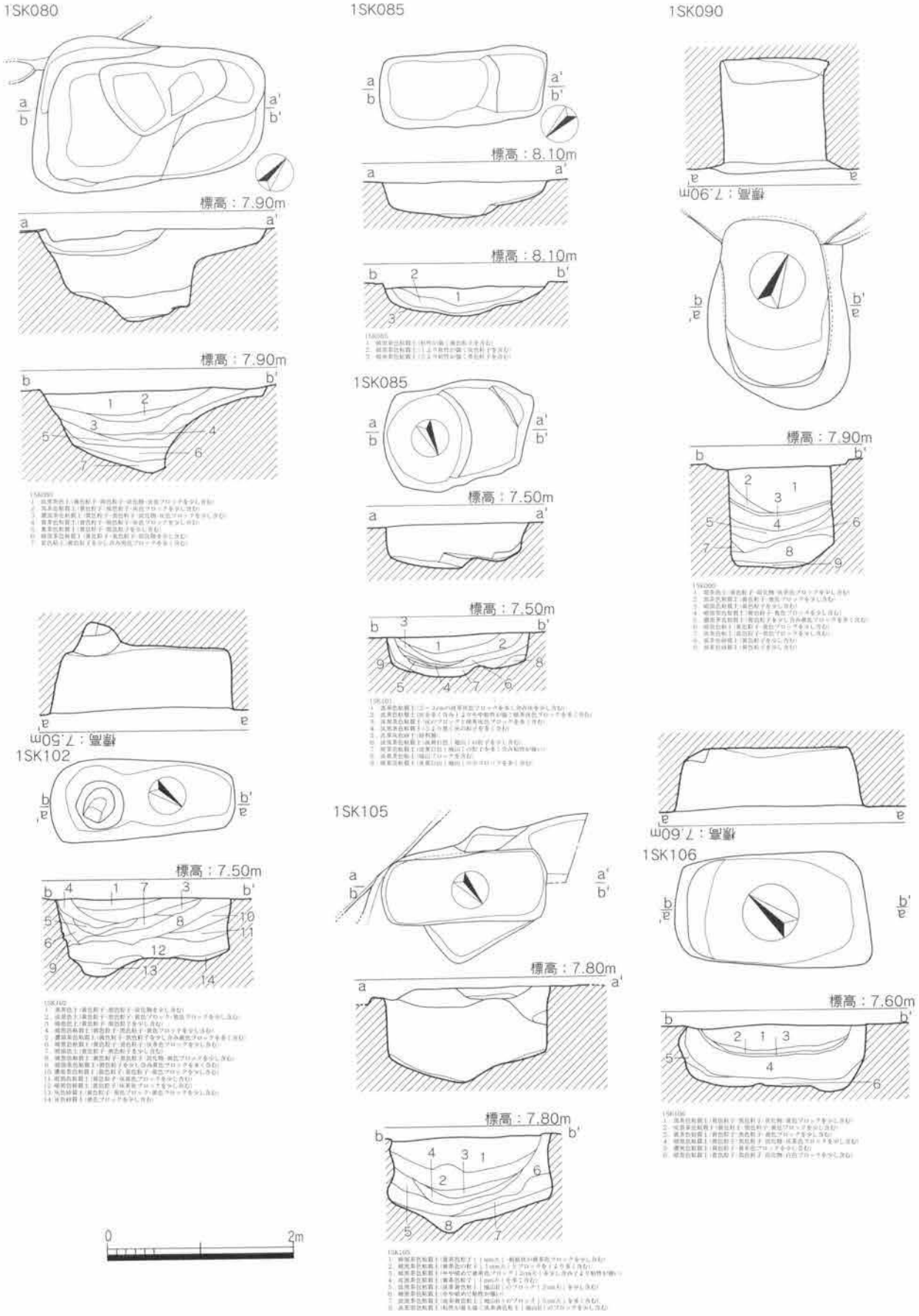


Fig.9　土坑（1SK080・085・090・101・102・105・106）実測図（1/60）

を基調とする。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（石鏃・サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

1SK101 (Fig.9)

北部調査区の北部、X12地区に位置する。平面プランは不整楕円形状を呈し、底面の西部にはテラスを認め、東部は更に落ち込む。規模は長軸1.55m、短軸1.10m、残高0.41～0.45mを測り、主軸はN—66° 15′ 18″ —Wを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・投弾・片）、石器（石剣・石斧・黒曜石片）が出土した。

1SK102 (Fig.9)

北部調査区の北部、U22地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面はほぼフラットであるが南東部には径0.53m、深さ0.20m程度の小ピットが検出された。規模は長軸2.39m、短軸0.85m、残高0.66mを測り、主軸はN—36° 09′ 29″ —Wを示す。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（紡錘車・サヌカイト片）が出土した。

1SK105 (Fig.9、Pla.12)

北部調査区の北西部、Z14地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。壁面は袋状を呈し、底面は中央部に向かって徐々に深くなっている。規模は長軸1.77m、短軸1.21m、残高1.00mを測り、主軸はN—51° 20′ 25″ —Wを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とする。遺物は弥生土器（蓋・甕・片）、石器（石鏃・砥石）が出土した。

1SK106 (Fig.9)

北部調査区の北部、V17地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面はほぼフラットな状態を示しており、壁面は緩やかに立ち上がる。規模は長軸2.07m、短軸1.21m、残高0.65mを測り、主軸はN—41° 11′ 09″ —Wを示す。埋土はほぼ黒茶色粘質土を基調とし、第3層上位堆積層と第4層下位堆積層では大分される。第1・4・6層では炭化物が含まれていた。遺物は弥生土器（蓋・甕・高坏・片）、石器（サヌカイト片）が多く出土した。

1SK107 (Fig.10)

北部調査区の北部、V27地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。壁面は斜方向へ立ち上がり、底面はほぼフラットな状態を示す。規模は長軸1.50m、短軸0.62m、残高0.35mを測り、主軸はN—19° 26′ 24″ —Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、第2層では炭化物が含まれていた。遺物は弥生土器（片）が僅かに認められた。

1SK108 (Fig.10)

北部調査区の北部、V28地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はフラットな状態を示す。規模は長軸1.33m、短軸0.71m、残高0.32mを測り、主軸はN—78° 41′ 24″ —Wを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・土錘・片）が認められた。

1SK109 (Fig.10、Pla.12)

北部調査区の北部、V28地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。底面はほぼフラットな状態を示す。規模は長軸1.64m、短軸1.12m、残高1.42mを測り、主軸はN—62° 42′ 02″ —Wを示す。東側底面に近いレベルでは木片が出土し、第1～3層では少量の炭化物が含まれていた。更に第4層では樹皮と枝を重ね合わせた炭化物層が確認されている。遺物は弥生土器（甕・土錘・片）、石器（石鏃）が各層から散在的に認められた。

1SK110 (Fig.10、Pla.13)

北部調査区の北部、Y15地区に位置し、1SD030に切られる。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面の中央部に小ピットを検出した。底面はピットに向かって徐々に深くなっており、規模は長軸1.16m、短軸1.22m以上、残高0.67mを測り、N—56° 55′ 46″ —Wを示す。遺物は弥生土器（甕・片）が多く出土した。

1SK115 (Fig.10、Pla.13)

北部調査区の北部、X14地区に位置し、平面プランは不整楕円形状を呈する。壁面は緩やかに立ち上

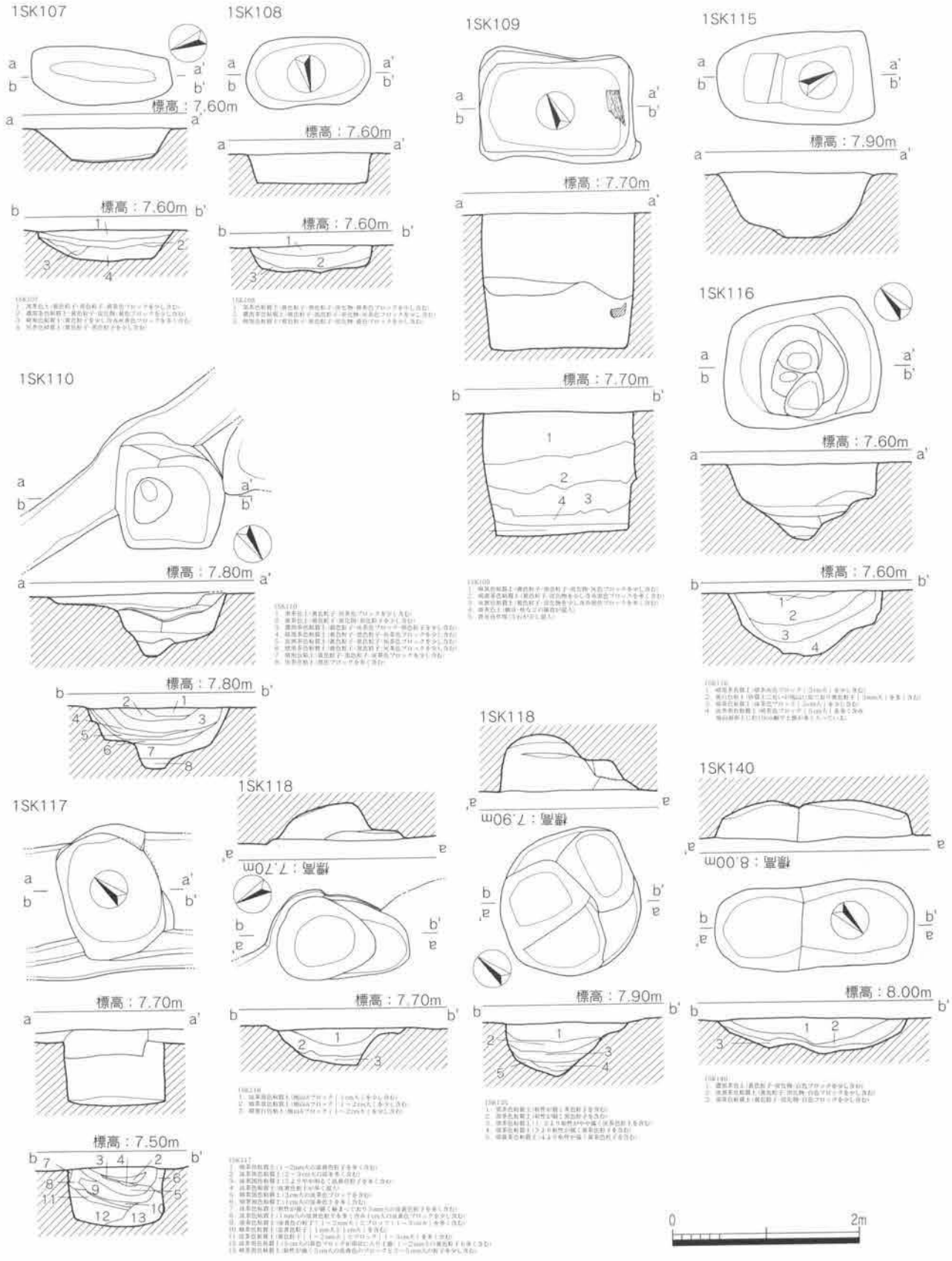


Fig.10　土坑（1SK107～110・115～118・135・140）実測図（1/60）

がり、底面の南西部にはテラスを認めた。規模は長軸1.66m、短軸1.00m、残高0.69mを測り、主軸はN—27° 04′ 19″ —Eを示す。遺物は弥生土器（甕・片）が僅かに認められた。

1SK116 (Fig.10)

北部調査区の中央部、V28地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面の東部にはテラスを認め、中央部には3穴の小ピットが確認された。規模は長軸1.67m、短軸1.35m、残高0.39～0.81mを測り、主軸はN—46° 35′ 28″ —Wを示す。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は弥生土器（蓋・甕・土錘・片）が出土した。

1SK117 (Fig.10)

北部調査区の中央部、M20地区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。底面はほぼフラットな状態を示し、規模は長軸1.45m、短軸1.06m、残高0.80mを測り、主軸はN—39° 48′ 20″ —Wを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、青磁（片）が出土した。

1SK118 (Fig.10)

北部調査区の中央部、L21地区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、南西部にはテラスを認める。底面はほぼフラットな状態を示し、規模は長軸1.38m、短軸0.87m、残高0.10～0.40mを測り、主軸はN—28° 29′ 44″ —Eを示す。遺物は弥生土器（甕・片）が僅かに認められた。

1SK135 (Fig.10、Pla.14)

北部調査区の中央部、V13地区に位置し、平面プランは不整円形状を呈する。遺構内は左回転で段差を生じ、最深の底面は緩やかに窪む。規模は径1.50～1.56m、残高0.62mを測り、埋土は黒茶色土を基調とする。遺物は弥生土器（片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が認められた。

1SK140 (Fig.10、Pla.14)

北部調査区の中央部、V14地区に位置し、平面プランは不整楕円形状を呈する。底面は北西部と南東部に区分されるように緩やかに窪んでおり、規模は長軸2.13m、短軸0.92m、残高0.39mを測る。主軸はN—46° 07′ 24″ —Wを示し、埋土は黒茶色粘質土を基調とする。遺物は弥生土器（甕・片）が僅かに出土した。

1SK145 (Fig.11、Pla.15)

北部調査区の中央部、V15地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面では径0.40～0.53mの窪み状のピットを検出した。規模は長軸1.37m、短軸1.00m、残高0.52mを測り、主軸はN—59° 02′ 10″ —Wを示す。埋土は黒茶色土を基調とし、第1・2層では炭化物が認められた。遺物は弥生土器（甕・片）が僅かに出土した。

1SK150 (Fig.11)

北部調査区の中央部、V15地区に位置し、遺構上部は撹乱を受けている。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面はほぼフラットな状態である。規模は長軸1.36m、短軸0.75m、残高0.74mを測り、主軸はN—22° 02′ 10″ —Eを示す。遺物は弥生土器（片）が僅かに出土した。

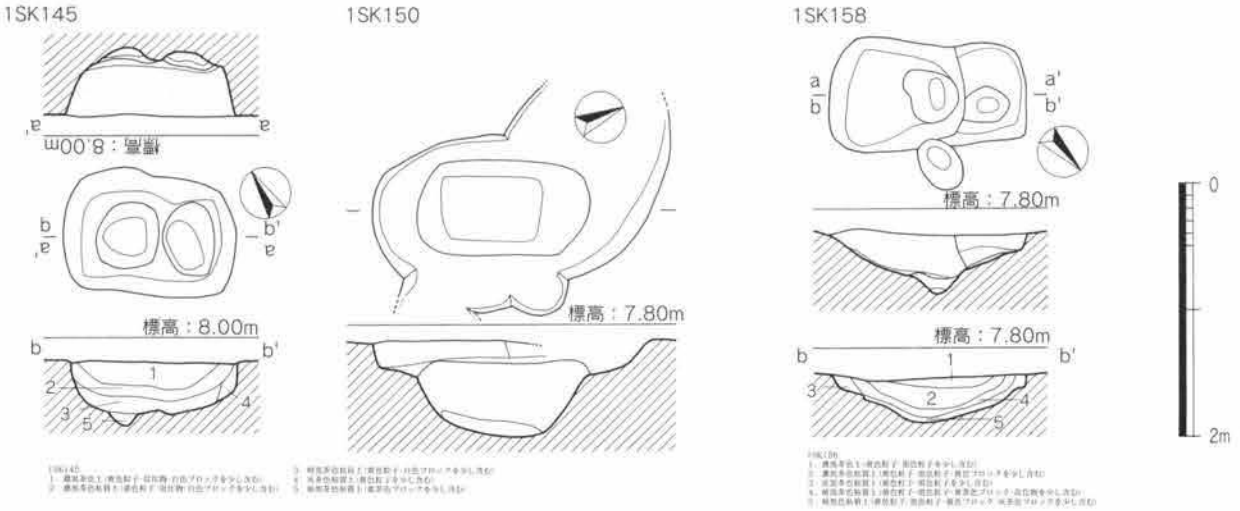


Fig.11　土坑（1SK145・150・158）実測図（1/60）

1SK158 (Fig.11)

北部調査区の中央部、Y11地区に位置し、1SI040を切るように検出した。平面プランは不整楕円形状を呈し、遺構内にはテラスや小ピット状の痕跡を認める。規模は長軸1.56m、短軸0.87m、残高0.46mを測り、主軸はN—47°57′03″—Wを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・投弾・片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が僅かに出土した。

(3) 出土遺物

竪穴住居

1SI040 (Fig.12、Pla.16)

石器

敲石（1）　安山岩製の円礫を利用したもので表裏面の中央部及び周縁の一部に敲打痕が認められる。重さは840.0gを量る。

石鏃（2）　石材はサヌカイト製で片脚端部を欠損しているもののほぼ完形品である。凹基式の抉りのある石鏃であるが両脚部は大きく開き長さも異なっている。重さは0.9gを量る。

柱穴

1SP161 (Fig.12、Pla.16)

石器

石鏃（3）　石材は黒曜石製で重さは0.5gを量る。完形品の凹基式で正三角形状を呈する。

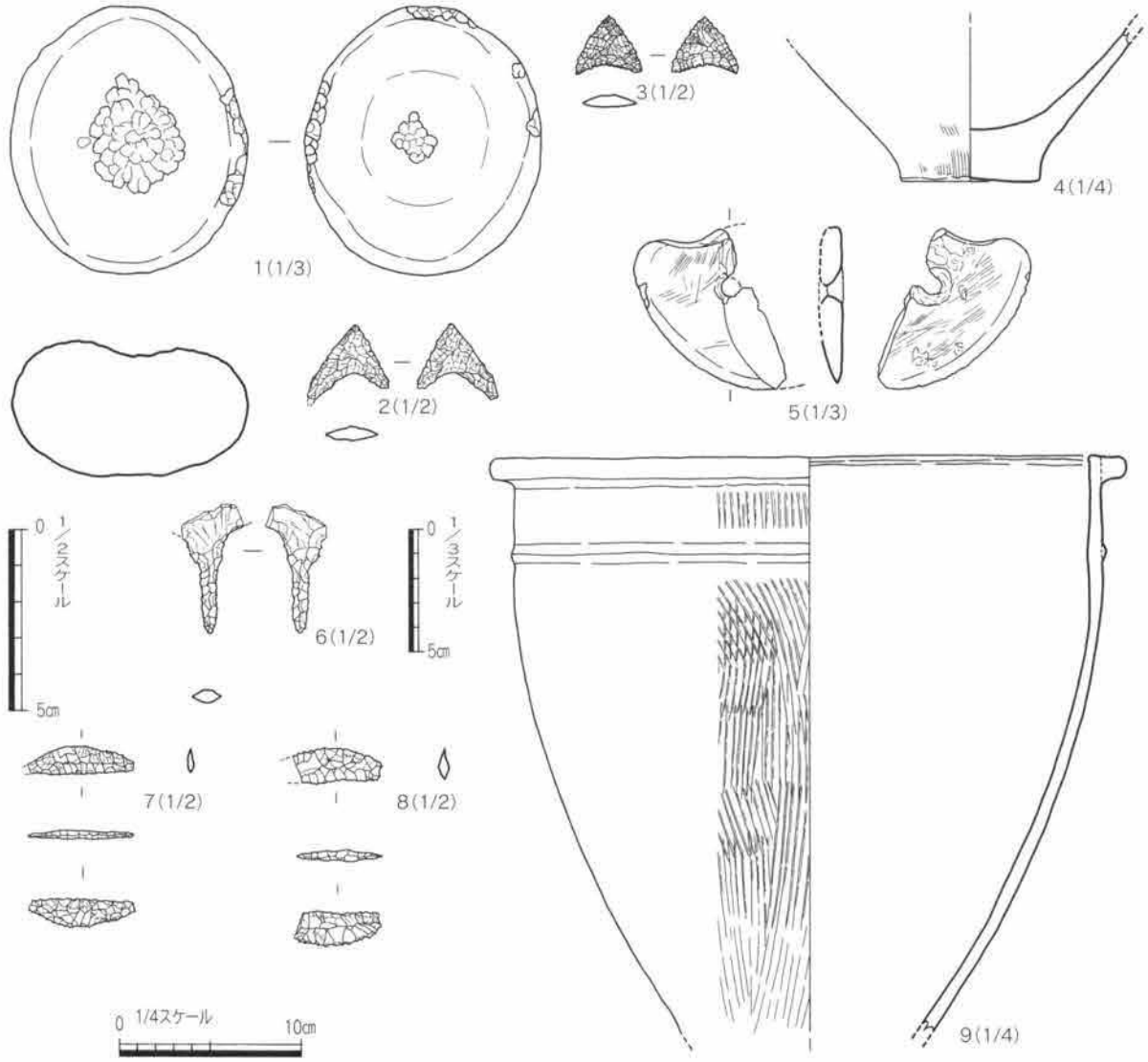


Fig.12　竪穴住居（1SI040、1SP161・162・167、1SI050、1SP151）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

1SP162（Fig.12、Pla.16）

弥生土器

壺（4）　底部の細片で底径は7.6cmを測る。内面及び底部はナデ、外面は刷毛目後ナデの調整を施す。

1SP167（Fig.12、Pla.16）

石器

石庖丁（5）　磨製で石材は頁岩製かと思われる。大部分が欠損した細片で背部側に両面から穿孔された紐部から割れている。刃部は両面から研磨された両刃タイプで、紐部の内孔径は0.7cmを復原し、重さは24.1ｇを量る。

1SI050（Fig.12、Pla.16）

石器

石錐（6）　打製の完形品で石材はサヌカイト製である。頭部の表面には剥片素材時のネガティヴ面、裏面にはポジティヴ面を大きく残し、長めの錐部を呈する。重さは1.7ｇを量る。

石鏃（7・8）　7・8は横長の二等辺三角形状を呈した柳葉系石鏃である。ともに石材はサヌカイト製で片脚部は欠損し、周縁には細かい二次加工を施して刃部を作り出している。重さは7が0.6ｇ、8が0.7ｇを量る。

柱穴

1SP151（Fig.12、Pla.16）

弥生土器

甕（9）　口縁部から体部にかけての破片で口径は35.0cmを復原する。口縁端部及びその下位には貼付突帯を施し、調整は外面が粗い刷毛目、口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデである。

土壙墓

1ST112（Fig.13、Pla.17）

白磁

皿（10）　完形の輪花白磁皿で、口径12.0cm、高台径4.7cm、器高3.4cmを測る。素地はやや粗い乳白色で、釉調は不透明な乳緑色釉を内面及び外面の体部まで施釉する。底部は露胎で回転ヘラケズリを施し、一部では高台付近まで釉ダレを認める。輪花の尖り部分は釉が磨耗しており、見込みには3ヶ所の目跡を認める。李朝産か。

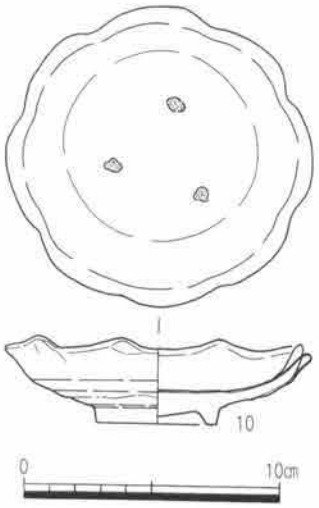


Fig.13　土壙墓（1ST112）出土遺物実測図（1/3）

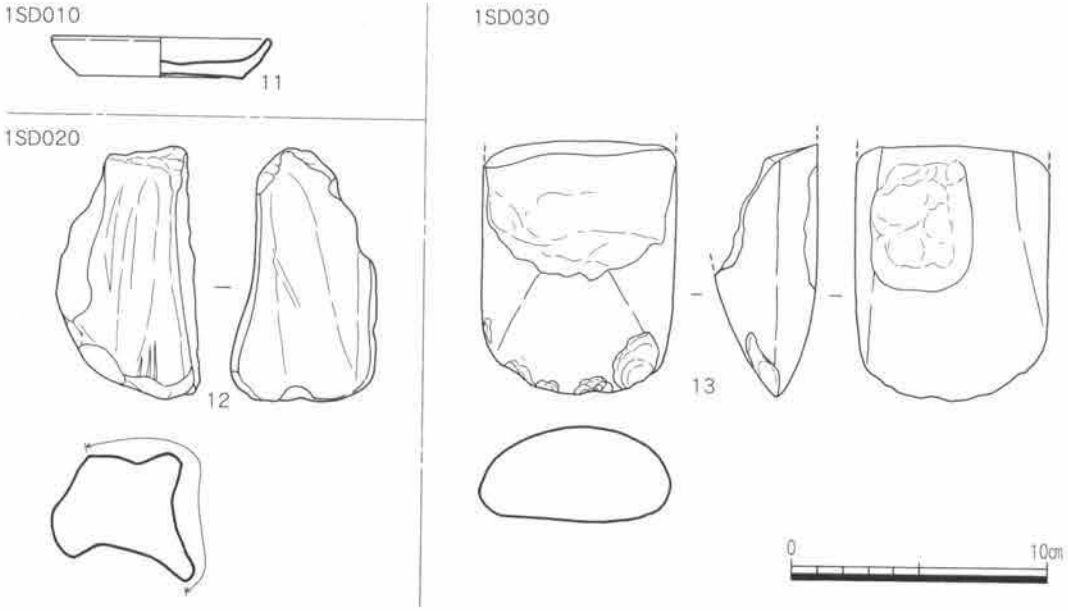


Fig.14　溝（1SD010・020・030）出土遺物実測図（1/3）

溝

1SD010（Fig.14、Pla.17）

土師器

小皿（11）　口径8.6cm、底径6.4cm、器高1.6cmを復原する。底部外面は糸切りで底部内面から体部外面にかけてはヨコナデ、底部内面中央はナデの調整を施す。胎土、焼成は良好である。

1SD020（Fig.14、Pla.17）

石器

砥石（12）　石材は砂岩製で表面及び右側面を砥面として使用している。棒状に研磨された痕跡からは金属器が使用された可能性も考えられる。

1SD030（Fig.14、Pla.17）

石器

石斧（13）　太型蛤刃石斧で基部は欠損している。石材は砂岩製で刃縁幅は7.3cm、厚さは4cm前後になるものと思われる。重さは445ｇを量る。

土坑

1SK001（Fig.15、Pla.17・18）

弥生土器

甕（14～20）　14～18は何れも口縁端部に断面三角形状の貼付突帯を施し、15・17では口縁部下位に一条の貼付突帯を巡らせている。14は口径25.7cm、底径6.0cm、器高26.3cmを復原する。体部と底部の境には内孔径1.3cmを測る穿孔を一ヶ所で認め、穿孔は内外面から焼成後に穿たれていた。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデで、体部外面には煤が付着していた。15は口径35.6cmを復原し、口縁部内外面はヨコナデ、体部はナデの調整である。16は口径30.0cmを復原し、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデの調整である。17は口径26.0cmを復原し、口縁部内外面及び貼付突帯部はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面はナデの調整である。外面には僅かに煤が付着していた。18は口径25.0cmを復原し、口縁部下位には一条の沈線を施している。調整は口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデである。19・20は底部の細片で底部外面の中央部は僅かに上げ底状を呈する。19は底径7.4cm、20は底径8.0cmを測る。

壺（21～23）　21・22は口縁部の細片で口縁部は大きく外反する。21は口径23.0cmを復原し、口縁部内外面はヨコナデで指頭圧痕を認める。22は口径18.0cmを復原し、肩部には二条の沈線が施される。器表は風化が著しいが口縁端部内外面はヨコナデ、口縁部下位の内外面はミガキの調整が施されているようである。23は底部の破片で底径9.0cmを測る。体部は底部から緩やかに立ち上がり、体部内面はナデ、体部外面は縦方向に粗いミガキ、底部外面はナデの調整を施す。

石器

敲石（24）　安山岩製の円礫を利用したもので重さは715.0ｇを量る。表面の中央部及び周縁に敲打痕が認められ、裏面中央部のやや上位部においては磨痕が認められる。

1SK002（Fig.16、Pla.18）

弥生土器

蓋（25）　口径27.4cm、つまみ部径6.5cm、器高13.2cmを測る。つまみ部上端面はやや窪み、天井部から口縁部にかけては「ハ」字状に開く。調整はつまみ部上端面はナデ、つまみ部外面及び天井部内外面は工具ナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

甕（26～28）　26は口縁部の細片で口径26.2cmを復原し、口縁部端部には断面三角形状の貼付突帯を施す。27は口縁部の細片で口径23.6cmを復原する。口縁部端部には断面逆台形状、口縁部下位には断面三角形状のの貼付突帯を施す。外面は刷毛目、内面は工具ナデの調整である。28は口径23.8cm、底径7.4cm、器高27.1cmを測る。口縁端部及びその下位には断面三角形状の貼付突帯を施し、底部は上げ底状を呈する。口縁部外面はヨコナデ、内面は指押さえ後ナデ、体部内面及び底部外面はナデ、体部外面は工具ナデの調整である。

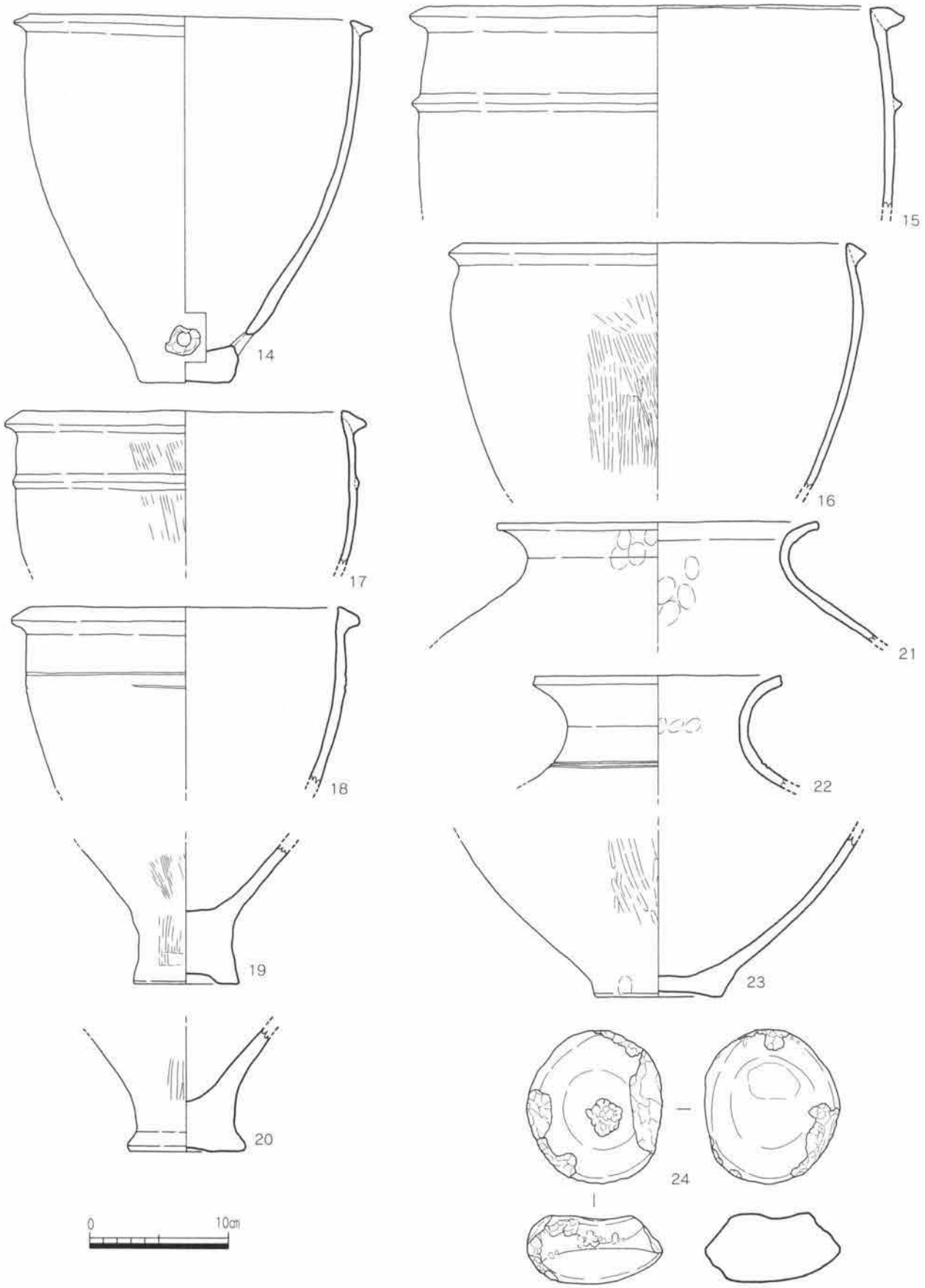


Fig.15　土坑（1SK001）出土遺物実測図（1/4）

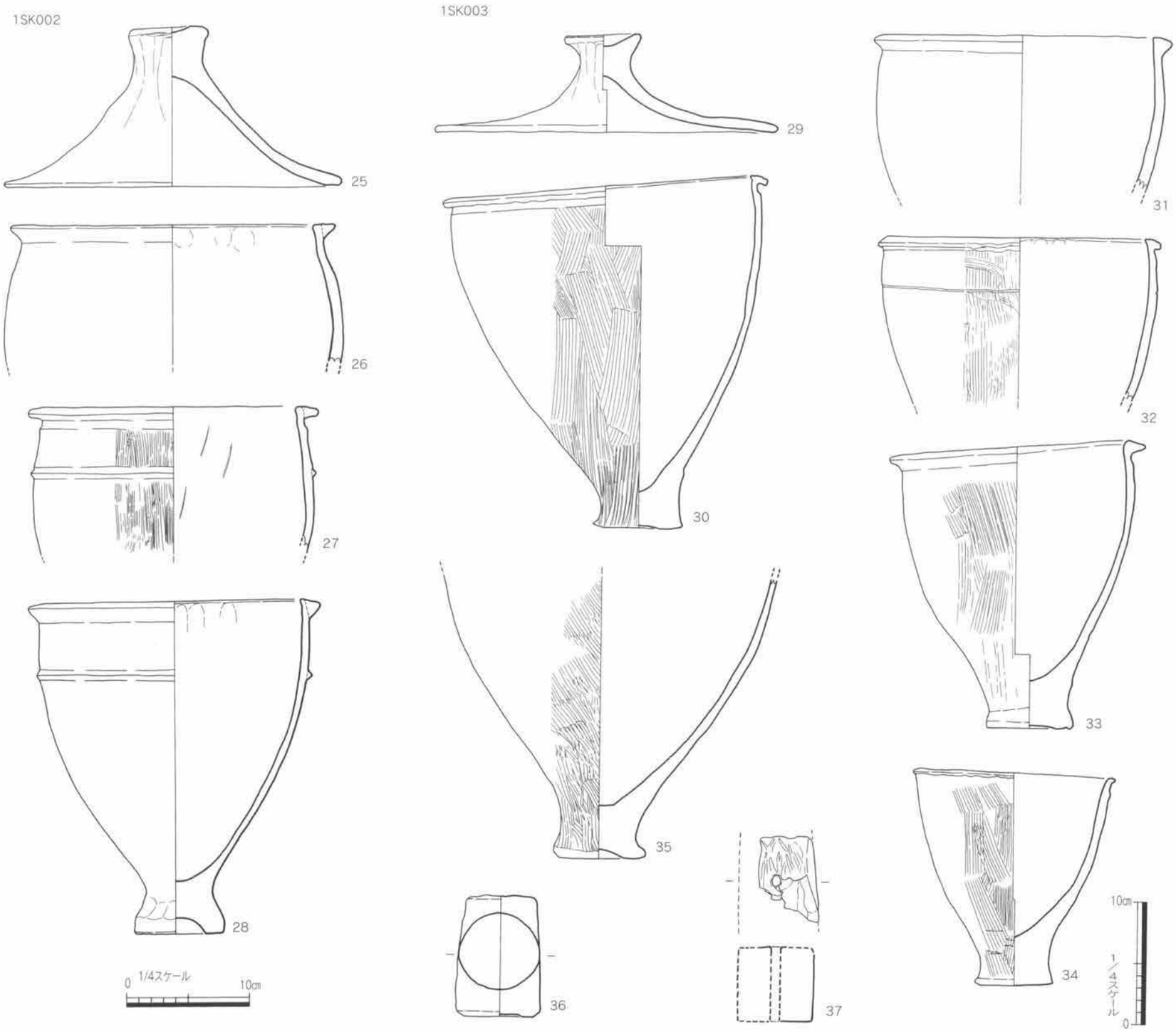


Fig.16　土坑（1SK002・003）出土遺物実測図（1/4）

1SK003（Fig.16、Pla.18・19）

弥生土器

蓋（29）　口径28.0cm、つまみ部径6.25cm、器高7.95cmを測る。つまみ部上端面はやや窪み、天井部から口縁部にかけては「ハ」字状に大きく開く。調整はつまみ部上端面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ、その他は工具ナデである。

甕（30～35）　30は口径26.6cm、底径7.2cm、器高28.0cmを測る。口縁部の断面形はやや垂れ下がった鋤先状を呈し、底部外面はやや窪んでいる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面はナデで、口縁部外面には煤が付着している。31は口径24.4cmを測る。口縁端部は断面三角形状を呈し、器厚は口縁部から体部にかけて肥厚している。32は口径30.15cmを測り、口縁端部は断面三角形状を呈する。口縁部下位には一条の沈線を施し、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデの調整を施す。外面には煤が付着している。33は口径21.1cm、底径7.1cm、器高22.9cmを測る。口縁端部は断面三角形状を呈し、底部外面はやや窪んでいる。内面の一部には煤が付着している。34はやや小型の甕で口径16.6cm、底径6.5cm、器高17.3cmを測る。口縁端部は外方へややつまみ出したような如意口縁を呈し、底部は平底である。胴部が張らないタイプであり、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、外面は刷毛目を施す。35は底部の破片で底径7.5cmを測る。体部外面には刷毛目が施され、薄く煤が付着している。

土製品

器台（36）　上端部径5.1cm、下端部径6.7cm、高さ9.8cmを測る円柱状の器台である。器表は著しく風化しているため調整は不明瞭であるが、僅かにナデが看取される。

土錘（37）　下部及び側部を欠損した破片で、原形は方柱状を呈していたものと思われる。中央部には焼成前に穿たれた穿孔を認め、内孔径は7～9 を測る。表面の調整はナデ後ミガキを施し、一部で指頭圧痕を認める。

1SK005（Fig.17、Pla.19）

弥生土器

壺（38）　口径13.9cm、体部最大径22.4cmを測る。口縁部は肩部からほぼ垂直に立ち上がって外反し、肩部には二条の沈線が施されている。風化が著しく調整は不明瞭であるが体部外面には細かなミガキ、内面には粗いミガキを僅かに認める。また口縁部外面の一部に丹塗りの痕跡を認める。

石器

石鏃（39）　石材は砂岩製の磨製石鏃である。先端及び側縁を僅かに欠損した二等辺三角形状を呈した凹基式で、現存長は4.5cmを復原し、重さは2.4ｇを量る。著しく風化している。

1SK011（Fig.17、Pla.19）

石器

石鏃（40・41）　40はサヌカイト製で表面左側の片脚を欠損する。正三角形状を呈し、抉りは比較的浅い。重さは1.1ｇを量る。41は黒曜石製で先端及び表面右側の片脚を欠損する。正三角形状を呈し、両面には細かな二次整形加工を施している。重さは1.1ｇを量る。

1SK015（Fig.17、Pla.19・20）

弥生土器

蓋（42）　口径27.0cm、つまみ部径6.6cm、器高9.3cmを測り、口縁部内側には煤が付着している。調整はつまみ部から天井部はナデ、口縁部はヨコナデである。

壺（43・44）　43はほぼ完形品で口径11.4cm、底径6.2cm、器高16.2cmを測る。口縁部は如意状に大きく外反し、底部は平底を呈し、やや肥厚する。調整について口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は指頭圧痕が僅かに残るナデ、体部外面は横方向の丁寧なミガキ、底部内外面はナデである。44は肩部の細片で、外面には一条の沈線と重弧文が描かれている。

土製品

土錘（45）　上下部が欠損した細片で、円柱状を呈するものと思われる。穿孔の内孔径は1.0cmを測り、

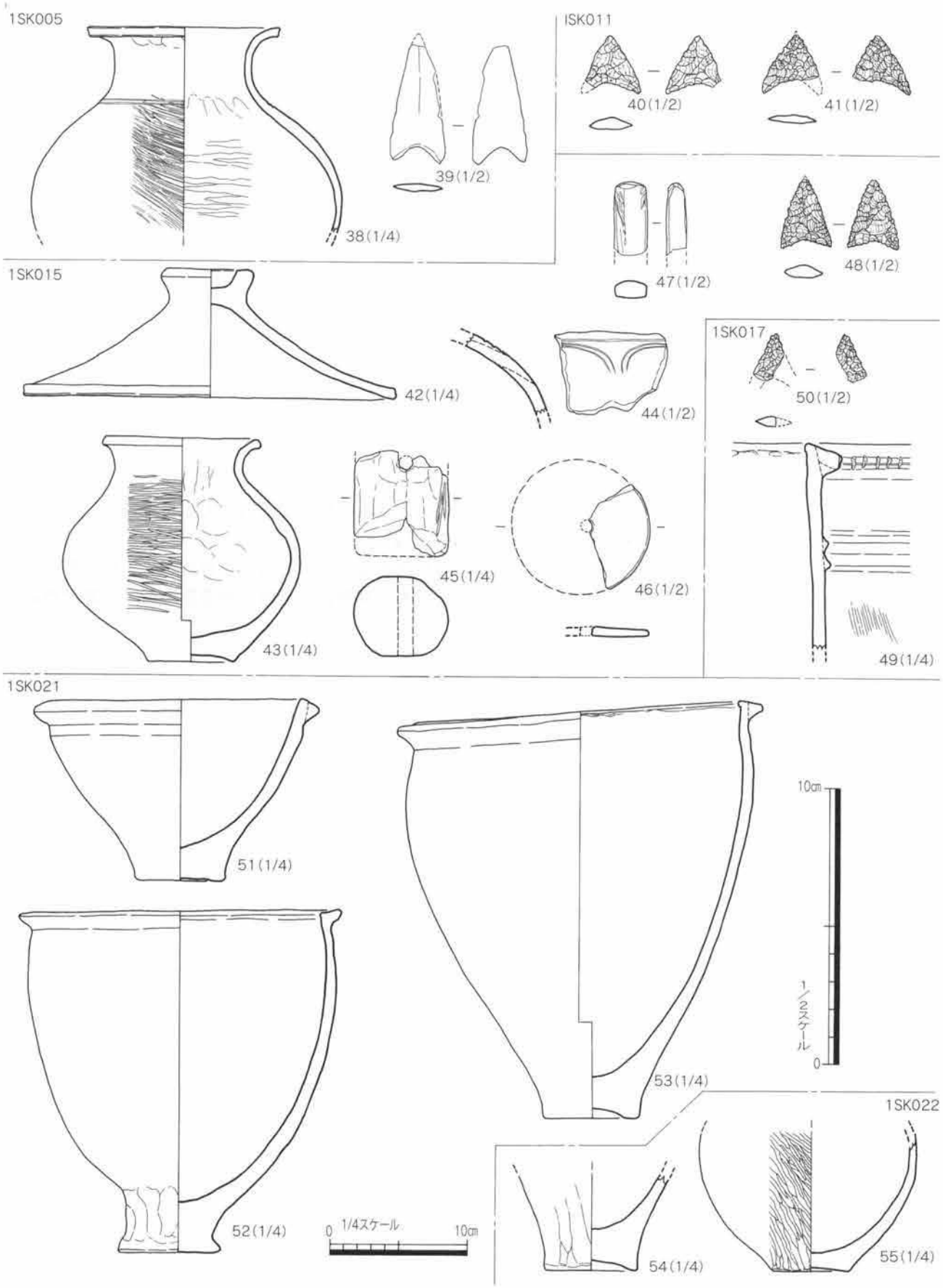


Fig.17　土坑（1SK005・011・015・017・021・022）出土遺物実測図（1/2・1/4）

焼成前に穿たれたものである。器表面は工具ナデによって丁寧に仕上げられている。

石器

紡錘車（46）　石材は片岩製で外径5.0cm、器厚0.3cmを復原し、重さ3.6ｇを量る。表面は研磨されていると思われるが痕跡は確認できない。

小型方柱状片刃石斧（47）　石材は泥岩製と思われ、現存長は2.7cm、幅は1.2cm、厚さは0.65cm、重さは3.7ｇである。下部は欠損し、研磨による整形加工が施されている。

石鏃（48）　石材は黒曜石製で先端部は僅かに欠損する。二等辺三角形状を呈した石鏃で、抉りは比較的浅い。表裏面には二次加工整形を細かく施しているが、裏面にはポジティヴ面を残す。

1SK017（Fig.17、Pla.20）

弥生土器

甕（49）　口縁部の細片で、口縁端部及びその下位には断面三角形状の貼付突帯を施す。先端部の貼付突帯にはヨコナデ後にやや深目の刻み目を施し、二条の貼付突帯部はヨコナデ、体部外面は縦方向の刷毛目、内面はナデの調整である。

石器

石鏃（50）　石材はサヌカイト製で両脚部が欠損する。表裏面は二次加工が施され重さは0.5ｇを量る。

1SK021（Fig.17、Pla.20）

弥生土器

鉢（51）　口径20.7cm、底径6.5cm、器高13.2cmを復原する。口縁端部には断面三角形状の貼付突帯を施し、底部はやや窪んでいるがほぼ平底を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、その他はナデである。

甕（52・53）　52は口径23.4cm、底径7.4cm、器高24.8cmを測る。口縁端部は断面三角形状、体部はラクビーボール状、底部外面は平底を呈し、底部は強いナデにて絞り込んでいる。53は口径26.6cm、底径7.0cm、器高29.5cmを測る。口縁端部は断面三角形状の貼付突帯を施され、内側に若干突出する。内外面はナデの調整で外面下部には薄く煤が付着する。

1SK022（Fig.17、Pla.20）

弥生土器

甕（54）　底部の細片で底径6.8cmを測る。外面は縦方向の強い工具ナデでその他はナデの調整である。

壺（55）　底部の破片で底径5.6cm、最大体部径15.8cmを復原する。体部外面は斜め方向のミガキ、体部内面は工具ナデ、底部内外面はナデである。

1SK023（Fig.18・19、Pla.20～23）

弥生土器

甕（56～76）　56は大甕で口縁端部は緩やかに外反する。口径54.0cmを復原し、風化が著しく調整は不明である。57は口径28.0cmを復原し、口縁端部は如意状に外反する。口縁部下位には断面三角形状の貼付突帯が施され、口縁部内面から体部外面にかけて薄く煤が付着している。口縁部内面は横方向の刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は縦方向の刷毛目、体部内面はナデである。58～65は口縁部の破片で口縁端部には断面三角形状の貼付突帯を施す。更に59～61・63では口縁部下位に断面三角形状の貼付突帯を、62・64は沈線を一条ずつ巡らせており、64の口縁部内外面には煤が付着する。58・59は口径31.0cm、60は口径28.0cm、61は口径27.4cm、62は口径27.0cm、63は口径26.8cm、64は口径24.0cm、65は24.8cmを復原する。66・67は破片であるが、ほぼ全体を復原・図示することができた。口縁端部及びその下位には断面三角形状の貼付突帯を一条施し、底部は平底を呈する。66は口径27.0cm、底径7.0cm、器高32.0cmを復原し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ若しくは工具ナデである。口縁部及び底部には煤が付着し、底部内面では炭化物が厚く付着している。67は口径23.4cm、底径6.8cm、器高26.8cmを測り、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ若しくは工具ナデである。68～75は底部の細片で、上底を呈するものは69・70・74である。68・69は底径7.8cm、70は底径7.5cm、71は底径7.6cm、72は底径6.7cm、73は底径7.2cm、74は底径6.6cm、75は底径7.2cmを測る。76は小型甕で口径18.3cm、底径4.0cm、器高8.6cmを測り、口縁部下位には細い沈線が施されている。口縁部は

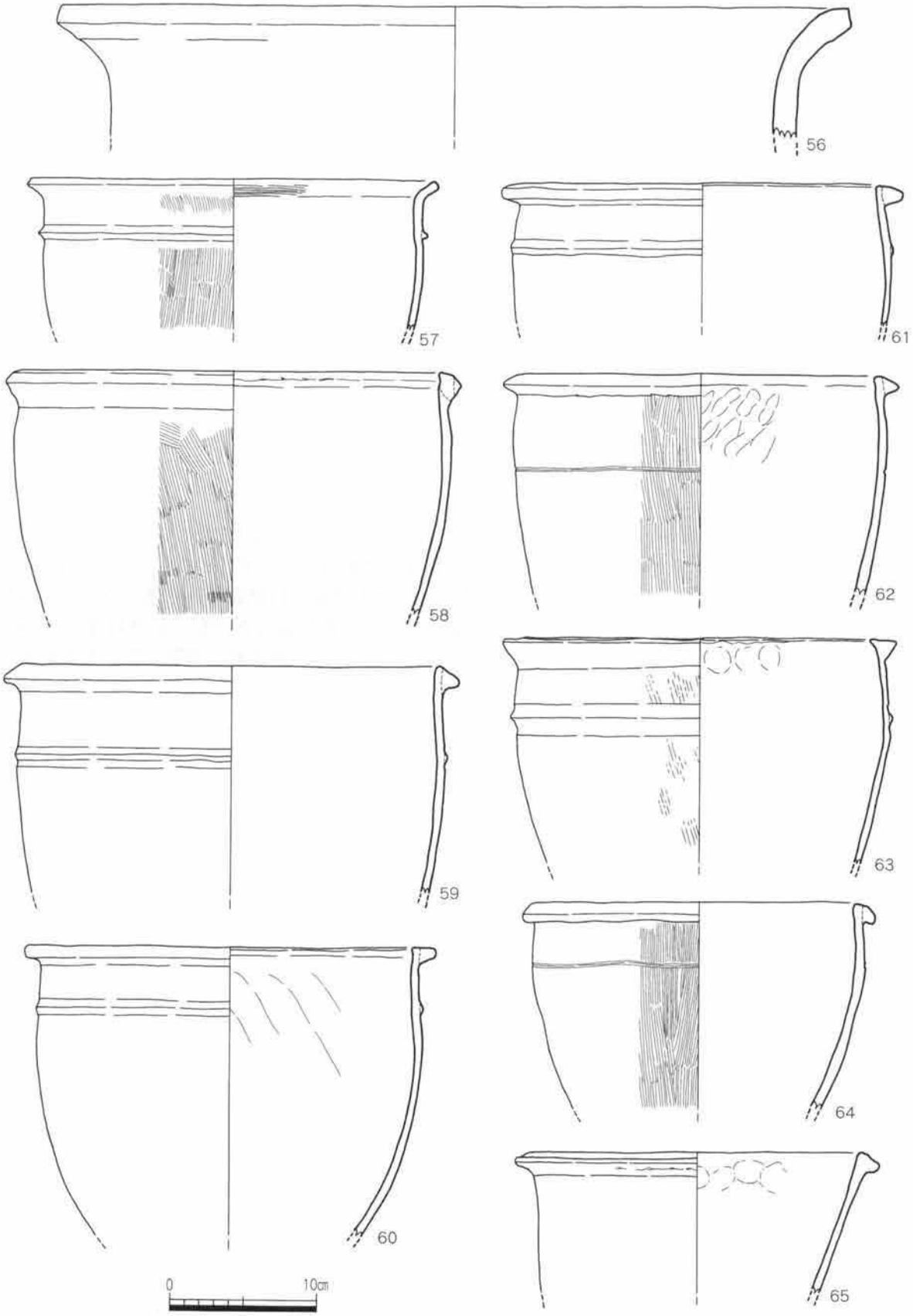


Fig.18　土坑（1SK023）出土遺物実測図①（1/4）

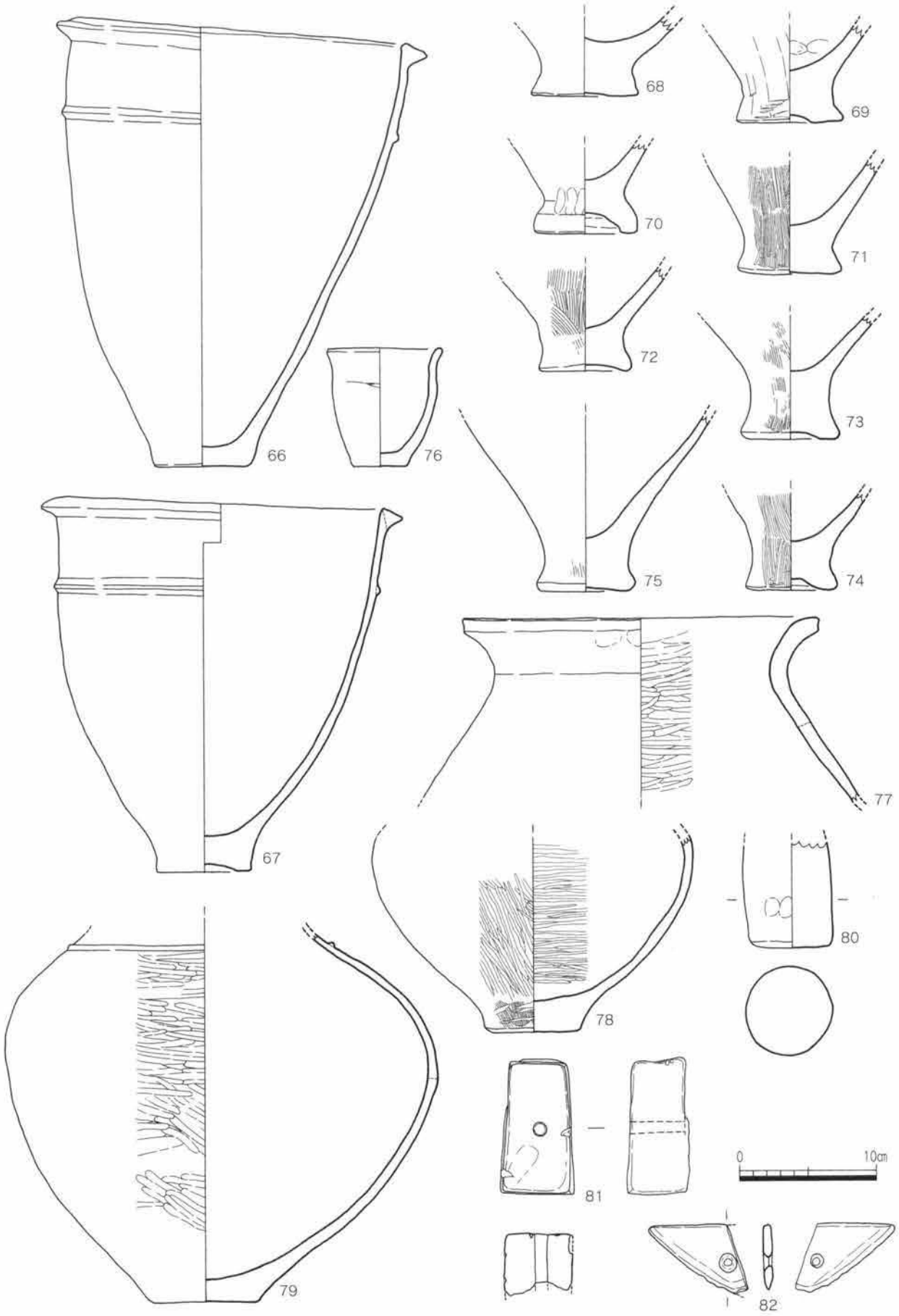


Fig.19　土坑（1SK023）出土遺物実測図②（1/4）

緩やかに外反し、底部は平底を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ、底部内外面は工具ナデの調整である。

壺（77～79）　77は口縁部の破片で口径26.0cmを復原する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面は横方向のミガキである。78・79は底部の細片である。78は底径7.2cmを測り、底部の器厚は比較的厚い。調整は体部外面は縦方向、体部内面は横方向のミガキで、底部内面はナデ、外面は粗いナデである。79は底径7.4cm、最大体部径31.3cmを復原し、体部内面及び底部外面はナデ、体部外面はミガキの調整である。

土製品

器台（80）　上部が欠損した破片で円柱状を呈するものと思われる。下端部径は6.0cmを測り、調整はナデで、一部に指頭圧痕が残る。

土錘（81）　上端部長4.1cm、下端部長5.4cm、幅4.3cm前後、高さ9.5cmを測る方柱状の土製品である。焼成前に穿たれた穿孔が中央部に施されており、内孔径は0.9cmを測る。著しく風化しているが調整はミガキによるものと思われる。

石器

石庖丁（82）　石材は片岩製で片側半分以上が欠損している。刃部は両面から研磨された両刃タイプで、紐部はやや刃部に近い位置に両面から穿たれている。内孔径は0.5cm、重さは26.9ｇである。

1SK024（Fig.20、Pla.23）

弥生土器

甕（83・84）　83は口縁部の破片で口径31.0cmを復原する。口縁端部には断面三角形状の突帯を貼付け、上端部はやや凹状を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は工具ナデ、体部内面はナデである。84は口縁部の破片で、口径26.0cmを復原する。口縁端部及びその下位の外面には断面三角形状を呈する貼付突帯が施され、口縁端部内面はやや突出する。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデの調整である。

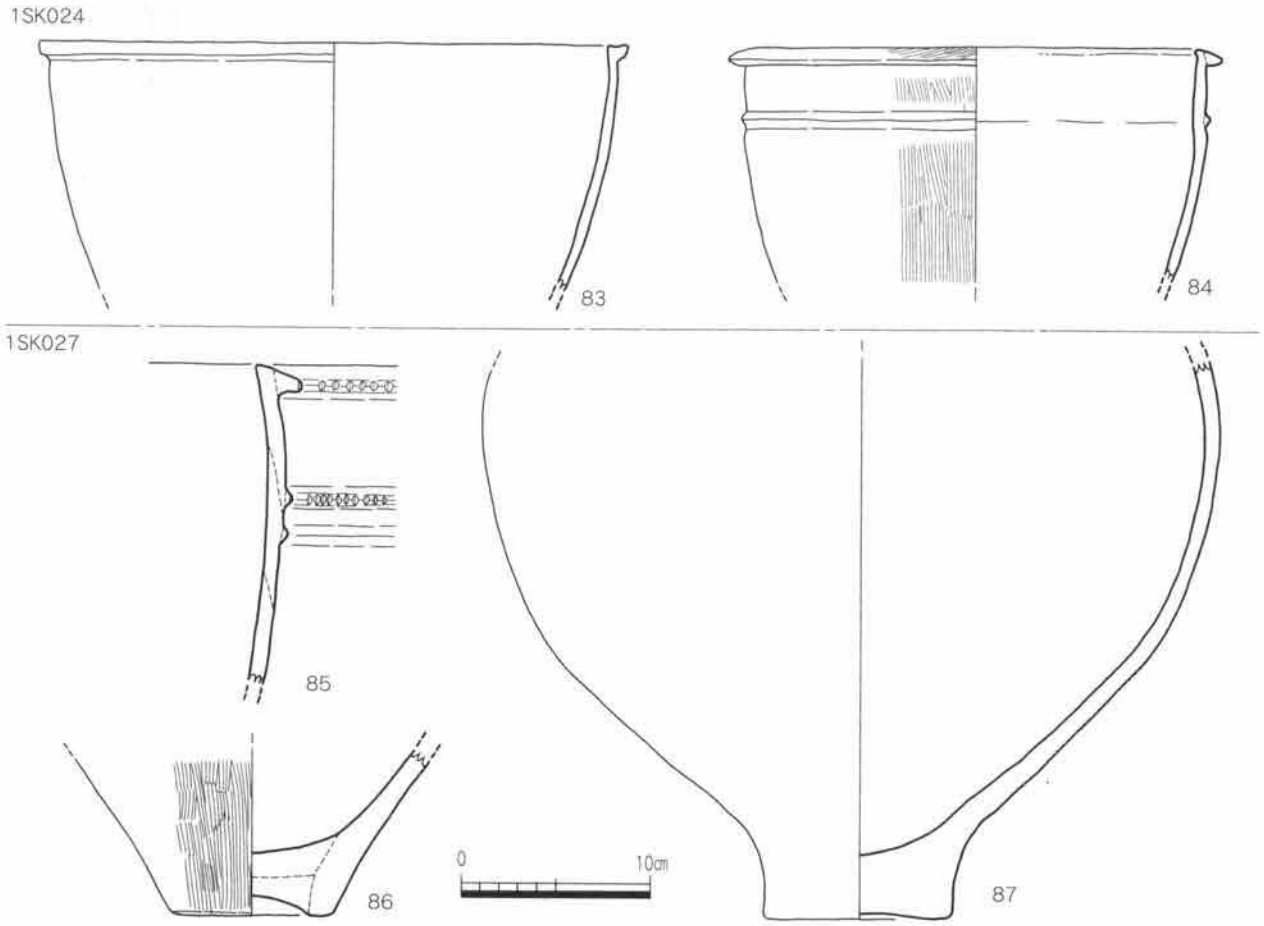


Fig.20　土坑（1SK024・027）出土遺物実測図（1/4）

1SK027（Fig.20、Pla.23）

弥生土器

甕（85・86）　85は口縁部の細片である。口縁端部及びその下位の外面には断面三角形状の貼付突帯が施され、更に端部の突帯及び2条の内の上部突帯には刻み目文が施されているが、下部突帯は無文である。86は底部の細片で底径8.6cmを測り、底部は上げ底状を呈する。外面には刷毛目が施される。

壺（87）　体部から底部にかけての破片で底径9.9cmを測る。器面内外面の調整は工具によるナデが丁寧に施されており、外面下位には煤が付着している。

1SK028（Fig.21、Pla.23・24）

弥生土器

甕（88～93）　88～91はほぼ完形品で口縁端部には断面三角形状の貼付突帯を施す。88は口径27.4cm、底径7.9cm、器高29.35cmを測る。口縁上端部はほぼ平坦面を呈し、一部で煤が付着している。底部は若干上げ底状を呈し、調整は口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は工具ナデ、体部内面はナデである。89は口径24.6cm、底径7.2cm、器高29.8cmを測り、外面の口縁部から体部にかけての広い範囲に煤が付着する。口縁部はヨコナデ、体部から底部外面は刷毛目、内面はナデである。90は口径24.6cm、底径6.2cm、器高25.1cmを復原し、体部外面には煤が付着する。底部は平底を呈し、口縁部外面はヨコナデ、体部から底部にかけての外面は工具ナデ、内面は全てナデの調整である。91は口径26.0cm、底径7.3cm、器高26.5cmを測り、底部は上げ底を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部から底部にかけての外面は刷毛目、内面はナデの調整である。92は口縁部の破片で口径26.0cmを復原する。口縁端部は如意状に外反し、口縁部の下位には断面三角形状の貼付突帯を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデの調整である。93は底部の細片で外底は若干窪んでいるがほぼ平底状を呈し、底径7.1cmを測る。

壺（94）　底部の細片で外底は若干窪んでいるがほぼ平底状を呈する。底径8.2cmを測り、内外面はナデ、外底は未調整である。

土製品

紡錘車（95）　ほぼ完形品で外径は4.3cm、内孔径は0.4cmを測る。

石器

石鏃（96）　石材はサヌカイト製で正三角形状を呈する。抉りは若干浅く、先端部及び表面の右側片脚部は欠損する。表面には剥片時のネガティヴ面、裏面にはポジティヴ面が残存し、周縁には二次加工を施して刃部を作り出している。重さは0.8ｇを量る。

石庖丁（97）　磨製で石材は粘板岩製かと思われる。表面右側の紐部から欠損した破片で、紐部は両面から穿孔されている。刃部は両面から研磨された両刃タイプで、紐部の内孔径は0.5cmを復原し、重さは24.0ｇを量る。

扁平片刃石斧（98）　磨製で石材は泥岩製かと思われる。基部を大きく欠損し、左側面は剥離しており、断面形は長方形状を呈する。刃縁幅は2.2cm、重さは9.5ｇを量る。

1SK029（Fig.22、Pla.24・25）

弥生土器

甕（99～109）　99～103は口縁部から体部にかけての破片で、口縁端部及びその下位には一条の三角貼付突帯が施されるが101は端部のみである。99は口径28.9cmを復原し、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は工具ナデ、体部内面上位はナデ、体部内面下位は工具ナデ後指押さえである。100は口径28.15cmを測り、内面は風化のため調整不明である。口縁部外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向の刷毛目である。101は口径24.25cmを測り、内面は風化のため調整不明である。口縁部はヨコナデ、体部外面は刷毛目である。102は口径26.2cmを測り、外面の一部に煤が付着する。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向の刷毛目、体部内面はナデである。103は口径22.4cmで磨耗のため調整不明な部分が多いが、体部外面に刷毛目、内面に指頭圧痕及びナデ痕が看取される。104はほぼ完形品で口径21.7cm、底径7.0cm、器高23.0cmを測り、口縁端部及びその下位の外面には断面三角形状の貼付突帯が施される。底部中央には焼成前に内外面から穿たれた穿孔を認め、内孔径は0.6cmを測る。口縁部内外面はヨコナ

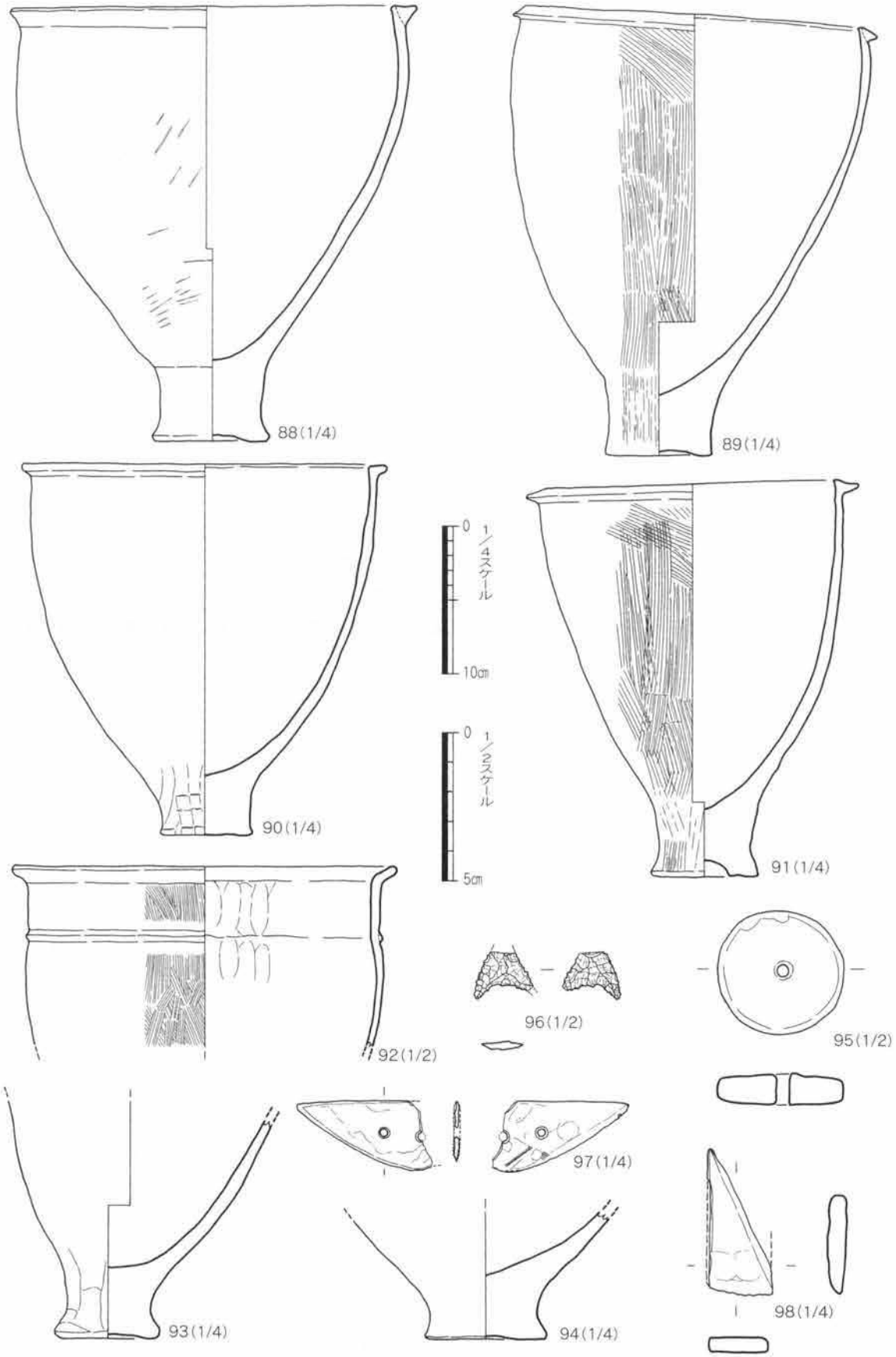


Fig.21　土坑（1SK028）出土遺物実測図（1/2・1/4）

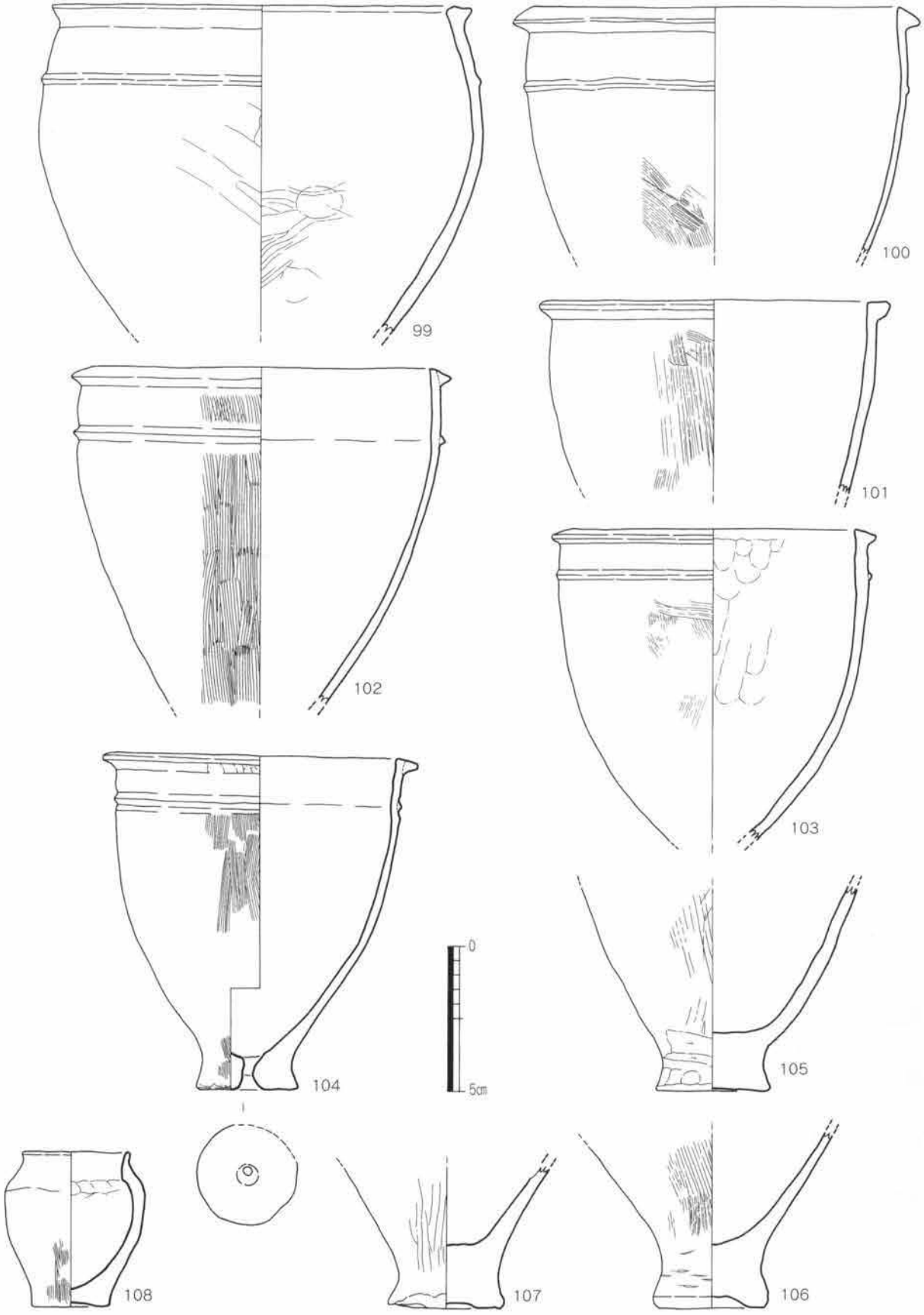


Fig.22　土坑（1SK029）出土遺物実測図①（1/4）

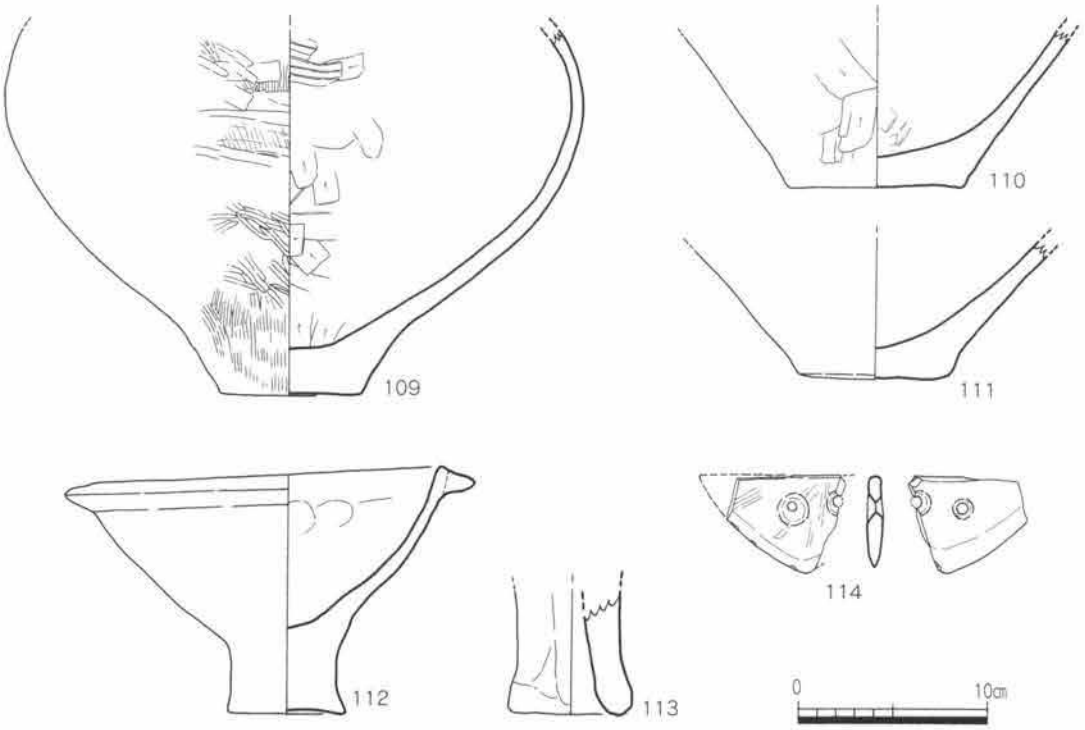


Fig.23　土坑（1SK029）出土遺物実測図②（1/4）

デ、体部外面は刷毛目、体部内面は工具ナデの調整である。105～107は底部の細片である。105は底径7.7cmを測り底部は平底を呈する。体部外面は刷毛目、体部内面及び底部外面は工具ナデで、底部外面下位には指頭圧痕が残る。106は底径12.15cm、107は底径8.0cmを測り、ともに外底はやや上げ底状を呈する。108は小型の甕で口径7.5cm、底径5.3cm、器高10.7cmを測る。口縁部は直立気味にやや外反し、外底はほぼ平底状を呈する。口縁部内面はヨコナデ、口縁部外面は工具ナデ、体部外面は刷毛目後に粗く工具ナデ、体部内面及び外底はナデの調整である。

壺（109～111）　109は底部の破片で底径7.4cm、体部最大径30.5cmを測り、調整は体部外面は刷毛目後工具ナデ、内面は工具ナデ後指押さえ、底部外面は刷毛目である。110・111は底部の細片で平底を呈する。110は底径9.1cm、111は8.05cmを測る。

鉢（112）　ほぼ完形品で口径21.6cm、底径6.2cm、器高12.5cmを測る。口縁端部には断面三角形状の貼付突帯を施され、底部は甕と同様の絞り込んだ平底を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部から底部にかけての外面は工具ナデ、内面は指押さえ後ナデの調整である。

土製品

器台（113）　円筒形状を呈した細片で上半部は欠損する。底径は6.4cmを測り、調整はナデである。

石器

石庖丁（114）　磨製で石材は粘板岩製かと思われ、表面左側端部及び右側半部は欠損する。刃部は両面から研磨された両刃タイプで重さは37.1ｇを量る。紐部は両面から穿孔されており、紐部の内孔径は0.6cmを測る。

1SK034（Fig.24、Pla.25）

土師器

小皿（115）　完形品で口径7.0cm、底径4.1cm、器高2.1cmを測る。外底は糸切りで、底部内面はナデ、その他はヨコナデの調整である。

坏（116）　完形品の小型坏である。外底は糸切りで、口径8.7cm、底径6.0cm、器高3.8cmを測る。口縁部から底部にかけての内外面はヨコナデである。

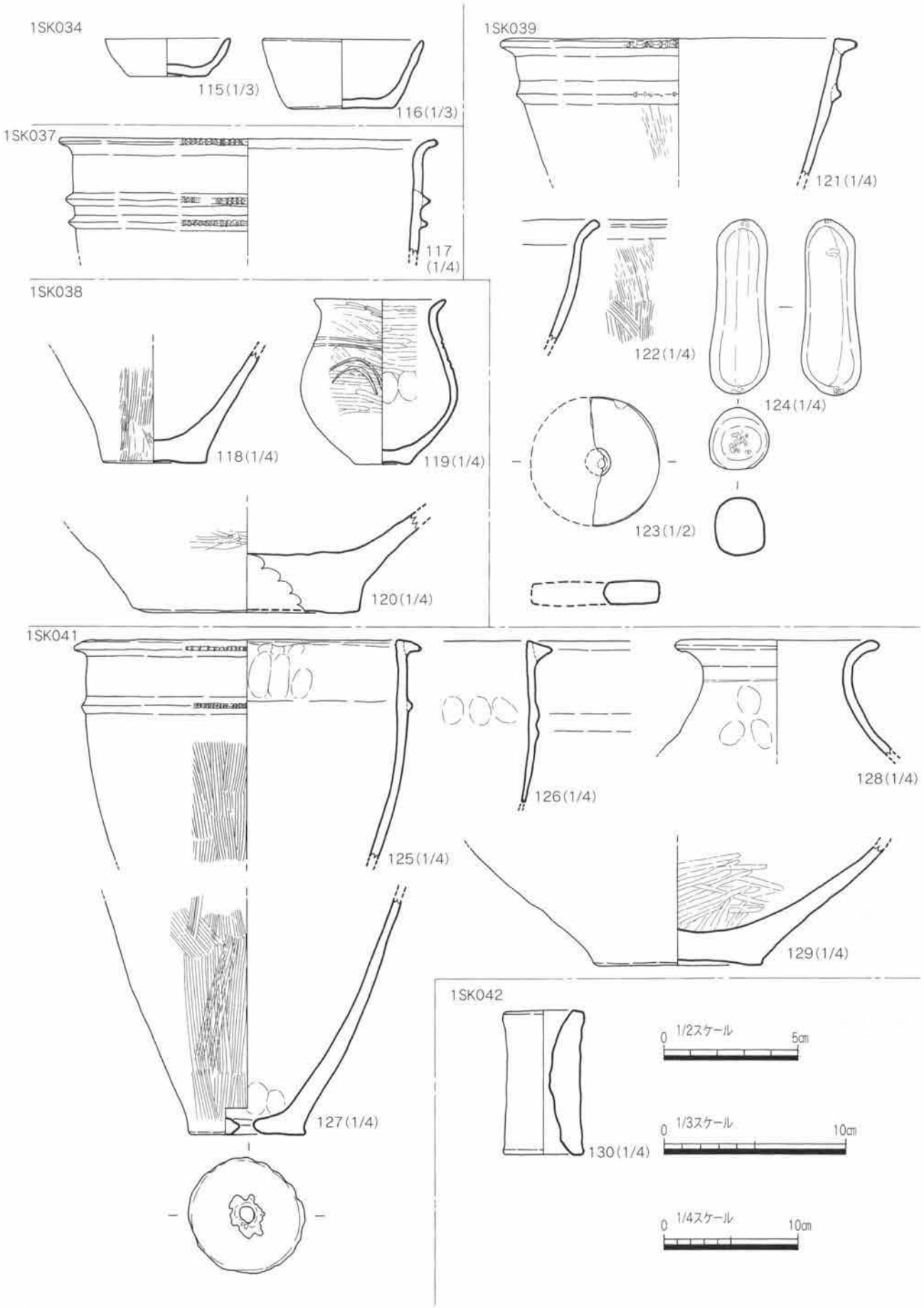


Fig.24　土坑（1SK034・037～039・041・042）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

1SK037（Fig.24、Pla.25）

弥生土器

甕（117）　口縁部の細片で口径28.0cmを復原する。口縁部は如意状を呈し、その下位には断面三角形状の貼付突帯を2条施す。口縁端部及び貼付突帯には細かい刻み目を施す。

1SK038（Fig.24、Pla.25・26）

弥生土器

甕（118）　底部の細片で底径7.7cmを測る。外底は平底で底部外面は刷毛目、内面はナデである。

壺（119・120）　119は小型の壺で口径9.7cm、底径4.0cm、器高12.1cmを測る。口縁部は朝顔型に外反し、肩部には2条の沈線と重弧文を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は横方向のミガキ、底部内外面はナデの調整である。120は大型壺の底部細片で底径16.6cmを復原する。内面はナデ、底部外面の上位は工具ナデ、下位はヨコナデである。

1SK039（Fig.24、Pla.26）

弥生土器

甕（121・122）　121は口縁部の細片で口径26.4cmを復原し、断面三角形状の刻目突帯を口縁部及びその下位に施す。122は如意状口縁を呈し、内面は表面剥離のため調整不明である。口縁部外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目である。

石器

紡錘車（123）　石材は片岩製で片側半部を欠損する。外径4.8cm、厚さ0.9cm、内孔径0.3cm、外孔径0.9cmを復原し、重さは18.0ｇを量る。

敲石（124）　石材は安山岩製である。長さは12.8cm、重さは400ｇで上下端部に敲打痕が残る。

1SK041（Fig.24、Pla.26）

甕（125～127）　125は口縁部の破片で口径25.6cmを復原する。断面三角形状の刻目突帯を口縁部及びその下位に施し、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面はナデの調整である。126は口縁部の細片で口縁部及びその下位に断面三角形状の貼付突帯を施す。調整は磨耗のため不明であるが、外面には薄く煤が付着している。127は底部の破片で底径は8.65cmを測る。平底を呈した底部には内孔径1.0cmを測る穿孔が焼成後に内外面から穿たれている。外面は刷毛目、内面はナデの調整で、体部外面には煤が付着する。

壺（128・129）　128は口縁部の細片で口径15.2cmを測る。口縁部は大きく外反し、肩部と口縁部の境では浅い沈線が一条施されている。調整は磨耗のため不明である。129は底部の細片で底径12.6cmを測る。体部外面は丹塗りの痕跡が残り、内面はミガキ、外底はナデ後ミガキの調整である。

1SK042（Fig.24、Pla.26）

土製品

器台（130）　完形品で上端部径6.0cm、下端部径6.0cm、器高10.65cmを測り、器面の調整は不定方向のナデである。

1SK044（Fig.25、Pla.26・27）

弥生土器

甕（131～136）　131は口径26.6cm、底径7.6cm、器高27.8cmを測り、口縁部は端部が平坦面を呈する三角突帯を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部から底部にかけての外面は刷毛目、内面はナデであり、外面には煤が付着する。132は口径23.6cm、底径7.3cm、器高25.5cmを測る。口縁部には断面三角形状の突帯を施し、端部は指押さえにて調整する。体部外面は刷毛目、体部内面及び口縁部外面はナデ、底部内面は指押さえである。133は口縁部及び底部の破片を同一個体として認識し図面上で復原した。やや小さめの甕で口径17.2cm、底径6.4cm、器高18.0cmを測る。口縁部は断面三角形状の突帯を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面及び底部外面はナデの調整である。134～136は底部の細片で全て上げ底状を呈する。134は底径7.0cm、135は底径9.0cm、136は底径7.4cmを測る。

壺（137～140）　137は口縁部を欠損した破片で、底径8.7cm、体部最大径30.0cmを測り、肩部には2

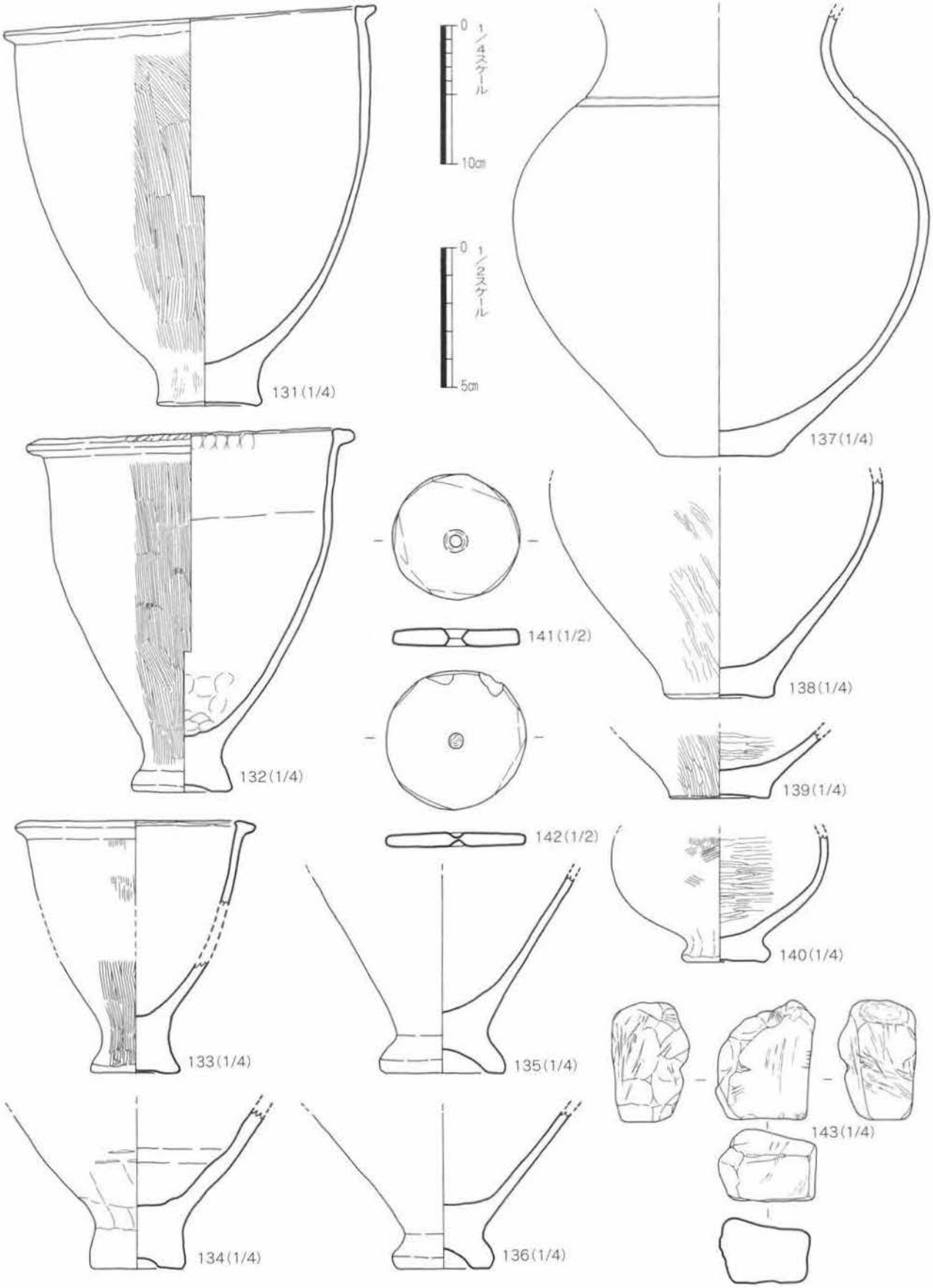


Fig.25　土坑（1SK044）出土遺物実測図（1/2・1/4）

状の浅い沈線が施される。器面は著しく磨耗しているのため調整不明である。138～140は底部の細片で138は底径7.9cm、139は7.2cmを測る。140は底径6.3cm、体部最大径15.6cmを測り、底部は極端に絞り込まれている。体部外面は刷毛目後工具ナデ、体部内面は横方向のミガキ、底部内外面はナデで、器内外面には煤が厚く付着している。

石器

紡錘車（141・142）　石材はともに片岩製で、141は外径4.5cm、厚さ0.65cm、内孔径0.4cm、重さ22.8gで中央部の穿孔は内外面から穿たれている。142は未製品で中央部には内外面から穿孔が施されているが貫通はしていない。外径5.0cm、厚さ0.5cm、重さ23.3gである。

砥石（143）　石材は砂岩製で表面、側面、下端面を砥面として使用し、部分的に細かな線条痕が認められる。重さは380gを量る。

1SK046（Fig.26、Pla.27）

弥生土器

甕（144）　底部の細片で底径8.8cmを測る。外底は上げ底で内面はナデ、外面は刷毛目の調整である。

壺（145）　口縁部の細片で口径19.0cmを復原する。口縁部は大きく外反し、肩部に貼付三角突帯を施す。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面の上位は刷毛目、下位は横方向のミガキである。

土製品

投弾（146）　下半部を欠損した細片である。色調は茶褐色、胎土及び焼成ともに良好である。

石器

敲石（147）　安山岩の円礫を利用したもので、表裏面の中央部及び周縁の一部に敲打痕が残る。重さは1.04gを量る。表面の一部に二次焼成の煤が付着する。

1SK048（Fig.26、Pla.28）

石器

石鏃（148）　完形品で石材はサヌカイト製である。縦長の二等辺三角形を呈し、抉りは深くないタイプで両側縁はやや湾曲する。重さは1.7gを量り、表面には剥片素材時のネガティヴ面、裏面にはポジティヴ面を大きく残す。

1SK053（Fig.26、Pla.28）

弥生土器

甕（149）　口径19.7cm、底径6.1cm、器高23.5cmを復原し、口縁部及びその下位には断面三角形状の突帯を施す。底部外面に若干刷毛目痕が残っているが、全体的に風化しているため調整は不明である。

石器

石鏃（150・151）　150は石材はサヌカイト製で二等辺三角形を呈する。抉りは非常に浅く、表面中央に剥片素材時のネガティヴ面を残す。重さは0.6gを量る。151は先端部を僅かに欠損し、石材はサヌカイト製である。縦長の二等辺三角形を呈し、両側縁はほぼ直線的で抉りは深い。二次整形加工は粗く、重さは2.0gを量る。

1SK060（Fig.26、Pla.28）

弥生土器

甕（152～154）　152は口縁部と底部の破片を同一個体として認識し、図面上で接合図示したものである。断面三角形状を呈した刻目突帯を口縁部及びその下位に施し、口径20.2cm、底径8.0cm、器高24.2cmを復原する。153は口縁部に断面三角形突帯を施され口縁端部は平坦面を呈する。口径25.0cm、底径7.9cm、器高27.2cmを測る。154は断面三角形状の貼付突帯を口縁部及びその下位に施し、口径29.6cm、底径7.9cm、器高32.2cmを測る。

土製品

器台（155）　上半部が欠損した破片で形状は円柱状を呈するものと思われる。調整はナデで重さは220.0gを量る。

石器

石鏃（156）　完形品で石材はサヌカイト製である。二等辺三角形状を呈し抉りは浅い。表裏面に粗く

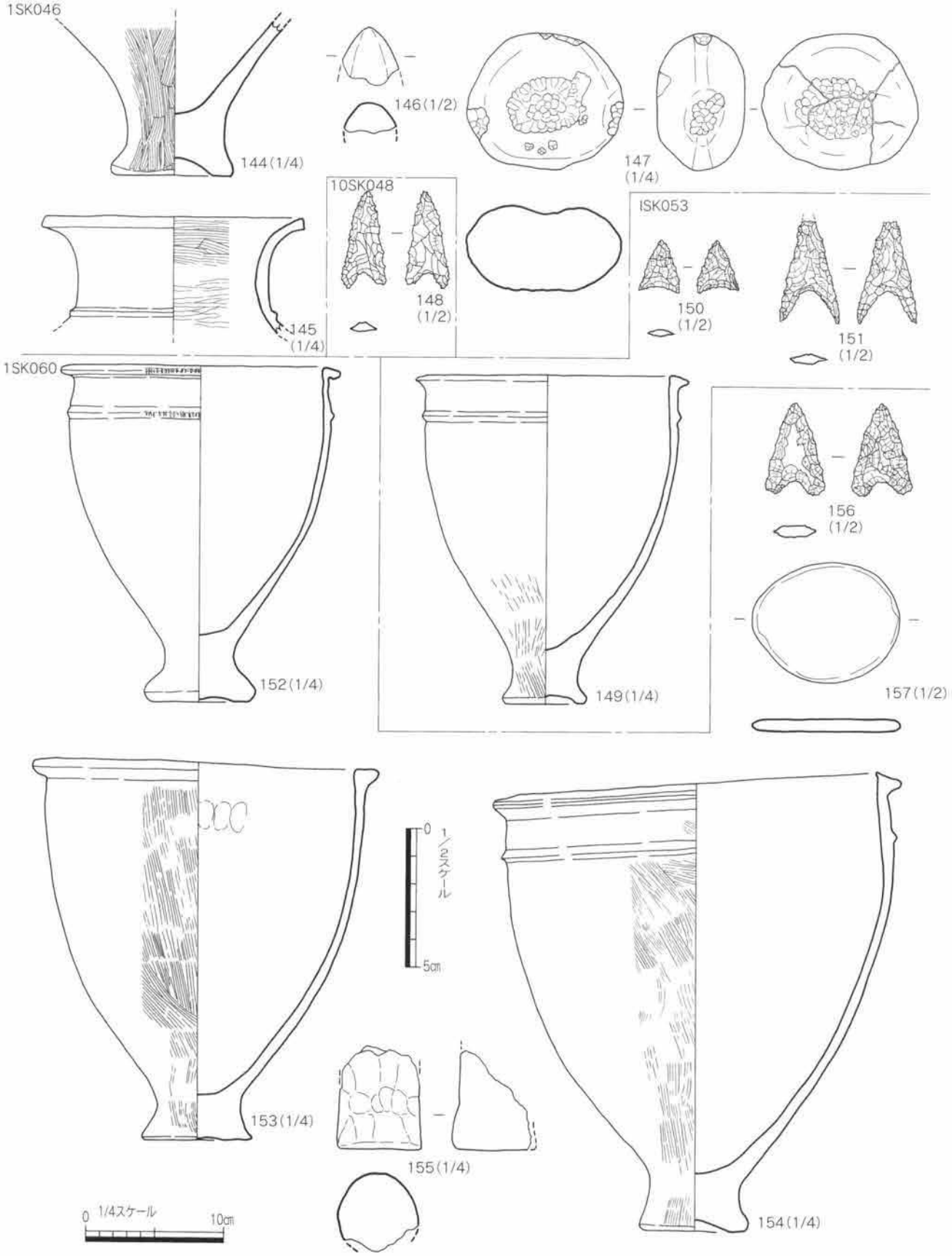


Fig.26　土坑（1SK046・048・053・060）出土遺物実測図（1/2・1/4）

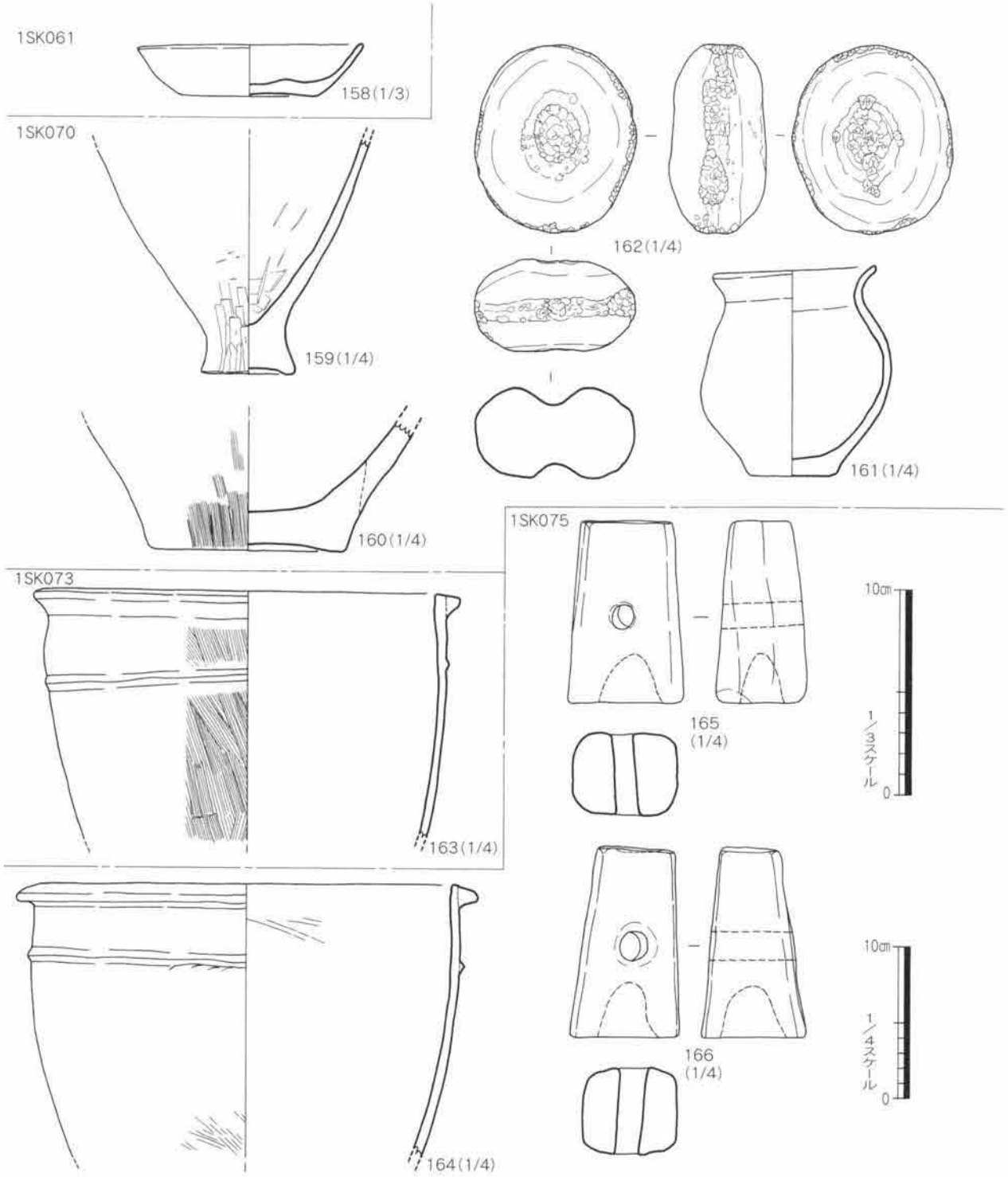


Fig.27　土坑（1SK061・070・073・075）出土遺物実測図（1/3・1/4）

二次整形加工が施されているが、表裏面中央には研磨された痕跡が残る。重さは2.4ｇを量る。

円盤（157）　楕円形状を呈した片岩製の円盤である。使用の用途については不明で周縁はかなり風化、磨耗している。径は4.4～5.4㎝、厚さ0.5㎝、重さ16.6ｇである。

1SK061（Fig.27、Pla.28）

土師器

小皿（158）　口径11.0㎝、底径6.6㎝、器高2.5㎝を測る。外底は糸切りでそれ以外はヨコナデの調整である。

1SK070（Fig.27、Pla.28・29）

弥生土器

甕（159・160）　159は底部の破片で底径は6.2cmを測る。内外面には工具ナデの調整痕が著しく残る。160は大型甕の底部細片で底径は13.0cmを測る。内面はナデ、外面は刷毛目である。

壺（161）　口径10.4cm、底径5.4cm、器高13.6cmを測る小型の壺である。外面は磨耗のため調整不明であるが内面上位はミガキ、下位はナデの調整である。

石器

敲石（162）　安山岩製の円礫を素材とし、表裏面の中央部及び周縁部に細かい敲打痕が看取される。重さは1.122kgを量る。

1SK073（Fig.27、Pla.29）

弥生土器

甕（163）　断面三角形状の貼付突帯を口縁部及びその下位に施され、口縁端部は平坦面を呈する。口径28.2cmを測り、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向の刷毛目、体部内面はナデである。

1SK075（Fig.27、Pla.29）

弥生土器

甕（164）　断面三角形状の貼付突帯を口縁部及びその下位に施す。口径30.4cmを測り、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位は工具ナデ、下位は刷毛目、体部内面はナデである。

土製品

土錘（165・166）　ともに台形状の方柱型を呈した土製品で、中央部には焼成前に穿たれた穿孔を認める。底部は凹状に窪んでおり、調整は丁寧なナデである。165は上端部幅6.0cm、上端部奥行き4.0cm、底部幅7.5cm、底部奥行き6.0cm、器高12.0cm、穿孔の内孔径1.3cm、重さ635.0ｇである。166は上端部幅5.1cm、上端部奥行き4.0cm、底部幅7.2cm、底部奥行き6.8cm、器高12.5cm、穿孔の内孔径1.6cm、重さ610.0ｇである。

1SK080（Fig.28、Pla.29・30）

弥生土器

甕（167～171）　167は口縁部の破片で口径36.0cmを測る。口縁部及びその下位に断面三角形状の貼付突帯を施す。168～171は底部の細片で168は底径9.5cm、169は底径6.8cm、170は底径6.7cm、171は底径7.3cmを測る。

土製品

投弾（172）　完形品で上下部の先端は尖っている。長さ3.5cm、最大径1.8cm、重さ8.0ｇである。

土錘（173・174）　形状はともに方柱形状を呈した土製品で上端面部には浅い凹状の溝が施されている。中央部には焼成前に穿たれた穿孔を認め、調整は丁寧なナデである。173は表面の左下側部を欠損し、上端部幅4.8cm、上端部奥行き4.2cm、底部奥行き5.0cm、器高10.7cm、穿孔の内孔径0.9cm、重さ260.0ｇである。174は上端部幅5.1cm、上端部奥行き4.8cm、底部幅5.2cm、底部奥行き4.3cm、器高10.5cm、穿孔の内孔径0.9cm、重さ305.0ｇである。

石器

石鏃（175）　石材は黒曜石製で二等辺三角形状を呈する。抉りは浅く表面の左側縁の一部を僅かに欠損する。裏面の中央部に剥片素材時のポジティヴ面を大きく残す。

1SK084（Fig.28、Pla.30）

弥生土器

甕（176）　底部の破片で底径6.7cmを測る。風化のため調整は不明であるが、底部中央には焼成後に外側から穿たれたと思われる穿孔を認め、内孔径は1.2～1.4cmを測る。体部から底部にかけての外面には煤が薄く付着する。

1SK086（Fig.28、Pla.30）

弥生土器

甕（177）　口縁部の破片で口径26.0cmを復原する。口縁部及びその下位には断面三角形状の刻目突帯

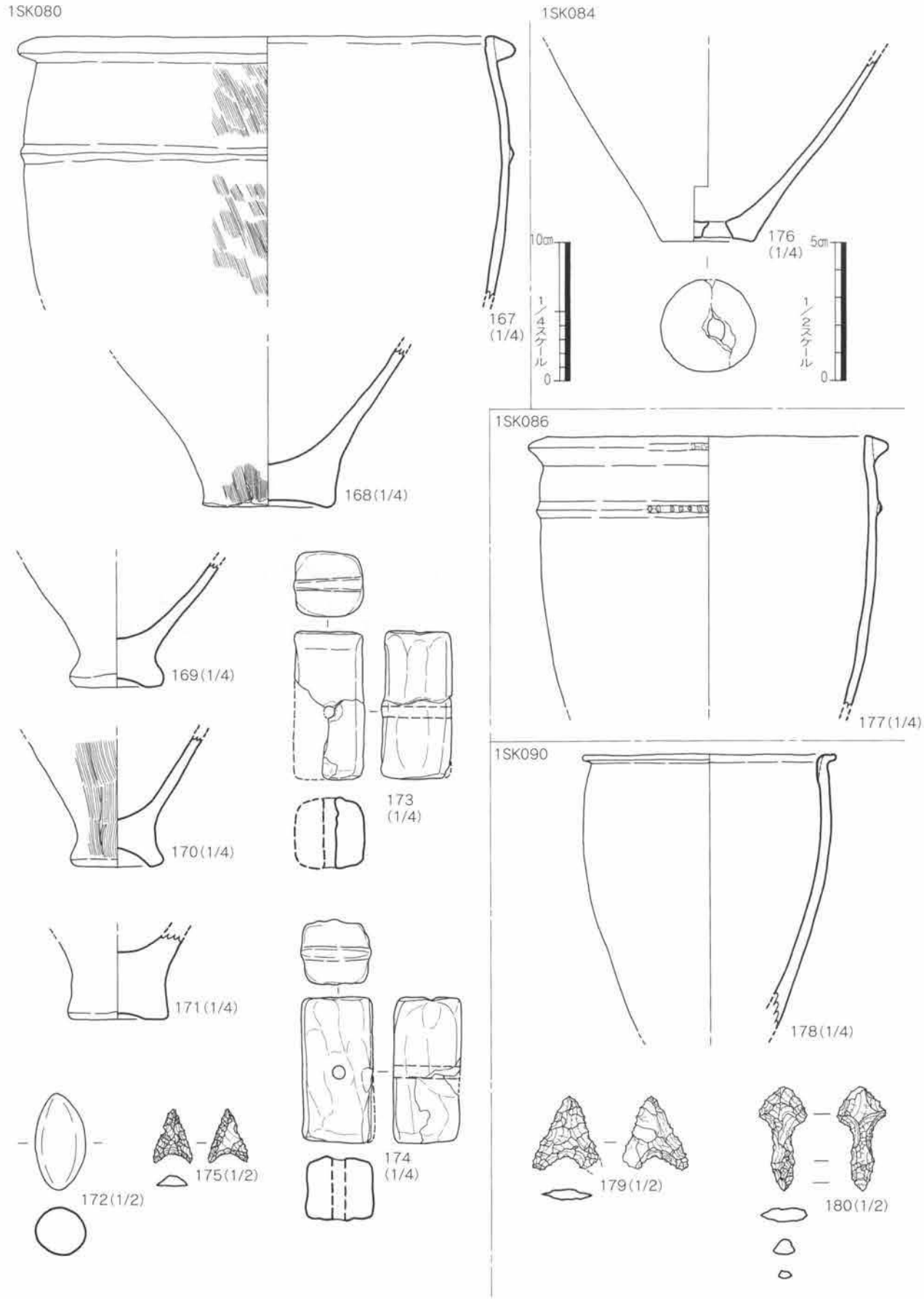


Fig.28　土坑（1SK080・084・086・090）出土遺物実測図（1/2・1/4）

を施し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデの調整である。

1SK090（Fig.28、Pla.30）

弥生土器

甕（178）　破片で口径18.4cmを測る。口縁部は如意状に外反し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデの調整である。外面には煤が付着する。

石器

石鏃（179）　石材はサヌカイト製で正三角形状を呈する。表面の右側脚部を欠損し、重さは1.5ｇを量る。抉りは浅く、裏面には剥片素材時のポジティヴ面を大きく残す。

石錐（180）　頭部の一部を欠損したほぼ完形の石錐で、サヌカイト製の錐部が細長いタイプである。頭部裏面にポジティヴ面を大きく残し、重さは2.4ｇを量る。

1SK093（Fig.29、Pla.30）

弥生土器

甕（181）　口縁部及びその下位に断面三角形状を呈した刻目突帯を施し、口径26.75cm、底径7.5cm、器高31.05cmを測る。口縁端部及びその外面はヨコナデ、口縁部内面は指押さえ、体部から底部にかけての外面は刷毛目の調整が看取されるが、それ以外は風化のため調整不明である。

1SK099（Fig.29、Pla.30）

石器

石鏃（182）　磨製の石鏃で石材は泥岩製である。両脚部を欠損し、もとは二等辺三角形を呈していたものと思われる。重さは2.1ｇを量る。

1SK101（Fig.29、Pla.30・31）

弥生土器

甕（183～185）　183は口縁端部に貼付突帯を施し、口径28.0cm、底径7.2cm、器高31.1cmを復原する。口縁部内外面はヨコナデ、体部から底部の外面は刷毛目、内面はナデである。184は口縁部の細片で、口径36.0cmを復原し、口縁端部及びその下位には断面三角形状の貼付突帯が施される。185は上げ底状を呈する底部の細片で底径7.6cmを測る。

土製品

投弾（186）　完形品で上下部の先端は尖っている。長さ4.8cm、最大径2.5cm、重さ20.4ｇである。

石器

石剣（187）　鉄剣形を呈した磨製石剣で石材は砂岩製である。上半部を大きく欠損し、重さは32.0ｇを量る。器面は著しく磨耗しているため鎬を有するか否かは不明であるが断面形は菱形状を呈する。

小型方柱状片刃石斧（188）　石材は粘板岩製かと思われる。基部を欠損し、両側面は剥離する。表裏面は研磨されており、刃縁は磨耗によって先端が丸くなっている。重さは14.4ｇを量る。

1SK102（Fig.29、Pla.31）

弥生土器

蓋（189）　円錐形を呈した完形の蓋で口径9.8cm、器高2.6cmを測る。天井部に焼成前に穿たれた穿孔を4孔認め、内孔径は0.4～0.6cmを測る。調整はナデである。

甕（190～192）　190は口縁部及びその下位に断面三角形状を呈した刻目突帯を施す。口縁端部は平坦面若しくはやや凹状を呈し、口径30.0cmを復原する。191は190と同じく刻目三角突帯を施し、口径は27.8cmを測る。192は平底の底部細片で底径7.0cmを測る。

土製品

把手（193）　手捏ねで作られた把手部の細片で把手径は1.7cm前後を測る。杓子形になると思われる。

石器

紡錘車（194）　ほぼ完形で外径4.5cm、厚さ0.8cm、内孔径0.8cmを測る。重さ26.3ｇで石材は片岩製である。

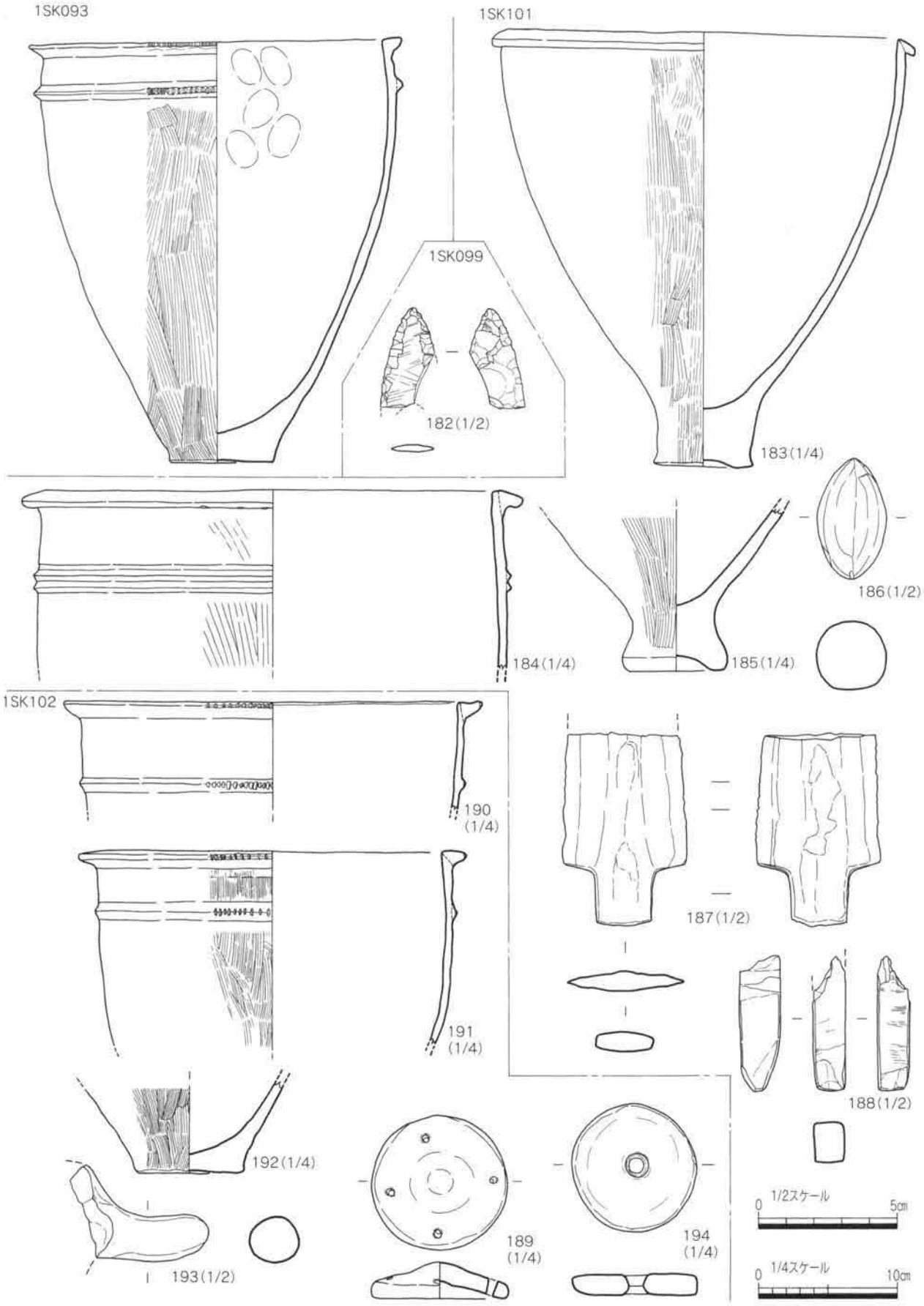


Fig.29　土坑（1SK093・099・101・102）出土遺物実測図（1/2・1/4）

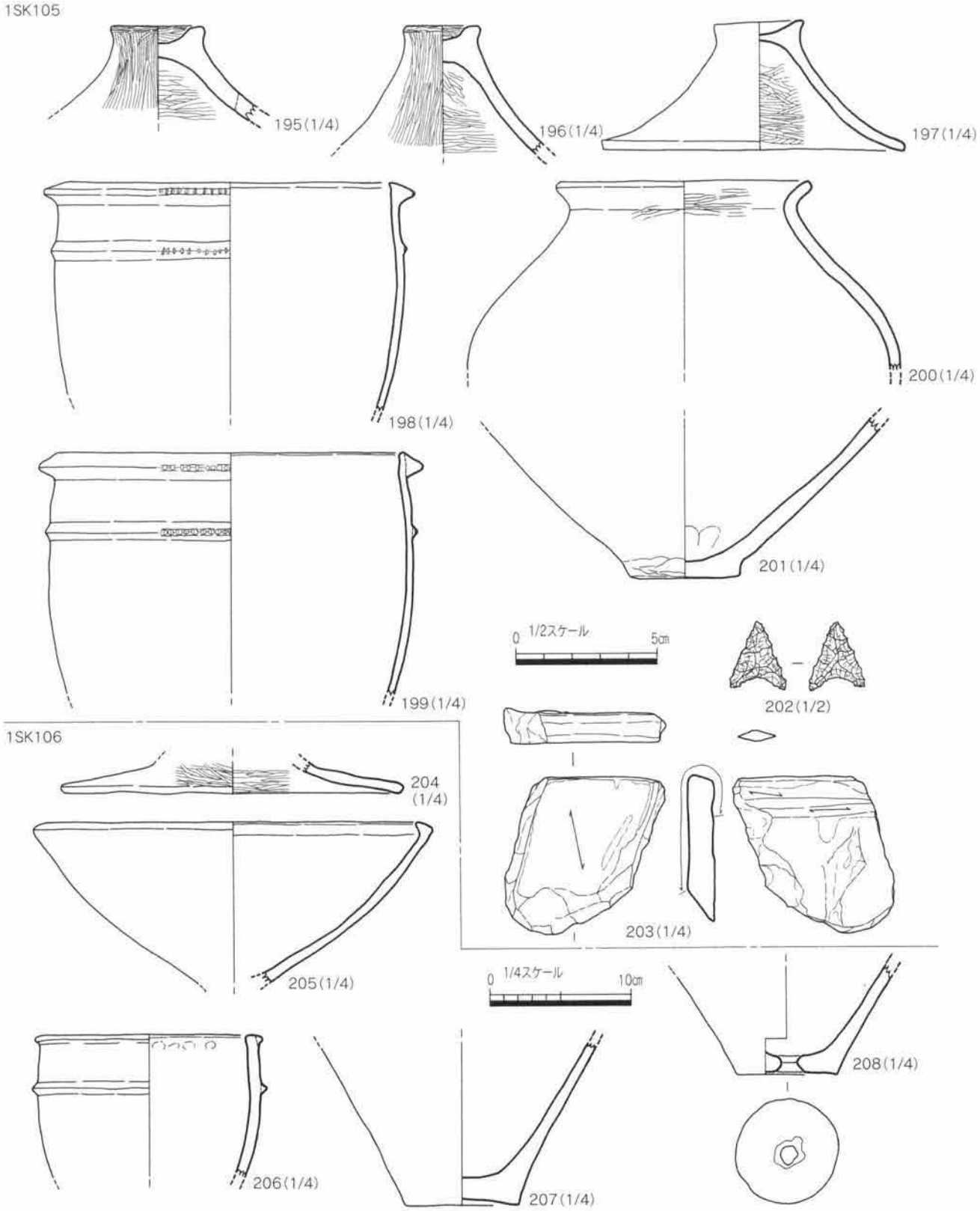


Fig.30　土坑（1SK105・106）出土遺物実測図（1/2・1/4）

1SK105 (Fig.30、Pla.31・32)

弥生土器

蓋（195～197）　195はつまみ部径6.6cmを測る。内外面は丁寧にミガキが施され、天井部内面の一部

に煤が付着する。196はつまみ部径5.4cmを測り、内外面の調整はミガキである。197はほぼ完形の蓋で口径21.3cm、つまみ部径6.2cm、器高9.0cmを測る。内面は横方向のミガキが施されるが、外面は風化のため調整不明である。口縁部内面の一部に煤が付着する。

甕（198・199）　ともに口縁部及びその下位に断面三角形状の刻目突帯を施す。198は口径26.0cm、199は27.0cmを復原する。

壺（200・201）　200は口縁部、201は底部の破片で互いに同一個体の可能性がある。200は口径18.0cmを復原し、口縁部内面及び肩部外面はミガキ痕が認められる。他の調整は風化のため不明である。201は底径7.8cmを測り、体部のはりが大きく底部は平底を呈する。

石器

石鏃（202）　正三角形状を呈する完形の石鏃で抉りはやや浅い。サヌカイト製で表裏面の剥片素材時のめんは除去されているが、二次整形加工は粗い。重さは1.0ｇを量る。

砥石（203）　砂岩製で表裏面及び側面の3面を砥面として使用している。重さは400.0ｇを量る。

1SK106（Fig.30、Pla.32）

弥生土器

蓋（204）　天井部を大きく欠損した細片で口径24.0cmを復原する。内外面はナデ後ミガキの調整で内面の一部に煤が付着する。

鉢（205）　口径28.0cmを復原し、口縁端部は内側に屈曲する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデの調整である。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は不良である。

甕（206～208）　206は口縁部の細片で口径16.0cmを復原する。口縁端部及びその下位に小規模の断面三角形状を呈した貼付突帯を施し、口縁端部から体部外面にかけてはヨコナデ、内面はナデの調整である。207・208は底部の細片で平底を呈する。207は底径8.0cm、208は底径7.2cmを測り、内外面から焼成後に穿たれた穿孔が底部中央に施される。

1SK108（Fig.31、Pla.32）

弥生土器

甕（209）　口縁部及びその下位に断面三角形状の貼付突帯が施されている。口径は28.0cmを復原し、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデである。

土製品

土錘（210）　下部を大きく欠損した円柱形を呈した土錘で上端面は凹状を呈する。最大径は6.0cmを測り、下部には焼成前に穿たれた穿孔の一部が認められる。

石器

石鏃（211）　石材はサヌカイト製で正三角形状を呈する。裏面には剥片素材時のポジティヴ面を残し、全体の二次整形加工はやや粗い。重さは4.1ｇを量る。

1SK109（Fig.31、Pla.32）

弥生土器

甕（212）　口縁部及びその下位に断面三角形状の貼付突帯が施されている。口径25.0cm、底径7.0cm、器高27.0cmを復原し、口縁部外面はヨコナデ、体部から底部の外面は刷毛目、内面はナデである。

1SK110（Fig.31、Pla.32・33）

弥生土器

甕（213～215）　213は小型甕の底部と思われ底径は4.6cmを測る。214は如意状の口縁部を呈し、端部に刻目を施す。口縁部下位に三角突帯を貼り付け、口径26.0センチを復原する。口縁部内面は横方向の刷毛目、口縁部外面は剥離のため不明、体部外面は縦方向の刷毛目、内面はナデの調整である。215は口縁部及びその下位に断面三角形状の貼付突帯が施され、口縁端部はほぼ平坦面を呈する。口径は28.0cmを復原し、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデ若しくは工具ナデである。

1SK113（Fig.31、Pla.33）

土師器

小皿（216）　口径9.6cm、底径7.0cm、器高1.4cmを復原する。外底は糸切り、口縁部内外面はヨコナ

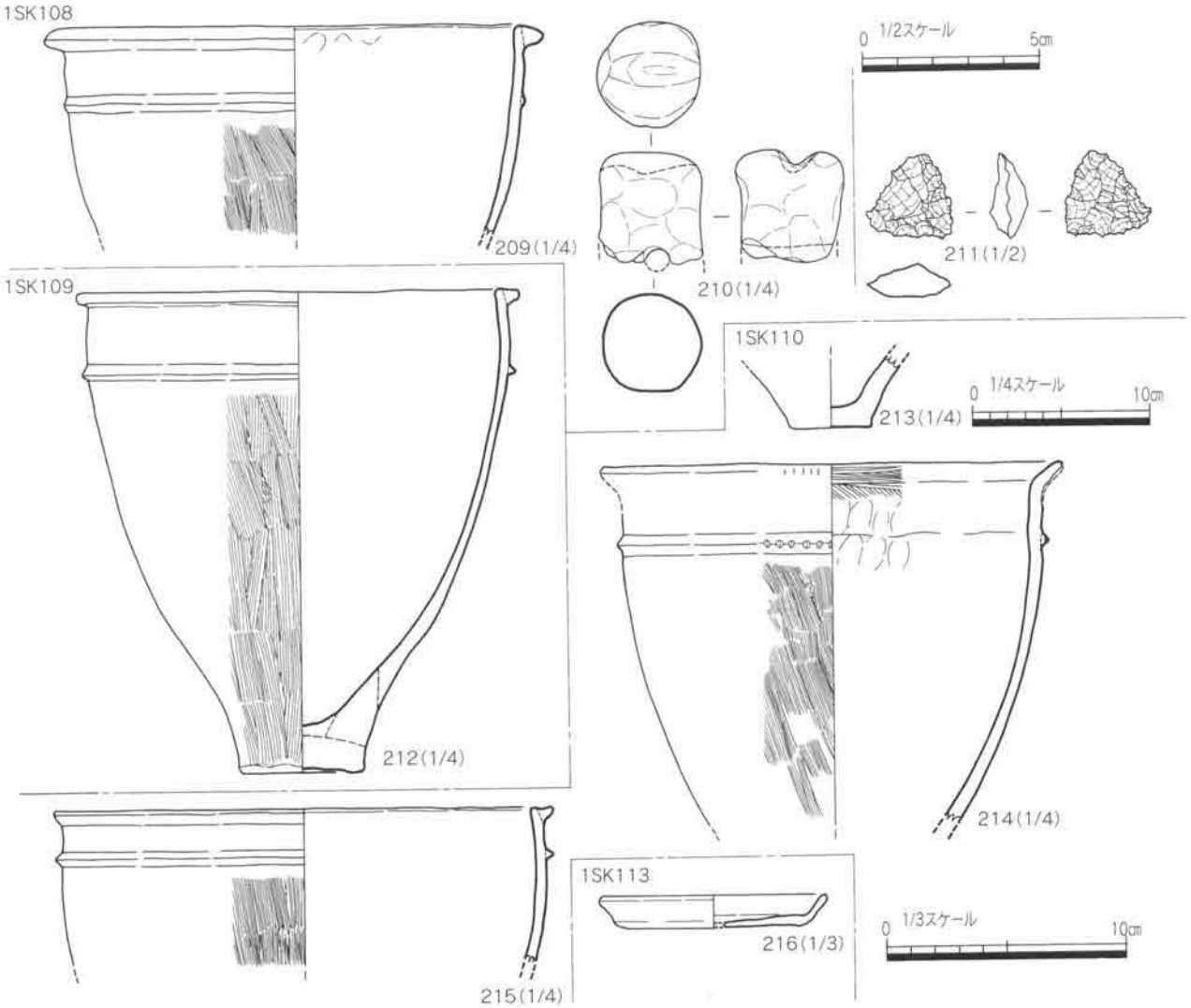


Fig.31　土坑（1SK108～110・113）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

デ、底部内面はナデである。

1SK116 (Fig.32～35、Pla.33～35)

弥生土器

蓋（217～242）　217はつまみ部径5.6cmを測る。上端面はほぼ平坦面を呈し、天井部は外方へ反る。天井部外面は刷毛目、内面は工具ナデである。218はつまみ部径5.6cm、口径22.0cm、器高10.0cmを測る。上端面はフラットで天井部外面は刷毛目、内面はナデで他は磨耗のため調整不明である。219はつまみ部径6.6cm、口径30.0cm、器高11.7cmを測る。上端面は窪み、口縁端部には1条の沈線が巡る。天井部はほぼ直線的にひらく。220はつまみ部径6.6cm、口径32.0cm、器高11.5cmを測り、天井部は緩やかに外反する。内面及びつまみ部外面はナデ、体部から口縁部にかけての外面は刷毛目である。口縁部内面には煤が付着する。221は口縁部及びその下位に刻目三角突帯が施され口径29.7cmを測る。222は口縁端部を逆L字状に外反させ、口縁部下位には三角突帯を施す。口径は28.3cmを測る。223は口径28.6cmを測り、口縁部及びその下位に三角突帯を施す。224は口径32.6cmを復原し、口縁部に三角突帯を施す。225は口径30.0cm、底径8.1cm、器高31.45cmを復原する。底部は平底で口縁部にはやや垂れ下がった三角突帯、口縁部下位には1条の沈線が施される。226は口径28.2cmを復原し、口縁部には三角突帯、口縁部下位には1条の沈線が施される。227は27.6cm、底径6.6cm、器高28.05cmを測る。口縁部とその下位には三角突帯を施し、体部外面には煤が付着する。228は底部を欠損し、口径26.6cmを測る。口縁部とその下位には三角突帯が施されるが、口縁部下位の三角突帯は途中で終息する。229は口

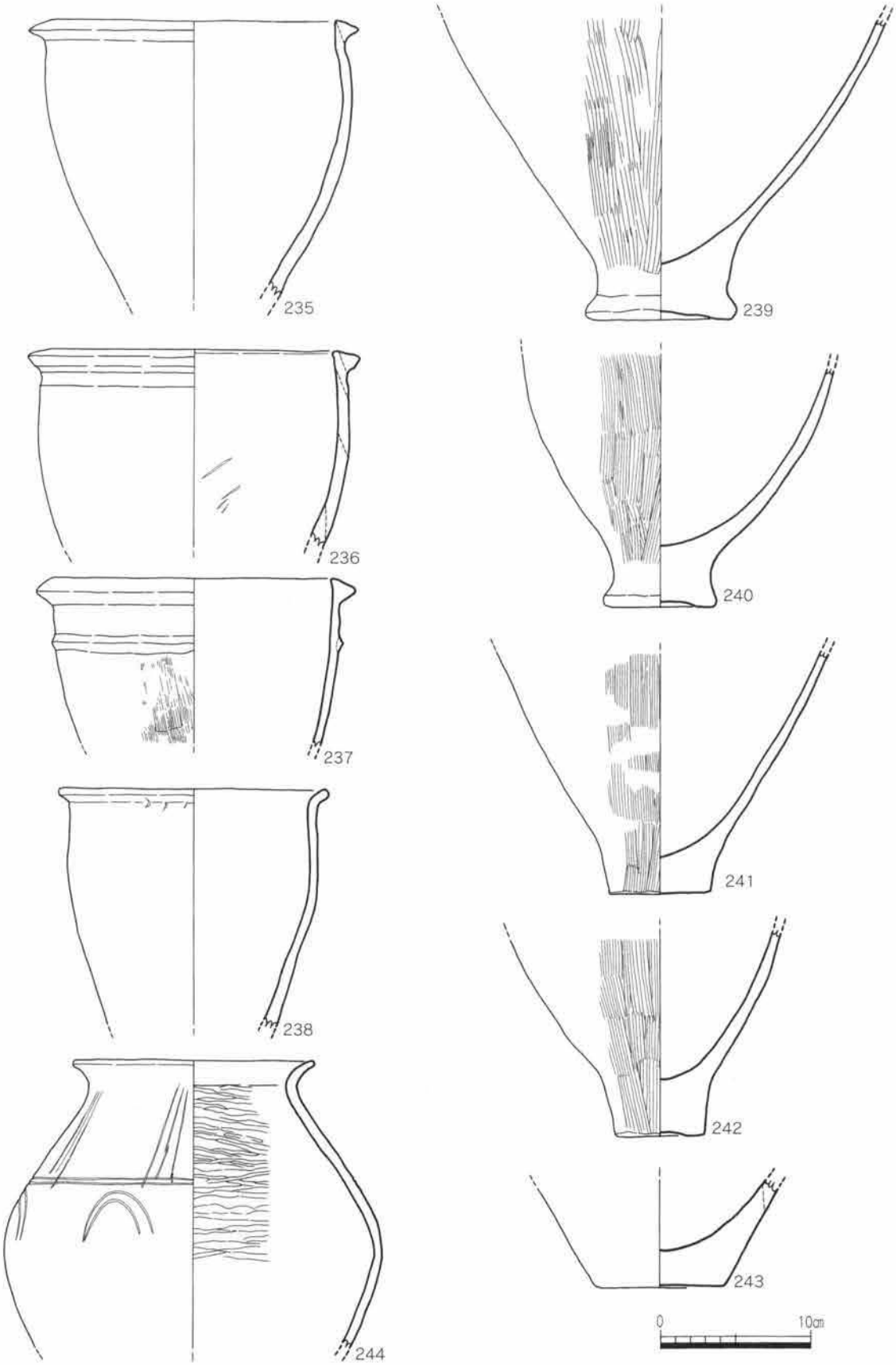


Fig.32　土坑（1SK116）出土遺物実測図①（1/4）

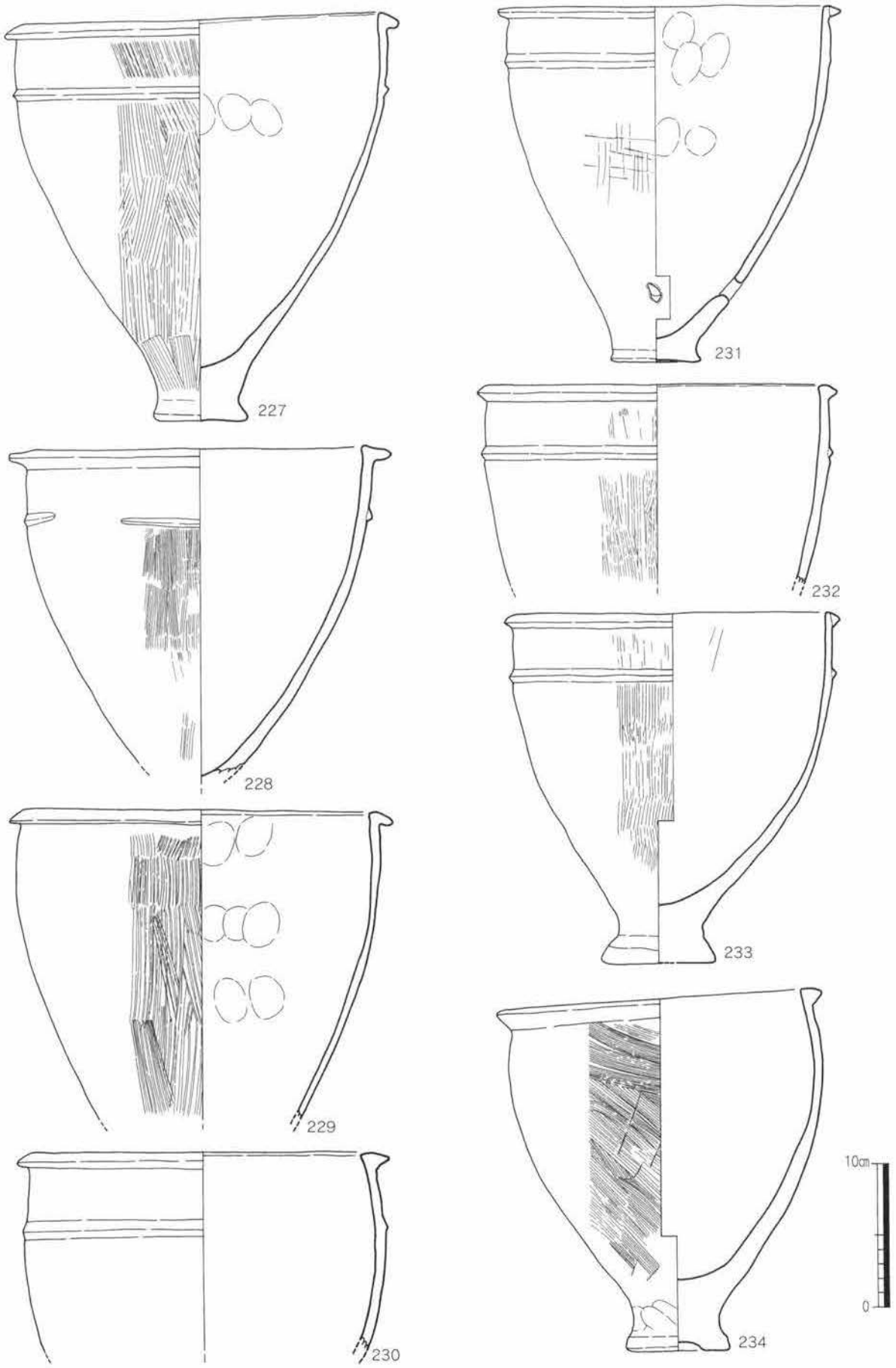


Fig.33　土坑（1SK116）出土遺物実測図②（1/4）

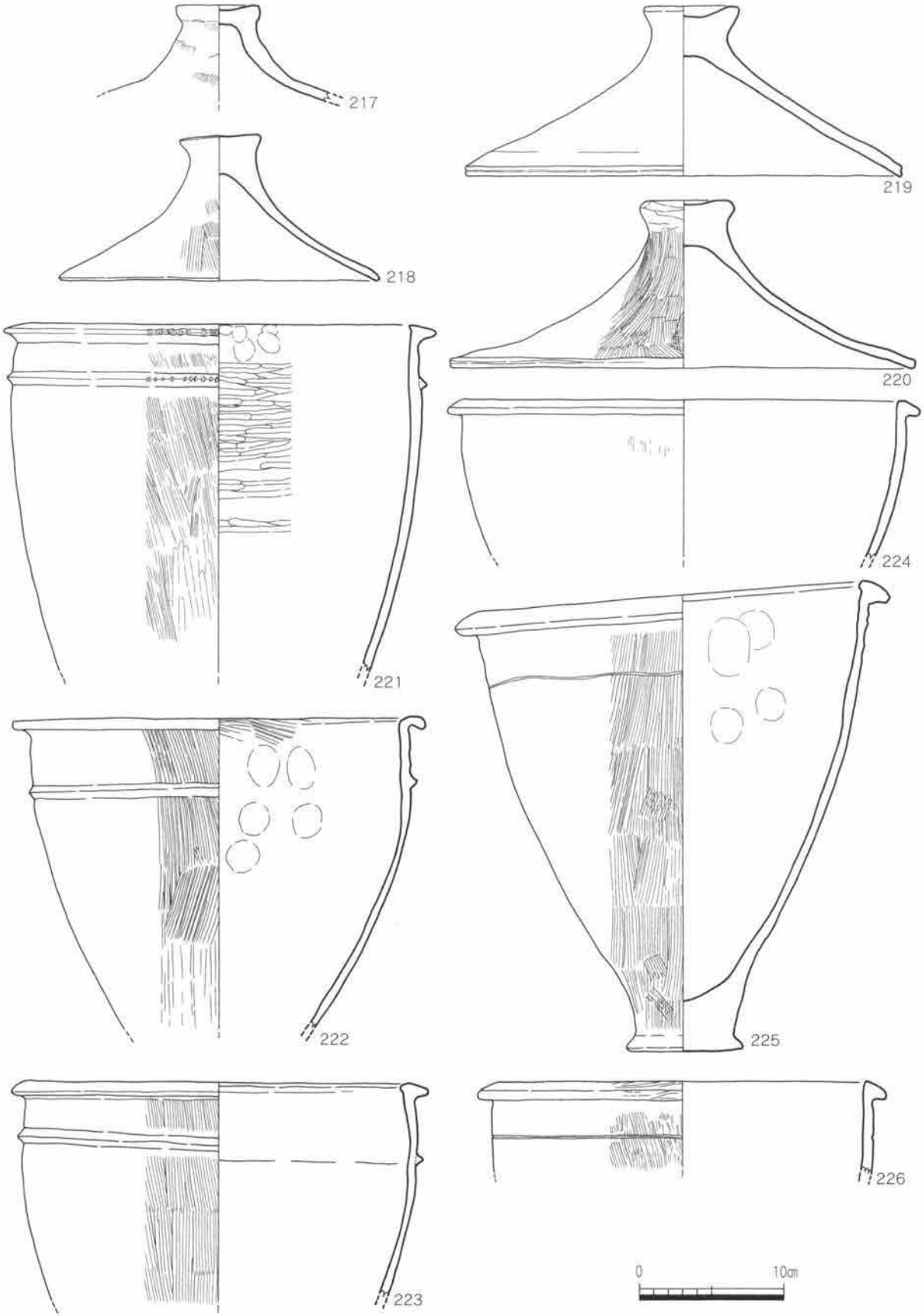


Fig.34　土坑（1SK116）出土遺物実測図③（1/4）

径26.7cmを測り、口縁部にはやや垂れ下がった三角突帯が施される。230は口縁部とその下位に三角突帯を施し、口径は25.95cmを測る。231は口径24.0cm、底径6.3cm、器高24.95cmを復原し、口縁部とその下位には三角突帯が施される。底部近くに楕円状の穿孔が施され、穿孔は焼成後に穿たれたものと判断する。口縁部外面には煤が付着し、体部外面には作成時の粘土巻上げ痕が認められる。232は口径25.2cmを測り、外面には僅かに煤が付着する。233は口縁部とその下位には三角突帯が施され、口径23.5cm、底径8.10cm、器高24.5cmを測る。234は口径22.8cm、底径7.25cm、器高24.6cmを測り、体部外面に煤が付着する。口縁部に三角突帯を施し、底部は上げ底を呈する。235・236は口縁部に三角突帯を貼付け、235は口径21.8cm、236は22.0cmを測る。237は三角突帯を口縁部とその下位に施し、口径21.15cmを測る。238は如意状に口縁部が外反し、外面には薄く煤が付着している。239～242は底部の細片で、239は底径10.0cm、240は底径7.6cm、241は底径6.8cm、242は底径6.0cmを測る。

壺（243～246）　243は底部の細片で底径8.7cmを測る。244は口径16.0cm、体部最大径25.0cmを復原し、肩部外面にはヘラ描きによる2条の沈線や重弧文が施される。口縁部内面はヨコナデ、外面は強い工具ナデ、肩部内面は横方向の粗いミガキ、体部内面はナデの調整である。245は口縁部から体部にかけての細片で体部最大径は14.6cmを復原する。体部外面にはヘラ描きによる2条づつの沈線と爪形文が施され、調整は磨耗のため不明瞭である。246は完形の無頸壺で、口縁部の2ヶ所（対面）に2孔の穿孔が焼成前に穿たれている。底部は円盤状の厚い平底を呈し、口径8.1cm、底径5.3cm、体部最大径13.2cm、器高13.3cmを測る。口縁部外面及び内面はナデ、体部外面はミガキ、底部は粗いナデの調整である。外面の一部に煤が付着する。

土製品

器台（147・248）　247・248は円柱状を呈した土錘で上位の1ヶ所に焼成前の穿孔が施される。ともに表面はナデの調整で247は器高10.5cm、外径約4.6cm、内孔径0.7cm、248は器高10.5cm、外径約5.05cm、内孔径0.7cmを復原する。

土錘（249～251）　249～251は上部が下部よりやや絞られた円柱状を呈する。上部は凹状を呈し、焼成前に穿たれた穿孔が中央部を貫通する。表面はナデの調整で、249は器高8.0cm、内孔径0.9cm、重さ320.0ｇ、250は器高9.3cm、内孔径0.9cm、重さ370.0ｇ、251は器高8.8cm、内孔径0.9cm、重さ372.0ｇを測る。

1SK117（Fig.35、Pla.35・36）

弥生土器

蓋（252）　口縁部は欠損する。つまみ部径は7.3cmで内面には煤が付着する。つまみ部はナデ、天井部外面はナデ後粗いミガキ、天井部内面はナデの調整である。

甕（253～258）　全て口縁部には三角突帯が施され、254は刻目突帯が口縁部とその下位に施されている。法量は、253は口径23.0cm、254は口径21.0cm、255は口径21.4cm、256は口径18.0cm、底径7.0cm、器高19.5cm、257は口径21.4cm、底径7.0cm、器高25.4cm、258は口径25.2cmを測る。257の底部には焼成後に内外面から穿たれた穿孔が施されている。

壺（259）　底部の細片で、底部は厚く平底を呈する。底径10.0cmを測り、内外面は粗いミガキの調整である。

1SK125（Fig.36、Pla.36）

石器

石鏃（260）　サヌカイト製で抉りの浅い二等辺三角形を呈する。完形で表裏面は二次加工整形を粗く施す。重さは3.0ｇを量る。

石錐（261）　ほぼ完形であるが錐部先端を僅かに欠損する。石材はサヌカイト製で、頭部の表裏面には剥片素材時の剥離面を大きく残す。錐部は細長く、打面を完全に除去している。重さは6.0ｇを量る。

1SK127（Fig.36、Pla.36）

弥生土器

甕（262～264）　262は口縁部の細片で如意状口縁に刻目が施される。口縁部下位には刻目三角突帯

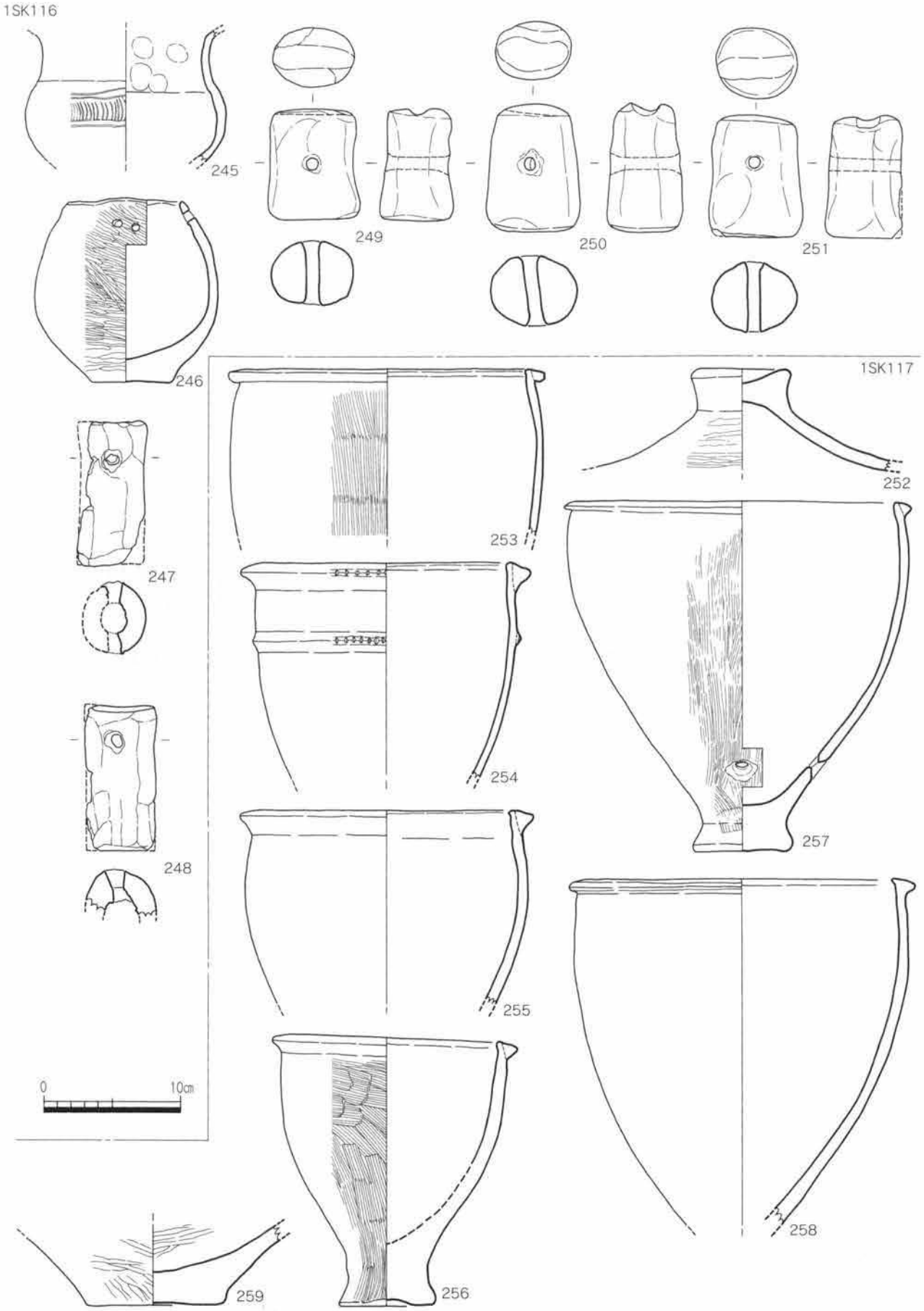


Fig.35　土坑（1SK116・117）出土遺物実測図（1/4）

が施され、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は工具ナデである。263は口径は30.4cmを復原し、口縁部とその下位に刻目三角突帯が施される。264は手捏ねの小型甕で底径2.4cmを復原する。

壺（265）　底部は円盤状の厚い平底を呈し、底径は8.2cmを測る。調整は磨耗のため不明である。

石器

石鏃（266）　石材はサヌカイト製で重さは1.6ｇを量る。下部が欠損し形状は不明である。表裏面は剥片素材時の剥離面を除去されている。

1SK128（Fig.36、Pla.37）

弥生土器

甕（267～269）　全て底部の破片で、267は底部に内孔径0.6cmを測る穿孔が施され、穿孔は焼成前に内外面から穿たれている。外面の一部に厚く煤が付着しており、底径は8.0cmを測る。268は底径12.8

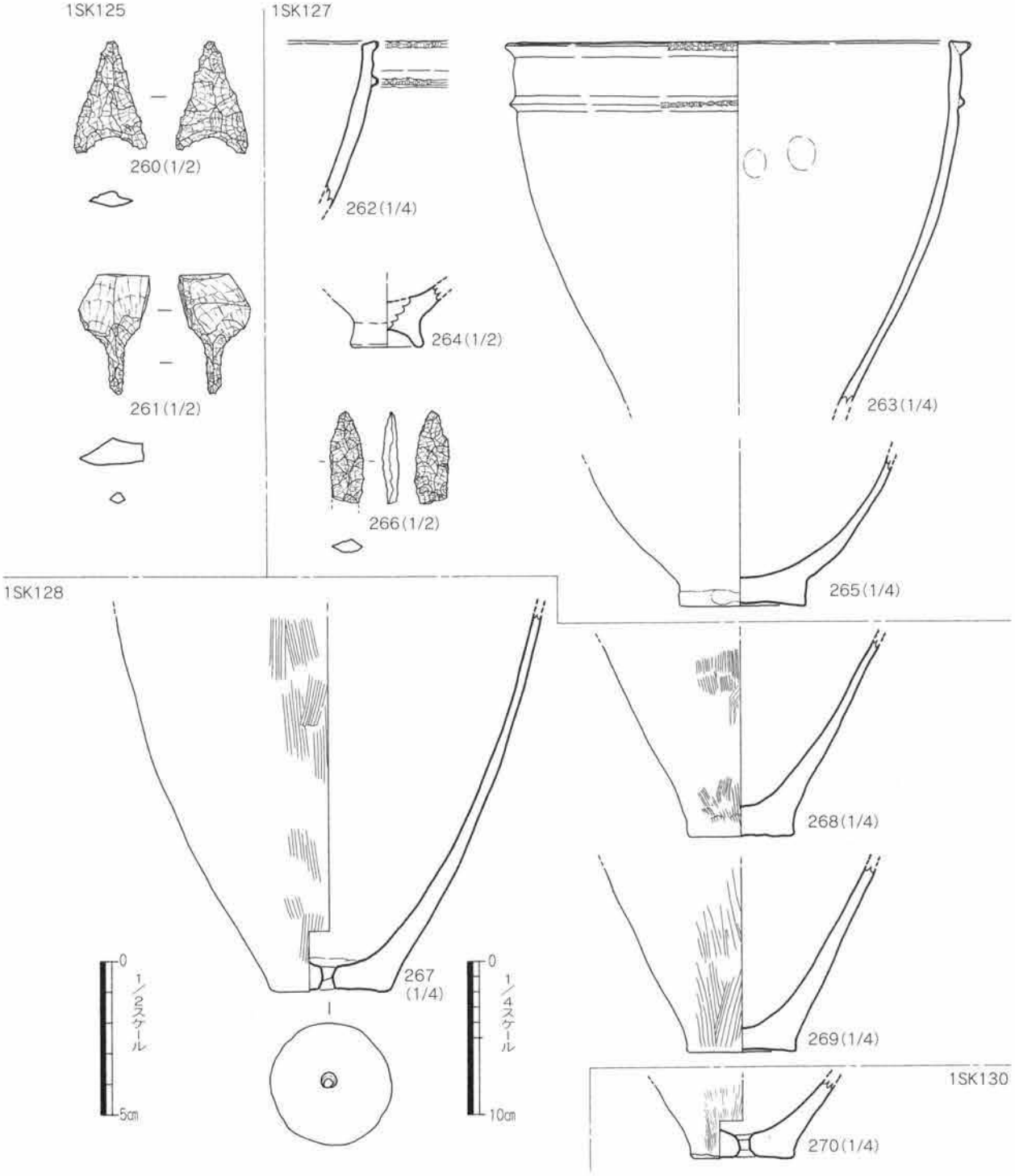


Fig.36　土坑（1SK125・127・128・130）出土遺物実測図（1/2・1/4）

cm、269は底径12.1cmを測る。

1SK130（Fig.36、Pla.37）

弥生土器

甕（270）　底部の細片で底部中央に焼成前に穿たれた穿孔が施される。底径は5.15cm、内孔径は0.6cmを測る。

1SK152（Fig.37、Pla.37）

石器

扁平片刃石斧（271）　泥岩製で表面の右側面部を僅かに欠損する。長さ3.4cm、幅1.5cm、厚さ1.65cm、重さ6.5gで全面が研磨されている。

1SK155（Fig.37、Pla.37）

弥生土器

甕（272～275）　272は如意状口縁に刻目を施した口縁部の細片である。口縁部下位には三角貼付突帯を施し、口径は18.0cmを復原する。273は口径24.5cmを測り、口縁部付近に煤が付着する。口縁部とその下位に刻目突帯を施すが、口縁端部は平坦面を呈する。274は大型甕の口縁部細片で端部の上下部に細かな刻目が施される。275は大型甕の底部細片で底径は10.4cmを測る。

壺（276・277）　276は大きく外反した口縁部を呈する。277は底径7.0cm、最大胴部径22.5cmを測り、胴部は偏球形を呈する。肩部にヘラ描きによる線刻文と重弧文を施す。調整は磨耗のため不明瞭であるが、肩部内面と体部外面に横方向のミガキが認められる。

石器

石鏃（278）　石材はサヌカイト製で抉りの浅い正三角形を呈する。表面左側にネガティヴ面、裏面にポジティヴ面を大きく残し、周縁は二次加工整形を施して刃部を作り出す。重さは0.9gを量る。

1SK158（Fig.37、Pla.37）

土製品

投弾（279）　長さ4.9cm、最大径2.7cmを測り、重さは29.8gである。

1SK159（Fig.37、Pla.37）

石器

石鏃（280）　石材はサヌカイト製で先端部と表面右側片脚部を欠損する。抉りは浅く二等辺三角形を呈し、重さは1.0gを量る。周縁には粗い二次加工整形を施す。

1SK160（Fig.37、Pla.37）

弥生土器

鉢（281）　口縁端部に三角突帯を貼り付ける。口径17.5cm、底径7.0cm、器高11.9cmを測り、底部はやや絞り込まれた上げ底を呈する。口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ、体部外面は強い工具ナデ、底部外面はナデである。

その他の出土遺物

撹乱・包含層（Fig.37、Pla.38）

石器

石鏃（282）　撹乱からの出土の完形品で石材はサヌカイト製である。抉りの深い二等辺三角形の石鏃である。表面左側にネガティヴ面を残し、表裏面には粗く二次加工整形を施して周縁の刃部を作り出している。重さは2.1gを量る。

石匙（283・284）　283は撹乱からの出土で石材はサヌカイト製である。表面にはネガティヴ面、裏面にはポジティヴ面を大きく残し、周縁には二次加工を施して刃部を作り出している。重さは21.7gを量る。284は包含層からの出土で石材はサヌカイト製である。表面の中央部と裏面左側部には自然面、裏面にはポジティヴ面を大きく残していることからファーストフレークを素材とした石匙であることがわかる。二次加工を施して刃部を作り出し、重さは23.9gを量る。

(4) 小結

当調査区からは円形の竪穴住居2軒をはじめ多くの貯蔵穴や廃棄土坑等が確認され、出土遺物から弥生時代前期後半～中期前半を中心とした集落跡であることがわかった。土器では如意形口縁の板付系土器または貼付三角突帯の亀ノ甲式土器系統の甕が主体であり、この他壺・蓋・器台・土錘等の資料も得られた。また土器以外では多量の石器も出土し、他種製品が製作されていたことが明らかになった。1ST112からは白磁（輪花皿）が副葬品として出土し、中世墓地の存在も確認された。

なお、遺跡の全体像については周辺遺跡とあわせて後章において記述する。

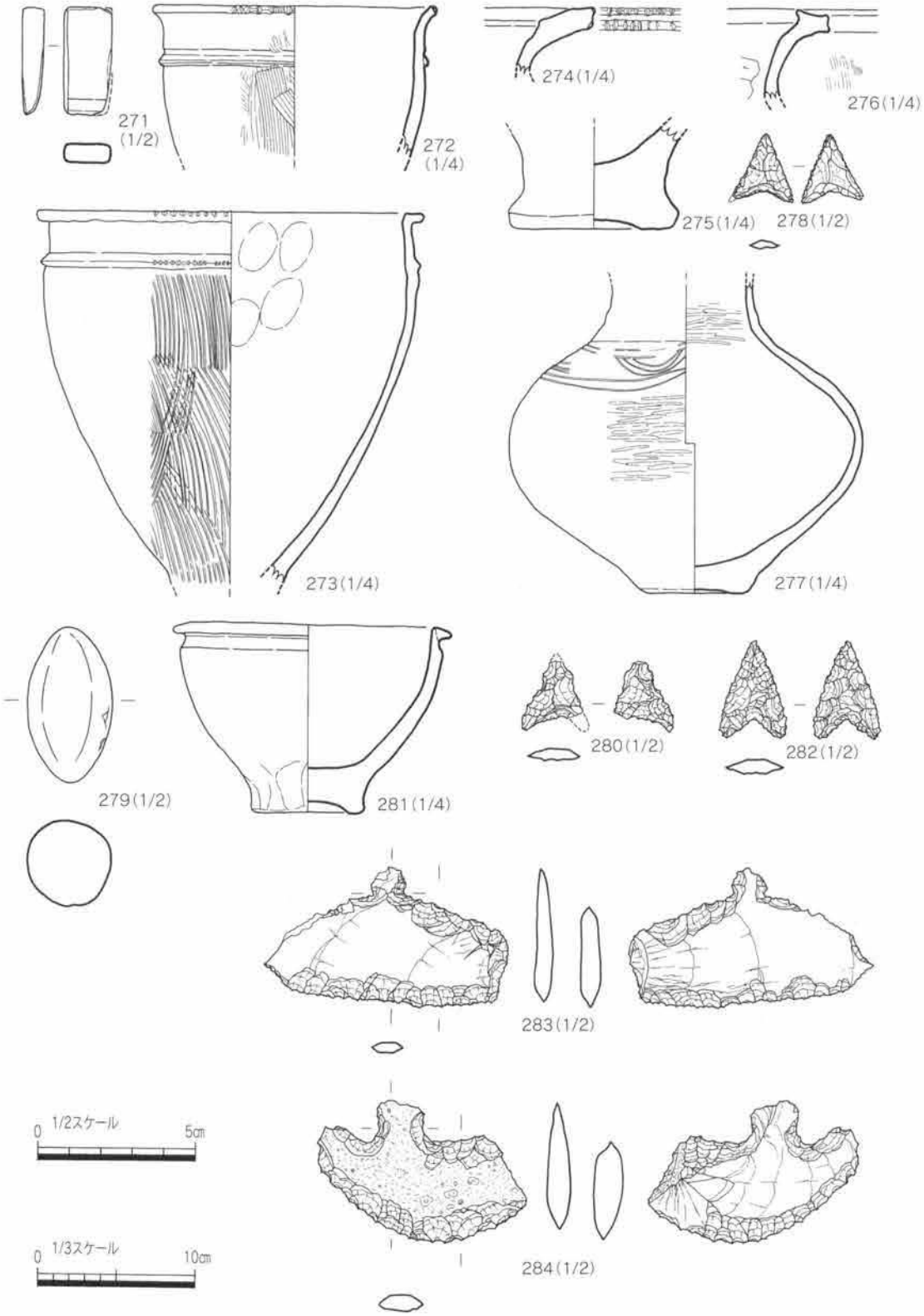


Fig.37 土坑（1SK152・155・158～160）、撹乱、包含層出土遺物実測図（1/2・1/4）

S－番号	遺構番号	地区番号	遺構切り合い（古→新）	備　考
1	1SK 001	Z19		
2	1SK 002	Y17		
3	1SK 003	W15	56→3→10	
4	1SK 004	Y19		
5	1SK 005	P19		
6	1SK 006	Q16		
7	1SP 007	Q16		
8	1SP 008	X11		
9	1SK 009	AA11		
10	1SD 010	W10	3・20・120→10	
11	1SK 011	Y14	11→30	
12	1SK 012	V19		
13	1SK 013	W17		
14	1SK 014	W15	16→14	
15	1SK 015	Y16		
16	1SK 016	V14	16→14	
17	1SK 017	U10		
18	1SK 018	P18		
19	1SK 019	R17		
20	1SD 020	V19	58→20	
21	1SK 021	O16		
22	1SK 022	M17		
23	1SK 023	J16		
24	1SK 024	K14		
25	1SK 025	W19		
26	1SK 026	M13		
27	1SK 027	N13		
28	1SK 028	M11		
29	1SK 029	M8		
30	1SD 030	Z14		
31	1SK 031	O5		
32	1SK 032	O4	33・34→32	
33	1SK 033	O4	33→32	
34	1SK 034	O4	34→32	
35	1SK 035	T19		
36	1SK 036	L3		
37	1SK 037	J6		
38	1SK 038	L6		
39	1SK 039	L5	49→39	
40	1SI 040	Y10	40→90・127・158・80	
41	1SK 041	O2	62→41	
42	1SK 042	O15		
43	1SK 043	K6		
44	1SK 044	J8		
45	1SK 045	R19		
46	1SK 046	N5		
47	1SK 047	V17		
48	1SK 048	AA12		
49	1SP 049	L5	49→39	
50	1SI 050	T15		
51	撹乱	N2		
52	撹乱	N2		
53	1SK 053	V10	53→125	
54	1SK 054	V11	54→130	
55	1SK 055	Q19		
56	1SK 056	X15	56→3	
57	1SK 057	W20		
58	1SP 058	T19	58→20	
59	1SK 059	U14		
60	1SK 060	Y13		
61	撹乱	O2		
62	1SK 062	O2	62→41	
63	撹乱	O2		
64	撹乱	O1		

S－番号	遺構番号	地区番号	遺構切り合い（古→新）	備　考
65	1SK 065	Q17		
66	1SK 066	O1		
67	1SK 067	N1		
68	1SK 068	N1		
69	撹乱	N2		
70	1SK 070	Z12	70→30	
71	1SP 071	O1		
72	1SP 072	O1	179→72	
73	1SK 073	M2		
74	1SK 074	N1	81→74	
75	1SK 075	R17	19→75	
76	1SP 076	N1	77・81→76	
77	1SX 077	N1	77→76・81	
78	撹乱	M1		
79	1SP 079	M1		
80	1SK 080	X11	40→80	
81	1SX 081	N1	77→81→74・76	
82	1SP 082	L3		
83	1SP 083	L2	86→83	
84	1SP 084	K2	86→84	
85	1SK 085	R17		
86	1SK 086	K2	86→83・84	
87	1SP 087	J5		
88	1SK 088	K5		
89	1SP 089	H8		
90	1SK 090	X10	40→90	
91	1SP 091	F5		
92	1SK 092	F5		
93	1SK 093	E6		
94	1SK 094	C3		
95	1SK 095	S16		
96	1SD 096	O22	113→96	
97	撹乱	O1		
98	1SK 098	Z21		
99	1SK 099	Y22		
100	1SD 100	W26		
101	1SK 101	X22		
102	1SK 102	U22		
103	1SK 103	U25		
104	1SK 104	S27		
105	1SK 105	Z14		
106	1SK 106	V27		
107	1SK 107	V27		
108	1SK 108	V28		
109	1SK 109	V28		
110	1SK 110	Y15	110→30	
111	1SK 111	V29		
112	1ST 112	O1		
113	1SX 113	O21	113→96	
114	1SP 114	O20		
115	1SK 115	X14		
116	1SK 116	N21		
117	1SK 117	M20		
118	1SK 118	L21		
119	1SD 119			
120	1SK 120	W11	10→120	
121	1SD 121			
122	1SP 122			
123	1SD 123			
124	撹乱	Q21		
125	1SK 125	V10	53→125	
126	1SX 126	K1		
127	1SK 127	Z10	40・128→127	
128	1SK 128	Z10	128→127	

S－番号	遺構番号	地区番号	遺構切り合い（古→新）	備　考
129	1SP 129	Q17		
130	1SK 130	V10	54→130	
131	1SP 131	Q18		
132	1SK 132	S17		
133	1SP 133	R16		
134	1SK 134	S17		
135	1SK 135	V13		
136	1SP 136	R18		
137	1SP 137	R18		
138	1SP 138	S16		
139	1SP 139	T16		
140	1SK 140	V14		
141	1SP 141	T16		
142	1SP 142	T16		
143	1SP 143	T16		
144	1SP 144	T16		
145	1SK 145	V15		
146	1SP 146	U16		
147	1SP 147	T16		
148	1SP 148	T15		
149	1SP 149	T16		
150	1SK 150	V15	155→150	
151	1SP 151	T16		
152	1SX 152	T16		1SI050のか跡
153	1SP 153	V18		
154	1SP 154	X19		
155	1SK 155	V15	160→155→150	
156	1SP 156	X19		
157	1SK 157	X11		
158	1SK 158	Y11	40→158	
159	1SX 159	Y11		1SI040のか跡
160	1SK 160	W15	160→155	
161	1SP 161	Y10		
162	1SP 162	Z11		
163	1SP 163	Z11		
164	1SP 164	Z10		
166	1SP 166	Y10		
167	1SP 167	Y10		
168	1SP 168	Z13	30→168	
169	1SP 169	B11		
171	1SP 171	▲D0		
172	1SP 172	▲D0		
173	1SP 173	▲F4		
174	1SD 174			
176	1SK 176	▲K3		
177	1SK 177	▲J4		
178	1SP 178	C10		
179	1SP 179	O1	179→72	
181	1SP 181	N1		
182	1SP 182	M1		
183	1SP 183	M2		
184	1SP 184	L1		
186	1SP 186	L1		

Tab.1　常用日田行遺跡（第1次調査）遺構番号台帳

Fig.38　常用日田行遺跡第1次調査遺構略測図（1/300）

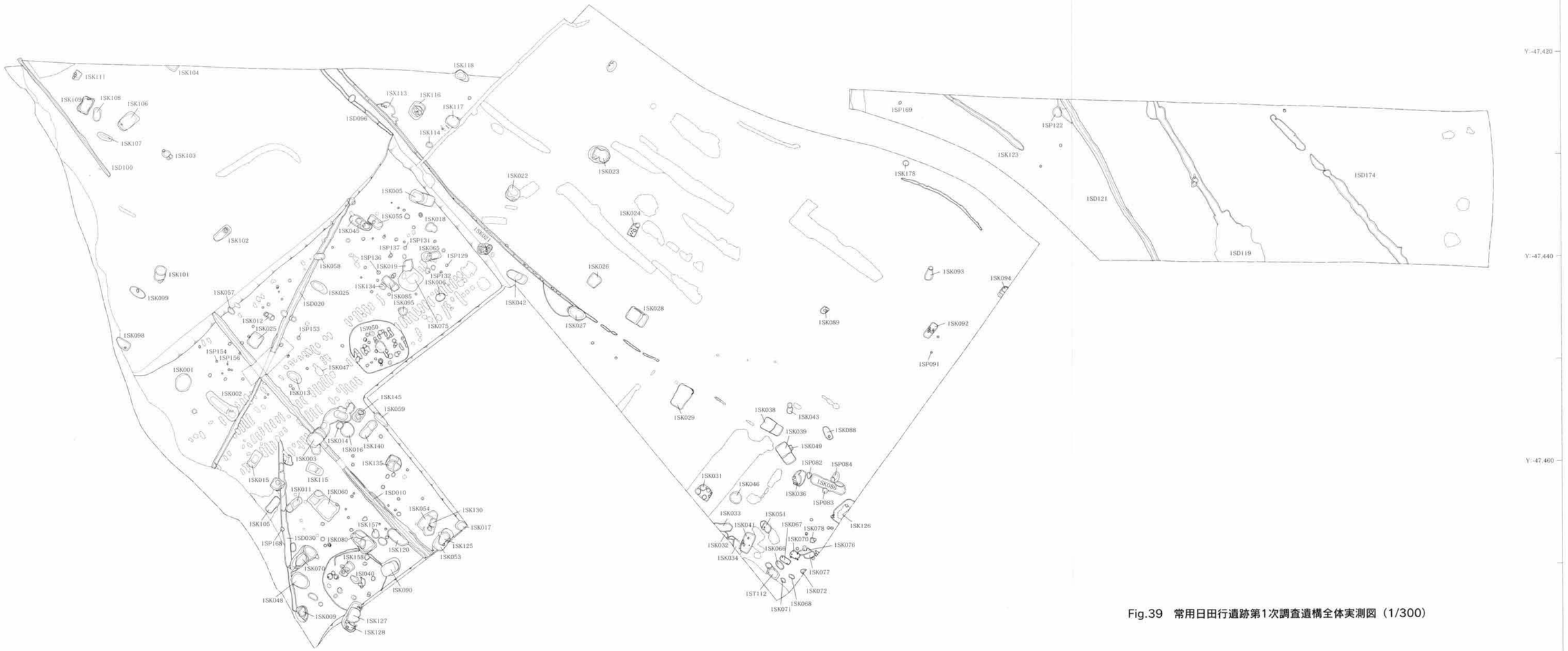


Fig.39　常用日田行遺跡第1次調査遺構全体実測図（1/300）

2.常用日田行遺跡（第2次調査）

(1) はじめに (Fig.40)

当遺跡は筑後市大字常用字日田行730外に所在し、標高7～8m位の低位段丘上にある。県営担い手育成基盤整備事業に伴う筑後西部第2地区の工事によって、埋蔵文化財が破壊を受ける部分について発掘調査を実施した。今回は、新設の道路・排水路の設置予定箇所及び面工事によって削平される部分を調査対象範囲として調査区を設置した。なお、調査当時は周辺で行われていた発掘調査を含めて「常用遺跡群」として実施していたため当遺跡は「E区」と称し、遺構仮番号はS—1001～S—1199を使用した。

調査面積は約2,990㎡で調査は平成8年12月から平成9年2月までの間実施した。この間、考古学手法ににによって表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構検出、掘削、実測、写真撮影等の作業を行った。調査は田中剛が担当し、大塚恵治（現：八女市教委）、柴田剛（現：伊万里市教委）、野田洋子の協力を得た。調査の結果、溝・土坑・ピット等の遺構が確認され、弥生土器・土師器・陶磁器・石器・鉄製品等の遺物が出土した。

以下は調査区内で確認された主要な遺構や遺物について概述する。

Fig.40　常用日田行遺跡第2次調査地点位置図（1/2,500）

(2) 検出遺構

溝

2SD1001 (Fig.41)

A38地区とP46地区で検出した北西—南東方向の溝である。まず、東側のA38地区で検出した溝は約14.0m分を確認し、幅は約0.70m、残高約0.35mを測る。溝底はほぼフラットな状態で埋土は黒灰色土であった。一方、西側のP46地区では約4.5m分を確認し、幅約1.70m、残高約0.25mを測る。溝底からは埋土の異なった別の溝が確認されており、当溝までの残高は約0.42mを測る。上層にあたる溝は掘り直しによる溝であることが考えられる。下層で確認した溝の規模と埋土からは東側のP46地区で確認した溝と類似しているため同一溝とした。遺物は弥生土器（甕・壺・高坏・片）、石器（黒曜石片・サヌカイト片）が出土した。

2SD1022

X16地区付近に位置する南北溝で2SD023を切るように確認された。溝の西半部以上は惜しくも調査区外へ展開していたため規模は把握できていない。溝の東岸は緩やかに西方へ落ち込んでおり、溝底は

安定した面と凹凸面が認められた。残高は約0.60mを測り、遺物は弥生土器（片）、土師器（片）、染付（片）が出土した。

2SD1023（Fig.41）

V16地区に位置し、2SD1022に切られるように確認された。2SD1032に続く溝と考えられ、土層ではレンズ状の堆積土を呈し、砂層の発達がみられないことから流水は伴っていなかった可能性が考えられる。遺物は弥生土器（甕・片）、須恵器（鉢）、土師器（小皿・片）が出土した。

2SD1028・1030（Fig.41、Pla.41）

2SD1028はAJ4地区付近に位置する東西溝である。検出時において東側は2SD1030を切るように確認していたが、現時点では2SD1022・1028・1030はその配置状況などから一連の同一溝である可能性が考えられる。2SD1028の上層は黄茶色土（灰色土混じり）、下層は黒色土＋灰色土＋茶色土であり、2SD1030の上層は灰茶色土、下層は灰色土の堆積土であった。2SD1028からの出土遺物は弥生土器（片）、須恵器（片）、土師器（坏）、染付（片）、陶器（片）、2SD1030からの出土遺物は弥生土器（甕・片）、須恵器（片）、土師器（坏）、染付（片）、陶器（片）、石器（石鏃・サヌカイト片）である。

2SD1031（Fig.41）

B14地区から西側に展開した東西溝で、長さ31.5m分を検出した。東側が若干湾曲しており幅0.50～0.75m、残高約0.35mを測り、東端部はY字状に分岐する。黒茶色土を基調とした埋土で、遺物は弥生土器（甕・片）、須恵器（片）、土師器（片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

2SD1032・1041（Fig.41）

2SD1032はB16地区から西側へ展開した東西溝で、長さ33.5m分を検出した。幅は0.75～1.40m、残高は0.38～0.65mを測り、溝底のレベルは概ね東高西低である。溝の断面形は逆三角形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とする埋土であった。なお、2SD1032は途中南北溝の2SD1041と合流するが当溝とは切り合っていなかった。調査の便宜上東西溝をS—1032、南北溝をS—1041と仮番号を与えて土器収集等を行った。一方の2SD1041はK17地区から北側へ展開した南北溝で、途中は2SD1060を切るように確認した。長さ18.5m分を検出し、幅は0.55～1.15m、残高は約0.25mを測る。溝底は多少凹凸はあるもののほぼ安定しており、南北のレベル差はほぼ変わらない。溝の断面形は逆台形状を呈し、黒茶色土を基調とする埋土であった。遺物は2SD1032で弥生土器（甕・片）、須恵器（甕）、土師器（皿・

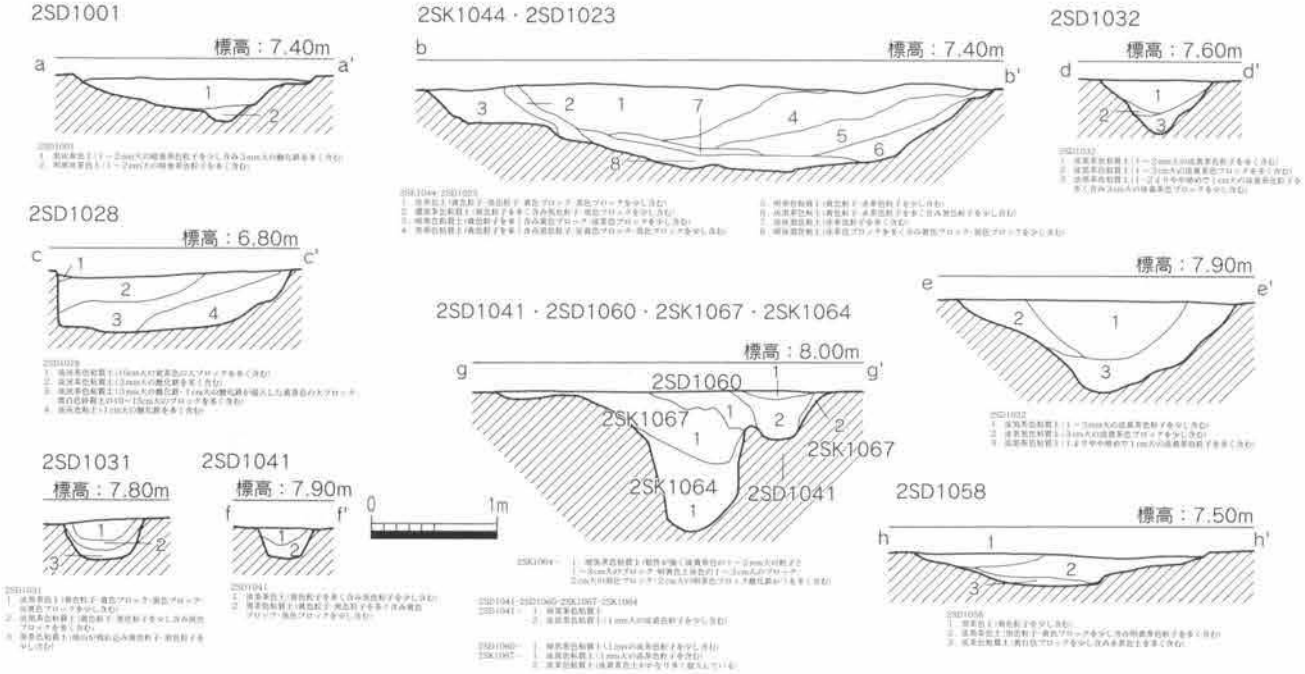


Fig.41　溝（2SD1001・1023・1028・1031・1032・1058・1060・1064・1067）土層断面実測図（1/60）

土鍋）、陶磁器（青磁片・白磁片）、石製品（石鍋片）を認め、2SD1041では弥生土器（甕・片）、須恵器（鉢）、陶磁器（鉢）、石器（凹石）、鉄製品（片）が認められた。なお、当溝の西側延長部は配置状況から2SD1023であることが考えられる。

2SD1058（Fig.41）

B29地区から北西へ展開する溝で2SK1057を切るように検出した。長さは約17m分を確認し、溝の南東部は幅広で北西部へ向かって縮小する。溝底は凹凸が著しく安定しておらず、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（石槍・紡錘車）が出土した。

2SD1060（Fig.41）

L18地区から北部へ展開する南西―北東方向の溝である。当溝における遺構の先後関係（古→新）は（2SK1062～1064・1067・1068）→（2SD1060）→（2SE1035・2SK1036・2SD1041）である。多くの遺構が切り合っていたため規模は不明瞭な点が多いが、概ね長さは約16.5m、幅は約0.95m、残高は約0.15mを測る。埋土は暗黒茶色粘質土（淡茶色粒子を少し含む）の単一層で、遺物は弥生土器（甕・鉢・高坏）、石器（砥石・サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

2SD1107

B38地区に位置した東西溝で途中2SD1001に分断される。長さ約12m分を検出し、幅0.45～0.95m、残高約0.25mを測り、溝底はやや凹凸が認められる。遺物は弥生土器（片）が僅かに出土した。

2SD1123

Q44地区に位置した東西溝で、長さ4.35m分を検出し、幅約0.35m、残高約0.12mを測る。溝底はほぼフラットで東西のレベル差は殆どない。遺物は皆無であった。

2SD1135

B40地区から南西へ延びる溝で途中は2SD1001に分断される。長さ6.0m分を検出し、幅約1.20m、残高約0.10mを測る。極めて残存状況は悪く、溝底においても著しく凹凸が認められた。出土遺物はない。

2SD1140

B45地区から西側へ展開した東西溝である。長さ4.45m分を検出し、幅0.55～1.05mを測る。溝底には6坑の連続したピットが確認されており、性格としては道路状遺構の可能性も考えられる。出土遺物は皆無であった。

井戸

2SE1035（Fig.42、Pla.41）

K20地区に位置した楕円形状の井戸で遺構の東部は2SD1060を切る。安全上約1.4mを掘り下げたが底部は認められなかった。土層では下位層に従って粘性が強くなっており、少量の炭化物も認められた。第3・4層に遺物混入が集中しており、弥生土器（甕・壺・鉢・投弾）、石器（紡錘車）が認められた。このことから井戸としての機能が失われた後に廃棄土坑として使用された可能性も考えられる。

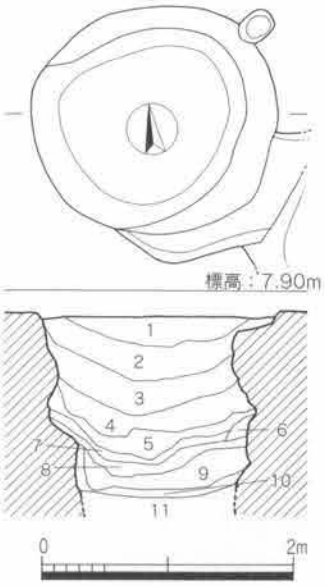


Fig.42　井戸（2SE1035）実測図（1/60）

土坑

2SK1002（Fig.43、Pla.42）

P19地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、底面はほぼフラットな状態を示す。壁面は直上し、規模は長軸1.85m、短軸1.08m、残高は約0.46mを測り、主軸はN―46°10′09″―Wを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・片）が出土した。

2SK1003（Fig.43、Pla.42）

L17地区に位置する。平面プランはほぼ隅丸長方形状を呈し、南部は2SD1032に切られる。遺構内にはテラスが認められ、中央部に向かっ

て掘り込まれている。規模は長軸3.00m、短軸1.65m、残高は約0.70mを測り、主軸はN—32°37′09″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・片）、土師器（片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

2SK1004（Fig.43、Pla.43）

W12地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。残存状況は極めて悪く、底面はほぼフラットで壁面は直上する。規模は長軸1.60m、短軸1.15m、残高は約0.23mを測り、主軸はN—9°43′39″—Wを示す。遺物は弥生土器（甕・土錘・片）、石器（軽石・サヌカイト片）が出土した。

2SK1005（Fig.43、Pla.43）

W15地区に位置し、平面プランは不整楕円形状を呈する。遺構内の東部と西部ではテラスを認め、中央部は更に深くなる。規模は長軸1.80m、短軸0.85m、残高は約0.25mを測り、主軸はN—40°54′52″—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・鉢・片）が出土した。

2SK1006（Fig.43、Pla.44）

C17地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。規模は長軸1.95m、短軸0.66m、残高は約0.40mを測り、主軸はN—36°15′14″—Eを示す。壁面は直上し、底面はほぼフラットであるが土層断面観察では長辺両端部底面が若干窪んでおり、土壙墓にみられる小口板の痕跡とも考えられることからその可能性も捨てきれない。遺物は弥生土器（甕・鉢・片）、石器（凹石・サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

2SK1007（Fig.43、Pla.45）

A18地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面は中央部がやや窪んだ状態で壁面はほぼ直上する。規模は長軸1.63m、短軸0.69m、残高は約0.51mを測り、主軸はN—41°59′14″—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・高坏・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

2SK1008（Fig.43、Pla.45）

E19地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状ないしは楕円形状を呈する。底面は中央部が窪み、壁面は緩やかに立ち上がる。規模は長軸1.93m、短軸0.91m、残高は約0.41mを測り、主軸はN—29°44′42″—Wを示す。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

2SK1009（Fig.43、Pla.46）

E17地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。東側にテラスを認め、底面はほぼフラットである。規模は長軸1.57m、短軸0.71m、残高は約0.42mを測り、主軸はN—45°—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

2SK1010（Fig.43、Pla.46）

D15地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面はフラットで壁面は直上する。規模は長軸1.39m、短軸0.81m、残高は約0.50mを測り、主軸はN—64°32′12″—Wを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は僅かに弥生土器（片）が出土した。

2SK1011（Fig.43、Pla.47）

J12地区に位置し、平面プランは縦長の楕円形状を呈する。底面はフラットであるが一部の壁面は抉れて袋状を呈する。規模は長軸1.72m、短軸0.85m、残高は約0.48mを測り、主軸はN—54°27′44″—Eを示す。埋土は黒茶色土を基調とした3層に分層されたが各層からは散在的に炭化物が認められた。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（石庖丁・黒曜石片）が出土した。

2SK1012（Fig.43、Pla.47）

H12地区に位置し、平面プランは縦長の不整楕円形状を呈する。遺構内の南西部では浅いテラスを認めたが、更に北東半部の遺構底面に近いレベルからもテラスを確認した。北西部と南東部の壁面はピット状にオーバーハングした状態を示し、底面中央部にはその両ピットに挟まれた状態で別のピットが検出された。規模は長軸2.76m、短軸1.53m、残高は約1.14mを測り、主軸はN—46°50′05″—Eを示す。遺構の規模や状態から貯蔵穴として使用された可能性が考えられる。遺物は弥生土器（蓋・甕・壺・片）、石器（紡錘車・サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

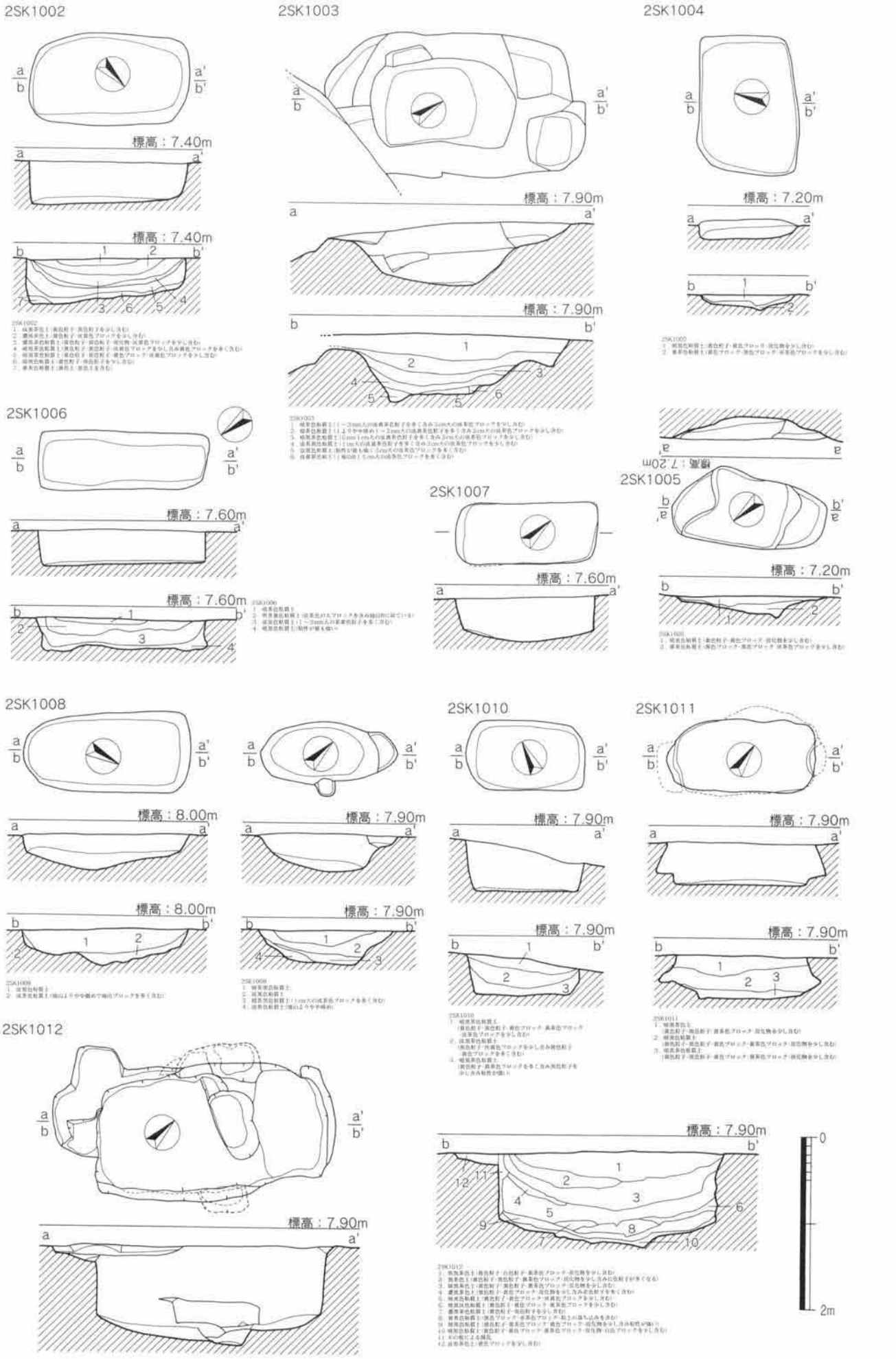


Fig.43　土坑（2SK1002～1012）実測図（1/60）

2SK1013（Fig.44）

J18地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。規模は長軸0.97m、短軸0.68m、残高は約0.22mを測り、主軸はN—46°23′50″—Eを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・片）が僅かに出土した。

2SK1014（Fig.44、Pla.48）

L19地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。底面はフラットで壁面はほぼ直上に立ち上がる。規模は長軸1.51m、短軸0.89m、残高は約0.37mを測り、主軸はN—51°20′25″—Wを示す。埋土は淡黒茶色土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

2SK1015（Fig.44、Pla.48）

C17地区に位置した不整円形状の土坑で、底面はフラットで壁面はほぼ直上する。規模は径1.26～1.37m、残高は約1.14mを測る。埋土は粘性が強く13層に分層されたが炭化物は認められていない。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、石器（石鏃・サヌカイト片）が出土した。

2SK1016（Fig.44）

L12地区に位置した方形状の土坑である。底面中央付近に小ピット3穴を認め、規模は長軸0.87m、短軸0.77m、残高は約0.40mを測り、主軸はN—38°39′35″—Wを示す。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は皆無であった。

2SK1017（Fig.44）

K13地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。底面はほぼフラットで、規模は径0.76～0.86m、残高は約0.53mを測る。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（黒曜石片）が出土した。

2SK1018（Fig.44）

E15地区に位置し、平面プランは不整楕円形状を呈する。極めて残存状況は悪く、規模は長軸1.66m、短軸0.62m、残高は約0.06mを測り、主軸はN—34°12′57″—Eを示す。出土遺物はない。

2SK1019（Fig.44、Pla.49）

J9地区に位置した不整円形状の土坑で、底面はほぼフラットで壁面は直上する。規模は径1.73～1.90m、残高は約0.91mを測り、埋土は下層にしたがって粘性が強くなり、遺物は弥生土器（鉢・甕・片）、土製品（紡錘車）、石器（砥石・黒曜石片）が出土した。

2SK1021（Fig.44、Pla.49）

J9地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。北東部に浅いテラスを認め、規模は長軸1.50m、短軸0.87m、残高は約0.48mを測る。主軸はN—46°50′51″—Eを示し、弥生土器（甕・片）が僅かに出土した。

2SK1024（Fig.44、Pla.50）

F11地区に位置する。平面プランは不整楕円形状を呈し、遺構の南東部は2SK1025を切る。南東部にテラスを認め、底部はほぼフラットな状態を示す。規模は長軸2.29m、短軸1.65m、残高は約0.63mを測り、主軸はN—56°18′36″—Wを示す。遺物は弥生土器（鉢・甕・片）、土製品（土錘）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

2SK1026（Fig.44、Pla.50）

G12地区に位置し、平面プランは縦長の楕円形状を呈する。遺構内は南部から北部にかけて段差を生じながら落ち込み、規模は長軸2.28m、短軸0.90m、残高は約0.63mを測る。主軸はN—2°00′09″—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・片）が出土した。

2SK1033（Fig.45、Pla.51）

K10地区に位置する。平面プランは不整楕円形状を呈し、遺構の先後関係（古→新）は2SD1031→2SK1033→2SP1079である。底部は緩やかに中央部が窪んでおり、底面からは廃棄された遺物が認められた。規模は長軸2.26m、短軸1.48m、残高は約0.73mを測り、主軸はN—44°01′44″—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、土製品（土錘）、石器（サヌカイト片）が出土した。

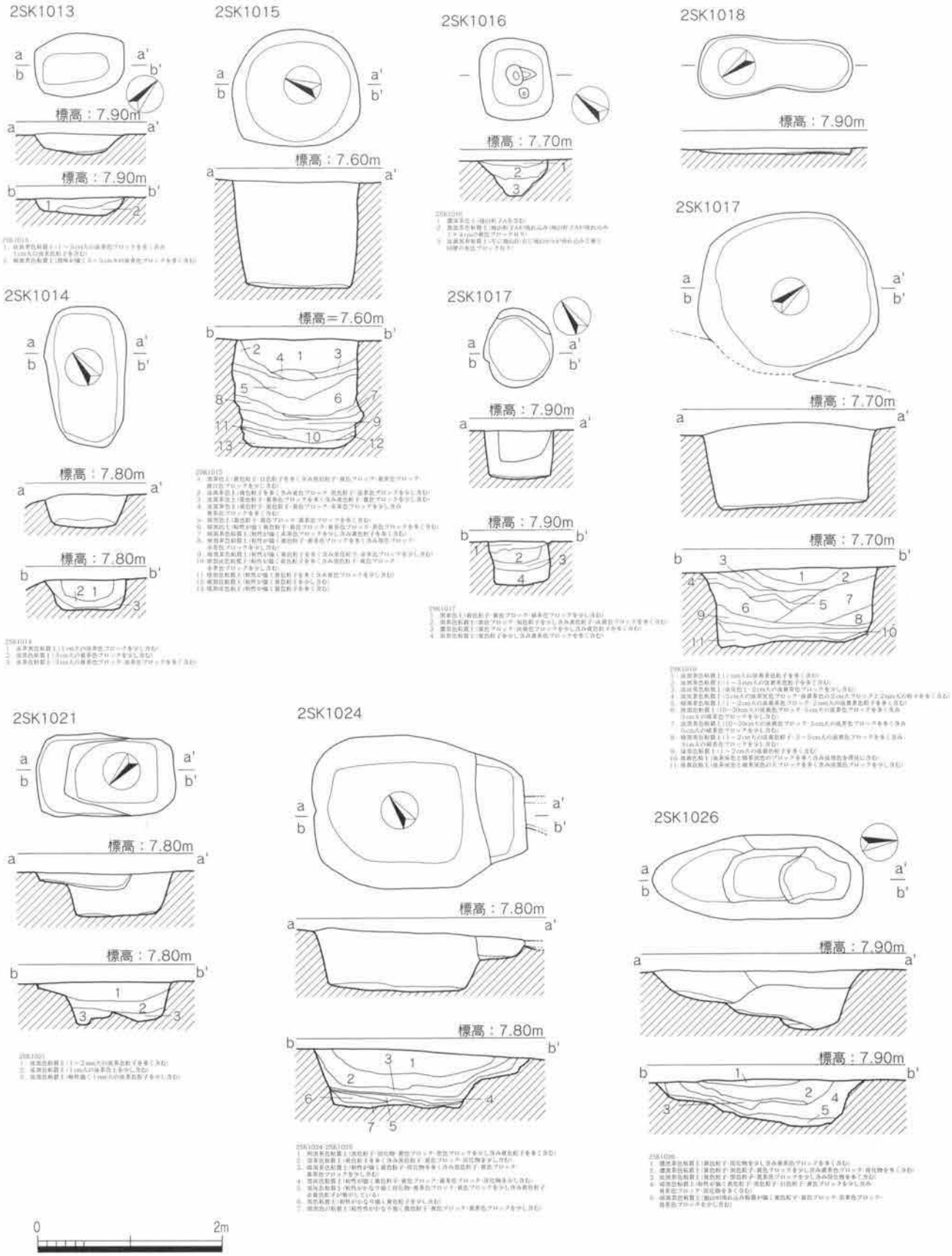


Fig.44　土坑（2SK1013～1019・1021・1024・1026）実測図（1/60）

2SK1038（Fig.45、Pla.51）

J18地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、遺構の先後関係（古→新）は2SK1038→2SD1041である。遺構内の東部ではテラスを認め、底面に近いレベルの第5・6層からは廃棄された遺物が集中して認められた。規模は長軸2.60m、短軸1.33m、残高は約0.72mを測り、主軸はN—56°53′19″—Wを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、石器（石鏃・サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

2SK1039（Fig.45、Pla.52）

H20地区に位置する。平面プランは縦長の楕円形状を呈し、遺構の先後関係（古→新）は2SK1059→2SK1039である。底面はほぼフラットであるが、底面北西部から1穴の小ピットが認められた。規模は長軸3.10m、短軸1.42m、残高は約1.00mを測り、主軸はN—44°01′44″—Wを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、土製品（土錘）、石器（サヌカイト片）が出土した。

2SK1045（Fig.45、Pla.52）

F17地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、検出面は攪乱を受ける。底部はほぼフラットで壁面は緩やかに立ち上がる。規模は長軸1.55m、短軸0.81m、残高は約0.31mを測り、主軸はN—62°14′29″—Wを示す。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

2SK1046（Fig.45、Pla.53）

F21地区に位置する。平面プランは隅丸方形状を呈し、途中を2SK1043に切られる。底部はフラットで壁面は直上する。規模は長軸1.65m、短軸1.19m、残高は約0.99mを測り、主軸はN—36°36′25″—Eを示す。遺物は弥生土器（鉢・甕・片）、石器（黒曜石片）が出土した。

2SK1047（Fig.45、Pla.53）

E24地区に位置し、平面プランは不整円形状を呈する。底部はやや北部が下がり壁面はほぼ直上する。規模は径1.00m、残高は約0.45mを測り、遺物は各層から散在的に認められた。遺物は弥生土器（甕）が出土した。

2SK1048（Fig.45）

E26地区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、遺構内の北東部にテラスを認める。南西部は更に一段深くなっており、長軸2.23m、短軸0.96m、残高は約0.63mを測る。主軸はN—30°57′50″—Eを示し、遺物は弥生土器（甕）、石器（凹石・石匙）が出土した。

2SK1049（Fig.45）

I15地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面はほぼフラットで中央部がやや窪んだ状態を示す。規模は長軸1.69m、短軸0.93m、残高は約0.65mを測り、主軸はN—43°01′30″—Wを示す。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（石庖丁・黒曜石片）が出土した。

2SK1050（Fig.46、Pla.54）

F14地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。遺構の先後関係（古→新）は2SK1052・1053→2SK1050である。底面はほぼフラットであるが壁面は袋状を呈する。規模は長軸2.50m、短軸1.08m、残高は約1.15mを測り、主軸はN—42°46′08″—Eを示す。埋土は黒茶色土を基調とし、若干の炭化物も認められた。遺物は弥生土器（蓋・甕・片）が出土し、二次焼成を受けた河原石も認められた。

2SK1051（Fig.46、Pla.54）

K11地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。遺構内の南西部と北東部ではテラスを認め、中央部は更に一段深くなる。規模は長軸2.53m、短軸1.35m、残高は約0.65mを測り、主軸はN—34°59′31″—Eを示す。埋土は黒茶色土を基調とし、一部で若干の炭化物も認められた。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（紡錘車・サヌカイト片）が出土した。

2SK1052（Fig.46）

F15地区に位置する。南半部を2SK1050に切られ、底部は中央部に向かって落ち込む。残高は約0.66mを測り、埋土は黒茶色土を基調とする。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（黒曜石片）が出土した。

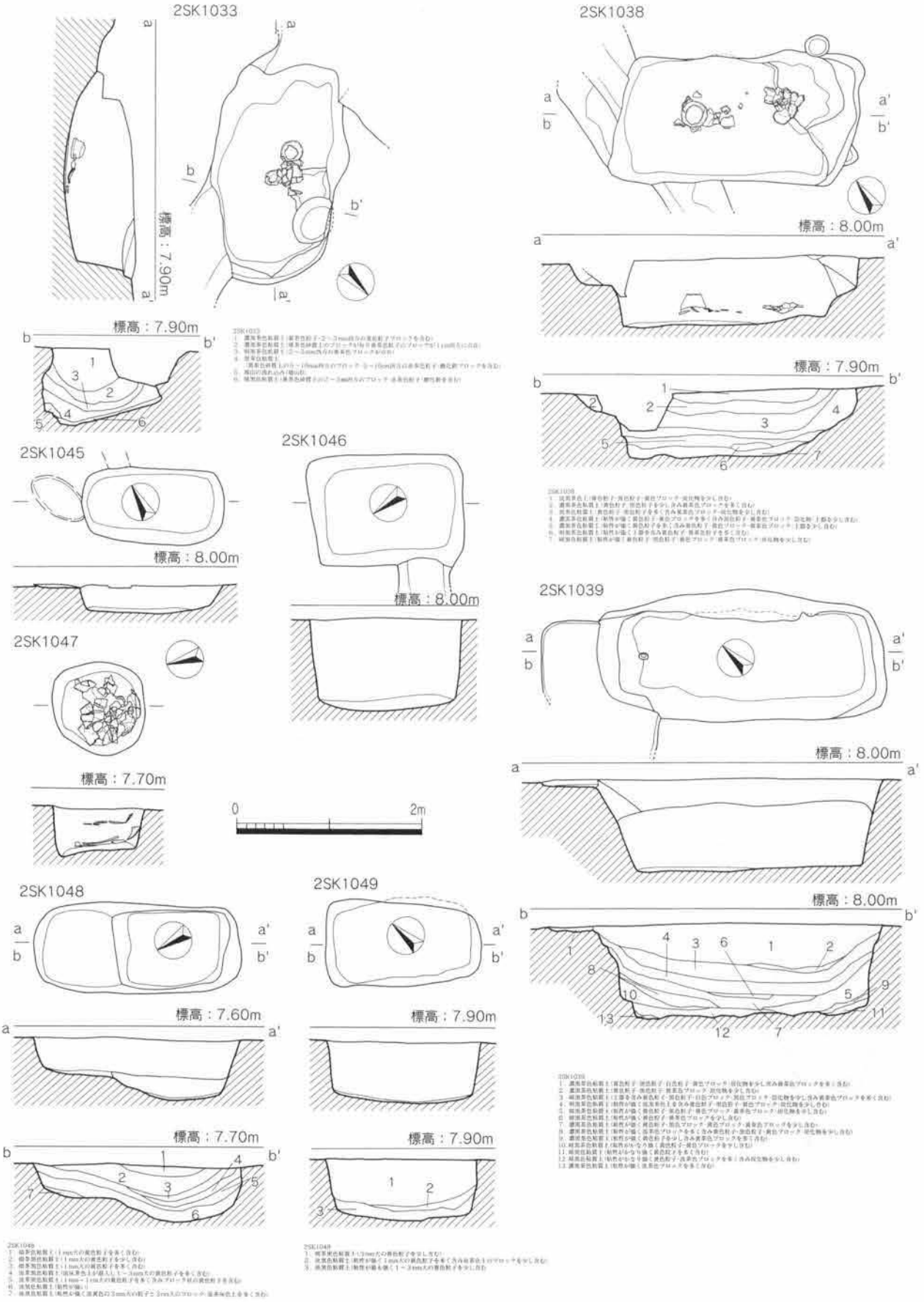


Fig.45　土坑（2SK1033・1038・1039・1045～1049）実測図（1/60）

2SK1053（Fig.46、Pla.55）

F14地区に位置し、遺構の先後関係（古→新）は2SK1053→2SK1050・1077である。規模は明らかでないが残存した遺構の長軸は1.95m、短軸1.44m、残高は約0.82mを測る。主軸はN—43°49′51″—Wを示し、埋土は黒茶色土を基調とする。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

2SK1065（Fig.46、Pla.55）

C25地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。遺構内の南西部にテラスを認め、長軸1.30m、短軸0.85m、残高は約0.28mを測る。主軸はN—52°25′53″—Wを示し、遺物は僅かに弥生土器（片）が出土した。

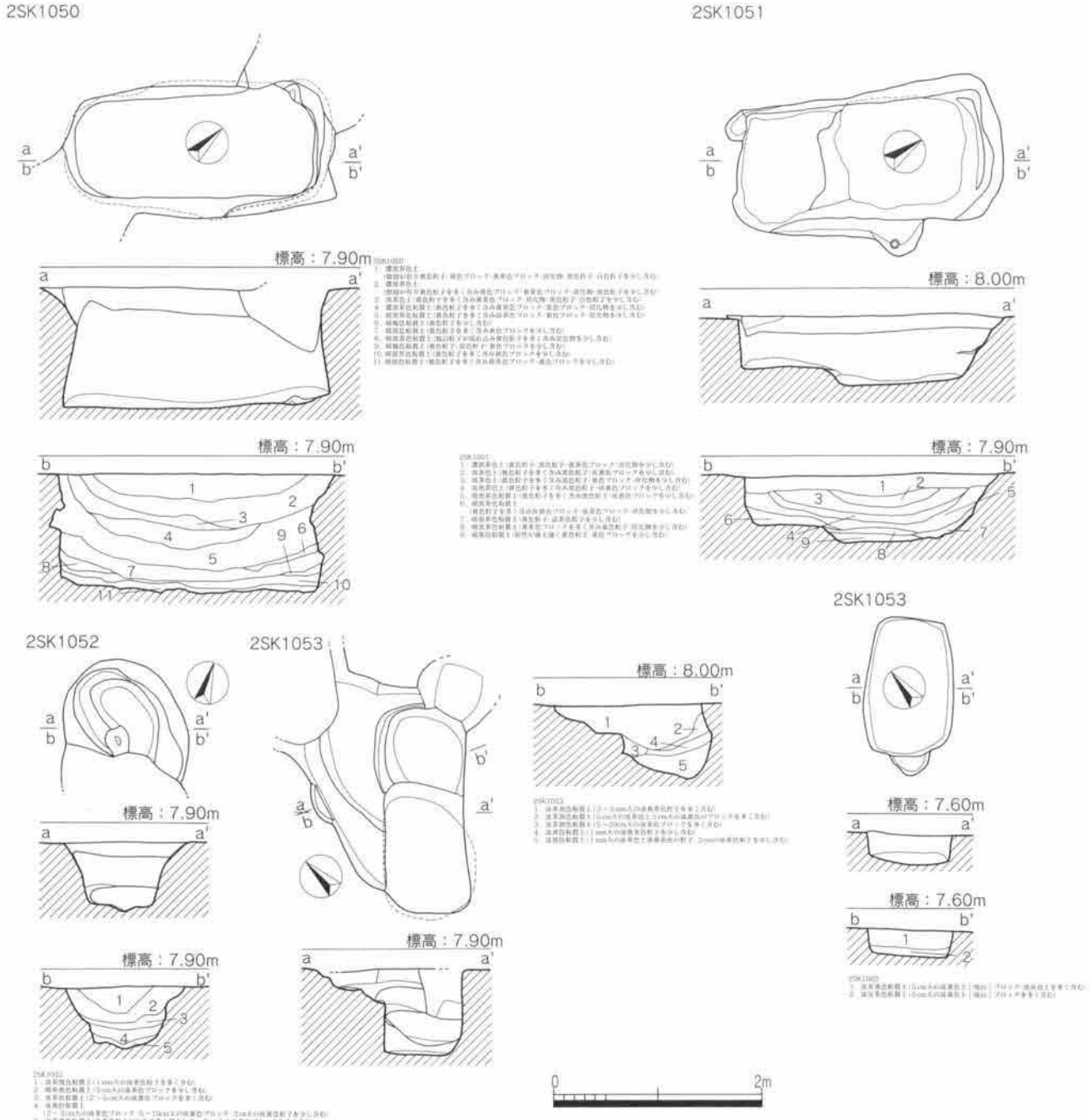


Fig.46　土坑（2SK1050～1053・1065）実測図（1/60）

不明遺構

2SX1111

Q35地区に位置した溜まり状の遺構で東部から西部にかけて幅広になり、西側は調査区外へ展開していたため規模は不明である。遺構内の側岸部には幾つかの小ピットを認めたが、配置的には規則性はなかった。中央部はほぼフラットな面を呈し、残高は最大で0.78mを測る。遺物は弥生土器（片）、須恵器（坏）、石器（サヌカイト片）が出土した。

(3) 出土遺物

溝

2SD1001（Fig.47、Pla.56）

石器

石鏃（1・2）　1は黒曜石を石材とした抉りの浅い二等辺三角形の石鏃である。完形で丁寧な二次加工整形を表裏面に施す。重さは0.7gを量る。2はサヌカイト製で抉りの浅い二等辺三角形を呈する。表面の右側脚部を欠損し、裏面の中央部には剥片素材時のポジティヴ面を残す。重さは0.5gを量る。

2SD1030（Fig.47、Pla.56）

石器

石鏃（3）　サヌカイト製で抉りのない二等辺三角形を呈する。表面の中央部に剥片素材時のネガティヴ面、裏面にはポジティヴ面を残し、周縁に二次加工を施して刃部を作り出す。重さは1.2gを量る。

2SD1032（Fig.47、Pla.56）

磁器

白磁

椀（4・5）　4は口縁部の細片で、素地は淡灰色の硬質で0.5 以下の白色微砂粒を含みきめ細かい。釉は淡灰色の透明釉を施す。5は底部の細片で底径6.4cmを復原する。素地は淡灰色の硬質で0.5 以下の白色微砂粒を含みきめ細かい。淡灰色の透明釉を見込み、底部外面、高台部外面に施釉し、高台内と畳付け部は釉が掻き取られて露胎である。見込みには櫛目文が施されている。

青磁

椀（6）　底部を欠損した細片で口径14.0cmを復原する。口縁端部は玉縁状を呈し、淡灰色の素地にやや青みがかった透明釉を内外面に厚めに施釉する。内外面には細かい貫入が認められ、見込みは露胎である。

2SD1041（Fig.47、Pla.56）

須恵器

擂鉢（7）　底部の細片で備前系と思われる。体部内面に10本単位の櫛目を施し、外底は未調整、その他はヨコナデの調整である。

片口鉢（8）　口径27.7cm、底径9.2cm、器高11.0cmを測る。玉縁状の口縁部を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部と底部の内外面はヨコナデ後不定方向のナデ、外底糸切り離し後ナデである。体部内面上位には粘土紐痕が残り、体部内面下位から底部にかけては使用による磨耗痕が認められる。東播系か？

磁器

白磁

椀（9）　底部の細片で底径5.0cmを復原する。淡灰色の素地に薄い青灰色の透明釉を内面と外面の上位までかける。釉は貫入を認め気泡が多く含まれる。体部下位と高台部は露胎でヘラケズリされている。見込みにはヘラによる片彫り文様が描かれている。

鉄製品

刀子（10）　表裏面は錆による腐食が進行し、刃先と茎尻の両端部を欠損する。現存長は13.2cm、最大幅は2.5cmを測る。

2SD1058（Fig.47、Pla.56）

石器

紡錘車（11）　石材は片岩製で最大径5.2cm、厚さ0.5cmを測る。中央の穿孔は表裏面から穿たれており、内孔径0.8cm、外孔径1.0cmを測る。重さは23.0g。

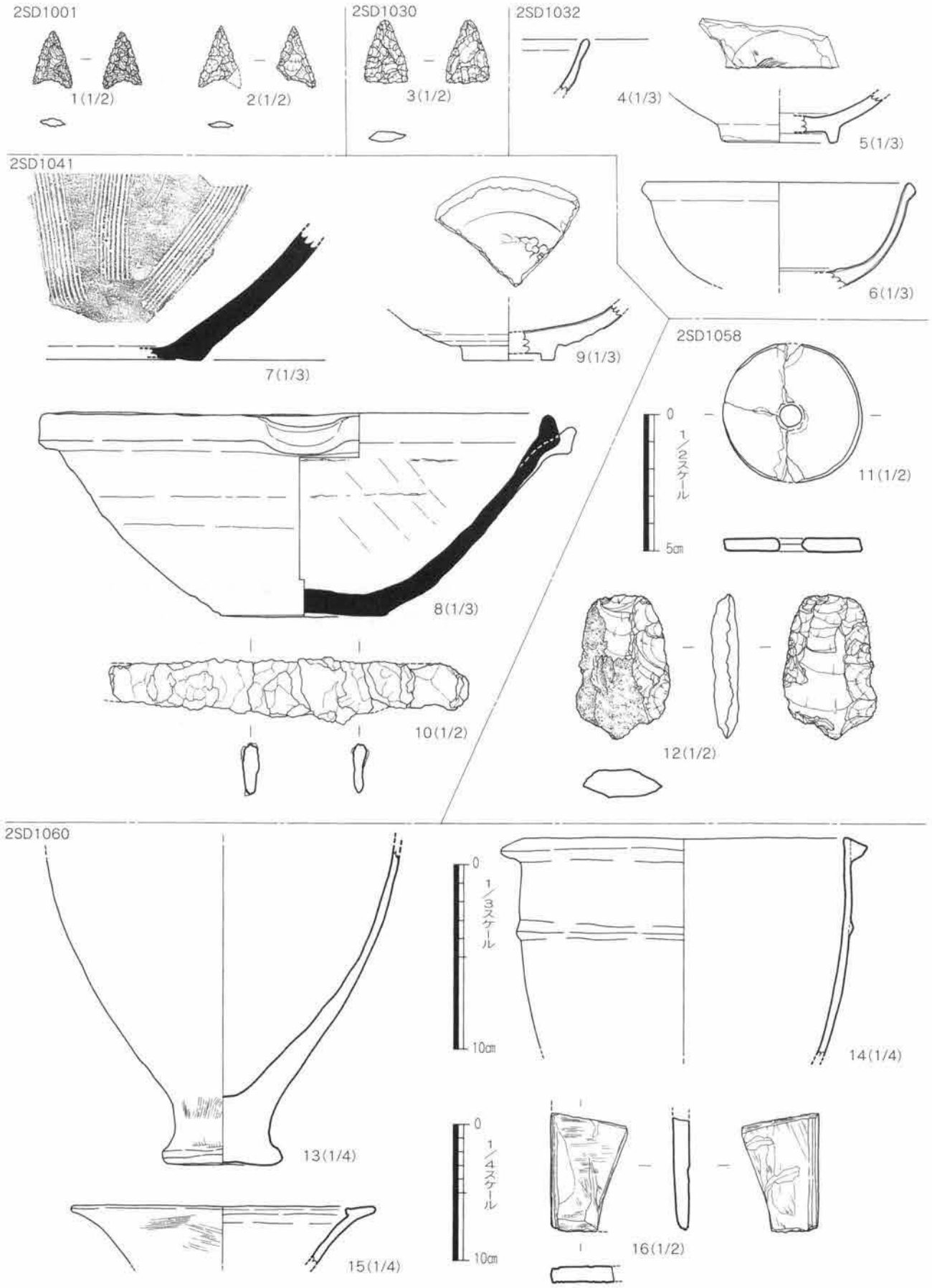


Fig.47　溝（2SD1001・1030・1032・1041・1058・1060）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

掻器（12）　ファーストフレークを素材としたサヌカイト製の掻器で、表面の下部と左側面部に大きく自然面を残す。表面上部にはネガティヴ面、裏面下部にはポジティヴ面を残し、周縁に粗い二次加工を施して刃部を作り出す。重さは20.8ｇを量る。

2SD1060（Fig.47、Pla.56・57）

弥生土器

甕（13・14）　13の底部は絞り込まれた平底を呈し、底径8.8cmを測る。内面は工具ナデ、外面は一部で刷毛目痕を認めるが大部分は磨耗のため調整不明である。14は口縁部とその下位に貼付三角突帯を施し、口径は27.0cmを測る。磨耗により調整は不明である。

壺（15）　口縁部の細片で鋤形の口縁部を呈し、口径22.4cmを復原する。口縁端部はヨコナデ、口縁部外面はミガキ、口縁部内面は磨耗のため不明である。

石器

扁平片刃石斧（16）　石材は泥岩製と思われ、基部と表面右側部を欠損する。断面形は長方形を呈し、全面を研磨する。重さは11.4ｇを量る。

土坑

2SK1002（Fig.48、Pla.57）

弥生土器

甕（17）　底部の細片で底径7.55cmを測る。内面の底部上位は工具ナデ、下位はナデ、底部外面は刷毛目である。

2SK1004（Fig.48、Pla.57）

弥生土器

甕（18）　底部の細片で底径5.7cmを測る。底面の中央部に内孔径1.2cmを測る穿孔が両面から穿たれている。磨耗のため調整は不明瞭であるが、外面には僅かに刷毛目が認められる。

2SK1005（Fig.48、Pla.57）

弥生土器

甕（19・20）　19は口径26.0cmを復原する。口縁部とその下位に刻目三角突帯を施し、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面は指押さえの調整である。20は細片で口縁部は如意状を呈する。口縁部下位には断面三角状の突帯を貼り付ける。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面はナデの調整である。

鉢（21）　完形の小型の台付鉢で口径10.05cm、底径4.9cm、器高7.4cmを測る。体部外面は刷毛目、その他はナデの調整である。

2SK1006（Fig.48、Pla.57）

弥生土器

甕（22・23）　22は細片で口縁部とその下位に刻目三角突帯を貼り付ける。23は小型鉢の完形で口径6.7cm、底径4.6cm、器高8.45cmを測る。底部は平底で肩部はやや内傾し、口縁部はほぼ直上に立ち上がる。体部外面は刷毛目、その他はナデの調整である。

石器

敲石（24）　石材は安山岩製で表裏面のほぼ中央部に敲打痕が残る。全体に二次焼成を受けており重さは299.5ｇを量る。

2SK1007（Fig.48、Pla.57）

弥生土器

甕（25～28）　25・26は口縁部から体部にかけての細片で口縁部とその下位に三角突帯を施す。25は口径25.0cm、26は20.4cmを復原する。27・28は底部の細片でともに絞り込まれた上底を呈する。27は7.0cm、28は6.4cmを測り、27の外底には籾痕が残る。

2SK1008（Fig.48、Pla.57）

弥生土器

甕（29）　如意状を呈した口縁端部に刻目を施し、更に口縁部下位には刻目三角突帯を貼り付ける。口

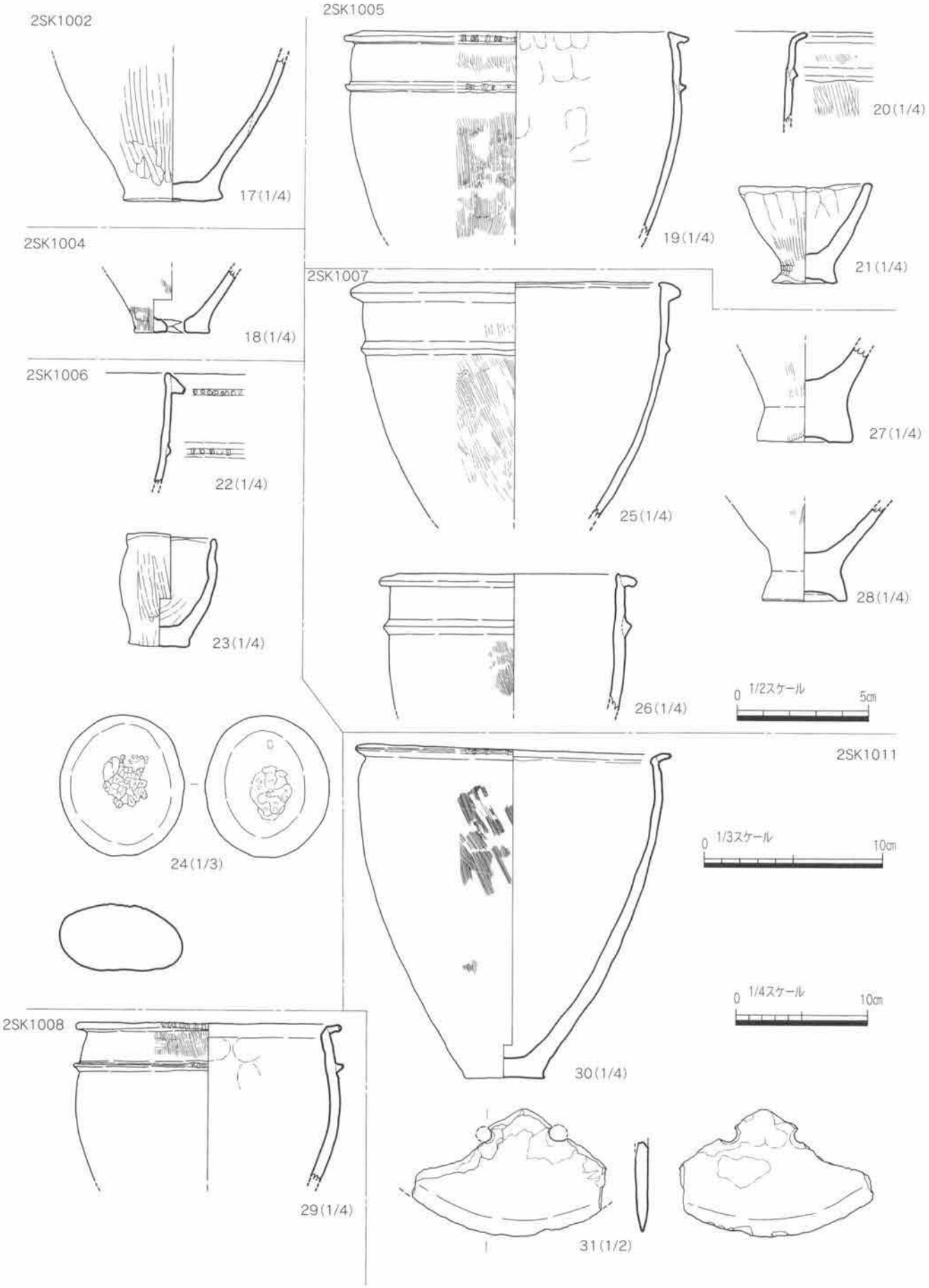


Fig.48　土坑（2SK1002・1004～1008・1011）出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

径20.0cmを復原し、口縁端部内外面はヨコナデ、口縁部外面は刷毛目、内面はナデで、体部外面は剥落のため不明である。

2SK1011（Fig.48、Pla.58）

弥生土器

甕（30）　口縁端部は貼付による如意状口縁を呈し、端部に粗く刻目が施される。口径23.9cm、底径6.0cm、器高24.8cmを測り、口縁部内外面はヨコナデ、内面は工具ナデ、外面上半部は刷毛目。下藩部はナデの調整である。

石器

石庖丁（31）　紐部から刃部にかけて残存した細片で石材は片岩製である。磨製の両刃タイプで重さは1.1gを量る。中央部2ヶ所に施された紐部の穿孔は両面から穿たれており、内孔径は0.5cm前後を測る。

2SK1012（Fig.49・50、Pla.58・59）

弥生土器

蓋（32）　天井部から口縁部にかけてはやや踏ん張った「ハ」字状を呈し、口径26.0cmを測る。天井部内外面はミガキ、口縁部内外面はヨコナデである。

甕（33～40）　33～35は口縁部とその下位に三角突帯を施した口縁部から体部にかけての破片である。口径の法量は33は28.8cm、34は28.6cm、35は38cmを測り、このうち34と35は三角突帯に刻目を施す。36・37は体部から底部にかけての破片で36は底径7.3cm、37は底径9.0cmを復原する。37は体部が外反しているため壺になる可能性も考えられる。38は如意状口縁を呈し、口縁端部に刻目を施す。口径は18.0cmを測る。39・40は底部の細片で中央付近に円孔が内外面から穿たれている。39は底径7.0cm、内孔径0.4cmを測り、穿孔は焼成前に穿たれている。40は底径6.2cm、内孔径1.0cmを測り、焼成後に穿孔を穿つ。

鉢（41）　小型で口径9.6cm、底径4.8cm、器高6.5cmを測る。外底は上底で、口縁端部内外面及び底端部はヨコナデ、その他はミガキである。

壺（42～44）　42・43は口縁部の細片である。42は口径17.2cmを測り、口縁端部内外面はヨコナデ、口縁部内面はナデ、口縁部外面は刷毛目である。43は口径20.2cmを復原し、肩部外面に2条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデ、肩部外面はミガキ、肩部内面はナデである。44は上半部と下半部の個体が同一であったので図面上で接合したものである。口径16.8cm、底径7.9cm、器高26.0cmを復原する。口縁端部はやや肥厚させやや厚めの円盤状の底部を呈する。口縁端部内外面はヨコナデ、肩部外面はミガキ、体部から底部にかけての内外面は工具ナデで、外底は未調整である。

石器

掻器（45）　石材はサヌカイト製で長さ8.4cm、最大幅6.2cm、重さ77.2gである。表面の右側周縁部と上端部に自然面を残し、周縁部に粗い二次加工を加えて刃部を作り出している。表面中央部にはネガティヴ面、裏面中央部にはポジティヴ面が大きく残る。

円盤状石製品（46）　石材は片岩製で全体は研磨されている。最大径4.7cm、厚さ0.4cm、重さ16.8gで、表裏面の一部は剥離している。

2SK1014（Fig.50、Pla.59）

弥生土器

甕（47・48）　47は口縁部とその下位に三角突帯を貼り付け、口径29.35cmを測る。調整は磨耗のため不明瞭である。48は底部の細片で底径8.1cmを測る。上底を呈し、絞り込まれた底部の直上に1孔の穿孔を施す。穿孔は焼成前に穿たれている。

2SK1015（Fig.50、Pla.59）

石器

石鏃（49）　石材はサヌカイト製である。表面の左側片脚を欠損し、抉りの浅い二等辺三角形を呈する。表裏面には二次加工整形を施して剥片素材時の面を綺麗に除去し、周縁にも刃部を作り出している。

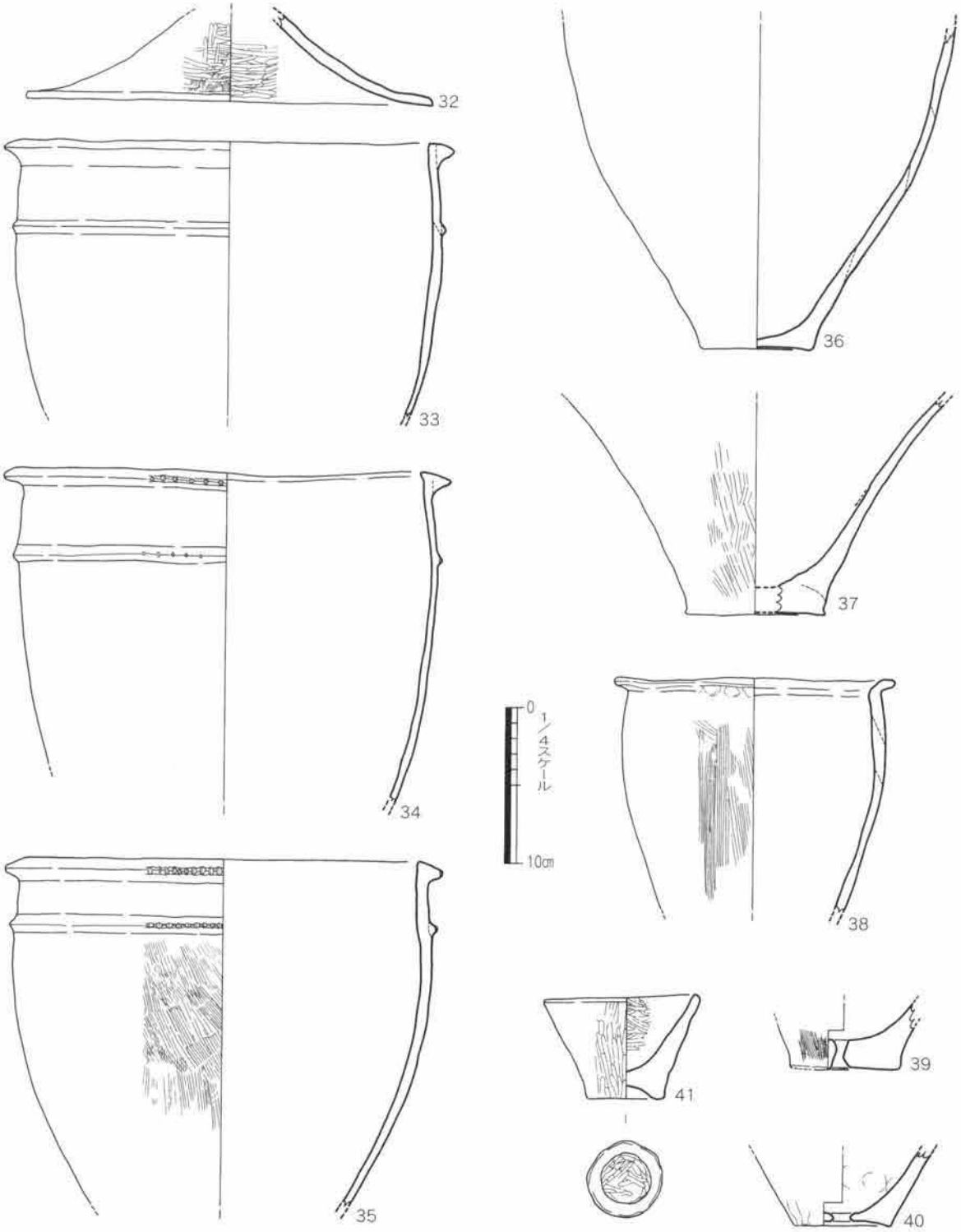


Fig.49　土坑（2SK1012）出土遺物実測図（1/4）

2SK1019 (Fig.50、Pla.59)

弥生土器

甕（50～53）　50は口縁部とその下位に貼付三角突帯を施し、口径19.8cmを復原する。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面は指押さえ、体部外面は刷毛目、体部内面はナデである。51は底径7.0cmを測り、底部中央付近に内外面から穿孔が焼成後に穿たれている。52は平底を呈した底部の細片で底径は7.0cmを測る。53は小型甕の完形で口径8.5cm、底径4.65cm、器高8.1cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、

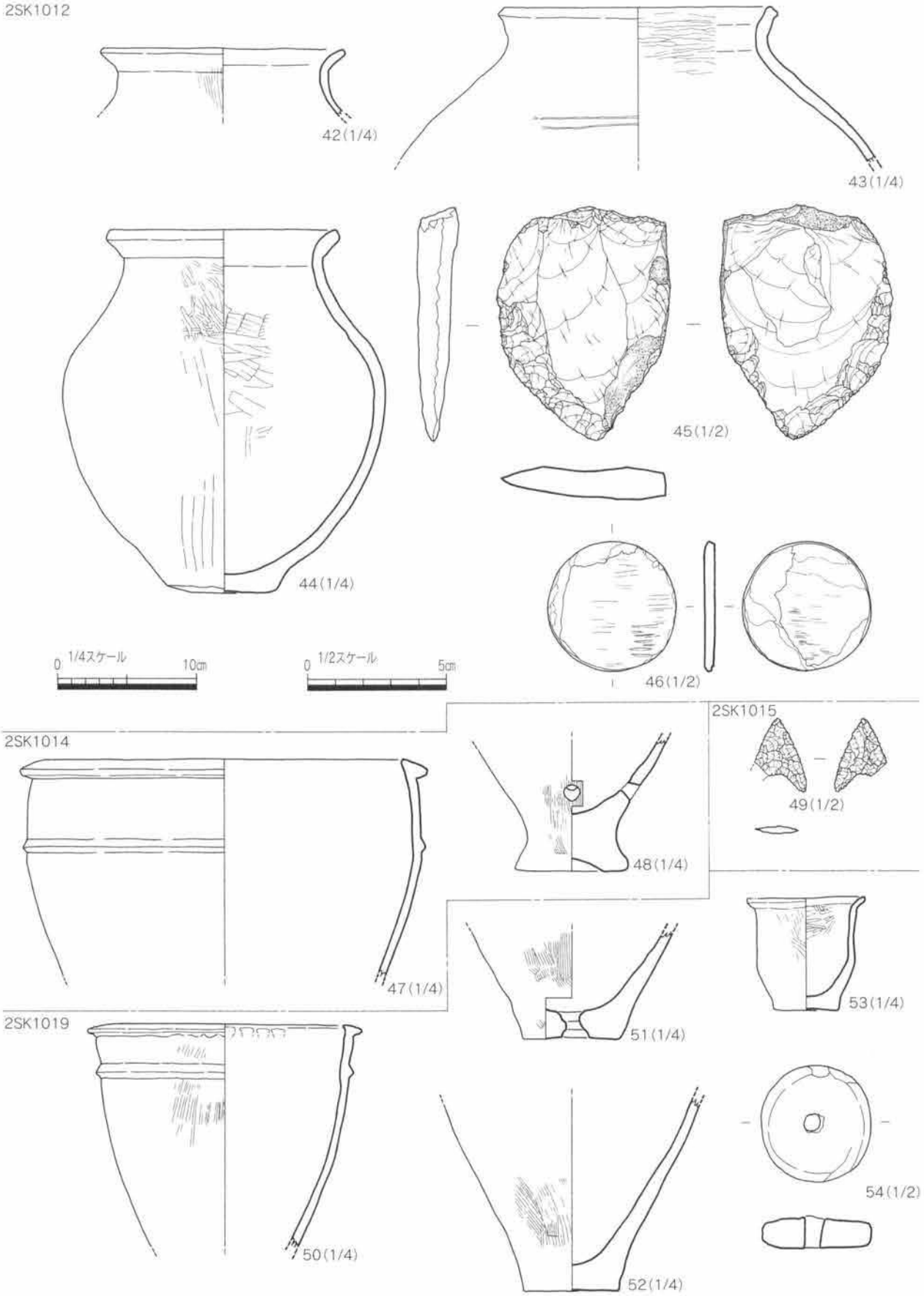


Fig.50　土坑（2SK1012・1014・1015・1019）出土遺物実測図（1/2・1/4）

体部内面上位はミガキ、体部下位から底部の内面と外底はナデ、体部外面は刷毛目である。

土製品

紡錘車（54）　最大径4.3cm、内孔径0.6cm、厚さ1.0cm、重さ21.3gの完形の土製紡錘車である。色調は暗茶褐色を呈する。

2SK1024（Fig.51、Pla.59・60）

鉢（55）　口縁部に三角突帯を施し、口径24.0cmを復原する。体部外面に刷毛目調整痕が残るがこの他は磨耗のため調整不明である。

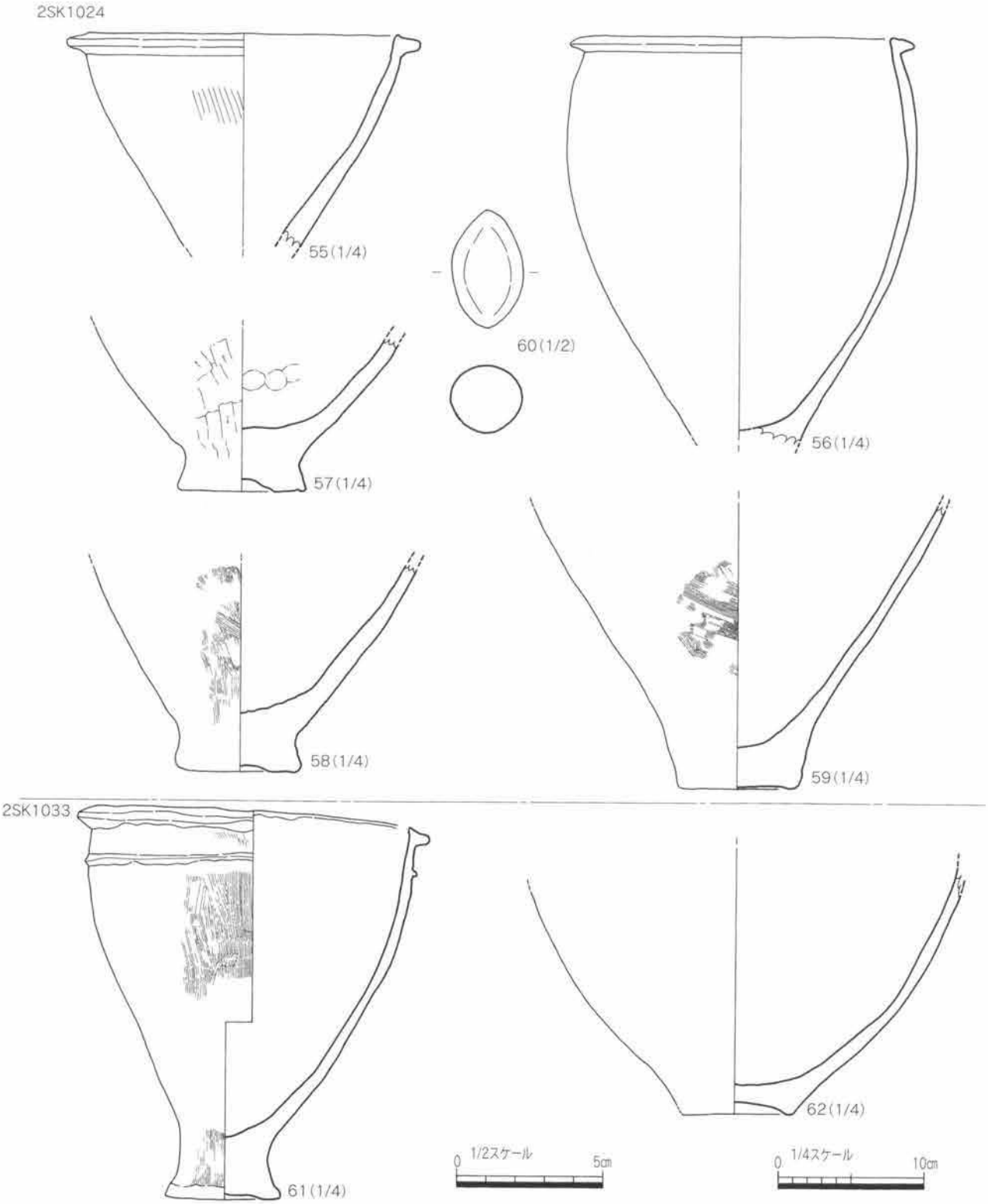


Fig.51　土坑（2SK1024・1033）出土遺物実測図（1/2）

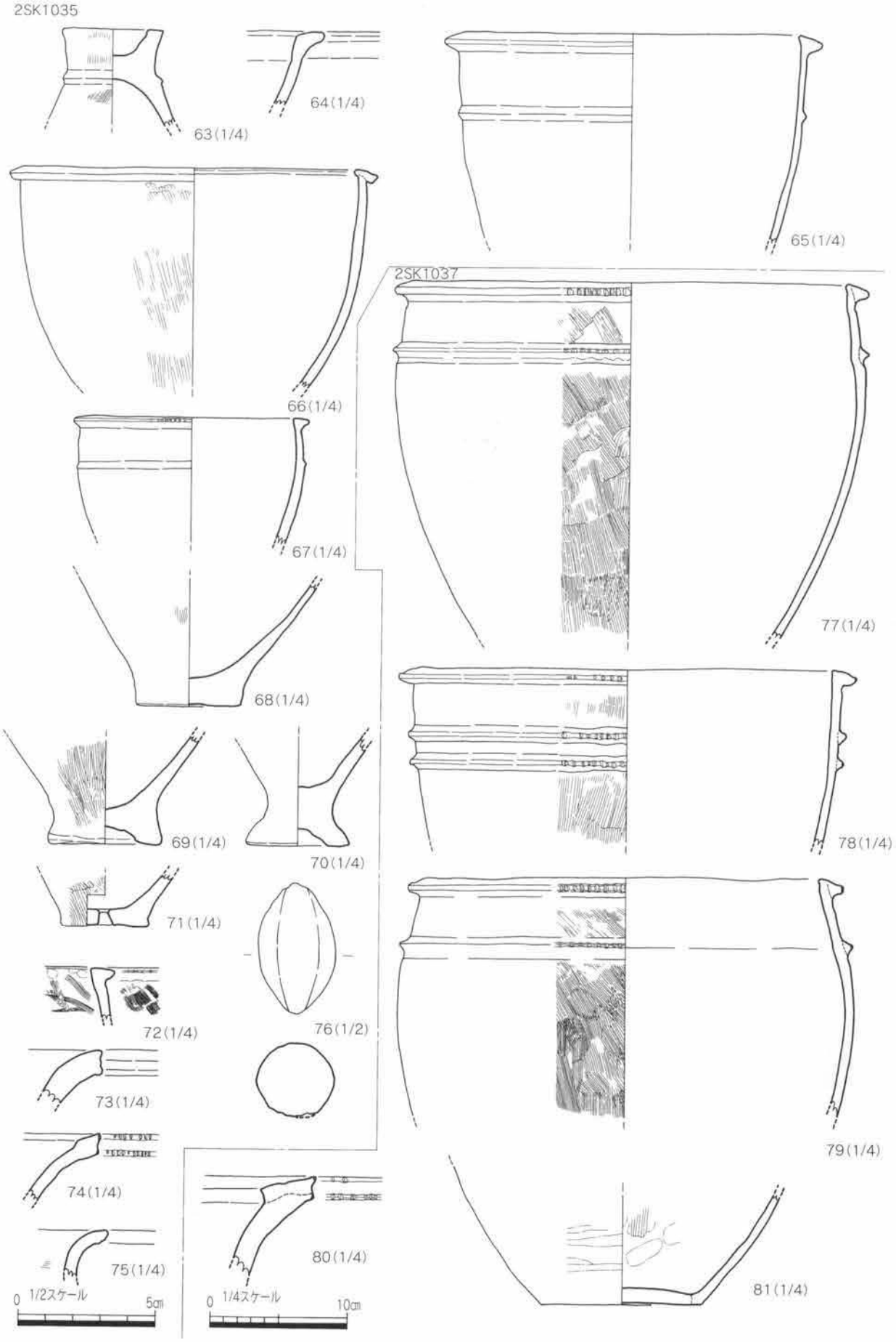


Fig.52　土坑（2SK1035・1037）出土遺物実測図（1/2・1/4）

甕（56～59）　56は底部を欠損した甕で、口縁部に三角突帯を施す。口縁部外面の一部に煤が付着し、口径23.5cmを測る。表面は磨耗のため調整不明である。57～59は底部の破片で57・58は上底を呈する。57は底径8.6cm、58は底径8.1cm、59は底径8.3cmを測る。

土製品

投弾（60）　長さ4.0cm、最大径2.5cm、重さ17.9ｇの完形の投弾で調整はナデである。

2SK1033（Fig.51、Pla.60）

弥生土器

甕（61）　ほぼ完形に近い甕で口径24.05cm、底径7.85cm、器高26.35cmを測る。口縁部とその下位に三角突帯を施し、若干内側に突出する。口縁部内外面はヨコナデ、体部から底部にかけての外面は刷毛目、内面は不定方向のナデである。

壺（62）　底径7.6cmを測る。体部から底部にかけては緩やかに湾曲し、底部は上底状を呈する。調整は内外面ともにナデである。

2SK1035（Fig.52、Pla.60・61）

弥生土器

蓋（63）　つまみ部径は7.3cmを測り、上端面は平坦である。つまみと天井部の間には三角突帯を施し、外面は刷毛目、つまみ部内面及び天井部内面はナデである。天井部内面には煤が付着する。

鉢（64）　口縁端部の断面形は三角状を呈する。口縁端部から内面にかけてはミガキ、口縁部外面はヨコナデである。

甕（65～74）　65は口径27.6cmを復原し、口縁部とその下位には三角突帯を施す。66は口縁部にやや垂れ下がった三角突帯を貼り付けし、口径26.8cmを復原する。67は口縁部とその下位に刻目三角突帯が施されるが、磨耗のため上位突帯のみ刻目が看取される。68～71は底部の細片で68・71が平底を呈する。68は底径9.8cmで外底には藁痕が残る。69は底径8.3cm、70は底径7.6cmを測る。71は底部中央に内孔径0.5cmを測る円孔が焼成前に穿たれ、底径は6.4cmを測る。72は口縁部細片で端部に刻目三角突帯を施す。突帯部はヨコナデ、口縁部内面は指押さえ、口縁端部内外面は刷毛目である。73・74は大型甕の口縁部細片で74の口縁端部上下端には刻目が施される。

壺（75）　外反した口縁部の細片で口縁部の端部と内面はナデ、口縁部外面はヨコナデ、口縁部下位は刷毛目の調整である。

土製品

投弾（76）　完形で法量は長さ4.75cm、最大径2.8cm、重さ26.8ｇである。色調は暗茶褐色を呈する。

2SK1037（Fig.52、Pla.61）

弥生土器

甕（77～80）　77～79は口縁部の破片で口縁端部とその下位には刻目三角突帯が施される。77は口径34.6cm、78は口径33.4cm、79は31.6cmを復原する。80は大型甕の口縁部細片で口縁端部の上端部と下端部に粗い刻目が施される。

壺（81）　底部の細片で底径11.6cmを測る。底部内面は指押さえ、外面は工具ナデである。

2SK1038（Fig.53、Pla.61・62）

弥生土器

甕（82・83）　82は口縁部の破片で、口径26.8cmを測る。口縁部とその下位に刻目三角突帯を施す。83は体部から底部にかけての破片で底径7.4cmを復原する。体部上方に1条の刻目貼付突帯を施す。

石器

石鏃（84～86）　84・85はともに抉りの浅い二等辺三角形を呈した完形で石材はサヌカイト製である。僅かであるが表面にはネガティヴ面、裏面にはポジティヴ面を残し、周縁には二次加工を施して刃部を作り出している。84は重さ1.4ｇ、85は0.9ｇを量る。86は逆ベース形を呈した黒曜石製の石鏃である。表裏面に細かな二次加工整形を施して剥片素材時の剥離面を綺麗に除去している。重さは2.0ｇを量る。

紡錘車（87）　下半部を欠損した片岩製の紡錘車で、最大径4.5cm、厚さ0.5cm、重さ10.6ｇである。穿孔は表裏面から穿たれており、内孔径は0.45cmを測る。

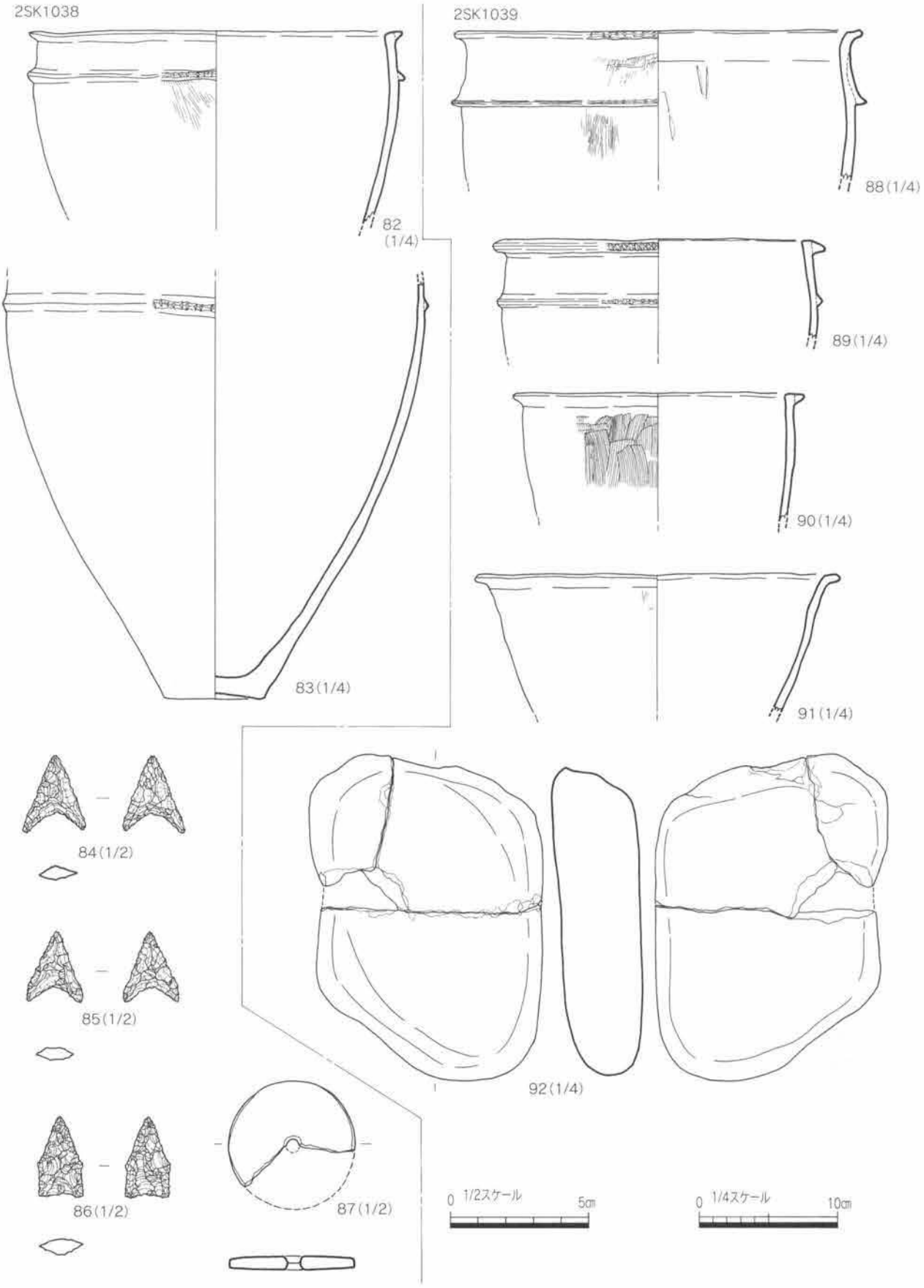


Fig.53　土坑（2SK1038・1039）出土遺物実測図（1/2・1/4）

2SK1039（Fig.53、Pla.62）

弥生土器

甕（88～90）　88はいわゆる段甕と称される口縁部の細片で、口径29.5cmを復原する。口縁端部は如意状を呈し、口縁部外面を肥厚させて口縁部下位に突帯を作り出し、口縁端部とその下位に刻目を施す。口縁端部内外面と突帯部はヨコナデ、口縁部外面は細かな刷毛目、口縁部内面は工具ナデである。89は口縁部とその下位に刻目三角突帯を貼り付け、口径24.0cmを測る。口縁部内外面の調整はヨコナデである。90は口縁部のみに貼付三角突帯を施し、口径21.0cmを測る。体部外面には細かな刷毛目が施される。

鉢（91）　口径26.4cmを復原し、口縁端部はやや屈曲しながら外反する。調整は磨耗のため不明瞭であるが、口縁部外面に僅かながら刷毛目調整痕が残る。

石器

石皿（92）　長さ22.0cm、幅15.9cm、厚さ6.0cmを測る。石材は不明で、表裏面を砥面として使用している。重さは3.935kgを量る。

2SK1045（Fig.53、Pla.62）

弥生土器

甕（93・94）　93はほぼ完形で口径33.45cm、底径8.9cm、器高40.7cmを測る。口縁部とその下位に三角突帯を施し、底部は上底を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部から底部にかけての内面はナデで外面は磨耗のため不明瞭であるが僅かに刷毛目調整を認める。94は口縁端部に三角突帯を施し、口径24.8cm、底径7.6cm、器高23.9cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部と底部の内面はナデ、体部外面は刷毛目、底部外面はヨコナデである。

2SK1047（Fig.54、Pla.62）

弥生土器

甕（95・96）　95は口径32.0cmを復原する。口縁部は鋤形を呈し、体部外面に1条の三角突帯を貼り付ける。体部は球形を呈し、口縁部内外面と突帯部はヨコナデ、体部上位はミガキであり、その他は磨耗のため調整不明である。96は大型甕で器形は95と近似すると思われる。最大体部径は55.3cmを測り、口縁端部内外面はヨコナデ、口縁部外面はミガキ、体部上位は刷毛目、体部下位は工具ナデであるが、その他は磨耗のため調整不明である。

2SK1048（Fig.54、Pla.62）

石器

石匙（97）　石材はサヌカイト製でつまみ部の細片である。表面には剥片素材時のネガティヴ面を残し、裏面にはポジティヴ面を大きく残す。重さは3.0ｇを量る。

敲石（98）　安山岩製の円礫を利用したもので、表裏面の中央部と表面右側周縁部に敲打痕が認められる。重さは350ｇを量る。

2SK1049（Fig.54、Pla.63）

石器

石庖丁（99）　粘板岩製の磨製石庖丁で右半部以上を大きく欠損する。重さは5.1ｇを量る。

2SK1050（Fig.55、Pla.63）

弥生土器

蓋（100）　つまみ部径7.0cm、口径25.8cm、器高11.3cmを測り、口縁端部は凹状を呈する。内外面の調整はミガキで口縁端部はヨコナデである。

甕（101）　口縁部とその下位に刻目三角突帯を施し、口径29.8cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、体部外面は工具ナデであるが、内面は磨耗のため調整不明。

石器

石鏃（102）　サヌカイト製で表面の左側片脚を僅かに欠損する。抉りの浅い二等辺三角形で両面に二次加工を施す。重さ0.7ｇを量る。

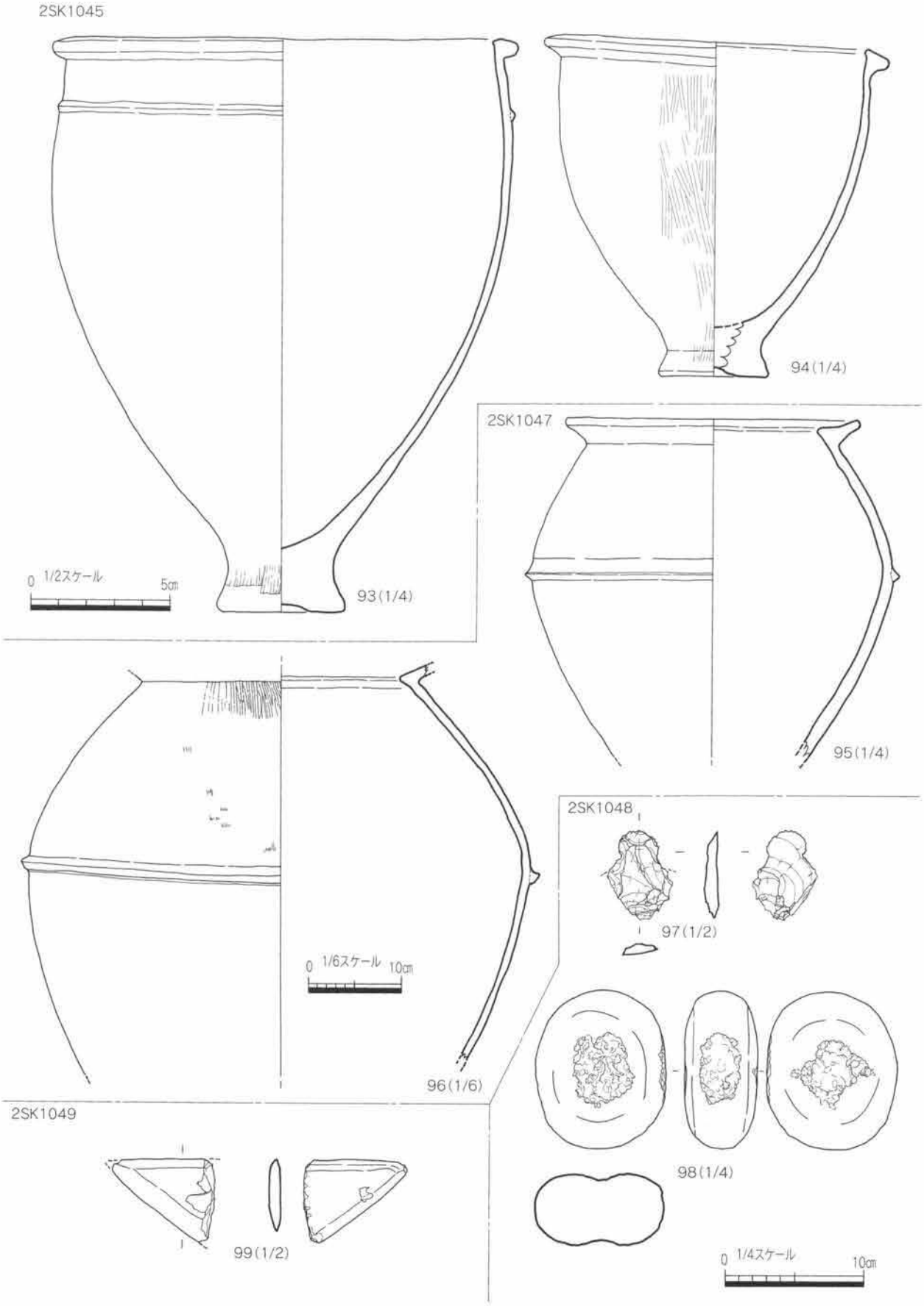


Fig.54　土坑（2SK1045・1047～1049）出土遺物実測図（1/2・1/4・1/6）

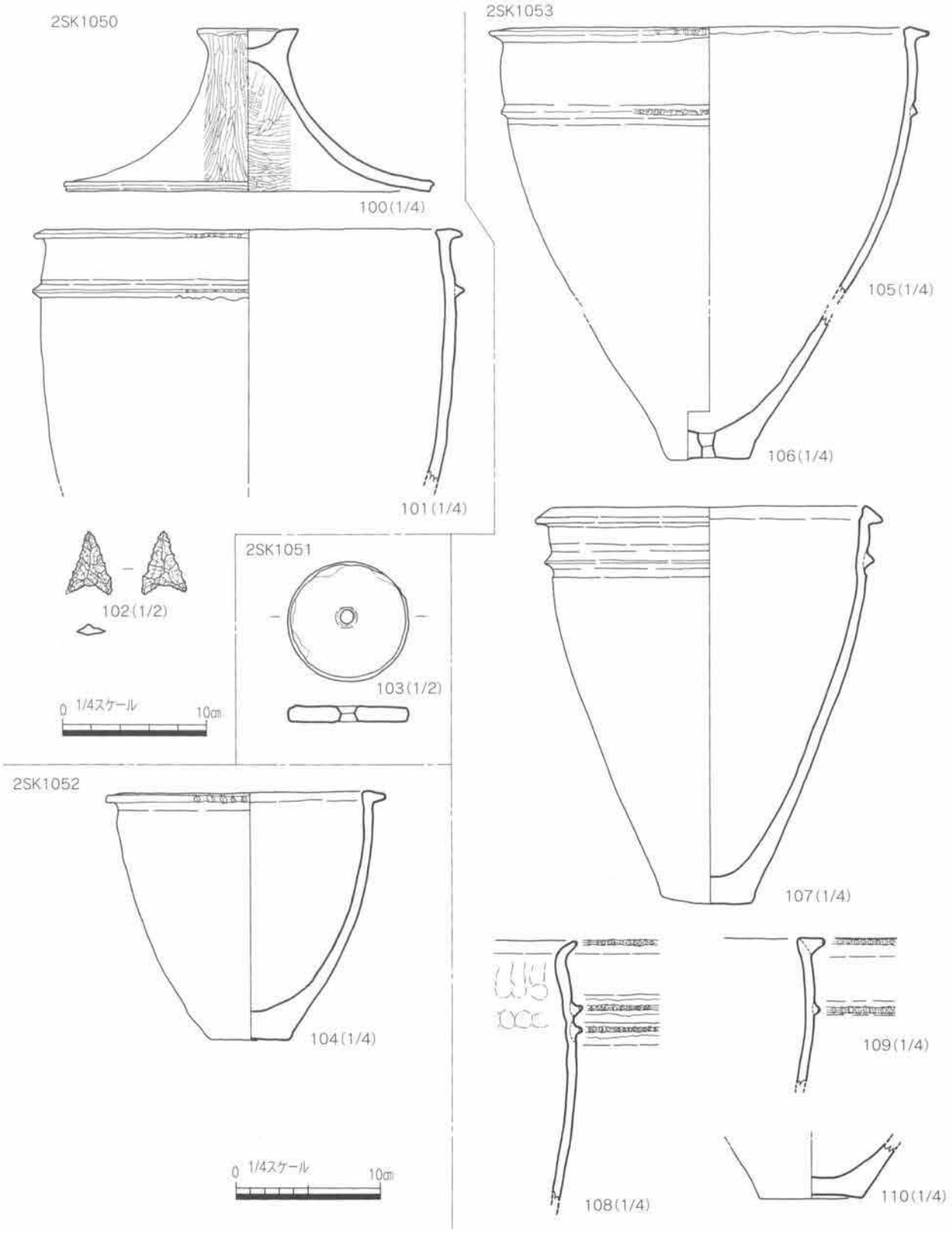


Fig.55　土坑（2SK1050～1053）出土遺物実測図（1/2・1/4）

2SK1051 (Fig.55、Pla.63)

石器

紡錘車（103）　石材は片岩製で最大径4.2cm、厚さ5.5cm、重さ16.9gである。中央付近には両面から穿たれた穿孔があり、外孔径0.7cm、内孔径0.4cmを測る。

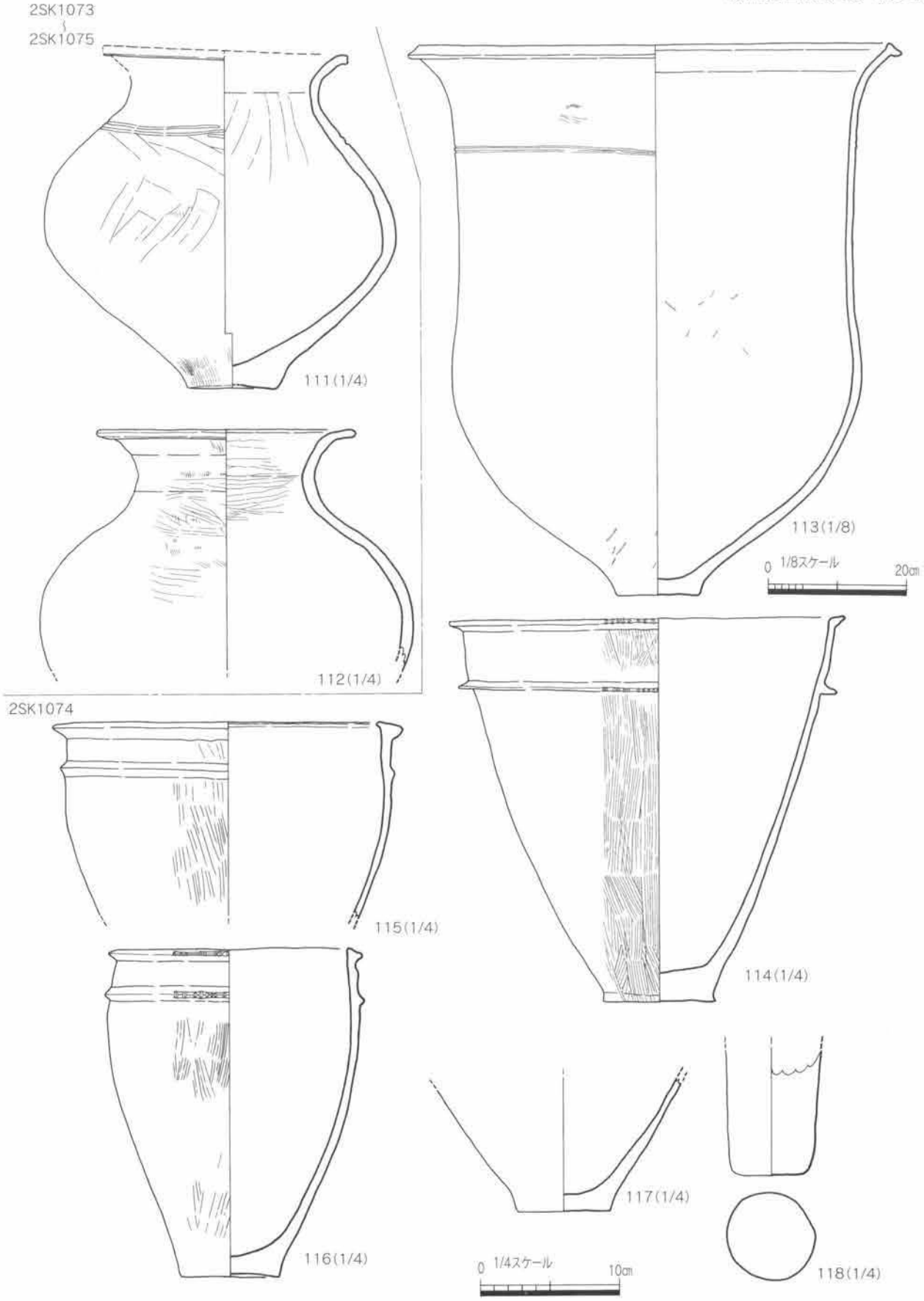


Fig.56　土坑（2SK1073～1075）出土遺物実測図（1/4・1/8）

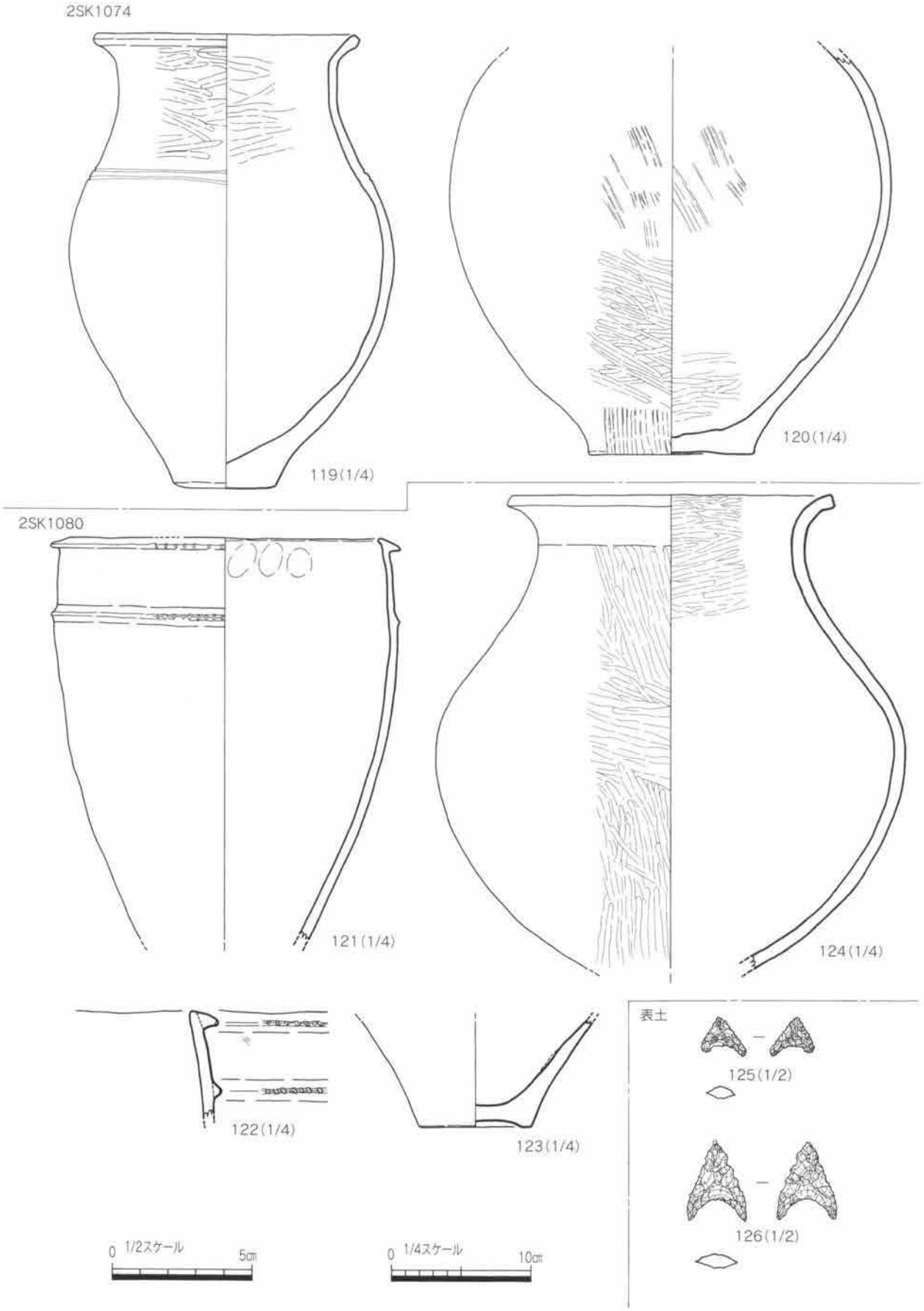


Fig.57　土坑（2SK1074・1080）、表土出土遺物実測図（1/2・1/4）

2SK1052（Fig.55、Pla.63）

弥生土器

甕（104）　口縁部に刻目三角突帯を施し、口径19.35cm、底径5.5cm、器高17.0cmを測る。著しく磨耗しているため調整は不明である。

2SK1053（Fig.55、Pla.63）

弥生土器

甕（105～110）　105・106は復原時において接点がなかったために個々の実測図を作成したが同一個体と思われる。口縁部とその下位に刻目三角突帯を施し、底部中央には内孔径0.8cmを測る穿孔が焼成前に穿たれている。107は口縁部とその下位に三角突帯を施し、口径24.2cm、底径6.5cm、器高27.4cmを復原する。調整は磨耗のため不明である。108は刻目を施した如意状口縁を呈し、口縁部下位には2条の刻目三角突帯を貼り付ける。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面は指押さえ、体部内外面は工具ナデの調整である。109は口縁部細片で口縁部とその下位に刻目三角突帯を施す。110は底部の細片で底径7.2cmを測る。109・110の外面には煤が付着する。

2SK1073～1075（Fig.56、Pla.63）

弥生土器

壺（111・112）　ともに2SK1073～1075からの出土土器で個々を接合し実測したものである。111は口径17.6cm、底径6.4cm、器高24.2cmを復原し、肩部に2条の沈線が巡る。口縁部はヨコナデ、肩部内面は指押さえとナデ、体部から底部にかけての内面はナデ、肩部から底部にかけての外面は刷毛目後工具ナデである。112は口径18.6cmを復原する。口縁部内外面は磨耗のため不明、肩部と体部の内面は工具ナデ、肩部と体部の外面は刷毛目後工具ナデである。

2SK1074（Fig.57、Pla.64）

弥生土器

甕（113～117）　113は大型甕で口径71.2cm、底径12.0cm、器高79.8cmを復原する。口縁端部は断面三角形状を呈し、口縁部下位に2条の沈線が施される。胴部上半部はややすぼまっており、胴部最大径は体部下位にある。胴部最大径は58.8cmを復原し、底部は平底を呈する。器面は著しく磨耗しており調整は不明である。114はほぼ完形の甕で口径28.5cm、底径8.0cm、器高27.4cmを測る。如意状口縁の端部に刻目を施し、口縁部下位には刻目突帯を施す。口縁端部と突帯部はヨコナデ、体部から底部にかけての内面はナデ、外面は縦方向の丁寧な刷毛目の調整である。115・116は口縁部とその下位に三角突帯を施し、116には刻目も施される。115は口径25.0cm、116は口径18.0cm、底径7.0cm、器高23.4cmを測り、口縁部外面に煤が付着する。117は底部の細片で底径6.6cmを測る。

壺（119・120）　119は口径19.1cm、底径7.5cm、器高32.4cmを復原する。肩部に2条の沈線を施し、底部はやや厚めの円盤状を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、肩部内外面はミガキの調整であるがその他は磨耗のため調整不明である。120は胴部が球形を呈した壺で底径11.9cmを測る。体部中位は磨耗のため調整不明であるが、体部下位の内外面はミガキ、底部内面はナデ、底部外面は刷毛目である。

土製品

器台（118）　円柱状を呈し、下部径5.7cmを測る。色調は明橙茶色で胎土は白色・赤色粒子を少し含む。

2SK1080（Fig.57、Pla.64）

弥生土器

甕（121～123）　121は口縁部とその下位に刻目三角突帯を施し、口径25.0cmを測る。口縁端部から突帯部まではヨコナデ、体部外面はナデ、口縁部内面には指頭圧痕が残り、体部に煤が付着している。122は口縁部の細片で口縁部とその下位に刻目三角突帯を貼り付ける。123は底部の細片で底径8.2cmを測る。

壺（124）　口縁部は大きく外反し、口径23.6cm、胴部最大径33.8cmを復原する。口縁端部と外面はヨコナデ、口縁部内面と肩部から底部にかけての外面はミガキ、体部内面はナデである。

表土採集（Fig.57、Pla.64）

石器

石鏃（125・126）　125は小型の黒曜石製石鏃で、完形であるが表面の左側片脚部は短い。周縁に細

かな二次加工を施して刃部を作り出し、裏面中央には剥片素材時のポジティヴ面を僅かに残す。重さは0.5ｇを量る。126は僅かに先端部を欠損する。サヌカイト製で重さは1.5ｇを量る。概ね二等辺三角形状を呈するが、両側辺部から両基辺部にかけては僅かに屈曲する。表裏面には二次加工を施して剥片素材時の剥離面を除去している。

(4) 小結

当調査区南半部を中心とするやや小高い地区からは弥生時代前期後半～中期前半に比定される土坑・井戸、中世の溝等の主要遺構を確認することができたが、その周辺部に至っては中世から近世にかけての流路・溝等が僅かに検出されるに止まった。周辺部において耕地利用のための大幅な削平を受けていたためと思われる。弥生時代の遺構について、今次調査は1次調査箇所の北側に隣接することから貯蔵穴から廃棄土坑へと転用された土坑、多種の石器等、同様の遺構が確認されていることから同一集落として機能していたことが窺える。また、中世の遺構である溝の存在は当該地区において盛んに土地利用が行われていたことを示唆するものであり、用排水路や区画溝等の性格が考えられよう。

遺構の全体像については後章において記述することとする。

S-番号	遺構番号	地区番号	遺構切り合い（古→新）	備　考
1001	2SD 1001	A38		
1002	2SK 1002	P19		
1003	2SK 1003	L17	32→3	
1004	2SK 1004	W12		
1005	2SK 1005	W15		
1006	2SK 1006	C17		
1007	2SK 1007	A18		
1008	2SK 1008	E19		
1009	2SK 1009	E17		
1010	2SK 1010	D15		
1011	2SK 1011	J12		
1012	2SK 1012	H12		
1013	2SK 1013	J18		
1014	2SK 1014	L19		
1015	2SK 1015	C17		
1016	2SK 1016	L12		
1017	2SK 1017	K13		
1018	2SK 1018	E15		
1019	2SK 1019	J9		
1020	2SD 1020	E19		
1021	2SK 1021	J9		
1022	2SD 1022	X6	22←→23?	
1023	2SD 1023	V16	22・44←→23?	
1024	2SK 1024	F11	25→24	
1025	2SK 1025	F10	25→25	
1026	2SK 1026	G12		
1027	2SK 1027	AL4		
1028	2SD 1028	AJ4		
1029	2SD 1029	AM3		
1030	2SD 1030	Z3	40→30	
1031	2SD 1031	B14		
1032	2SD 1032	B16	32=41	
1033	2SK 1033	K10	31→33→79	
1034	2SP 1034	AM2		
1035	2SK 1035	K20	60→35	
1036	2SK 1036	LJ9	60→36	
1037	2SK 1037	L20	83→37	
1038	2SK 1038	J18	38→41	
1039	2SK 1039	H20	59→39	
1040	2SK 1040	AF3	40→30	
1041	2SD 1041	K17	78→32=41	
1042	2SK 1042	H20		
1043	2SK 1043	F21	46→43	
1044	2SK 1044	U18	44→23	
1045	2SK 1045	F17		
1046	2SK 1046	F21	46→43	
1047	2SK 1047	E24		
1048	2SK 1048	E26		
1049	2SK 1049	I15		
1050	2SK 1050	F14	52・53→50	
1051	2SK 1051	K11		
1052	2SK 1052	F15	52→50	
1053	2SK 1053	F14	53→50・77	
1054	2SK 1054	L15		
1055	2SK 1055	R21		
1056	2SK 1056	C27		
1057	2SK 1057	C35	57→58	
1058	2SD 1058	B29	57→58	
1059	2SK 1059	I20	59→39	
1060	2SD 1060	L18	62←64・67・68→60→35・36	
1061	2SK 1061	J12		
1062	2SK 1062	J21	62→60	
1063	2SK 1063	J21	63→60	
1064	2SK 1064	J20	64→60	
1065	2SK 1065	C25		

S-番号	遺構番号	地区番号	遺構切り合い（古→新）	備　考
1066	2SK 1066	I12		
1067	2SK 1067	K20	64・68→67→60	
1068	2SK 1068	K20	64→68	
1069	2SK 1069	K22	70→69	
1070	2SK 1070	J22	70→69	
1071	2SK 1071	V7		
1072	2SK 1072	V7		
1073	2SK 1073	AJ3	73→74	
1074	2SK 1074	AK2	73・75→74	
1075	2SK 1075	AK2	75→74	
1076	2SK 1076	L22		
1077	2SK 1077	F14	53→77	
1078	2SK 1078	I20	78→41	
1079	2SP 1079	K10	79→33	
1080	2SK 1080	C21		
1081	2SK 1081	H18		
1082	2SP 1082	L20		
1083	2SP 1083	L20	83→37	
1084	2SP 1084	K22	85→84	
1085	2SP 1085	K22	85→84	
1086	2SP 1086	K22		
1087	2SP 1087	K21		
1088	2SP 1088	J21		
1089	2SP 1089	K21		
1090	2SP 1090	J21	91→90	
1091	2SP 1091	J21	92→91	
1092	2SP 1092	J21	92→91	
1093	2SP 1093	L21		
1094	2SP 1094	L20		
1095	2SP 1095	J21		
1096	2SP 1096	A16	96→32	
1097	2SP 1097	A16	97→96	
1098	2SP 1098	B15		
1099	2SP 1099	B15		
1100	2SP 1100	K11		
1101	2SP 1101	K11		
1102	2SX 1102	V5		
1103	2SX 1103	W5		
1104	2SP 1104	S20		
1105	2SP 1105	S19		
1106	2SD 1106	C39		
1107	2SD 1107	B38	107=108	
1108	2SD 1108	A38		
1109	2SK 1109	D35		
1110	2SP 1110	E15		
1111	2SD 1111	Q35		
1112	2SP 1112	P39		
1113	2SX 1113	P39		
1114	2SP 1114	P40		
1115	2SP 1115	P40		
1116	2SP 1116	P41		
1117	2SP 1117	Q43		
1118	2SP 1118	Q43		
1119	2SP 1119	Q43		
1120	2SK 1120	P43		
1121	2SX 1121	P43		
1122	2SP 1122	P44		
1123	2SD 1123	Q44		
1124	2SP 1124	Q44		
1125	2SX 1125	Q45		
1126	2SK 1126	P46		
1127	2SK 1127	Q46		
1128	2SK 1128	Q47		
1135	2SP 1135	B40		
1140	2SK 1140	B45		

Tab.2　常用日田行遺跡（第2次調査）遺構番号台帳

Fig.58 常用日田行遺跡第２次調査遺構全体実測図（1/300）

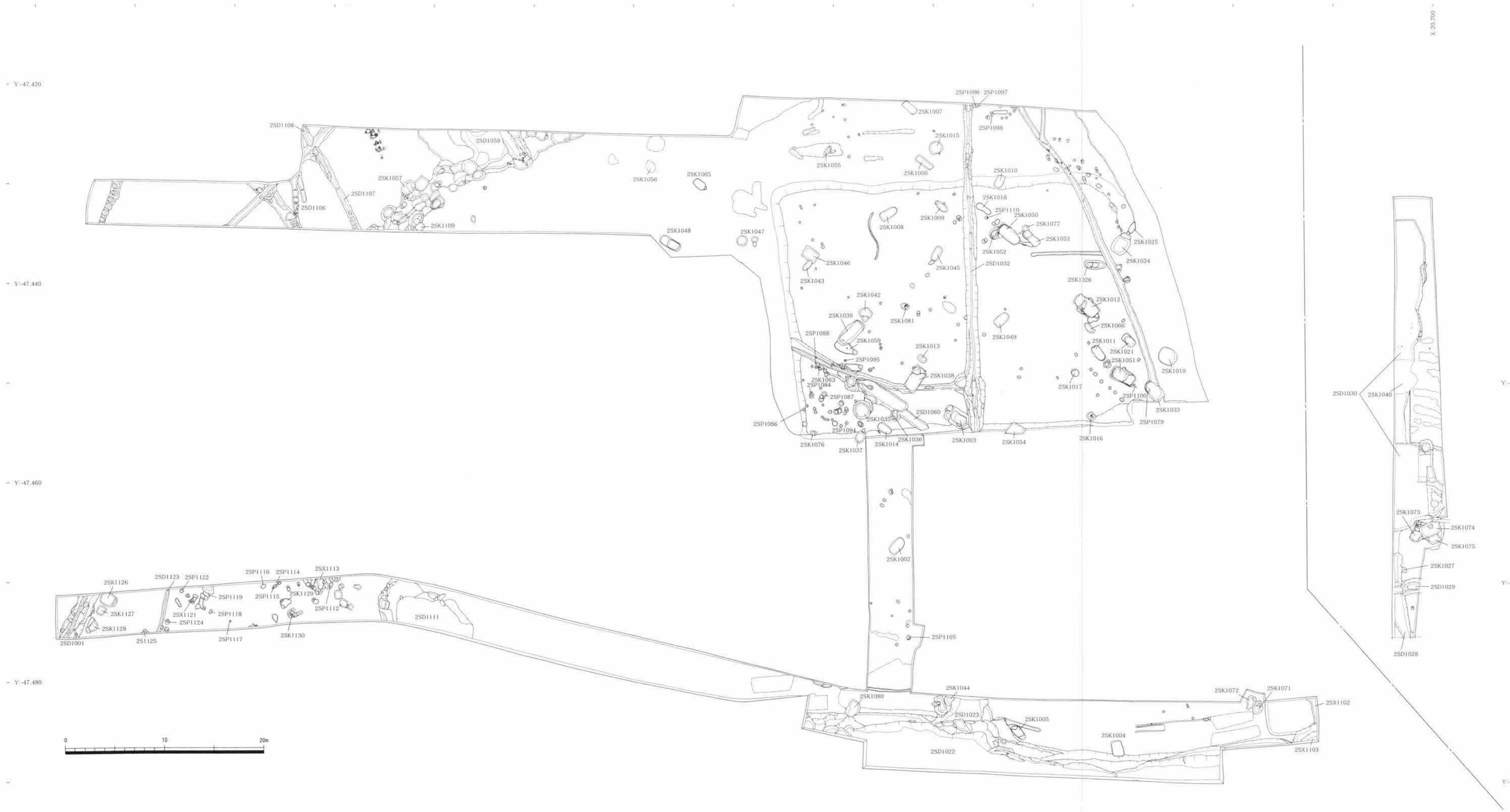


Fig.59　常用日田行遺跡第２次調査遺構全体実測図（1/300）

3.常用長田遺跡（第1次調査）

(1) はじめに（Fig.60）

当遺跡は筑後市大字常用字日田行665外に所在し、標高6～7m位の低位段丘上にある。県営担い手育成基盤整備事業に伴う筑後西部第2地区の工事によって、埋蔵文化財が破壊を受ける部分について発掘調査を実施した。今回は、新設の排水路設置予定箇所及び面工事によって削平される部分を調査対象範囲として調査区を設置した。なお、調査当時は周辺で行われていた発掘調査を含めて「常用遺跡群」として実施していたため当遺跡は「C区」と称し、遺構仮番号はS—200～S—300を使用した。

調査面積は1,225㎡で、調査は平成8年12月に実施した。この間重機による表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構検出、掘削、実測、写真撮影等の作業を行った。調査は田中剛、小林勇作が担当し、柴田剛（現：伊万里市教委）、野田洋子の協力を得た。調査の結果、溝・土坑・ピット等の遺構が確認され、弥生土器・石器等の遺物が出土した。

以下は調査区内で確認された主要な遺構や遺物について概述する。

Fig.60　常用長田遺跡第1次調査地点位置図（1/2,500）

(2) 検出遺構

溝

1SD300

AJ5地区から西へ展開した南北溝で長さ約26m分を検出した。掘削は調査期間等の制約により北部のみを掘り下げ、上幅約5.0m、下幅1.7～3.0m、残高約1.5mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、東岸には6本の丸杭が穿たれており、更に溝底からは長さ約3m程度の丸太が確認されたが、各々の材質については不明である。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、土師器（片）、陶磁器（皿・椀・片）、石器（石庖丁・石斧）等が出土した。

土坑

1SK200（Fig.61、Pla.66）

I8地区に位置し、平面プランは縦長のやや湾曲した不整楕円形状を呈する。底面はほぼフラットで一部の壁面はやや奥まった状態を示す。長軸約2.72m、短軸0.84m、残高は約0.57mを測り、主軸は概

ねN—54°27′44″—Wを示す。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

1SK202（Fig.61、Pla.66）

AE8地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面中央部付近には不整楕円形状のピット

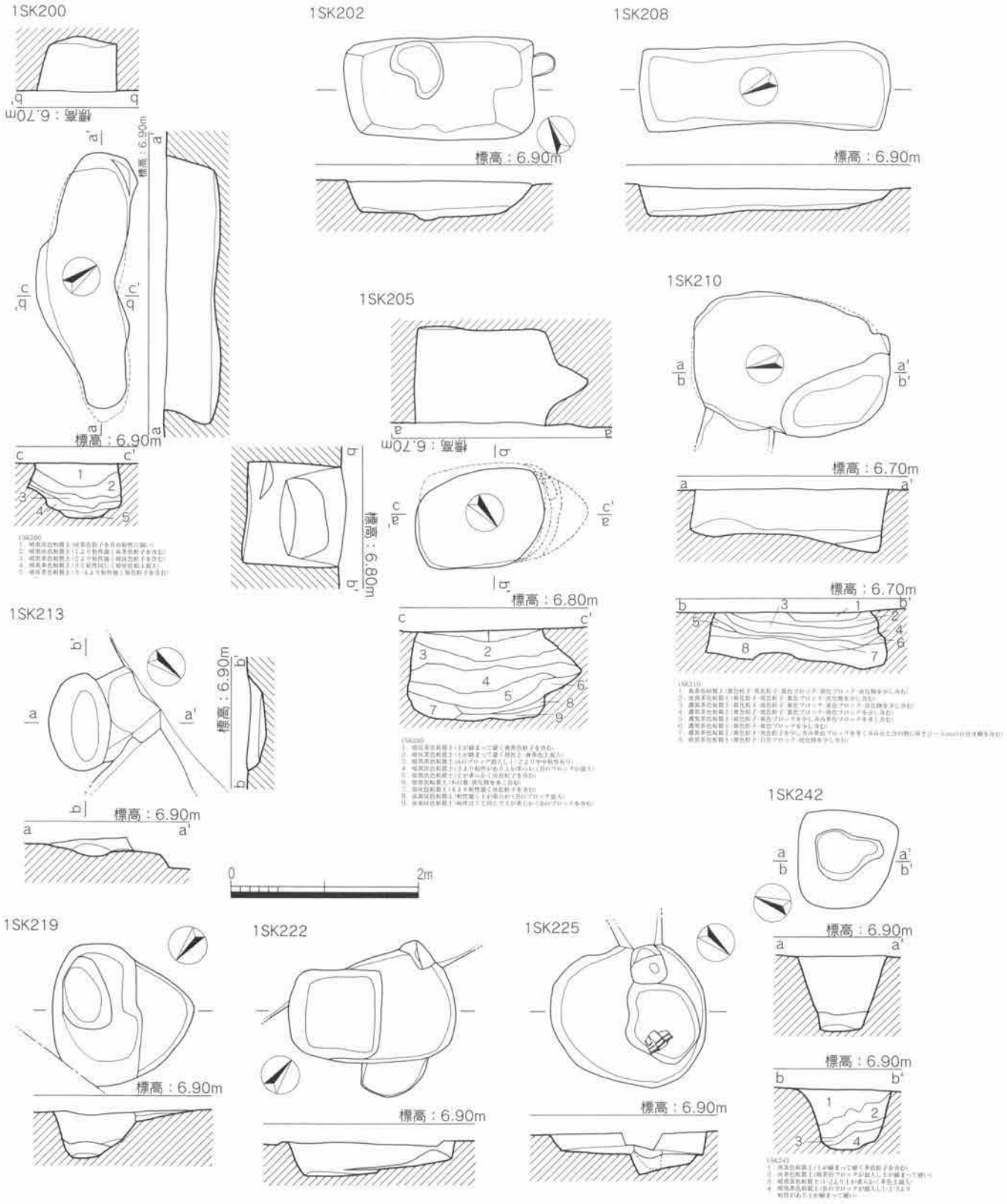


Fig.61　土坑（1SK200・202・205・208・210・213・219・222・225・242）実測図（1/60）

が検出され、長軸2.00m、短軸1.06m、残高は0.32～0.64mを測り、主軸は概ねN—64° 54′ 59″—Wを示す。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

1SK205（Fig.61、Pla.67）

AC7地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。遺構内の北西側面部は検出部から約45cm抉られており、長軸1.47m、短軸1.05m、残高は0.97mを測る。主軸はN—44° 23′ 55″—Wを示し、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）、種子（不明）が出土した。

1SK208（Fig.61、Pla.67）

Y8地区に位置し、平面プランは隅丸長方形状を呈する。底面はほぼフラットであるがレベルは南部から北部へ向かって徐々に低くなる。長軸2.67m、短軸0.84m、残高は0.22mを測り、主軸はN—24° 54′ 17″—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

1SK210（Fig.61、Pla.68）

X7地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。1SK211を切り、底面は南西部へ向かって徐々に深くなっている。長軸1.04m、短軸0.73m、残高は0.48mを測り、主軸はN—7° 58′ 10″—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・片）、磁器（片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

1SK213（Fig.61、Pla.68）

M8地区に位置し、西部は撹乱を受ける。底面は西部と東部に分かれて深さが異なり、幅0.66m以上、残高は0.15～0.20mを測る。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

1SK219（Fig.61、Pla.69）

K9地区に位置した楕円形状の土坑である。遺構内南西部にテラスを認め、幅1.50m前後、残高は0.12～0.52mを測る。遺物は弥生土器（片）が僅かに出土した。

1SK222（Fig.61、Pla.69）

D9地区に位置する。北半部は撹乱を受け、1SP223を切る。平面プランは楕円形状を呈し、遺構内の北東部にテラスを認め、南西部へ向かって徐々に深くなっている。長軸1.78m、短軸1.04m、残高は0.32～0.39mを測り、主軸はN—52° 00′ 05″—Eを示す。遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

1SK225（Fig.61、Pla.70）

L7地区に位置し、平面プランは楕円形状を呈する。南西部は撹乱を受け、底面からは大小2つのピットが検出された。幅1.45～1.66m、残高は0.16～0.45mを測り、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

1SK242（Fig.61、Pla.70）

O8地区に位置し、平面プランは隅丸方形状を呈する。幅1.01～1.03m、残高は0.82mを測り、主に埋土は黒茶色粘質土を基調とし、遺物は皆無であった。

1SK247（Fig.62、Pla.71）

W6地区に位置した不定形な土坑で南東部は調査区外へ展開する。底面の北部はほぼフラットであるが、南西部は更に一段深くなる。長軸3.04m、短軸1.75m、残高は約0.42mを測り、主軸はN—62° 31′ 32″—Wを示す。黒茶色粘質土を基調とする埋土で、遺物は弥生土器（甕・片）、石器（サヌカイト片・黒曜石片）が出土した。

1SK250（Fig.62、Pla.71）

S6地区に位置した隅丸長方形状の土坑で上層部は撹乱を受ける。遺構内の東部にテラスを認め、西部の底面で多くの土器が集中的に認められた。長軸2.05m、短軸0.97m、残高は約0.15～0.17mを測り、主軸はN—68° 48′ 21″—Wを示す。遺物は弥生土器（甕・壺・片）、須恵器（甕）、石器（サヌカイト片）が出土した。

1SK251（Fig.62、Pla.72）

R7地区に位置した楕円形状の土坑で上層部は撹乱を受ける。長軸1.58m、短軸0.80m、残高は約0.18mを測り、主軸はN—25° 24′ 28″—Eを示す。底面からやや浮いた状態で多くの土器が集中的に認められており、弥生土器（甕・壺・片）が出土した。

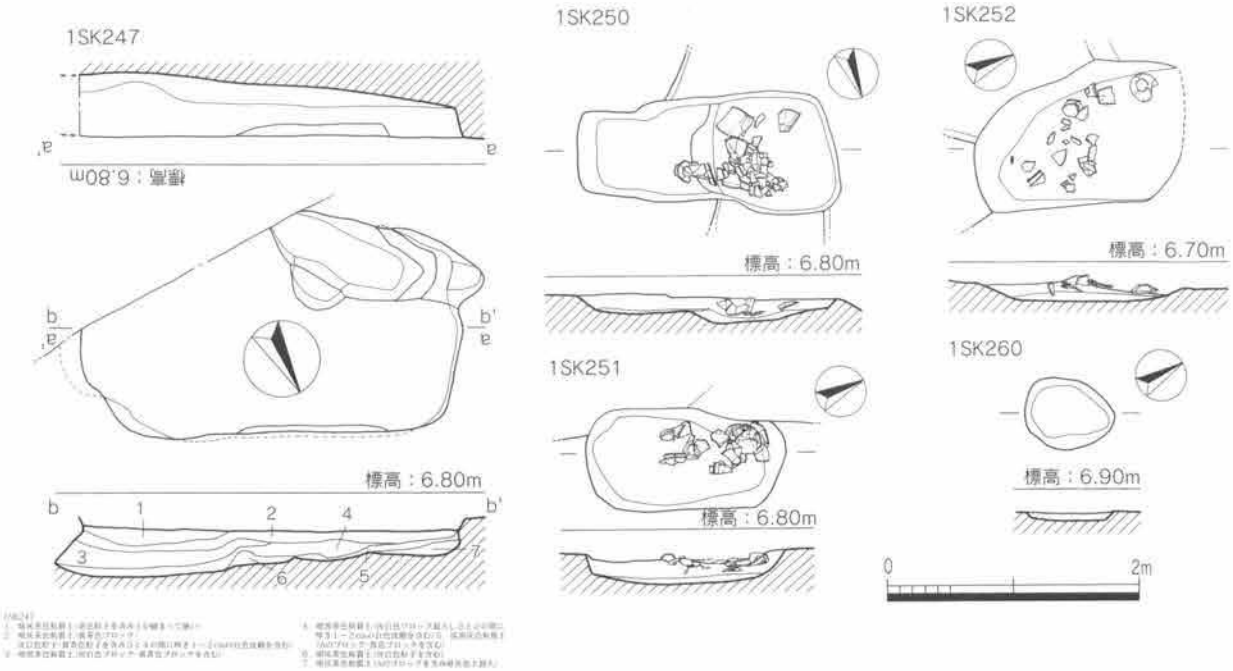


Fig.62　土坑（1SK247・250～252・260）実測図（1/60）

1SK252（Fig.62、Pla.72）

R7地区に位置した楕円形状の土坑で上層部は撹乱を受ける。長軸1.65m、短軸1.13m、残高は約0.15mを測り、主軸はN—22°37′12″—Eを示す。底面からやや浮いた状態で土器が散在的に認められており、弥生土器（甕・片）青磁（片）、石器（サヌカイト片）が出土した。

1SK260（Fig.62）

AG9地区に位置した楕円形状の土坑である。残存状況は極めて悪く、幅0.56～0.70m、残高は約0.05mを測る。出土遺物は皆無であった。

(3) 出土遺物

溝

1SD300（Fig.63、Pla.73）

弥生土器

甕（1）　底部の細片で、上底を呈し底径6.2cmを測る。底部のくびれ部と外底はヨコナデ、その他はナデである。

石器

石槍（2）　石材は片岩製で、長さは7.1cm、最大幅2.9cm、重さは16.7gである。今回は石槍としたが石庖丁の未完成品の可能性もある。

石斧（3）　表面の左側刃部の細片で現存の重さは47.0gを量る。石材は砂岩製若しくは泥岩製の磨製石斧で刃部は蛤刃と思われる。

円盤状石器（4）　石材は片岩製で最大径6.4cm、厚さ0.8cm、重さ55.5gである。紡錘車の未完成品とも考えられる。

石庖丁（5～9）　5～9の石材は全て片岩製である。5は周縁に粗く整形加工を施した加工石器の剥片で現存の重さは10gを量る。6は周縁に粗く整形加工を施し、紐部の穿孔が表裏面から穿たれている。内孔径は0.4cm前後で、重さは33.0gを量る。7は表面の右半部を欠損した剥片である。周縁に粗く整形加工を施し、紐部の穿孔を表裏面から穿つ。内孔径は0.5cm前後で、現存の重さは56.2gを量る。8は表面の紐部から左端部を欠損する。紐部は両面から穿たれており、内孔径は0.5cm前後を量る。周縁に粗く整形加工が施され、現存の重さは102.0gを量る。9は周縁に粗く整形加工が施された剥片である。穿孔は穿たれておらず、現存の重さは176.6gを量る。

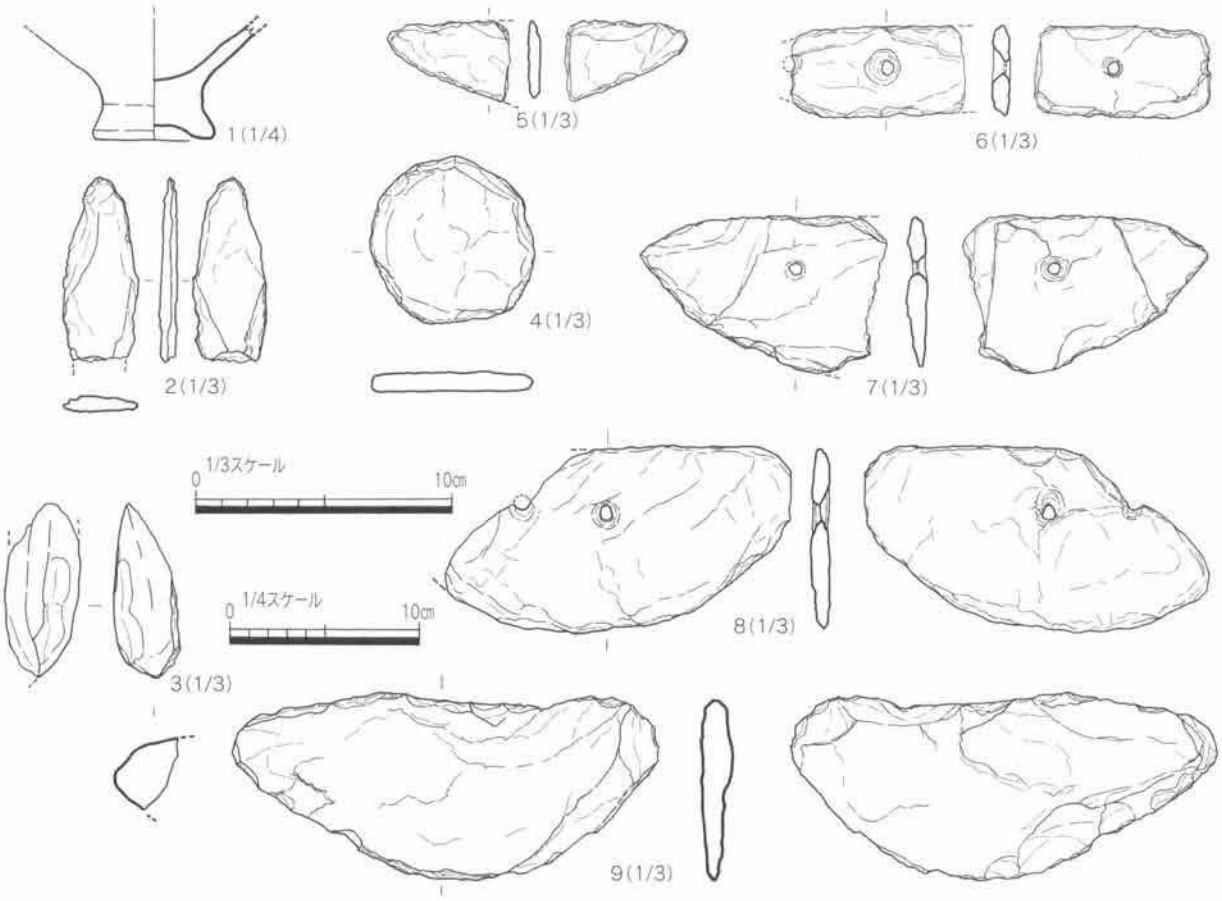


Fig.63　溝（1SD300）出土遺物実測図（1/3・1/4）

土坑

1SK200（Fig.64、Pla.73）

弥生土器

甕（10・11）　10は如意状口縁を呈した口縁部の細片である。調整は口縁部内外面と体部外面は細かい刷毛目、体部内面はナデである。11は口縁部とその下位に刻目三角突帯を貼り付ける。口縁部内外面と突帯部はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面は磨耗のため調整不明。

鉢（12）　口縁端部は刻目突帯を施し、口径24.8cm、底径8.3cm、器高14.5cmを復原する。口縁部はヨコナデ、その他の内外面はミガキで、底部外面の一部には工具ナデと指押さえの調整が施される。

1SK208（Fig.64、Pla.74）

弥生土器

壺（13）　口径15.0cmを復原し、口縁部内外面はヨコナデ、頸部内外面はナデ、体部外面はミガキ、体部内面は指押さえ後工具ナデである。

1SK210（Fig.64、Pla.74）

弥生土器

蓋（14）　絞られたつまみ部の径は7.4cmを測り、内面には煤が付着する。つまみ部外面はヨコナデ、天井部外面は刷毛目、内面はナデの調整である。

甕（15～18）　15は口縁部は如意口縁を呈し、その下端には三角突帯が貼付けられる。口径は20.0cmを測り、口縁端部と三角突帯には丁寧な刻目が施される。口縁端部と外面はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面は刷毛目の調整である。体部外面には煤が付着する。16・17は底部の細片で平底を呈する。16は底径9.1cm、17は8.2cmを測る。18は大型甕で口径45.15cm、器高52.50cm、底径11.85cmを復原

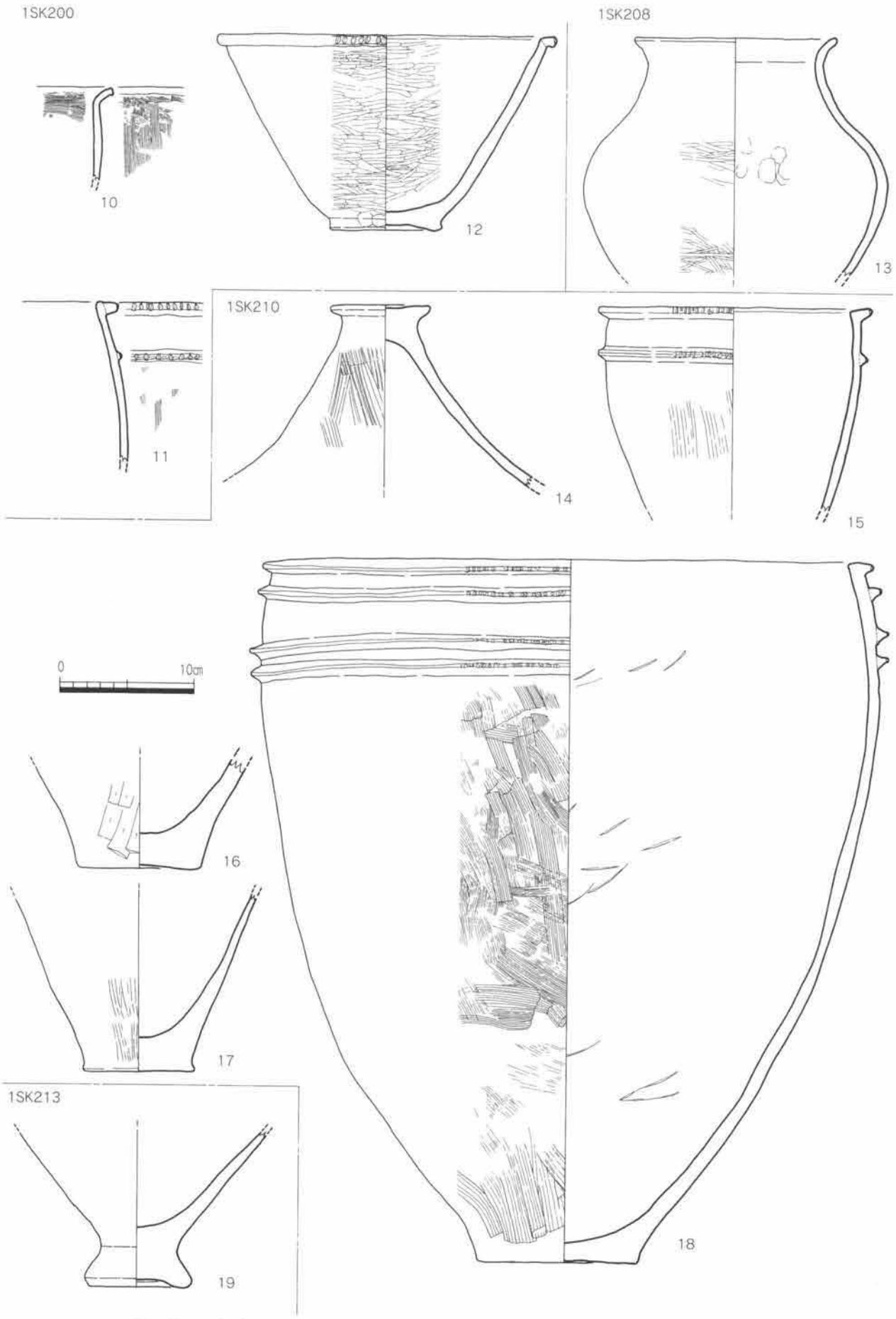


Fig.64　土坑（1SK200・208・210・213）出土遺物実測図（1/4）

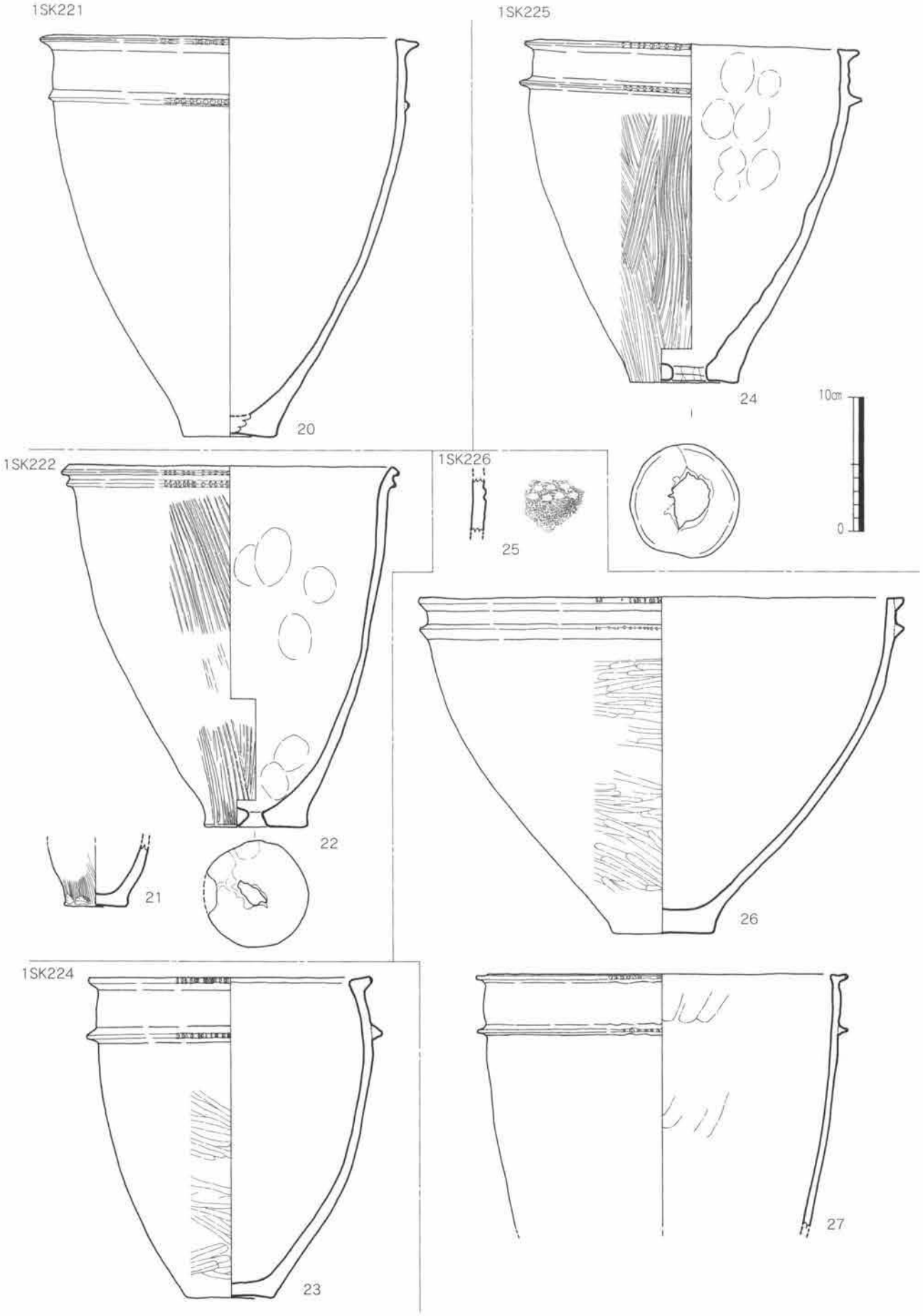


Fig.65　土坑（1SK221・222・224～226）出土遺物実測図（1/4）

し、口縁部には刻目三角突帯が4条施される。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面は工具ナデの調整である。外面の広い範囲で煤が付着する。

1SK213（Fig.64、Pla.74）

弥生土器

甕（19）　絞り込まれた底部に上げ底を呈し、底径は7.95cmを測る。器面はナデ若しくはヨコナデの調整である。

1SK221（Fig.65、Pla.74）

弥生土器

甕（20）　復原時は接点のない別個体であったが、図面上で復原した。口縁部とその下位に刻目三角突帯を施し、口径28.0cm、底径7.0cm、器高29.7cmを復原する。口縁部はヨコナデ、体部外面と体部から底部にかけての内面はナデ、底部外面はヨコナデである。外面には煤が薄く付着する。

1SK222（Fig.65、Pla.74）

弥生土器

甕（21・22）　21は小型甕の底部で底径4.5cmを測る。内面はナデ、外面は刷毛目の調整が施される。22は口径24.9cm、底径7.7cm、器高26.8cmを測る。口縁端部には2条の刻目三角突帯を施し、底部中央には焼成後に施された穿孔が認められる。突帯部はヨコナデ、内面は指押さえ後ナデ、外面は刷毛目の調整で口縁部外面には煤が付着する。

1SK224（Fig.65、Pla.74）

弥生土器

甕（23）　口径20.6cm、底径6.3cm、器高23.8cmを測り、口縁部とその下位には刻目三角突帯が施される。底部は平底を呈し、突帯部はヨコナデ、体部上位の内外面は工具ナデ、体部下位の外面は工具ナデ後粗いミガキで体部下位内面は調整不明である。体部外面には薄く煤が付着する。

1SK225（Fig.65、Pla.74）

弥生土器

甕（24）　口径24.8cm、底径8.05cm、器高25.15cmを測る。口縁部とその下位には刻目三角突帯が施され、底部には焼成後に施された穿孔が認められる。突帯部はヨコナデ、体部内面の上位は指押さえ、体部内面の下位はナデ、体部外面は刷毛目の調整である。口縁部から体部にかけての外面に薄く煤が付着する。

1SK226（Fig.65、Pla.74・75）

縄文土器

鉢（25）　細片で外面上位には刺突文が施される。外面下位は細かな刷毛目、内面はナデの調整が施される。

弥生土器

甕（26・27）　26は浅形の甕で口径36.0cm、底径7.4cm、器高25.0cmを復原する。底部は平底を呈し、口縁部とその下位には刻目貼付突帯が施される。突帯部はヨコナデ、内面はナデ、体部外面は横方向のミガキ、底部外面はナデの調整が認められる。27は口径27.45cmを測り、口縁部とその下位には刻目突帯が施される。突帯部はヨコナデ、体部外面は工具ナデ、体部内面はナデ後指押さえである。

1SK231（Fig.66、Pla.75）

石器

石鏃（28）　五角形状を呈した抉りの深い石鏃で未製品の可能性がある。表面にはネガティヴ面、裏面にはポジティヴ面を大きく残し、抉り部には二次加工が施される。石材は黒曜石製で重さは2.4ｇを量る。

1SK243（Fig.66、Pla.75）

石器

石鏃（29）　石材は黒曜石製で正三角形状を呈した抉りの浅い石鏃である。表面の中央部に自然面を僅かに残し、表面の下位にはネガティヴ面、裏面の中央部にはネガティヴ面を認める。周縁の一部に二次

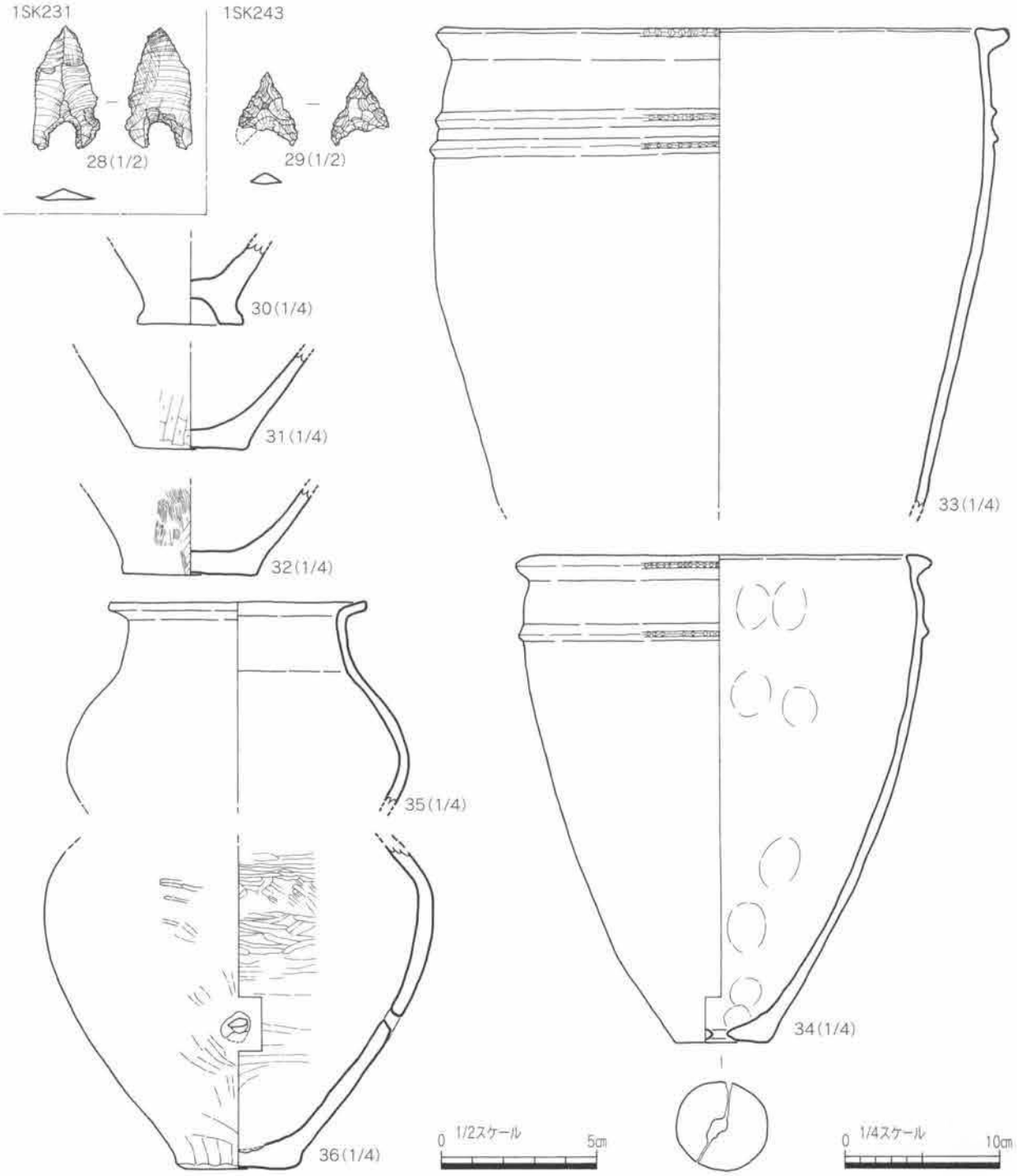


Fig.66　土坑（1SK231・243）出土遺物実測図（1/2・1/4）

加工を施して刃部が作られている。重さは0.9ｇを量る。

弥生土器

甕（30～34）　30～32は底部の細片である。30は上げ底を呈し底径は6.8cmを復原する。31・32は平底を呈し31は底径7.3cm、32は底径8.6cmを測る。33は口縁端部とその下位に断面三角状の刻目突帯が施され、口径は36.75cmを測る。突帯部はヨコナデ、器面の内外面は工具ナデの調整である。34は口径26.7cm、底径5.9cm、器高31.3cmを復原し、口縁端部とその下位に断面三角状の刻目突帯が施される。底部中央には焼成後に施された穿孔が認められ、口縁部付近の外面には煤が付着する。磨耗のため調整不明な点が多い。

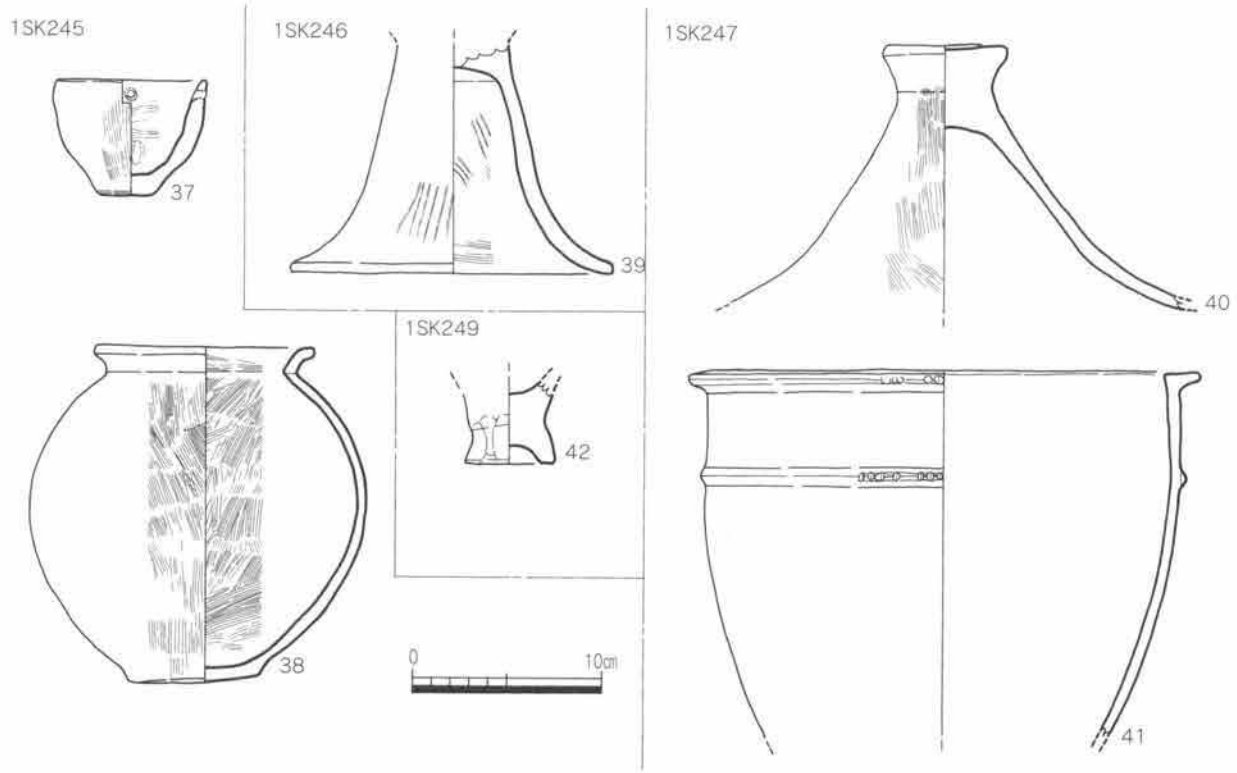


Fig.67　土坑（1SK245～247・249）出土遺物実測図（1/4）

壺（35・36）　35は口径16.55cmを復原する。肩部から口縁部にかけてはやや内傾し、口縁端部は大きく外反する。器面は磨耗しているため調整不明である。36は体部から底部にかけての破片で、底径8.0cm、最大体部径は24.9cmを復原する。体部下位には内孔径0.7～1.2cmの穿孔が認められ、焼成後に穿たれたものであることがわかる。器面の内外面には横方向のミガキが施される。

1SK245（Fig.67、Pla.75）

弥生土器

小鉢（37）　ほぼ完形で口径7.8cm、底径3.0cm、器高6.1cmを測る。口縁部には焼成前に施された内孔径0.4cmを測る穿孔を認める。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は刷毛目及びナデ、底部内外面はナデの調整である。

甕（38）　口径11.5cm、底径6.9cm、器高17.6cmを測る。口縁部は「くの字」状に屈曲し、端部は大きく外反する。胴部は球形状を呈し、底部はやや丸みを帯びた平底を呈する。口縁端部から外面にかけてはヨコナデ、口縁部から体部下位にかけての内面と肩部から底部にかけての外面は刷毛目、底部内面はナデである。

1SK246（Fig.67、Pla.75）

弥生土器

高坏（39）　脚部の細片で脚部径17.0cmを復原する。脚部上位の外面は工具ナデ、下位は縦方向の刷毛目で脚部内面はナデ及び刷毛目、脚端部内外面はヨコナデである。

1SK247（Fig.67、Pla.75・76）

弥生土器

蓋（40）　つまみ径は6.6cmを測り、つまみ部外面の中央部はナデ、つまみ端部外面はヨコナデ、天井部外面は刷毛目、内面はナデの調整である。つまみ部外面には僅かに煤が付着する。

甕（41）　口縁部とその下位に刻目三角突帯を施し、口径は27.0cmを測る。突帯部はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面は調整不明である。口縁部外面には煤が付着する。

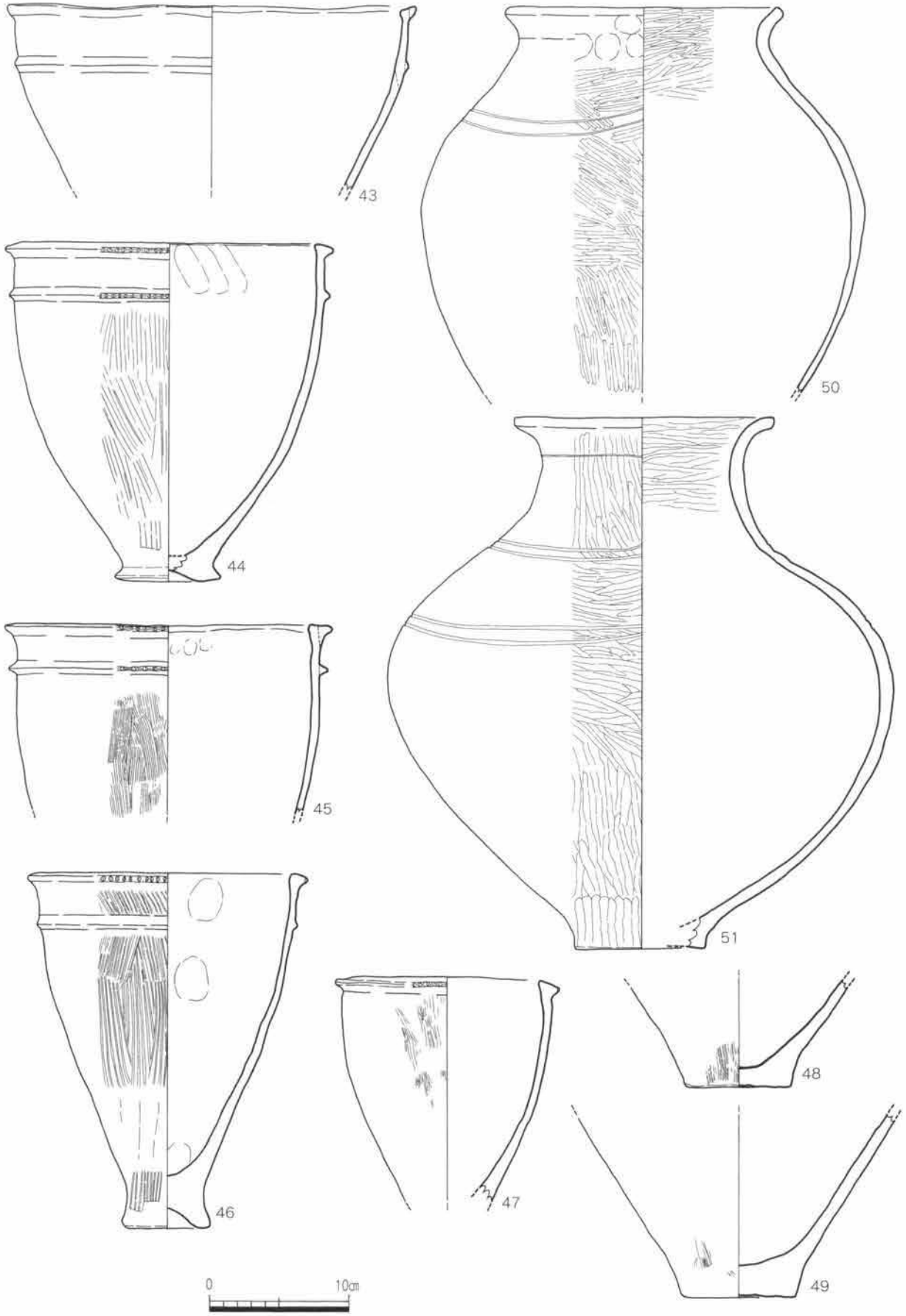


Fig.68　土坑（1SK250）出土遺物実測図（1/4）

1SK249（Fig.67、Pla.76）

弥生土器

甕（42）　甕のミニチュアで底部は上げ底を呈する。底径2.3cmを測り、内外面の調整はナデである。

1SK250（Fig.68、Pla.76）

弥生土器

甕（43～49）　43は口縁部とその下位に貼付三角突帯が施され、口径は29.3cmを復原する。口縁部内外面はヨコナデ、その他は磨耗のため調整不明である。44は口径23.4cm、底径7.6cm、器高24.1cmを復原する。口縁部とその下位に刻目三角突帯を施し、底部は絞り込まれた上げ底を呈する。口縁部と突帯部はヨコナデ、口縁部内面は指押さえ、体部から底部にかけての外面は刷毛目、その他は磨耗のため調整不明である。体部外面の一部で煤が付着する。45は口径23.4cmを復原し、口縁部とその下位に刻目三角突帯を施す。口縁端部は平坦面を呈し、口縁端部と突帯部はヨコナデ、口縁部内面は指押さえ、体部外面は縦方向の細かい刷毛目、体部内面はナデである。体部外面には僅かに煤が付着する。46は口径20.0cm、底径6.3cm、器高25.2cmを測る。口縁部には刻目三角突帯、口縁部下位には三角突帯が施され、底部はやや絞り込まれた上げ底を呈する。器面外面には縦方向の刷毛目が施されるが、内面は磨耗のため調整不明である。47は口径16.0cmを測り、口縁部には刻目三角突帯を施す。体部上位では僅かに縦方向の刷毛目を認めるが全体的に磨耗しているため不明瞭である。48・49は平底を呈した底部の細片で、48は底径7.6cm、49は8.25cmを測る。

壺（50・51）　50は口径20.0cm、胴部最大径32.0cmを復原する。肩部から口縁部にかけては緩やかに外反し、肩部外面には2条の沈線が巡る。口縁端部はヨコナデ、口縁部外面は指押さえ、口縁部内面は横方向のミガキ、肩部外面より下位は不定方向のミガキである。51は口径18.7cm、底径9.4cm、器高38.05cm、最大胴部径36.4cmを復原し、肩部の上位と下位に各2条の沈線を施す。肩部から口縁部にかけてはやや肥厚させながら朝顔形に大きく外反する。胴部は偏球形を呈し、底部は平底を呈する。口縁端部から外面にかけてはヨコナデでこれ以外は丁寧なミガキが施されている。

1SK251（Fig.69、Pla.76・77）

弥生土器

甕（52～55）　52～54の口縁部とその下位には刻目三角突帯が施されている。52は口径21.4cmを測り、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面は刷毛目の調整である。55は底部の細片で底径7.4cmを測る。底部中央には焼成後に施された内孔径2.2cmを測る穿孔が認められる。

壺（56）　口径18.0cm、底径9.4cm、器高32.0cmを復原し、肩部から口縁部にかけては朝顔形に外反する。肩部外面には葉脈状の沈線文を施しており、上位には2条、下位には1条の沈線を巡らせている。器面は著しく磨耗しているが肩部の内外面に横方向のミガキが僅かに認められる。

1SK252（Fig.69、Pla.77）

弥生土器

甕（57・58）　57は口径31.4cm、底径9.0cm、器高38.4cmを測り、口縁部とその下位には刻目三角突帯が施される。端部の刻目突帯は内傾し、口縁部から体部にかけては大きく膨らみをもったプロポーションを呈する。口縁部と突帯部はヨコナデ、体部から底部にかけての外面は刷毛目、内面はナデの調整である。58は平底を呈した底部細片で底径9.4cmを測る。

壺（59）　底部細片で底径9.5cmを測る。

撹乱・表土採集（Fig.69、Pla.77）

石器

石鏃（60～62）　60は正三角形を呈した抉りの浅いサヌカイト製の石鏃である。周縁には粗い二次加工を施して刃部を作り出し、裏面には剥片素材時のポジティヴ面を大きく残す。重さは0.4ｇを量る。61は二等辺三角形を呈した抉りの浅いサヌカイト製の石鏃である。表裏面に粗く二次加工を施して整形するが、表面の中央にはネガティヴ面、裏面の中央下位にはポジティヴ面を僅かに残す。重さは0.9ｇを量る。62は縦長の素材を利用したもので表裏面には細かな二次加工が施されている。周縁には刃部も作り出されており石材は黒曜石製である。重さは2.2ｇを量る。

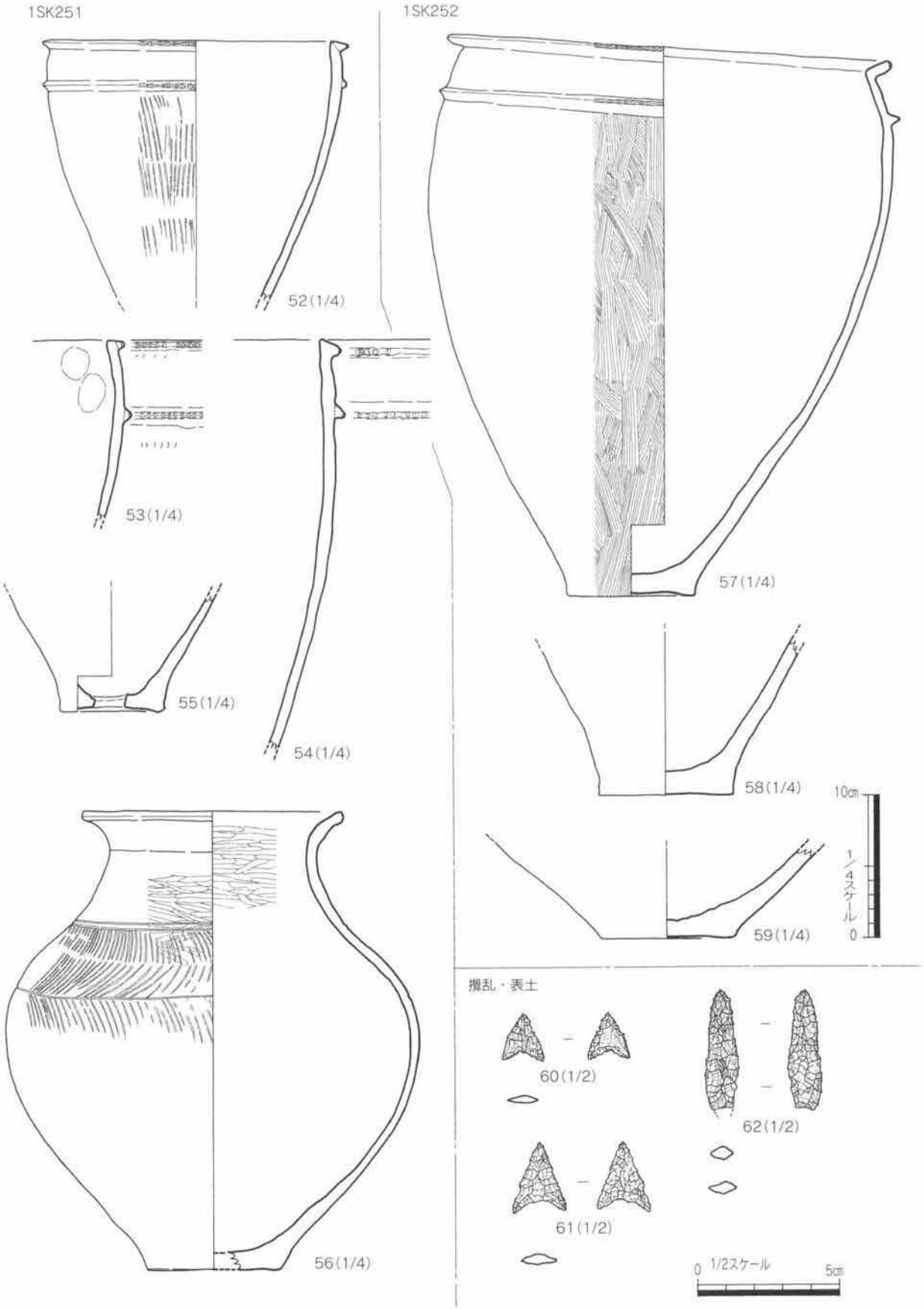


Fig.69　土坑（1SK251・252）、撹乱、表土出土遺物実測図（1/2・1/4）

(4) 小結

今回は東西に細長い狭少な調査区にもかかわらず東側調査区では様々なプランを呈した土坑が確認され、出土遺物からは弥生時代前期後半～中期前半に比定されるものであった。当該期における遺構は既に常用長田遺跡第2次調査箇所で竪穴住居、土坑、墓等が確認されていることが報告されているが、遺構の検出状況からは第2次調査箇所を中心とした周辺部に当地は位置していることが想定される。

今回確認された土坑のうちISK200・205・210・247は土坑内壁面の一部が袋状を呈していることから貯蔵穴として使用された可能性が考えられるものであったが、その大半の土坑からは多くの廃棄土器が認められた。貯蔵穴使用後に廃棄土坑として利用された可能性が考えられる。

調査区中央では南北に貫く流路（1SD300）を検出したがその経路については不明である。周辺では先述した常用日田行遺跡において当該期の流路（2SD1030）が確認されており一連の遺構である可能性が推測される。1SD300は時間的制約のためトレンチ状の掘削に止まったが溝岸からは護岸用の丸杭列や流木とみられる大木が溝底から確認された。出土遺物から中世以降に埋没した流路と想定される。

【参考文献】
『筑後西部第2地区遺跡群（VI）』筑後市文化財調査報告書第50集　筑後市教育委員会　2003

S－番号	遺構番号	地区番号	遺構切り合い（古→新）	備考
200	1SK 200	I8		
201	1SK 201	AG9		
202	1SK 202	AE8		
203	1SK 203	AC9		
204	1SP 204	Y10		
205	1SK 205	AC7		
206	1SP 206	Y10		
207	1SP 207	X10		
208	1SK 208	Y8		
209	1SP 209	X9		
210	1SK 210	X7	211→210	
211	1SK 211	X8	211→210	
212	1SP 212	L9		
213	1SK 213	M8		
214	1SK 214	I9		
215	1SK 215	I10		
216	1SK 216	H10		
217	1SK 217	H9		
218	1SK 218	I9		
219	1SK 219	K9		
221	1SK 221	H7		
222	1SK 222	D9	223→222	
223	1SP 223	D9	223→222	
224	1SX 224	F8		
225	1SK 225	L7		
226	1SK 226	F7	249→226	
227	1SK 227	Q8	227→228	
228	1SK 228	Q8	227→228	
229	1SK 229	D8		

S－番号	遺構番号	地区番号	遺構切り合い（古→新）	備考
230	1SP 230	BC3		
231	1SP 231	BC3		
232	1SP 232	BC3		
233	1SD 233	BB2	233→234	
234	1SP 234	BB3	233→234	
236	1SP 236	AV2		
237	1SP 237	AV2		
238	1SP 238	AU2		
239	1SK 239	AT2		
240	1SP 240	AS2		
241	1SP 241	AS2		
242	1SK 242	O8		
243	1SK 243	AM2	256→243	
244	1SK 244	F6	244→248	
245	1SX 245	I7	245→246	
246	1SK 246	H7	245→246	
247	1SX 247	W6		
248	1SK 248	F6	244→248	
249	1SK 249	F7	253→249→226	
250	1SK 250	S6		
251	1SK 251	R7		
252	1SK 252	R7		
253	1SK 253	F8		
256	1SX 256	AL2	256→243	
257	1SP 257	J8		
258	1SD 258			
259	1SK 259	AI8		
260	1SK 260	AG9		
300	1SD 300	AJ5		

Tab.3　常用長田遺跡（第1次調査）遺構番号台帳

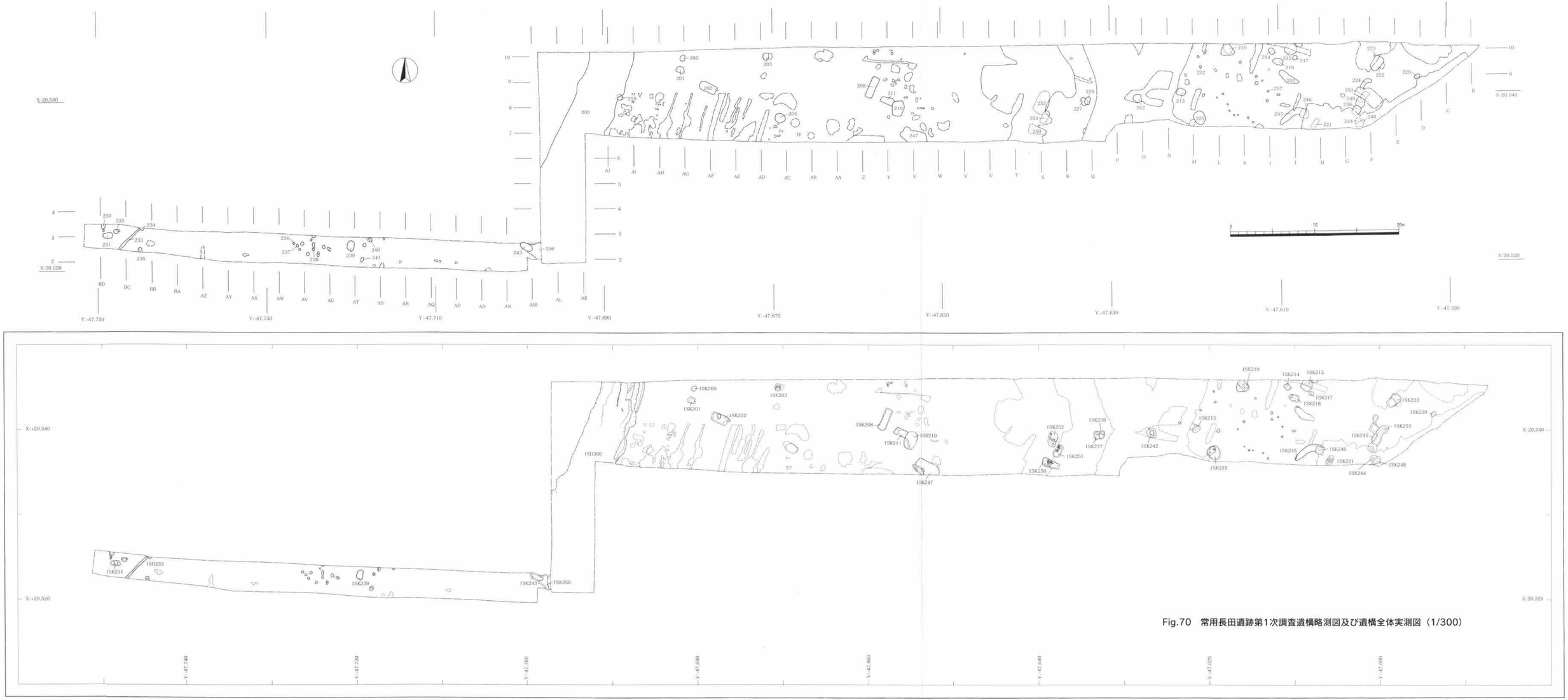


Fig.70　常用長田遺跡第1次調査遺構略測図及び遺構全体実測図（1/300）

１．水田上平霊石遺跡（第１次調査）

(1)はじめに

今回の調査は、ほ場内の切り土により削平される部分について記録保存の措置をとったものである。調査を実施した箇所は筑後市大字常用字上平霊石1430外で、調査区の東端附近を現況溝が斜めに走るため、北東隅に三角形の調査区を分離したような形状の調査区設定となった。現地での調査は平成10年7月14日から9月10日までおこない、調査面積は2,300㎡であった。調査は永見秀徳と立石真二が担当したが、総括は永見が行い立石が補佐する体制とした。また、調査にあたっては奥村太郎・末吉隆弥（現：川崎町教育委員会）の協力を得た。

(2)検出遺構

ほ場整備に伴う調査には珍しく、面的な調査となった。そのせいか、比較的多くの遺構を検出した。番号を付した遺構は、99基に上った。（欠番が1つあるので番号は100まである）検出した遺構は、溝・土坑・掘立柱建物・柵列等がある。以下、遺構種類別に報告するが、特に土坑は1SD001と関連があると思しきものは別に意図的に別けて報告しているので注意されたい。なお、調査区全体図（Fig.97）は完掘時の状況を図化したもので、遺構の切り合い状況等の遺構検出時の情報は、調査区略図（Fig.96）を参照されたい。

Fig.71　水田平霊石遺跡第１次調査地点位置図（1/5,000）

溝状遺構

比較的大規模の溝が2条と、小規模なもの３条がある。前者のうち１条は調査時まで機能していた用水路の一部である。弥生時代のものと、中世以降のものがあるようである。

1SD005（Fig.72、Pla.80・81・82）

調査区のほぼ中央を北北西から南南東に走る溝で、1SD001と概ね平走する。主軸の方位はN－17°－Wであるが、調査区の北端で屈曲し、以北はN－52°－Wとなっている。溝の幅は約0.8mで深さは0.2mを測る。層位は概ね、上層の灰褐色土と下層の暗茶褐色土の２層に分層できるが、部分的には最下層に茶黒褐色粘質土が認められる。

出土遺物は弥生土器（甕・大甕・壷・蓋・鉢・ミニチュア）、石包丁（製品・未製品）、黒曜石（鏃・剥片）、サヌカイト（鏃・錐・剥片）、チャート（剥片）、玄武岩、安山岩、片岩がある。

1SD015（Fig.72）

調査区の東寄りを概ね南北に走る溝で、主軸の方位はN－06°－Wで、幅0.3m、深さ0.2mを測る。

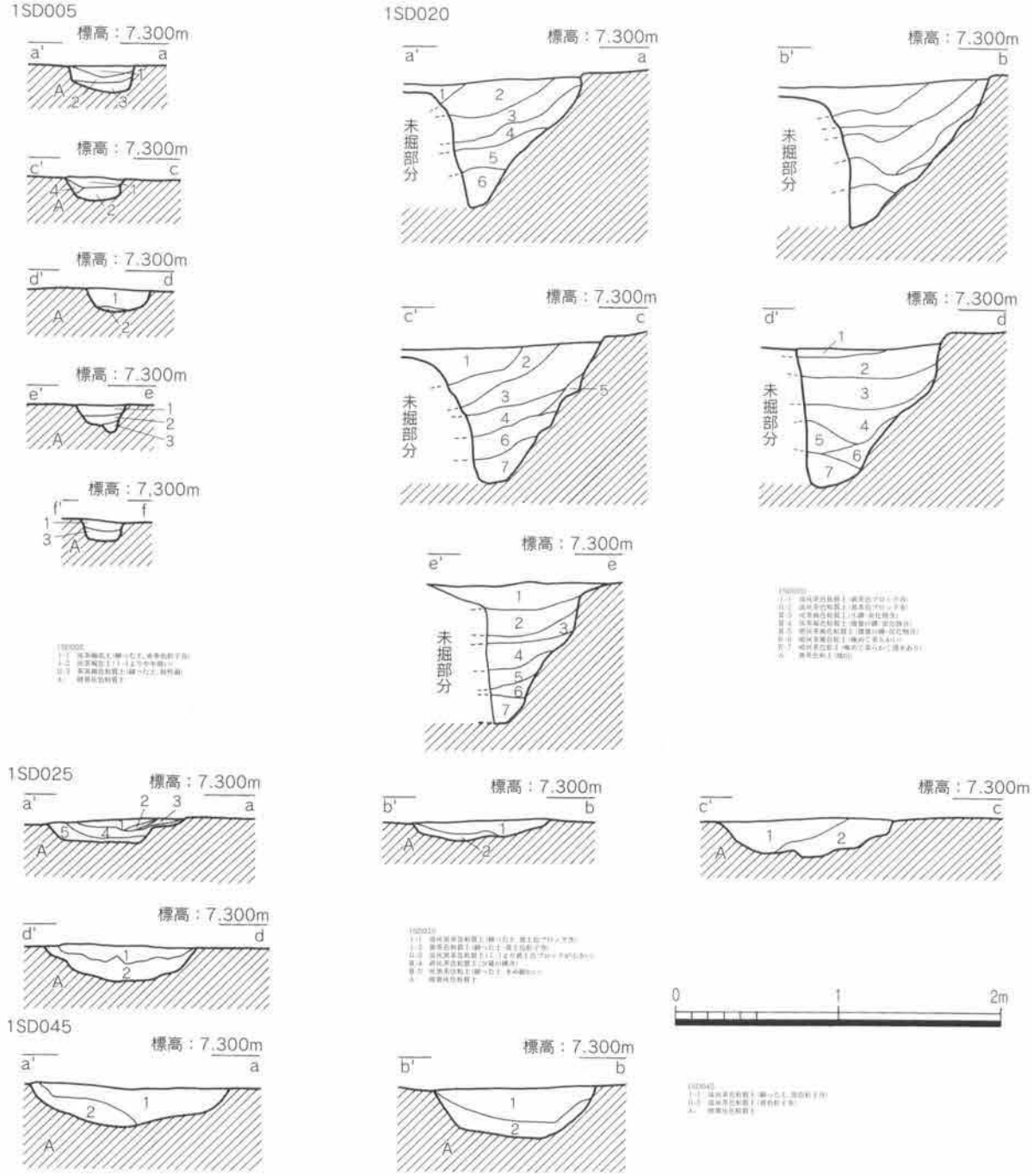


Fig.72　溝状遺構実測図①（1/40）

1SD020・1SD025・1SD065に切られている。

出土遺物は、弥生土器（甕）があるが、小片のため図示できない。

1SD020（Fig.72、Pla.81.82.83.84.88）

調査区の東よりを北北西から南南東に走る溝で、調査区を分断している現況水路の下層遺構にあたるものである。現況水路を挟んで東側の、1SD050と同一の遺構になると思われる。幅は1SD050の東肩まで約４mで、深さ0.8mを測る。また、主軸の方位はN－19°－Wである。層位は概ね７層に分層可能で、下層に掘り進むにつれ粘性が強くなる傾向がある。

出土遺物は、須恵器（甕・片）、土師器（皿・壷・土鍋・土垂）、瓦器（擂鉢）、陶器（椀・甕・片）、磁器（碗・片）、粘土塊、炭、摺石、石英質安山岩、蛇紋岩、硬砂岩、硅岩、片岩、黒曜石（剥片）、サ

ヌカイト（剥片）がある。

1SD025（Fig.72、Pla.84）

調査区の東寄りを北北西から南南西に走る溝で、1SD020の西側に平走する。幅約1.5m深さ0.1mを測り、主軸の方位はN－19°－Wである。層位は上下２層に分層可能であり、上下層ともに淡灰黒茶色粘質土で下層は暗黄茶色粘質土（地山）粒子を含んでいる。調査区北端近くのａ－ａ’では５層に分層可能であるが、他の土層観察畦の土層と整合性が乏しく、同列には扱えない。

出土遺物は、弥生土器（甕）、土師器（皿・甕・椀・不明）、瓦器（鉢）、炭がある。

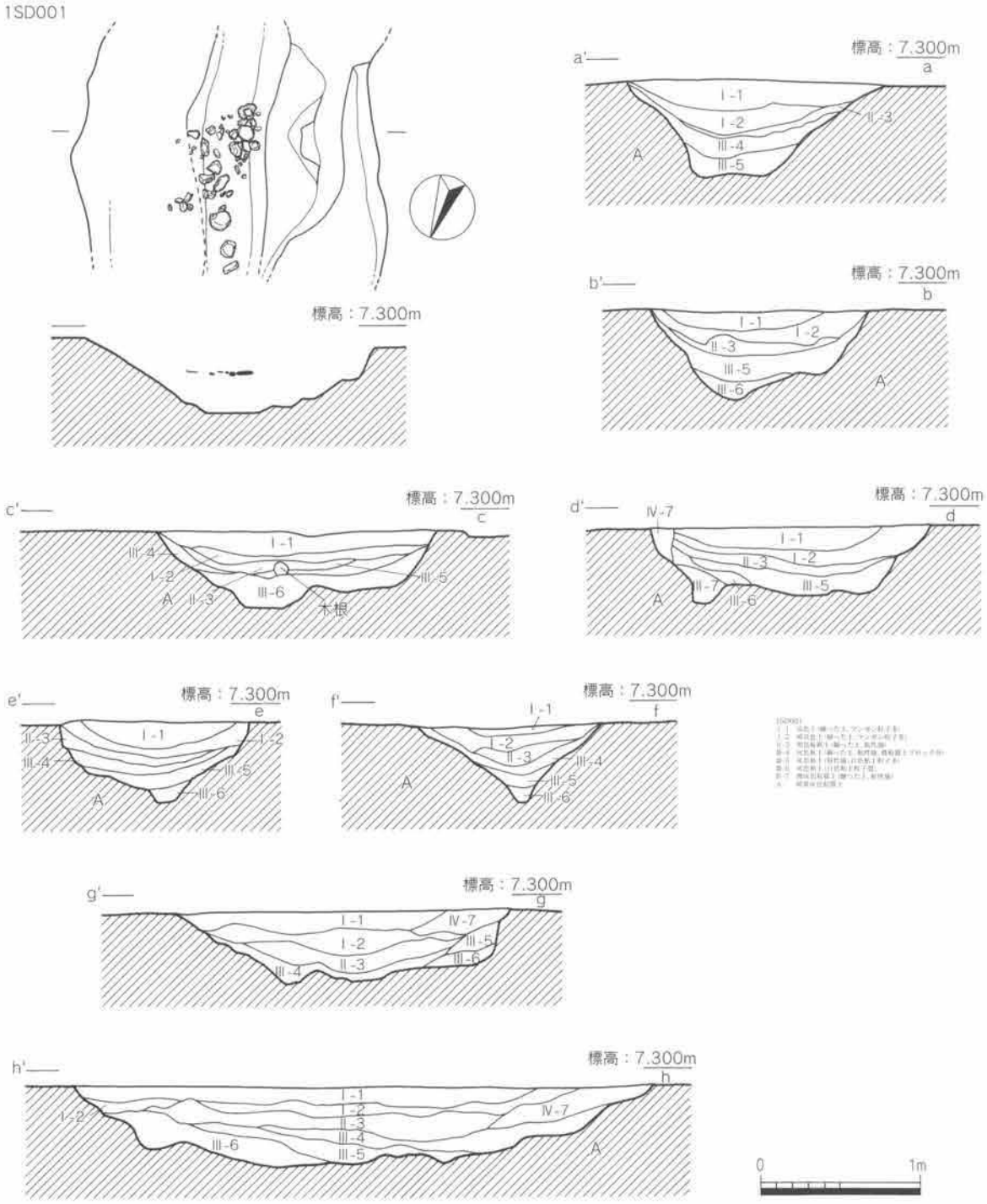


Fig.73　溝状遺構実測図②（1/40）

1SD045（Fig.72、Pla.85）

調査区の東寄りを北北西から南南西に走る溝で、1SD050の東側に平走する。幅約1.5m深さ0.1mを測り、主軸の方位はN－23°－Wである。層位は上下２層に分層可能で、ともに淡灰褐色粘質土であるが下層には暗黄茶色粘質土（地山）粒子を含む。

出土遺物には土師器（皿・甕・土鍋・土管・片）、陶器（甕）、磁器（碗・染付け碗・竜泉窯系青磁碗）、黒曜石（剥片）、片岩（剥片）、安山岩がある。

1SD050（Fig.72）

調査区の東端を北北西から南南西に走る溝で、1SD020と同一の溝であろう。幅約0.5m深さ0.1mを測り、主軸の方位はN－19°－Wである。層位は黒灰色粘質土の単一埋土であった。

出土遺物には土師器（土管・片）、陶器（甕・鉢・片）、染付（片）、プラスチック急須、サヌカイト（剥片）、安山岩（剥片）、硅岩（剥片）、ガラス瓶（片）がある。

1SD001（Fig.73、Pla.80・81・85・86）

調査区のほぼ中央を北北西から南南西に走る溝で、幅約1.5m深さ0.5mを測る。主軸の方位はN－17°－Wである。層位は大分類で３層、細かく見れば最大で７層に分層可能である。また、1SD001には関連遺構と思しき土坑が存在する。1SK035・1SK060・1SK069・1SK070・1SK075等がそれであるが、1SK003・1SK004・1SK007もその可能性を捨てきれない。

出土遺物には弥生土器（甕・大甕・壷・鉢・蓋・ミニチュア）、黒曜石（鏃・剥片）、サヌカイト（鏃・ドリル・剥片）、石包丁（未製品）、凹み石、玄武岩、安山岩、チャート（剥片）がある。

土坑

土坑には、先述したように、1SD001関連の土坑、1SD001関連の可能性を否定できない土坑、その他の土坑がある。報告にあたっては、この順に従っているので留意されたい。

1SK035（Fig.74、Pla.80・88・89）

1SD001関連遺構と思しき土坑である。1SD001に付属する形で、調査区の中位に位置する。南北約1.5m東西約1.0m深さ0.3mを測り、主軸の方位はN－08°－Wである。

出土遺物は、弥生土器（甕・片）、摺石、黒曜石（鏃・剥片）、サヌカイト（剥片）がある。

1SK069（Fig.74）

これも、1SD001関連遺構と思しき土坑である。1SD001に付属する形で、調査区の中位に位置する。南北約0.9m東西約0.9m深さ0.4mを測り、主軸の方位はN－17°－Wである。

出土遺物は、弥生土器（甕・片）がある。

1SK075（Fig.74）

これも、1SD001関連遺構と思しき土坑である。1SD001に付属する形で、調査区の中位に位置する。南北約1.3m東西約0.8m深さ0.4mを測り、主軸の方位はN－18°－Wである。

出土遺物は、弥生土器（甕）があり、底部に籾圧痕が認められる。

1SK060（Fig.75）

これも、1SD001関連遺構と思しき土坑である。1SD001に付属する形で、調査区の中位に位置する。南北1.3m東西0.9m深さ0.4mを測り、主軸の方位はN－71°－Wである。

出土遺物は、弥生土器（甕）がある。

1SK070（Fig.75）

これも、1SD001関連遺構と思しき土坑である。1SD001に付属する形で、調査区の中位に位置する。南北0.8m東西0.3m深さ0.3mを測り、主軸の方位はN－70°－Eである。

出土遺物は、弥生土器（片）がある。

1SK003（Fig.76、Pla.89）

これは、1SD001関連となる可能性を否定できない土坑である。1SD001に付属する形で、調査区の中位に位置する。ただし、1SK035等と異なり、1SD001を切る形で検出された。長軸約0.9m短軸約0.9m深

さ約0.3mを測り、主軸の方位はN－20°－Wである。

出土遺物は、弥生土器（甕）がある。

1SK004

(Fig.76、Pla.90・91)

これも、1SD001関連となる可能性を否定できない土坑である。1SD001に付属する形で、調査区の中位に位置する。1SK003等と同じく、1SD001を切る形で検出された。長軸約1.2m短軸約0.9m深さ約0.3mを測り、主軸の方位はN－24°－Wである。

出土遺物は、検出面で弥生土器（蓋）が、半裁時には弥生土器（甕・蓋）が、Ⅰ層からは弥生土器（甕）・石英質安山岩（片）が、Ⅱ層からは弥生土器（甕）・黒曜石（剥片）が、Ⅲ層からは弥生土器（甕・蓋）がある。

1SK007

(Fig.76、Pla.92・93)

これも、1SD001関連となる可能性を否定できない土坑である。1SD001に付属する形で、調査区の中位に位置する。1SK003等と同じく、1SD001を切る形で検出された。長軸約1.0m短軸約1.0m深さ約0.4mを測り、主軸の方位はN－25°－Wである。

出土遺物は、半裁時には弥生土器（甕）が、Ⅰ層からは弥生土器（甕）・サヌカイト（剥片）がある。

1SK006

(Fig.77、Pla.91・92)

調査区の中央北寄りに位置していて、1SD005を切っている。長軸約1.0m短軸約1.0m深さ約0.4mを測り、主

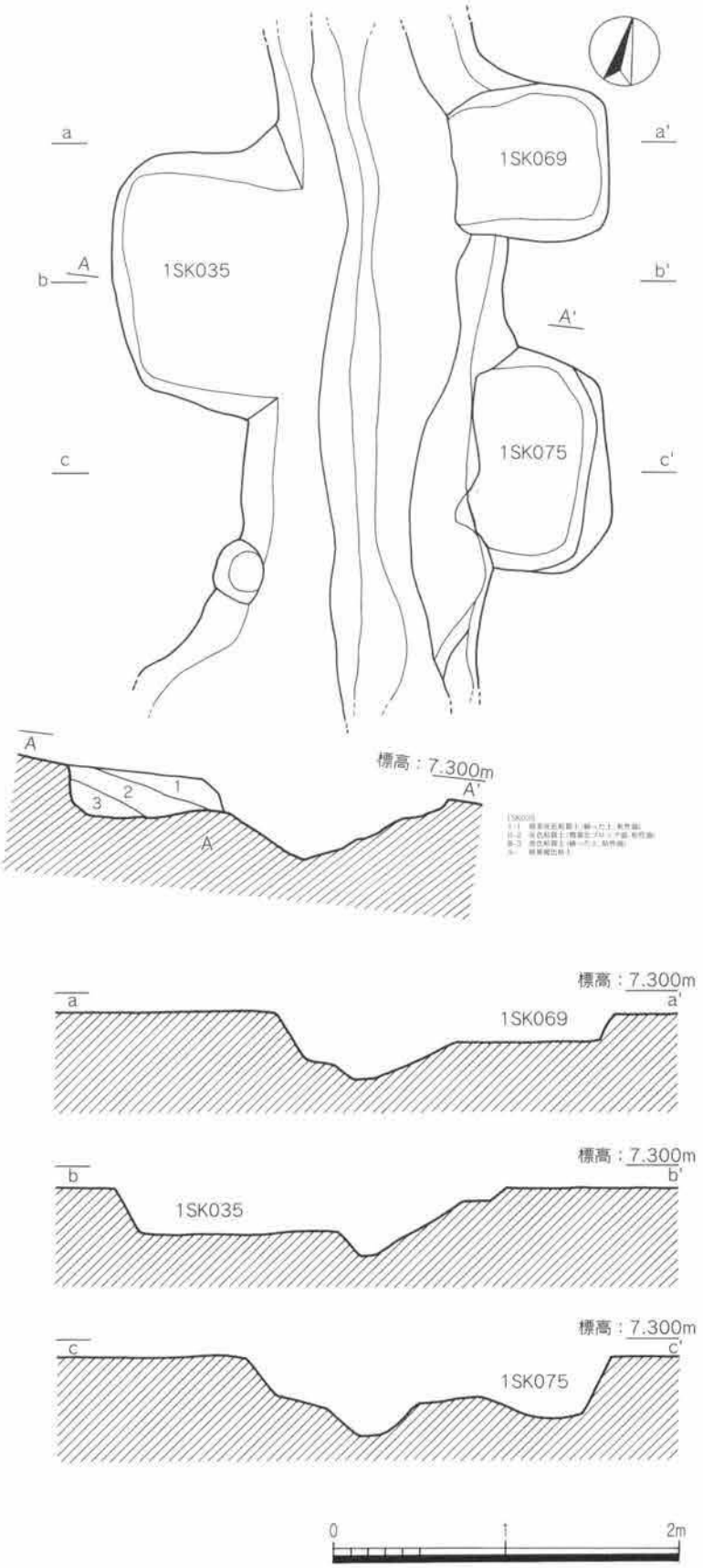


Fig.74　1SD001関連土坑実測図①（1/40）

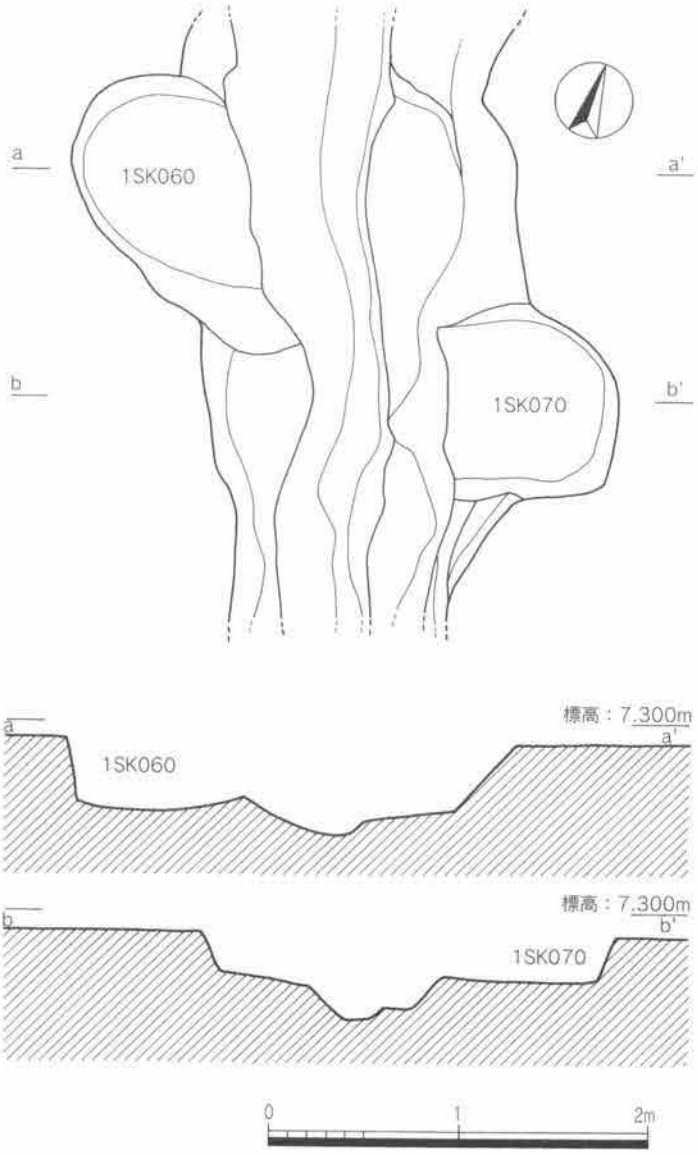


Fig.75　1SD001関連土坑実測図②（1/40）

軸の方位はN－73°－Eである。

出土遺物は、弥生土器（甕・壷）・サヌカイト（剥片）がある。

1SK011（Fig.77、Pla.94）

調査区のほぼ中央に位置していて、土坑群の中では北東隅に位置する。長軸約1.6m短軸約0.8m深さ約0.3mを測り、主軸の方位はN－58°－Eである。

出土遺物は、Ⅰ層からは弥生土器（大甕・甕・蓋・壷）が、Ⅱ層からは弥生土器（壷）がある。

1SK012（Fig.77、Pla.94・95）

調査区の中央南寄りに位置している。長軸約1.5m短軸約1.1m深さ約0.3mを測り、主軸の方位はN－62°－Eである。

出土遺物は、Ⅰ層からは弥生土器（甕・片）・黒曜石（鏃）が、Ⅱ層からは弥生土器（甕・壷）がある。

1SK023（Fig.77、Pla.96）

調査区の中央やや北西寄りに位置している。長軸約0.9m短軸約0.9m深さ約0.3mを測り、主軸の方位はN－44°－Wである。

出土遺物は、Ⅰ層から弥生土器（甕）がある。

1SK024（Fig.77、Pla.96・97）

調査区の中央やや北西寄りに位置している。長軸約0.8m短軸約0.8m深さ約0.2mを測り、主軸の方位はN－43°－Wである。

出土遺物は、弥生土器（甕）がある。

1SK027（Fig.78、Pla.98・99）

調査区の中央やや南西寄りに位置している。長軸約1.1m短軸約1.4m深さ約0.2mを測り、主軸の方位はN－74°－Wである。

出土遺物は、半裁時には弥生土器（甕）が、Ⅰ層からは弥生土器（片）が、Ⅱ層からは弥生土器（片）が、Ⅲ層からは弥生土器（甕・片）・サヌカイト（剥片…非多久産）がある。

1SK028（Fig.78、Pla.99・100）

調査区のやや西寄りに位置している。長軸約1.4m短軸約1.0m深さ約0.2mを測り、主軸の方位はN－23°－Wである。

出土遺物は、半裁時には弥生土器（甕）が、Ⅱ層からは弥生土器（甕・壷・蓋）が、Ⅲ層からは弥生土器（甕・片）がある。

1SK029（Fig.78、Pla.100・101）

調査区の中央やや北西寄りに位置している。長軸約1.7m短軸約1.2m深さ約0.3mを測り、主軸の方位はN－85°－Wである。

出土遺物は、土師器（不明品）・磁器（染付碗）がある。

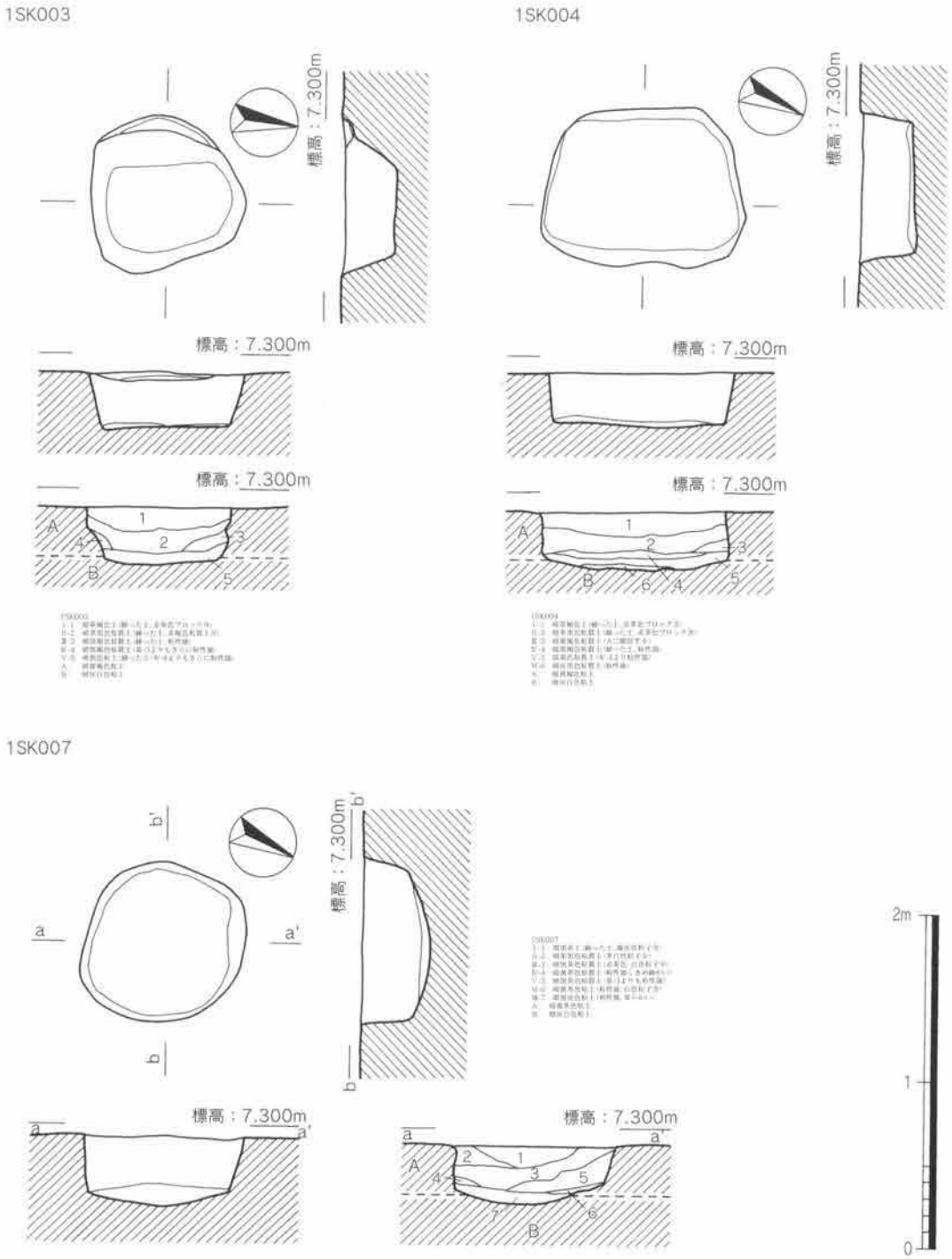


Fig.76　土坑実測図①（1/40）

1SK034（Fig.78、Pla.101・102・103）

調査区の南西に位置している。長軸約1.3m短軸約0.8m深さ0.1mを測り、主軸の方位はN－36°－Eである。

出土遺物は、弥生土器（甕）・黒曜石（鏃）・サヌカイト（剥片）がある。

1SK036（Fig.78、Pla.102・103）

調査区の西寄りに位置している。長軸約1.4m短軸約0.8m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN－46°－Eである。

出土遺物は、半裁時には弥生土器（甕・蓋）が、Ⅰ層からは弥生土器（甕・壷）・サヌカイト（鏃）

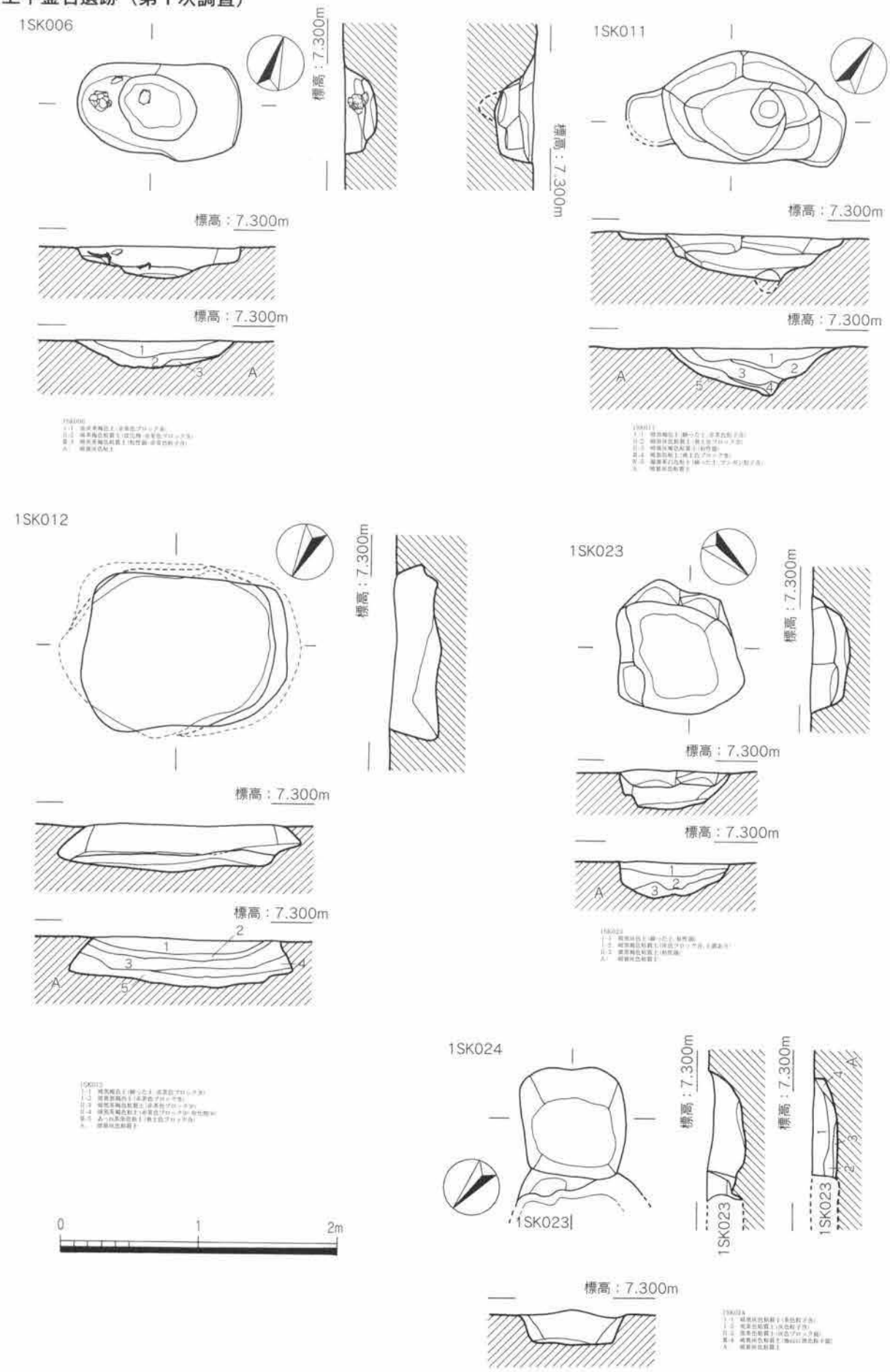


Fig.77　土坑実測図②（1/40）

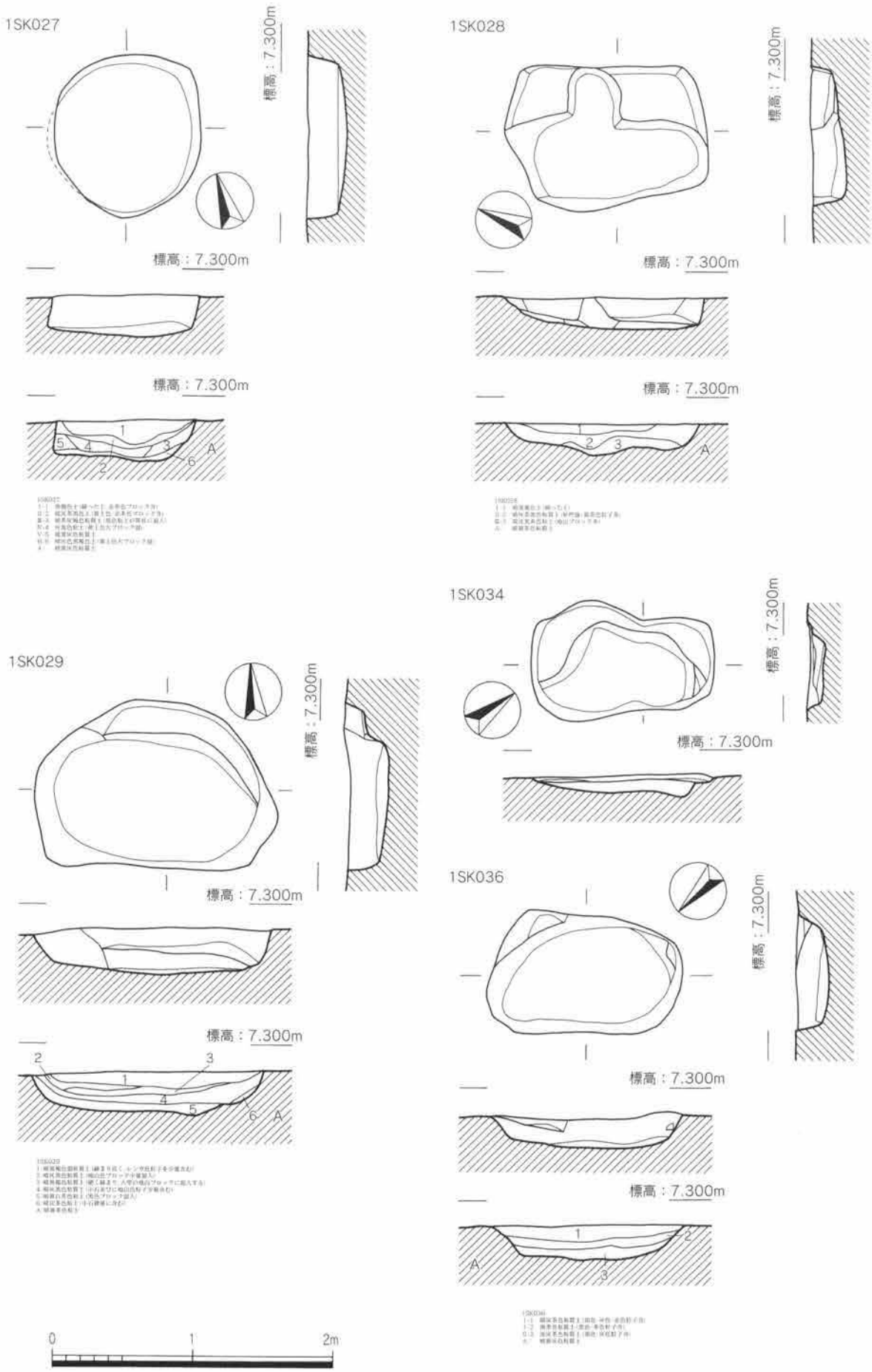


Fig.78　土坑実測図③（1/40）

がある。

1SK037（Fig.79、Pla.104）

調査区の南西に位置している。長軸約1.8m短軸約1.0m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN－62°－Wである。

出土遺物は、半裁時には弥生土器（甕・片）・黒曜石（鏃）が、Ⅰ層からは弥生土器（甕・支脚）・摺石が、Ⅱ層からは弥生土器（甕・壷・蓋・支脚）が、Ⅲ層からは弥生土器（甕・壷・蓋）・サヌカイト（剥片）・安山岩（片）が、Ⅳ層からは弥生土器（甕）・粘土塊がある。

1SK039（Fig.79）

調査区の中央部南寄りに位置している。長軸約0.8m短軸約0.8m深さ0.3mを測り、主軸の方位はN－02°－Eである。

出土遺物は、陶器（片）がある。出土遺物からみて、この土坑だけは時期が随分と新しくなりそうであるので注意されたい。

1SK040（Fig.79、Pla.104・105）

調査区の中央部南寄りに位置している。長軸1.7m短軸1.0m深さ0.3mを測り、主軸の方位はN－24°－Eである。

出土遺物は、半裁時には弥生土器（甕）・サヌカイト（剥片）が、Ⅰ層からは弥生土器（甕・蓋・壷）

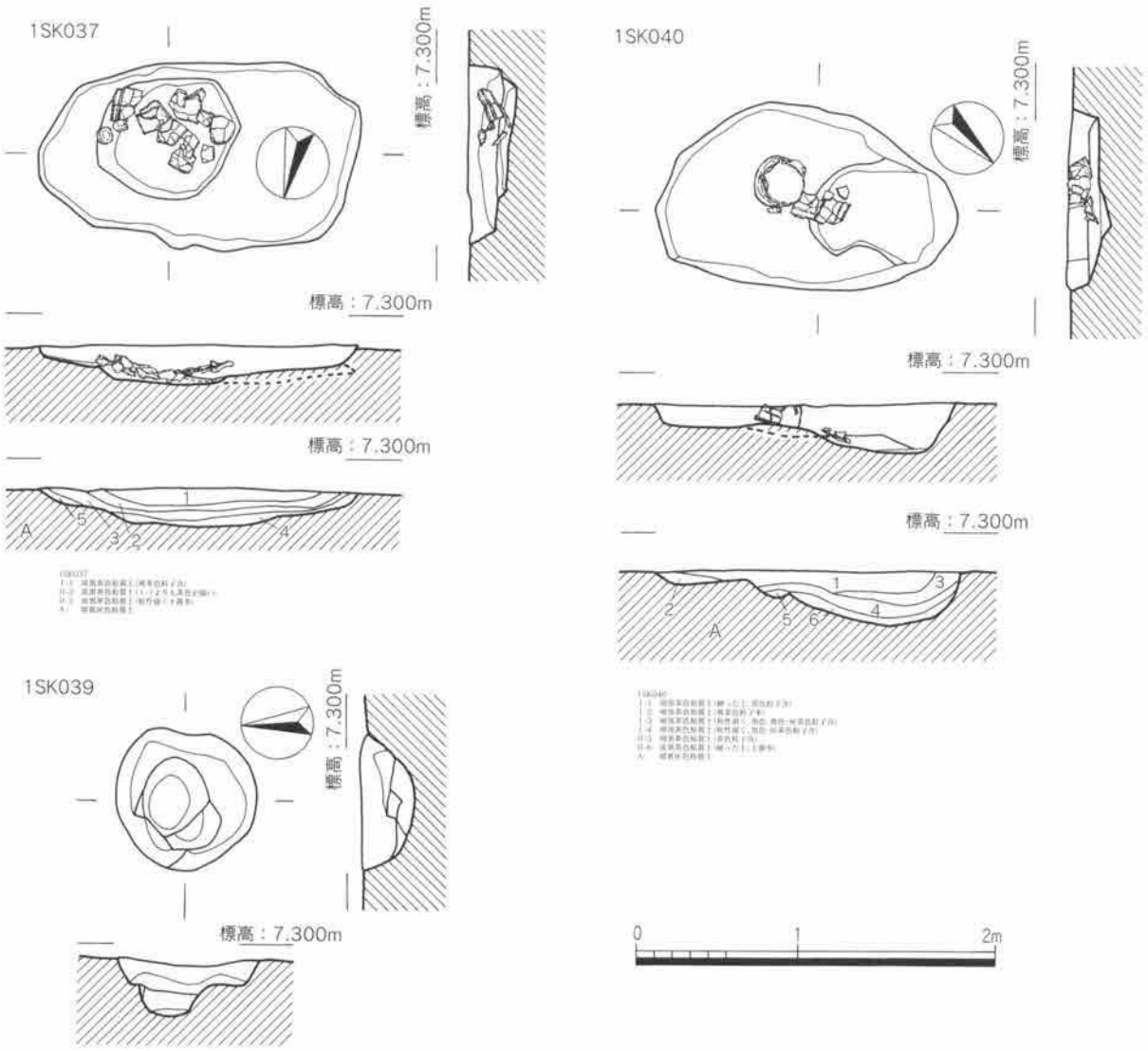


Fig.79　土坑実測図④（1/40）

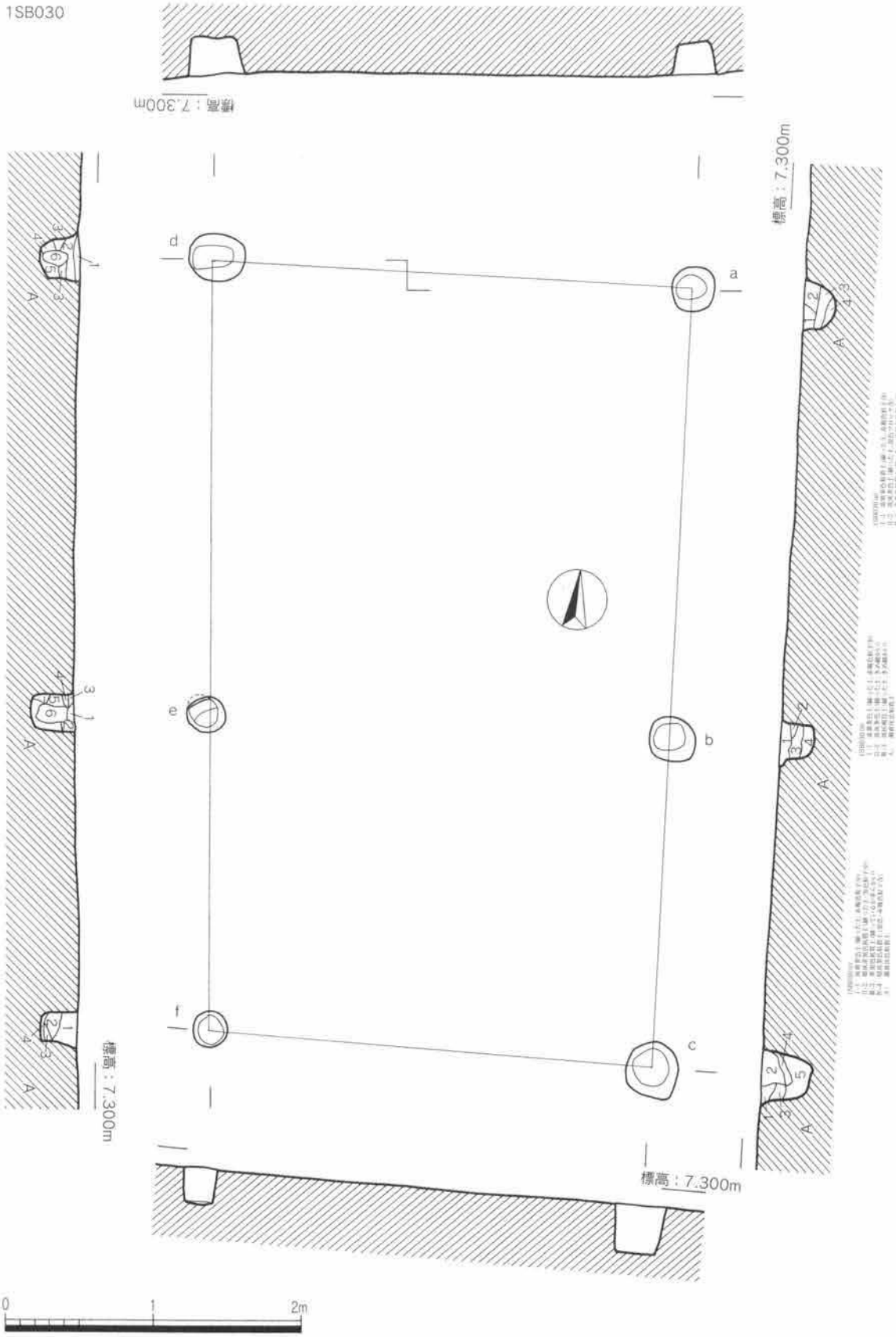


Fig.80　掘立柱建物実測図（1/40）

が、II層からは弥生土器（甕・蓋）・安山岩（片）がある。

掘立柱建物・柵列

今回の調査区では掘立柱建物１棟と柵列１条を確認したのみである。以下、順に報告する。

1SB030（Fig.80、Pla.106・107）

調査区の南東隅に位置している。建物規模は２間×１間で、主軸の方位はN－07°－Wである。柱穴の平面形は略円形で、概ね径0.4m深さ0.3mである。柱間距離は桁行き方向の北側が約3.0m南側が2.1mで、梁行き方向が3.0mである。

出土遺物は、柱穴（d）から土師器（片）・青磁（碗）、柱穴（f）から土師器（不明品）がある。

1SA002（Fig.97、Pla.107・108）

調査区の西寄りにあり、1SD001の下層遺構として検出したが、実際には1SD001を切っていると思われる。平均柱間距離は約0.8mで、柱穴は概ね径約0.8m深さ0.3mを測る。主軸の方位はN－22°－Wである。柱穴（a）と（b）では、瓦状の土器を楚板として埋置しているのが確認された。

出土遺物は、柱穴（a）からは土師質瓦・土師器（不明）が、柱穴（b）からは土師質瓦・土師器（不明）が、柱穴（c）からは土師質瓦・陶器（壺）が認められた。

不明遺構

今回の調査で遺構の性格を規定できないものを不明遺構とした。単独の柱穴もこの項目に含めて報告している。以下、順に報告する。

1SX014（Fig.97）

調査区の南東に位置している。径0.3m深さ0.3mを測る。出土遺物は、土師器（不明品）がある。

1SX016（Fig.97）

調査区の南東に位置している。径0.2m深さ0.3mを測る。出土遺物は、土師器（不明品・片）がある。

1SX026（Fig.97）

調査区の北寄りに位置している。径0.3m深さ0.3mを測る。出土遺物は、磁器（染付）がある。

1SX047（Fig.97）

調査区の北西に位置している。径0.3m深さ0.2mを測る。出土遺物は、土師器（大甕）・凝灰岩（五輪塔？片）・硅岩（片）がある。

1SX095（Fig.97）

調査区の南東隅に位置する落ち込みである。出土遺物は、弥生土器（甕）・土師器（土鍋・鉢・型）・磁器（青磁碗・青磁瓶・水注・染付）・陶器（鉢・擂鉢・皿・蓋・片）・瓦（瓦質・土師質）・片岩（片）・黒曜石（片）・安山岩（片）・砂岩（片）がある。

1SX100（Fig.97）

調査区の東寄りに位置している。近代の撹乱と思われる。長軸約1.0m短軸約0.4m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN－90°－Eである。出土遺物は、安山岩（凹石）・軽石（片）がある。

(3)出土遺物

今回の調査では、全体でパンケース22箱分の遺物が出土した。主体をなすのは弥生土器であるが、石器から陶磁器に至る多種多様な遺物の出土をみた。したがって、報告する際の縮尺は４種類を使用しているが、図中の遺物番号に括弧書きで縮尺を並記しているので注意されたい。以下、遺構別に報告するが、遺物の詳細は出土遺物観察表に記載している。

1SD005（Fig.81・Pla109）

弥生土器の甕とサヌカイト製の鏃である。1は口縁部の細片資料で、口縁部に１条の凸帯を貼付けるが刻目の有無は風化が激しく判然としない。2は体部の細片資料で、胴部に1条の刻目凸帯が貼付けられ

る。3・4は底部の資料で、3は平底、4は上げ底状の底部となる。5はサヌカイト製の鏃である。多久産の石材を使用し、ほぼ完形である。

1SD020（Fig.81、Pla109・110）

6～11は半裁時出土である。6・7は竜泉窯系の青磁碗で、6は口唇部で外反する口縁部を特徴とする。7は体部外面に鎬蓮弁を施していて、内底見込みには「州？山岸？三」の印刻が認められる。7は、1－5・cの碗に該当するか。8・9は土師器の土鍋である。いずれも口縁部は玉縁状である。9は口縁部内面に刷毛目が認められる。10は土師器の土錘である。11は、摺石として使用された安山岩で、両面に擦痕が認め得る。

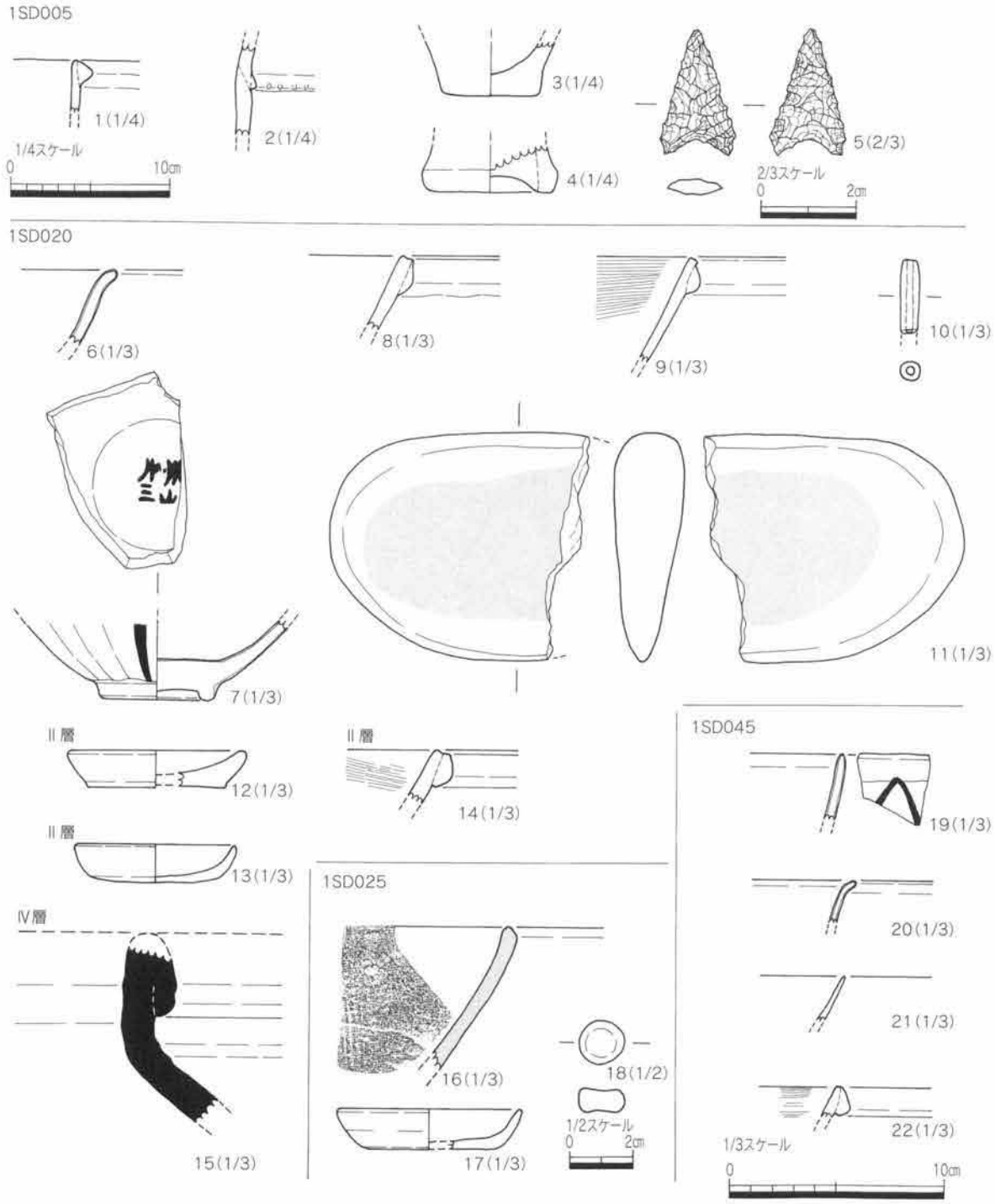


Fig.81　溝状遺構出土遺物実測図①（1/4・2/3・1/3・1/2）

12～14はⅡ層出土である。12・13は土師器の皿で、いずれも底面には糸切り痕が認められる。14は土師器の土鍋で、9と同じく口縁部内面に刷毛目が認められる。

15は、層から出土の須恵器の甕で、口縁部は折り返して丸くおさめ、玉縁状を呈している。

1SD025 (Fig.81、Pla110)

16は瓦器の擂鉢である。口縁部は僅かに内湾した端部の外面側を面取りしたような形状で、内面には不明瞭ながら摺目が残る。17は土師器の皿で、底部は糸切り痕が残る。18はお弾き状の土製品で重量は1.4gである。

1SD045 (Fig.81、Pla110)

19・20は青磁の碗である。19は体部外面に鎬蓮弁を施している。21は土師器の椀である。表面は摩滅が激しい。22は土師器の土鍋である。口縁部内面に刷毛目が認められる。

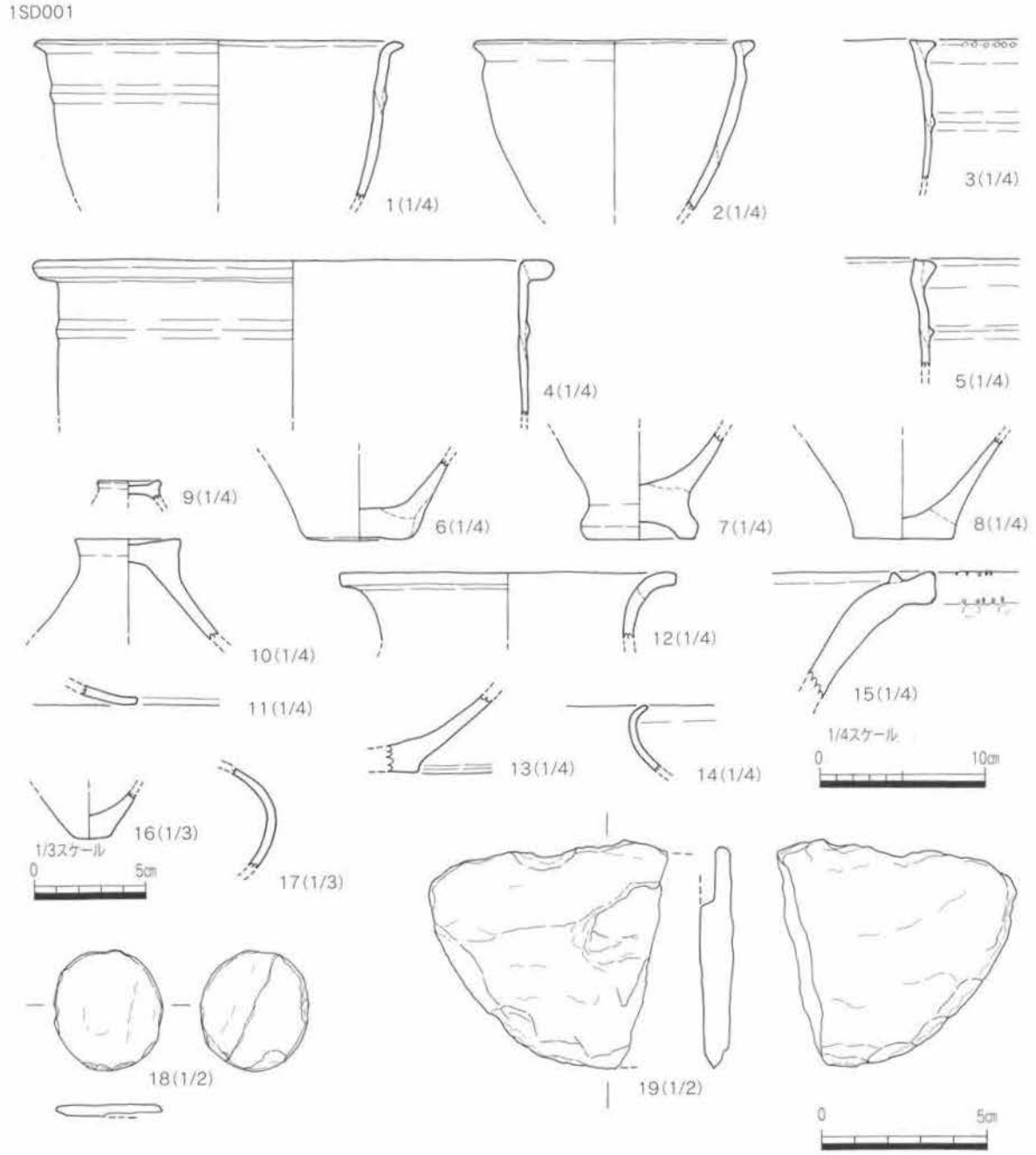


Fig.82　溝状遺構出土遺物実測図②（1/4・1/3・1/2）

1SD001（Fig.82・83・84・85、Pla110・111・112・113・114）

裁割り時出土遺物とⅠ層からⅢ層までの層別の出土に分けられる。以下、裁割り時、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層の順に報告する。

1～35は、裁割り時出土遺物である。1～8は弥生土器の甕である。1は、口縁部を外方に折り曲げる資料で、胴部に凸帯を１条貼付ける。凸帯に刻目は認められない。2は、口縁部に三角凸帯を貼付け、上面が水平になるものである。胴部の凸帯は認められない。3は、口縁部と胴部に断面三角形の刻目凸帯を貼付ける類型である。4は、口縁部に蒲鉾状断面の凸帯を貼付け、胴部には三角凸帯を１条貼付けている。いずれの凸帯にも刻目は認められない。5は、口縁部を外方に折り曲げてから三角凸帯を貼付けている。胴部にも凸帯を貼付けるが、いずれの凸帯にも刻目は認められない。6～8は底部の資料である。7は、上げ底状となる底部を有する。9～11は蓋である。9・10はつまみ部の資料である。11は口縁部の資料であるが、端部は僅かに跳ね上げて丸くおさめている。12～14は壷である。12は口縁部の資料で、口縁端部に明瞭な面を持っている。13は、粘土の接合痕からは判然としなかったが、形状から見て底部円盤接合の痕跡を留めた類型ではないかと思われる。14は、外方に折り曲げる口縁部を特徴と

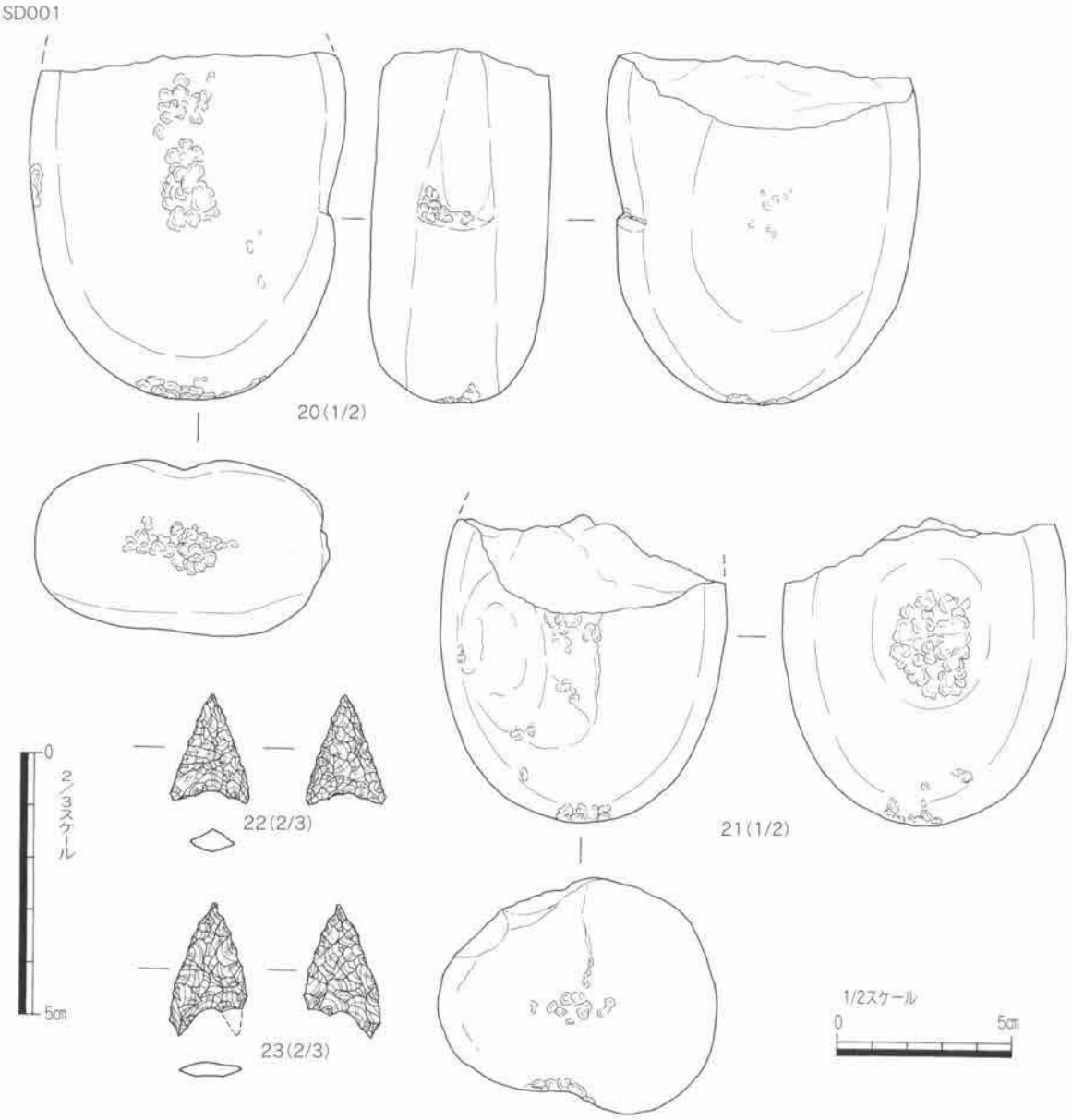


Fig.83　溝状遺構出土遺物実測図③（1/2・2/3）

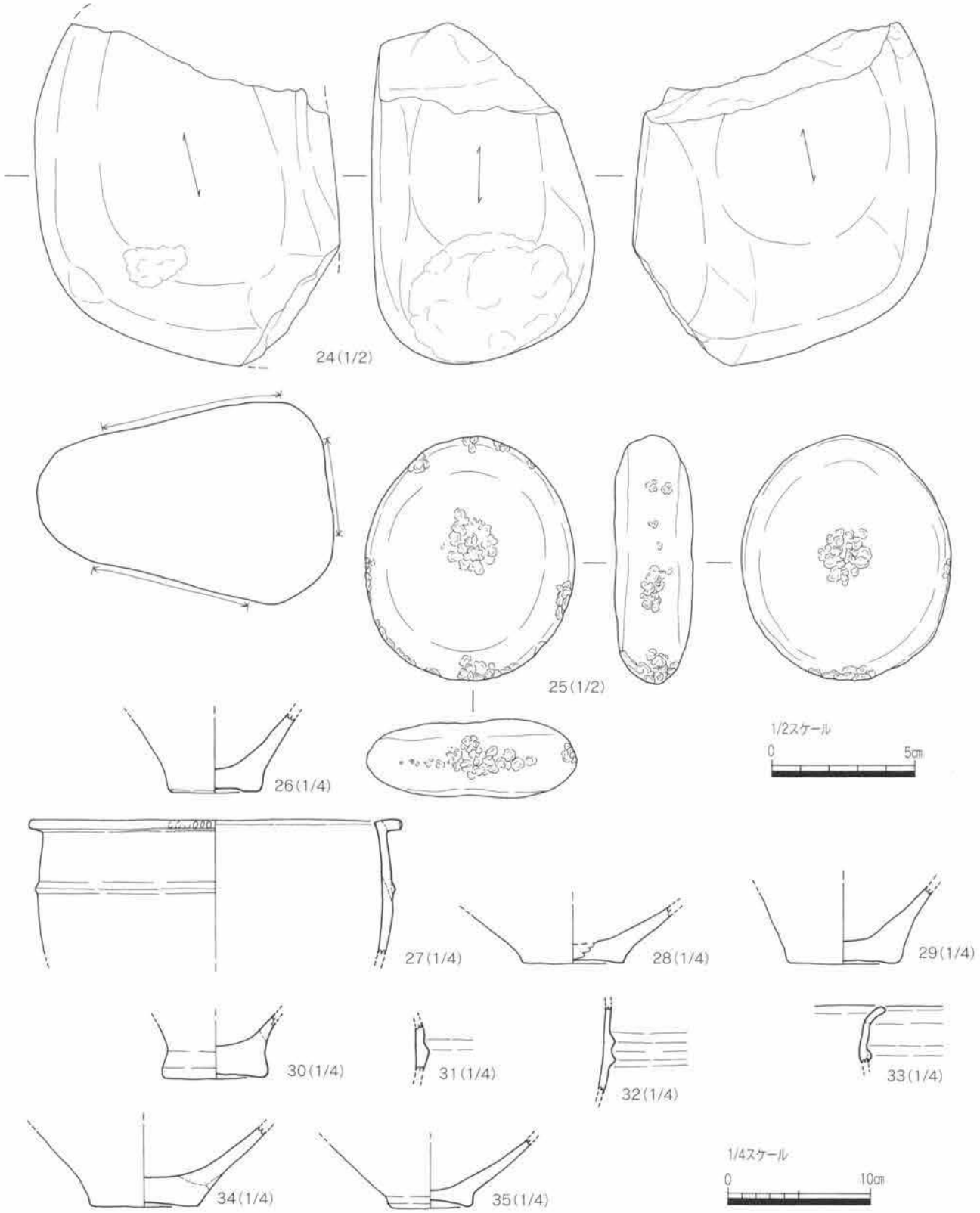


Fig.84　溝状遺構出土遺物実測図④（1/2・1/4）

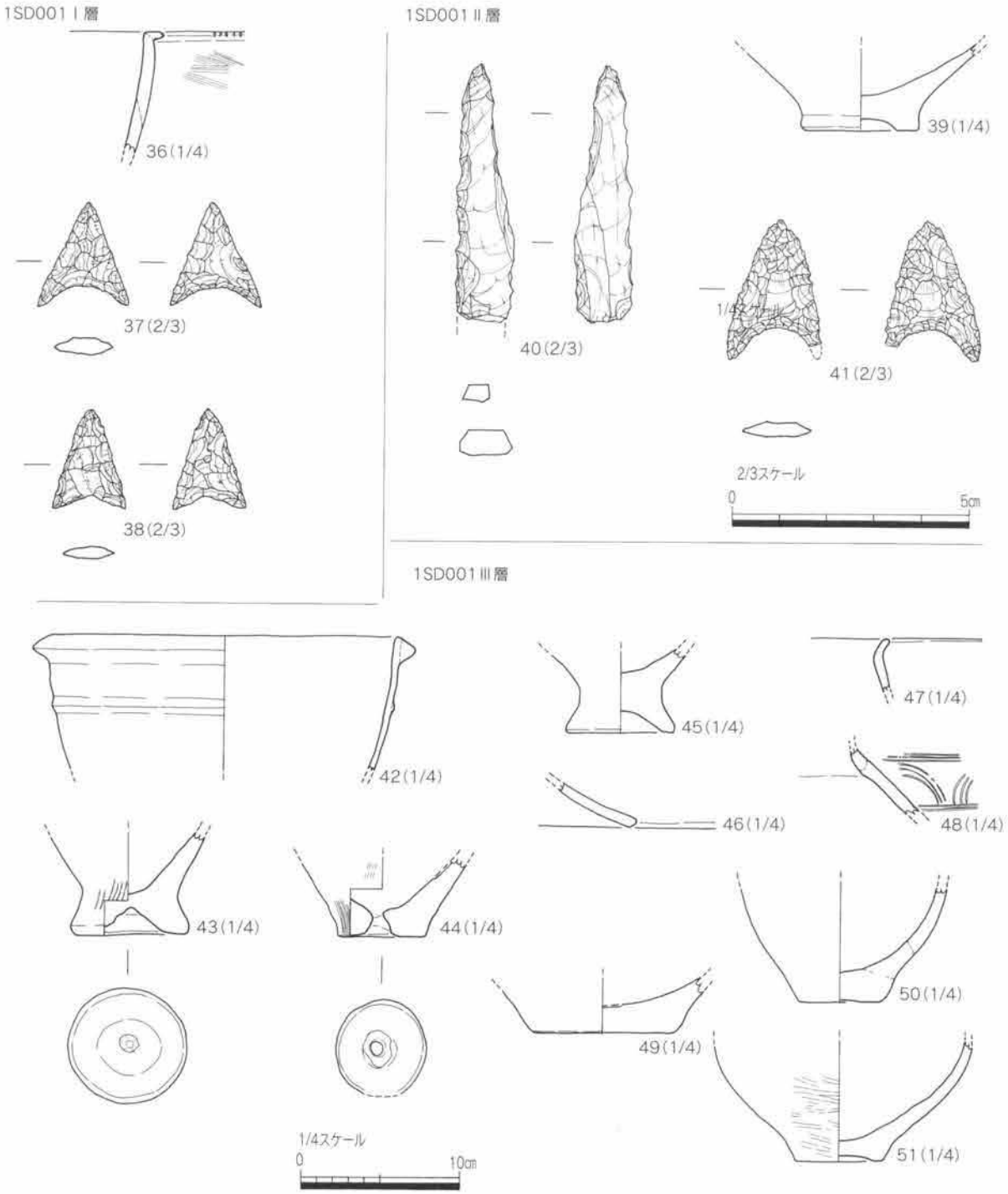


Fig.85　溝状遺構出土遺物実測図⑤（1/4・2/3）

し、やや古相を呈する。15は、大甕である。口縁部には明瞭な面を形成し、その上下両端に刻目を施している。また、口縁部内面に凸帯を貼付けているが、その凸帯には刻目は認められない。16・17は、弥生土器のミニチュア土器である。16は甕で、17は壺である。18は、片岩製の紡錘車未製品である。19は、片岩製の石包丁未製品である。20・21は安山岩の敲石である。ともに複数箇所に打撃痕が認められる。22・23は、ともに腰岳産の黒曜石を使用した鏃である。22に比して23は脚部の抉りが深い。24は摺り石である。表裏両面と片側面に使用痕が認められる。

25は敲石で、遺物４の一群に含まれていた。表裏両面と側面にも打撃痕が残る。26は遺物２に含まれていた弥生土器の甕である。底部は僅かに上げ底状としている。27は遺物２に含まれていた弥生土器の

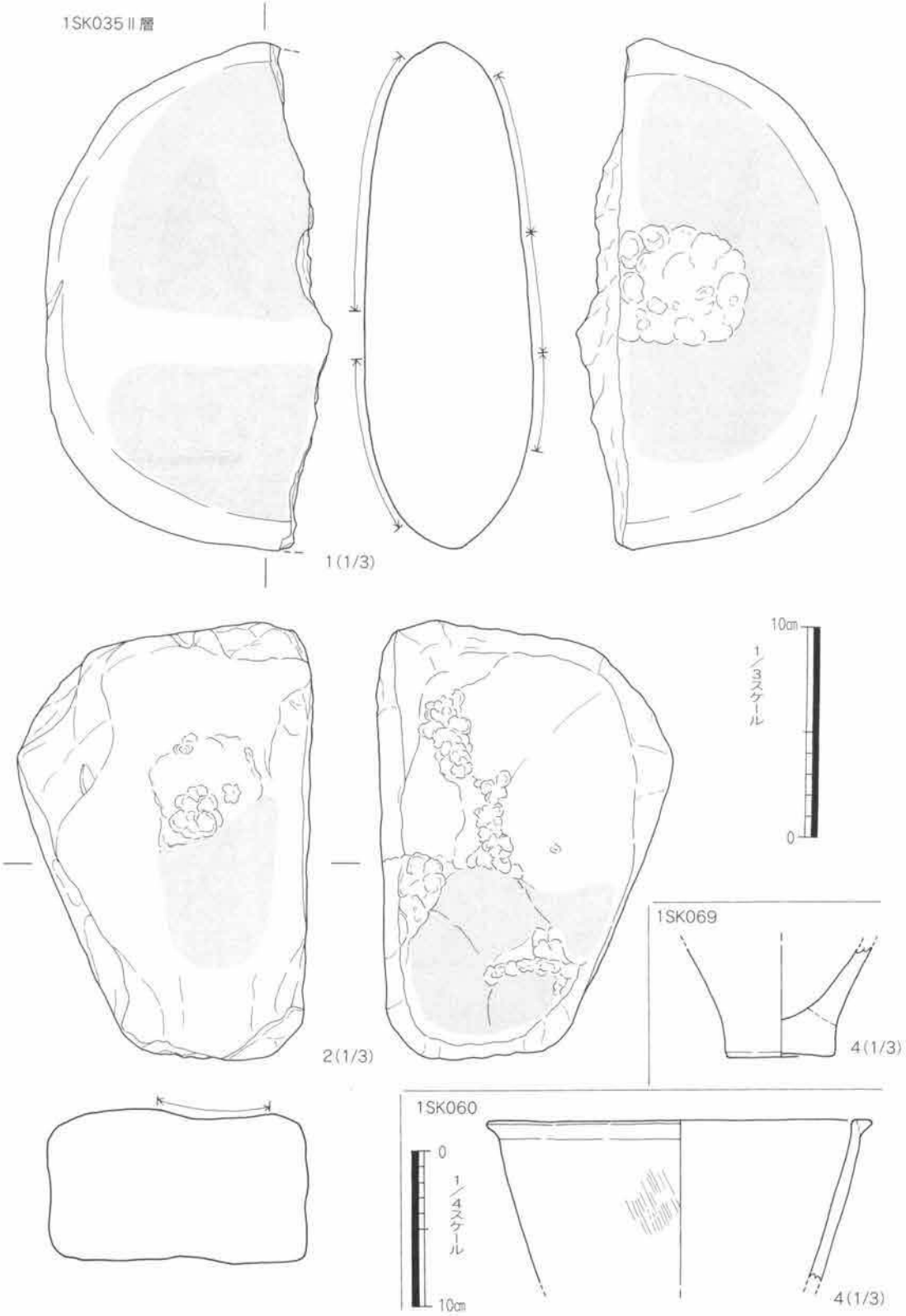


Fig.86　土坑出土遺物実測図①（1/3・1/4）

甕である。口縁部は一見強く折り曲げて成形したかに見えるが、実際には断面方形の刻目凸帯を貼付けている。胴部には三角凸帯を貼付けるが、刻目は認められない。27は遺物３に含まれていた弥生土器の

壷である。29は遺物４に含まれていた弥生土器の甕である。26と同様、底部は僅かに上げ底状である。

30～35は、遺物６としてまとまって出土した一群である。30～33は弥生土器の甕である。30は底部の資料で、26と同様、底部は僅かに上げ底状である。31・32は体部の資料で、32は胴部凸帯が２条認められる。いずれの資料も摩滅が激しく、凸帯の有無は判然としない。33は口縁部の資料で、口縁部は「く」の字状に折り曲げて端部に面を形成する。胴部には三角凸帯が１条以上貼付けられるが、口縁部および胴部凸帯の刻目の有無は判然としない。34・35は弥生土器の壷底部である。34は底部円盤接合の印象を残している。35は、26の甕同様に、底部を僅かに上げ底状としている。

36～38は。層出土遺物である。36は弥生土器の甕である。口縁部には小さな凸帯を貼付けて刻目を施している。37・38はサヌカイト製の鏃である。37の石材は多久産と思われるが、38は多久以外で産出したものと考えられる。

39～41はⅡ層出土である。39は弥生土器の壷である。底部は僅かに上げ底状を呈する。40はサヌカイト製の石刃であろう。石材は多久産で、基部は欠損している。41は黒曜石の鏃である。腰岳産の石材を用い、基部の抉りは比較的深い。

Ⅲ層からは、42～51の弥生土器が出土した。42～45は甕である。42は口縁部と胴部に１条ずつ三角凸帯を貼付けたものであるが、口縁部の凸帯は大型である。凸帯にはともに刻目が施されていたようである。43～45は底部の資料で、43・45は上げ底の高い底部を持つ。43・44は焼成後穿孔が認められるが、43は未貫通である。また、43には内面に炭化物の付着が認められる。46は蓋の口縁部の資料である。端部に面を持つが、面は接地しない。47～51は壷である。47は小壷で、緩やかに外反する口縁部を特徴とする。48は体部の細片であるが、体外面に線刻で重弧文を施している。重弧文は3本で構成され、上部は３条の沈線、下部は２条の沈線で区画されている。49～51は底部の資料である。50は小壷で、円盤接合の名残りを留める。51は中型のもので、底部は僅かに上げ底状となる。外面に磨きが認められる。

1SK035（Fig.86、Pla114）

いずれもⅡ層出土のすり石である。1は安山岩、2は砂岩である。いずれも両面に使用痕が認められる。

1SK060（Fig.86、Pla114）

3は弥生土器の甕である。直線的な体部と、口縁部に貼付けられたやや小振りな凸帯を特徴とする。凸帯の上部は水平で、刻目は認められない。

1SK069（Fig.86）

4は弥生土器の甕である。分厚い底部を特徴とする。

1SK003（Fig.87）

いずれも弥生土器の甕で、1は半裁時出土の底部である。分厚い底部が特徴である。2はⅥ層出土の口縁部細片で、口縁部と胴部に凸帯を貼付けるが、摩滅が激しく凸帯の有無は判然としない。

1SK004（Fig.87）

3は半裁時の出土品で、弥生土器の蓋であるが甕の底部かも知れない。つまみ部は中央を抉ったような形状である。4・5はⅢ層からの出土である。4は弥生土器の甕である。5は粘土塊である。

1SK007（Fig.87）

6は、Ⅱ層から出土した弥生土器の壷である。器面は摩滅著しく、調整は不明である。

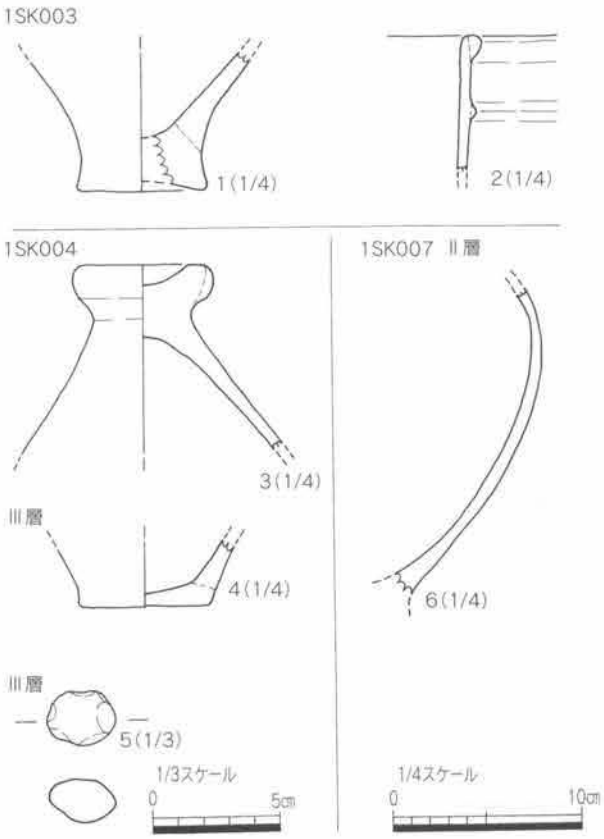


Fig.87　土坑出土遺物実測図②（1/4・1/3）

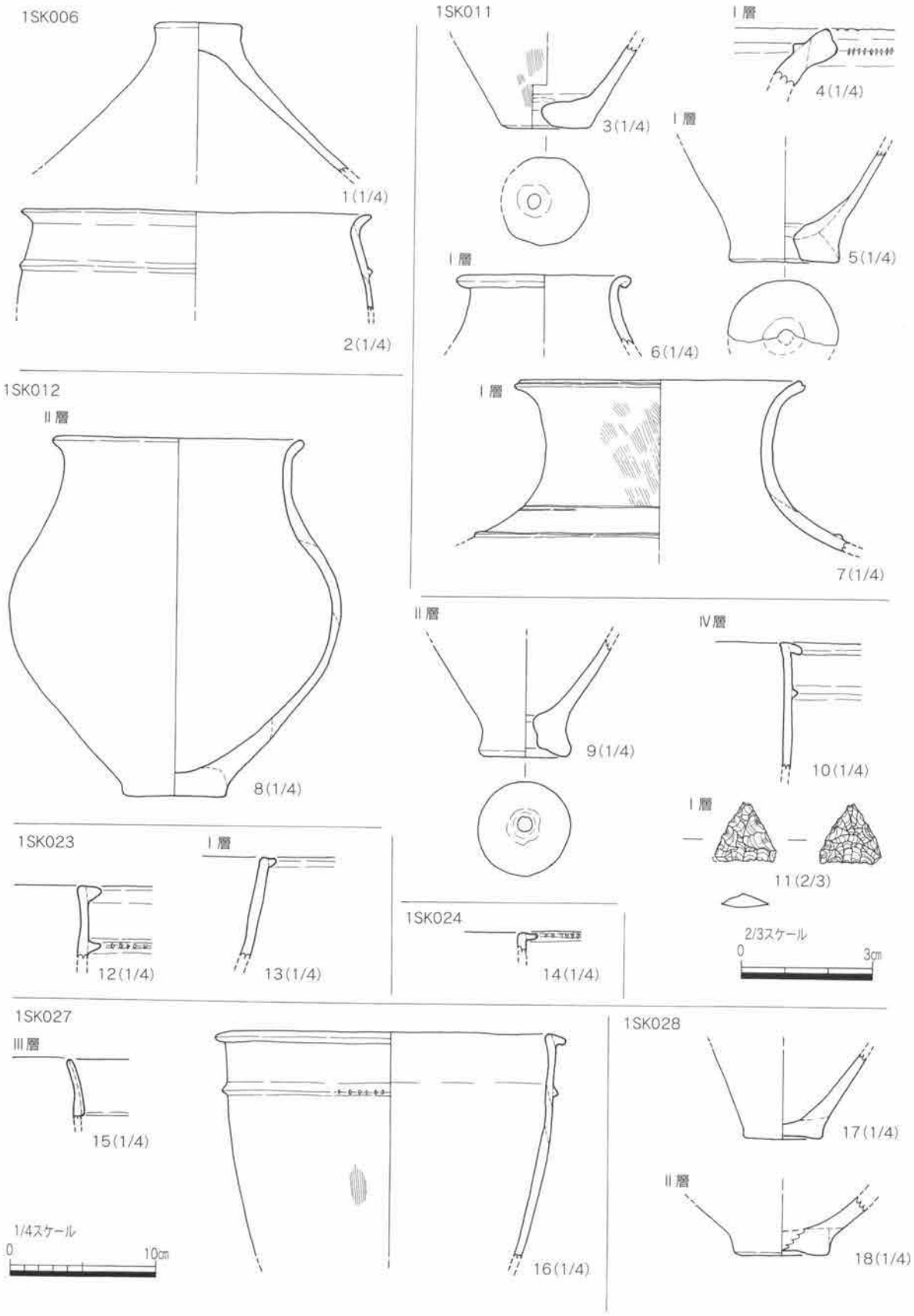


Fig.88　土坑出土遺物実測図③（1/4・2/3）

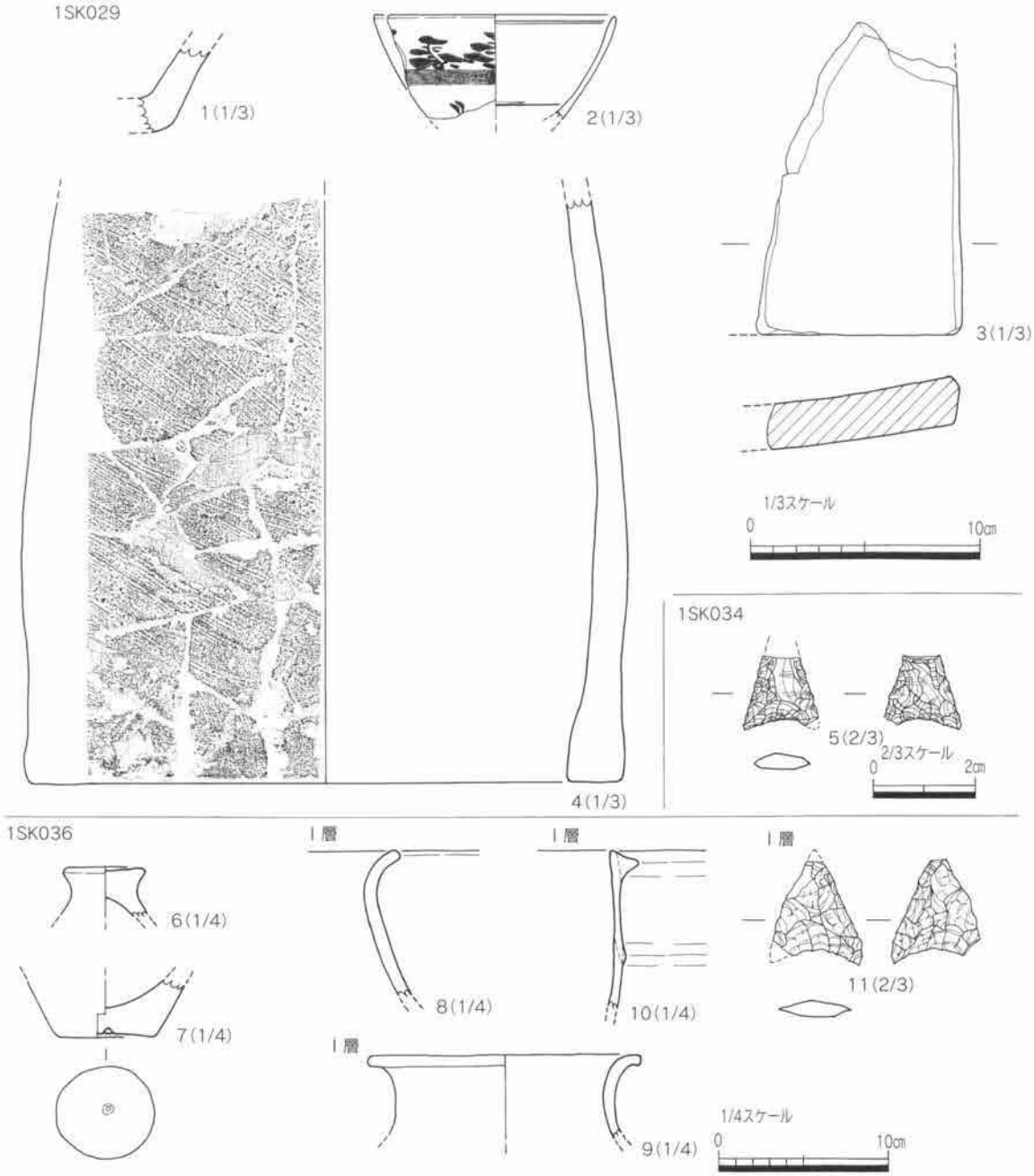


Fig.89　土坑出土遺物実測図④（1/3・1/4・2/3）

1SK006（Fig.88、Pla114）

1は弥生土器の蓋である。調整は、器面の摩滅が激しく判然としない。2は弥生土器の甕である。口縁部は如意形を呈し、胴部には三角凸帯を貼付ける。口縁部および凸帯には刻目は認められない。

1SK011（Fig.88）

3は、半裁時出土の弥生土器の甕底部である。底部には、焼成後に内外両面から穿孔を施している。

1SK012（Fig.88、Pla114）

11はⅠ層出土の鏃である。腰岳産と思しき黒曜石を用いている。8・9はⅡ層から出土した弥生土器である。8は壺である。頸部の段は完全に失われ、頸部と胴部の境界は極めて不明瞭なものとなっている。口縁部は僅かに肥厚しつつ小さく外反させ、底部は円盤接合の痕跡を留めている。9は、甕底部である。

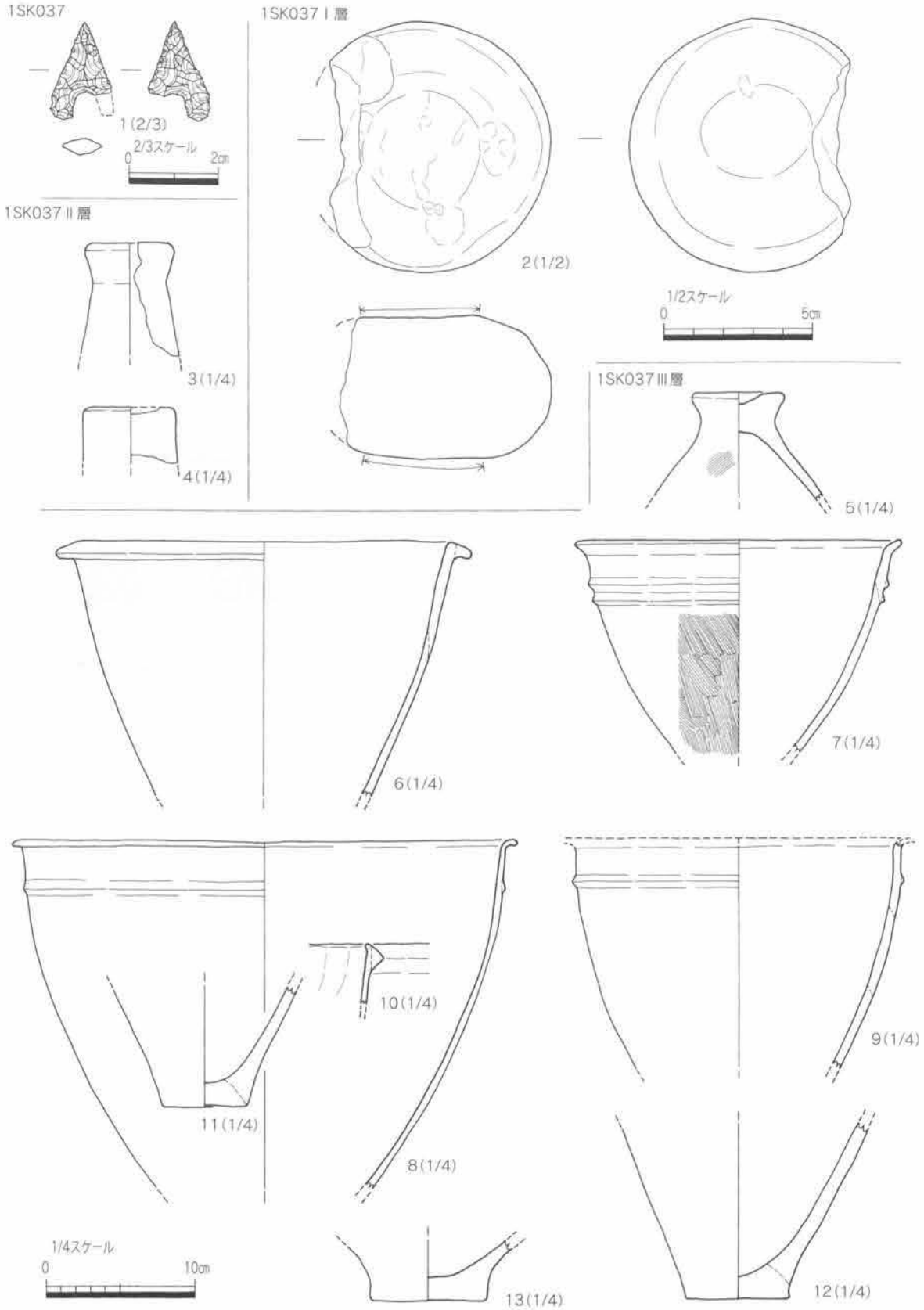


Fig.90　土坑出土遺物実測図⑤（2/3・1/2・1/4）

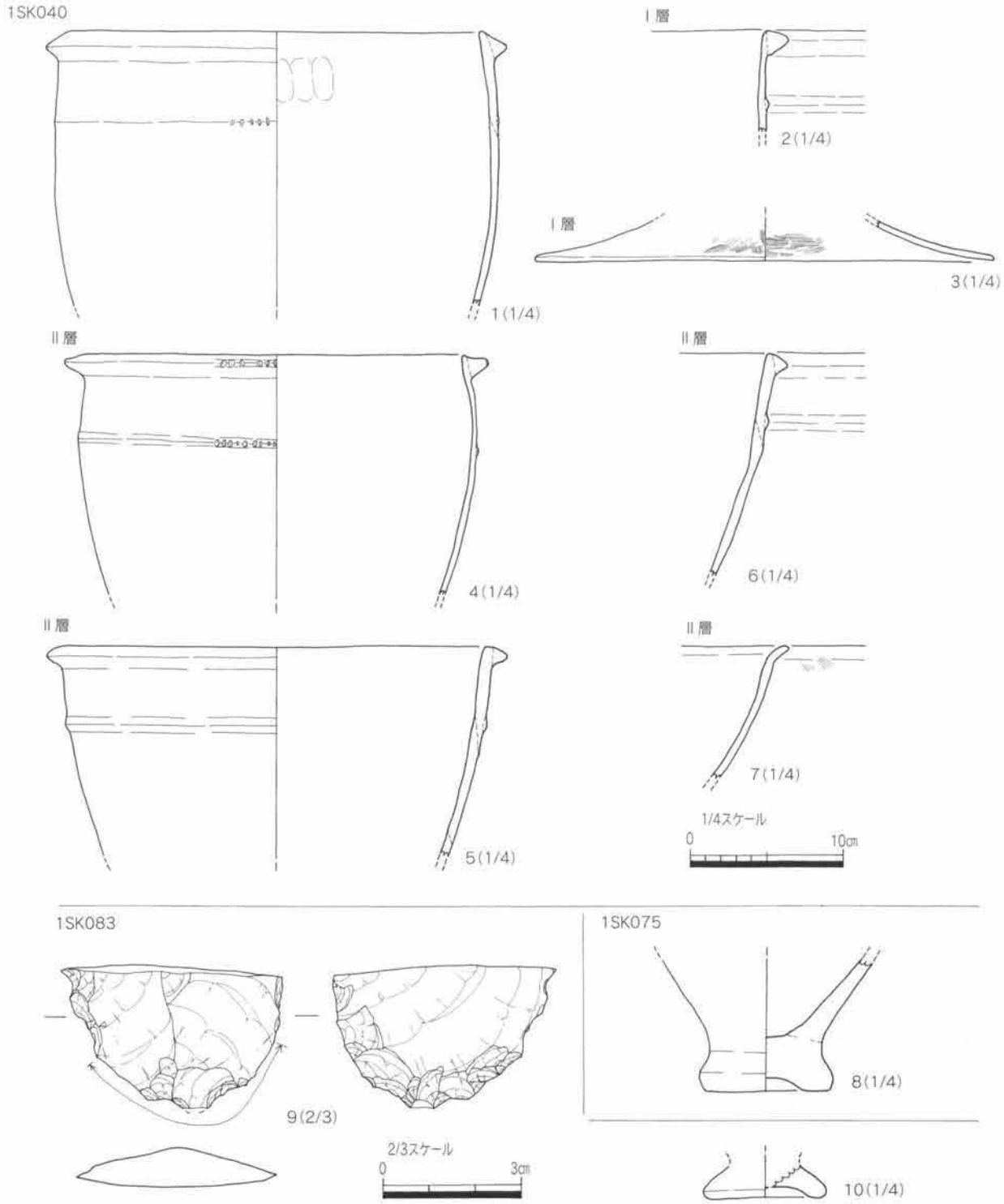


Fig.91　土坑出土遺物実測図⑥（1/4・2/3）

底面には、焼成後に内外両面から穿孔が施される。10は、甕の口縁部の資料である。口縁部と胴部に凸帯を貼付けるが、刻目は施さない。口縁部の凸帯は貧弱で、下方に垂れ下がっている。

1SK023（Fig.88）

12・13は、弥生土器の甕である。12は、口縁部と胴部に１条ずつ凸帯を貼付ける。胴部凸帯には刻目が施されるが、口縁部凸帯は摩滅著しく判然としない。13は、直線的に開く器形が特徴的である。口

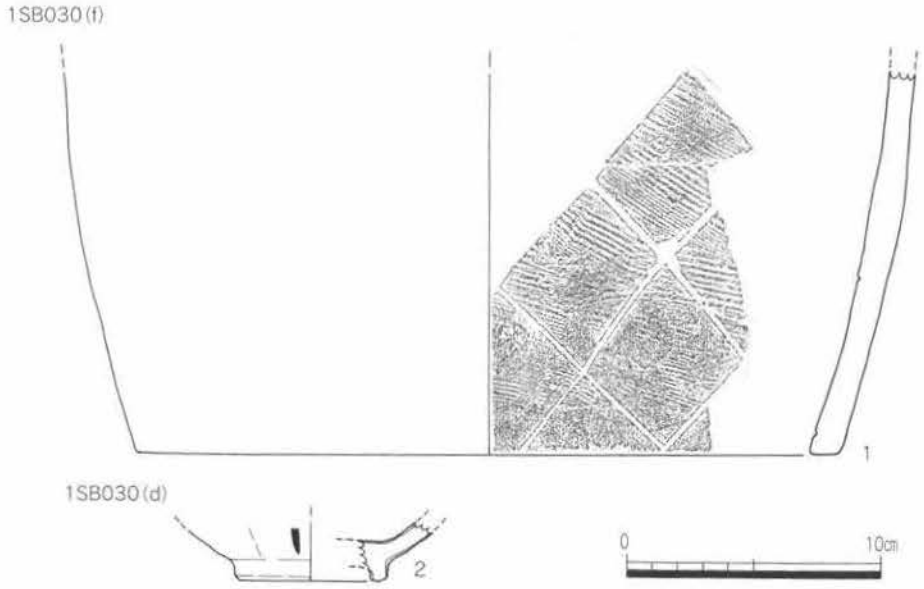


Fig.92　掘立柱建物出土遺物実測図（1/3）

縁部には小さな凸帯が貼付くが、刻目は認められない。上面は強い横ナデが施されている。

1SK024（Fig.88）

14は、弥生土器の甕である。口縁部には小さな刻目凸帯が貼付く。上面には1SK023の13同様、強い横ナデが施されている。

1SK027（Fig.88）

15・16は弥生土器の甕である。15は所謂「段甕」であるが、凸帯は見当たらない。ただ、摩滅が激しく、剥離痕が認識できないのかも知れない。

1SK028（Fig.88）

17は、弥生土器の甕である。底部は僅かに上げ底状を呈する。18は弥生土器の壺底部である。この資料の底部も僅かに上げ底状を呈する。

1SK029（Fig.89）

1は、土師器の不明品である。器壁が非常に厚い。2は染付け碗である。3は平瓦である。側端部は上面側を面取りしてある。4は土師質の不明品である。土師器としたが、土師器の範疇に含めて良いものか疑問が残る。一見すると埴輪のようにも見えるが、全体的には近世の水田焼に酷似した印象を受ける。外面には刷毛目が明瞭に残り、焼成も良好である。内面側は摩滅が著しく調整は判然としないものの、外面と同様の刷毛目が僅かに観察できる。

1SK034（Fig.89、Pla115）

5は、阿蘇産の黒曜石と思しき石材でつくった鏃である。先端部と片脚端を欠損している。

1SK036（Fig.89、Pla115）

6～9は、弥生土器である。6は蓋である。7は甕の底部である。外底面には焼成後に穿孔を試みた跡があるが、その深さは3㎜ほどで当然未貫通である。8・9は壺である。8は、緩やかに外反する口縁部で口唇部は丸くおさめる。9は、きつく折り曲げた口縁部で、端部に比較的明瞭な面を持つ類型である。11は、サヌカイト製の鏃であるが、石材は多久以外の産出と思われる。

1SK037（Fig90、Pla115）

1は、半裁時出土の鏃である。腰岳産の黒曜石を使用している。2は、Ⅰ層出土の安山岩製の摺り石である。両面に使用痕跡が残る。

5～13はⅢ層出土遺物で、すべて弥生土器である。5は蓋としたが、甕かも知れない。つまみ部の頂部は凹ませている。6～12は甕である。6は、口縁部に凸帯を貼付けるが、凸帯の断面は四角形である。体部は直線的な印象を受ける。7は、「く」の字形に外反する口縁部を持ち、胴部に２条の凸帯を貼付ける。

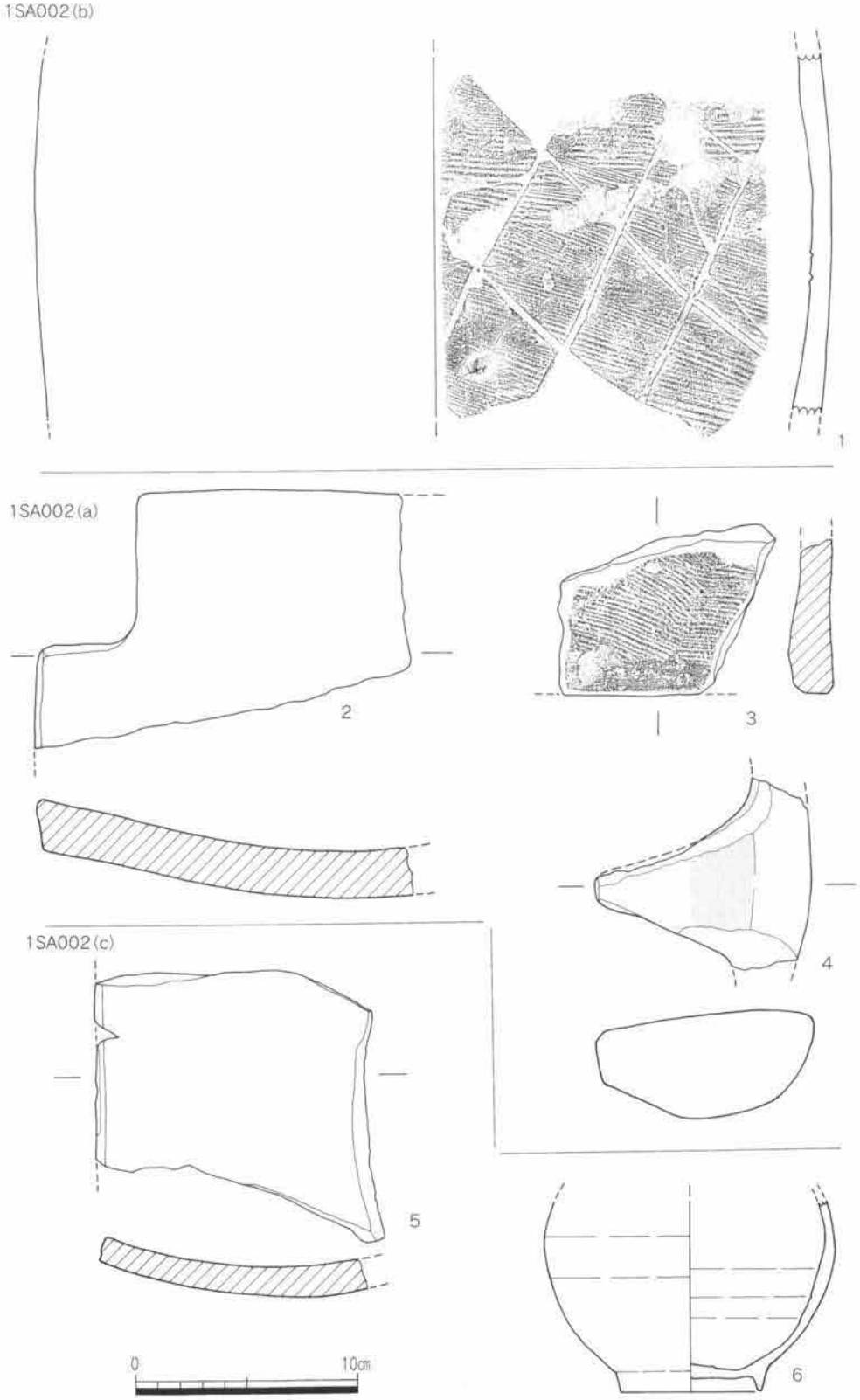


Fig.93　柵列出土遺物実測図（1/3）

口縁部にも胴部凸帯にも刻目は施されない。8・9は、強く折り曲げる口縁部を特徴とする。10は、三角凸帯を口縁部に貼付ける。口縁端部の内面側は、強い横ナデによって上端部がつまみ出されたようになっている。11・12は底部の資料である。13は壷の底部である。

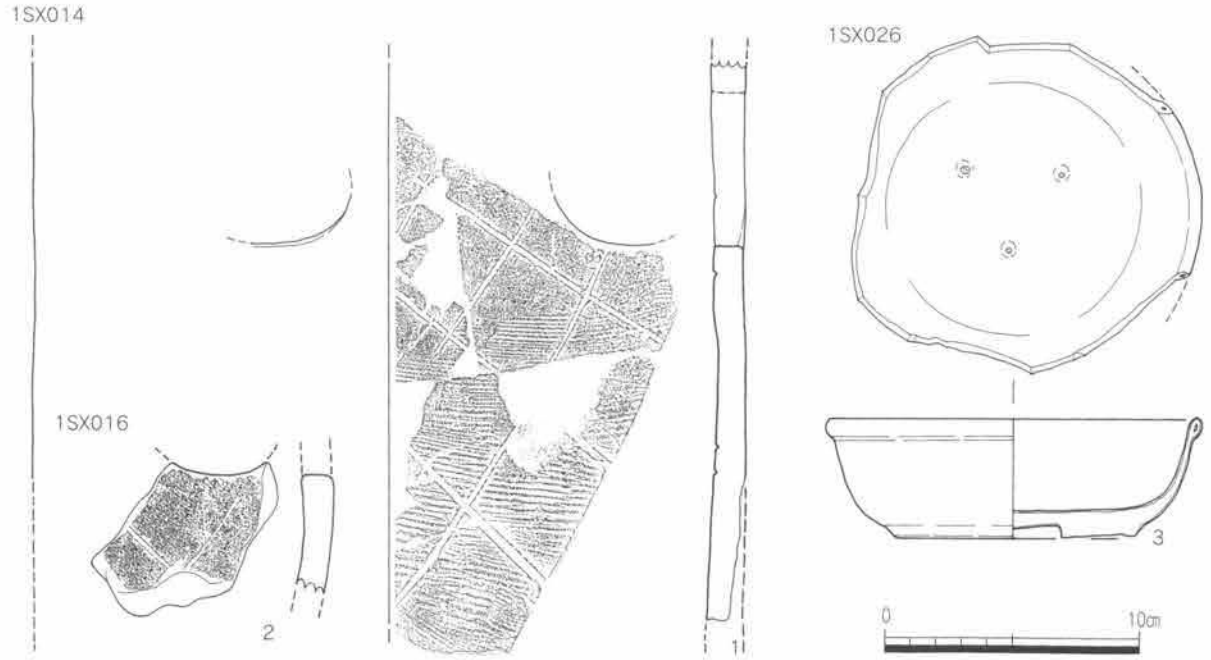


Fig.94　その他の遺構出土遺物実測図①（1/3）

1SK040（Fig.91、Pla115・116）

すべて弥生土器である。1は、半裁時出土の甕である。口縁部および胴部には、三角凸帯を各１条貼付ける。胴部の凸帯は極めて貧弱である。口縁部凸帯には刻目を施さないが、胴部凸帯には刻目を施す。

2・3はⅠ層出土遺物である。2は甕の口縁部である。口縁部と胴部に１条ずつ凸帯を貼付けるが、刻目は認められない。3は蓋である。口縁端部には不明瞭ながら面を形成している。

4～7はⅢ層出土遺物である。4～6は甕である。4は、口縁部と胴部に１条ずつの刻目凸帯を貼付ける。口縁部凸帯の上面は、強い横ナデが施されている。5および6は、口縁部と胴部に凸帯を貼付けるものの、刻目は認められない。7は鉢である。小さく外方へ屈曲する口縁部を特徴とする。外面には一部刷毛目が認められる。

1SK075（Fig91、Pla116）

8は、弥生土器の甕底部である。底面は上げ底状となっている。

1SK083（Fig.91、Pla116）

9は、サヌカイト製の掻器である。石材は多久産と思われる。10は、弥生土器の甕底部と思われる。底面は上げ底状を呈している。

1SB030（Fig.92、Pla116）

1は、柱穴（f）出土の土師質不明品である。内面には篦書き沈線で格子目がある。2は、柱穴（d）出土の竜泉窯系の青磁碗で、体外面には鎬蓮弁が施紋される。

1SA002（Fig.93、Pla116・117）

1は柱穴（b）出土の土師質不明品である。1SB030出土の1と同じく、内面には篦書き沈線で格子目がある。2～4は柱穴（a）から出土した。2・3は平瓦である。2は全面をナデ調整するが、3は外面側に刷毛目が認められる。4は、サナか五徳の小片であろうと思われる。全面にナデ調整を施し、片面に煤の付着が認められる。

1SX014（Fig.94、Pla117）

1は土師質不明品である。内面は刷毛目を施し、外面はナデ調整によっている。内面の格子状の沈線文が特徴的である。円形と思しき透かしが１ヶ所認められる。焼成は良好で堅く焼き締り、赤茶色を呈する。

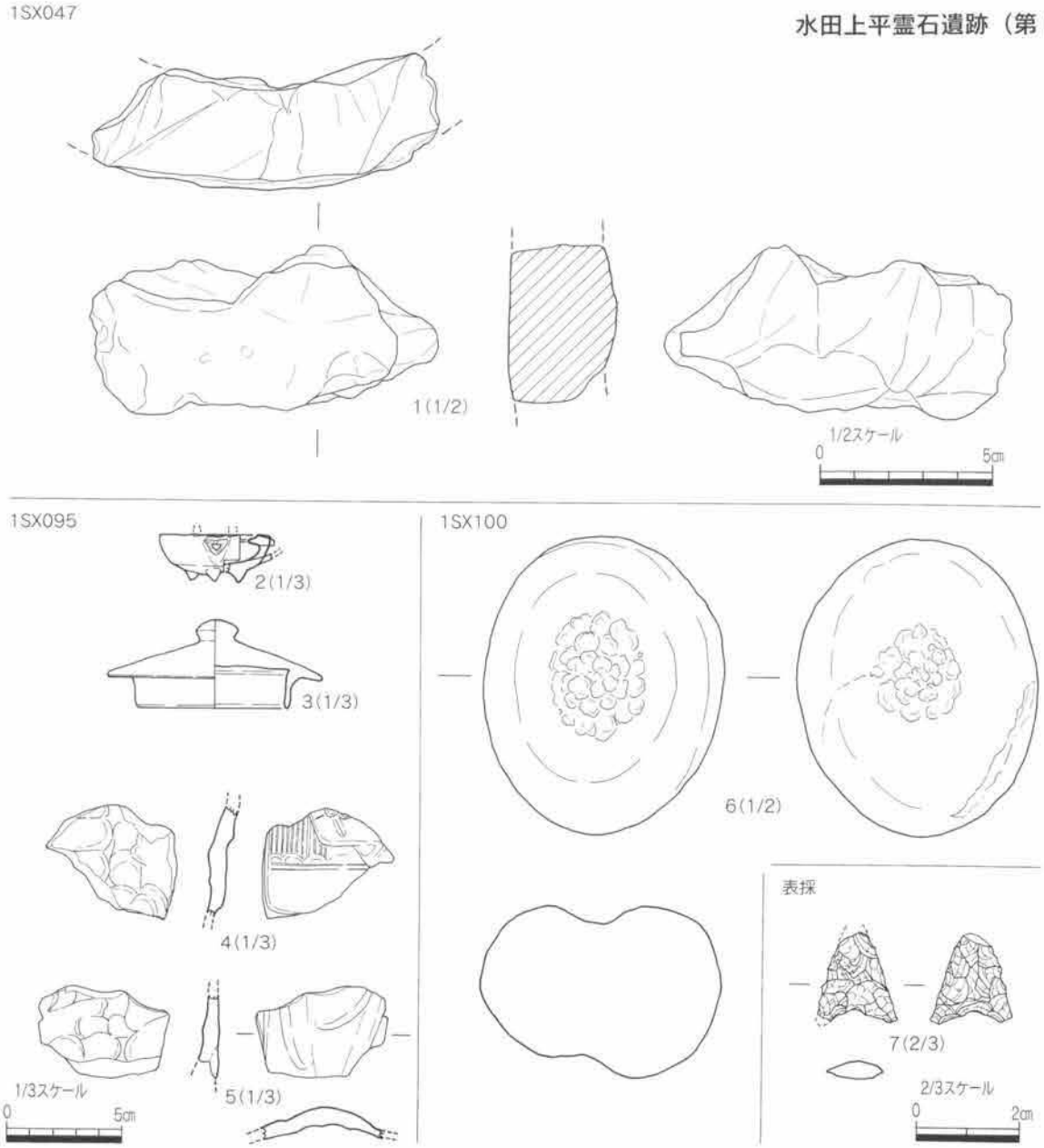


Fig.95　その他の遺構出土遺物実測図②（1/2・1/3・2/3）

1SX026（Fig.94、Pla117）

2は土師質不明品である。95-1と同様に内面は刷毛目を施し、外面はナデ調整によっている。内面の格子状の沈線文が特徴的である。この資料にも円形と思しき透かしが１ヶ所認められる。焼成は良好で堅く焼き締り、赤茶色を呈する。

1SX047（Fig.95、Pla117）

凝灰岩製の五輪塔の破片と思われる。火輪の残欠であろう。

1SX095（Fig.95、Pla117・118）

2は、白磁の三足水注である。口の上面に２ケ所の剥離痕が認められ、何らかの装飾があったことが想像される。3は、陶器の蓋である。返りから内側は露胎である。4・5は土師質の型である。

1SX100（Fig.95、Pla118）

6は、安山岩を利用した凹み石である。表裏両面に使用痕が観察できる。

表面採集遺物（Fig.95、Pla118）

サヌカイト製の鏃である。先端部と片脚端部を欠損する。石材は多久産のものを使用している。

(4)小結

今回の調査で得られた情報に若干の考察を加え、問題点の整理を行うことでまとめとしたい。以下、遺構・遺物の順に項目を取り上げる。

大溝（1SD001）と関連土坑

調査区の東寄りを、北北西から南南東に走る1SD001は、出土遺物から弥生時代前半代の大溝であると考えて大過なかろう。土層の堆積状況を観察すると、常時多量の水が流れる流路とは考えにくい。むしろ、季節によって流量が大きく増減する用水路のような性格を与えた方が的確かも知れない。事実、1SD001の両岸の遺構面は概ね平坦で、1SD001が人工的に掘込まれた溝であることは容易に理解される。自然流路であるならば、両岸の遺構面は流路に向かって徐々に下がるか、侵食によって河岸段丘状の形状を呈するはずだからである。

では、1SD001を掘削した目的は何であろうか。可能性としては、集落外周あるいは集落内の区画溝の可能性と、水利施設の可能性の両方を提示することができる。それぞれの可能性について検証を試みてみることにする。

まず、区画溝として検証する。遺構全体配置図（Fig.97）を見ると一目瞭然であるが、1SD001の西側には土坑をはじめ、弥生時代の遺構が展開するが、東側には中世以降の遺構しか存在しない。この点からすると、集落の東辺を区切る溝である可能性がある。1SD001の西側に展開する弥生時代の遺構を見ると、廃棄土坑を中心としたものであることが判る。竪穴式住居や掘立柱建物は見当たらず、主たる居住空間ではないことが理解できる。

弥生時代集落内の空間領域には、居住区域・作業区域・貯蔵区域・廃棄区域・墓域・祭礼区域があり、それぞれが重複しながら集落といいう空間を形成していると筆者は考えている。さらに、集落外にも農耕区域等が連続するのは当然と言える。この考えに当てはめるならば、1SD001西側の廃棄土坑群は廃棄区域である。以前に筆者が指摘したように（註１）、この廃棄土坑も貯蔵穴からの転用であるならば、貯蔵区域と重複するものとして理解すべきであろう。とすれば、主たる居住区域は別に設定されるべきである。

弥生時代集落の全体像が明らかになった事例としては、佐賀県吉野ヶ里遺跡の好例がある。集落規模が大きく異なるため、そのまま当てはめることはできないが、概観してみたい。南へのびる低丘陵の尾根上に、内環壕に囲まれた主たる居住区域が営まれている。その北側の尾根線上には墓域が設定され、墳丘墓や２列埋葬の甕棺墓がある。北側以外には高床倉庫をはじめとする貯蔵区域となっている。外環壕の外側には水田も確認されていて、農耕区域として機能していたと言える。

吉野ヶ里遺跡の事例では、貯蔵区域は主たる居住区域よりも外側に配置されていることになる。これを当遺跡に当てはめてみると、貯蔵・廃棄区域は集落の外縁部に近い位置に設定され、その外側は農耕区域等、集落外にあたる可能性が高い。事実、東側200mにあたる水田上仁良葉遺跡第２次調査では、弥生時代の遺構は確認されていない。この点も考慮すれば、1SD001は集落の東側を区切る溝である可能性が高い。主たる居住区域はさらに西側に展開する可能性が高いとも言える。ただし、集落空間の構成状況について、弥生時代における当地域の集落構造が判然としない以上、区域の設定は推論の域を出ないことをお断りしておきたい。

次に、水利施設として検証する。1SD001を水利施設と考えた場合、興味をひくのは1SD005の存在である。調査区の南寄りで1SD001と合流する幅0.2mの小溝である。底面の水準を精査すると、南北方向には概ね水平であり、水流の向きは判然としない。一方、1SD001は底面の傾斜を見る限り、南側が高く北側が低くなっている。その点からすれば、水の流下方向は南から北向きであると言える。そうした場合、1SD005は1SD001から分岐して北流していることになり、分岐点は1SD005への取水場所となる。ただし、周辺の現況地形（ほ場整備前）を見ると微高地の南斜面にあたり、僅かに南に向かって傾斜している。もちろん自然流路ではなく人工的に掘込まれた溝であれば、自然地形と流下方向に整合性がとれなくとも、なんら矛盾するものではない。

さらに興味深いのは、1SD001に附随する形で掘込まれた土坑群である。1SD001関連土坑に1SD001と関連する可能性のあるものまで入れると合計7基の土坑がある。切合い関係の矛盾はあるものの、いずれの土坑も1SD001に接続する形で存在していた可能性がある。良く似た事例は、八女市の高島遺跡で確認されている。高島遺跡の２次調査（註２）では、SD－01に取り付く形で17基の土坑が検出されている。調査当初、調査を担当された大塚氏は取水を目的とした土坑と理解し、「取水土壙」という名称設定を行っている。大半の土坑は、溝に接続しつつも底面は接続せずに独立し、溝の水位が下がった時にも水が土坑内に留まるような構造である。しかしながら大塚氏は、「Ⅵまとめ」の中で、「最有力な可能性として、農業及び生活用水としての貯水施設を考えていた」が、「取水土壙群が、取水後の貯水を目的にしていたのではなく、一時的に通水してその後は放置され、乾燥状態が長期間にわたっていた」ことから、「堅果類のアク抜き」のための施設またはそれに準じる機能を持っていた可能性を指摘している。

構造面からもう少し比較を試みるため、溝と土坑底面の関係に注目してみたい。高島遺跡の土坑群は底面が溝と接続しないものが大勢を占め、SK－09のみ底面がそのまま溝に接続している。一方今回報告する1SD001と関連土坑底面との関係は、全ての土坑が、高島遺跡SK－09の事例と同様に底面がそのまま溝に接続する形態をとっている。1SD001の水位が下がった時は、土坑内の水も無くなるような構造である。したがって、高島遺跡２次調査の当初に、大塚氏が想定した貯水目的の土坑と認識することは不可能である。堅果類のアク抜き等に利用する、水さらし場の可能性が高かろう。これについては1SD005との関連もあるが、それは後述することとしたい。

以上、長々と検証を試みたが、総合すると、1SD001は区画溝と水利施設の性格を合わせ持ったものであると捉えたい。もちろん、ひとつの遺構に単一の機能のみを与える必要はないのであるから、これは無理のある理解ではない。いま一歩進んで景観復元を試みるならば、集落の東辺を区切る溝を利用して堅果類のアク抜きを行っていたのであろう。

さてここで、1SD005との関係を整理したい。1SD005は調査区の南寄りで1SD001から分岐し、北流していた可能性が高い。その分岐点は1SD001の幅員が拡がっている箇所であるが、分岐点のすぐ北側の幅員を減じた箇所に堰状に削り出したテラスが認められる。此処を閉切れば1SD005への導水に好都合だと考えられるので、止水施設とみてよいと考えている。周辺の調査成果と照らし合わせても、今回の調査区以北には、居住区域があったとは考えにくく、北流する1SD005は、生活用水路として考えるには無理がある。また、1SD005は北流したのち西寄りに流下方向を変えている。本遺跡の西側には低湿地帯が拡がっていることからも、水田を中心とした農耕区域が存在することは想像に難くない。したがって農業用水路であった可能性が高い。

これは、1SD001に付属する土坑群の利用目的を考える上でも興味深い。1SD005が農業用水路、それも水田への導水を目的としたものと仮定しての話となるが、1SD005へ導水中は分岐点のすぐ下流で1SD001を堰き切ったと思われるため、以北の1SD001の水位は下がることになる。すると、土坑の中の水位も激減する可能性が高い。土坑群を堅果類のアク抜きのための水さらし遺構と考えた場合、水量が不足し、その機能を果たし得ないと考えられる。しかし堅果類の採集は晩秋に行われ、水さらしは晩秋から冬にかけて行われたとみるのが妥当であろう。1SD005が水田への導水施設と考えた場合、導水の必要があるのは春から秋にかけての期間に限られる。堅果類の水さらしに相当の水量が必要な時期には、1SD005への導水がないため、水さらしはその影響を受けずに行うことができるのである。使用する季節に相違があるため、併存することに矛盾はない。

今回は、複数の状況から1SD001と1SD005、それに1SD001関連の土坑群の使用方法について、以上のように復元モデルを提示した。季節によって利用方法を変化させつつ、通年にわたる複合的利用を実施していた弥生人の英知に学ぶべき点は多そうである。

廃棄土坑群

今回の調査では、12基の廃棄土坑と思しき土坑を確認した。これらも常用長田遺跡や常用日田行遺跡で確認された（註３）ように、貯蔵穴からの転用である可能性を考えている。ただし、これらの事例と

比して規模が小さい傾向がある。常用長田遺跡で確認された廃棄土坑は、大小さまざまではあるが最大で4.6m×1.7m、最小で1.1m×0.9mであった。主流をなすのは2.0m×1.0m程度のものである。今回の調査で確認されたものは、1.2m×0.8m程度のものが大勢を占める。

今回確認された土坑のうち、1SK012は底面が検出面よりも大きく、所謂袋状土坑の特徴を有する。袋状土坑は、一般的に貯蔵穴によく用いられる形態で、貯蔵穴転用と考えて問題ないと思われる。もちろん、廃棄用に供する土坑として意識して穿たれたものも含まれていることは否定しない（註４）が、貯蔵穴として利用していたものを廃棄用に転用することは省力化の点からも至極当然である。

さて、1SK039や1SK040の土器の出土状況を観察すると、興味深いことに気付く。1SK039は廃棄時に投げ込まれたものである可能性が高いが、1SK040の倒立した甕は疑問が残る。常用長田遺跡2SK0363の事例（註３）では、短辺側に地山削り出しの棚を形成していて、底部を打ち欠いた甕を倒立させて据えていた事例が確認された。今回の1SK040の事例は土坑の底面での出土であるが、筆者としては倒立させて据えていたものと解釈したい。廃棄時に投げ込まれたものであれば、底面に恰も据えたかのように倒立して出土する可能性は極めて低いと考えるからである。この出土状態の解釈や意義づけについても一度論じた（註４・註５）ところであるが、今回の事例も同様であろうと推察する。祭祀の内容は資料不足の感が否めず現在論考する環境にないが、生産或いは集団の維持にかかる祭祀の可能性を提示しておく。大方の批判叱責を乞いたい。

また、水田上平霊石遺跡第２次調査の報告で廃棄土坑の列状配置に論及がなされていて、検証が本報告に拓されている（註６）ので論及したい。その中でも触れられているとおり、今回の調査中および水田上平霊石遺跡第２次調査の調査当時、ほ場整備の表土剥ぎに伴って廃棄土坑と思しき土坑が両調査区の周辺まで列状に伸びているのを確認した。恰も佐賀県の吉野ヶ里遺跡の甕棺墓の列状埋葬のように見えたのを記憶している。

では、甕棺墓群が墳丘墓を意識して墓道に沿って配置されたように、ここでの土坑群も一定の制約を受けて列状に配置されたのであろうか。先述したように、今回の調査区の東側には当該期の集落は拡がらず、1SD001が概ね集落の東端を区切ることになるようである。その中で、貯蔵用或いは廃棄用に穿たれる土坑が居住区域のすぐ外側に配置されたと理解している。貯蔵区域の設定にあたっては、円周形・馬蹄形・方形などの各類型があるが、いずれも集落内における選地によってその延長や幅は区々となる。このことから、今回の事例は歪んだ馬蹄形若しくは長方形の区域設定が行われたが、その幅が狭くなったものと理解したい。列状に配置する時は通路に沿って土坑が穿たれ、通路に制約された配置となるべきである。しかし今回の配置を見るに、制約の基たる通路を土坑群の中に設定することは困難な状況である。したがって、列状に配置する意図はなく、区域設定の都合上細長い範囲に分布することになったと見るべきであろう。以上のような状況から、調査報告を行っている現段階では列状配置という表現は用いないこととする。

弥生土器

今回の調査で出土した弥生土器群は、亀ノ甲式土器の範疇に入るものであろうが、貼付け凸帯に刻目が施されないものが増え、以西地域の城ノ越式土器に融合されていく過程のものであろう。常用長田遺跡第２次調査では夜臼式土器から城ノ越式土器を中心に出土したが、特に前期段階のものが主体であった。したがって、ここで報告するものは一段階新しい時期のものと言える。今回別に報告されている常用長田遺跡の第１次調査や、常用日田行遺跡でも同様の傾向が見られる。これらの土器の変化を加味すると、常用地域での集落は常用長田遺跡の第２次調査地点が発祥地となり、その後常用長田遺跡第１次調査地点や、常用日田行遺跡、水田上平霊石遺跡等に移動したと見てよかろう。

不明土師器

今回の調査で、用途不明の土師器があった。79-1・79-4・72-1・73-1・74-1・74-2が、それである。いずれも焼成は良好で、堅く焼き締っている。一見、小型の平瓦か土管のようであるが、土管であ

れば内面側、平瓦であれば上面側には、櫛目様の鮮明な刷毛目が施され、箆書きの深い沈線で斜格子が描かれている。その所為で斜格子の部分で割れているものが多く見られる。また、74-1・74-2では円形と思しき透かしが認められ、土管や平瓦として使用するには少々具合が悪い。しかし、櫛目様の鮮明な刷毛目や箆書きの深い沈線による斜格子からは、こちらの面が表ではないかとも考えられ、円筒状の製品であるかどうかも断定できない。

成形技法や焼成を見る限り当地の水田焼ではないかと思われ、水田焼の赤瓦（註７）との関連が注目されるところである。しかしながら遺物の全体像も掴めず、現段階では如何なる種類の製品か断定することはできなかった。

註１　永見秀徳　「第Ⅳ章　考察　転用された廃棄土坑と転用前の情報」　筑後市文化財調査報告書第50集『筑後西部第２地区遺跡群Ⅵ』筑後市教育委員会　2003　所収
註２　八女市文化財調査報告書第63集『高島遺跡（２次調査）』　八女市教育委員会　2001
註３　筑後市文化財調査報告書第50集『筑後西部第２地区遺跡群Ⅵ』筑後市教育委員会　2003
註４　前掲の註１に同じ
註５　永見秀徳　「打ち欠かれた土器　－土師器丸底壷口縁部の事例を中心に－」　『福岡考古第16号』　福岡考古懇話会　2002　所収
註６　立石真二　「第7章　結語　3）おわりに」　筑後市文化財調査報告書第34集『筑後西部第２地区遺跡群Ⅳ』筑後市教育委員会　2001　所収
註７　石田乙郎　「十三、水田天満宮の神具作りから生まれた水田焼　（三）いろいろな水田焼」　『水田校区郷土史』筑後郷土史研究会　1981　所収

Fig.	No.	遺構番号	層位等	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	胴部凸帯	備考	R.No.
81	1	ISD005		弥生	甕				口縁部細片	不明	不明	不明			淡灰茶色	やや粗	1～3mm大の砂粒多	不良	凸帯貼付け	1条			1
81	2	ISD005		弥生	甕				体部細片		不明	ナデ			灰茶色	粗	1～2mm大の砂粒多	不良			1条 刻み目		2
81	3	ISD005		弥生	甕		6.0		底部完存		不明	ナデ	ナデ	不明	淡赤茶色	やや粗	1～3mm大の砂粒	やや不良					3
81	4	ISD005		弥生	甕		6.4		底部1/4		ナデ			ナデ	暗赤褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒	不良					4
81	6	ISD020		青磁	碗				口縁部細片	施釉	施釉	施釉			素地：淡灰色 釉薬：明緑色	精良		良	外反			細かな貫入有	5
81	7	ISD020		青磁	皿		5.4		底部2/3		施釉	施釉	施釉	露胎	素地：淡灰色 釉薬：明緑色	精良		良				内底見込みにスタンプ文有	4
81	8	ISD020		土師	土鍋				口縁部細片	不明	不明	不明			暗褐色	密	雲母少・細砂粒	やや不良	玉縁状				2
81	9	ISD020		土師	土鍋				口縁部細片	横ナデ	不明	刷毛			赤褐色	密	細砂粒	良	玉縁状			外面に厚く煤付着	1
81	10	ISD020		土師	土錘				一部欠		ナデ	ナデ			淡黄褐色	精良	赤色粒子多	やや良					3
81	12	ISD020	Ⅱ	土師	皿	8.3	6.4	1.8	1/4	不明	不明	不明	不明	糸切り	乳茶色	密	赤色粒子	やや不良	僅かに内湾				2
81	13	ISD020	Ⅱ	土師	皿	7.6	6.0	1.8	1/2	不明	不明	不明	不明	糸切り	明赤茶色	密	赤色粒子・細砂粒	やや不良	僅かに内湾				1
81	14	ISD020	Ⅱ	土師	土鍋				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	刷毛			灰茶色	やや密	雲母・角閃石・1～3mm大の砂粒	やや不良	玉縁状				3
81	15	ISD020	Ⅳ	須恵	甕				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	工具ナデ			明灰色	密	細砂粒	良	玉縁状			体部外面に自然釉	1
81	16	ISD025		瓦器	擂鉢				口縁部細片	不明	不明	櫛目			浅黒灰色	密	細砂粒少	やや不良					2
81	17	ISD025		土師	皿	8.8	6.4	1.0	1/4	不明	不明	不明	不明	糸切り	明茶褐色	密	砂粒含まず	やや良					1
81	18	ISD025		土師	不明				一部欠?	ナデ	ナデ			ナデ	赤褐色	密	砂粒含まず	やや良					3
81	19	ISD045		青磁	碗				口縁部細片	施釉	施釉	施釉			素地：明灰白色 釉薬：明黒緑色	精良	黒色粒子・白色粒子	良好	僅かに内湾			体部外面に鎬蓮弁	4
81	20	ISD045		青磁	碗				口縁部細片	施釉	施釉	施釉			素地：明白灰色 釉薬：浅灰緑色	密	黒色粒子・白色粒子	良好	外反				3
81	21	ISD045		土師	椀				口縁部細片	不明	不明	不明			浅乳茶色	密	金雲母・微砂粒	やや良	外方に開く				2
81	22	ISD045		土師	土鍋				口縁部細片	横ナデ	横ナデ	刷毛			明灰茶色	密	金雲母・微砂粒	良	玉縁状				1
82	1	ISD001		弥生	甕	22.4			口縁部1/8	横ナデ	ナデ	ナデ			淡灰茶色	やや粗	金雲母・赤色粒子・1mm大の砂粒	やや不良	外方へ折り曲げ		1条		1
82	2	ISD001		弥生	甕	17.0			口縁部1/8	横ナデ	ナデ	ナデ			淡灰茶色	やや粗	雲母片多・1mm大の砂粒多	やや良	三角凸帯貼付け	1条 刻目有	1条		3
82	3	ISD001		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	不明	不明			淡灰茶色	密	雲母片・1mm以下の砂粒	やや良	三角凸帯貼付け	1条 刻目有	1条		4
82	4	ISD001		弥生	甕	31.4			口縁部1/8	横ナデ	不明	ナデ			淡灰茶色	やや粗	雲母・1mm以下の砂粒	やや良	断面台形凸帯貼付け	1条	1条		5
82	5	ISD001		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	不明	横ナデ			淡白灰色	やや粗	赤色粒子多・1mm大の砂粒多	やや不良	三角凸帯貼付け	1条			2
82	6	ISD001		弥生	甕		6.4		底部1/2		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外：淡灰茶色 内：淡黄茶色	密	金雲母やや多・1mm大の砂粒やや多	やや良					7
82	7	ISD001		弥生	甕		6.6		底部完存		不明	ナデ	ナデ	ナデ	外：明赤茶色 内：淡灰茶色	密	雲母・1mm大の砂粒	良				底部は中実だが上げ底状を呈する	6
82	8	ISD001		弥生	甕		6.0		底部完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外：淡灰赤色 内：淡茶灰色	やや密	角閃石・石英・1～2mm大の砂粒	やや良					8
82	9	ISD001		弥生	蓋				つまみ部完存			横ナデ	ナデ	ナデ	外：淡茶灰色 内：淡灰茶色	密	金雲母・角閃石・微砂粒	良				つまみ部径3.8cm	25
82	10	ISD001		弥生	蓋				つまみ部完存		ナデ	ナデ	ナデ	不明	淡黄茶色	密	金雲母・白色粒子・1～3mm大の砂粒	やや良				つまみ部径6.3cm	10
82	11	ISD001		弥生	蓋				口縁部細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外：淡灰茶色 内：淡黄橙色	密	金雲母片やや多・1mm大の砂粒やや多	良	緩やかに外反し端部に面有				13
82	12	ISD001		弥生	壺	20.4			口縁部1/4	横ナデ	不明	不明			淡灰褐色	やや密	雲母・1mm以下の砂粒	やや良	外反 端部に面				12
82	13	ISD001		弥生	壺				底部細片		ナデ 刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	淡白茶色	やや密	雲母・1mm以下の砂粒	やや良					9
82	14	ISD001		弥生	壺				口縁部細片	不明	不明	不明	不明		淡茶灰色	密	雲母多・1mm以下の砂粒多	やや良	外反				11

Tab.4　出土遺物（土器）観察表①

Fig.	No.	遺構・層位	層位等	時期	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	胴部凸帯	備考	R.No.
82	15	1SD001		弥生	大甕				口縁部細片	横ナデ	ナデ	ナデ			浅黄橙色	密	雲母多・赤色粒子多・1mm以下の砂粒多	良	外反 端部に面	内側に1条		口縁端部の面の上下端に刻み目を施す	24
82	16	1SD001		弥生	ミニ甕		1.5		底部完存		不明	不明	不明	不明	浅白黄色	密	金雲母・長石・1mm大の砂粒	やや不良					15
82	17	1SD001		弥生	ミニ壺				体部細片		不明	ナデ			浅黄灰色	密	角閃石・金雲母・微砂粒	良					14
84	26	1SD001		弥生	甕		8.4		底部完存		刷毛?	ナデ	ナデ	不明	浅黄橙色	密	角閃石・雲母・1mm大の砂粒	やや不良				土器1	16
84	27	1SD001		弥生	甕	20.0			口縁部1/4	横ナデ	不明	ナデ			浅黄橙色	密	金雲母多・1mm大の砂粒多	良	凸帯貼付け	1条 刻目有	1条	外面に煤跡有 土器8	19
84	28	1SD001		弥生	壺		7.5		底部1/4		不明	不明	不明	不明	浅白灰色	密	雲母多・1mm大の砂粒多	やや不良				土器3	23
84	29	1SD001		弥生	甕		7.0		底部完存		ナデ	ナデ	ナデ	不明	外：浅黄灰色 内：暗橙黄色	密	金雲母多・1～2mm大の砂粒多	やや不良				土器4	17
84	30	1SD001		弥生	甕		7.0		底部完存		不明	不明	不明	不明	外：浅白黄色 内：黒灰褐色	密	金雲母多・角閃石多・1mm以下の砂粒多	やや良				土器7-2	20
84	31	1SD001		弥生	甕				体部細片		横ナデ	ナデ			外：明灰黄色 内：浅黄橙色	やや密	金雲母・赤色粒子・微砂粒	やや良			1条	土器7	27
84	32	1SD001		弥生	甕				体部細片		横ナデ	ナデ			浅橙灰色	密	金雲母多・1mm大の砂粒多	やや良			2条	土器7	26
84	33	1SD001		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	不明	不明			明黄橙色	密	金雲母・赤色粒子・微砂粒	やや良	外反		1条	土器7	28
84	34	1SD001		弥生	甕		7.5		底部完存		ナデ	ナデ	ナデ	不明	浅黄灰色	密	雲母多・1mm大の砂粒多	良				土器7-3	21
84	35	1SD001		弥生	壺		6.0		底部完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	浅白灰色	密	雲母多・1～2mm大の砂粒多	良				土器7-1	22
85	36	1SD001	I	弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	刷毛	ナデ			外：明橙褐色 内：浅白黄色	やや密	雲母・1mm大の砂粒	良	凸帯貼付け	1条 刻目有			1
85	39	1SD001	II	弥生	壺		7.0		底部1/2		ナデ	不明	不明	ナデ	外：浅灰黄色 内：淡黄褐色	密	雲母・角閃石・1～2mm大の砂粒多	やや良					1
85	42	1SD001	III	弥生	甕	24.2			口縁部1/6	不明	不明	不明	不明		暗灰黄色	密	1mm大の石英粒・金雲母	やや良	凸帯貼付け	1条 刻目?有	1条 刻目?有	凸帯の刻み目は摩滅激しく不明瞭	6
85	43	1SD001	III	弥生	甕		7.2		底部完存		刷毛	炭化物付着	炭化物付着	横ナデ	外：浅茶灰色 内：橙赤黄色	やや密	石英粒多	やや良				内面全体に黒い付着物（炭化物）有	5
85	44	1SD001	III	弥生	甕		5.6		底部完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	外：明灰茶色 内：淡灰茶色	やや密	石英粒多	やや良					4
85	45	1SD001	III	弥生	甕		6.6		底部2/3		不明	ナデ	ナデ	不明	外：淡灰茶色 内：浅黒灰色	やや粗	石英多・金雲母多	やや良				内面に煮こげ?有	1
85	46	1SD001	III	弥生	高				口縁部細片	横ナデ	不明	不明			浅乳茶色	密	1～2mm大の石英粒	やや不良	端部に面有				9
85	47	1SD001	III	弥生	壺				口縁部細片	横ナデ	ナデ	ナデ			淡黒灰色	やや密	赤色粒子・雲母粒子・1mm大の砂粒	やや良	外反				7
85	48	1SD001	III	弥生	壺				体部細片		ナデ?	ナデ			浅乳茶色	密	赤色粒子・白色粒子・1～2mm大の砂粒	やや良				体部外面に重弧文（丹塗）有	8
85	49	1SD001	III	弥生	壺		8.8		底部1/3		ナデ 横ナデ	不明	不明	不明	外：浅灰茶色 内：黒灰色	密	石英・赤色粒子	やや不良				内面の色調は焼成が悪しく黒ずむか?	2
85	50	1SD001	III	弥生	壺		5.0		底部完存		不明	ナデ	ナデ	不明	浅茶白色	密	金雲母・角閃石・1mm以下の砂粒	良				土器5	10
86	51	1SD001	III	弥生	壺		5.4		底部完存		磨き	ナデ	ナデ	横ナデ	外：浅赤茶色 内：淡乳黄色	やや密	長石・赤色粒子・角閃石・細砂粒	やや良					3
86	3	1SK060		弥生	甕	24.0			上半部1/4	横ナデ	刷毛	ナデ			淡灰茶色	密	雲母・1mm大の砂粒	やや良	凸帯貼付け	1条			1
86	4	1SK069		弥生	甕		6.6		底部完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外：淡灰褐色 内：浅橙茶色	やや密	金雲母・1～2mm大の砂粒	良					1
87	1	1SK003		弥生	甕		6.9		底部1/2		ナデ	不明	不明	ナデ	淡灰茶色	やや粗	1～3mm大の砂粒	不良					1
87	2	1SK003	VI	弥生	甕				口縁部細片	不明	不明	不明			淡灰茶色	やや密	1～2mm大の砂粒	不良	凸帯貼付け	1条	1条		1
87	3	1SK004		弥生	蓋				つまみ部完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	橙茶色	やや粗	角閃石・1～3mm大の砂粒	やや不良				つまみ部径7.5cm	1
87	4	1SK004	III	弥生	甕		7.0		底部完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰茶色	密	1～3mm大の砂粒少	やや不良					1
87	5	1SK004	III	弥生	粘土塊				完形		未調整				橙赤茶色	密	雲母少・細砂粒	良好				7.4g	2
87	6	1SK007		弥生	壺				体部細片		不明	不明			灰茶色	やや密	1～3mm大の砂粒多	不良					1
88	1	1SK006		弥生	蓋				上半分完存		不明	ナデ	ナデ	不明	灰茶色	やや密	1～2mm大の砂粒	良				つまみ部径6.0cm	2
88	2	1SK006		弥生	甕	24.0			口縁部1/8	不明	不明	不明			淡灰茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒多	不良	外反	1条	1条		1
88	3	1SK011		弥生	甕		6.0		底部完存		刷毛	ナデ	ナデ	ナデ	暗褐色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや良				底面に内外面からの焼成後穿孔1ヶ所有	1
88	4	1SK011	I	弥生	甕				口縁部細片	横ナデ					浅茶褐色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや良	端部に面有	内側に1条		口縁端部の面の上下端に刻み目を施す	2
88	5	1SK011	I	弥生	甕		7.6		底部1/2		不明	ナデ	ナデ	ナデ	暗赤茶色	やや密	角閃石少・雲母少・1～3mm大の砂粒少	やや良				底面に内外面からの焼成後穿孔1ヶ所有	3
88	7	1SK011	I	弥生	壺	12.0			口縁部1/6	横ナデ	ナデ	不明			外：灰茶色 内：明茶褐色	やや粗	1～5mm大の砂粒多	不良	外反し折り曲げ				1
88	7	1SK011	II	弥生	壺	20.0			口縁部1/4	横ナデ	刷毛 ナデ	磨き ナデ			赤茶色	密	1～3mm大の砂粒	やや良	外反 端部に面		頸部に貼付け凸帯1条	端部面に波線1条有	1
88	8	1SK012	II	弥生	壺	17.3	7.2	24.8	2/3	不明	不明	不明	不明	不明	淡茶褐色	やや密	1～3mm大の砂粒	不良	外反			上半と下半を別々で接合し焼成	1
88	9	1SK012	II	弥生	壺		6.4		底部完存		不明 ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや良				底面に内外面からの焼成後穿孔1ヶ所有	2
88	10	1SK012	IV	弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	ナデ	ナデ			暗赤茶色	密	1～2mm大の砂粒少	やや良	凸帯貼付け	1条	1条		1
88	12	1SK023		弥生	甕				口縁部細片	不明	不明	不明			灰茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや良	凸帯貼付け	1条 刻目?	1条 刻目有		1
88	13	1SK023	I	弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	工具ナデ	ナデ			淡赤褐色	やや密	2～3mm大の砂粒少	やや良	凸帯貼付け	1条 刻目?			1
88	14	1SK024		弥生	甕				口縁部細片	横ナデ	ナデ	ナデ			灰茶色	やや密	1～3mm大の砂粒	やや良	凸帯貼付け	1条 刻目有			1
88	15	1SK027		弥生	甕	24.0			口縁部1/8	横ナデ	刷毛	不明			灰黄色	やや密	1～3mm大の砂粒	不良	凸帯貼付け	1条 刻目?	1条 刻目有		1
88	16	1SK027	III	弥生	甕				口縁部細片	不明	不明	不明			淡灰褐色	密	赤色粒子・1～2mm大の砂粒	不良	内傾			甕蓋か?	1
88	17	1SK028		弥生	甕		5.4		底部完存		不明 刷毛?	不明	不明	不明	淡茶褐色	やや密	1～4mm大の砂粒	やや不良					1
88	18	1SK028	III	弥生	壺		6.5		底部1/2		不明	ナデ	ナデ	ナデ	暗褐色	粗	1～3mm大の砂粒	やや良					1
89	1	1SK029		土師	不明				底部細片		刷毛	工具ナデ	工具ナデ	ナデ	淡赤茶色	やや密	1～2mm大の砂粒	良					4
89	2	1SK029		陶器	碗	10.6			口縁部1/5	施釉	施釉	施釉			素地：白色 釉薬：[illegible]	精良		良	外方に開く			[illegible]	1
89	3	1SK029		瓦	平瓦				小片		ナデ?	ナデ			浅黒灰色（芯部）	密		良				[illegible]	2
89	4	1SK029		土師	不明		20.0		底部1/4		刷毛	刷毛?	ナデ	ナデ	淡赤茶色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや良				S-2aと接合	3
89	6	1SK036		弥生	甕		5.8		底部完存		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	灰茶色	やや粗	1～5mm大の砂粒	やや不良				外底面から焼成後穿孔（未貫通）	2
89	7	1SK036		弥生	蓋				つまみ部2/3		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	暗灰茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや良				つまみ部径4.8cm	1
89	8	1SK036	I	弥生	壺				口縁部細片	不明	不明	不明			明茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや不良	外反				2
89	9	1SK036	I	弥生	壺	16.0			口縁部1/8	横ナデ	不明	不明			暗褐色	やや密	1mm大の砂粒少	不良	外反 端部に面有				1
89	10	1SK036	I	弥生	甕				口縁部細片	不明	不明	不明			淡灰褐色	粗	1～3mm大の砂粒	不良	凸帯貼付け	1条	1条		3

Tab.5　出土遺物（土器）観察表②

Fig.	No.	遺構 番号	層位等	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	含有粒子	焼成	口縁部形状	口縁部凸帯	胴部凸帯	備考	R.No.
90	3	ISK037	II	弥生	支脚	6.0			天井部 1/2	ナデ	ナデ				淡茶褐色	密	赤色粒子	やや良					1
90	4	ISK037	II	弥生	支脚	6.4			天井部 1/2	ナデ	ナデ				赤褐色	密		やや良					2
90	5	ISK037	III	弥生	[illegible]		6.2		底部 1/2		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰茶色	やや密	1～2mm大の砂粒	良				底部はやや上げ底状	8
90	6	ISK037	III	弥生	甕	26.0			上半部 1/5	不明	不明	不明	不明		灰茶色	やや粗	角閃石・1～3mm大の砂粒	不良	凸帯貼付け	1条			2
90	7	ISK037	III	弥生	甕	22.0			上半部 1/4	横ナデ	刷毛	不明			暗茶褐色	粗	1～2mm大の砂粒	やや不良	外反		1条		4
90	8	ISK037	III	弥生	甕	34.0			上半部 1/4	不明	不明	不明	不明		暗赤茶色	やや粗	1～2mm大の砂粒	不良	外反		1条		1
90	9	ISK037	III	弥生	甕	24.0			上半部 1/4		刷毛?	ナデ			暗茶褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒	不良	外反		1条	口縁端部は5.0cmのため口径は推定値	3
90	10	ISK037	III	弥生	甕				口縁部 細片	不明	不明	不明			淡灰茶色	密	1～2mm大の砂粒	不良	凸帯貼付け	1条			5
90	11	ISK037	III	弥生	甕		5.7		底部 1/3		ナデ	不明	不明	ナデ	暗茶褐色	やや密	1～2mm大の砂粒	やや良					7
90	12	ISK037	III	弥生	甕				底部 完存		不明	不明	不明	不明	暗茶褐色	やや粗	1～4mm大の砂粒	やや不良					6
90	13	ISK037	III	弥生	甕		7.8		底部 完存		不明	不明	不明	不明	灰褐色	やや粗	1～2mm大の砂粒	やや不良					9
91	1	ISK040		弥生	甕	30.0			口縁部 1/2	横ナデ	不明	ナデ			外：淡赤茶色 内：淡灰黄色	やや密	金雲母多・角閃石多・微砂粒多・黒曜石片	やや良	凸帯貼付け	1条	1条 刻目有		1
91	2	ISK040		弥生	甕				口縁部 細片	不明	不明	不明			暗赤茶色	やや粗	金雲母・1mm以下の砂粒	やや不良	凸帯貼付け	1条	1条		2
91	3	ISK040	I	弥生	壺	30.0			口縁部 1/4	横ナデ	刷毛	刷毛			淡茶灰色	やや密	雲母・黒曜石片・微砂粒	良	端部に面有				1
91	4	ISK040	II	弥生	甕	27.6			上半部 完存	横ナデ	不明	不明			外：淡灰茶色 内：淡白茶色	密	雲母・角閃石・微砂粒	やや良	凸帯貼付け	1条 刻目有	1条 刻目有		1
91	5	ISK040	II	弥生	甕	30.0			口縁部 1/2	横ナデ	ナデ	ナデ			淡茶灰色	やや密	金雲母多・1mm以下の砂粒多	やや良	凸帯貼付け	1条 刻目？	1条 刻目？		2
91	6	ISK040	II	弥生	甕				口縁部 細片	横ナデ	不明	不明			外：淡灰茶色 内：淡赤茶色	やや密	金雲母多・微砂粒多	やや良	凸帯貼付け	1条	1条 刻目？		3
91	7	ISK040	II	弥生	鉢？				口縁部 細片	横ナデ	不明	不明			淡灰茶色	やや密	雲母・2mm以下の砂粒	やや不良	外反				4
91	8	ISK075		弥生	甕		8.0		底部 完存		不明	ナデ	ナデ	ナデ	明茶褐色	密	雲母・角閃石・1mm大の砂粒	やや良				底部はやや上げ底状	1
91	9	ISK083		弥生	甕		7.4		底部 1/4					不明	淡茶白色	やや密	雲母・角閃石・微砂粒	やや不良				底部はやや上げ底状	1
92	1	ISB030	f	土師	不明		28.0		底部 1/8		工具ナデ	刷毛 圧痕格子	刷毛 圧痕格子	工具ナデ	赤褐色	密	赤色粒子・角閃石・雲母・微砂粒少	良					1
92	2	ISB030	d	青磁	碗		6.0		底部 1/8		施釉	施釉	施釉	施釉	素地：明灰色 釉薬：緑茶色	精良		良				畳付は釉を掻き取る	1
93	1	ISA002	b	土師	不明				体部 1/6		ナデ	刷毛 圧痕格子			淡赤茶色	密	雲母・角閃石・赤色粒子・微砂粒	良好				ISX16の遺物と接合	1
93	2	ISA002	a	瓦	平瓦				小片	ナデ	ナデ	ナデ			淡黒灰色	精良	砂粒なし	やや良				側面は面取り	1
93	3	ISA002	a	瓦	平瓦				小片		刷毛	不明	不明		明赤茶色	密	赤色粒子やや多・1mm大の砂粒少	良					2
93	4	ISA002	c	陶器	瓶		6.4		下半分の 1/2		施釉	強い 横ナデ			素地：暗紫赤色 釉薬：淡灰茶色	精良	砂粒なし	良				高台の内面に砂が僅かに付着	1
93	5	ISA002	c	瓦	平瓦				小片		ナデ	ナデ			赤茶色	密	細砂粒少	良				側面は糸切り後にナデを施す	2
93	6	ISA002	a	土師	きな？				小片		ナデ	未調整			明茶褐色	密	赤色粒子・細砂粒少	良				土層と内側面に接合痕	3
94	1	ISX014		土師	不明	28.0			体部 1/8		ナデ	刷毛 圧痕格子			赤茶色	密	雲母・角閃石・赤色粒子・微砂粒	良				すかし有	1
94	2	ISX010		土師	不明				細片		ナデ	刷毛 圧痕格子			赤茶色	密	雲母・角閃石・赤色粒子・微砂粒	良				すかし有	1
94	3	ISX026		白磁	浅碗	14.8	9.4	4.7	口縁部 3/4欠損	施釉	施釉	施釉	施釉 目立え痕	施釉	素地：白色 釉薬：極淡青色	密		良	口禿として口縁			やや緩かな貫入有 口縁部露し部に空洞	1
95	2	ISX095		白磁	三足 水注	4.8	2.9	3.0	1/2	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	素地：明茶灰色 釉薬：明灰白色	精良	黒色粒子少	良好	素の受け口			口はう欠損	2
95	3	ISX095		陶器	蓋	9.4		3.8	完形	施釉	施釉	露胎	露胎	施釉	素地：濃赤褐色 釉薬：濃黄緑色	精良	黒色粒子・白色粒子	良好	返り付				1
95	4	ISX095		土師	型				細片		ナデ 刷毛	指おさえ			明乳茶色	密	金雲母・黒色粒子・赤色粒子・微砂粒	良					3
95	5	ISX095		土師	型				細片		ナデ	指おさえ			淡乳茶色	密	金雲母・黒色粒子・赤色粒子・微砂粒	良					4

Tab.6　出土遺物（土器）観察表③

Fig.	No.	遺構 番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	R.No.
81	5	ISD005		サヌカイト	多久	鏃	2.6	1.5	0.3	1.0	完形		5
81	11	ISD020		安山岩		磨り石	11.8	10.7	3.2	620.0	2/3		6
82	18	ISD001		片岩		紡錘車	3.6	3.3	0.3	5.7	完形	未製品	30
82	19	ISD001		片岩		石包丁	7.3	7.0	1.1	52.6	1/2	未製品	31
82	25	ISD001		安山岩		敲石	8.5	7.3	3.7	275.0	完形		33
83	20	ISD001		安山岩		凹石	8.7	8.9	5.0	720.0	2/3	片側縁部欠損	34
83	21	ISD001		安山岩		凹石	8.7	8.1	6.4	670.0	3/4	片側縁部欠損	35
83	22	ISD001		黒曜石	腰岳	鏃	2.1	1.5	0.4	0.8	完形		29
83	23	ISD001		黒曜石	腰岳	鏃	2.6	1.5	0.2	0.6	片脚端部欠損		32
84	24	ISD001		安山岩		砥石	11.7	10.4	7.1	1110.0	2/3		36
85	37	ISD001	I	サヌカイト	多久	鏃	2.2	1.9	0.3	0.7	完形		3
85	38	ISD001	I	サヌカイト	多久以外	鏃	2.1	1.6	0.3	0.7	完形		2
85	40	ISD001	II	サヌカイト	多久	石匙？	5.4	1.2	0.5	4.5	基部欠損		3
85	41	ISD001	II	黒曜石	腰岳	鏃	2.9	2.1	0.3	1.4	片脚端部欠損		2
86	1	ISK005	II	安山岩		磨り石	19.7	24.1	8.0	3500.0	1/2		1
86	2	ISK005	II	砂岩		磨り石	20.2	14.9	7.2	3000.0	完形		2
88	11	ISK012	I	黒曜石	腰岳	鏃	1.3	1.4	0.3	0.5	先端部欠損		1
89	5	ISK034		黒曜石	腰岳	鏃	1.4	1.5	0.3	0.7	先端片脚端部欠損		1
89	11	ISK036	I	サヌカイト	多久以外	鏃	2.1	1.7	0.3	0.7	先端片脚端部欠損		4
90	12	ISK037		黒曜石	腰岳	鏃	2.3	1.4	0.4	0.8	片脚端部欠損		1
90	13	ISK037	I	安山岩		磨り石	8.5	7.3	4.2	395.0	7/8		1
91	9	ISK093		サヌカイト	多久	横刃	4.9	3.1	0.9	14.2	未製品？		2
94	1	ISX047		凝灰岩		石鍋片（火舎）	4.8	10.2	3.1	136.7	細片		1
94	6	ISX100		安山岩		凹石	8.0	7.0	5.0	410.0	完形		1
94	7	表 採		サヌカイト	多久	鏃	1.7	1.0	0.4	0.8	先端片脚端部欠損		1

Tab.7　出土遺物（土器以外）観察表

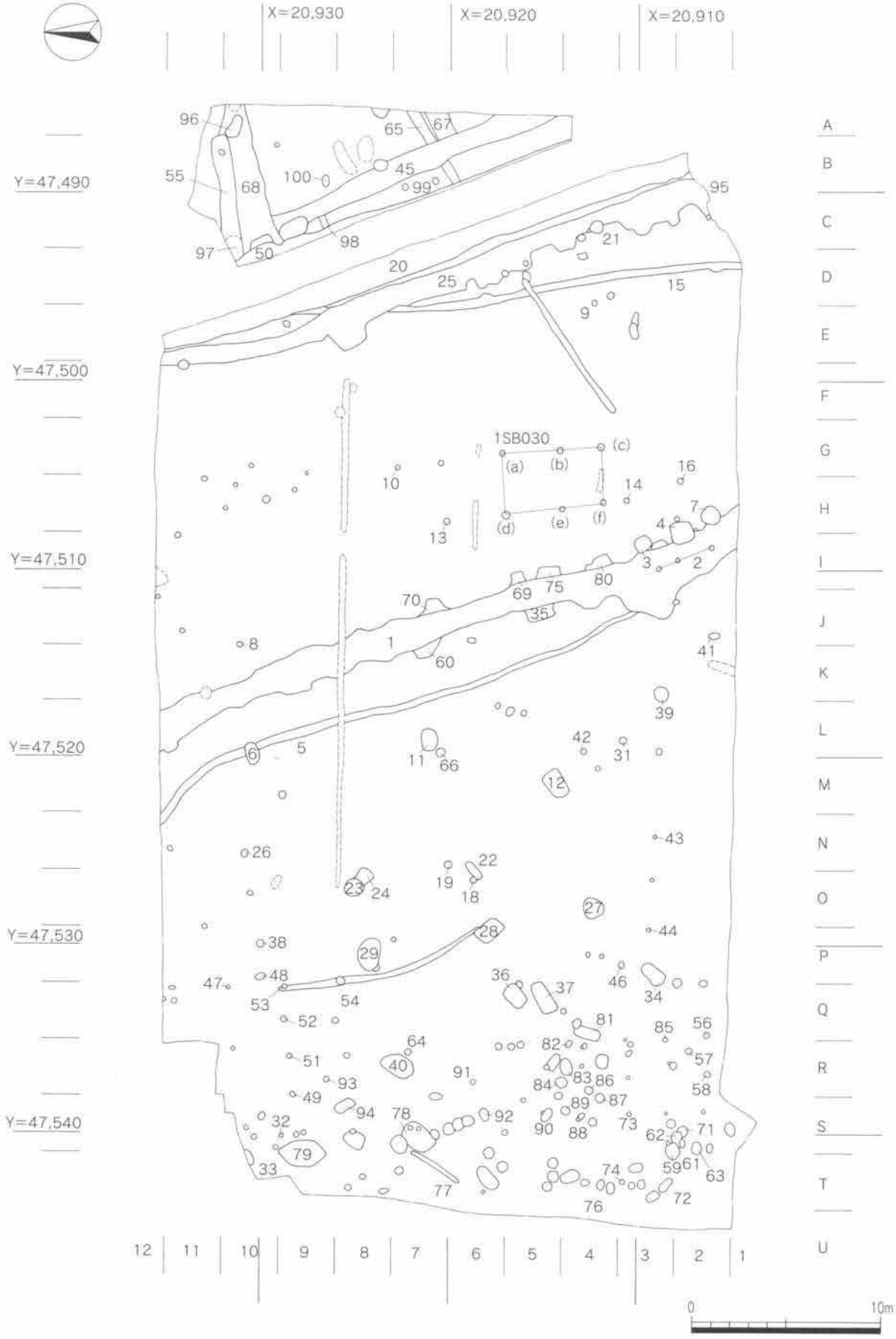


Fig.96　遺構検出時略図（1/300）

S-番号	遺構番号	備　考	地区	S-番号	遺構番号	備　考	地区
1	1SD001		H1	51			R9
2	1SA002	S-1の下層遺構	I2	52			Q9
3	1SK003		I3	53			Q9
4	1SK004		H2	54			P8
5	1SD005		J3	55	1SD055		A10
6	1SK006		L10	56			Q2
7	1SK007		H2	57			R2
8			K10	58			R2
9			D4	59			S2
10			G7	60	1SK060		J7
11	1SK011		L7	61			S2
12	1SK012		M5	62			S2
13			H7	63			S2
14	1SX014		H3	64			R7
15	1SD015		D2	65	1 SD065		A7
16	1SX016		H2	66			L7
欠番				67	1SD067		A6
18			O6	68	1SD068		A10
19			N7	69	1SK069		I5
20	1SD020	現況水路の下層遺構	B2	70	1SK070		J7
21	1SK021		C4	71			S2
22	1SK022	単一埋土（淡黒褐色土）	O6	72			T3
23	1SK023		O8	73			S3
24	1SK024		O8	74			T3
25	1SD025	S-20に平走	P8	75	1SK075		I5
26	1SX026		N10	76			T4
27	1SK027		O4	77	1SD077		T7
28	1SK028		O6	78			S8
29	1SK029		P8	79			T9
30	1SB030		G4	80	1SK080		I4
31			L3	81	1SK081		Q4
32			S9	82			R4
33			T10	83	1SK083		R4
34	1SK034	単一埋土（淡黒灰色粘質土）	P3	84			R4
35	1SK035		J5	85			Q3
36	1SK036		Q5	86			R4
37	1SK037		Q5	87			S4
38			P10	88			S4
39			L3	89			S4
40	1SK040		R7	90			S5
41			J2	91			R6
42			L4	92			S6
43			N3	93			R8
44			P3	94		遺物なし	S8
45	1SD045		A5	95	1 SX095		B2
46			O4	96		攪乱？	A10
47	1SX047		Q10	97		攪乱？	B10
48			P10	98	1SD098		C9
49			R9	99			B7
50	1SD050	S-20と同一？	B4	100	1SX100	攪乱	B9

Tab.8　遺構番号一覧

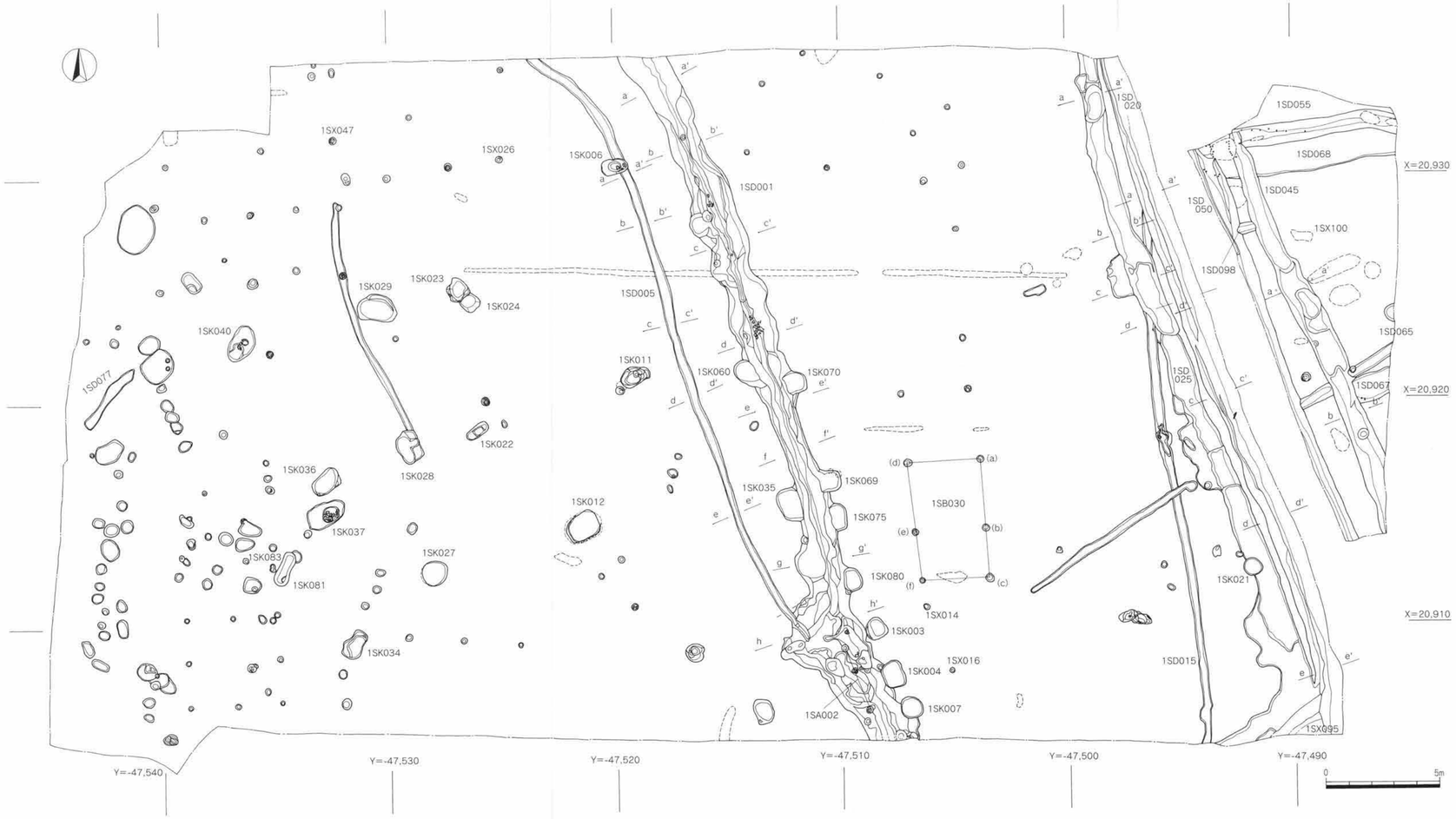


Fig.97　遺構全体配置図（1/300）

１．水田上平霊石遺跡（第３次調査）

(1)はじめに

水田上平霊石遺跡第１次調査を行っていた折に、調査区の周囲では、ほ場整備の面工事が行われていた。工事は耕作地の表土剥ぎを行っていたのであるが、設計協議の際に合意した深さよりもやや深く行われていた。そのため遺構が露出し、その一部が破壊される恐れがあった。再度工事側と協議して、表土を戻す際に直接遺構の上を重機が走ることがないようにして、遺構の保存をはかることとなった。しかしながら、露出した遺構のうち甕棺遺構については既に破壊は免れないと判断し、緊急に本調査を実施して記録保存の措置を講ずることとした。

上記のような経過で本調査を実施したのが、ここに報告する水田上平霊石第３次調査である。調査箇所は筑後市大字常用字上平霊石1424-1で、甕棺墓のみを調査対象としたため、調査区は特に設定しなかった。調査は永見秀徳が担当した。

Fig.98　水田上平霊石遺跡第３次調査位置図（1/2,500）

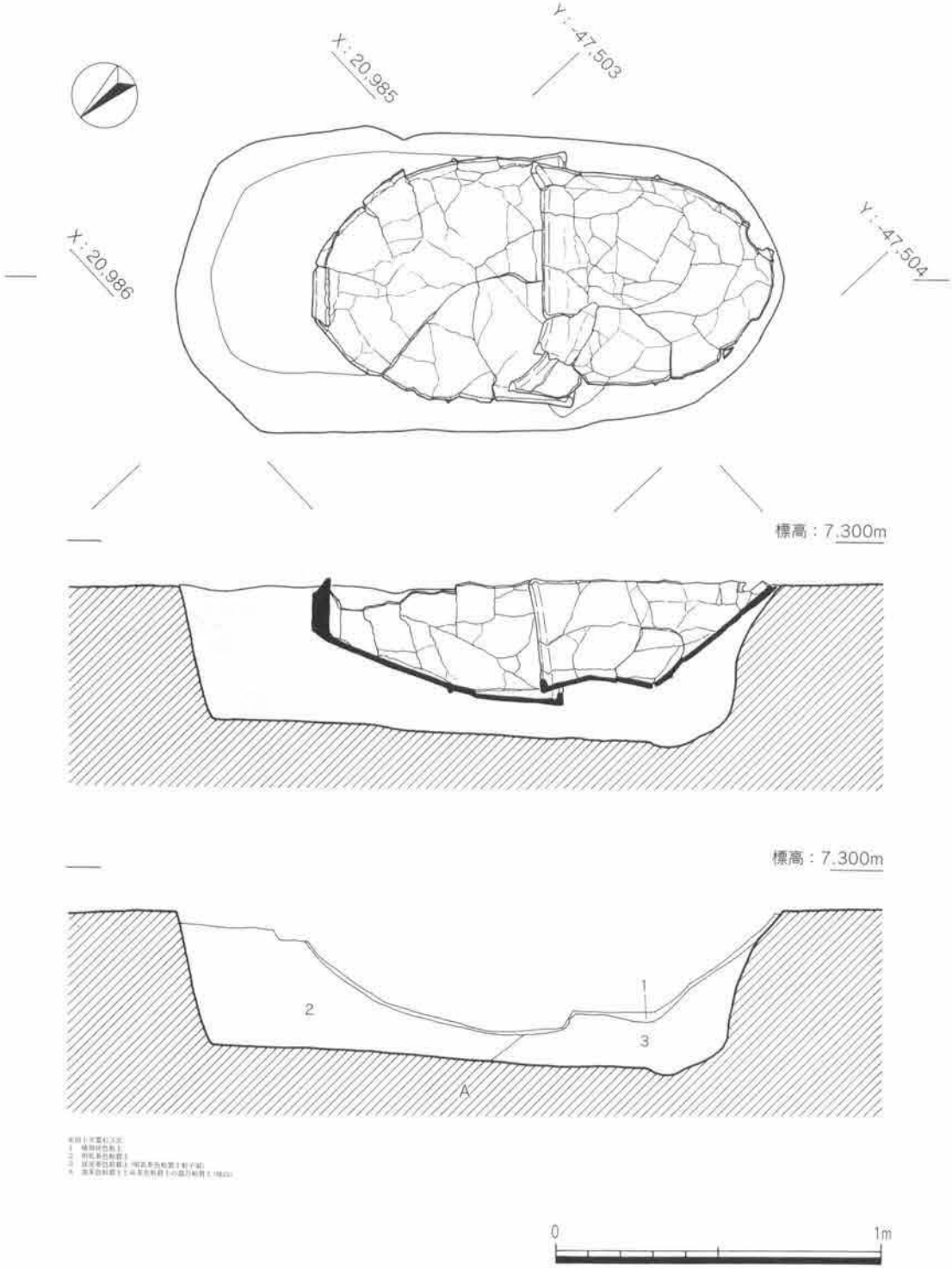


Fig.99　甕棺実測図（1/20）

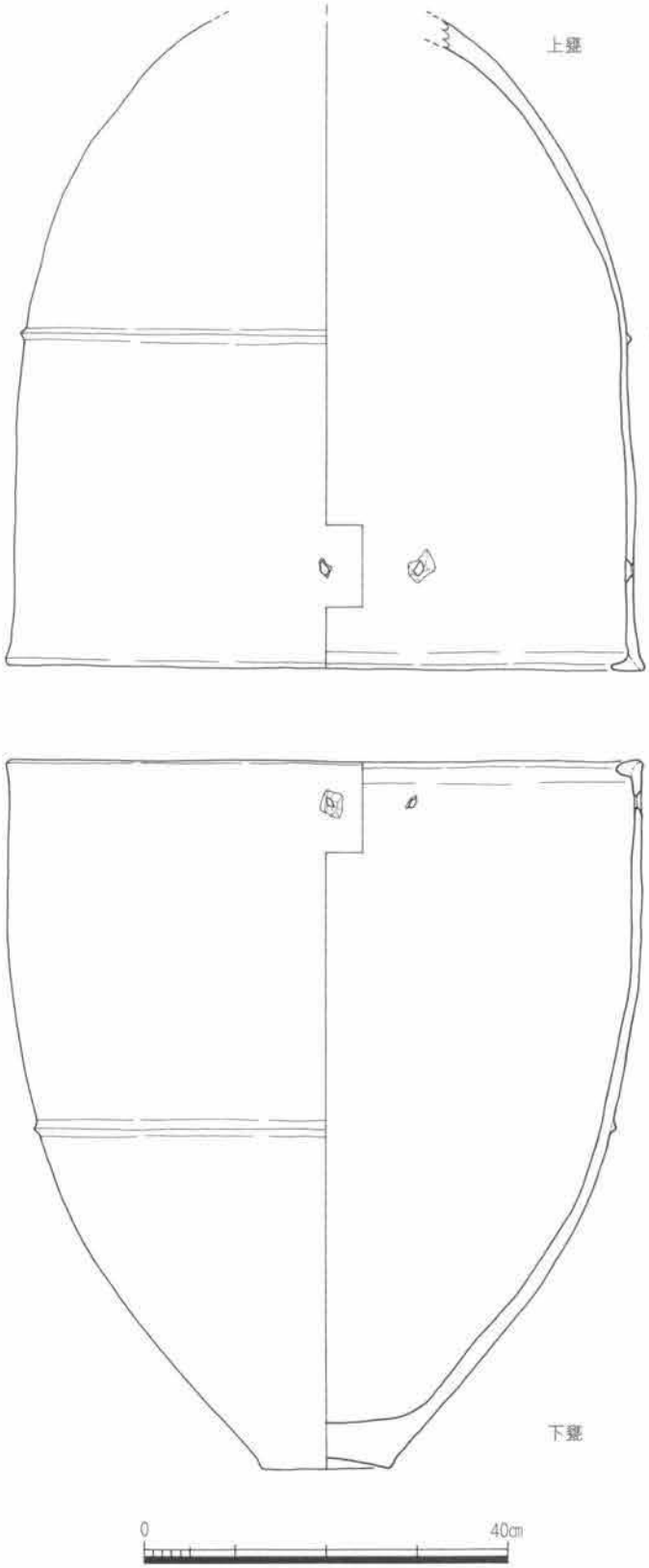


Fig.100　甕棺実測図（1/8）

(2)検出遺構

前述した理由により甕棺墓のみを調査対象とした。したがって、甕棺墓のみを検出した。墓壙は長軸1.9m短軸0.9m残存深さ0.5mで、主軸の方位はN－45°－Eである。墓壙の底面はほぼ水平であるが、埋置角度は下甕が4°下がる。しかしながら、断面土層を観察すると上甕側の裏込が先に堆積した状況を示し、上甕と下甕は逆転する可能性がある。

(3)出土遺物

今回の調査では、甕棺の棺体以外は出土しなかった。以下、上甕、下甕の順に報告する。

上甕は丸みを帯びた器形の中位に凸帯を貼付けている。口縁部は僅かに外反させ、内側に小さな凸帯を貼付けている。口縁部の下に水抜き用の穿孔を、焼成後に内面側から施している。口径は70.0cmを測り、焼成は良好で暗乳茶色を呈する。

下甕もよく似た形態であるが、細部は異なる。全体的に上甕よりも直線的な形状で、口縁部は直立する。内側に凸帯を貼付けるのは同様である。こちらも、口縁部の下に水抜き用の穿孔を焼成後に施しているが、穿孔は外面側から行われている。口径74.0cm底径14.0cm器高77.6cmを測る。焼成はやや良で、赤茶色を呈する。

(4)小結

今回の調査対象とした甕棺の北東約50mには、平霊石と呼ばれる大石がある。弥生時代の支石墓とされ、長軸2.4m短軸1.8m厚さ0.4mを測る。この石は昭和29年の耕地整理の際に陰陽石等が出土したとの記録がある。(註1) 今回調査の甕棺は別物かと思われたが、前述した工事の表土剥ぎ時に踏査した限りでは、主体部となるような遺構は確認できなかった。したがって、調査時からこの甕棺が支石墓の主体部ではないかと考えていた。

調査してみると、棺内からは棺体以外の遺物は出土せず、副葬品の内容から支石墓の主体部であるかどうかを論考することは不可能であった。ただ、使用されている棺体は橋口分類（註2）のＫＩcかと思われる。また、支石墓の存続年代を考えても、この甕棺を支石墓の主体部にあてても矛盾はない。しかしながら、断定もまた不可能である。

註1　石田乙次郎　「筑後水田校区郷土史」　筑後郷土史研究会　1981
註2　橋口達也　「甕棺の編年的研究」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－XXXI－中巻」福岡県教育委員会　1979　所収

Ⅳ.まとめ

今回の調査成果を振り返りいくつかの項目について記述する。

1.弥生時代

(1) 竪穴住居について

常用日田行遺跡（第1次調査）からは2軒の竪穴住居（1SI040・1SI050）を検出した。平面プランは何れも円形状若しくは楕円形状を呈しており、1SI040＝直径6.15m前後、1SI050＝直径4.85～5.45mを計測するものであったが、遺構の残存状況は極めて悪く、辛うじて床面部以下の痕跡を残している状況であった。この状況は後世に受けた削平によって大部分を消失していると思われるが、このことについては以前永見秀徳によって論考されているところであり、また本旨から外れるのでここでの言及は避ることとする。

さて、今回は円形竪穴住居の規模について他の事例も含めて概観してみたい。当遺跡周辺では南西部に位置する[註1]常用長田遺跡（第2次調査）からも5軒の円形竪穴住居が確認されており、他に6軒の方形竪穴住居もあわせて検出されている（Tab.9）。Tab.9の住居一覧表を元に円形住居における面積比から住居の復原直径を導きだしたものがTab.10であるが、当表からは居住面積20～40㎡（復原直径5.0～7.1m）にピークを認めている状況が窺える。また、参考として方形竪穴住居においても示したところ40㎡以下の居住面積で集中していることが明らかになった。平面形状においては時期によって円形から方形へと転訛することは周知のとおりであるが、両表が示すデータは竪穴住居の平面形状変化に関わりなく、居住スペースを20～40㎡とした建物が標準であったと解されるのではないだろうか。この状況を勘案すると、今回大型竪穴住居として認識される2SI2300と2SI2330については居住スペースとしての特異性が考えられることから活用・使用方法等の異なる主要棟であった可能性が推測される。参考事例として八女市「[註2]一竿遺跡」で検出されている円形竪穴住居を紹介する。一竿遺跡で確認された円形竪穴住居は常用遺跡群の時期に相当すると思われ、住居内部の構造は何れも中央に浅い土坑を有し、それを

遺　跡　名	遺構番号	平面プラン	長軸（m）	短軸（m）	残高（m）	面積（㎡）	備　考
常用日田行遺跡	1SI040	円形	6.15	－	0.47～0.54	29.7	
（第1次調査）	1SI050	楕円形	5.45	4.85	0.06	20.8	
常用長田遺跡	2SI2300	楕円形	9.00	8.40	－	59.4	
（第2次調査）	2SI2310	楕円形	5.80	5.00	－	22.9	
	2SI2320	楕円形	6.30	6.00	－	29.7	
	2SI2330	楕円形	7.50	7.00	－	41.3	
	2SI2340	円形	6.00	－	－	28.3	
	2SI0606	長方形	6.20	4.10	0.10	25.4	
	2SI0608	長方形	6.00	5.10	0.20	30.6	
	2SI0609	長方形	6.20	5.70	0.10	35.3	
	2SI0689	方形	4.30	4.20	0.20	18.1	
	2SI0750	長方形	4.90	3.70	0.20	18.1	
	2SI2350	長方形？	－	2.60	0.10	－	

Tab.9　常用日田行・長田遺跡竪穴住居一覧表（法量）

居住面積	円形住居復原直径（平均値）	該当住居（円形・楕円形）	該当住居（方形・長方形）	備　考
50～60㎡	7.9～8.7m	2SI2300		
40～50㎡	7.1～7.9m	2SI2330		
30～40㎡	6.2～7.1m	1SI040・2SI2320	2SI0608・2SI0609	
20～30㎡	5.0～6.2m	1SI050・2SI2310・2SI2340	2SI0606	
20㎡未満	5.0m未満		2SI0689・2SI0750	

Tab.10　常用日田行・長田遺跡竪穴住居一覧表（面積別）

中心に柱穴が配されたものであることから構造的にも類似したものと捉えることができる。報告書によると竪穴住居の直径は10m前後—1軒、7m前後—5軒、5m前後—1軒が検出されており、これを面積率に換算すると10m前後—78.5㎡、7m前後—38.5㎡、5m前後—19.6㎡となり、直径7m前後（38.5㎡）の竪穴住居が集中して確認されている状況が明らかである。つまり、常用日田行・長田遺跡で確認した標準タイプの竪穴住居と比較するとほぼ同等の居住スペースを確保した住居であったことが窺える。

おわりに居住スペースについては、現在の家屋建築と同じように住居が造設される以前からそこに居住する住人が受ける環境によって大きく左右されるものである。当該期においても同様の環境条件が当然の如く存在していたことは明らかであり、集落の地域性・規則性・家族構成・使用目的等、あらゆる状況下によって複雑であり相違していたものと予測される。今回は住居の規模について概観したが、資料の蓄積を待って今後も種々の角度からのアプローチを試んでいきたい。

(2) 土坑について

今回報告した各遺跡からは多種の土坑が検出された。当遺跡に限らず、これまでも当該期における一般的な集落遺跡からは殆どのケースで土坑が検出されており、様々なタイプの土坑が報告されている。しかし、土坑の性格を位置付けを行うにあたっては、ある程度の予測はできてはいても断定できる程の証拠が不十分であるなどの理由から、殆どの場合で消極的な判断や保留がなされていることが現状のようである。筆者もこの状況に関しては同様に苦慮している一人であるが、今後の調査・研究をする上でこの問題をどう解釈し、対処していけばよいのかが課題として残っているのではないだろうか。そこで、今回はその第一歩である基本的作業として土坑の形状や内部構造について注目し、以下のような分類を試みてみた。

分類にあたっては、まず大区分として①平面形状を3タイプ（A～C群）とし、中区分として②立面形状を4タイプ（Ⅰ～Ⅳ類）、小区分として③底面形状を2タイプ（1・2類）として分類し、土坑分類模式図はFig.101に図示した。また、この分類を元に今回本文中に掲載した土坑一覧表をTab.11に、各分類における比較表並びにグラフは153頁（Fig.102～108、Tab.12・13）に示した。なお、各類型は更に細分可能であることを追記しておく。

①平面形状（Fig.101）

A群　平面形状が方形または長方形状を呈するタイプで原則としてコーナーの形状が隅丸を呈するものも含まれる。

B群　平面形状が円形または楕円形状を呈するタイプである。

C群　平面形状が不定形状を呈するタイプでA・B群に含まれないものをC群とした。

②立面形状（Fig.101）

Ⅰ類　遺構検出面から底面へかけての壁面が、垂直または内部へやや傾斜したタイプである。

Ⅱ類　Ⅰ類の逆のタイプで、遺構検出面から底面へかけては外方へ傾斜または袋状を呈する。

Ⅲ類　遺構検出面と底面までの壁面に屈曲がみられるタイプであり、坑内の上位や下位など不偏的に付すものが見受けられ、更に細分化できる余地を残している。

Ⅳ類　遺構検出面と底面までの間でテラス状の施設が備えられている。内部に複数存在しているものもあり、更に細分可能と考える。

③底面形状（Fig.101）

1類　遺構底部に施設を有していないタイプで底面はほぼフラットな形状を呈する。

2類　遺構底部に施設を有するタイプで底面に小ピット等が設けられたものである。底面に複数の凹みが認められるものもこれに含まれる。

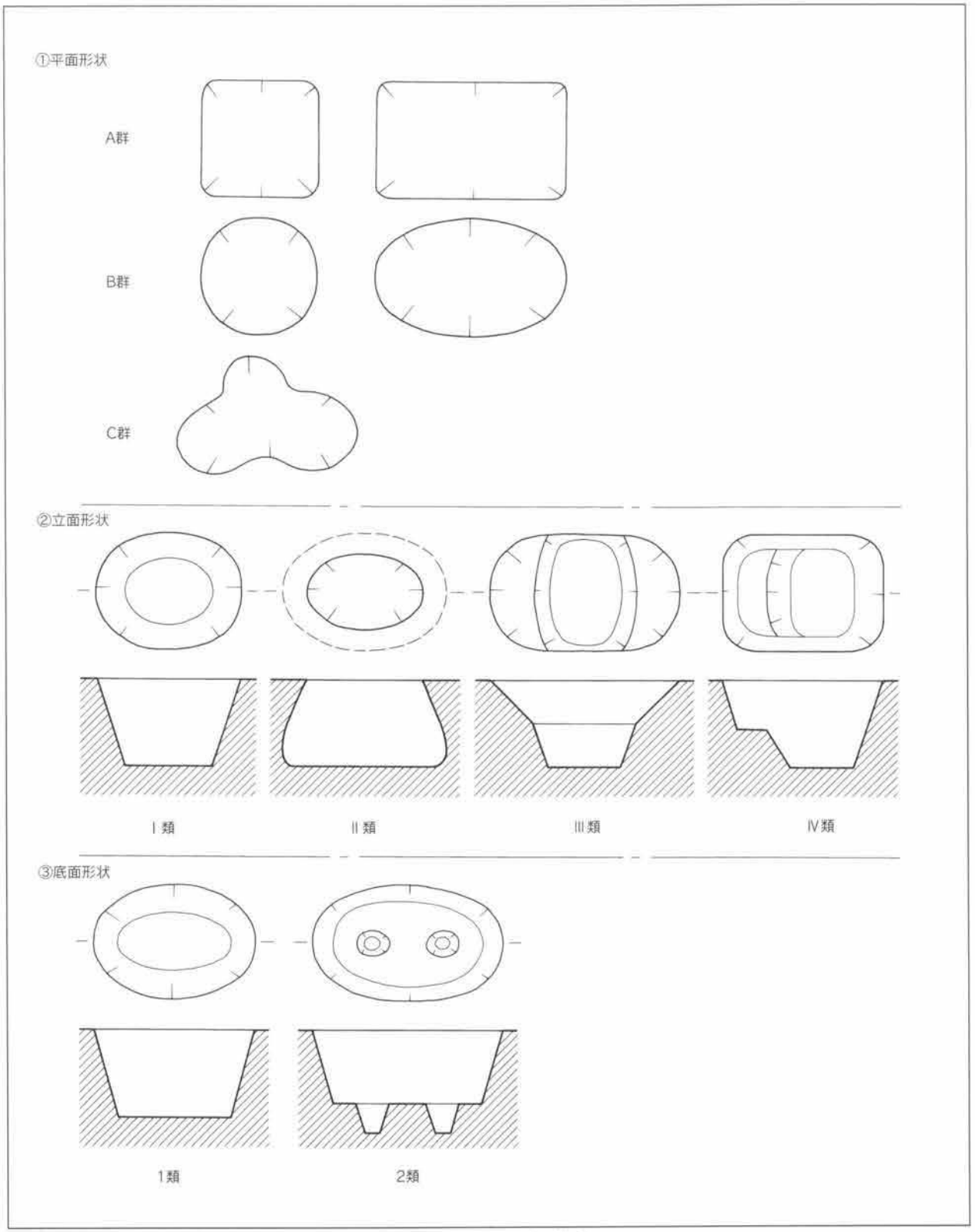


Fig.101　土坑分類模式図

以上の内容から各区分（Tab.12、Fig.102～104）を眺める。平面形状（Fig.102）においてA群及びB群の各群は全体の4割程度を占めており、ここではA群とB群の比較差はあまり感じられない結果となった。しかし、A群とB群の合計は全体の8割程度を占めることからその標準性が窺われる。続いて立面形状（Fig.103）ではⅠ類・Ⅳ類が突出してみられる。各類は全体の4割程度、合算すると約8割を占

単位：m

遺跡名	遺構番号	地区番号	分類形態	長さ	幅	深さ	方位
常用日田行遺跡 第1次調査	ISK 001	Z19	B－Ⅰ－1	1.79	1.50	0.75	N-69° 37' 25" -W
	ISK 002	Y17	B－Ⅳ－1	3.82	0.95~1.42	0.40~0.90	N-38° 05' 20" -E
	ISK 003	W15	A－Ⅲ－1	1.95	1.30	1.05	N-44° 25' 58" -W
	ISK 005	P19	A－Ⅳ－1	2.48	1.13	0.31~0.60	N-18° 10' 41" -E
	ISK 011	Y14	B－Ⅳ－1	1.90	0.76	0.22~0.45	N-39° 48' 20" -W
	ISK 013	W17	B－Ⅰ－1	1.61	0.82	0.45	N-35° 23' 41" -E
	ISK 015	Y16	A－Ⅳ－1	1.71	0.92	0.54	N-54° 14' 46" -W
	ISK 022	M17	B－Ⅳ－1	1.30	1.38	0.50~0.71	N-46° 41' 05" -W
	ISK 023	J16	B－Ⅲ－2	2.10	1.72	0.99	N-22° 45' 04" -E
	ISK 025	W19	A－Ⅰ－1	1.48	1.23	1.00	N-35° 05' 45" -E
	ISK 027	N13	B－Ⅱ－1	1.96	1.10	1.35	N-26° 01' 47" -E
	ISK 028	M11	A－Ⅳ－1	2.01	1.37	0.50~0.70	N-34° 09' 35" -E
	ISK 029	M8	A－Ⅰ－1	2.32	1.41	0.62	N-59° 49' 35" -W
	ISK 035	T19	B－Ⅰ－1	1.89	0.83	0.40	N-36° 52' 12" -E
	ISK 036	L3	C－Ⅳ－2	2.60	1.15	0.39	N-50° 37' 15" -W
	ISK 038	L6	A－Ⅳ－1	2.00	1.17	0.21~0.28	N-31° 22' 29" -E
	ISK 039	L5	A－Ⅳ－1	2.18	1.21	0.63	N-53° 23' 35" -E
	ISK 041	O2	A－Ⅱ－2	2.02	1.10	0.41	N-62° 39' -W
	ISK 042	O15	A－Ⅳ－1	2.13	0.92	0.48~0.72	N-26° 01' 47" -E
	ISK 045	R19	B－Ⅳ－2	2.31	0.98	0.36~0.60	N-33° 41' 24" -E
	ISK 046	N5	B－Ⅲ－1	1.16	1.26	0.85	
	ISK 048	AA12	B－Ⅰ－1	1.93	1.33	0.43	N-27° 15' 19" -E
	ISK 055	Q19	A－Ⅰ－2	1.55	0.83	0.31~0.48	N-34° 01' 10" -E
	ISK 060	Y13	A－Ⅳ－1	3.02	1.66	0.62	N-48° 28' 05" -E
	ISK 065	Q17	B－Ⅰ－2	1.90	0.91	0.58~0.82	N-5° 24' 34" -W
	ISK 070	Z12	C－Ⅳ－2	3.04	1.40	0.75	N-37° 52' 30" -W
	ISK 075	R17	C－Ⅰ－1	1.10	1.03	0.31	
	ISK 080	X11	A－Ⅳ－2	2.45	1.58	0.98	N-48° 48' 51" -W
	ISK 085	R17	A－Ⅳ－1	1.77	0.80	0.40	N-45° -E
	ISK 090	X10	B－Ⅱ－1	2.00	1.50	1.23	N-23° 51' 37" -W
	ISK 101	X22	C－Ⅳ－1	1.55	1.10	0.45	N-60° 15' 18" -W
	ISK 102	U22	A－Ⅳ－2	2.30	0.85	0.66~0.95	N-36° 09' 29" -W
	ISK 105	Z14	A－Ⅲ－2	1.77	1.21	1.00	N-51° 20' 25" -W
	ISK 106	V27	A－Ⅱ－1	2.07	1.21	0.65	N-41° 11' 09" -W
	ISK 107	V27	B－Ⅰ－1	1.50	0.62	0.35	N-19° 26' 24" -E
	ISK 108	V28	B－Ⅰ－1	1.33	0.71	0.32	N-78° 41' 24" -W
	ISK 109	V28	A－Ⅰ－1	1.64	1.12	1.42	N-62° 42' 02" -W
	ISK 110	Y15	A－Ⅲ－2	1.16	1.22~	0.67	N-56° 55' 46" -W
	ISK 115	X14	A－Ⅲ－1	1.66	1.00	0.69	N-27° 04' 19" -E
	ISK 116	N21	A－Ⅳ－2	1.67	1.35	0.39~0.81	N-46° 35' 28" -W
	ISK 117	M20	B－Ⅰ－1	1.06	1.45	0.80	N-39° 48' 20" -W
	ISK 118	L21	B－Ⅳ－1	1.38	0.87	0.10~0.40	N-28° 29' 44" -E
	ISK 135	V13	B－Ⅳ－2	1.50	1.56	0.32~0.62	
	ISK 140	V14	B－Ⅰ－2	2.13	0.92	0.39	N-46° 07' 24" -W
	ISK 145	V15	A－Ⅰ－2	1.37	1.00	0.52	N-59° 02' 10" -W
	ISK 150	V15	C－Ⅳ－2	1.36	0.75	0.74	N-22° 02' 10" -E
	ISK 158	Y11	A－Ⅳ－2	1.56	0.87	0.46	N-47° 57' 03" -W
常用日田行遺跡 第2次調査	2SK 1002	P19	A－Ⅰ－1	1.85	1.08	0.46	N-46° 10' 09" -W
	2SK 1003	L17	C－Ⅳ－2	3.00	1.64	0.70	N-32° 37' 09" -E
	2SK 1004	W12	A－Ⅰ－1	1.15	1.60	0.23	N-9° 43' 39" -W
	2SK 1005	W15	C－Ⅳ－1	1.80	0.85	0.25	N-40° 54' 52" -田
	2SK 1006	C17	A－Ⅰ－1	1.95	0.66	0.40	N-36° 15' 14" -E
	2SK 1007	A18	A－Ⅰ－1	1.63	0.69	0.51	N-41° 59' 14" -E
	2SK 1008	E19	A－Ⅲ－1	1.93	0.91	0.41	N-29° 44' 42" -W
	2SK 1009	E17	B－Ⅳ－1	1.57	0.71	0.42	N-45° -E
	2SK 1010	D15	A－Ⅰ－1	1.39	0.81	0.50	N-64° 32' 12" -W
常用日田行遺跡 第2次調査	2SK 1011	J12	A－Ⅱ－1	1.72	0.85	0.48	N-54° 27' 44" -E
	2SK 1012	H12	C－Ⅳ－2	2.76	1.53	1.14	N-46° 50' 05" -E
	2SK 1013	J18	B－Ⅰ－1	0.97	0.68	0.22	N-46° 23' 50" -E
	2SK 1014	L19	A－Ⅰ－1	0.89	1.51	0.37	N-51° 20' 25" -W
	2SK 1015	C17	B－Ⅰ－1	1.37	1.29	1.14	
	2SK 1016	L12	A－Ⅲ－2	0.87	0.77	0.49	N-38° 39' 35" -W
	2SK 1017	K13	B－Ⅲ－1	0.76	0.86	0.53	
	2SK 1018	E15	C－Ⅰ－1	1.66	0.62	0.06	N-34° 12' 57" -E
	2SK 1019	J9	B－Ⅰ－1	1.90	1.73	0.91	
	2SK 1021	J9	A－Ⅳ－1	1.50	0.87	0.48	N-46° 50' 51" -E
	2SK 1024	F11	C－Ⅳ－1	2.29	1.65	0.83	N-56° 18' 36" -W
	2SK 1026	G12	B－Ⅳ－1	2.28	0.90	0.31~0.63	N-2° 00' 09" -E
	2SK 1033	K10	C－Ⅲ－1	2.26	1.48	0.73	N-44° 01' 44" -E
	2SK 1038	J18	A－Ⅳ－1	2.90	1.33	0.72	N-56° 53' 19" -W
	2SK 1039	H20	A－Ⅲ－1	3.10	1.42	1.00	N-44° 01' 44" -W
	2SK 1045	F17	A－Ⅰ－1	1.55	0.81	0.31	N-62° 14' 29" -W
	2SK 1046	F21	A－Ⅰ－1	1.65	1.19	0.99	N-36° 36' 25" -E
	2SK 1047	E24	B－Ⅰ－1	1.00	1.00	0.45	
	2SK 1048	E26	A－Ⅳ－1	2.23	0.96	0.63	N-30° 57' 50" -E
	2SK 1049	I15	A－Ⅱ－1	1.69	0.93	0.65	N-43° 01' 30" -W
	2SK 1050	F14	A－Ⅱ－1	2.50	1.08	1.15	N-42° 46' 08" -E
	2SK 1051	K11	A－Ⅳ－1	2.53	1.35	0.48~0.63	N-34° 59' 31" -E
	2SK 1052	F15	B－Ⅲ－2	1.18	0.93	0.66	
	2SK 1053	F14	C－Ⅳ－1	1.95	1.44	0.82	N-43° 49' 51" -W
	2SK 1065	C25	A－Ⅰ－1	0.85	1.30	0.28	N-52° 25' 53" -W
常用長田遺跡 第1次調査	ISK 200	I8	C－Ⅱ－1	2.72	0.84	0.57	N-54° 27' 44" -W
	ISK 202	AE8	A－Ⅰ－2	2.00	1.06	0.32~0.64	N-64° 54' 59" -W
	ISK 205	AC7	B－Ⅱ－1	1.47	1.05	0.97	N-44° 23' 55" -W
	ISK 206	Y8	A－Ⅰ－1	2.67	0.84	0.22	N-24° 54' 17" -E
	ISK 210	X7	B－Ⅱ－2	1.04	0.73	0.48	N-7° 58' 10" -E
	ISK 213	M8	B－Ⅰ－1	1.03	0.66~	0.20	
	ISK 219	K9	C－Ⅳ－2	1.50	－	0.12~0.52	
	ISK 222	D9	C－Ⅳ－1	1.78	1.04	0.32~0.39	N-52° 00' 05" -E
	ISK 225	L7	B－Ⅳ－2	1.68	1.45	0.16~0.45	
	ISK 242	O8	A－Ⅲ－1	1.01	1.03	0.82	
	ISK 247	W6	C－Ⅳ－1	3.04	1.75	0.42	N-62° 31' 32" -W
	ISK 250	S6	A－Ⅳ－1	2.05	0.97	0.15~0.17	N-68° 48' 21" -W
	ISK 251	R7	B－Ⅰ－1	1.58	0.80	0.18	N-35° 24' 28" -E
	ISK 252	R7	C－Ⅰ－1	1.65	1.13	0.15	N-22° 37' 12" -E
	ISK 260	AG9	B－Ⅰ－1	0.70	0.56	0.05	
水田上平製石遺跡 第1次調査	ISK 003	I3	B－Ⅳ－1	0.90	0.90	0.30	N-20° -W
	ISK 004	H2	A－Ⅰ－1	1.20	0.90	0.30	N-24° -W
	ISK 006	L10	B－Ⅲ－1	1.00	1.00	0.40	N-73° -E
	ISK 007	H2	B－Ⅰ－1	1.00	1.00	0.40	N-25° -W
	ISK 011	L7	C－Ⅳ－2	1.60	0.80	0.30	N-58° -E
	ISK 012	M5	A－Ⅱ－1	1.50	1.10	0.30	N-62° -E
	ISK 023	O8	A－Ⅳ－1	0.90	0.90	0.30	N-44° -W
	ISK 024	O8	A－Ⅰ－1	0.80	0.80	0.20	N-43° -W
	ISK 027	O4	B－Ⅰ－1	1.10	1.40	0.20	N-74° -W
	ISK 028	O6	C－Ⅳ－1	1.40	1.00	0.20	N-23° -W
	ISK 029	P8	C－Ⅳ－1	1.70	1.20	0.30	N-85° -W
	ISK 034	P3	C－Ⅳ－1	1.30	0.80	0.10	N-36° -E
	ISK 036	Q5	B－Ⅳ－1	1.40	0.80	0.20	N-46° -E
	ISK 037	Q5	B－Ⅰ－2	1.80	1.00	0.20	N-62° -W
	ISK 039	L3	B－Ⅰ－2	0.80	0.80	0.30	N-2° -E
	ISK 040	R7	B－Ⅰ－1	1.70	1.00	0.30	N-24° -E

Tab.11　土坑一覧表

分類区分	小分類	個体数	比 率
平面形状	A	50	44.6%
	B	41	36.6%
	C	21	18.8%
立面形状	I	42	37.5%
	II	11	9.8%
	III	14	12.5%
	IV	45	40.2%
底面形状	1	83	74.1%
	2	29	25.9%

Tab.12 土坑分類区分別比較表

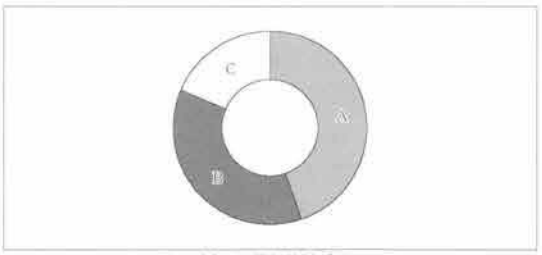


Fig.102 平面形状別グラフ

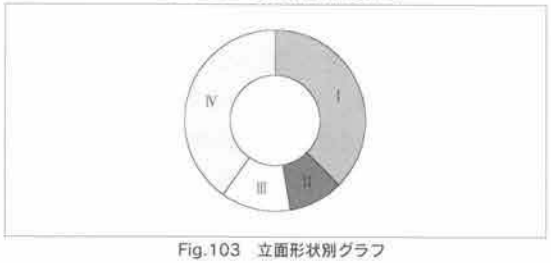


Fig.103 立面形状別グラフ

Fig.104 底面形状別グラフ

分類形態	個体数	個別比率	全体比率	備 考
A−I−1	15	30.0%	13.4%	
A−I−2	3	6.0%	2.7%	
A−II−1	5	10.0%	4.5%	
A−II−2	1	2.0%	0.9%	
A−III−1	5	10.0%	4.5%	
A−III−2	3	6.0%	2.7%	
A−IV−1	14	28.0%	12.5%	
A−IV−2	4	8.0%	3.6%	
小 計	50	100.0%	44.6%	※1
B−IV−2	17	41.5%	15.2%	
B−IV−2	4	9.8%	3.6%	
B−IV−2	3	7.3%	2.7%	
B−IV−2	1	2.4%	0.9%	
B−IV−2	3	7.3%	2.7%	
B−IV−2	2	4.9%	1.8%	
B−IV−2	8	19.5%	7.1%	
B−IV−2	3	7.3%	2.7%	
小 計	41	100.0%	36.6%	※2
C−IV−2	3	14.3%	2.7%	
C−IV−2	0	0.0%	0.0%	
C−IV−2	1	4.8%	0.9%	
C−IV−2	0	0.0%	0.0%	
C−IV−2	1	4.8%	0.9%	
C−IV−2	0	0.0%	0.0%	
C−IV−2	9	42.9%	8.0%	
C−IV−2	7	33.3%	6.3%	
小 計	21	100.0%	18.8%	※3
合 計	112		100.0%	※1〜3

Tab.13 土坑分類形態別比較表

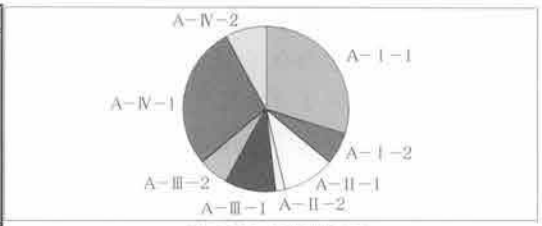


Fig.105 A 群別グラフ

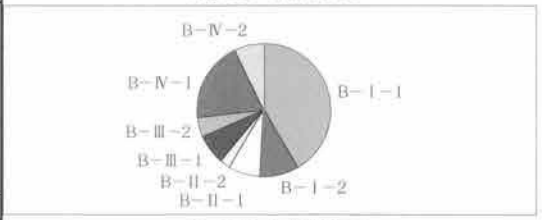


Fig.106 B 群別グラフ

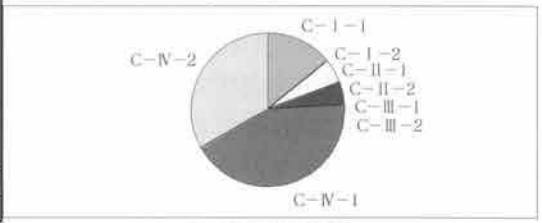


Fig.107 C 群別グラフ

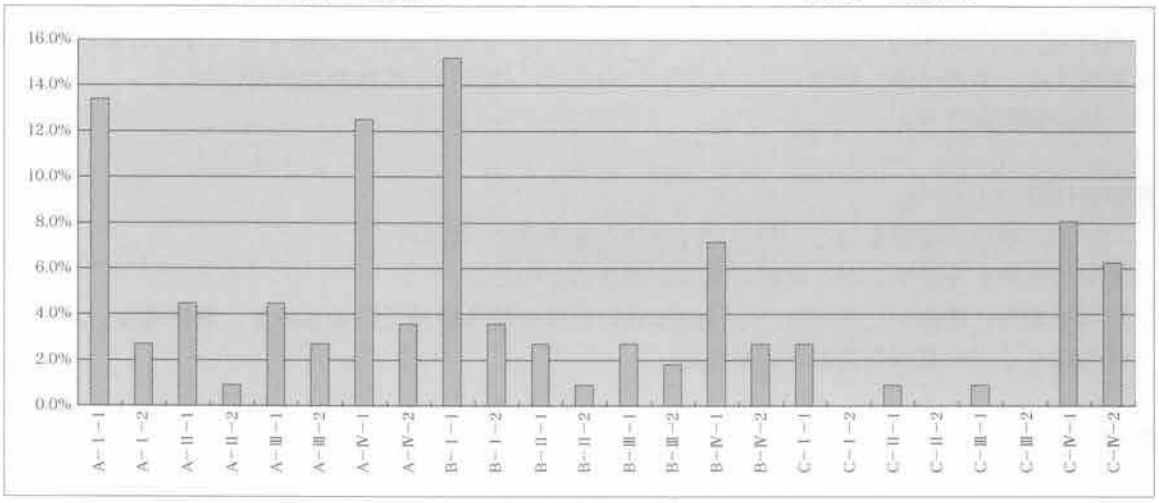


Fig.108 土坑分類形態別グラフ

めることからここでもその標準性が窺われることとなった。底面形状（Fig.104）では1類が圧倒的に高い比率を占めているところであるが、予想に反して意外にも2類の占める割合が1/4に達する結果となった。

次に大別された各群における割合（Tab.13、Fig.105～107）をみてみる。A群（Fig.105）で最も高い比率を示しているものはⅠ—1類（30.0%）、Ⅳ—1類（28.0%）であり、その他は比較差のあまり感じられない安定した割合で散在している。B群（Fig.106）ではⅠ—1類（41.5%）とⅣ—1類（19.5%）では若干の開きが認められたものの両類は全体の6割程度を占める割合であり、その他各類はA群同様に1割未満の低い比率となった。今回、その他のタイプとしたC群（Fig.107）ではⅣ類が全体の8割強を占める結果となったことから、殆どが内部にテラス状の施設を認めるタイプであったことが解される。

以上の結果を受けて全体的に分析したグラフ（Fig.108）を概観すると、高い比率で確認されたグループはA—Ⅰ—1（13.4%）、A—Ⅳ—1（12.5%）、B—Ⅰ—1（15.2%）、続く中比率のグループとしてはB—Ⅳ—1（7.1%）、C—Ⅳ—1（8.0%）C—Ⅳ—2（6.3%）、以下は5%未満の小比率グループであることが読みとれ、おおよそ3つのグループに大別される結果となった。この結果を受けて当地区の土坑を総合的にみると、今回高い比率で確認されたグループは最も標準的に造設されるタイプの土坑であると証される。また、中比率グループの共通点として看取されるⅣ類を含むタイプはⅠ類同様に高比率を占めていた理由から標準的要素を含んだタイプと予測される。つまり、これら標準とするタイプから外れた小比率グループのタイプは特殊な形状を呈する土坑として認識できる。この特殊性のあるタイプには、袋状を呈するタイプとして分類したⅡ類が含まれている。これまで袋状を呈するタイプは一般的に貯蔵穴として認識されていた遺構であるが、今回は特殊なタイプとして位置付けできる遺構として捉えられる結果となった。

ここまで土坑の形状や内部構造について注目し分類を試みてきたが、作業をしていく中で性格を明らかにするためには様々な情報が必要であり慎重に判断しなくてはならないことをあらためて実感した次第である。今後も資料収集に努める所存であるが、今回の分類作業及び内容については各方面からの叱責を賜りたいと思っている。

(3) 出土遺物について

1) 甕型土器の分類について

当地方の弥生土器の編年においては1964年に八女市「亀ノ甲遺跡」で発掘調査が行われた以後、先学諸氏らによって盛んに研究が行われてきたところであるが、近年における発掘調査成果の急増によって未だその研究内容は進化を遂げている状況にある。こうした状況の中、本来であれば今次調査の出土土器についても検討しなければならないところであるが、筆者は現在そういった環境にはなく、またそれを提示できるほどの力量を持ち合わせていない。よって、ここでは本文中で掲載した甕形土器について若干の形態分類を試みたのでここに紹介したい。なお、今回使用した形態分類は「西原C遺跡」[註3]及び「金場遺跡」[註4]の甕形土器について形態分類を行った中間研志氏作成の分類表をモデルとし、今回の内容に応じて新たに作成したものであり、重複する部分が多々あることを予めお断りしておく。また、今回分類表を使用するにあたり快く承諾していただいた中間氏には記して感謝の意を表したい。

以下、順に説明をする。

①口縁部の形状（Fig.109）

Ⅰ類　口縁部形状は如意形を呈し、端部には刻目が施されていない。

Ⅱ類　Ⅰ類の如意形を呈するが、端部に刻目が施されている。

Ⅲ類　口縁外端部に断面が三角状ないしは台形状の突帯を貼り付けているもので、刻目はない。

Ⅳ類　Ⅲ類のタイプに刻目を施しているもの。

②口縁部下位の形状（Fig.109）

A類　口縁部下位に沈線や貼付凸帯を施していないもの。

B類　口縁部下位に沈線を施しているものでアルファベットに続く数字は沈線の数を表す。
C類　口縁部下位に断面形三角状の貼付凸帯を施すもので、数字は沈線の数を表す。

③口縁端部の形状（Fig.109）
・如意形口縁（Ⅰ・Ⅱ類）
a類　端部に沈線が施されていないもの。
b類　端部に沈線が施されているもの。
・貼付突帯（Ⅲ・Ⅳ類）
a類　断面形三角状の貼付突帯を施すもの。
b類　a類のタイプに突帯上端部が面をなすもの。
c類　貼付突帯の断面が台形状若しくは四角形状を呈し、やや垂れ下がり気味に施されているもの。
d類　c類のタイプに突帯上端部が面をなすもの。

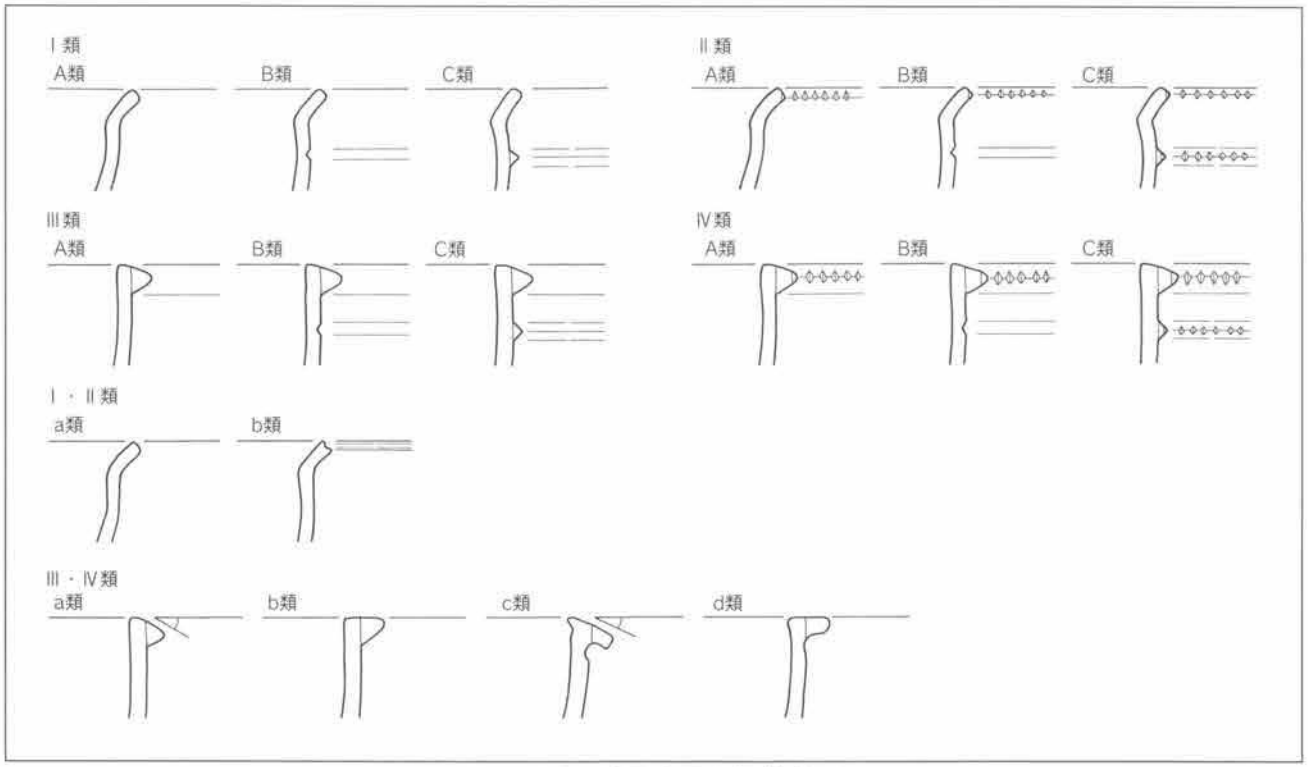


Fig.109　甕形土器分類模式図

以上の分類内容に基づき、本文掲載の甕型土器について分類（Tab.14）を行ったところ、各遺跡には地域性による特徴が看取され、項目によっては将来更に細分化可能な場面も存在するようである。なお、Tab.15はTab.14を元に分類別における全体の割合を概観しようと作成したものであるが、データは選別作業段階から抽出されたものではなく、担当者による任意のデータであるので取り扱いには充分に注意をしていただきたい。

さて、Tab.15を遺跡別に概観する。

・常用日田行遺跡（1次）―Ⅰ類5.0%・Ⅱ類4.0%・Ⅲ類75.0%・Ⅳ類16.0%
・常用日田行遺跡（2次）―Ⅰ類6.7%・Ⅱ類8.9%・Ⅲ類37.8%・Ⅳ類46.7%
・常用長田遺跡（1次）―Ⅰ類4.5%・Ⅱ類0%・Ⅲ類4.5%・Ⅳ類90.9%
・水田上平霊石遺跡（1次）―Ⅰ類16.7%・Ⅱ類6.7%・Ⅲ類50.0%・Ⅳ類26.7%

この結果を受け、Ⅲ・Ⅳ類とした貼付突帯タイプの甕型土器が大部分を占めている状況にあることが判明し、筑後平野南部の特色を如実に示している傾向が窺えたといえよう。

遺跡名	遺構番号	遺物番号	分類形式	備考
常用日田行遺跡 第1次調査	1SP151	12 －9	Ⅲ － C1 － d	
	1SK001	15 －14	Ⅲ － A － a	
		15 －15	Ⅲ － C1 － a	
		15 －16	Ⅲ － A － a	
		15 －17	Ⅲ － C1 － a	
		15 －18	Ⅲ － B1 － a	
	1SK002	16 －26	Ⅲ － A － b	
		16 －27	Ⅲ － C1 － d	
		16 －28	Ⅲ － C1 － a	
	1SK003	16 －30	Ⅲ － A － c	
		16 －31	Ⅲ － A － a	
		16 －32	Ⅲ － B1 － c	
		16 －33	Ⅲ － A － a	
		16 －34	Ⅰ － A － a	
	1SK017	17 －49	Ⅳ － C2 － a	
	1SK021	17 －52	Ⅲ － A － b	
		17 －53	Ⅲ － A － b	
	1SK023	18 －57	Ⅰ － C1 － b	
		18 －58	Ⅲ － A － a	
		18 －59	Ⅲ － C1 － a	
		18 －60	Ⅲ － C1 － d	
		18 －61	Ⅲ － C1 － a	
		18 －62	Ⅲ － B1 － a	
		18 －63	Ⅲ － C1 － b	
		18 －64	Ⅲ － B1 － c	
		18 －65	Ⅲ － A － a	
		19 －66	Ⅲ － C1 － a	
		19 －67	Ⅲ － C1 － a	
	1SK024	20 －83	Ⅲ － A － d	
		20 －84	Ⅲ － C1 － a	
	1SK027	20 －85	Ⅳ － C2 － a	
	1SK028	21 －88	Ⅲ － A － b	
		21 －89	Ⅲ － A － a	
		21 －90	Ⅲ － A － b	
		21 －91	Ⅲ － A － a	
		21 －92	Ⅰ － C1 － a	
	1SK029	22 －99	Ⅲ － C1 － b	
		22 －100	Ⅲ － C1 － a	
		22 －101	Ⅲ － A － d	
		22 －102	Ⅲ － C1 － a	
		22 －103	Ⅲ － C1 － a	
		22 －104	Ⅲ － C1 － a	
	1SK037	24 －117	Ⅱ － C2 － a	
		24 －121	Ⅳ － C1 － b	
		24 －122	Ⅰ － A － a	
	1SK041	24 －125	Ⅳ － C1 － a	
		24 －126	Ⅲ － C2 － a	
	1SK044	25 －131	Ⅲ － A － d	
		25 －132	Ⅲ － A － d	
		25 －133	Ⅲ － A － d	
	1SK053	26 －149	Ⅲ － C1 － a	
	1SK060	26 －152	Ⅳ － C1 － c	
		26 －153	Ⅲ － A － b	
		26 －154	Ⅲ － C1 － a	
	1SK073	27 －163	Ⅲ － C1 － d	
		27 －164	Ⅲ － C1 － a	
	1SK080	28 －167	Ⅲ － C1 － a	
	1SK086	28 －177	Ⅳ － C1 － a	
	1SK090	28 －178	Ⅲ － A － d	
	1SK093	29 －181	Ⅳ － C1 － b	
	1SK101	29 －183	Ⅲ － A － c	
		29 －184	Ⅲ － C2 － c	
	1SK102	29 －190	Ⅳ － C1 － b	
		29 －191	Ⅳ － C1 － b	
	1SK105	30 －198	Ⅳ － C1 － a	
		30 －199	Ⅳ － C1 － a	
	1SK106	30 －206	Ⅲ － C1 － b	
	1SK108	31 －209	Ⅲ － C1 － a	
	1SK109	31 －212	Ⅲ － C1 － b	
	1SK110	31 －214	Ⅱ － C1 － a	
		31 －215	Ⅲ － C1 － b	
	1SK116	32 －221	Ⅳ － C1 － a	
		32 －222	Ⅲ － C1 － d	
		32 －223	Ⅲ － C1 － a	
		32 －224	Ⅲ － A － a	
		32 －225	Ⅲ － B1 － c	
		32 －226	Ⅲ － B1 － a	
		33 －227	Ⅲ － C1 － c	

遺跡名	遺構番号	遺物番号	分類形式	備考
常用日田行遺跡 第1次調査	1SK116	33 －228	Ⅲ － C1 － a	
		33 －229	Ⅲ － A － a	
		33 －230	Ⅲ － C1 － a	
		33 －231	Ⅲ － C1 － a	
		33 －232	Ⅲ － C1 － a	
		33 －233	Ⅲ － C1 － a	
		33 －234	Ⅲ － A － b	
		34 －235	Ⅲ － A － a	
		34 －236	Ⅲ － A － b	
		34 －237	Ⅲ － C1 － a	
		34 －238	Ⅰ － A － a	
	1SK117	35 －253	Ⅲ － A － d	
		35 －254	Ⅳ － C1 － a	
		35 －255	Ⅲ － A － a	
		35 －256	Ⅲ － A － a	
		35 －257	Ⅲ － A － a	
		35 －258	Ⅲ － A － c	
	1SK127	36 －262	Ⅳ － C1 － b	
		36 －263	Ⅳ － C1 － b	
	1SK155	37 －272	Ⅱ － C1 － a	
		37 －273	Ⅳ － C1 － d	
		37 －274	Ⅱ － D － b	
常用日田行遺跡 第2次調査	2SD1060	47 －14	Ⅲ － C1 － a	
	2SK1005	48 －19	Ⅳ － C1 － c	
		48 －20	Ⅰ － C1 － a	
	2SK1006	48 －22	Ⅳ － C1 － a	
	2SK1007	48 －25	Ⅲ － C1 － a	
		48 －26	Ⅲ － C1 － d	
	2SK1008	48 －29	Ⅳ － C1 － d	
	2SK1011	48 －30	Ⅳ － A － d	
	2SK1012	49 －33	Ⅲ － C1 － a	
		49 －34	Ⅳ － C1 － a	
		49 －35	Ⅳ － C1 － a	
		49 －38	Ⅲ － A － d	
	2SK1014	50 －47	Ⅲ － C1 － a	
	2SK1019	50 －50	Ⅲ － C1 － a	
	2SK1024	51 －55	Ⅲ － A － d	
		51 －56	Ⅲ － A － a	
	2SK1033	51 －61	Ⅲ － C1 － d	
	2SK1035	52 －65	Ⅲ － C1 － a	
		52 －66	Ⅲ － A － c	
		52 －67	Ⅳ － C1 － b	
		52 －72	Ⅳ － A － a	
		52 －73	Ⅰ － D － b	
		52 －74	Ⅱ － D － b	
	2SK1037	52 －77	Ⅳ － C1 － a	
		52 －78	Ⅳ － C2 － a	
		52 －79	Ⅳ － C1 － a	
		52 －80	Ⅱ － D － b	
	2SK1038	53 －82	Ⅳ － C1 － b	
	2SK1039	53 －88	Ⅱ － C1 － a	
		53 －89	Ⅳ － C1 － a	
		53 －90	Ⅲ － A － b	
		53 －91	Ⅰ － A － a	
	2SK1045	54 －93	Ⅲ － C1 － a	
		54 －94	Ⅲ － A － a	
	2SK1050	55 －101	Ⅳ － C1 － a	
	2SK1052	55 －104	Ⅳ － A － a	
	2SK1053	55 －106	Ⅳ － C1 － a	
		55 －107	Ⅲ － C1 － a	
		55 －108	Ⅱ － C2 － a	
		55 －109	Ⅳ － C1 － b	
	2SK1074	56 －114	Ⅳ － C1 － b	
		56 －115	Ⅲ － C1 － a	
		56 －116	Ⅳ － C1 － a	
	2SK1080	57 －121	Ⅳ － C1 － a	
		57 －122	Ⅳ － C1 － a	

遺跡名	遺構番号	遺物番号	分類形式	備考
常用長田遺跡 第1次調査	1SK200	64 －10	Ⅰ － A － a	
		64 －11	Ⅳ － C1 － d	
	1SK210	64 －15	Ⅳ － C1 － d	
		64 －18	Ⅳ － C3 － a	
	1SK221	65 －20	Ⅳ － C1 － a	
	1SK222	65 －22	Ⅳ － C1 － a	
	1SK224	65 －23	Ⅳ － C1 － b	
	1SK225	65 －24	Ⅳ － C1 － b	
		65 －26	Ⅳ － C1 － b	
		65 －27	Ⅳ － C1 － d	
	1SK243	66 －33	Ⅳ － C2 － d	
		66 －34	Ⅳ － C1 － a	
	1SK247	67 －41	Ⅳ － C1 － d	
	1SK250	68 －43	Ⅲ － C1 － b	
		68 －44	Ⅳ － C1 － a	
		68 －45	Ⅳ － C1 － b	
		68 －46	Ⅳ － C1 － a	
		68 －47	Ⅳ － A － a	
	1SK251	69 －52	Ⅳ － C1 － a	
		69 －53	Ⅳ － C1 － b	
		69 －54	Ⅳ － C1 － a	
		69 －57	Ⅳ － C1 － d	
水田上平窯石遺跡 第1次調査	1SD005	81 －1	Ⅲ － A － a	
	1SD001	82 －1	Ⅰ － C1 － a	
		82 －2	Ⅲ － A － b	
		82 －3	Ⅳ － C1 － b	
		82 －4	Ⅲ － C1 － d	
		82 －5	Ⅲ － C1 － a	
		82 －15	Ⅱ － D － b	
		84 －27	Ⅳ － C1 － d	
		84 －33	Ⅰ － C1 － a	
		85 －36	Ⅳ － A － b	Ⅰ層
		85 －42	Ⅲ － C1 － a	Ⅲ層
	1SK060	86 －3	Ⅲ － A － b	
	1SK003	87 －2	Ⅲ － C1 － a	
	1SK006	88 －2	Ⅰ － C1 － a	
	1SK011	88 －4	Ⅱ － D － b	
	1SK012	88 －10	Ⅲ － C1 － c	
	1SK023	88 －12	Ⅳ － C1 － a	
		88 －13	Ⅲ － A － b	
	1SK024	88 －14	Ⅳ － A － d	
	1SK027	88 －16	Ⅳ － C1 － c	
	1SK036	89 －10	Ⅲ － C1 － a	
	1SK037	90 －6	Ⅲ － A － c	Ⅲ層
		90 －7	Ⅰ － C2 － a	Ⅲ層
		90 －8	Ⅰ － C1 － a	Ⅲ層
		90 －10	Ⅲ － A － a	Ⅲ層
	1SK040	91 －1	Ⅳ － C1 － a	Ⅰ層
		91 －2	Ⅲ － C1 － a	Ⅱ層
		91 －4	Ⅳ － C1 － a	Ⅱ層
		91 －5	Ⅲ － C1 － a	Ⅱ層
		91 －6	Ⅲ － C1 － a	Ⅱ層

Tab.14　甕形土器分類一覧表

常用日田行遺跡第1次調査		
分　類	個数	比率
Ⅰ － A － a	3	3.0%
Ⅰ － C1 － a	1	1.0%
Ⅰ － C1 － b	1	1.0%
小　計	5	5.0%
Ⅱ － C1 － a	2	2.0%
Ⅱ － C2 － a	1	1.0%
Ⅱ － D － b	1	1.0%
小　計	4	4.0%
Ⅲ － A － a	14	14.0%
Ⅲ － A － b	8	8.0%
Ⅲ － A － c	3	3.0%
Ⅲ － A － d	7	7.0%
Ⅲ － B1 － a	3	3.0%
Ⅲ － B1 － c	3	3.0%
Ⅲ － C1 － a	24	24.0%
Ⅲ － C1 － b	5	5.0%
Ⅲ － C1 － c	1	1.0%
Ⅲ － C1 － d	5	5.0%
Ⅲ － C2 － a	1	1.0%
Ⅲ － C2 － c	1	1.0%
小　計	75	75.0%
Ⅳ － C1 － a	6	6.0%
Ⅳ － C1 － b	6	6.0%
Ⅳ － C1 － c	1	1.0%
Ⅳ － C1 － d	1	1.0%
Ⅳ － C2 － a	2	2.0%
小　計	16	16.0%
合　計	100	100.0%

常用日田行遺跡第2次調査		
分　類	個数	比率
Ⅰ － A － a	1	2.2%
Ⅰ － C1 － a	1	2.2%
Ⅰ － D － b	1	2.2%
小　計	3	6.7%
Ⅱ － C1 － a	1	2.2%
Ⅱ － C2 － a	1	2.2%
Ⅱ － D － b	2	4.4%
小　計	4	8.9%
Ⅲ － A － a	2	4.4%
Ⅲ － A － b	1	2.2%
Ⅲ － A － c	1	2.2%
Ⅲ － A － d	2	4.4%
Ⅲ － C1 － a	9	20.0%
Ⅲ － C1 － d	2	4.4%
小　計	17	37.8%
Ⅳ － A － a	2	4.4%
Ⅳ － A － d	1	2.2%
Ⅳ － C1 － a	11	24.4%
Ⅳ － C1 － b	4	8.9%
Ⅳ － C1 － c	1	2.2%
Ⅳ － C1 － d	1	2.2%
Ⅳ － C2 － a	1	2.2%
小　計	21	46.7%
合　計	45	100.0%

常用長田遺跡第1次調査		
分　類	個数	比率
Ⅰ － A － a	1	4.5%
小　計	1	4.5%
Ⅲ － C1 － b	1	4.5%
小　計	1	4.5%
Ⅳ － A － a	1	4.5%
Ⅳ － C1 － a	7	31.8%
Ⅳ － C1 － b	5	22.7%
Ⅳ － C1 － d	5	22.7%
Ⅳ － C2 － d	1	4.5%
Ⅳ － C3 － a	1	4.5%
小　計	20	90.9%
合　計	22	100.0%

水田上平塚石遺跡第1次調査		
分　類	個数	比率
Ⅰ － C1 － a	4	13.3%
Ⅰ － C2 － a	1	3.3%
小　計	5	16.7%
Ⅱ － D － b	2	6.7%
小　計	2	6.7%
Ⅲ － A － a	2	6.7%
Ⅲ － A － b	3	10.0%
Ⅲ － A － c	1	3.3%
Ⅲ － C1 － a	7	23.3%
Ⅲ － C1 － c	1	3.3%
Ⅲ － C1 － d	1	3.3%
小　計	15	50.0%
Ⅳ － A － b	1	3.3%
Ⅳ － A － d	1	3.3%
Ⅳ － C1 － a	3	10.0%
Ⅳ － C1 － b	1	3.3%
Ⅳ － C1 － c	1	3.3%
Ⅳ － C1 － d	1	3.3%
小　計	8	26.7%
合　計	30	100.0%

Tab.15　甕形土器分類別集計表

2）土錘について

常用日田行遺跡（第1次調査）からは中央部に穿孔された土製品が出土している（Tab.16）。この土製品は本文中において土錘の可能性が考えられる遺物として報告したところであるが断定までには至っておらず、今一度この土製品について概観しておきたい。

まず、今回確認された土製品の特徴について整理してみる。土製品の立面形状は長方形・分銅形、断面形状は円形・楕円形・方形を呈し、表面のほぼ中央部には内孔径1cm前後の穿孔が施されている。更に上端面では凹状を呈するタイプと平坦面をなす2タイプが認められ、中央部穿孔と凹状上端部との関係は直行又は同位のタイプがある。また下端部では平らなタイプと抉られたタイプが存在していた。

以上の特徴から下記の分類を試みた。

①立面の形状（Fig.110）

A類　立面形状が長方形状を呈するタイプのもの。

B類　立面形状が分銅形状を呈するタイプのもの。

②断面の形状（Fig.110）

Ⅰ類　断面形状が円形状又は楕円形状を呈するタイプのもの。

Ⅱ類　Ⅰ類に対し、断面が方形状を呈するタイプのもの。

③上端面の形状（Fig.110）

1類　上端面は凹状を呈し、中央部に穿孔された方向と同位のもの。

2類　1類に対し、中央部穿孔と直行するもの。

3類　上端面が平坦なタイプのもの。

④下端面の形状（Fig.110）

a類　下端部中央が抉れているもの。

b類　下端面が平坦をなすもの。

以上の分類を用いてタイプ別に示したTab.16を眺めると、今回の土製品については様々なバリエーションで構成されている点が注目される。この状況は使用用途に応じて様々なタイプをを備える必要性があったものと推測され、今回の位置付けに大きく左右されるものと考える。

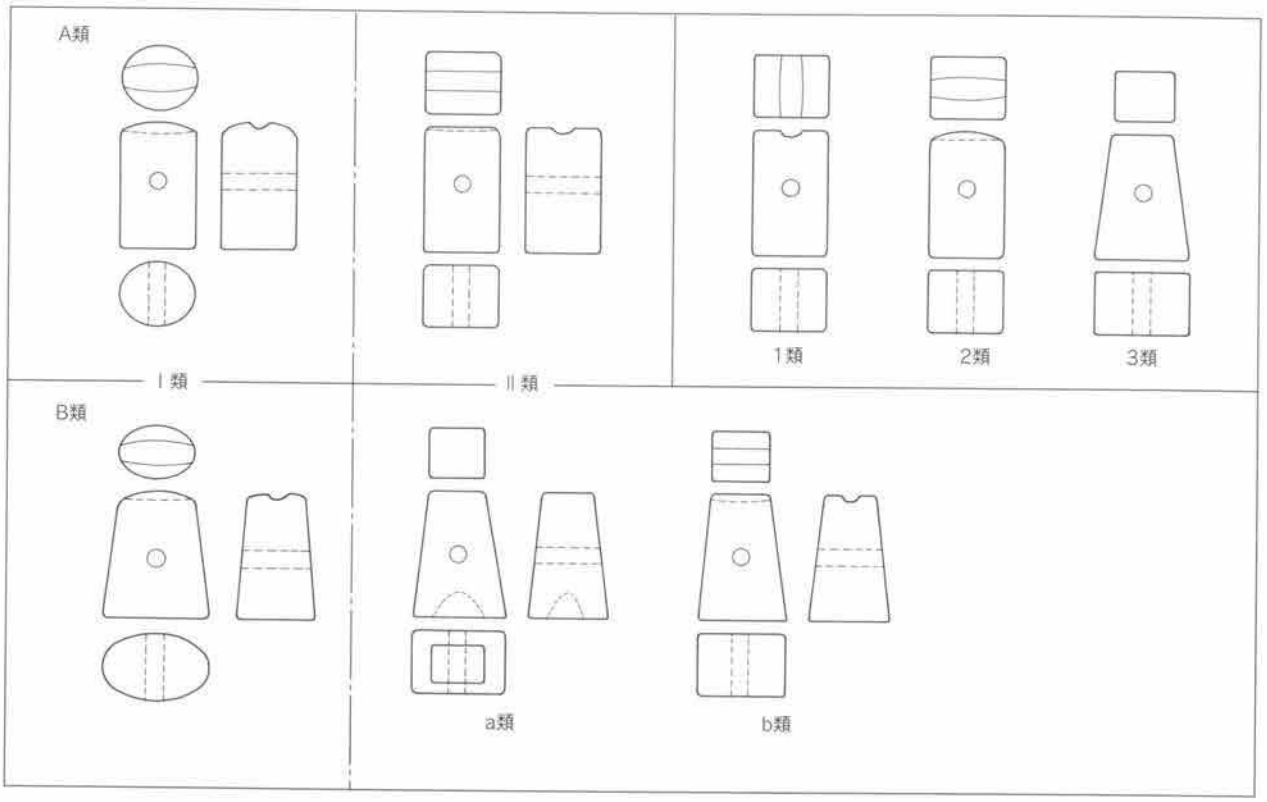


Fig.110　土錘分類模式図

遺跡名	遺構番号	遺物番号	分類形式	備　考
常用日田行遺跡第1次調査	ISK003	16 － 37	A － II	上下部欠損
	ISK015	17 － 45	A － I	上下部欠損
	ISK023	19 － 81	B － II － 2b	
	ISK075	27 － 165	B － II － 3a	
	ISK075	27 － 166	B － II － 3a	

遺跡名	遺構番号	遺物番号	分類形式	備　考
常用日田行遺跡第1次調査	ISK080	28 － 173	A － II － 2b	
	ISK080	28 － 174	A － II － 2b	
	ISK108	31 － 210	A － I － 2	下半部欠損
	ISK116	35 － 149	B － I － 2b	
	ISK116	35 － 150	B － I － 2b	
	ISK116	35 － 251	B － I － 2b	

Tab.16　土錘分類一覧表

さて、この土製品は周辺遺跡である常用長田遺跡（2次）で出土例を認めるもののこれ以外の近隣では筆者が散見する限り類例を見い出し得ない。ただ唯一、近似例として認められる事例としては「タイカズラ縄用千貫石」（香川県）や「シルチャー石」、「イカシ」（以上沖縄県）があり、何れも漁労具として使用される石製土錘である。この近似例は筆者が今回土錘として報告してきた理由のひとつであるが、土錘以外の可能性も考えられるので今後注意して資料収集に努めたい。[註5]

2.中世以降

当該地区では弥生時代以降、集落が終焉してからは殆ど不明な状況が続き、この後は中世を待たねばならない。中世の遺構としては常用日田行遺跡第1次調査区から土壙墓が検出されており、更に第2次調査区からは用排水或いは区画性を持たせていたと考えられる数条の溝が確認されているが、現時点では資料不足の感は否めない。当地区は中世荘園として形成された「安楽寺領水田荘」の領域にあたることが史実として明らかにされており、中世以降、現代に至るまで農耕地として土地利用が行われていたことが窺える。

【註】
1.『筑後西部第2地区遺跡群（VI）』　「筑後市文化財調査報告書第50集」　筑後市教育委員会　2003
2.『一竿遺跡II』　「八女市文化財調査報告書第59集」　八女市教育委員会　2000
3.『西原C遺跡』　「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（3）」　福岡県教育委員会　1984
4.『金場遺跡』　「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（54）」　福岡県教育委員会　1999
5.真鍋篤行　『弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業』　「瀬戸内海歴史民俗資料館紀要VIII」　1995

V. 総　括

1.はじめに

平成8～10年度の約3年間に実施された県営担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区発掘調査成果の報告は今回をもって完結することとなる。いわば本書はその集大成ともいうべき立場にあるが、時間と紙面に制約があることと担当者の乏しい力量の関係から、この章ではこれまでに報告された発掘調査成果を時代別に概説することでまとめとしたい。なお詳細については各々の報告書を参照されたい。

2.各論

(1) 縄文時代

当区域で縄文時代早期の遺跡が最も集中していたのは志地区である。この志地区の北隣に位置する「裏山遺跡」（筑後市大字上北島）は筑後市有数の遺跡として著名であり、ここからは縄文時代早期の炉組（又は敷石）や押型文土器・打製石器・石鏃等の遺物が認められている。

さて、今事業で行われた一連の発掘調査のうち、志地区に点在する「志西野々遺跡」及び「志前田遺跡」からは「裏山遺跡」で確認された炉組と同様の構造を呈していたとされる石組み炉が検出されており、出土遺物から縄文時代早期に比定されている。更に「志西田遺跡」及び「志野添遺跡」からは落とし穴状遺構も検出（この他水田上仁良葉遺跡でも確認）され、周辺の状況から石組み炉とほぼ同じ時期が想定されている。認められた遺物の大半は包含層からの採集遺物であるが、土坑やピットといった遺構からも僅かながら出土しており、土器類では山形文・楕円文・格子目文が施された押型文土器が最も多く、僅かに無文土器が含まれている。また石器類では主として石鏃が多く、掻器・削器・尖頭器等も認められている。

昭和41年に「裏山遺跡」の調査概要が報告されて以後、今事業の発掘調査によって裏山遺跡周辺での新知見を得られたことにより新たな展開が期待されつつも現段階では未だ解明の意図を見出すまでには至っていない。

(2) 弥生時代

この時代の遺構は本文中でも報告した常用地区をはじめ、津島、水田、志、尾島地区の全区域から検出されており、検出遺構では竪穴住居、掘立柱建物、井戸、貯蔵穴、廃棄土坑、土坑、溝等の一般的な集落跡にみられる遺構が主体的に確認された。これ以外では、甕棺墓、土壙墓等の墓類や周溝状遺構等の特殊な遺構も確認され、検出遺構からは夥しい量の遺物が出土している。出土遺物においては土器、石器、木器等が認められているが、割合的には煮沸具である甕形土器が圧倒的に多く、その使用頻度の高さを物語っている。そこで、当該区域で出土した甕形土器の器形について時期別に概観すると、前期では如意形口縁の板付系土器や口縁部に断面三角状の刻目突帯を施す亀ノ甲式タイプの土器が認められている。中期では口縁部に断面三角状の貼付突帯を施す城ノ越タイプの土器や逆L字状口縁を呈した須久式または黒髪系の土器が出土しており、後期では「く」字状口縁を呈する高三潴式タイプの土器等、各期に代表される土器が散在的に認められている状況である。

ここで、当該期集落を時期別に概観する。現時点でいち早く出現する集落を確認するのは前期中葉～後半に主体をおく「常用長田遺跡」であり、円形の竪穴住居や多くの貯蔵穴等が検出されている。常用長田遺跡の北東部に展開する「常用日田行遺跡」は本文中でも報告したように前期末～中期初頭に比定される集落で、その内容からは常用長田遺跡に継続された集落であったことが想定できる。常用遺跡群の南東部に位置する「津島皿ヶ町遺跡」では中期中葉～後半に比定される集落跡で掘立柱建物等が検出されており、津島皿ヶ町遺跡の西側に隣地した「津島北石伏遺跡」からは後期に比定される竪穴住居と掘立柱建物が検出されている。参考事例として当該区域周辺に転じてみると、常用遺跡群の北東部に点在する「水田杉ノ元遺跡」[註1]と「水田山伏遺跡」[註2]では多数の土坑と掘立柱建物が検出されており、中期を

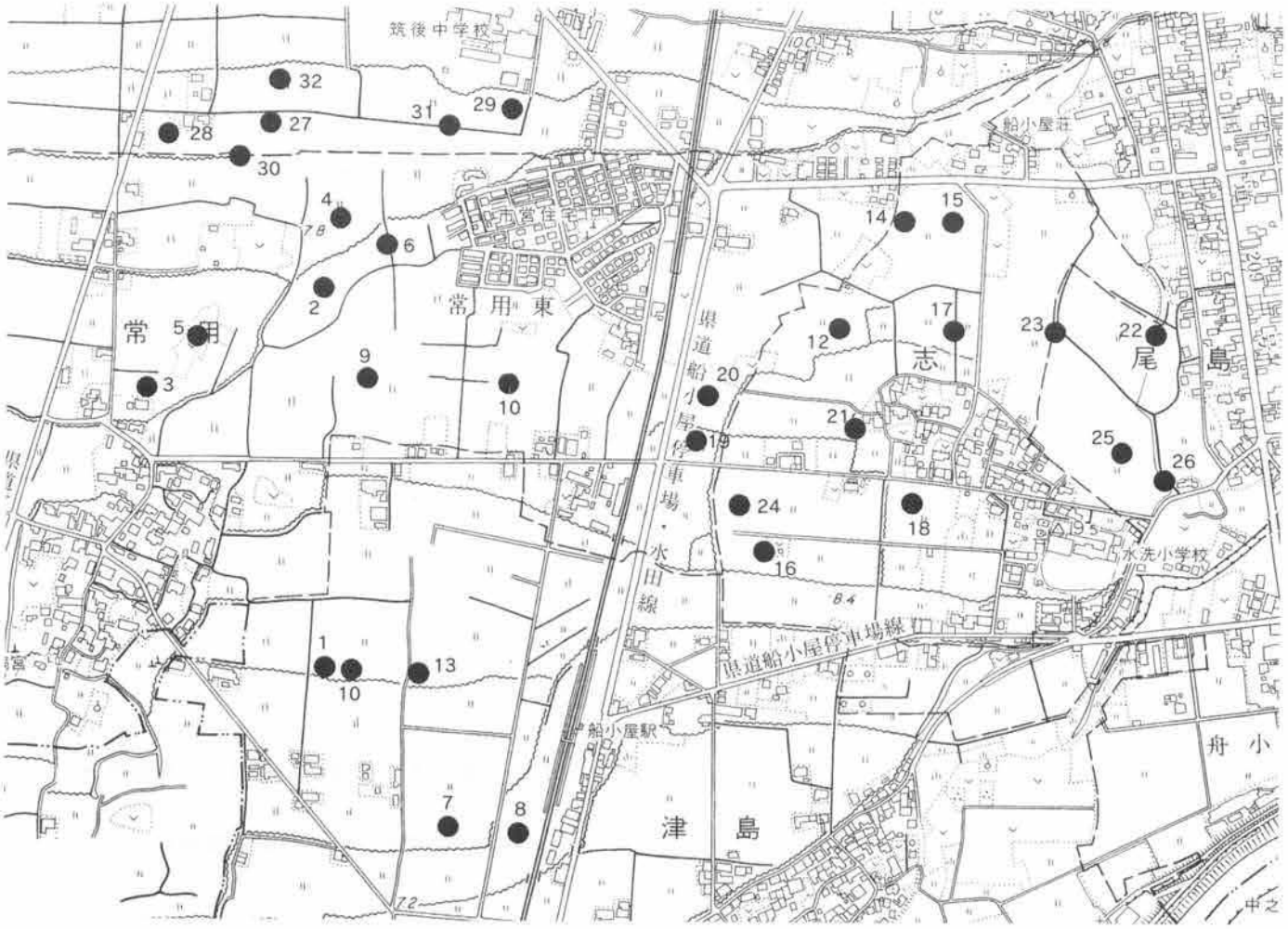


Fig.111　筑後西部第２地区遺跡群発掘調査地点位置図（1/10,000）

No	調査番号	遺跡名	調査期間	(年度)	調査担当者	特記事項	報告書番号	備考
1	084	津島南穂生遺跡（第1次調査）	1996年07月	H8	小林勇作	中世：（溝）	第21集	
2	090	常用日田行遺跡（第1次調査）	1996年09月～12月	H8	小林勇作	弥生：集落（土坑群など）	第57集	
3	093	常用長田遺跡（第1次調査）	1996年12月	H8	小林勇作	弥生・中世：集落（溝、土坑など）	第57集	
4	095	常用日田行遺跡（第2次調査）	1996年12月～1997年02月	H8	田中晴	弥生：集落（土坑群など）	第57集	
5	096	常用長田遺跡（第2次調査）	1997年01月～05月	H8～9	永見秀徳	弥生・中世：集落（溝、土坑など）	第50集	
6	159	常用ニラバ遺跡（第1次調査）	1997年05月～06月	H9	永見秀徳	弥生：集落	第51集	
7	106	津島北石伏遺跡（第1次調査）	1997年08月～09月	H9	立石真二	弥生：集落	第21集	
8	108	津島山ヶ町遺跡（第1次調査）	1997年09月～10月	H9	永見秀徳	弥生：（溝など）	第26集	
9	109	常用相撲遺跡（第1次調査）	1997年10月	H9	永見秀徳	不明：（溝など）	第51集	
10	110	常用野々下遺跡（第1次調査）	1997年10月	H9	永見秀徳	不明：（溝など）	第51集	
11	111	津島南穂生遺跡（第2次調査）	1997年10月	H9	立石真二	弥生～古墳：集落（土坑など）、中世：（溝）	第21集	
12	113	志野垂遺跡（第1次調査）	1997年10月～11月	H9	永見秀徳	縄文～中世	第51集	
13	114	津島南笹原遺跡（第1次調査）	1997年10月～11月	H9	立石真二	弥生～古墳：集落（土坑など）	第21集	
14	160	志義の内遺跡（第1次調査）	1997年11月	H9	永見秀徳	不明：（溝）	第51集	
15	161	志八反田遺跡（第1次調査）	1997年11月	H9	永見秀徳	不明：（溝）	第51集	
16	118	志西野々遺跡（第1次調査）	1997年11月～12月	H9	立石真二	縄文：（石組み炉）、中世：（溝など）	第27集	
17	119	志上緑計遺跡（第1次調査）	1997年11月～12月	H9	永見秀徳	弥生～中世：（溝など）	第51集	
18	120	志渕田遺跡（第1次調査）	1997年11月～1998年03月	H9	立石真二	縄文：（石組み炉）、近世：（土坑など）	第27集	
19	121	常用野中遺跡（第1次調査）	1997年12月	H9	立石真二	不明：（土坑など）	第27集	
20	122	志下緑計遺跡（第1次調査）	1997年12月	H9	立石真二	近世：（溝）	第27集	
21	124	志下緑計遺跡（第2次調査）	1998年01月	H9	立石真二	近世：（土坑群など）	第27集	
22	126	尾島下町馬遺跡（第1次調査）	1998年01月	H9	永見秀徳	中世：道路跡	第51集	
23	128	志上緑計遺跡（第2次調査）	1998年01月～02月	H9	永見秀徳	弥生～中世：（溝など）	第51集	
24	131	志西田遺跡（第1次調査）	1998年03月	H9	小林勇作	縄文～近世：（落とし穴など）	第51集	
25	132	尾島東緑計遺跡（第1次調査）	1998年03月	H9	上村英士	縄文～中世：（土器、溝など）	第43集	
26	133	尾島田田遺跡（第1次調査）	1998年03月～04月	H9～10	永見秀徳	中世：（溝など）	第51集	
27	137	水田上平塞石遺跡（第1次調査）	1998年07月	H10	永見・立石	弥生：集落（土坑など）、中世（溝など）	第57集	
28	138	水田下平塞石遺跡（第1次調査）	1998年09月～10月	H10	立石真二	弥生：集落（クリーク）	第34集	
29	141	水田上仁良塞遺跡（第1次調査）	1998年09月～10月	H10	永見秀徳	中世：集落（井戸、溝など）	第34集	
30	143	水田上平塞石遺跡（第2次調査）	1998年10月～11月	H10	立石真二	弥生：集落（土坑）、中世：（溝）	第34集	
31	145	水田上仁良塞遺跡（第2次調査）	1998年11月	H10	永見秀徳	中世～近世：集落（溝、土坑など）	第34集	
32	149	水田上平塞石遺跡（第3次調査）	1998年12月	H10	永見秀徳	弥生：（貯蔵）	第57集	

Tab.17　筑後西部第２地区遺跡群発掘調査一覧表

主体とする集落遺跡であることが確認されている。更に常用遺跡群の西部には弥生時代中期から後期に比定される「梅島遺跡」[註3]集落跡も点在していること等から当該期における集落変遷を辿ると、前期中葉に出現した常用長田遺跡の集落が中期初頭に常用日田行遺跡の集落に引き継がれ後、中期以降は水田杉ノ本遺跡、水田山伏遺跡、津島皿ヶ町遺跡、津島北石伏遺跡等、周辺へと展開している様子が窺えよう。

次に当該区域に展開する集落の立地状況について目を転じてみる。常用地区に点在する集落は標高7～8m位の低位段丘上のやや内陸部に形成されており、南方約1㎞のところには一級河川の矢部川が西流する。一方、常用地区の南側に位置する津島地区は標高7m未満の低地ないしは湿地状の湿潤な地盤に形成されており、矢部川北岸に寄り近い場所にあたる。当該期の集落が造営される立地状況については以前、津島皿ヶ町遺跡発掘調査を担当した永見秀徳が論及している。詳細については報告書を参照されたいが、ここでその内容について概要しておく。永見は、佐々木隆彦氏が大川市「酒見貝塚遺跡」[註4]において「筑後川下流域の湿地帯という地理的状況下での住居形態は高床式建物が最も適合しており、湿地帯特有の住居形態である」と見解した内容について、湿潤な地盤に展開する津島皿ヶ町遺跡とその周辺遺跡においても同様の状況が窺えたことを報告した。つまり、湿潤地帯と丘陵地帯ではその立地条件に差異があることから「竪穴住居を基本とする集団」と「掘立柱建物を基本とする集団」に大別されていたのではないかということである。これは住居とする竪穴住居と掘立柱建物には構造上異なることから、湿潤地帯のように湿気を伴う環境において竪穴住居は適応しないという考えからであろう。では、その立地条件となる環境は何を指標とすればよいのであろうか。これについて永見は、「標高は一定の目安であって河川や地下水位との比較差が本来的な指標となることを注意すべきである」[註5]と後に述べている。ところで、津島北石伏遺跡を担当した立石真二は「津島北石伏遺跡では当時の生活標高は不明としながらも微量ながら八女ローム層（阿蘇火山灰土を母材とする）を包含する地盤に対して遺構が穿たれていた」と当時の調査状況を振り返る。八女ローム層は筑後市域において一般的に内陸部の丘陵地帯で認められる地質であり、永見・立石の内容は集落の立地状況を知る一つの指標として評価できるものであろう。しかし、集落が立地している状況を把握するためには集落形成に至るまでの自然・立地的環境による地域性や時期による社会性など複雑な要因による社会背景を考えなければならない。これらすべての相互関係によって成立していることが予想されることから今後も慎重に議論しなければならない。

ここまで集落について眺めてきたが、当該区域では集落と併存して甕棺墓・木棺墓等の埋葬施設も確認されている。本文中でも報告した「水田上平霊石遺跡」の甕棺墓（中期前半）や「常用長田遺跡第2次調査」の甕棺墓（前期後半～末）・土壙墓（時期不明）がそれにあたり、やや北東方へ離れた場所では「水田山伏遺跡第2次調査」で甕棺墓（中期前半）が検出されている。墓制については以前、永見によって論及されたことがあったが[註6]、常用長田遺跡第2次調査事例を振り返り、集落と墓域の関係について僅かながら考えてみたい。先述したとおり当事例は集落域において造墓されており、墓の配置状況からは集落域と墓域を明確に区別することができない、いわば併存した環境にある。筑後市域の墓制は弥生時代中期以降、集団墓地として形成される傾向にあるが、今回のように集落域に埋葬施設が造設されるケースにおいては、集団化する以前の単体若しくは数基で群をなす小墓地として形成されたものと推測できるのではなかろうか。つまり、こういった墓地利用のケースは複数の集落間などで共有する共同墓地として拡大するのではなく、むしろ家族単位で利用した小単位の墓地であったと筆者は推論する。

ここまで私見を述べてきたが、集落と墓域の関係については当事例だけでは到底結論付けられるものではないので今後の資料増加を待ちたい。

(3) 古墳時代

津島地区の「津島南佛生遺跡（第2次調査）」及び「津島南笹原遺跡」の土坑群から古墳時代初期（布留式併行）の古式土師器がまとまって出土したが、調査担当者は遺構の性格を廃棄土坑としながらも立地状況からは集落本体の位置付けを避けている。また、これ以外の地区では「常用ニラバ遺跡」、「志野添遺跡」等で土器片を僅かに散見するものの明確な遺構からの出土は得られていない。弥生時代から古墳時代初頭にかけて繁栄してきた集落もこれ以降急速に集落衰退の道を辿っていった結果と考えられる。

(4) 奈良・平安時代

当該期の遺物は「志上婦計遺跡」の溝内から8C前半頃の土器が僅かに出土しているのみであり、この後は中世を待たねばならない。なお、「志西田遺跡」の表土採集遺物として丸鞆石帯1点が確認されている。特殊遺物であるにも関わらず関連遺構等は確認できておらず、現段階では資料報告に止まっている状態である。

(5) 中世以降

中世以降の遺構・遺物はほぼ全域で認められると言っても過言ではなかろう。但し、それは「水田上仁良葉（第1次調査）」より検出された井戸2基と「常用日田行遺跡」で検出された土坑墓を除いては集落遺跡にみられる生活の匂いを感じさせる遺構ではなく、その大半は溝状遺構（区画溝・流水路等）の農耕地関連の遺構であることが特徴的である。その大きな理由としては、この時期に社寺領を中心とした中世荘園が発達し、それを基盤にした社会が形成された背景にある。当該区域は「安楽寺領水田荘」の領域にあたることからその先進地として中世以降盛んに土地利用が行われてきたことが窺える。

3.おわりに

昭和から平成へと時代が変わり、日本の経済が絶頂期を向かえたバブル期に伴って急増した緊急埋蔵文化財発掘調査もバブル経済終焉後は落ちつくかに思えたが、予想とは裏腹に当市においては民間開発や公共事業の発掘調査が現在も切れ目なく行われている状況である。

さて、こういった状況下で実施された今回の事業は、その期間からも解されるように通常の期間よりも短期間で行われてきたものである。そのシワ寄せとしては工事関係者のみならず、当然の如く文化財保護部局側にもあり、早急な対応が望まれた。そこで、関係者との事前協議においては発掘調査低減措置としてできる限りの文化財保護を提言したところであったが、惜しくもTab.17に列記された遺跡については工事によって事実上消滅したことは残念である。しかし、考古学的手法による記録保存を最低限実施できたことで新たな資料を蓄積できたことは今後の文化財保護の啓発や研究に生かされることであり、評価されるものである。今後も文化財保護・啓発に努める次第である。

【註】

1.『筑後市内遺跡群Ⅲ』「筑後市文化財調査報告書第44集」筑後市教育委員会（2002）
2.『筑後市内遺跡群Ⅱ』「筑後市文化財調査報告書第33集」筑後市教育委員会（2001）
3.『梅島遺跡』「筑後市文化財調査報告書」筑後市教育委員会（1992）
4.佐々木隆彦　「酒見貝塚」「大川市文化財調査報告書第2集」大川市教育委員会（1994）PP71～75
5.永見秀徳　「筑後西部第2地区遺跡群（Ⅵ）」「筑後市文化財調査報告書第50集」筑後市教育委員会（2003）PP188～189
6.永見秀徳　「筑後西部第2地区遺跡群（Ⅵ）」「筑後市文化財調査報告書第50集」筑後市教育委員会（2003）PP189～191

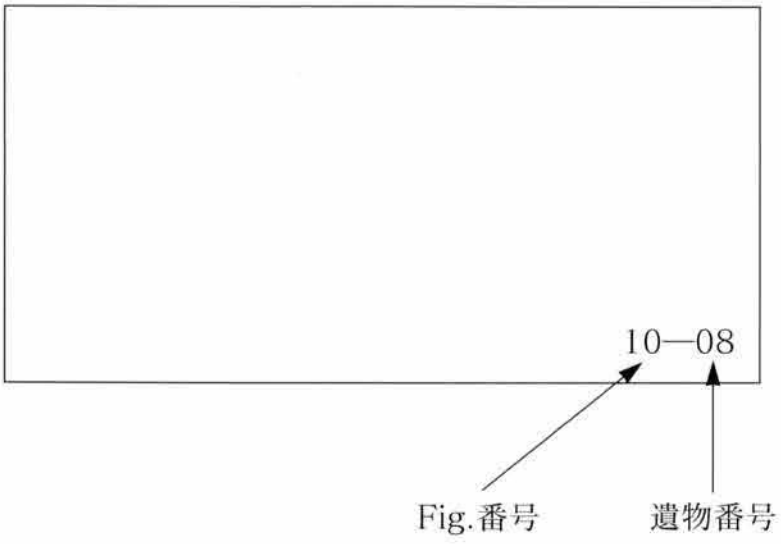
【参考文献】

1.『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅰ）」「筑後市文化財調査報告書第21集」筑後市教育委員会（1999）
「津島南佛生遺跡（1・2次）」「津島南笹原遺跡（1次）」「津島北石伏遺跡（1次）」収報
2.『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅱ）」「筑後市文化財調査報告書第26集」筑後市教育委員会（2000）
「津島皿ヶ町遺跡（1次）」収報
3.『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅲ）」「筑後市文化財調査報告書第27集」筑後市教育委員会（2000）
「常用野中遺跡（1次）」「志下婦計遺跡（1・2次）」「志西野々遺跡（1次）」「志前田遺跡（1次）」収報
4.『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅳ）」「筑後市文化財調査報告書第34集」筑後市教育委員会（2001）
「水田下平霊石遺跡（1次）」「水田上平霊石遺跡（2次）」「水田上仁良葉遺跡（1・2次）」収報
5.『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅴ）」「筑後市文化財調査報告書第43集」筑後市教育委員会（2002）
「尾島東婦計遺跡（1次）」収報
6.『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅵ）」「筑後市文化財調査報告書第50集」筑後市教育委員会（2003）
「常用長田遺跡（2次）」収報
7.『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅶ）」「筑後市文化財調査報告書第51集」筑後市教育委員会（2003）
「常用ニラバ遺跡（1次）」「常用相割遺跡（1次）」「常用野々下遺跡（1次）」「志野添遺跡（1次）」「志藪の内遺跡（1次）」「志八反田遺跡（1次）」
「志上婦計遺跡（1・2次）」「志西田遺跡（1次）」「尾島前田遺跡（1次）」「尾島下町裏遺跡（1次）」収報

PLATE

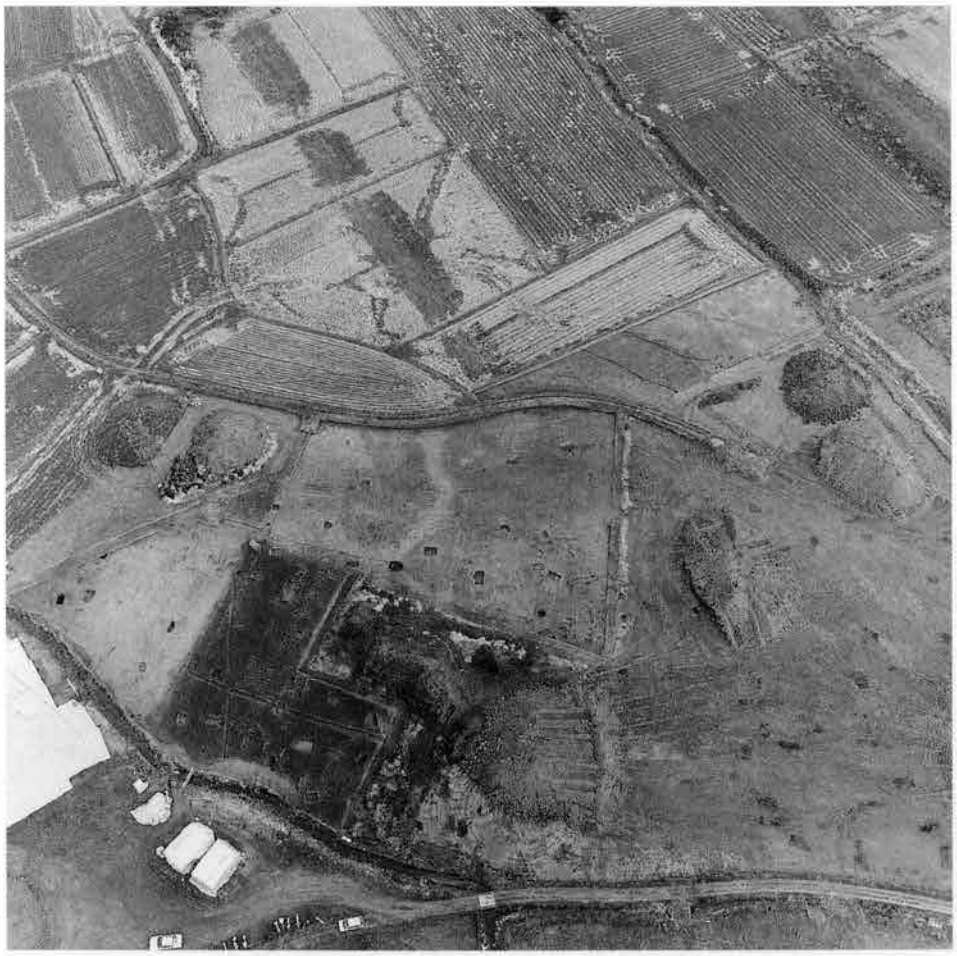
凡　例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。

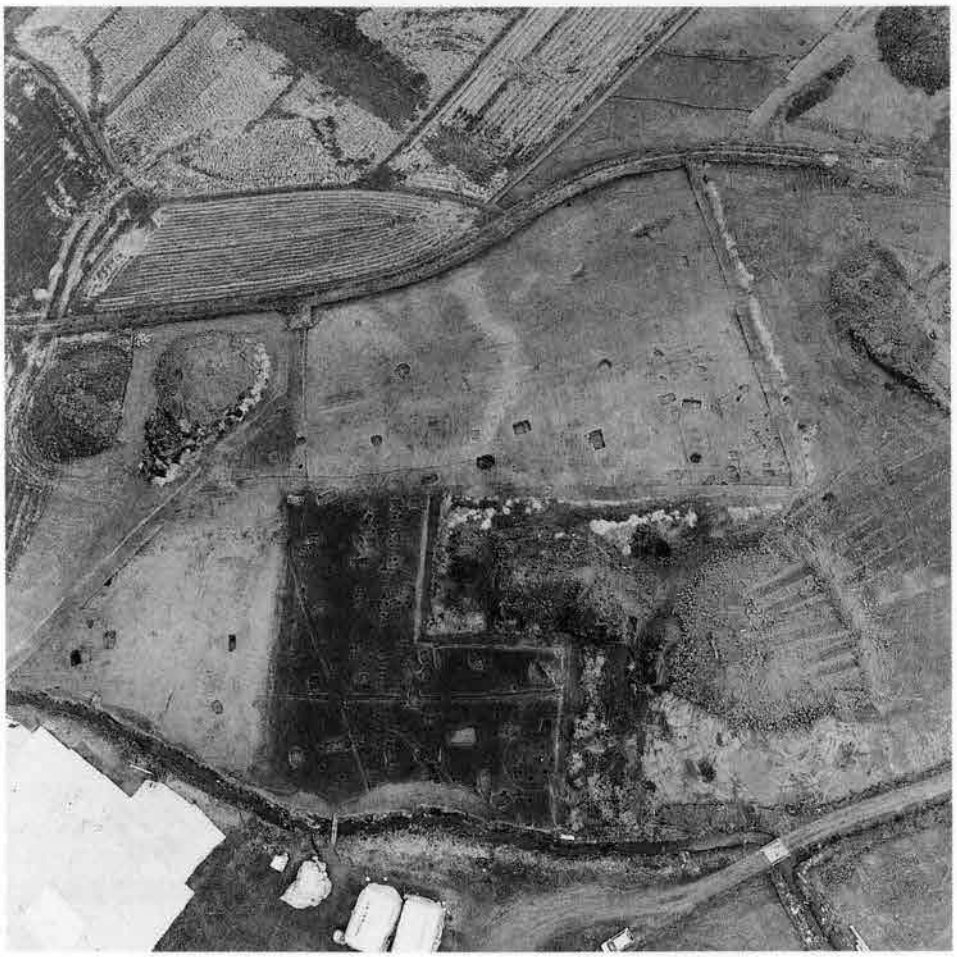


調査区遠景
（南から：空中写真）

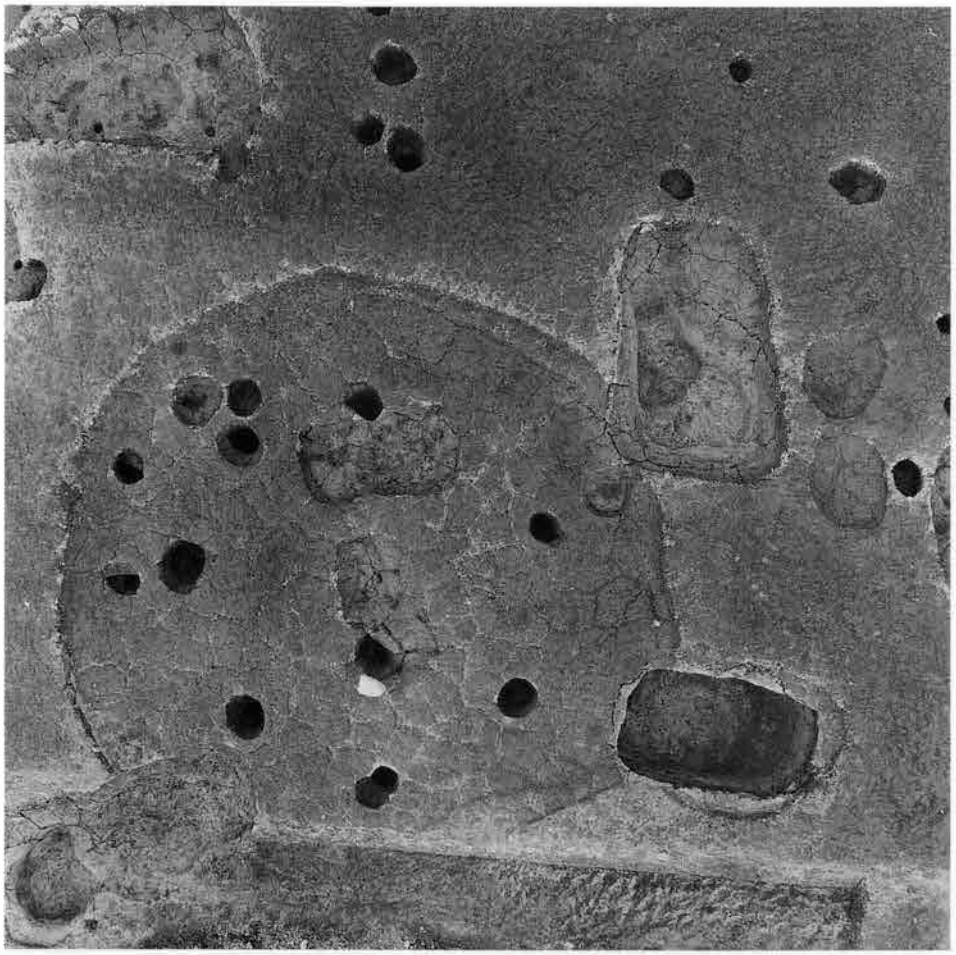
調査区全景
（南から：空中写真）



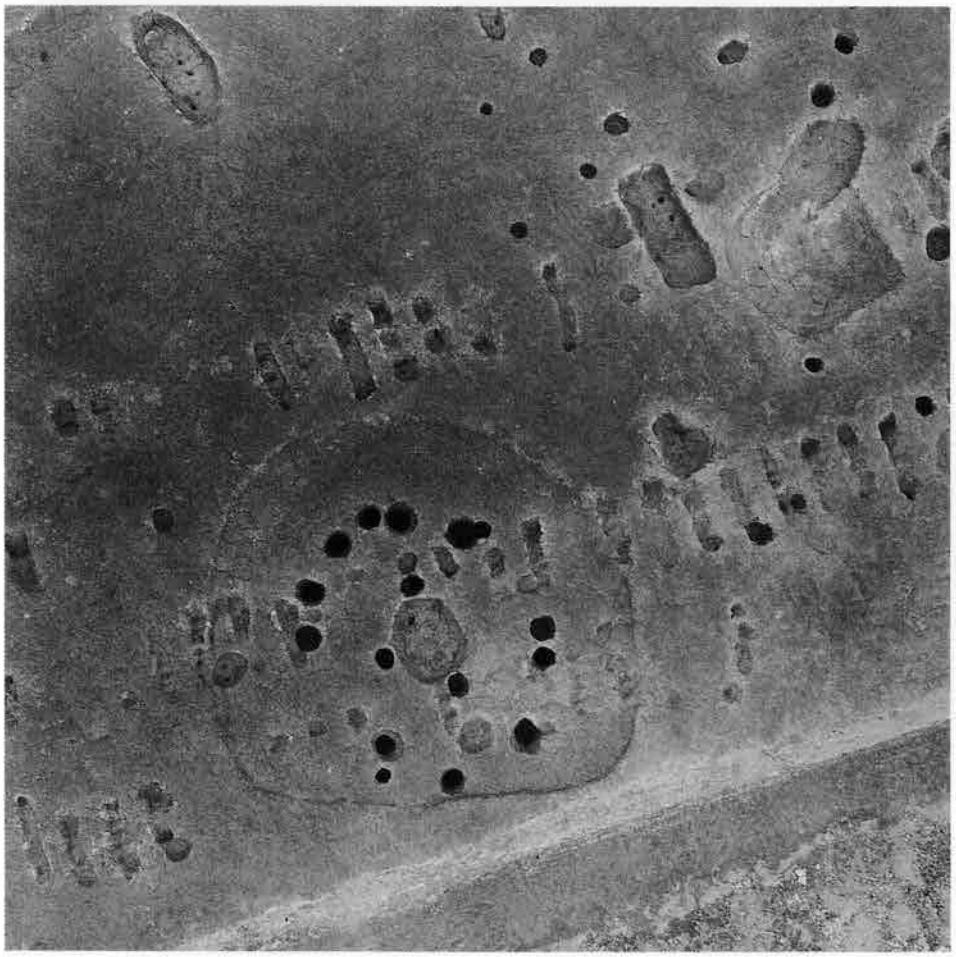
調査区全景
(左が北：空中写真)



調査区北部
(左が北：空中写真)

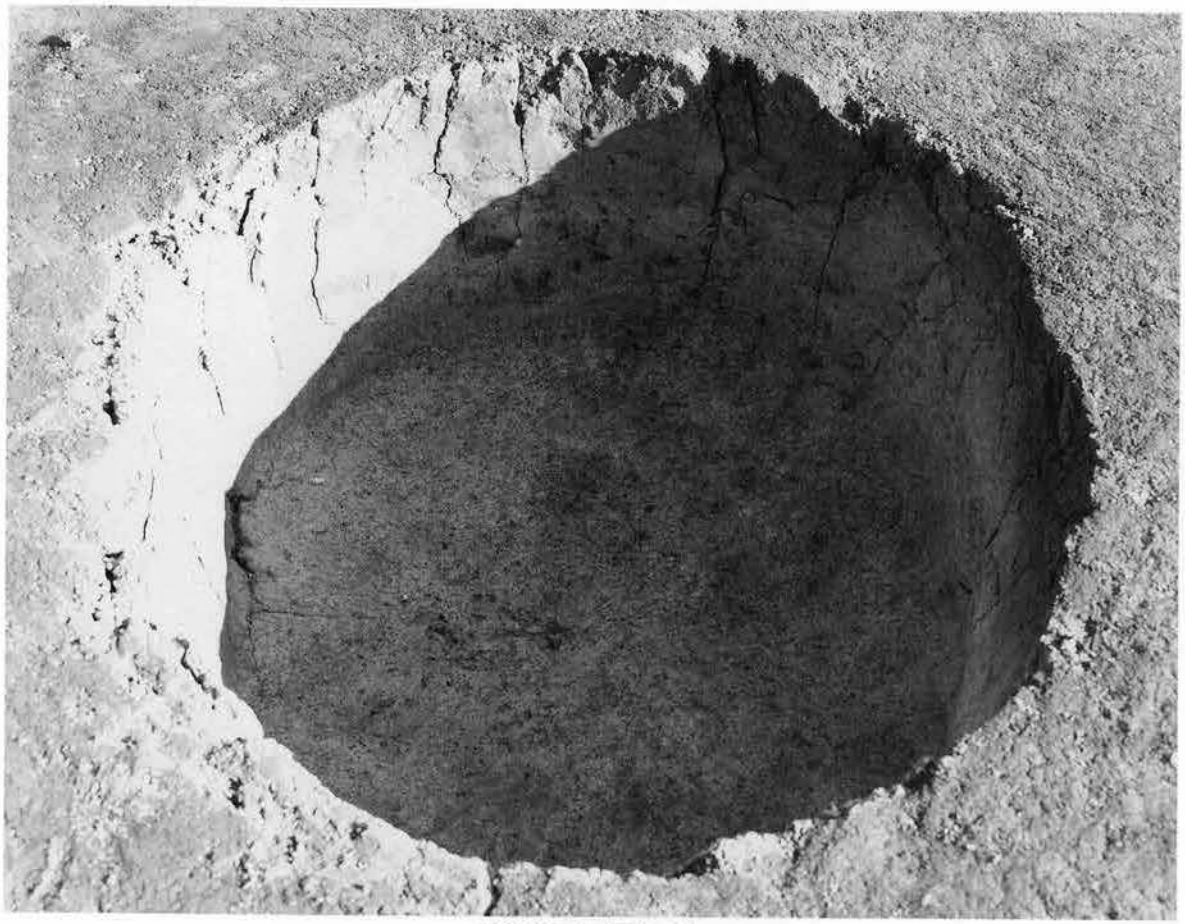


1SI040
（上が北：空中写真）



1SI050
（上が北：空中写真）

1ST112（北西から）

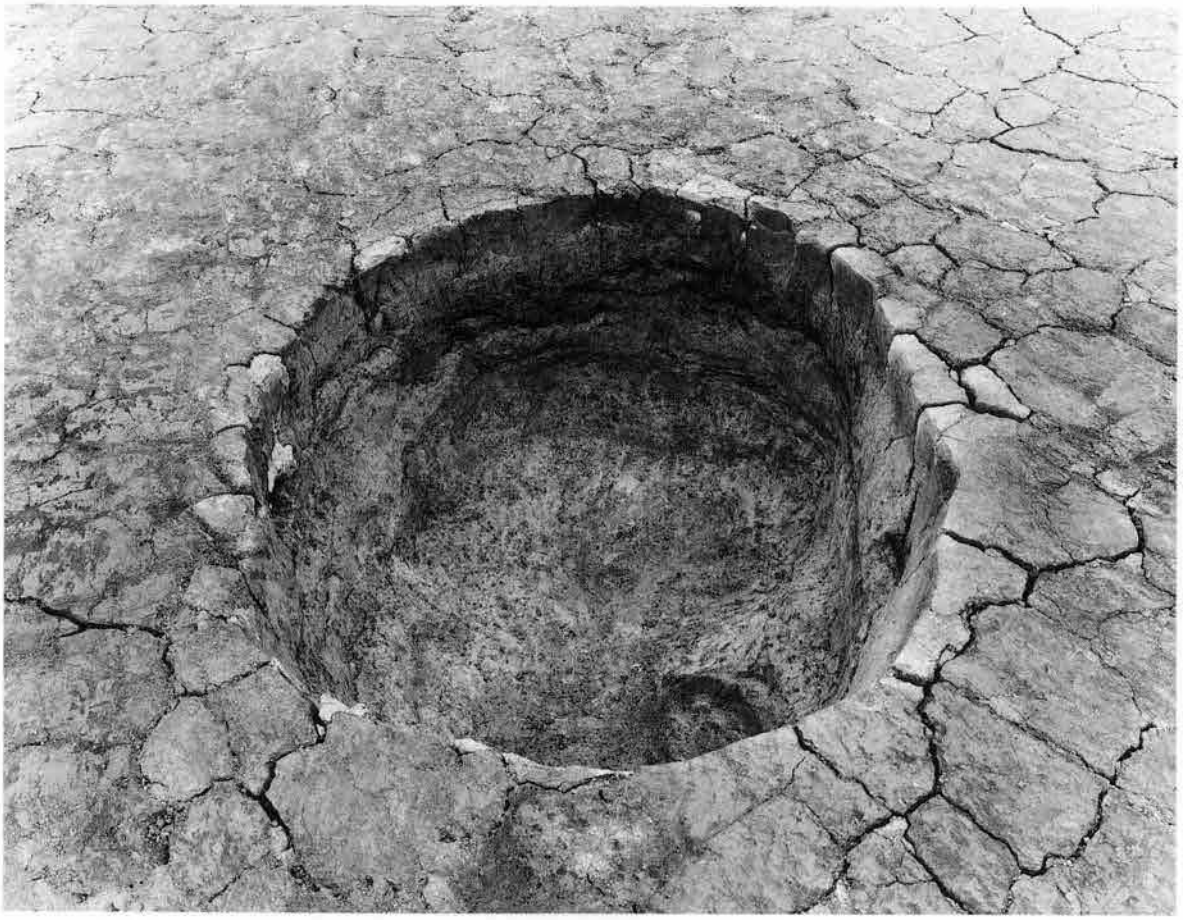


1SK001（西から）

1SK002（北東から）

1SK003（北西から）

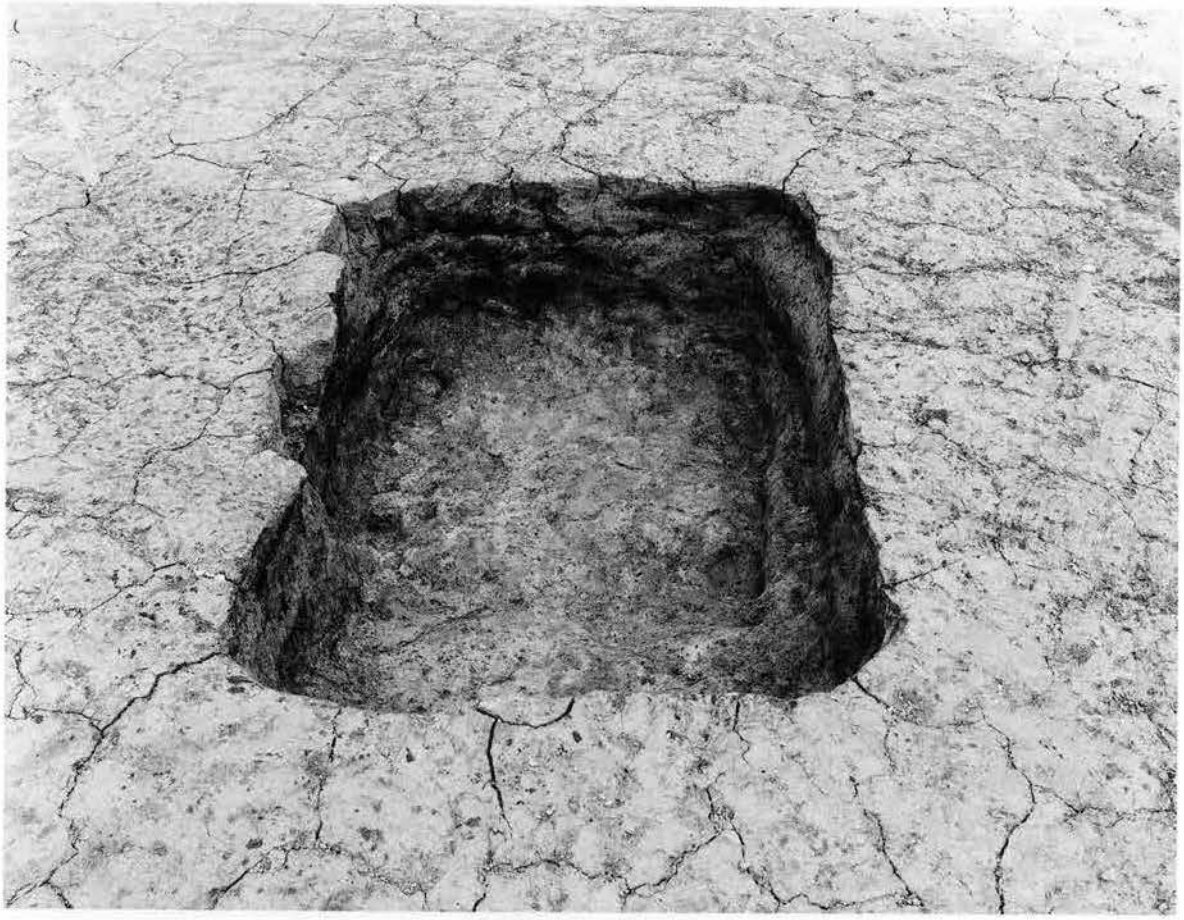
1SK015（南東から）



1SK023（北から）

1SK025（南東から）

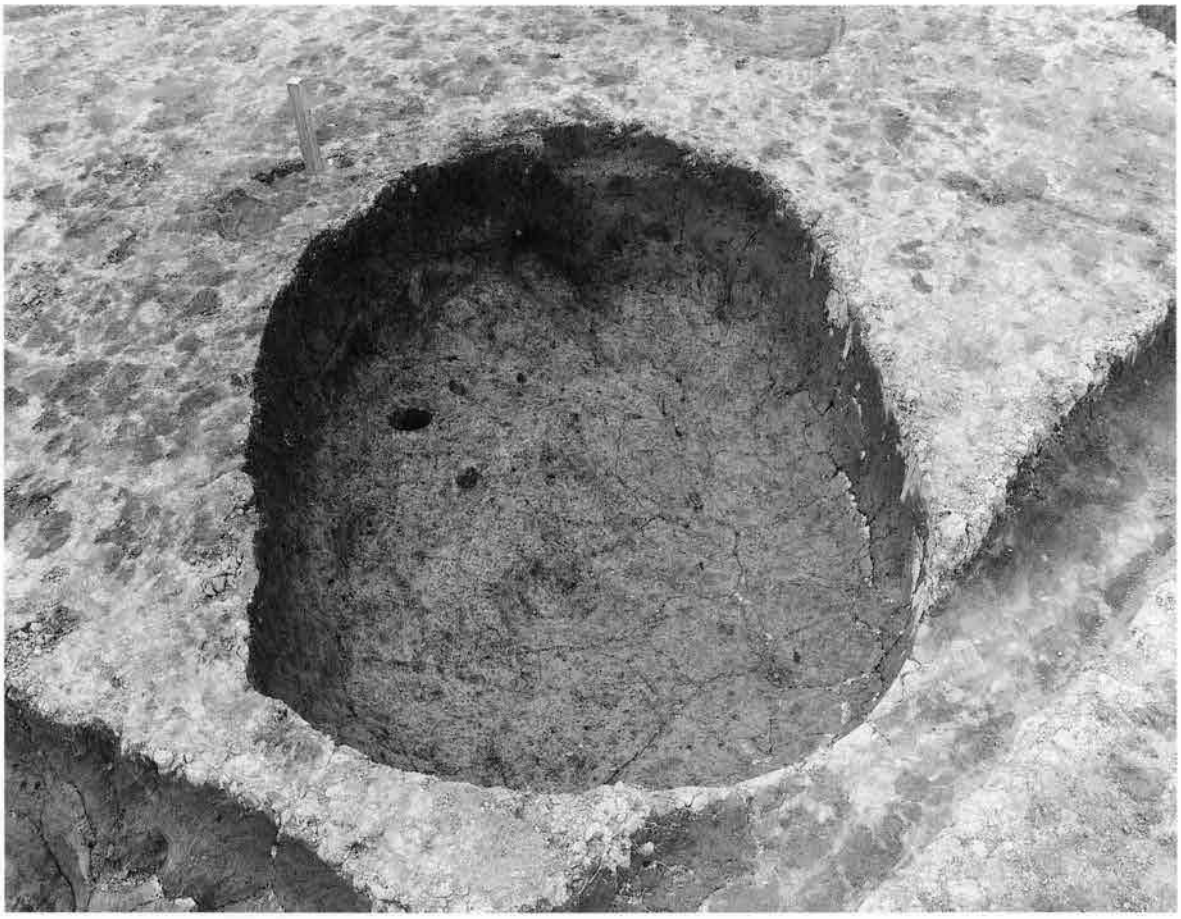
1SK027（北から）



1SK028（南から）

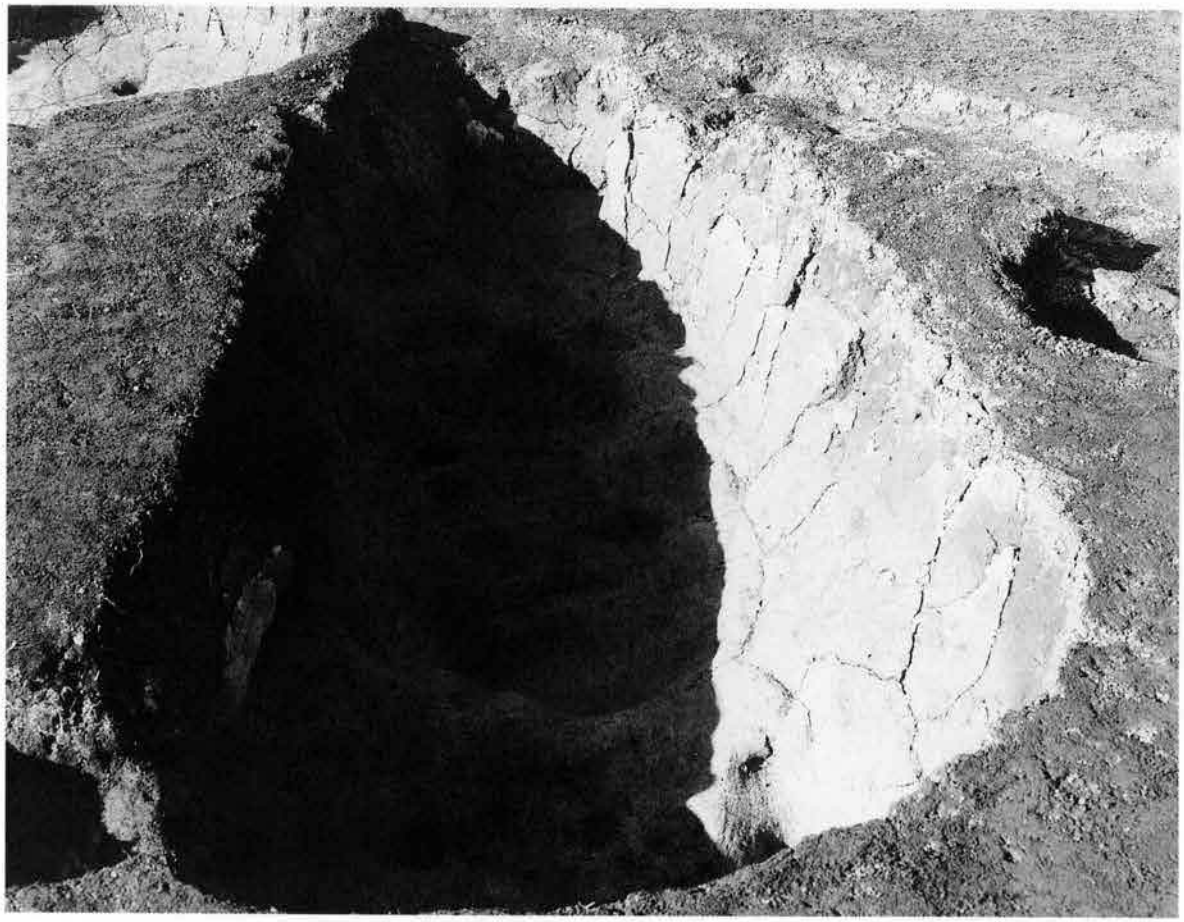
1SK029（西から）

1SK038（南西から）

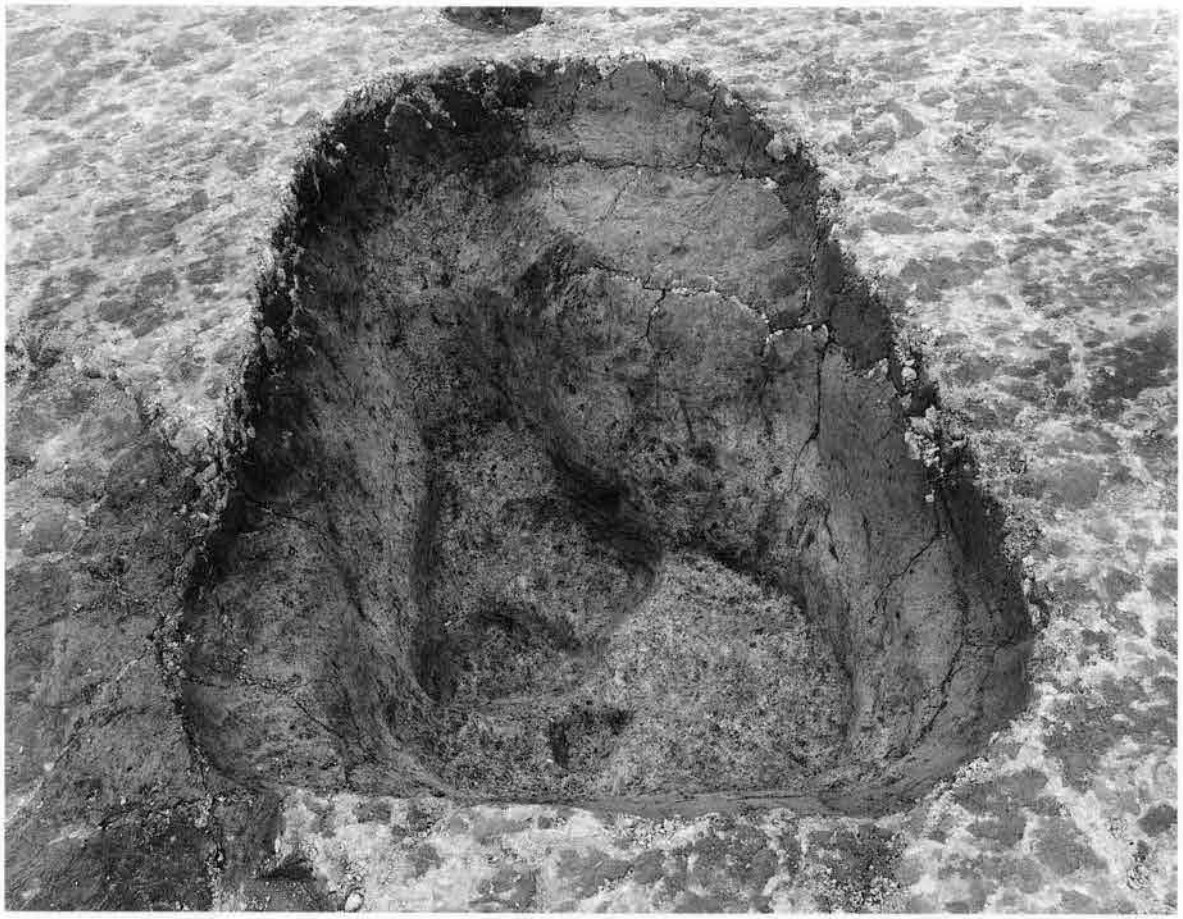


1SK048（北から）

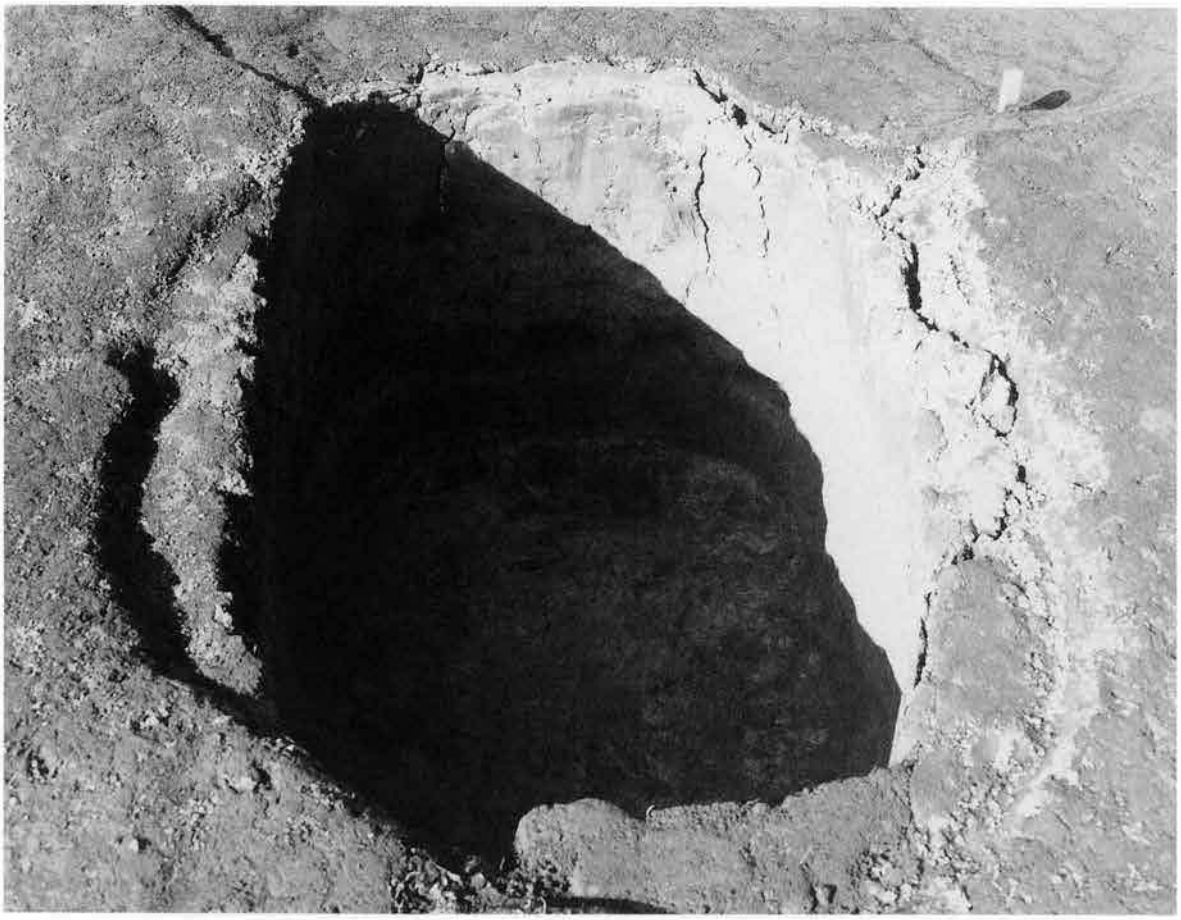
1SK060（南西から）



1SK070（南東から）



1SK080（南西から）

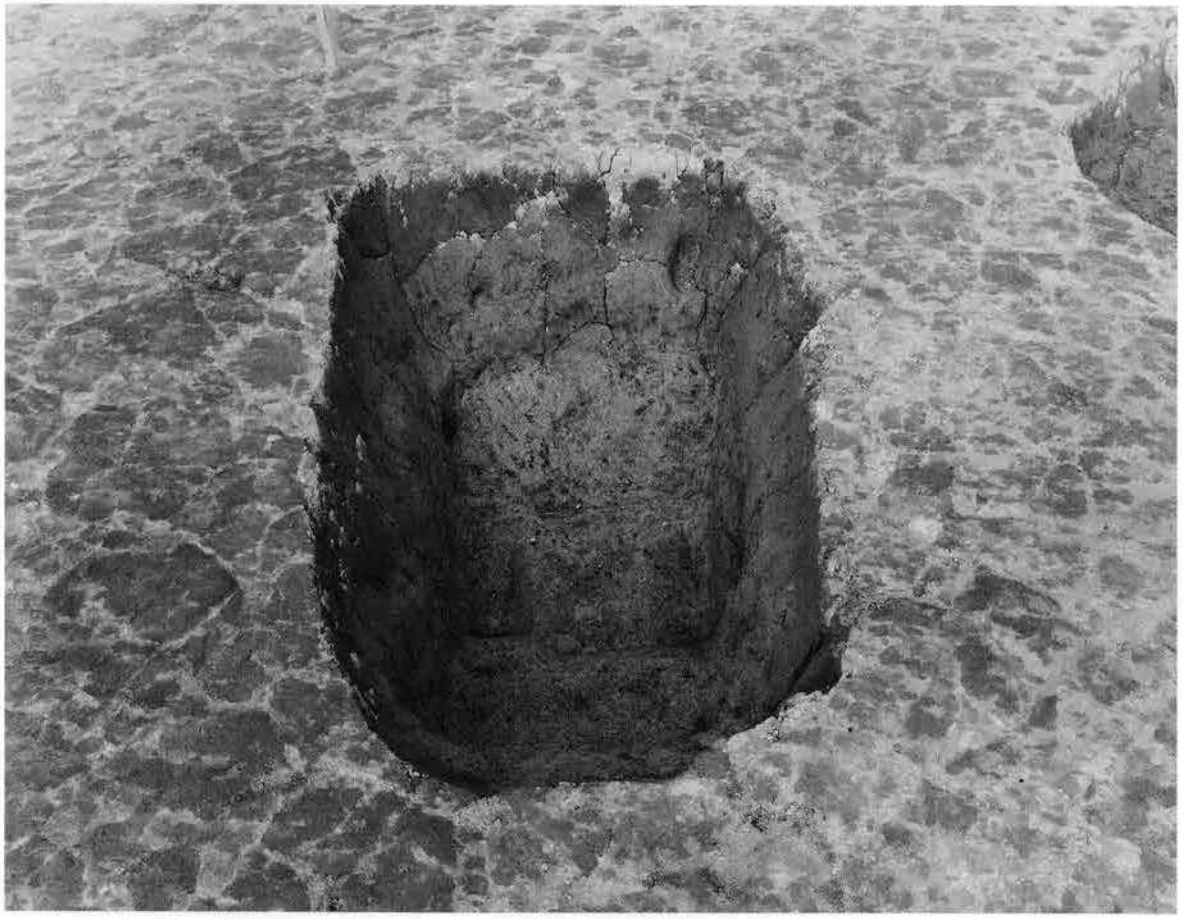


1SK090（南から）

1SK105（北西から）

1SK109（西から）

1SK110（東から）

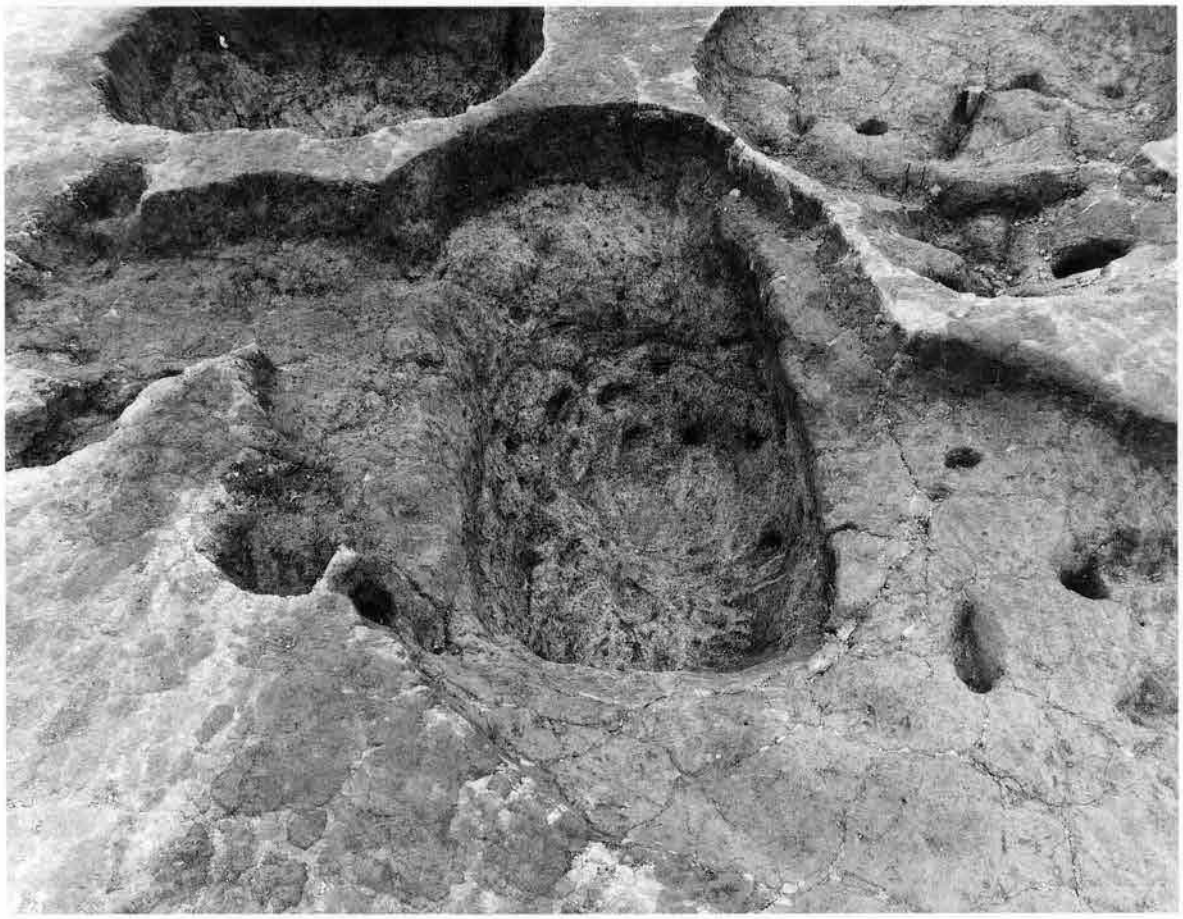


1SK115（南から）

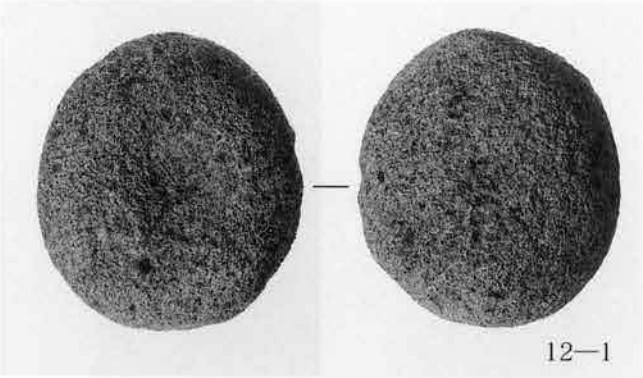
1SK135（西から）

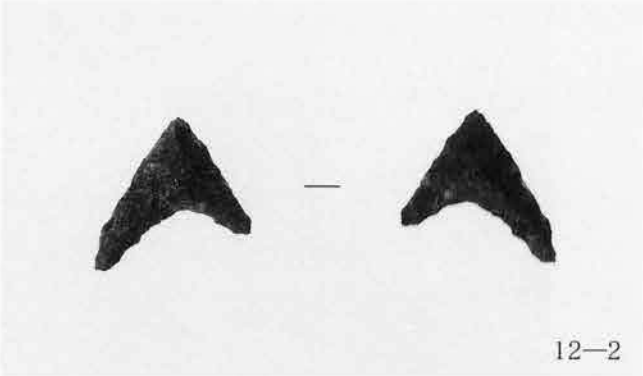
1SK140（北西から）

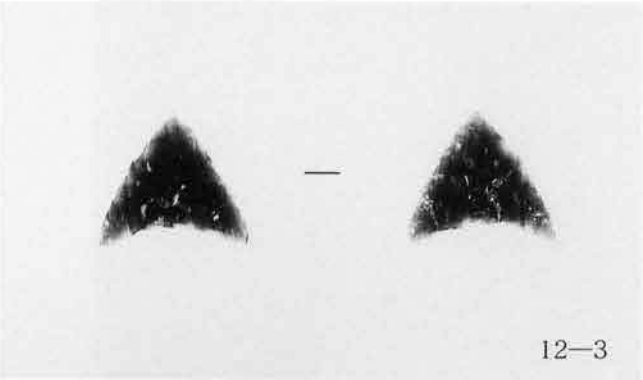
1SK145（東から）



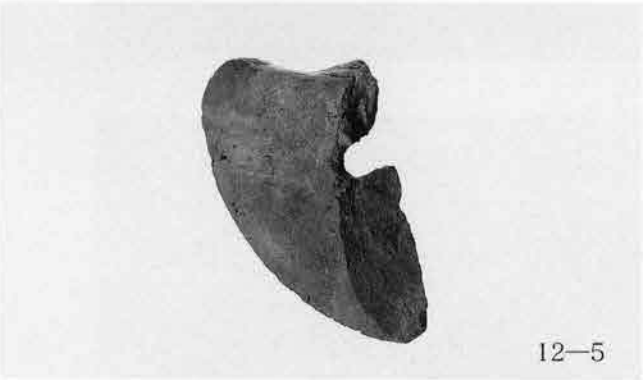
1SK155（北から）

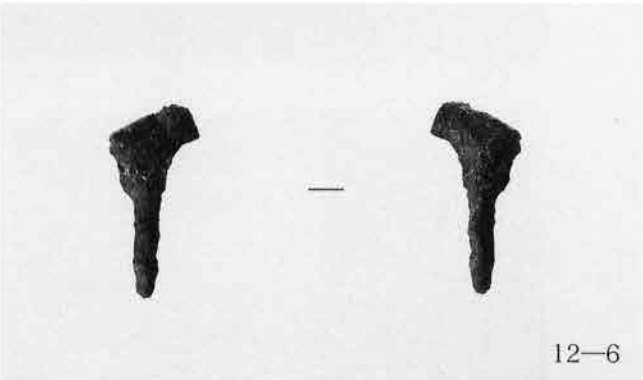

12—1

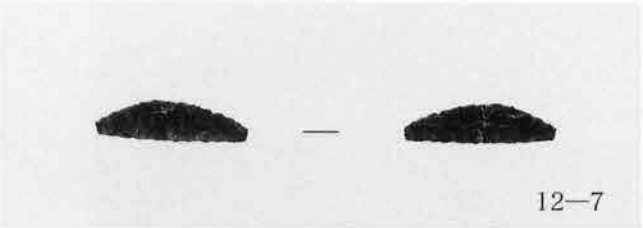

12—2

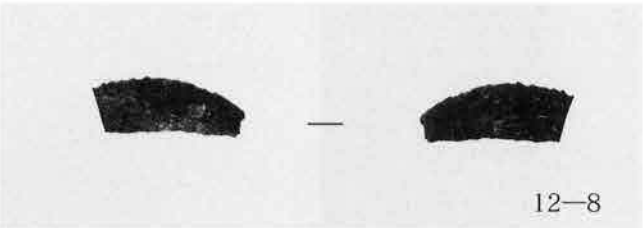

12—3

12—4

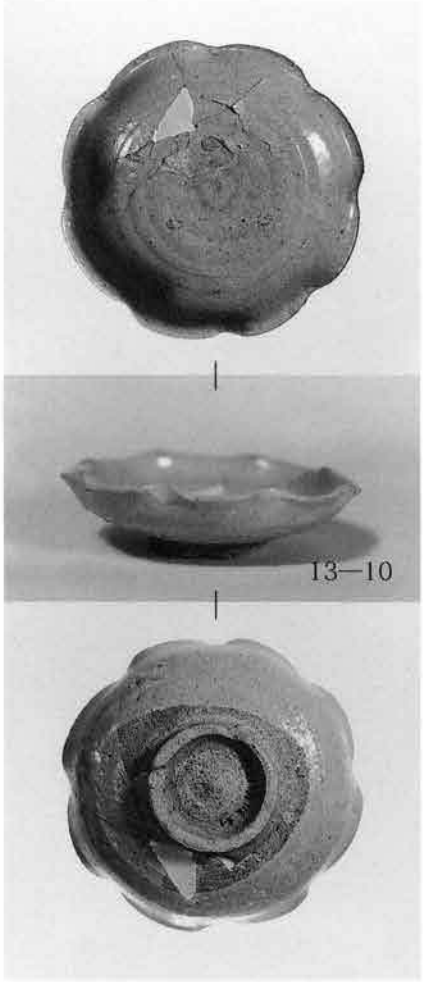

12—5

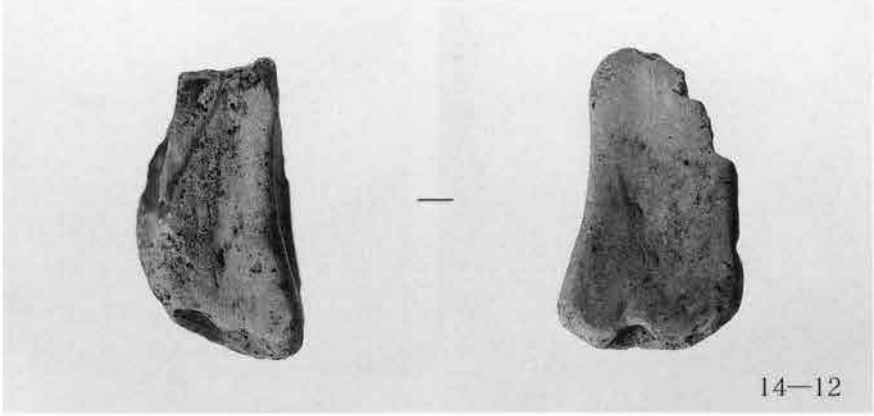

12—6

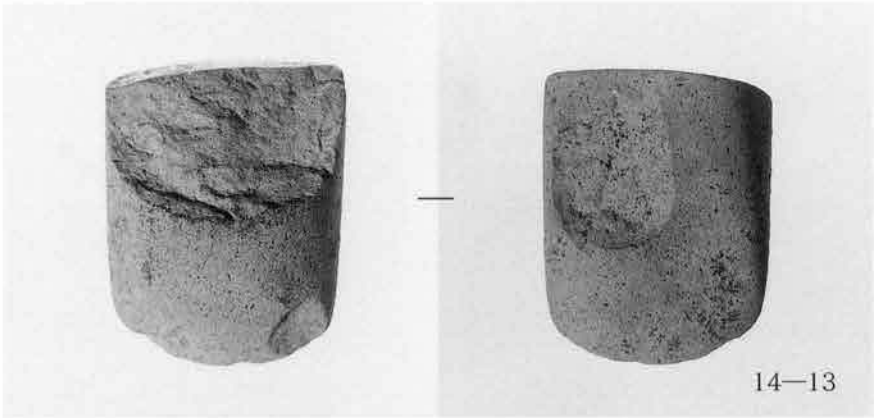

12—7

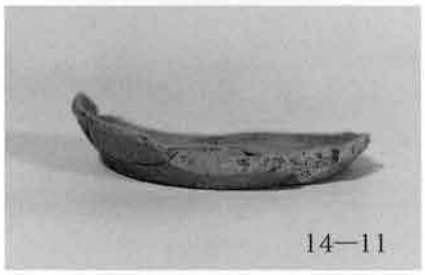

12—8

12—9


13—10


14—12


14—13


14—11

15—15

15—16

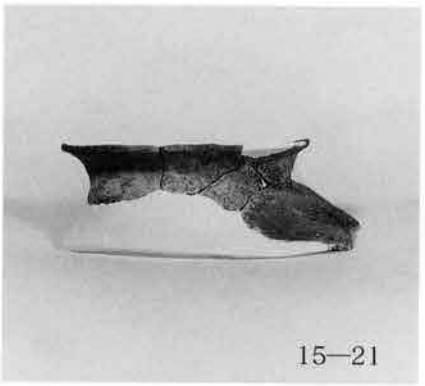
15—14

15—17

15—18

15—19

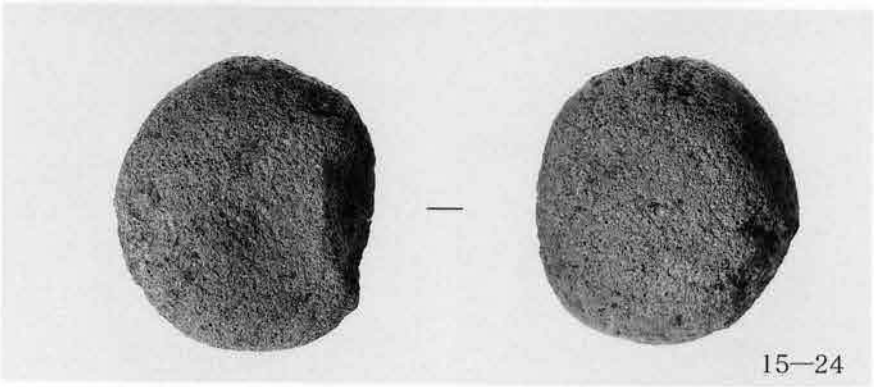
15—20


15—21

15—22

15—23

16—25


15—24

16—26

16—27

16—28

16—30

16—29

16—31

16—32

16—33

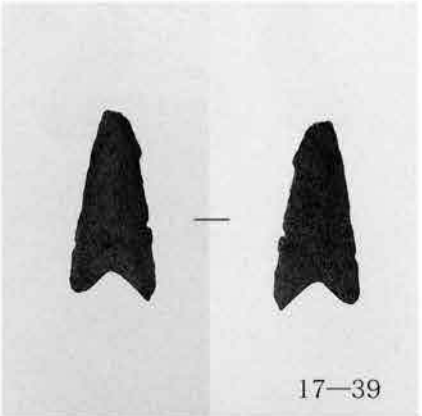
16—34

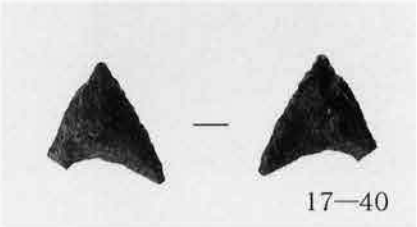
16—35

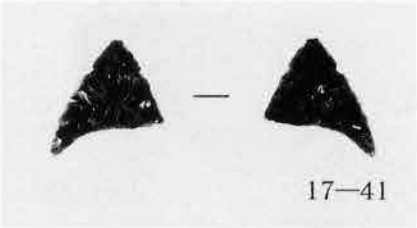
16—36

16—37

17—38


17—39


17—40

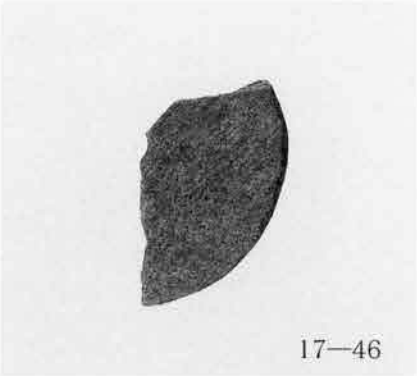

17—41

17—42

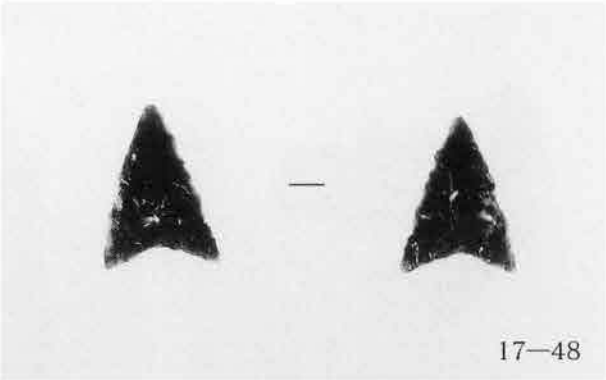
17—43

17—44

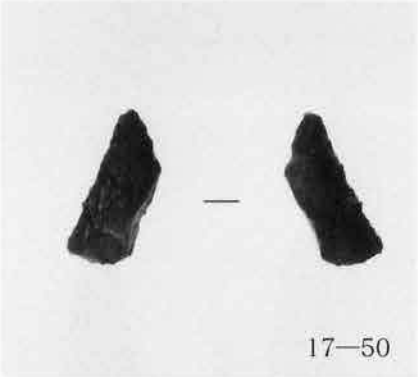
17—45


17—46

17—47


17—48

17—49


17—50

17—51

17—54

17—52

17—53

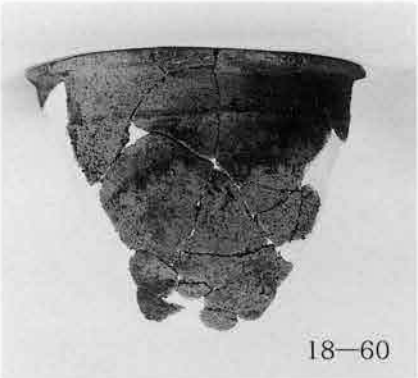
17—55

18—56

18—57

18—58

18—59


18—60

18—61

18—62

18—63

18—64

18—65

19—66

19—67

19—68

19—69

19—70

19—71

19—72

19—73

19—74

19—75

19—76

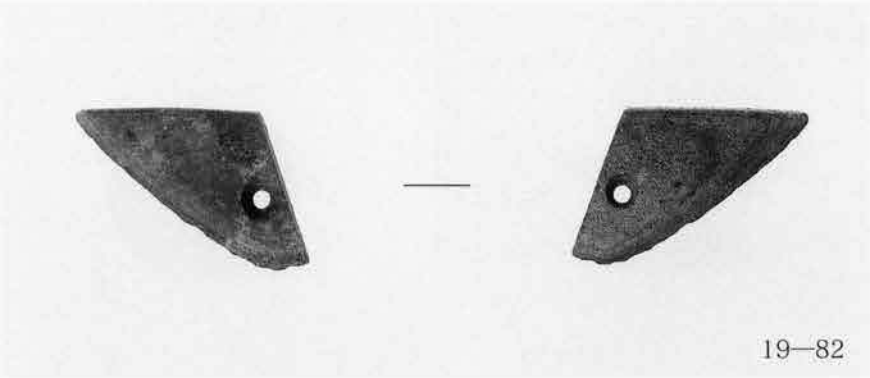
19—77

19—78

19—79

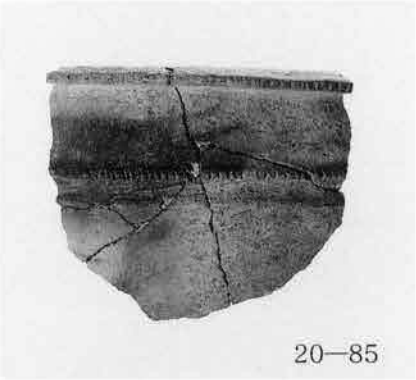
19—80

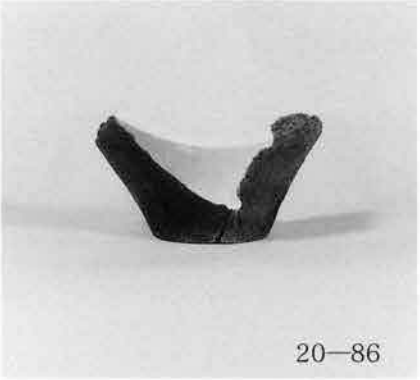
19—81


19—82

20—83

20—84


20—85


20—86

20—87

21—88

21—89

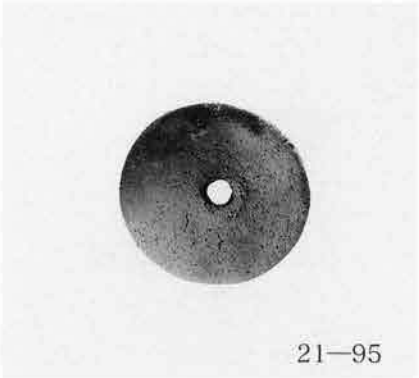
21—90

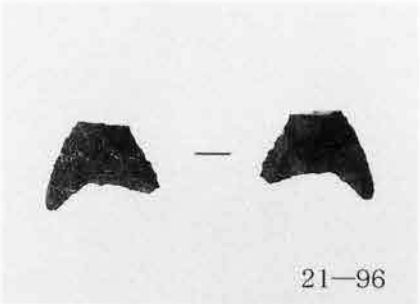
21—91

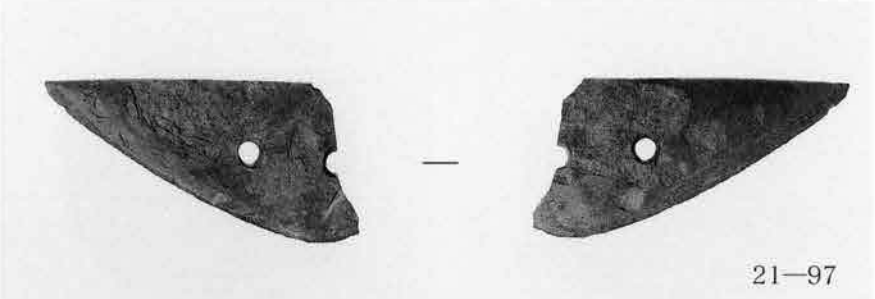
21—92

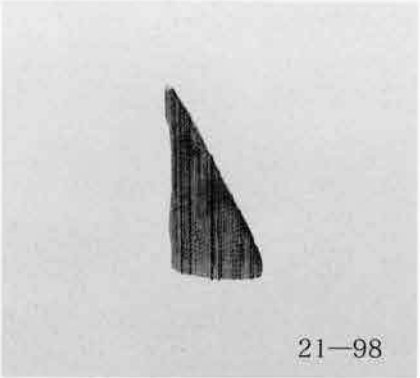
21—93

21—94


21—95


21—96


21—97


21—98

22—99

22—100

22—101

22—102

22—103

22—105

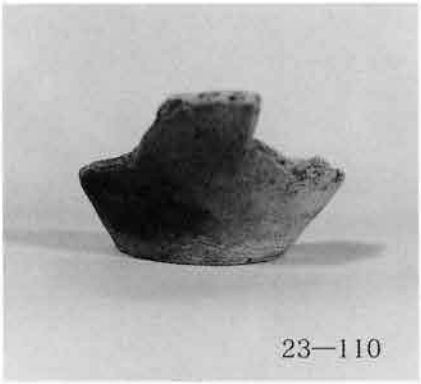
22—106

22—104

22—107

22—108

23—109

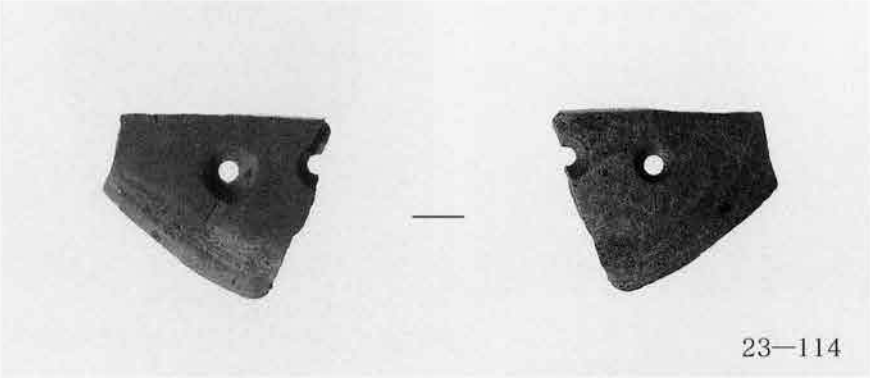

23—110

23—111

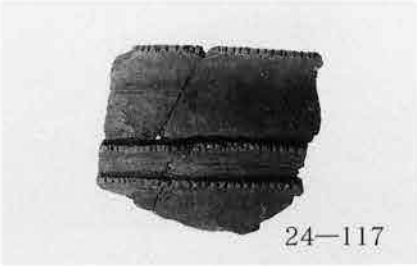
23—112

23—113

25—115


23—114

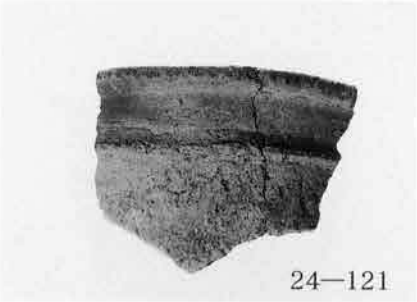
24—116


24—117

24—118

24—119

24—120


24—121

24—122

24—123

24—124

24—125

24—126

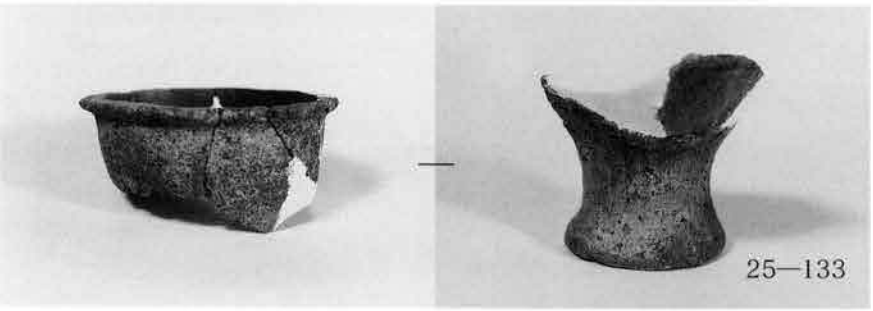
24—127

24—128

24—129

24—130

25—131


25—133

25—134

25—132

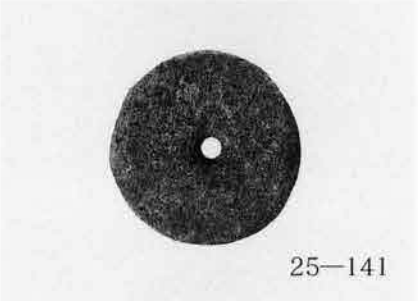
25—135

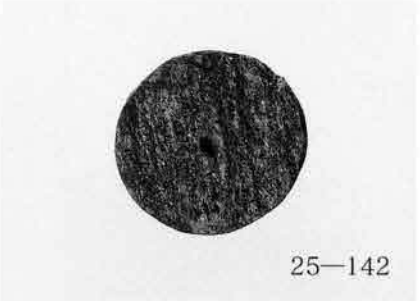
25—136

25—137

25—138

25—139


25—141


25—142

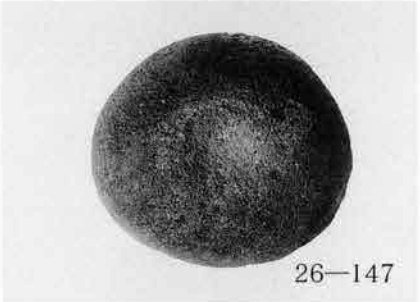
25—140

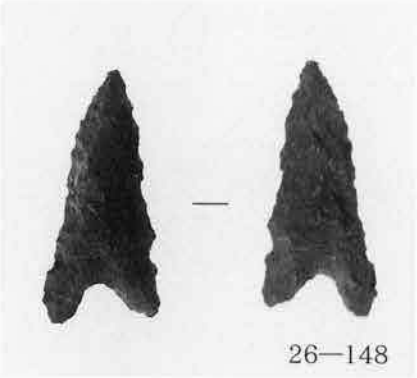
26—144

26—145

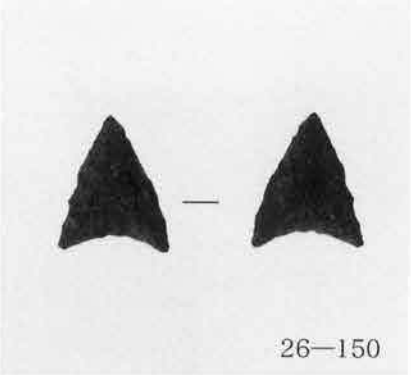
25—143

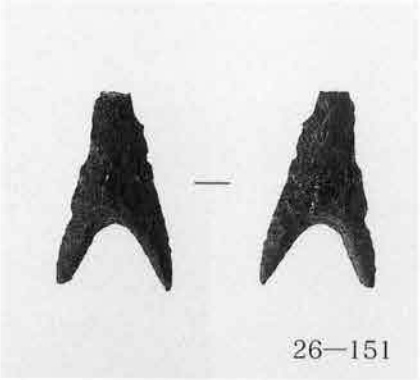
26—146


26—147


26—148

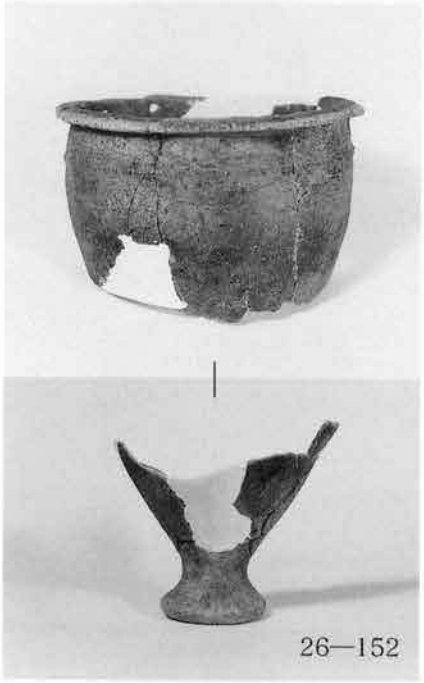
26—149

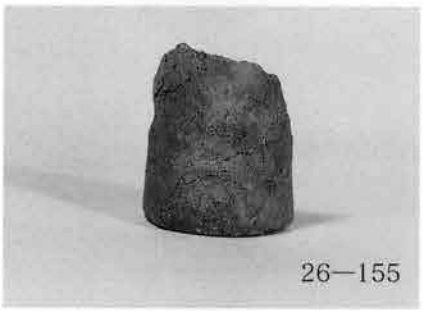

26—150

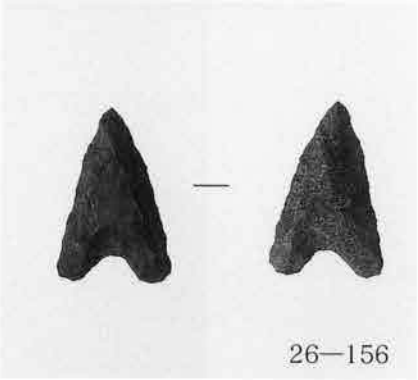

26—151

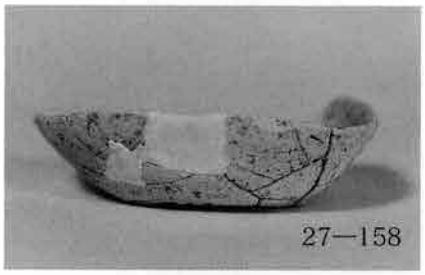
26—153

26—154

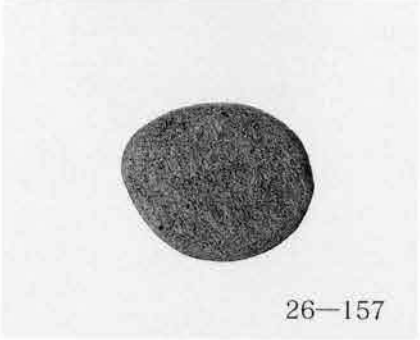

26—152


26—155


26—156

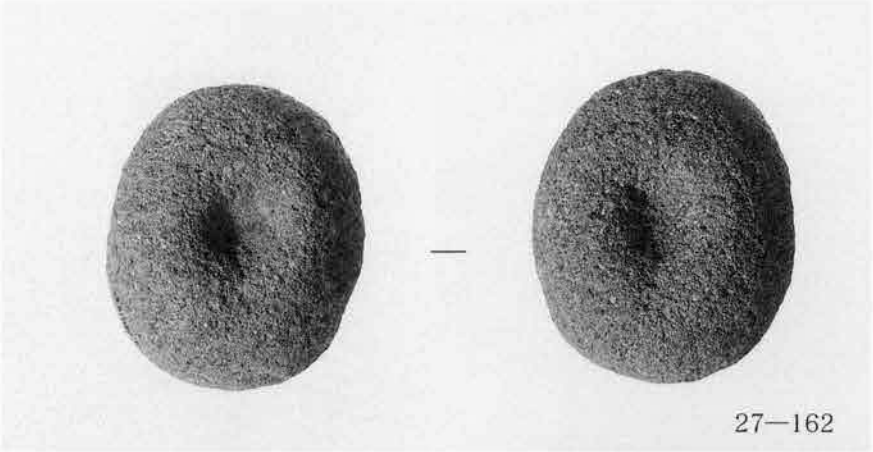

27—158

27—159


26—157

27—160

27—161


27—162

27—163

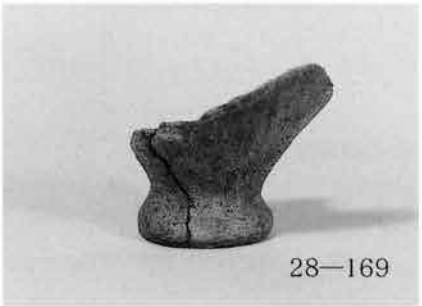
27—164

27—165

27—166

28—167

28—168


28—169

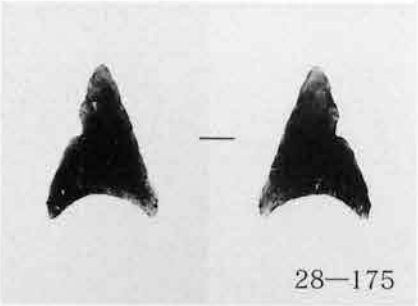
28—170

28—171

28—172

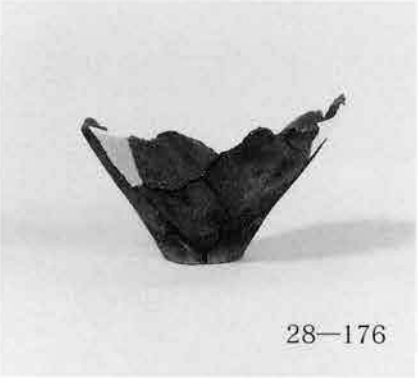
28—173

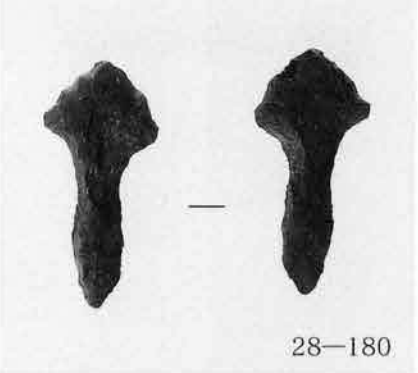
28—174


28—175

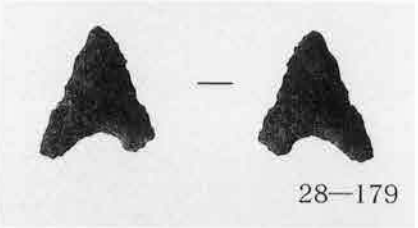
28—177

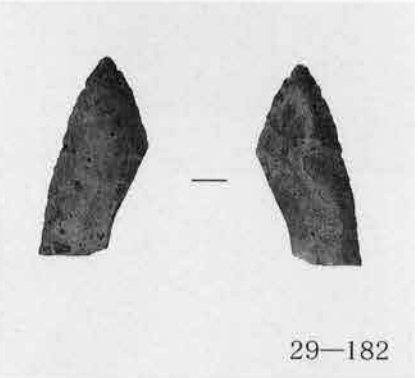
28—178


28—176

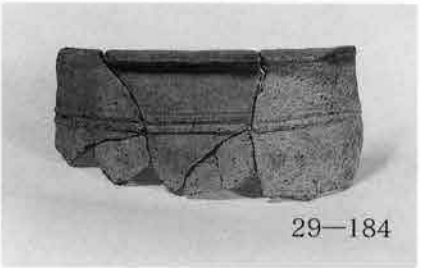

28—180

29—181


28—179

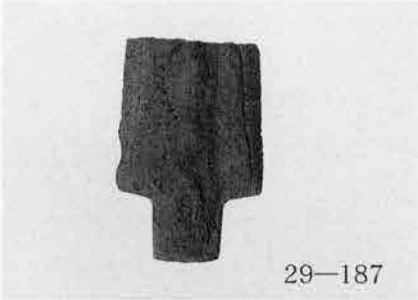

29—182

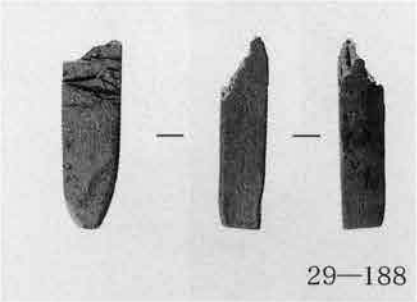
29—183

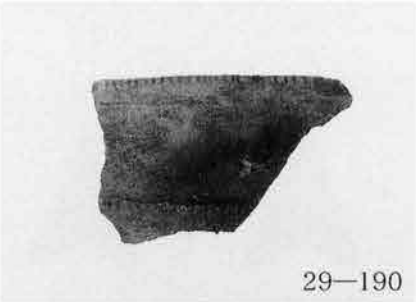

29—184

29—185

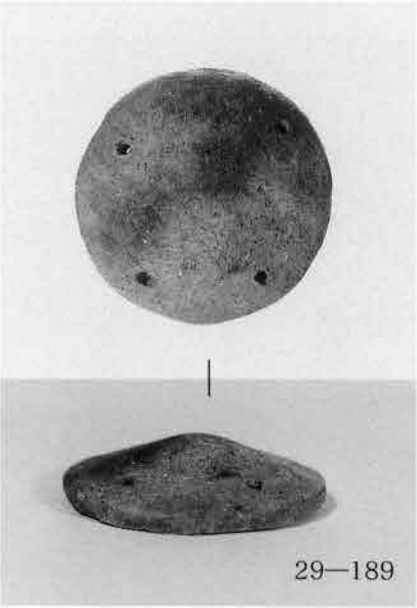
29—186


29—187

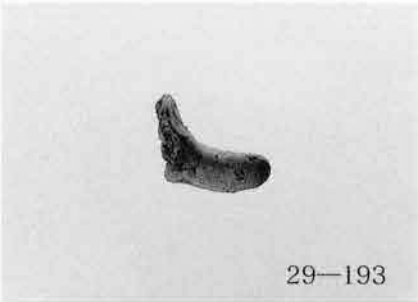

29—188

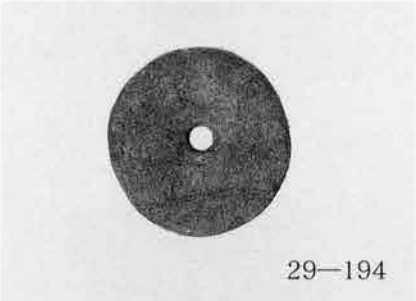

29—190

29—191


29—189

29—192


29—193


29—194

30—195

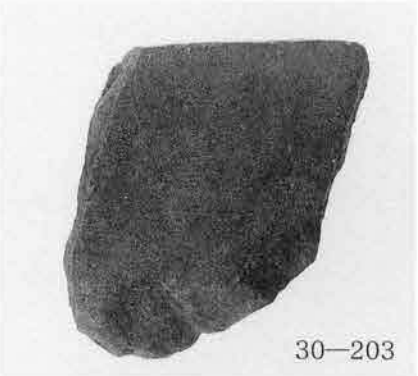
30—196

30—197

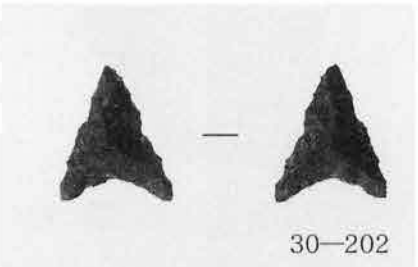
30—198

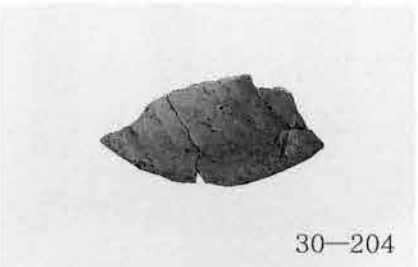
30—199

30—200

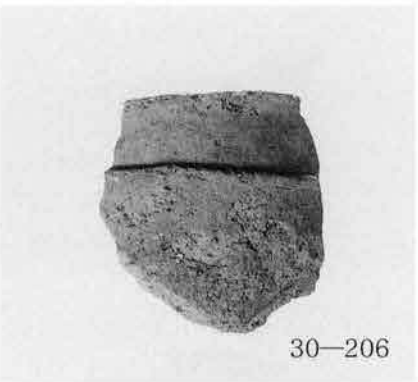

30—203

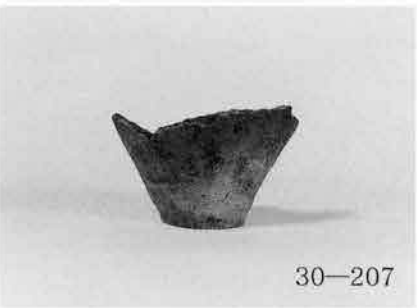
30—201

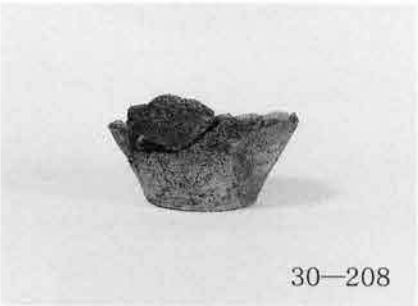

30—202


30—204

30—205


30—206

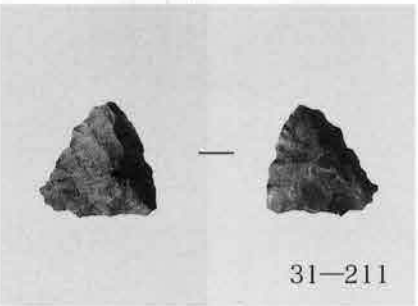

30—207


30—208

31—209

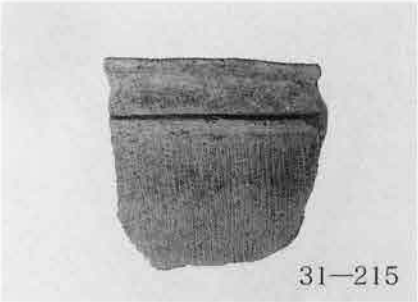
31—212

31—210


31—211

31—213

31—214


31—215

32—217

31—216

32—218

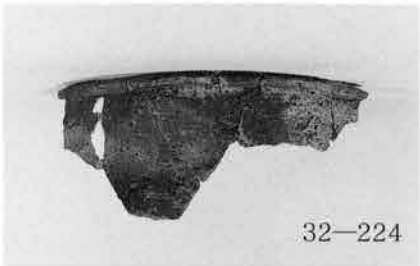
32—219

32—220

32—221

32—222

32—223


32—224

32—225

33—227

32—226

33—228

33—229

33—230

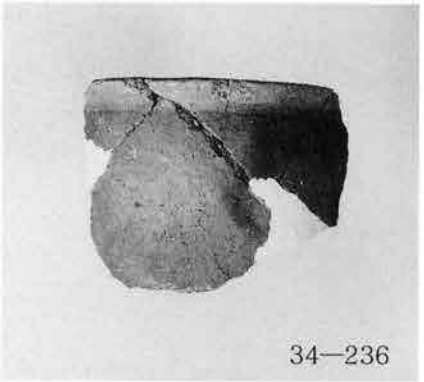
33—231

33—232

33—233

34—235

34—234


34—236

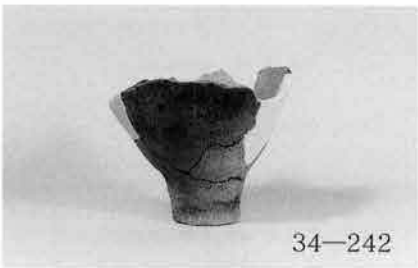
34—237

34—238

34—239

34—240

34—241


34—242

34—243

34—244

35—245

35—246

35—247

35—248

35—249

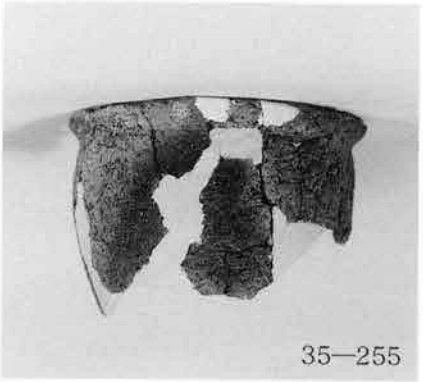
35—250

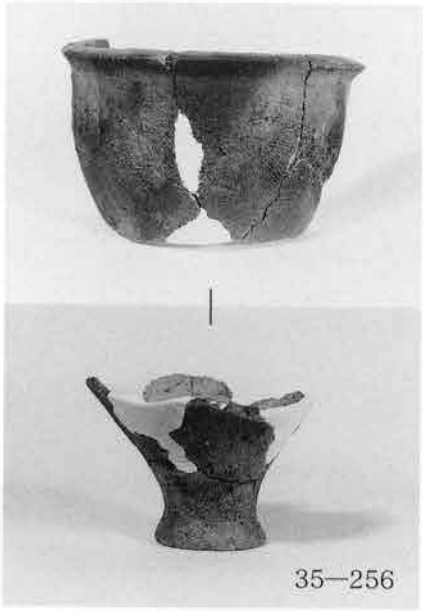
35—251

35—252

35—253

35—254

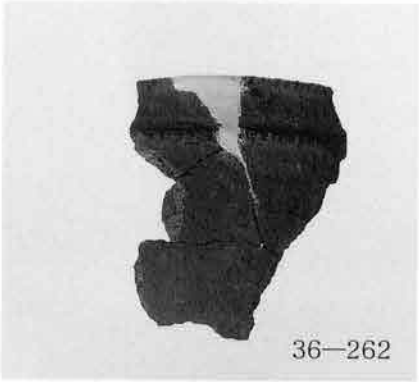

35—255


35—256

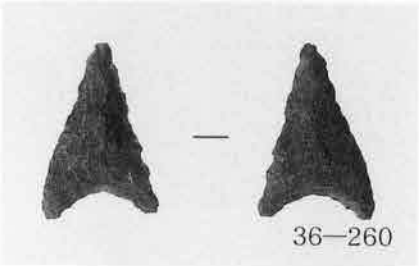
35—257

35—258

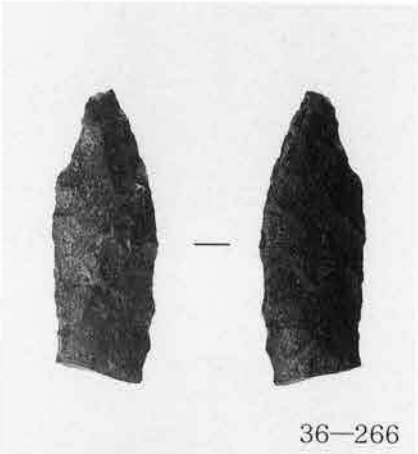
35—259

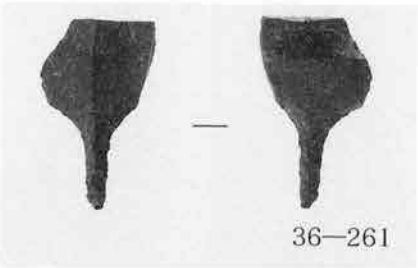

36—262

36—265


36—260

36—263


36—266

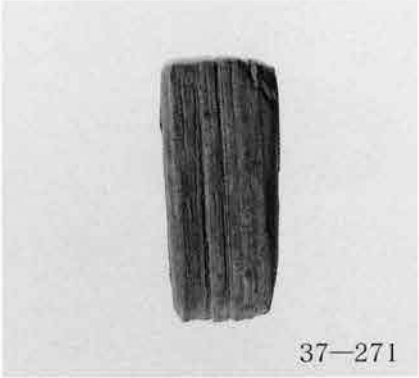

36—261

36—267

36—268

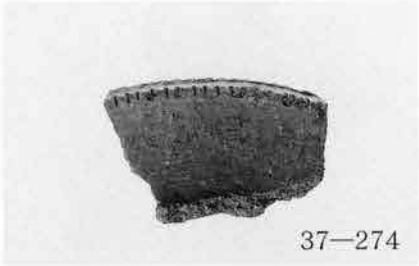
36—269

36—270

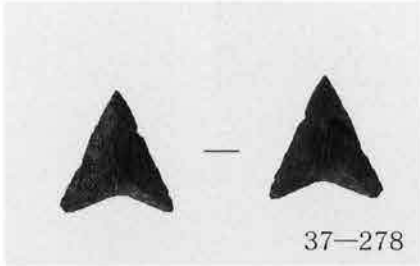

37—271

37—272

37—273

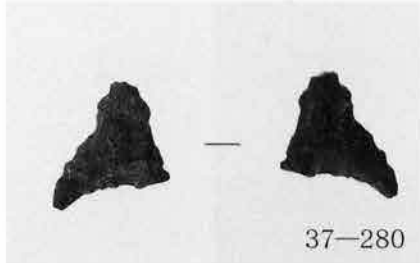

37—274

37—275


37—278

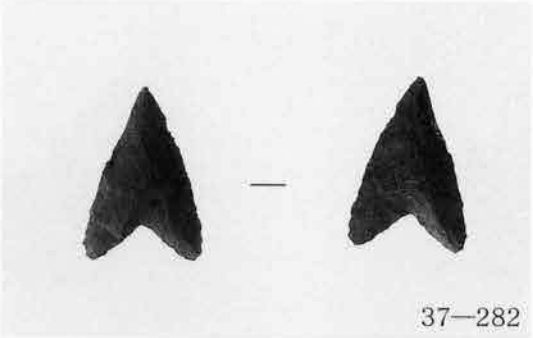
37—276

37—277

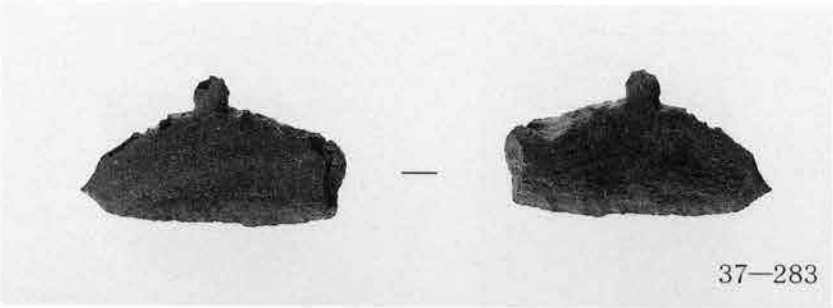

37—280

37—279

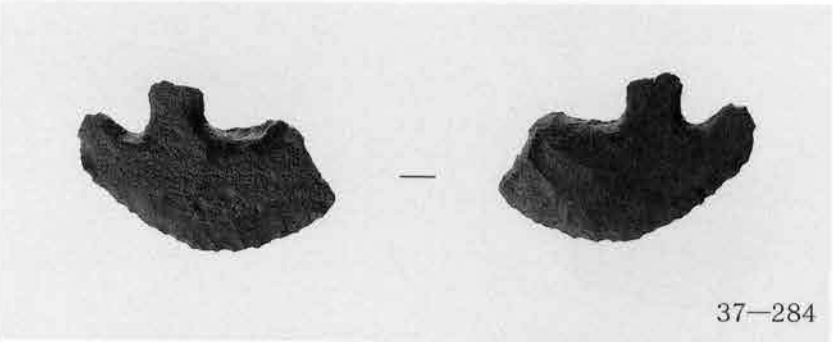
37—281



37—282

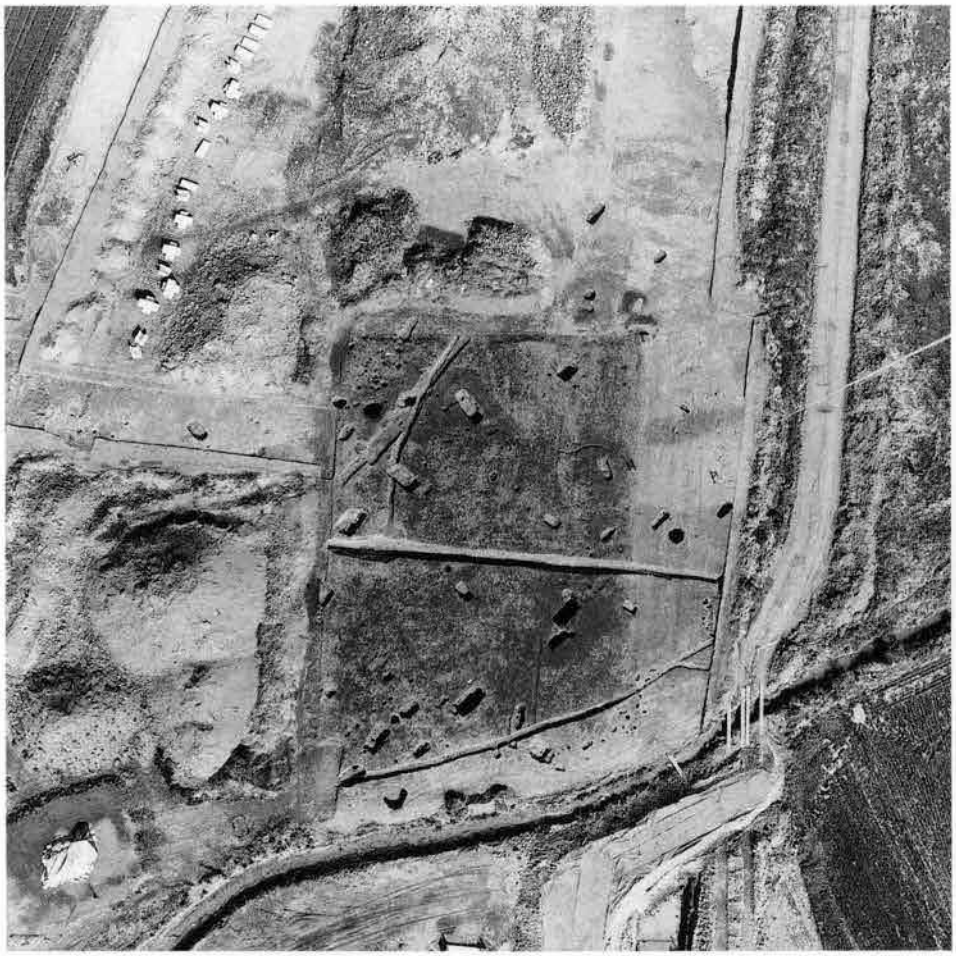


37—283

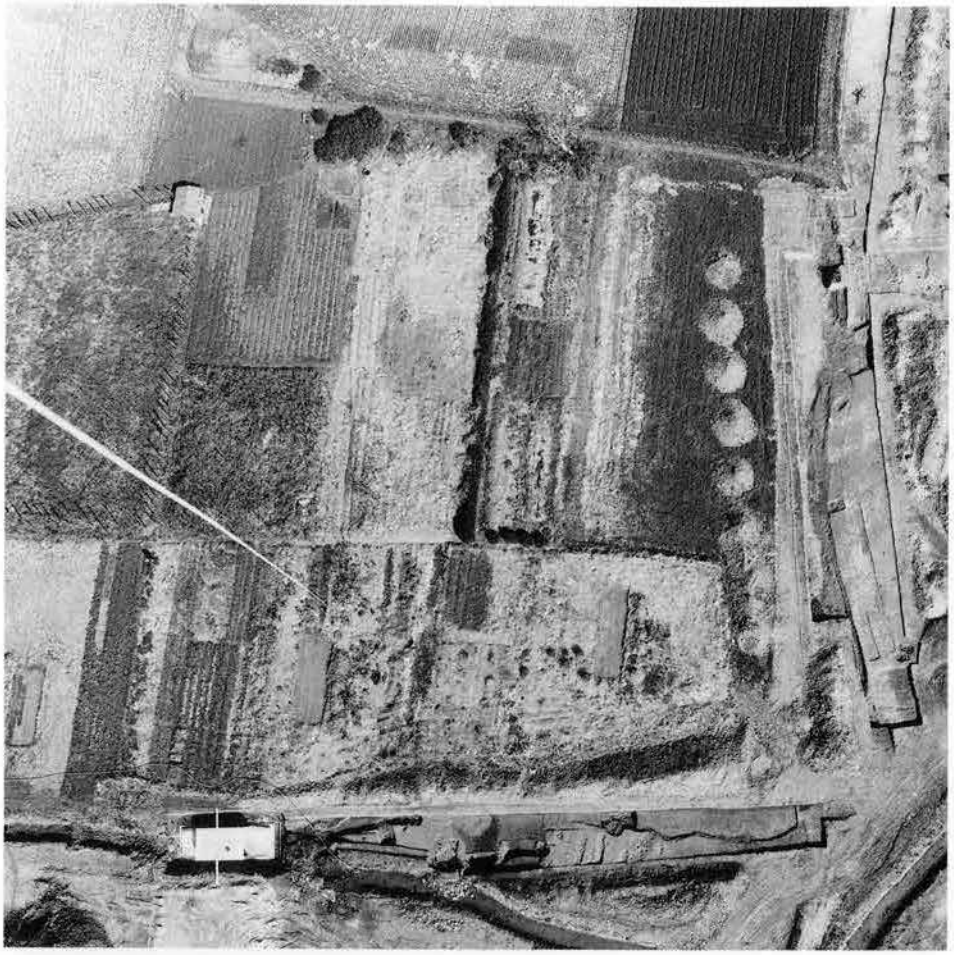


37—284

調査区遠景
（上が北：空中写真）



調査区南部
（上が北：空中写真）

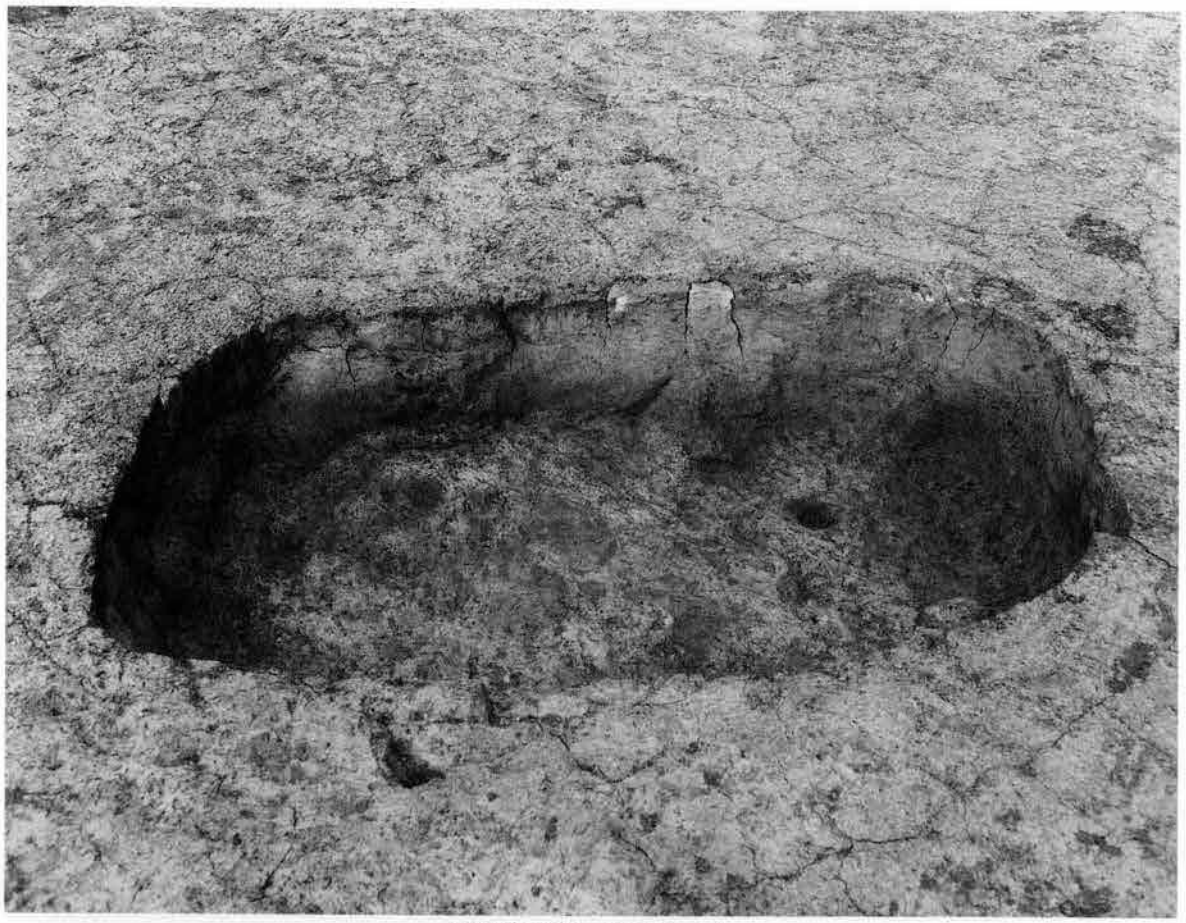


調査区南西部
（上が北：空中写真）

調査区北部
（上が北：空中写真）

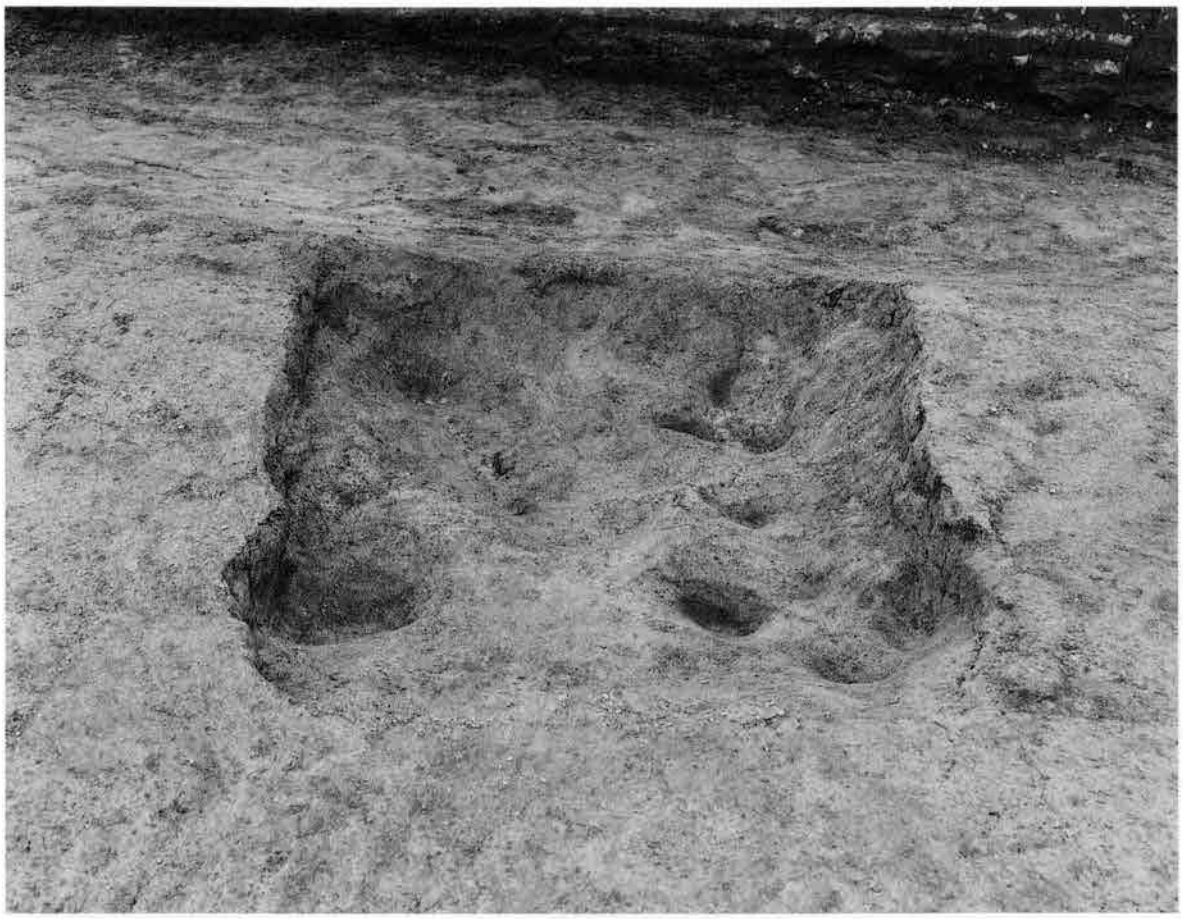
2SD1028（南から）

2SE1035（北から）



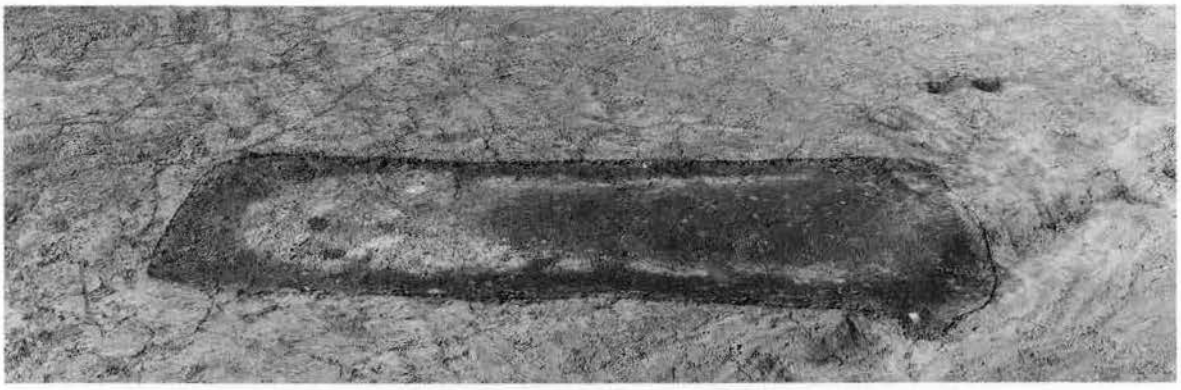
2SK1002（南西から）

2SK1003（北西から）



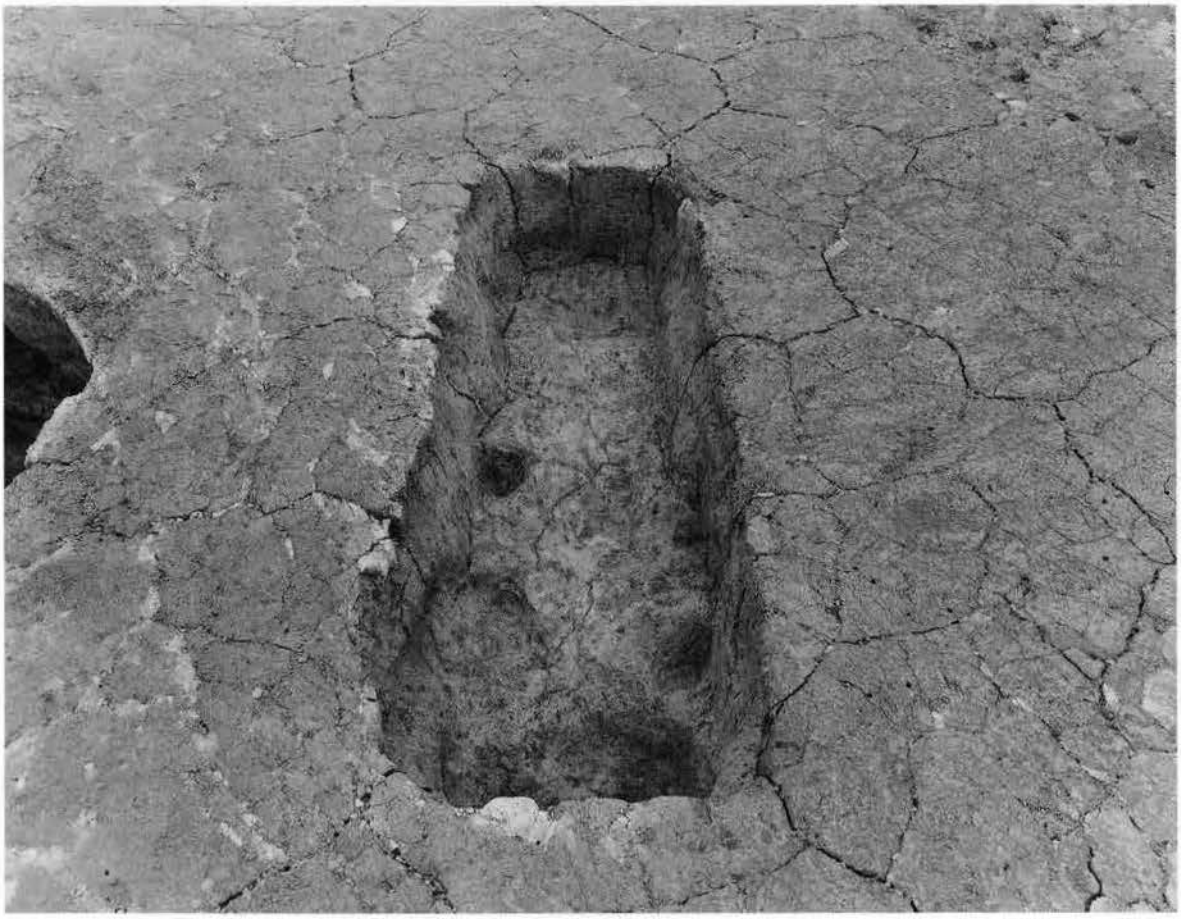
2SK1004（東から）

2SK1005（北西から）

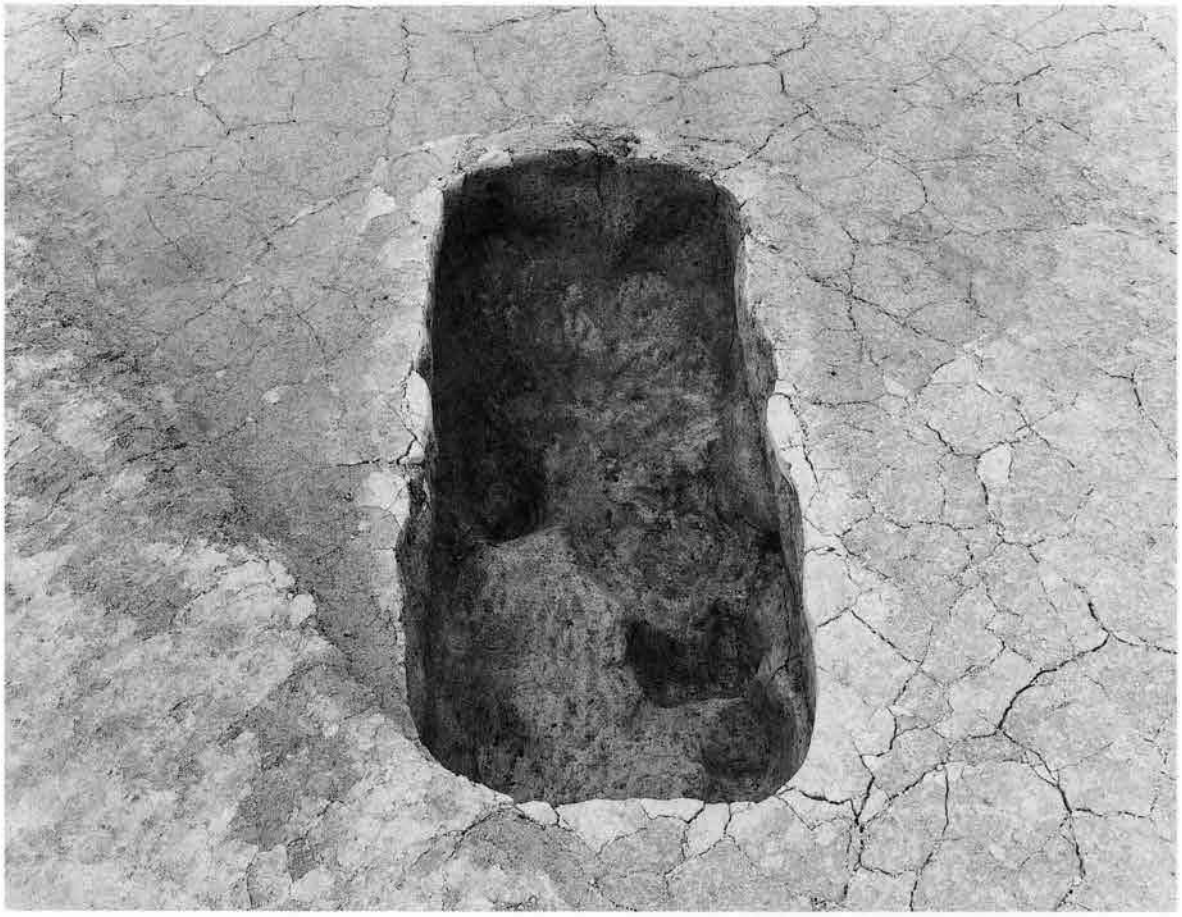


2SK1006検出状況（南東から）

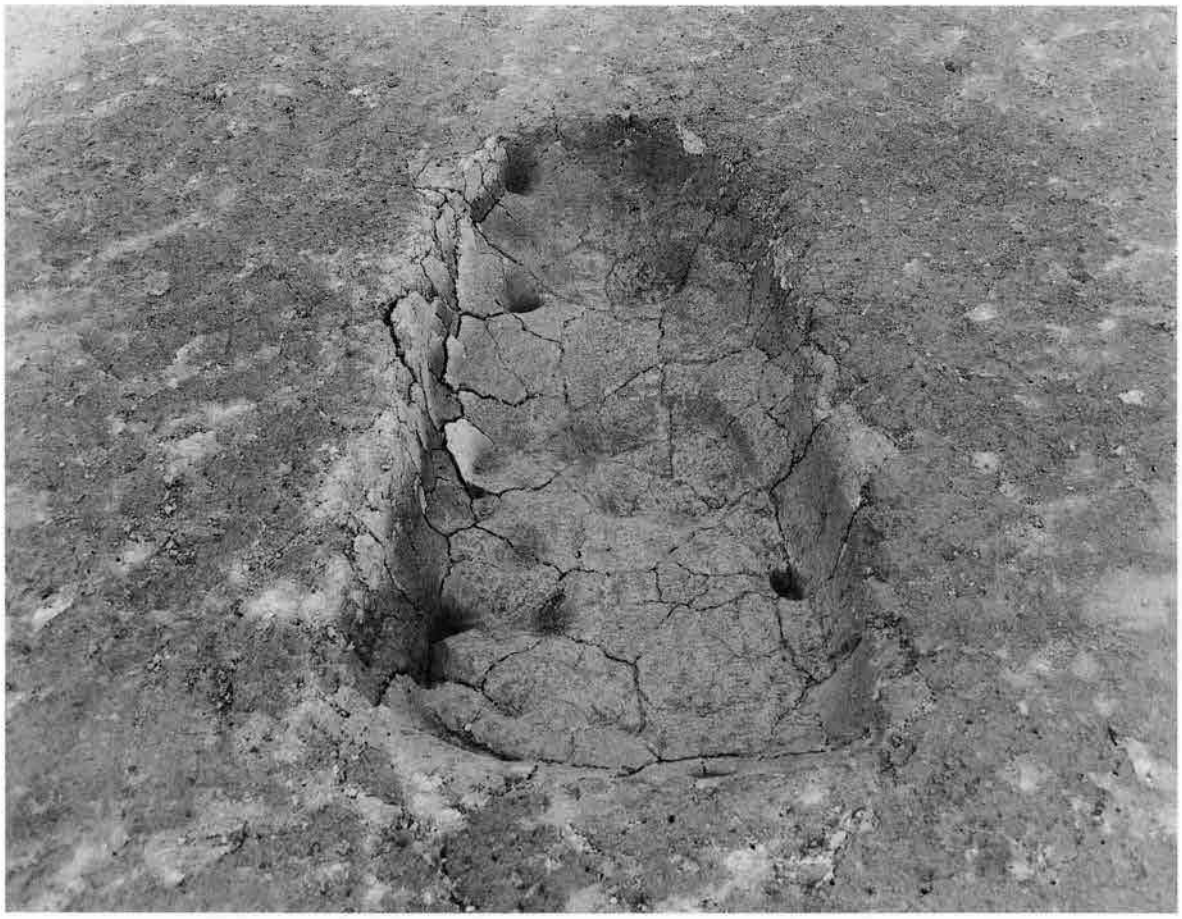
2SK1006土層断面状況（北西から）



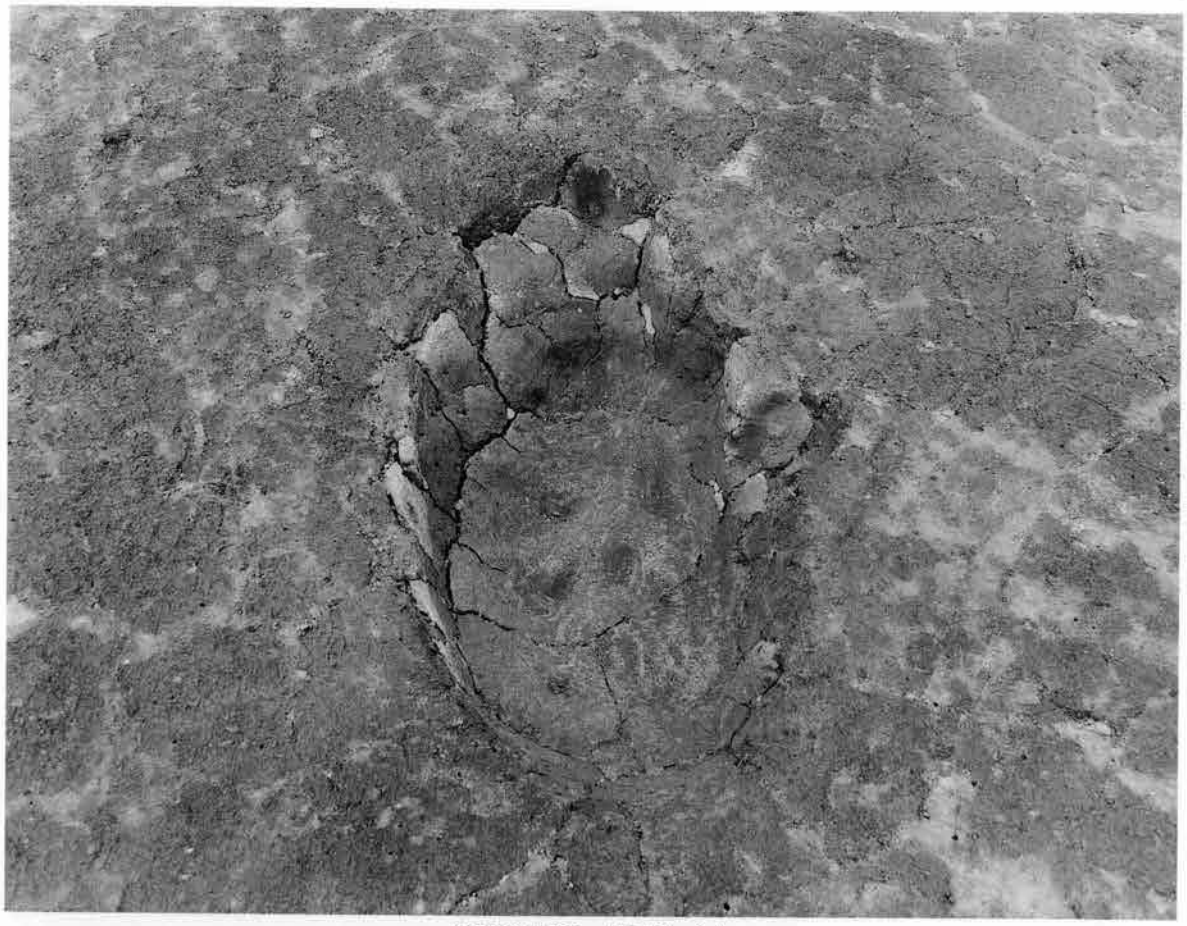
2SK1006（北東から）



2SK1007（北東から）

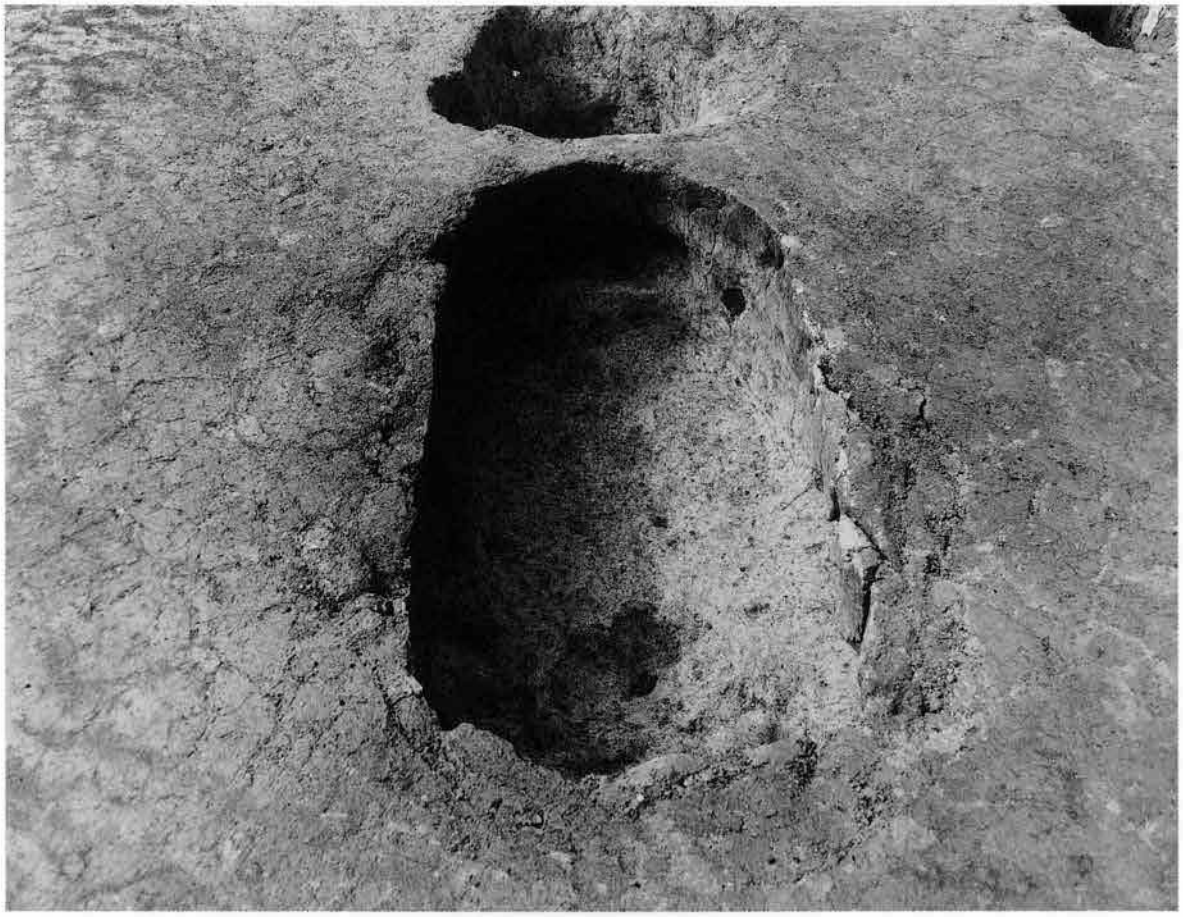


2SK1008（北西から）

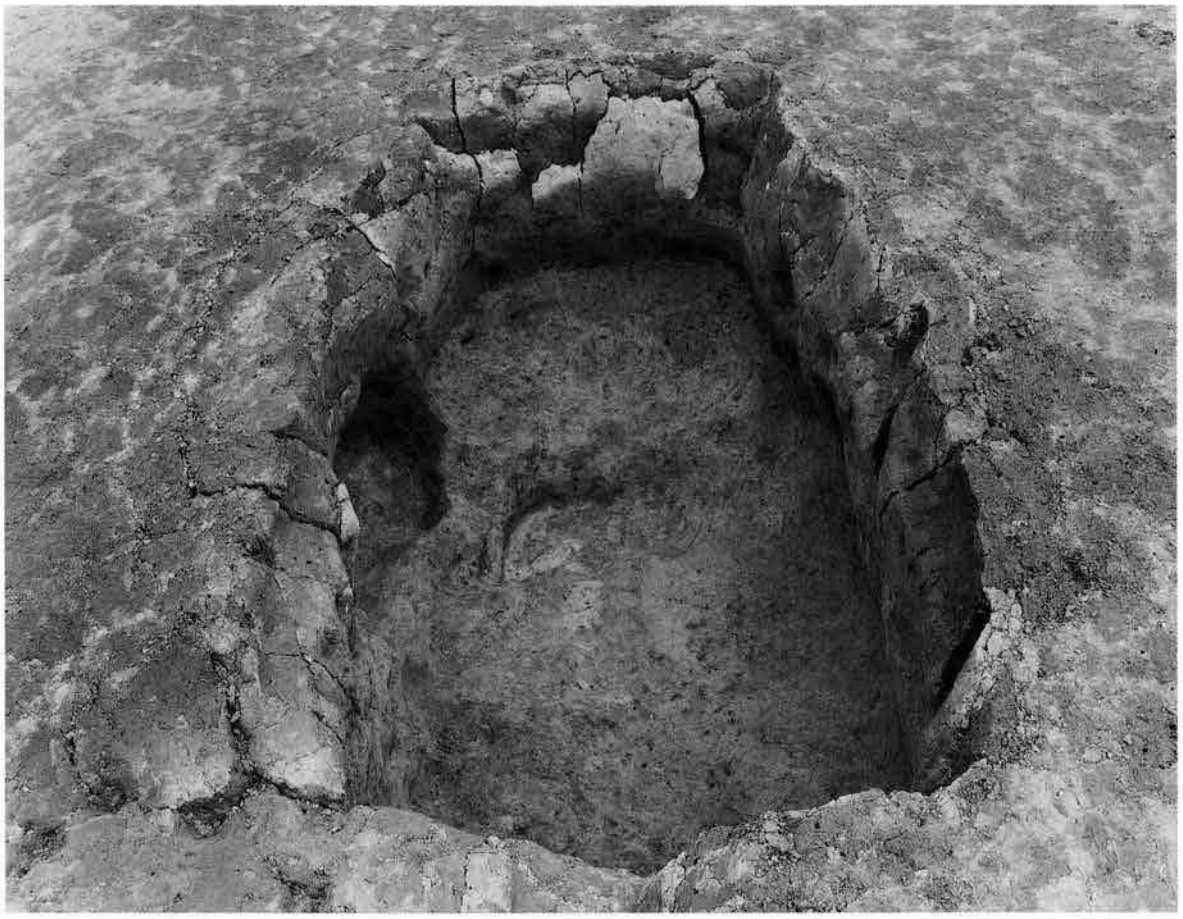


2SK1009（南西から）

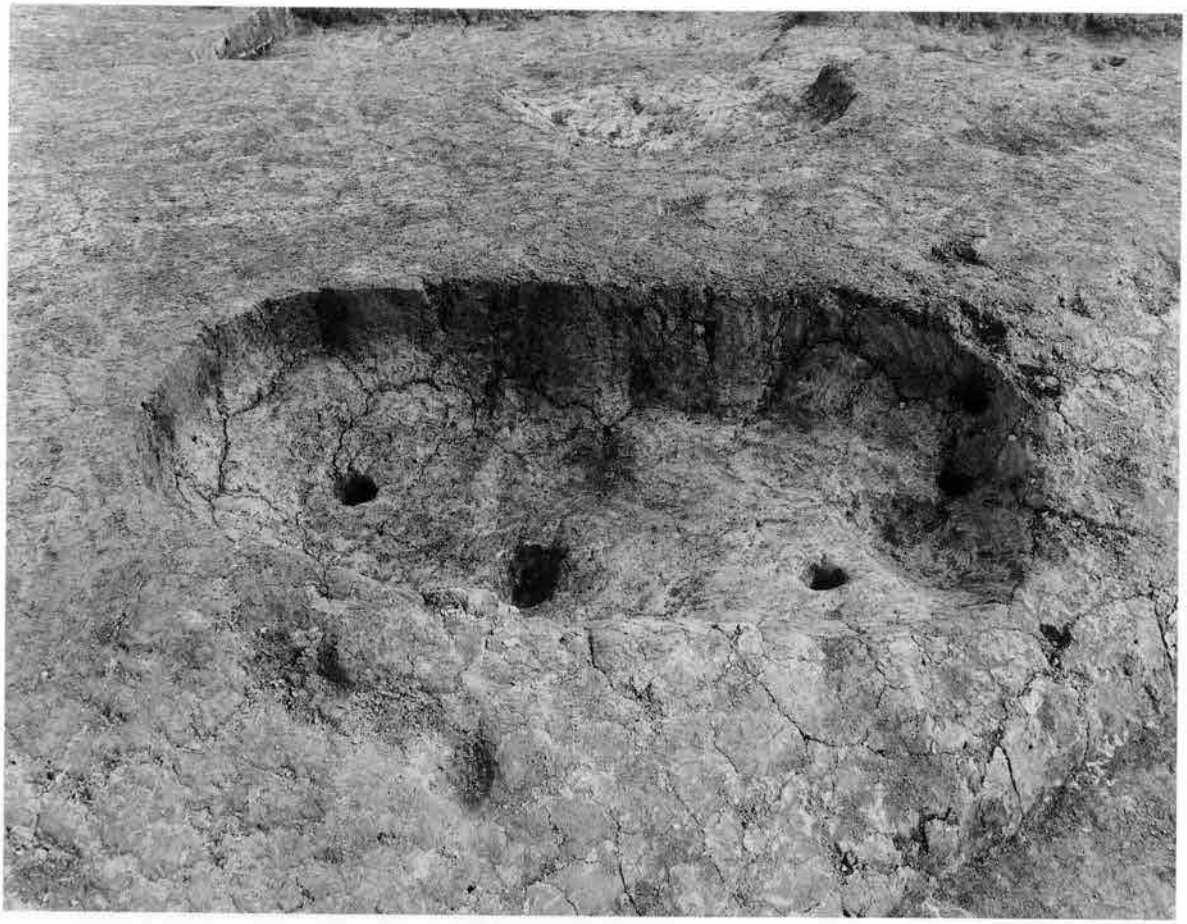
2SK1010（東から）



2SK1011（北東から）

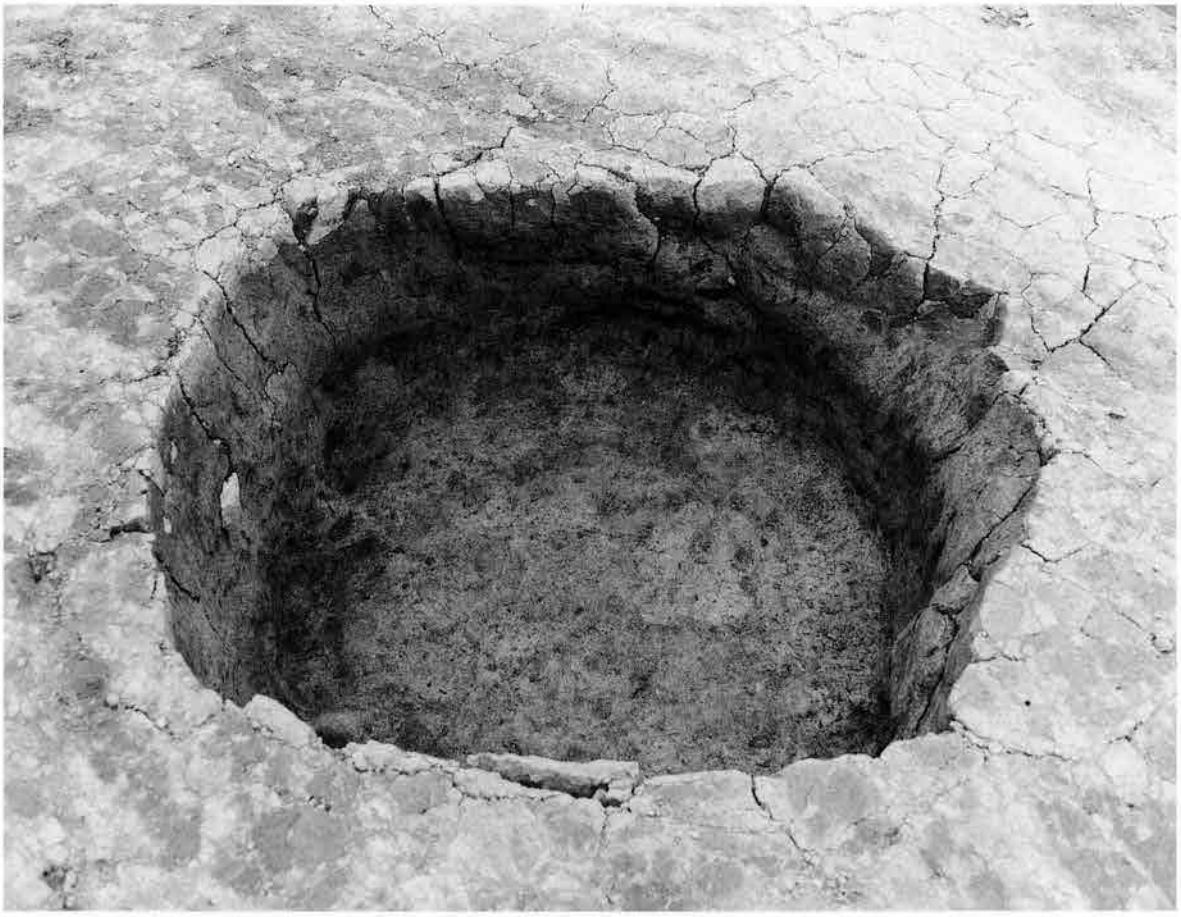


2SK1012（南西から）



2SK1014（南東から）

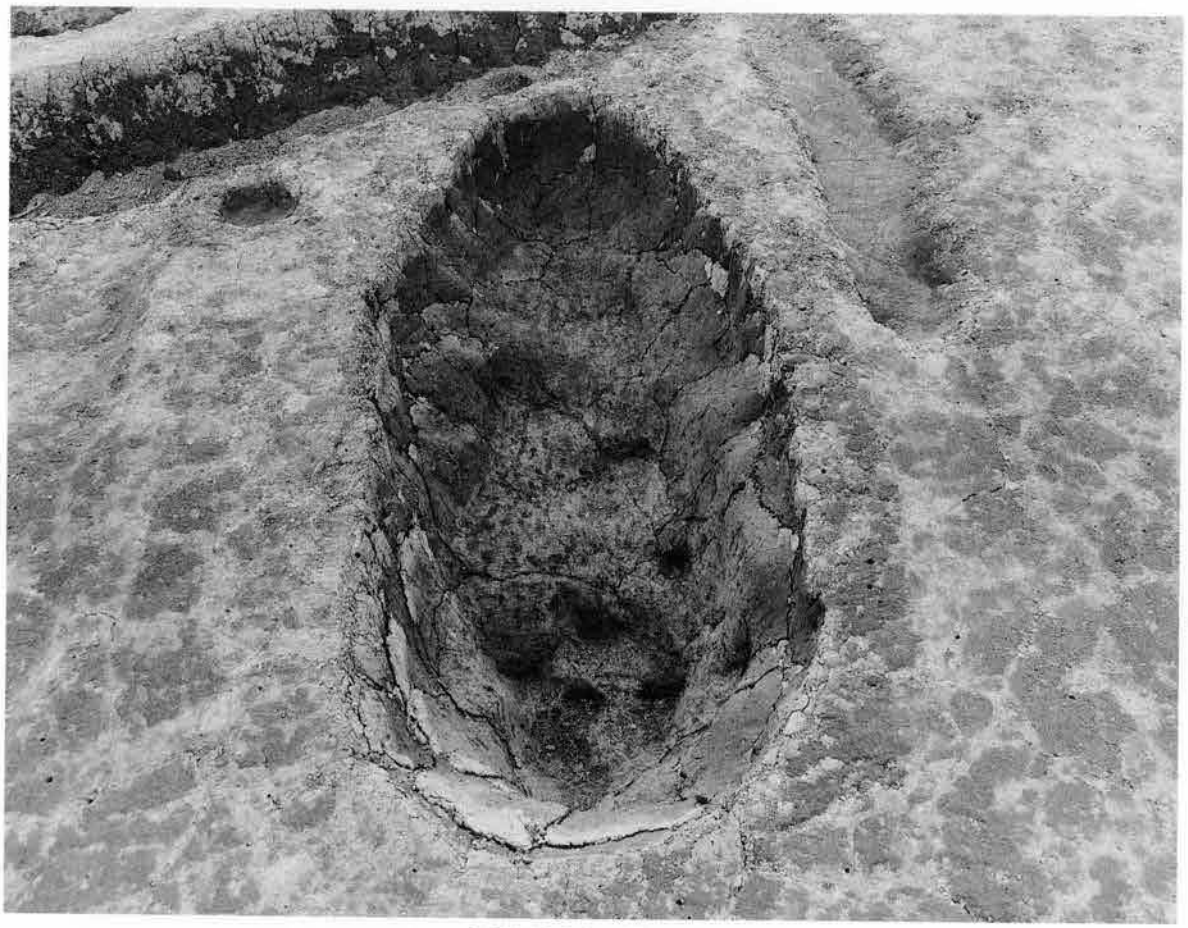
2SK1015（北西から）



2SK1019（北西から）

2SK1021（北東から）

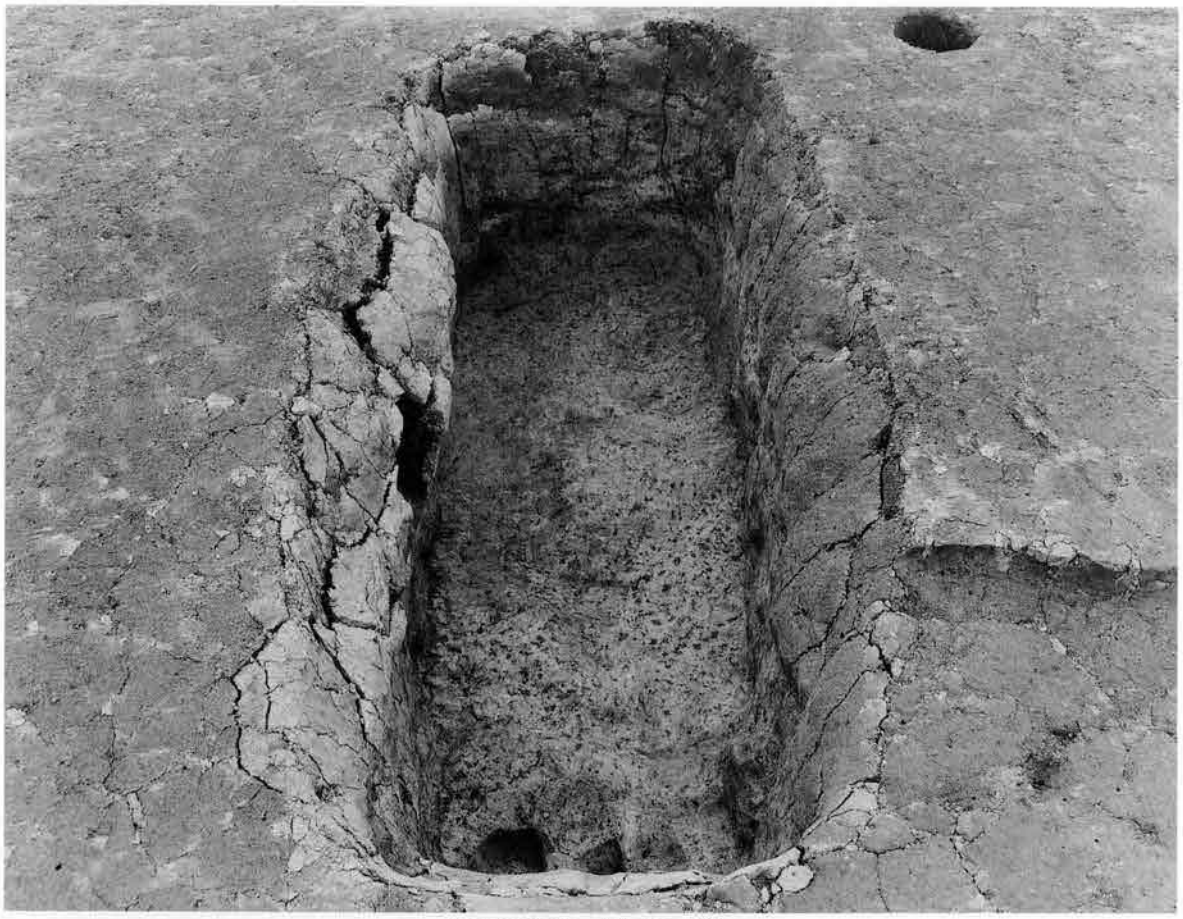
2SK1024（南東から）



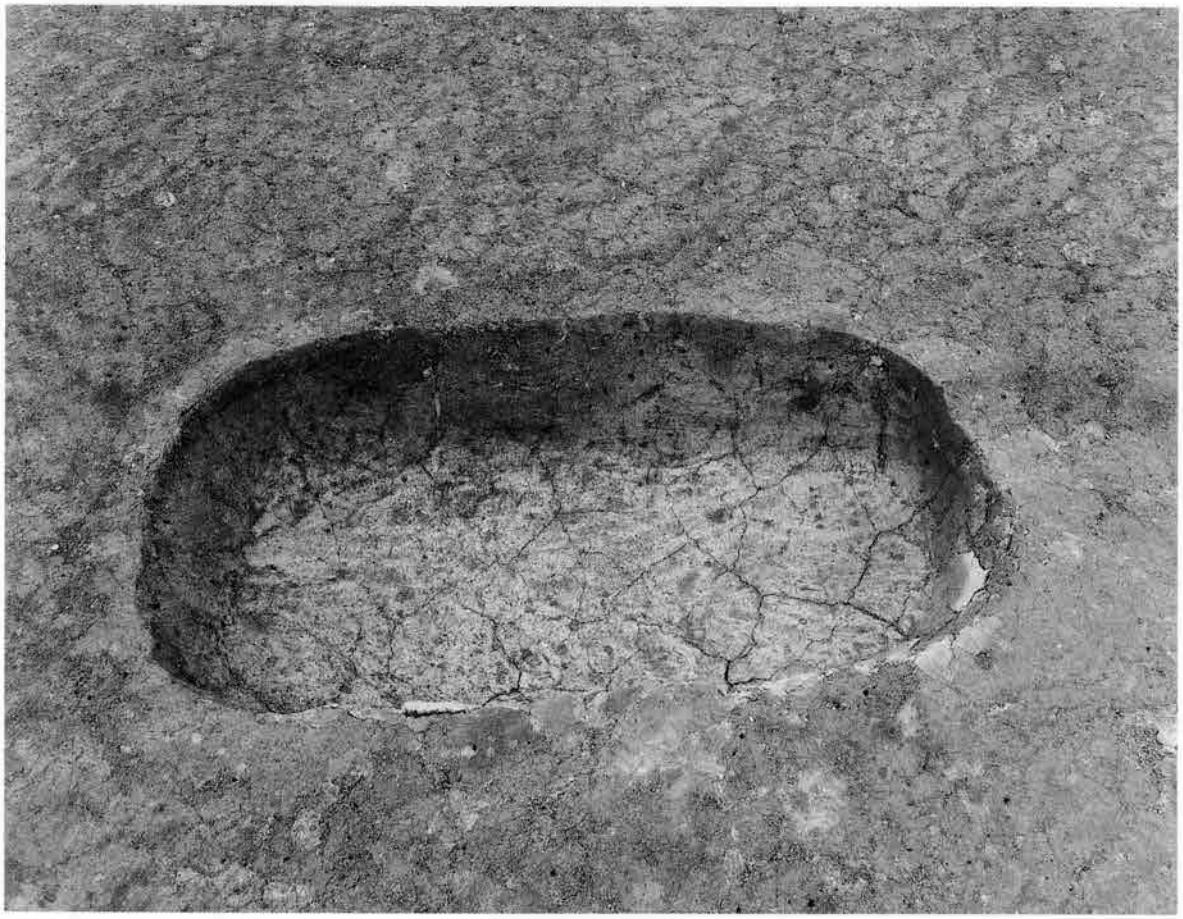
2SK1026（北から）

2SK1033（南西から）

2SK1038（南東から）



2SK1039（北西から）

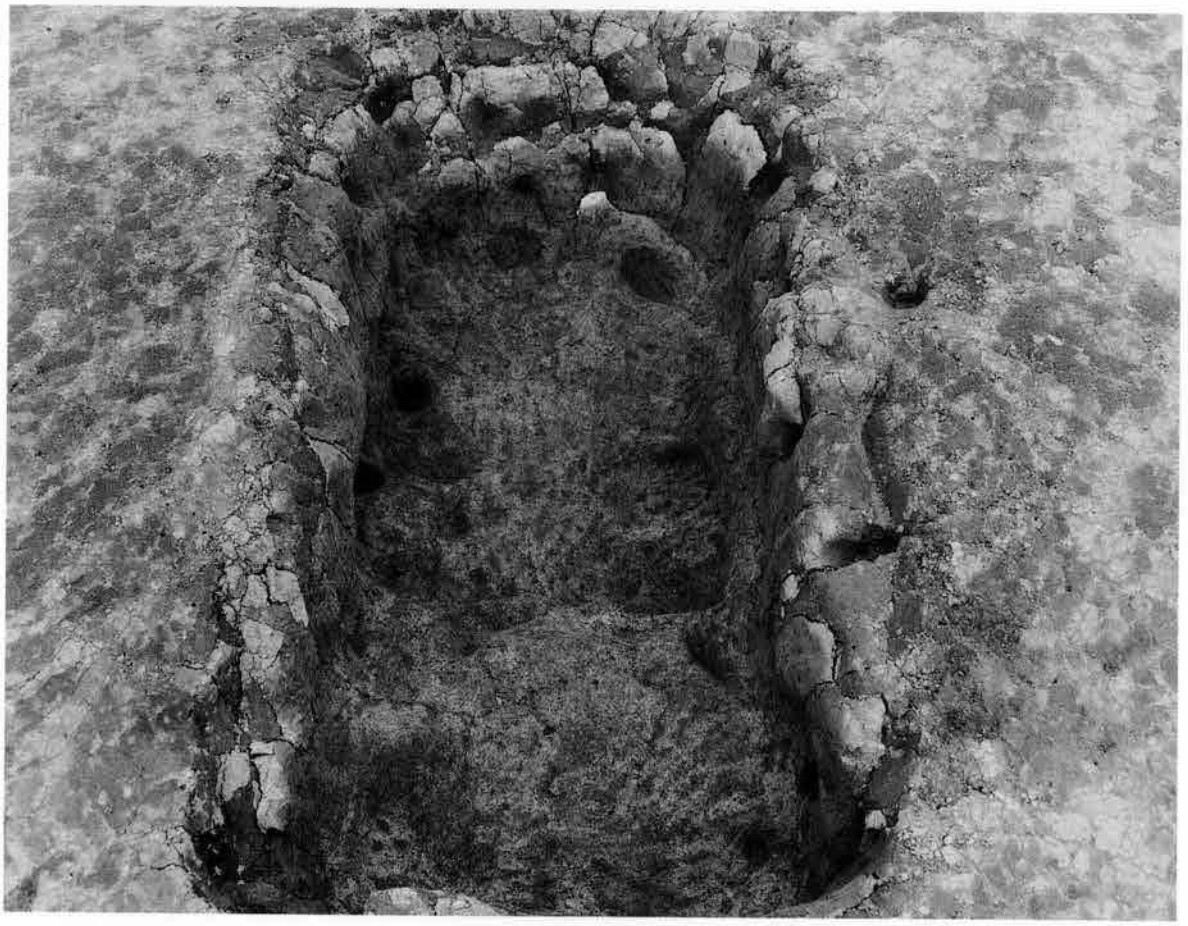


2SK1045（北から）

2SK1046（北東から）

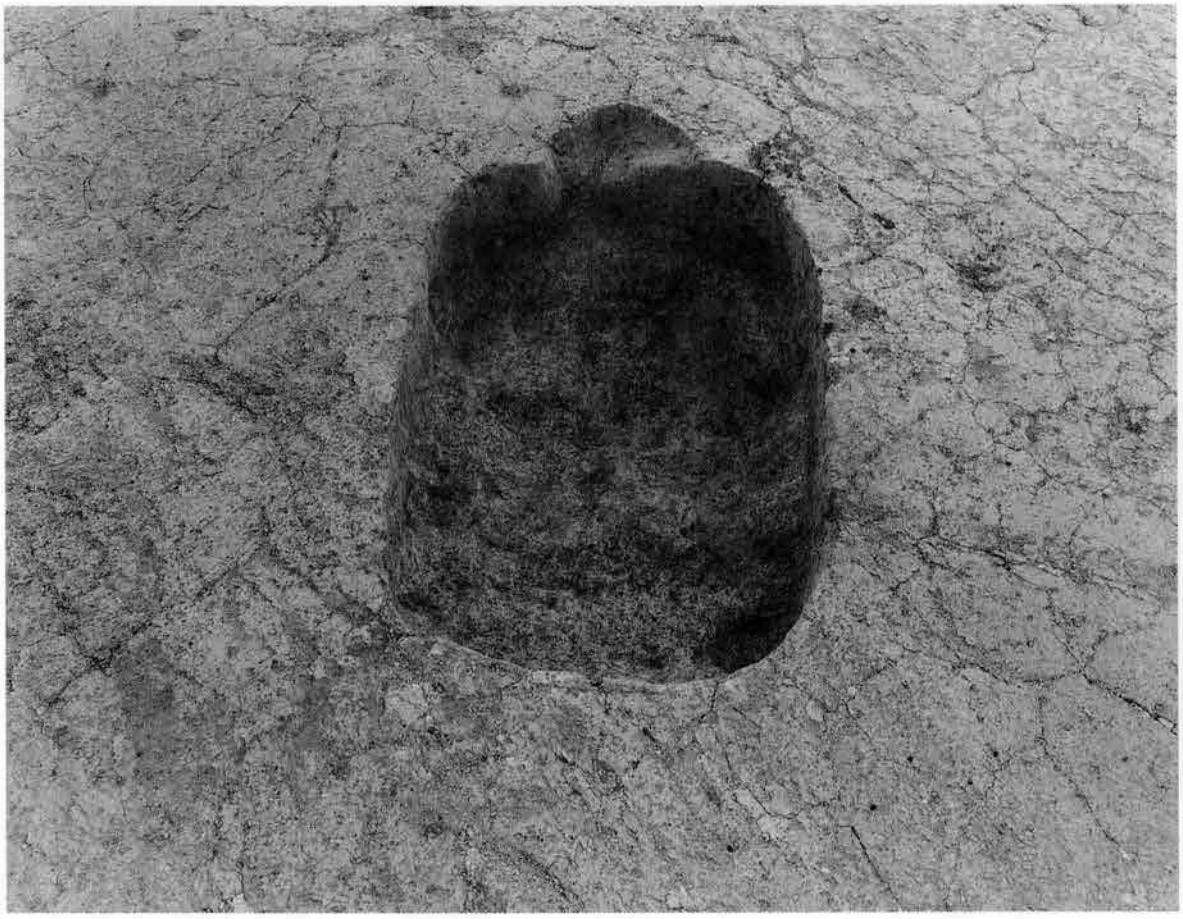
2SK1047（東から）

2SK1050（北東から）

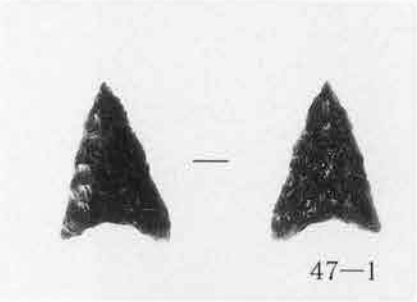


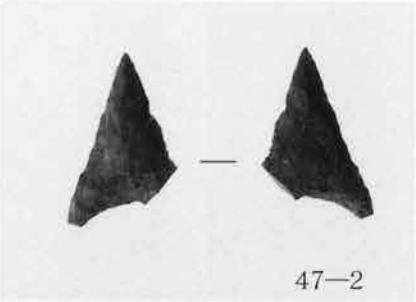
2SK1051（南西から）

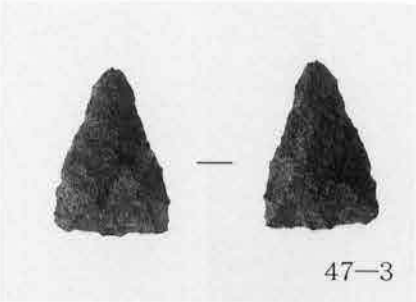
2SK1053（南西から）

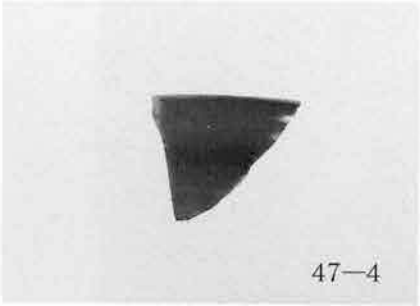


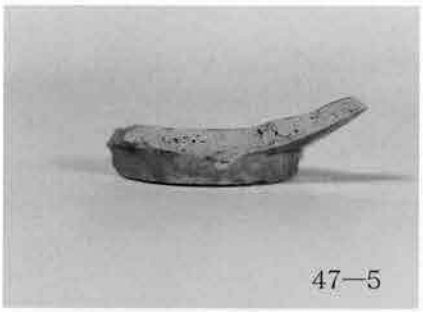
2SK1065（北東から）


47—1

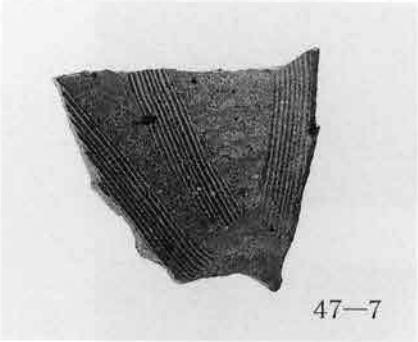

47—2


47—3

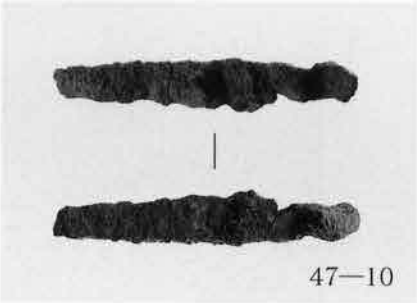

47—4

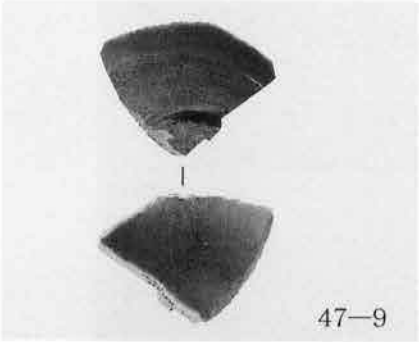

47—5

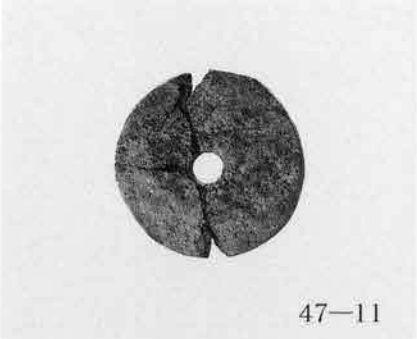
47—6


47—7

47—8


47—10

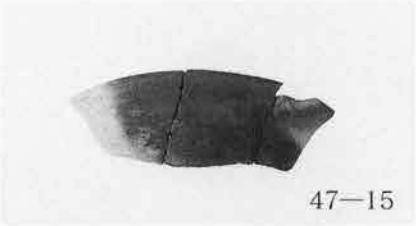

47—9

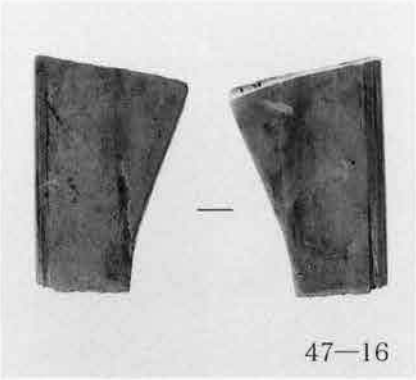

47—11

47—12

47—13

47—14


47—15

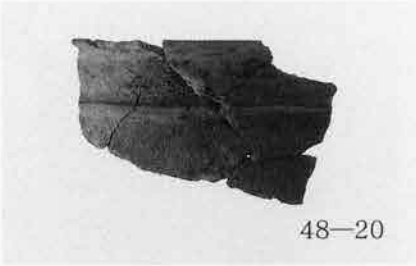

47—16

48—19

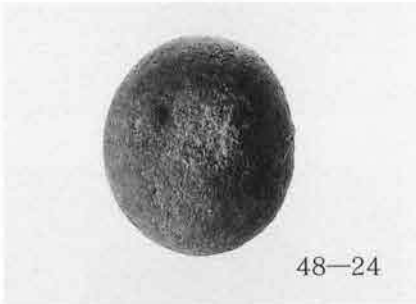
48—26

48—28

48—17


48—20

48—22


48—24

48—25

48—18

48—21

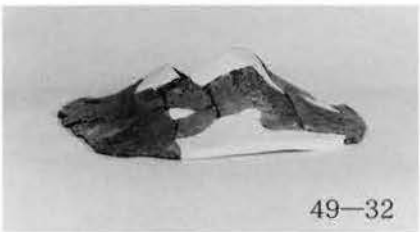
48—23

48—27

48—29

48—30

48—31


49—32

49—33

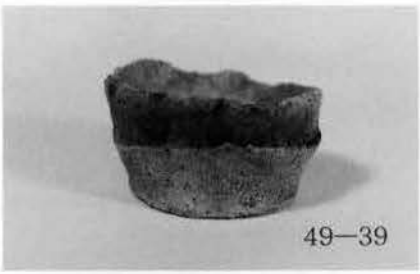
49—34

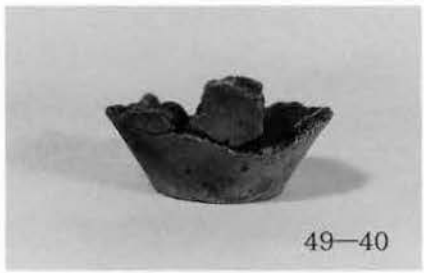
49—35

49—36

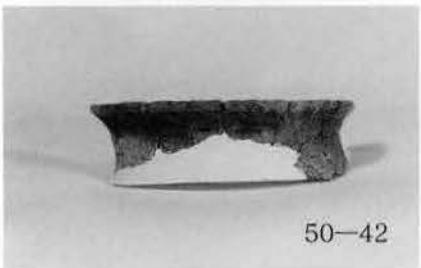
49—37

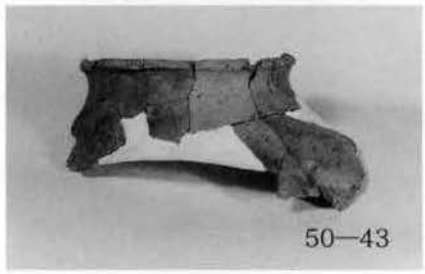
49—38


49—39

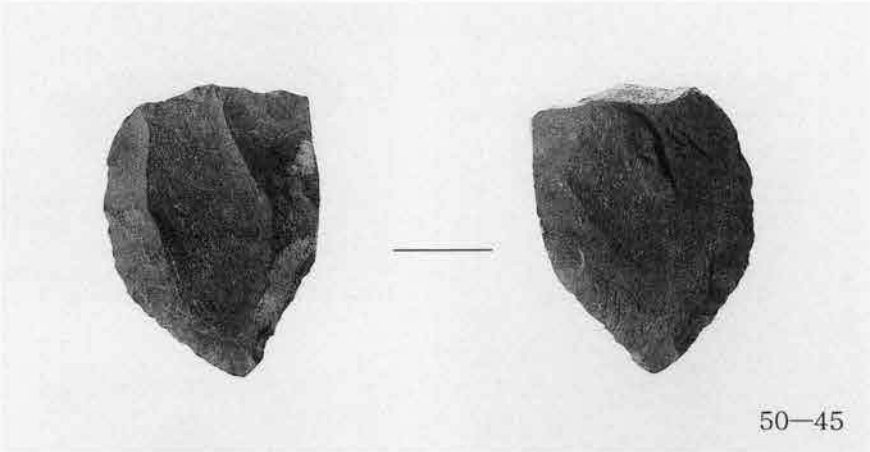

49—40

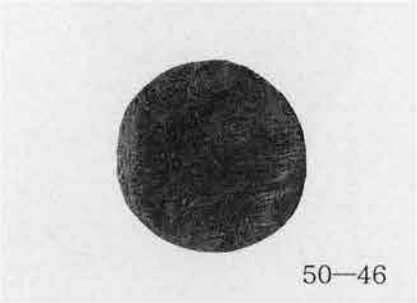
49—41


50—42


50—43

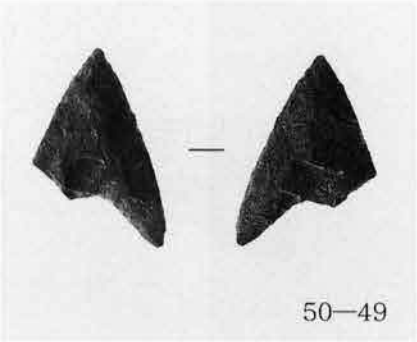
50—44


50—45

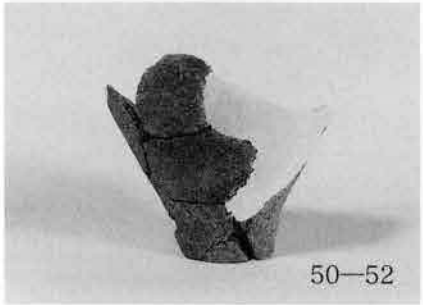

50—46

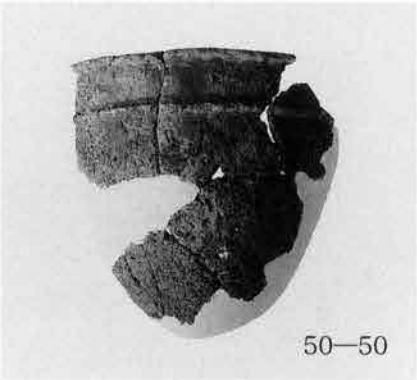
50—47

50—48

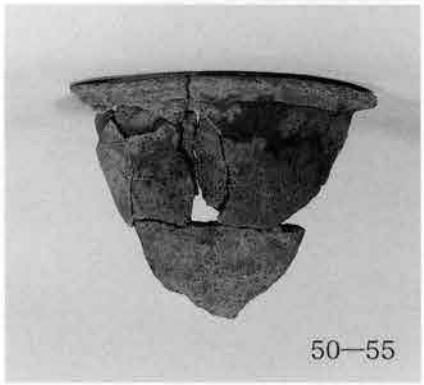

50—49

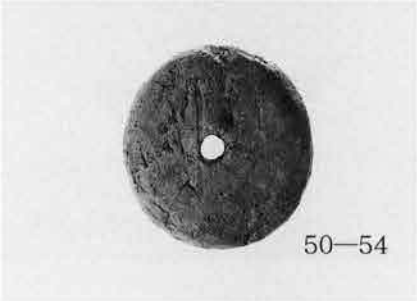
50—51


50—52


50—50

50—53


50—55


50—54

51—56

51—57

51—58

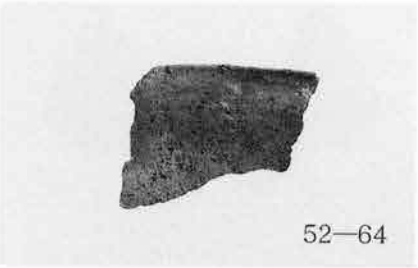
51—59

51—60

51—61

51—62

52—63


52—64

52—65

52—66

52—67

52—69

52—68

52—70

52—71

52—72

52—73

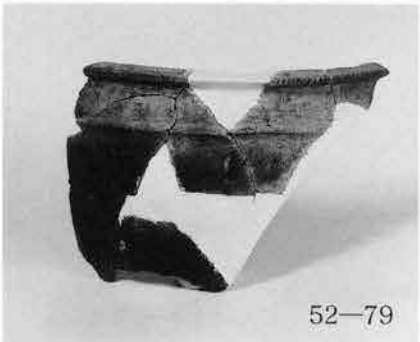
52—74

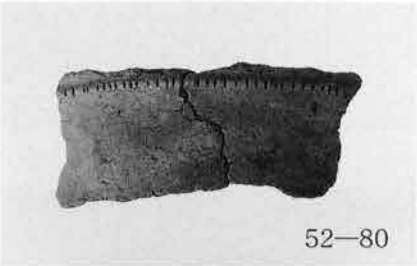
52—75

52—76

52—77

52—78

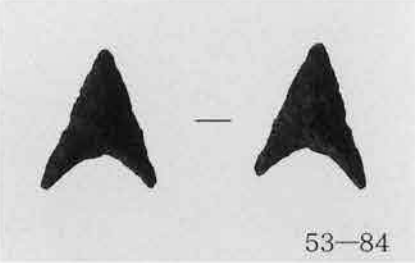

52—79

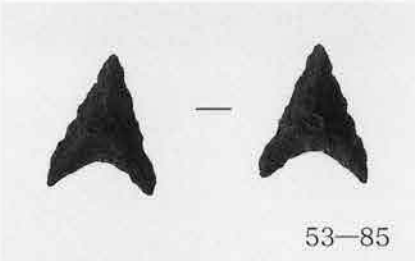

52—80

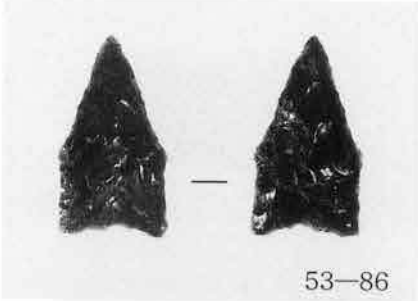
52—81

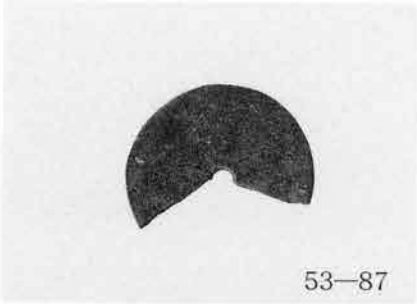
53—82

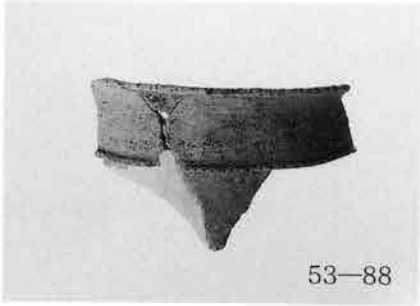
53—83


53—84


53—85

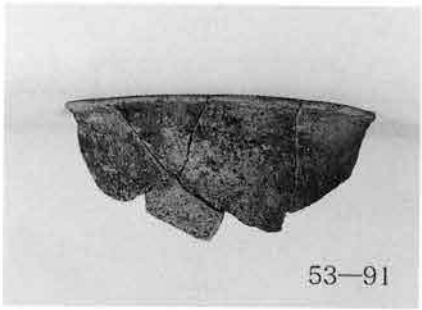

53—86

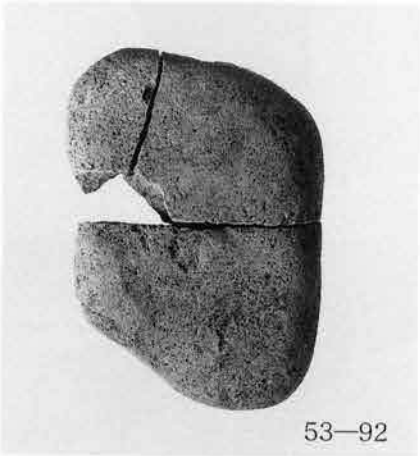

53—87


53—88

53—89

53—90


53—91

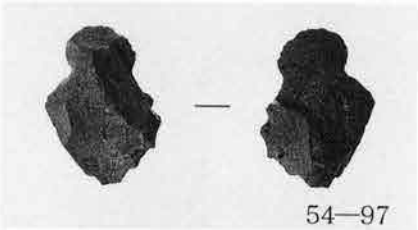

53—92

54—93

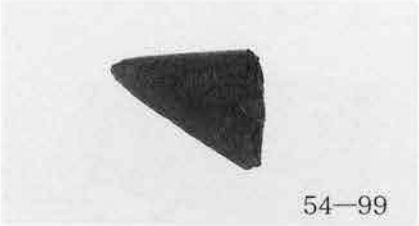
54—94

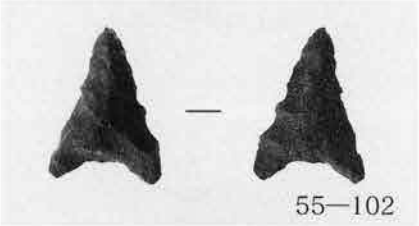
54—95

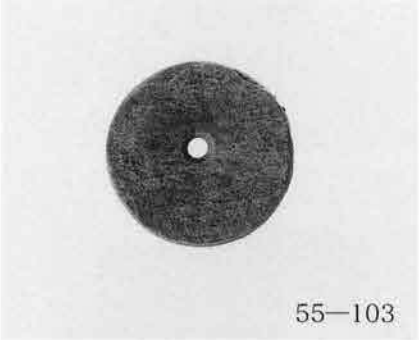
54—96

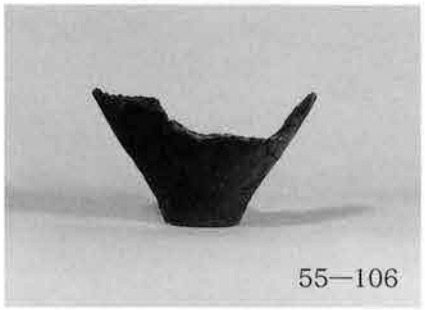

54—97

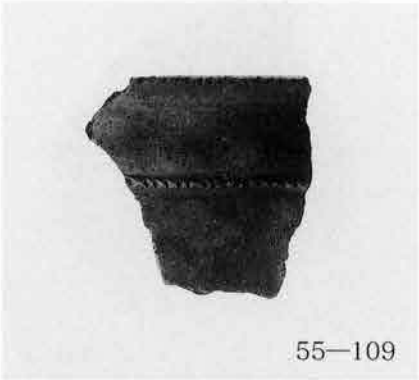
54—98


54—99


55—102


55—103


55—106


55—109

55—110

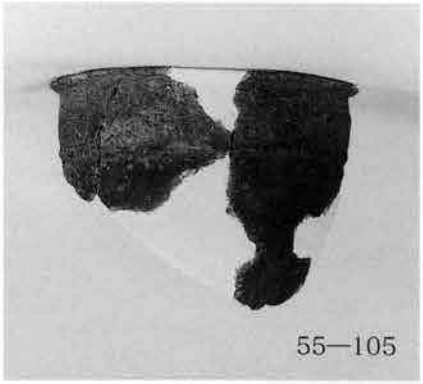
55—100

55—104

55—107

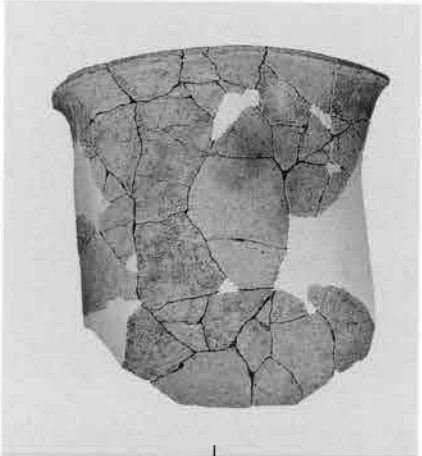
56—111

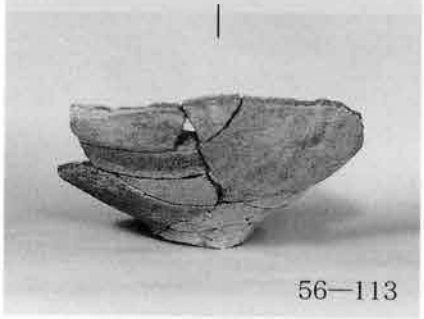
55—101


55—105

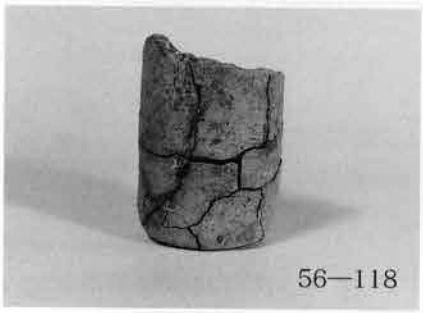
55—108

56—112





56—113



56—118

57—120

57—122

56—114

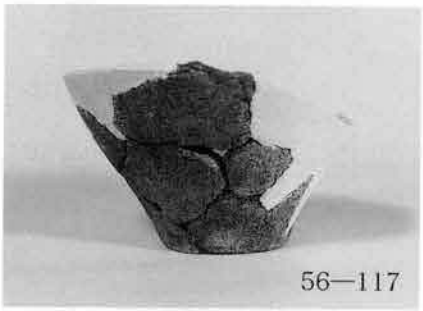
56—116

57—119

57—123

57—125

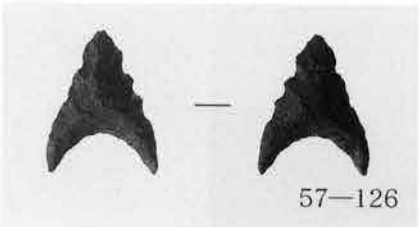
56—115



56—117

57—121

57—124

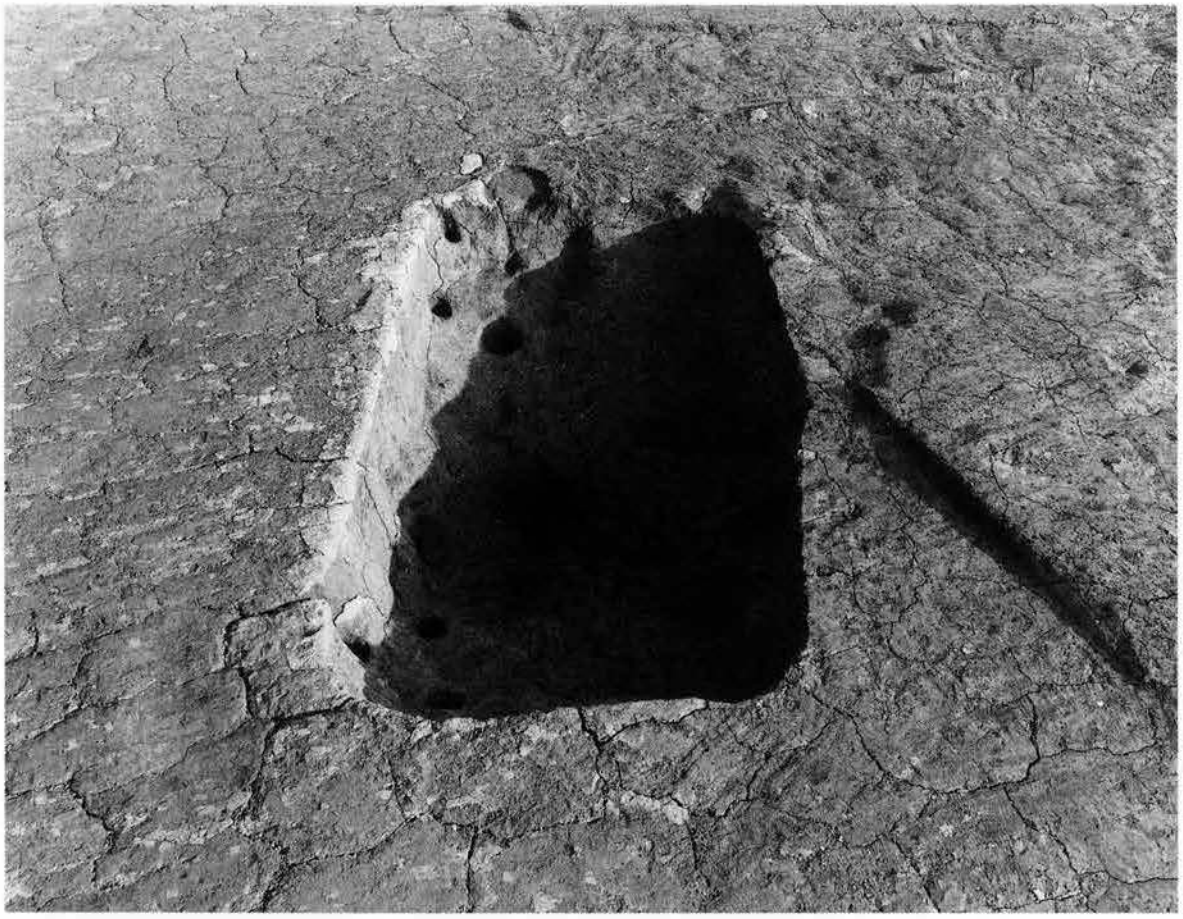


57—126

東側調査区遠景（西から）

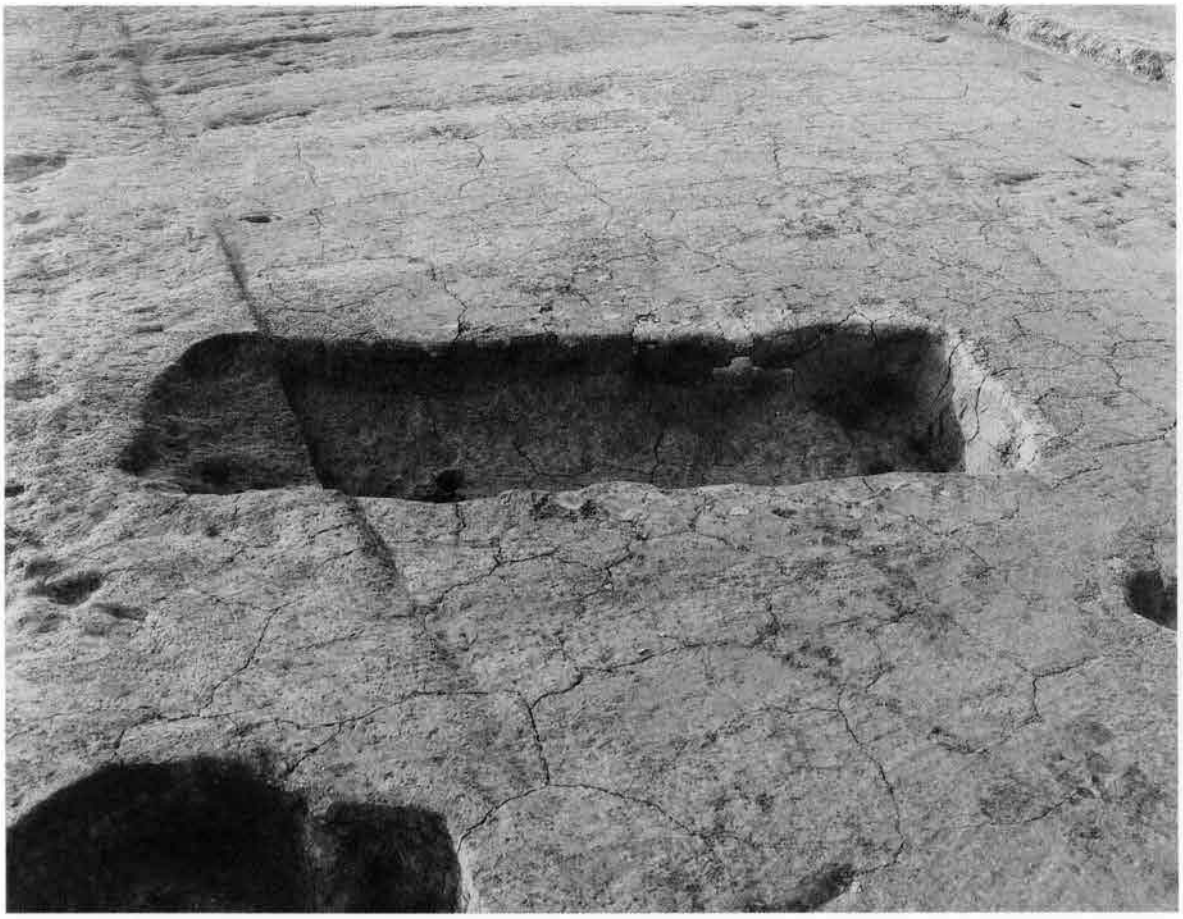
西側調査区（西から）

1SK200（南東から）



1SK202（西から）

1SK205（北東から）



1SK208（東から）

1SK210（東から）

1SK213（西から）

1SK219（南から）

1SK222（東から）

1SK225（東から）

1SK242（南から）

1SK247（東から）

1SK250（西から）

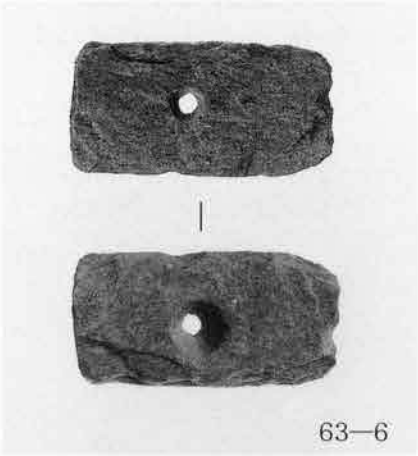
1SK251（東から）

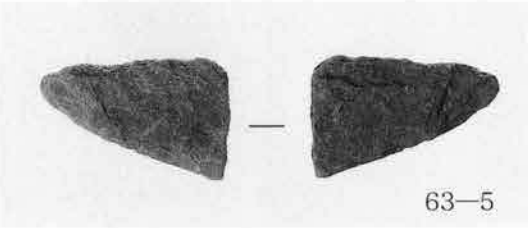
1SK252（東から）

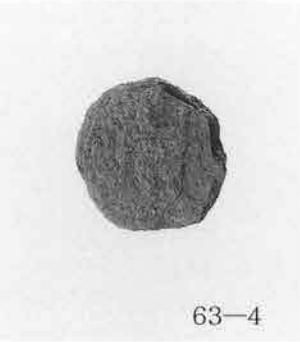
63—1

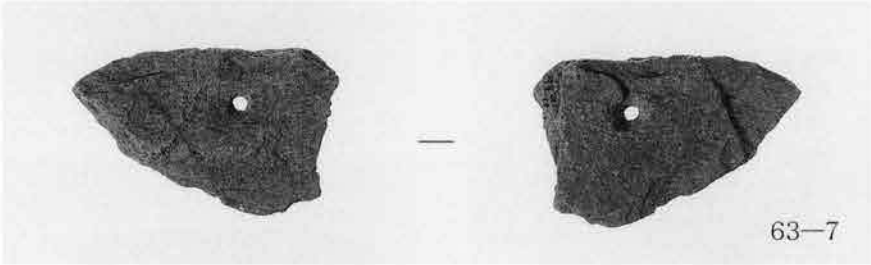
63—2

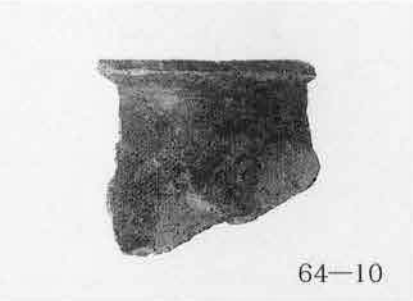
63—3

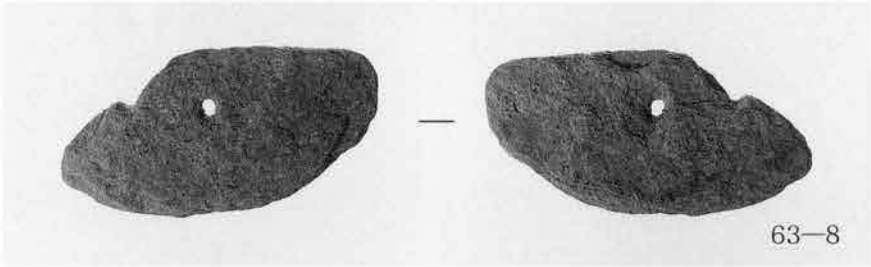

63—6


63—5

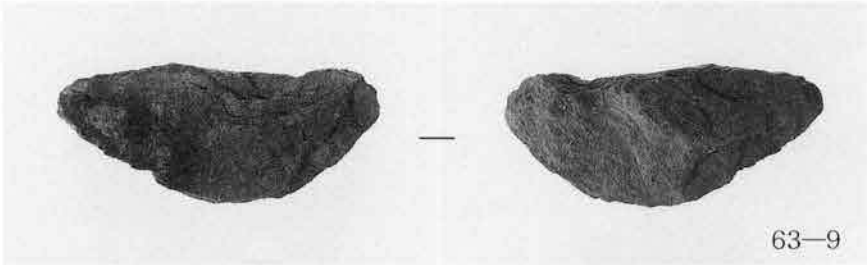

63—4


63—7

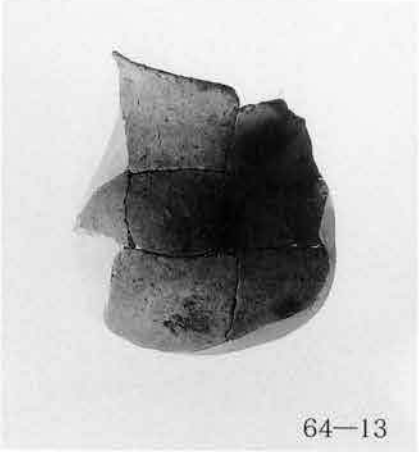

64—10


63—8

64—11


63—9

64—12


64—13

64—14

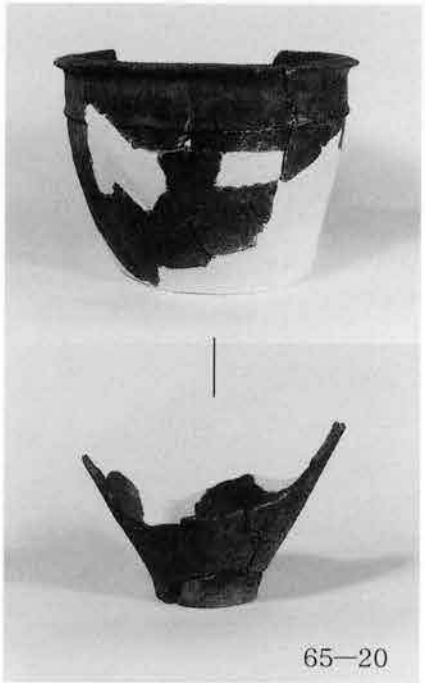
64—15

64—16

64—17

64—18

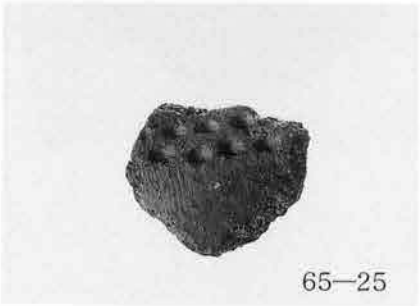
64—19


65—20

65—22

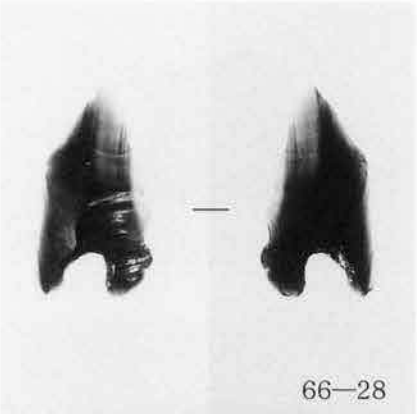
65—21

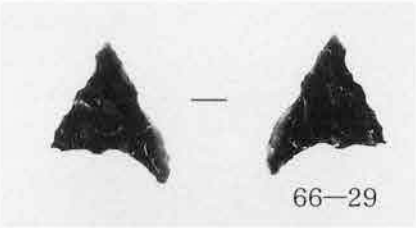
65—23


65—25

65—24

65—27

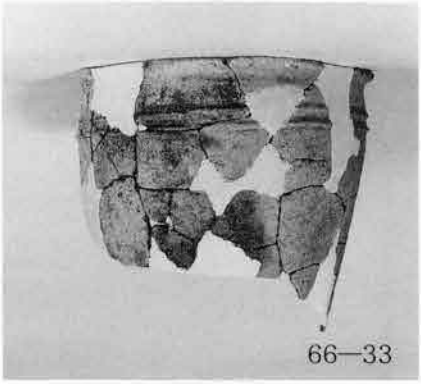

66—28


66—29

66—30

66—31

66—32


66—33

66—34

66—35

66—36

67—37

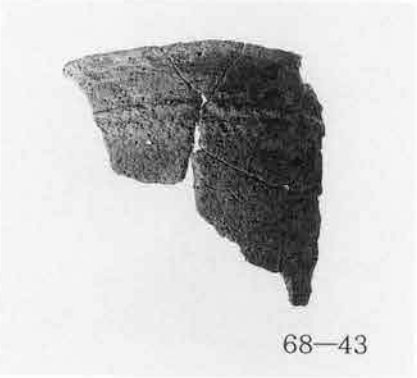
67—38

67—39

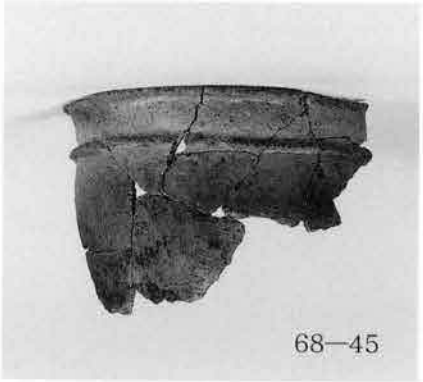
67—40

67—41

67—42


68—43

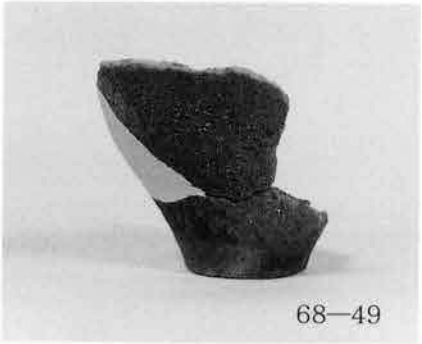
68—44


68—45

68—46

68—48

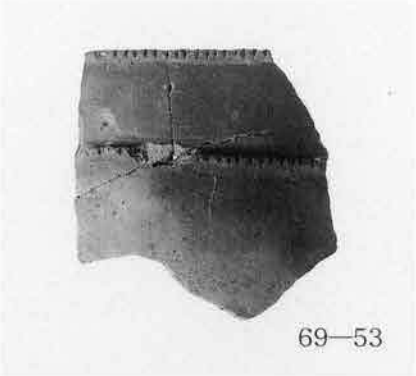
68—47


68—49

68—50

68—51

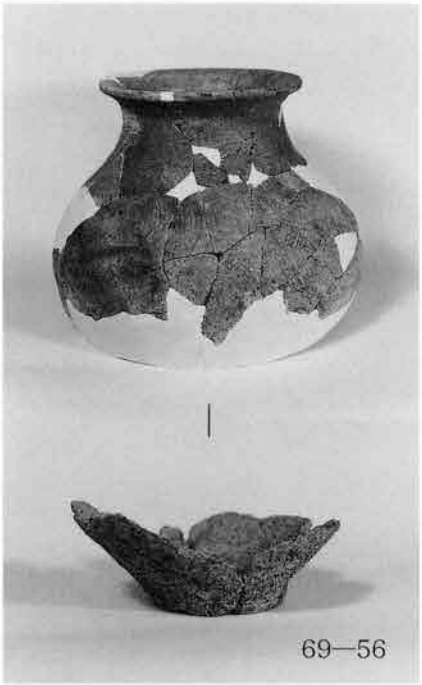
69—52



69—53

69—54

69—55

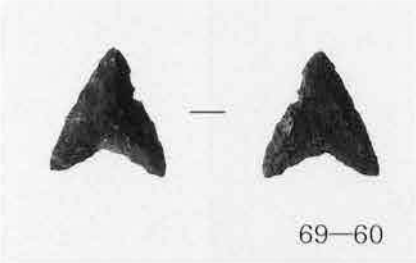


69—56

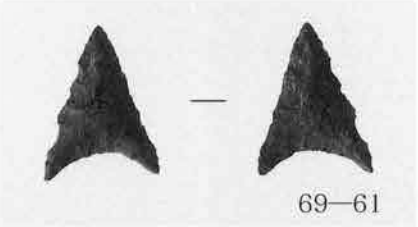
69—57

69—58

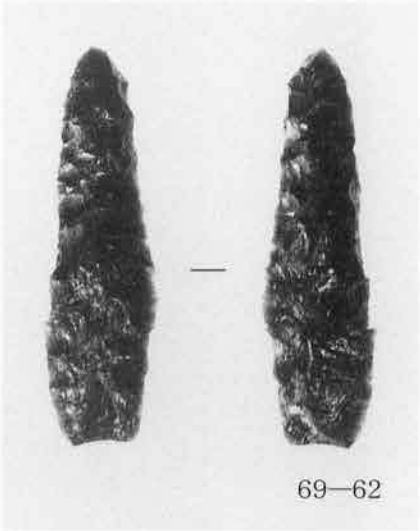
69—59



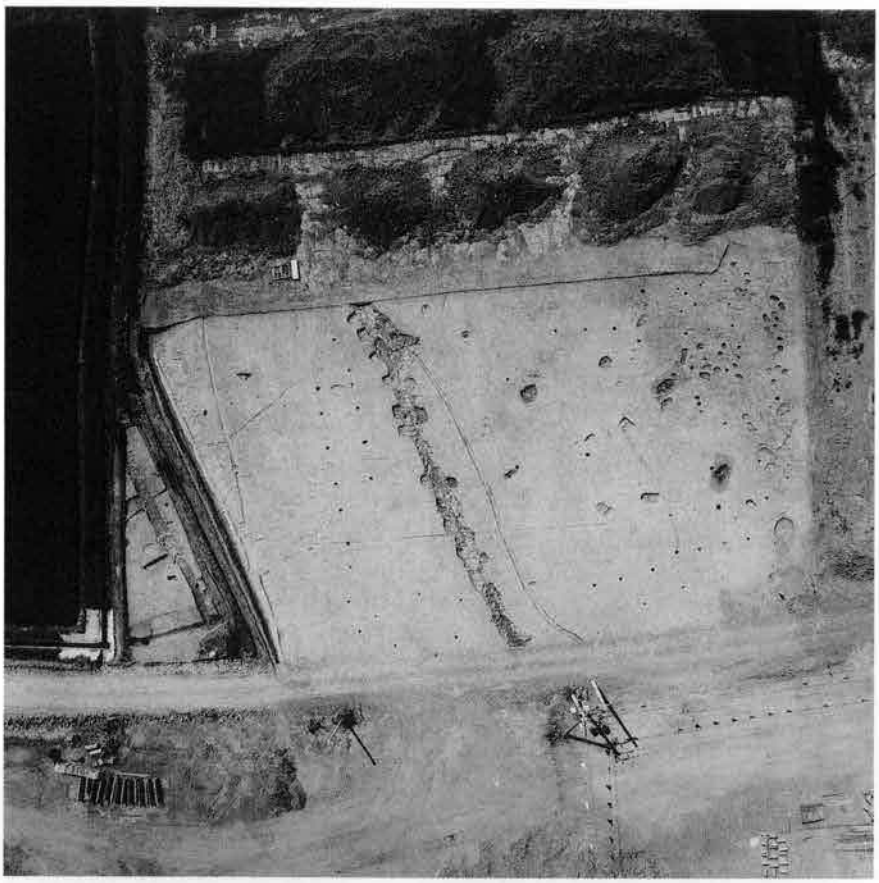
69—60



69—61



69—62

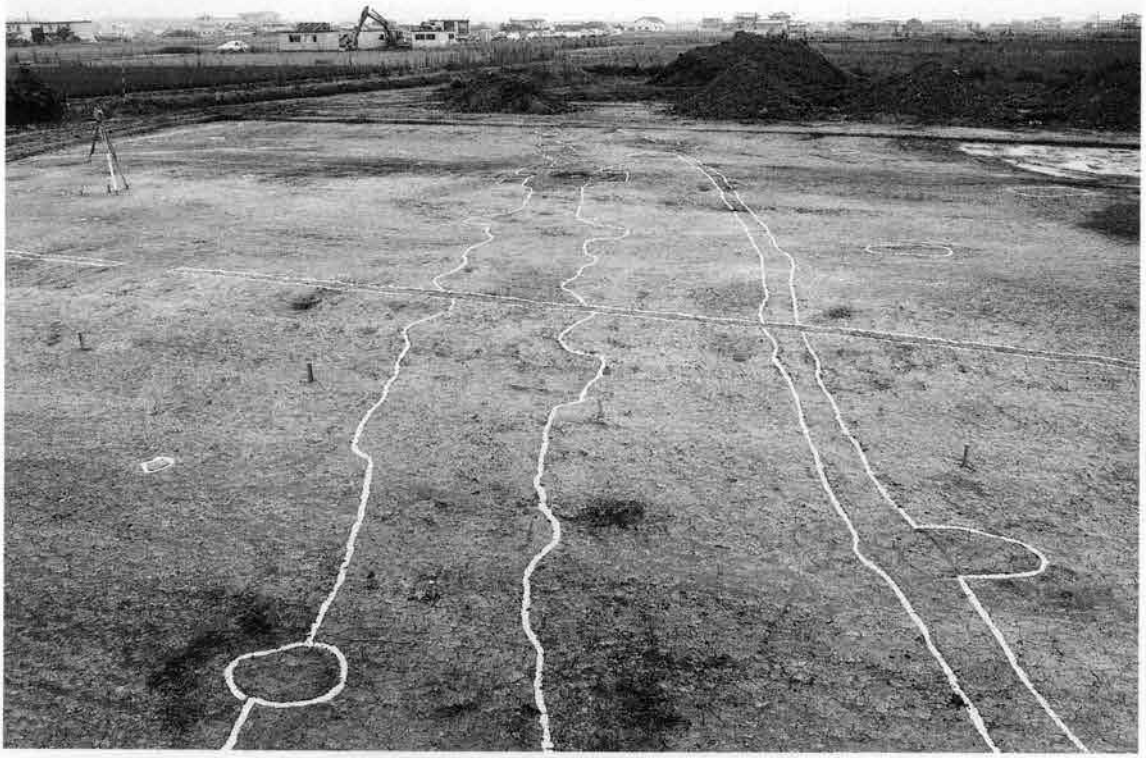


調査区全景（上が南）

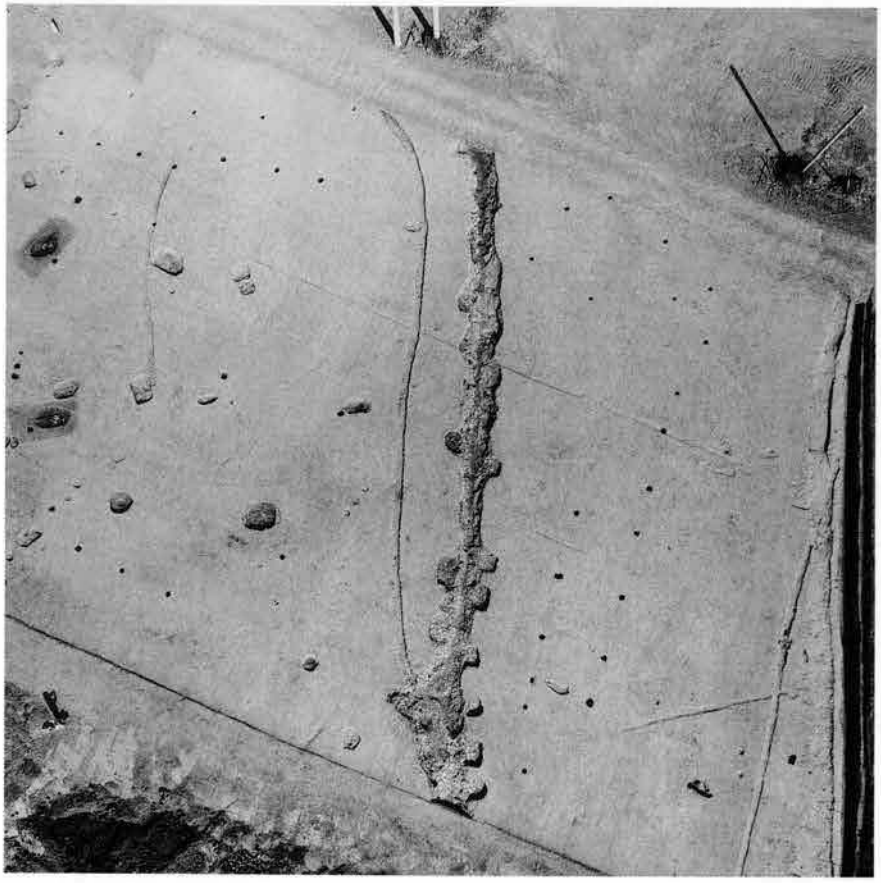
調査区全景（南から）

調査区全景（西から）

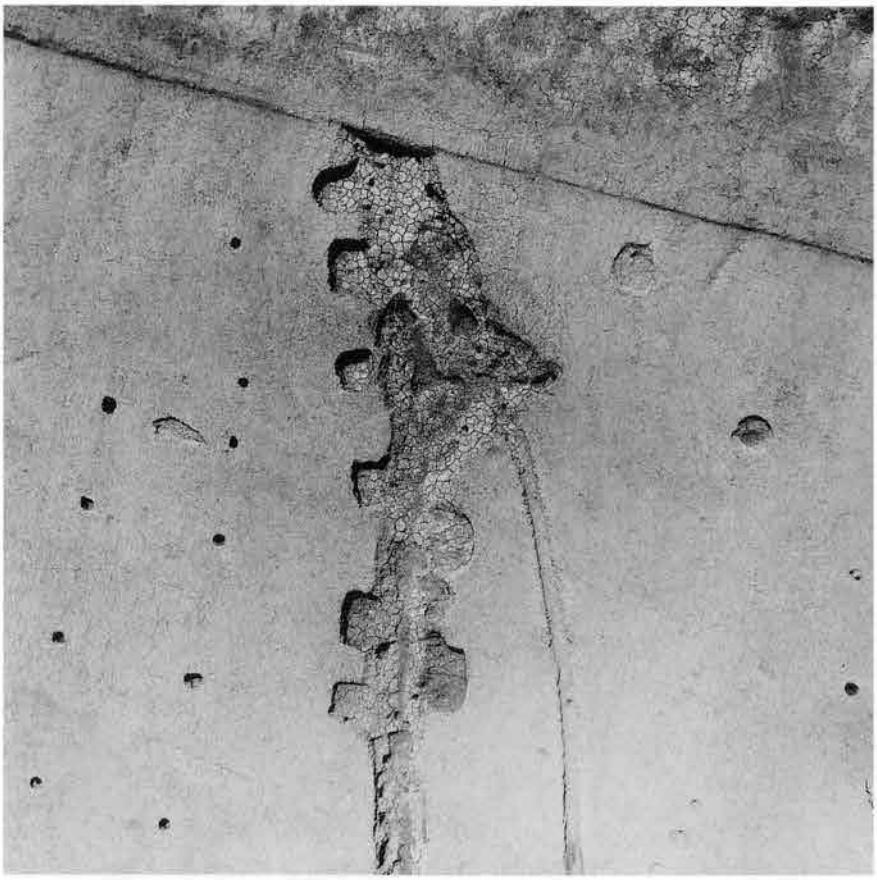
調査区全景（北から）



1SD001・1SD005検出状況（北から）



1SD001・1SD005
完掘（上が北北西）



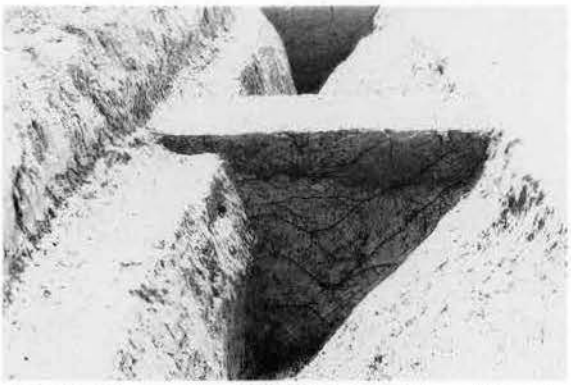
1SD001・1SD005
完掘（上が南南西）

1SD001・1SD005
完掘（北北西から）

1SD005（c-c'）土層断面（北から）

1SD005（f - f'）土層断面（北から）

1SD020（b-b'）土層断面（分層前・北から）

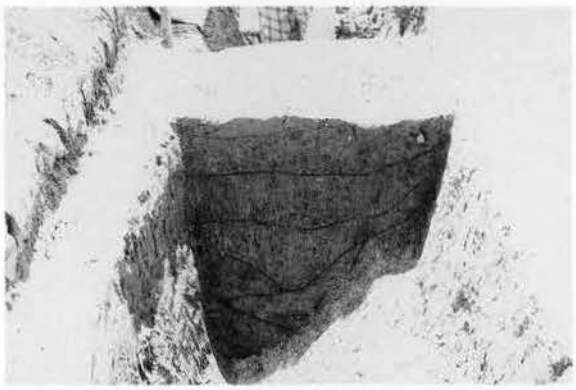


1SD020（b-b'）土層断面（分層後・北から）

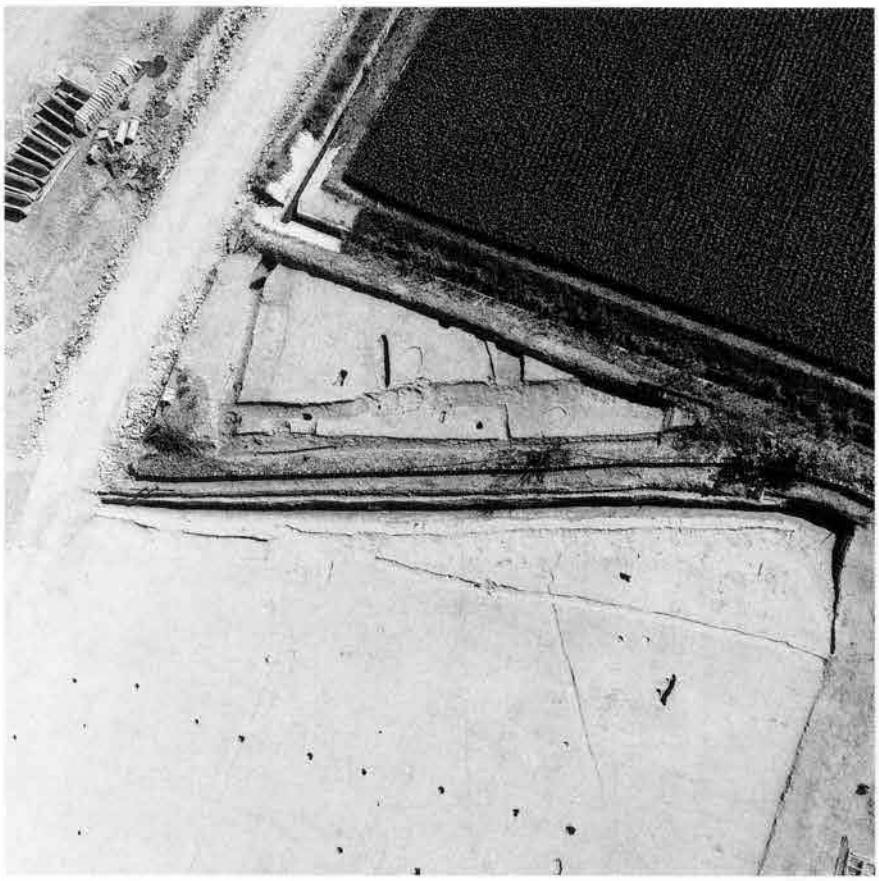
1SD020（c-c'）土層断面（分層前・北から）

1SD020（c-c'）土層断面（分層後・北から）

1SD020（d-d'）土層断面（分層前・北から）

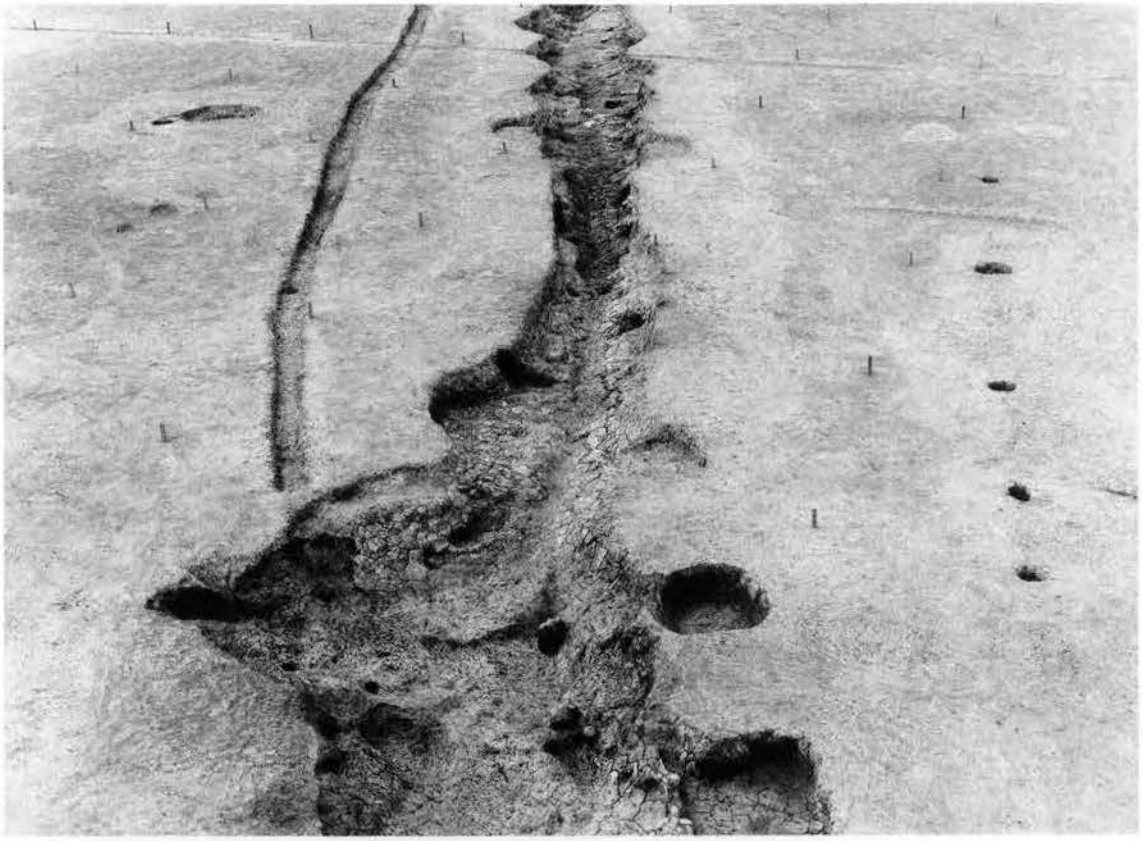


1SD020（d-d'）土層断面（分層後・北から）



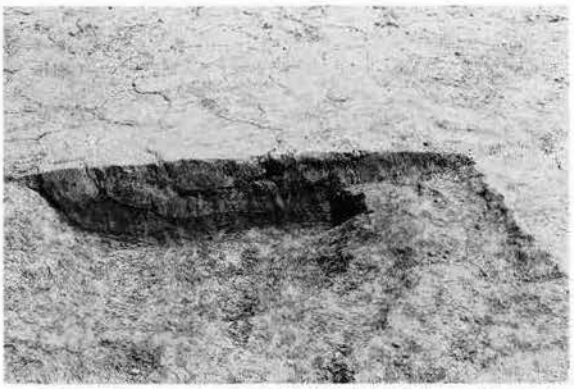
1SD020
完掘（上が南南西）

1SD020
完掘（北北西から）



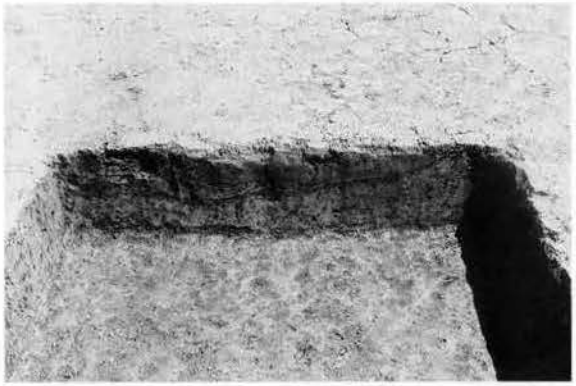
1SD001・1SD005　完掘（南から）

1SD025（a-a'）土層断面（分層前・北から）

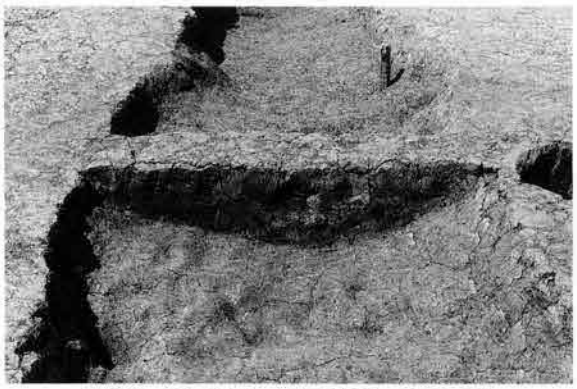


1SD025（a-a'）土層断面（分層後・北から）

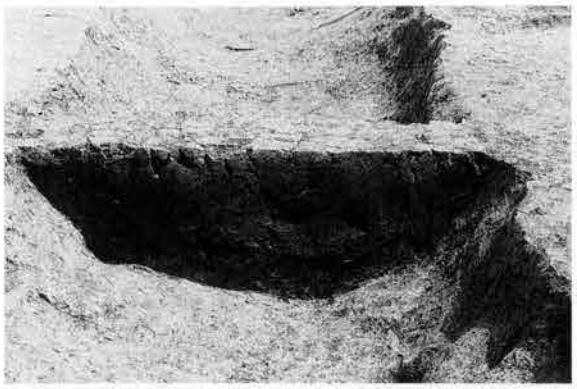
1SD025（b-b'）土層断面（分層前・北から）



1SD025（b-b'）土層断面（分層後・北から）

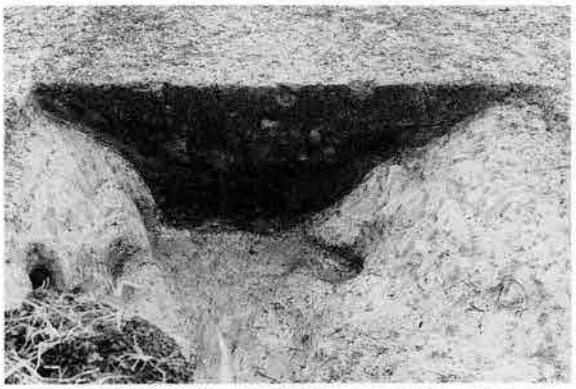


1SD045（北）土層断面（南から）

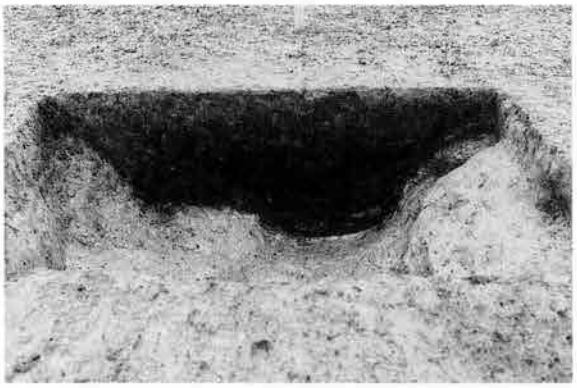


1SD045（南）土層断面（北から）

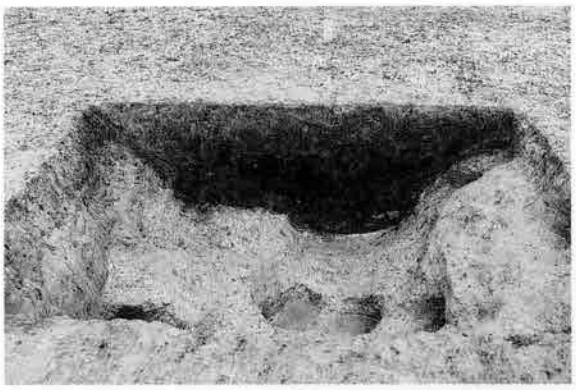
1SD001（a-a'）土層断面（分層前・北から）



1SD001（a-a'）土層断面（分層後・北から）



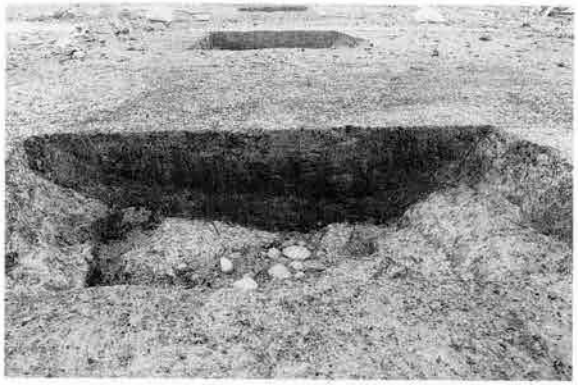
1SD001（b-b'）土層断面（分層前・北から）



1SD001（b-b'）土層断面（分層後・北から）

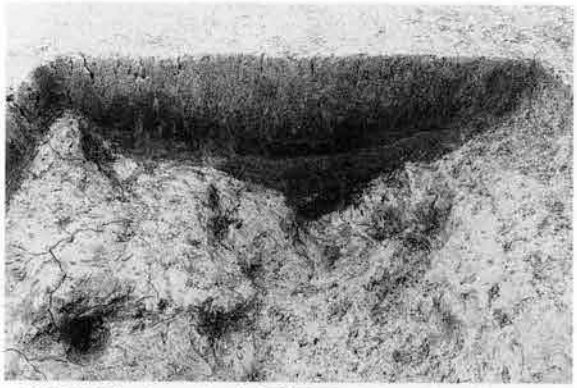
1SD001（c-c'）土層断面（分層前・北から）

1SD001（c-c'）土層断面（分層後・北から）

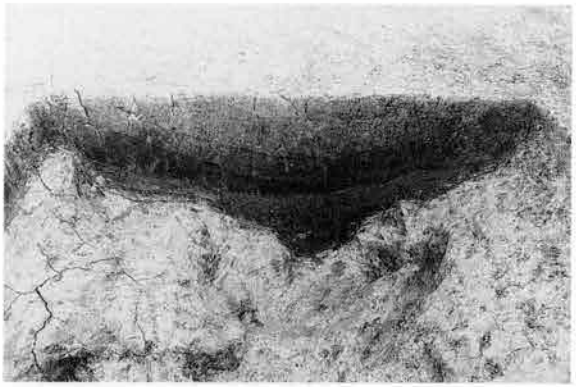


1SD001（d-d'）土層断面（分層前・北から）

1SD001（d-d'）土層断面（分層後・北から）

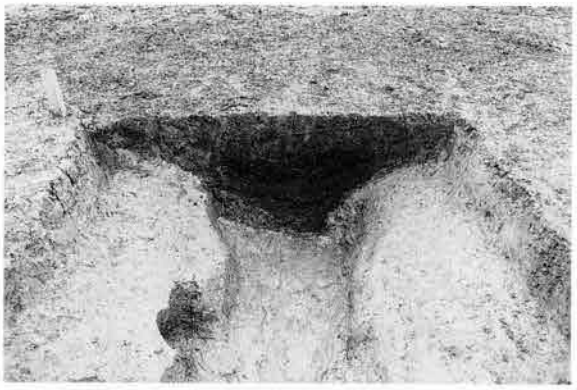


1SD001（e-e'）土層断面（分層前・北から）

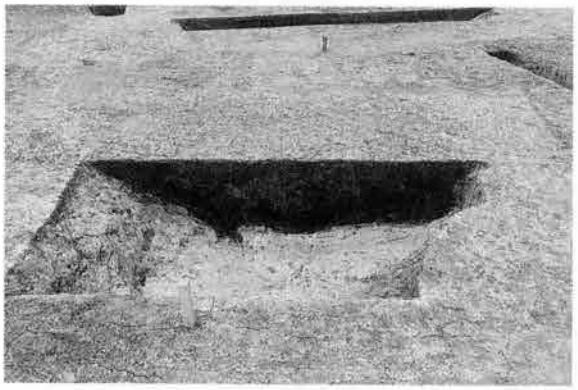


1SD001（e-e'）土層断面（分層後・北から）

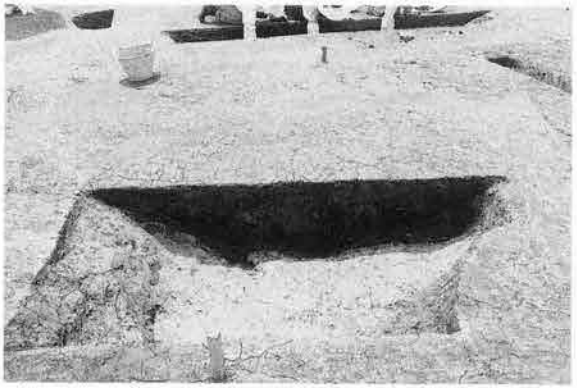
1SD001（f-f'）土層断面（分層前・北から）



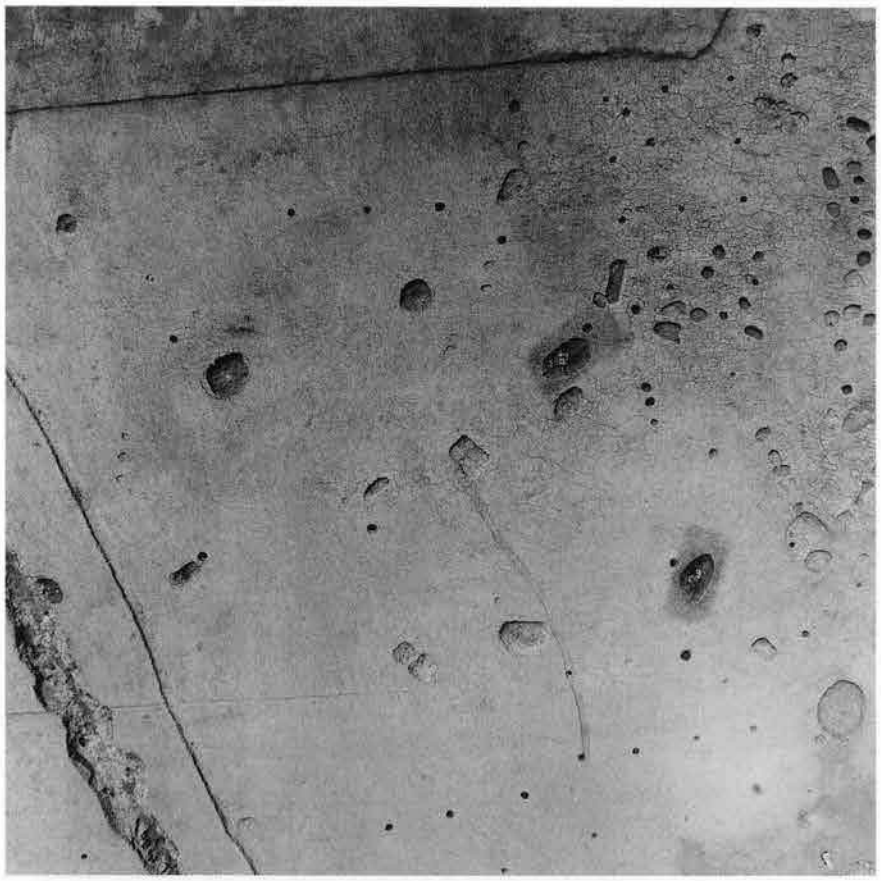
1SD001（f-f'）土層断面（分層後・北から）



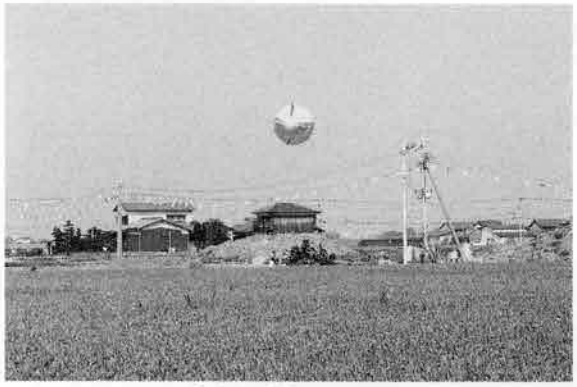
1SD001（g-g'）土層断面（分層前・北から）



1SD001（g-g'）土層断面（分層前・北から）



土坑群
完掘（上が南）

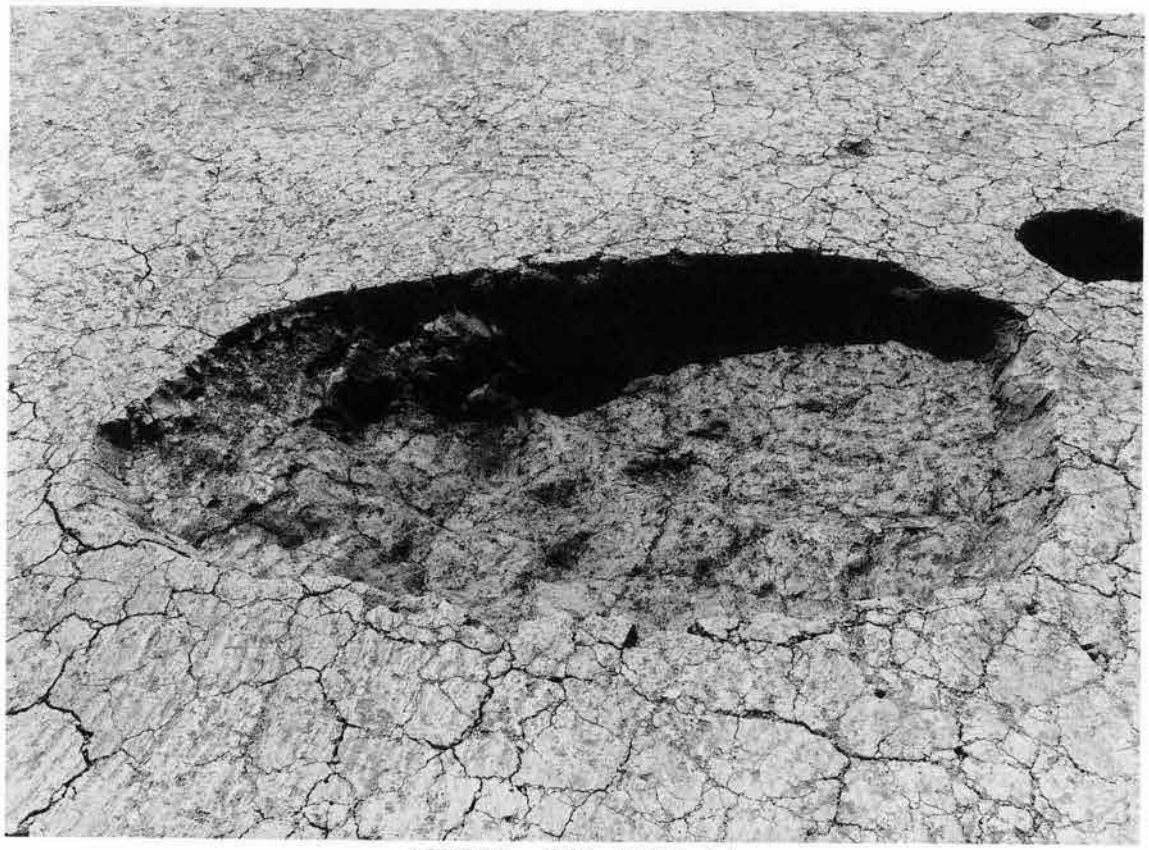


空中写真撮影風景

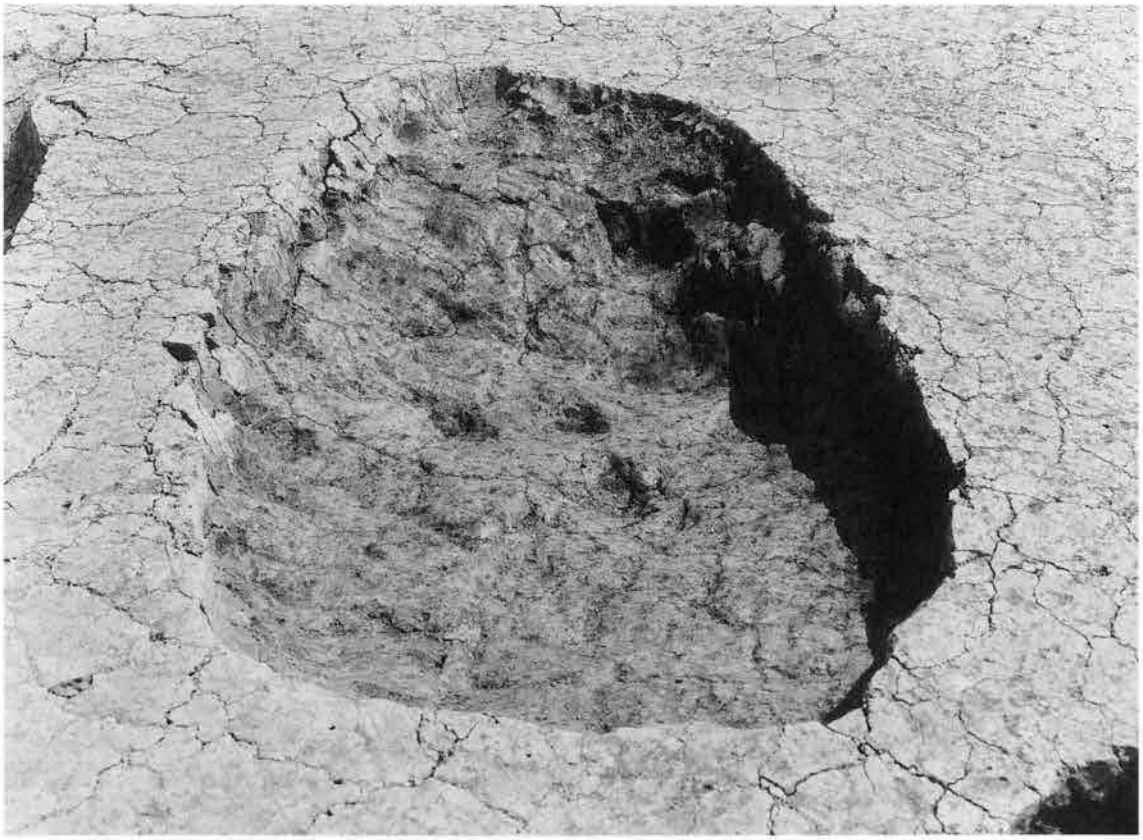
空中写真撮影風景

作業風景

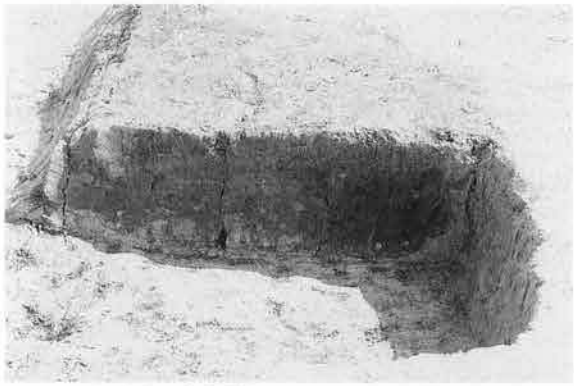
1SD020　掘削作業風景



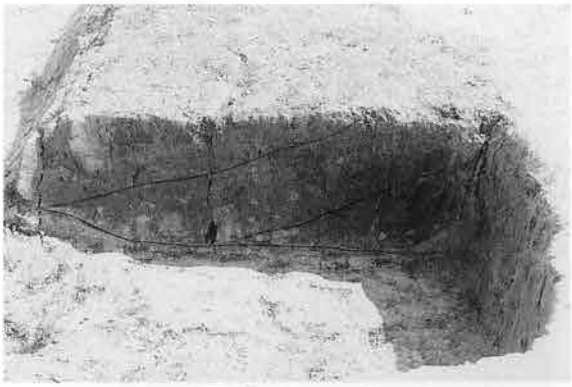
1SK035　完掘（北西から）



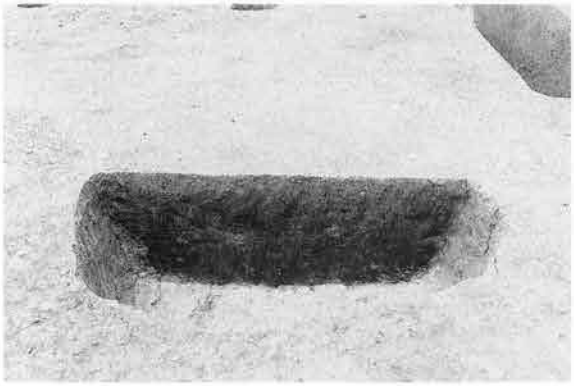
1SK035　完掘（南西から）



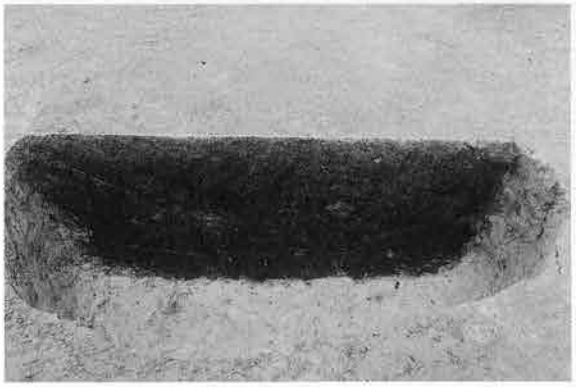
1SK035土層断面（分層前・北から）



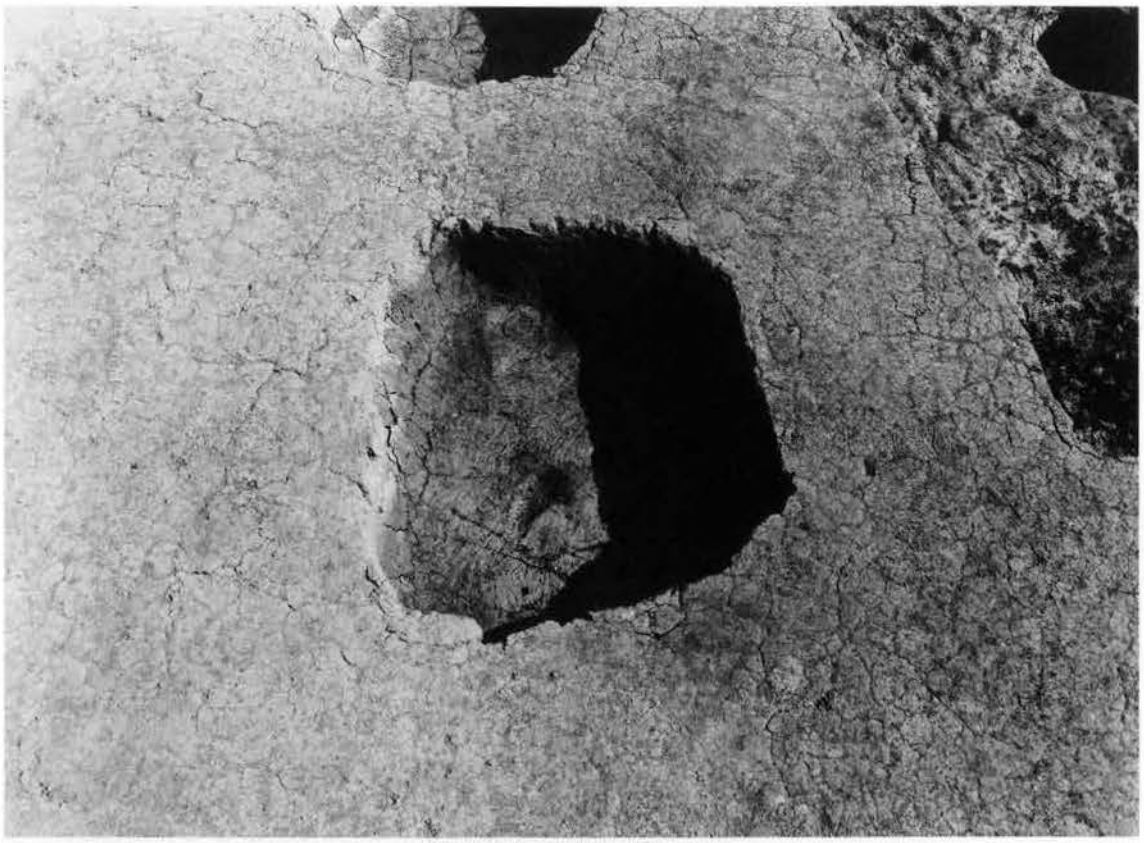
1SK035土層断面（分層後・北から）



1SK003土層断面（分層前・東から）

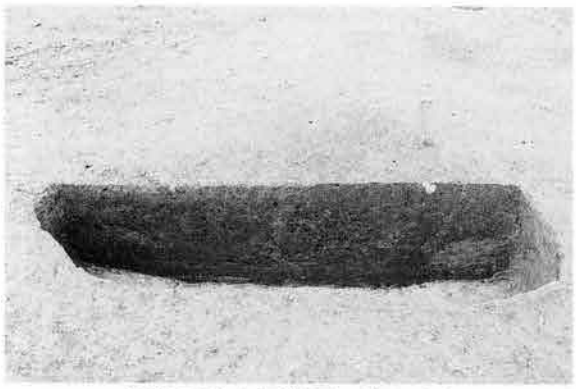


1SK003土層断面（分層後・東から）



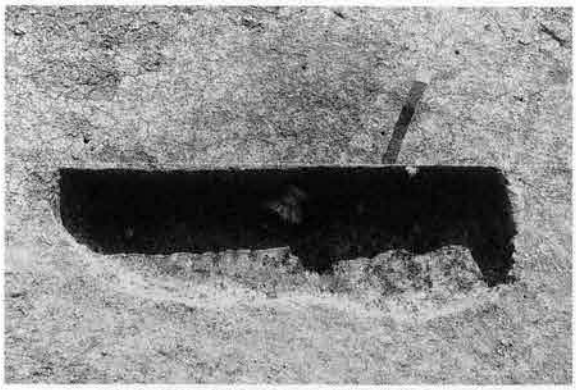
1SK004　完掘（北から）

1SK004　完掘（東から）

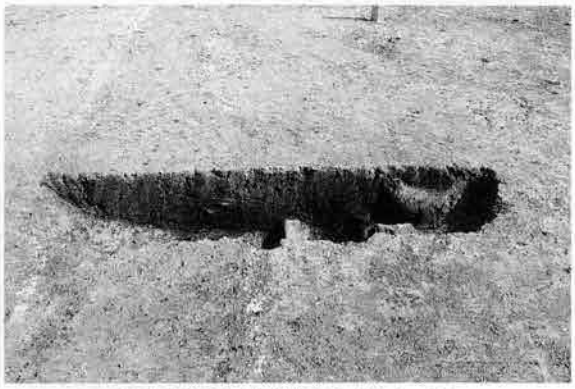


1SK004土層断面（東から）

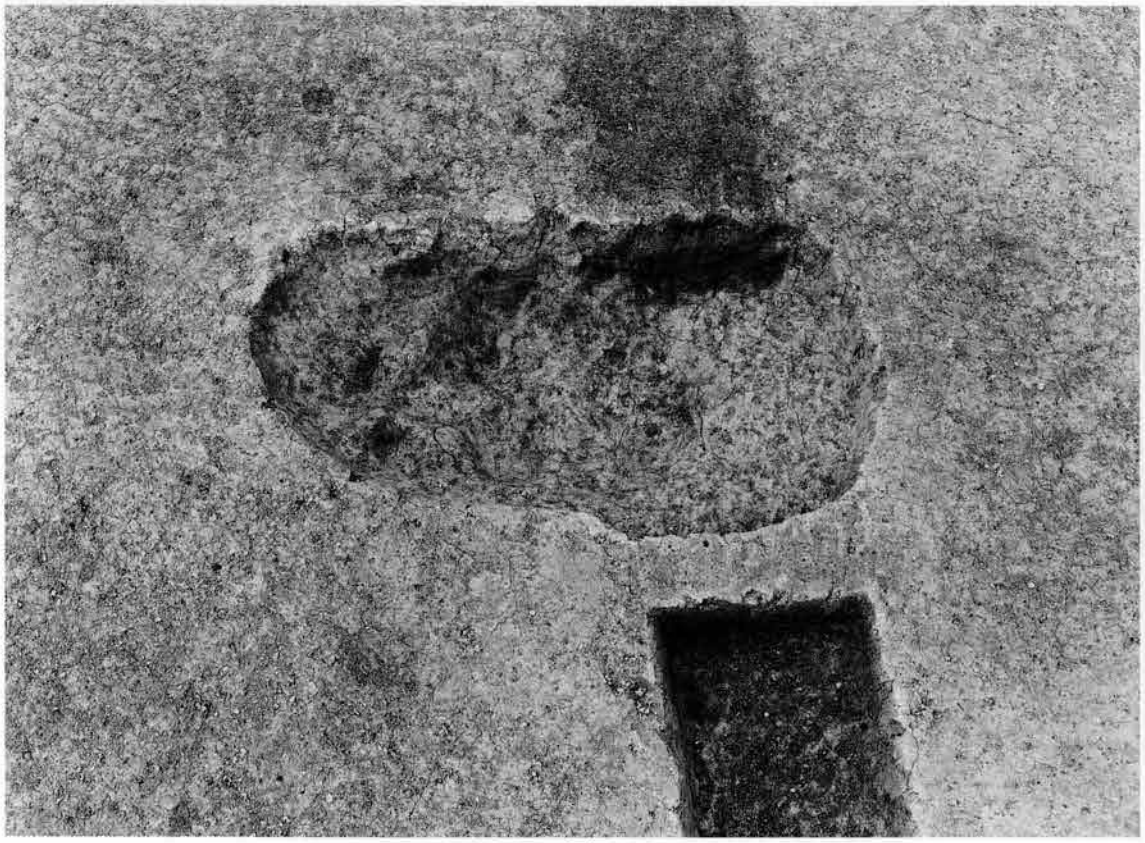
1SK004土層断面実測状況



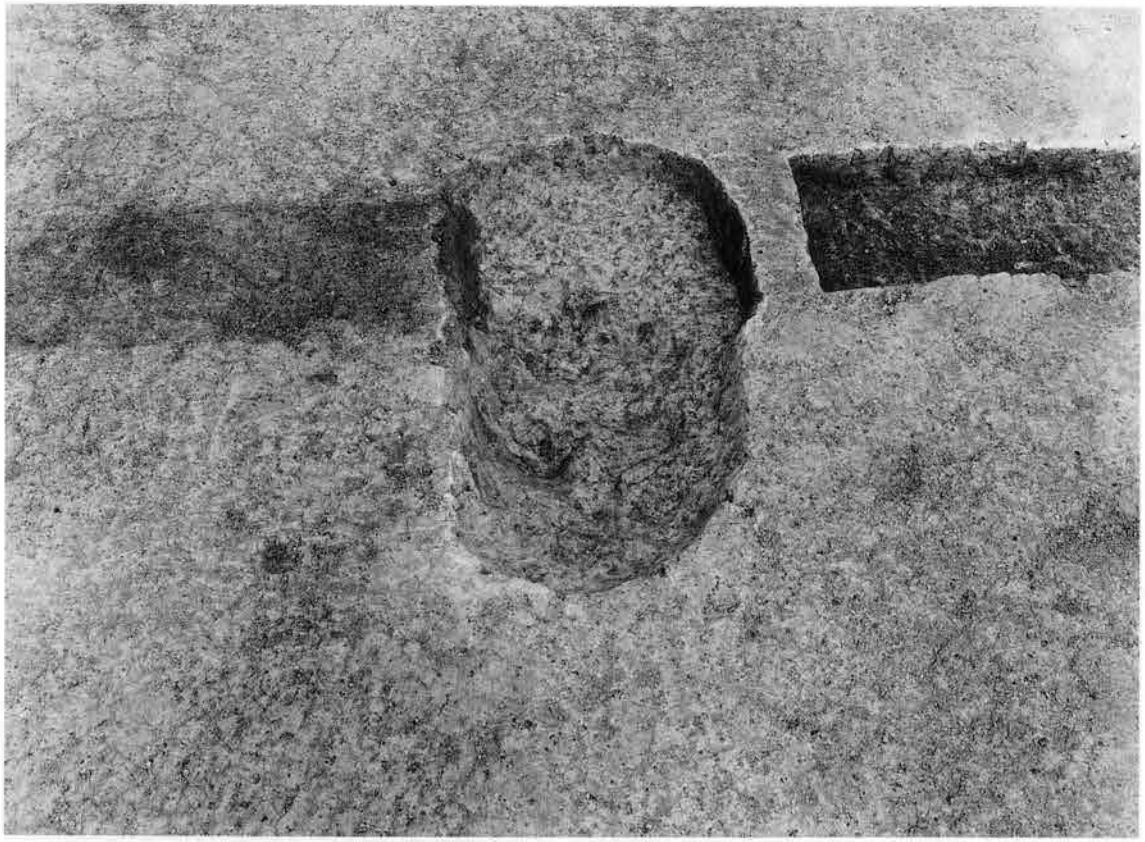
1SK004遺物出土状況（東から）



1SK006土層断面（北から）



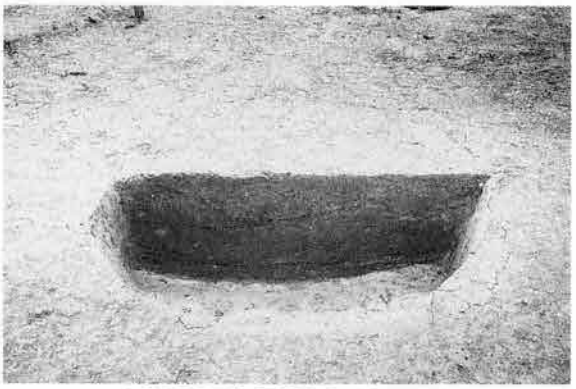
1SK006　完掘（南から）



1SK006　完掘（西から）

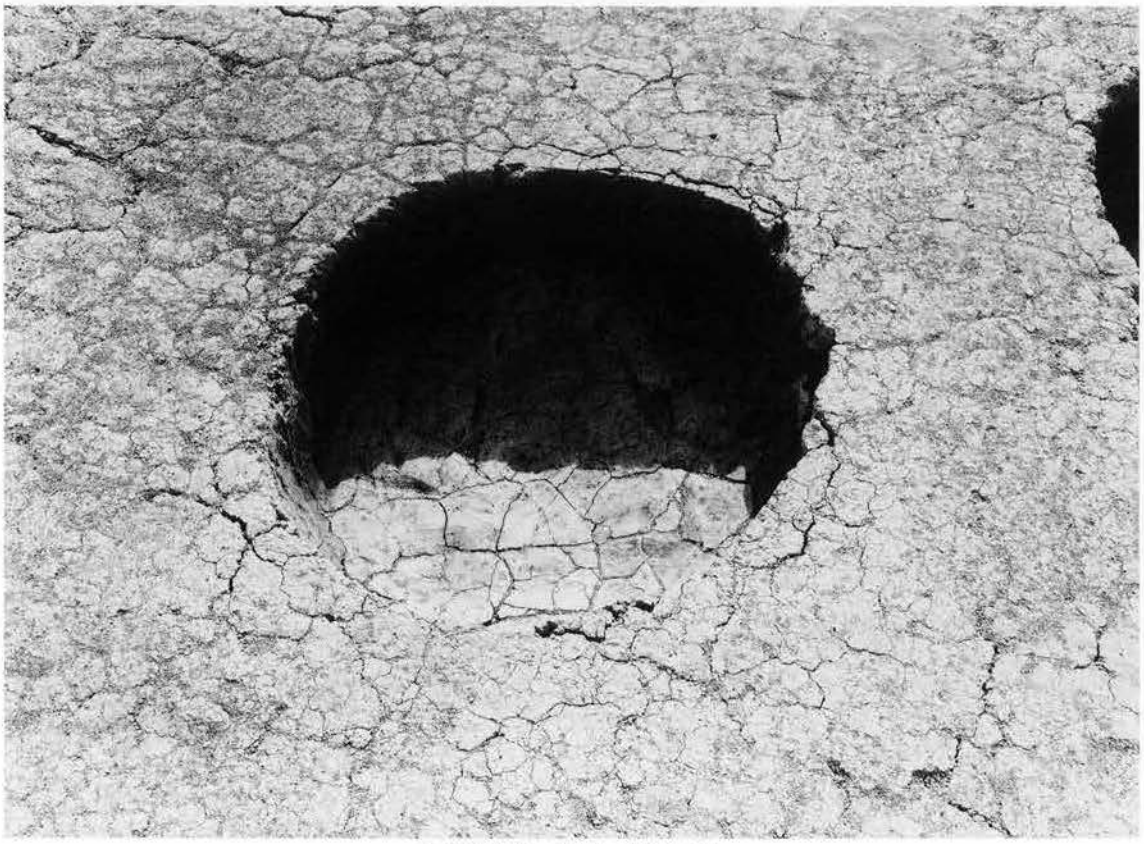
1SK006遺物出土状況（南から）

1SK006遺物出土状況（西から）

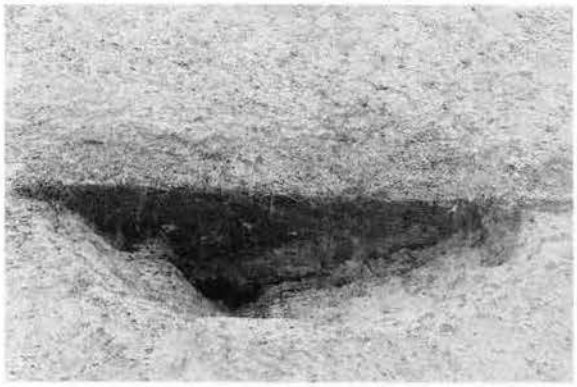


1SK007土層断面（東から）

1SK007　完掘（南から）

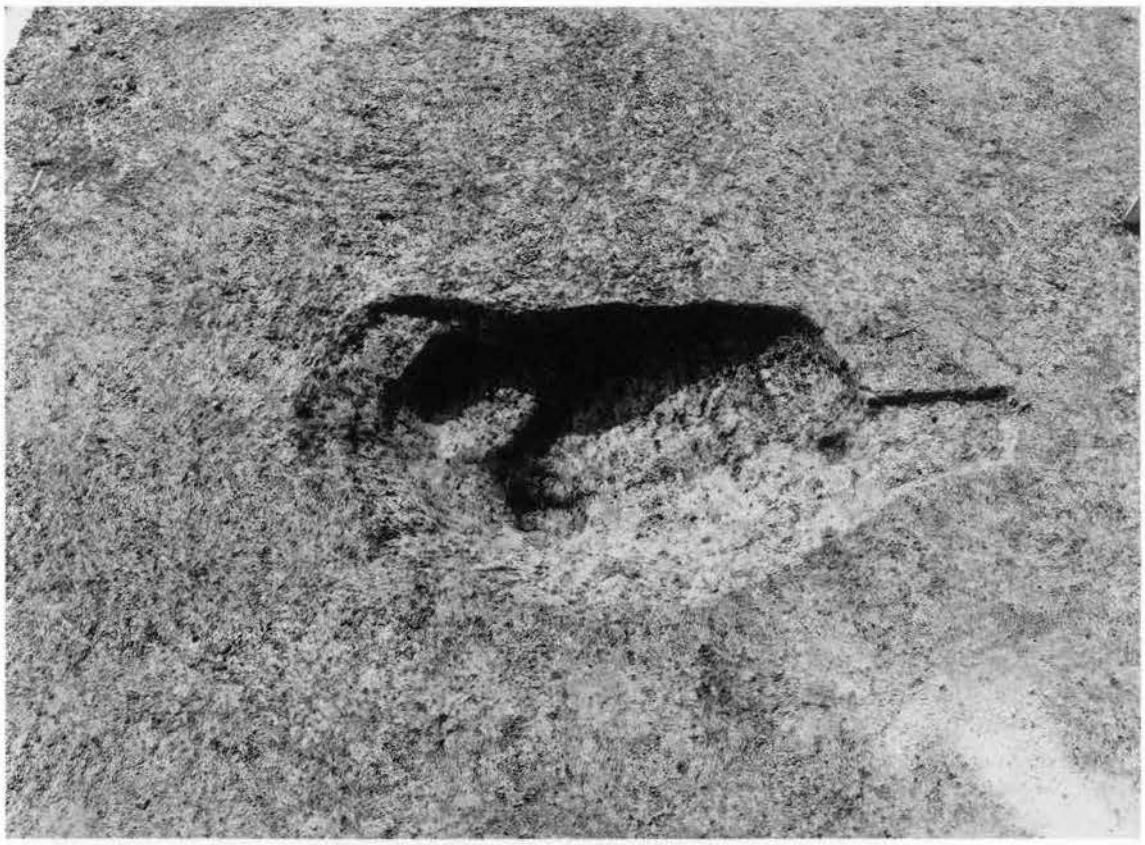


1SK007　完掘（東から）

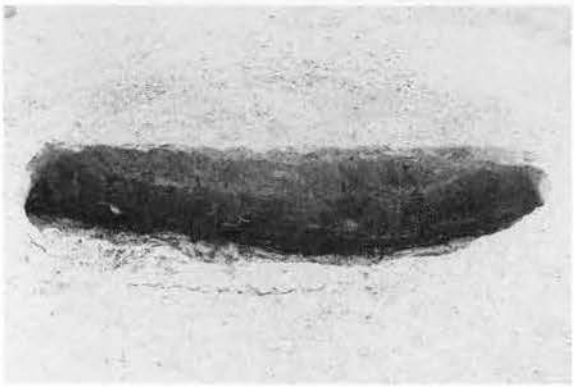


1SK011土層断面（分層前・北から）

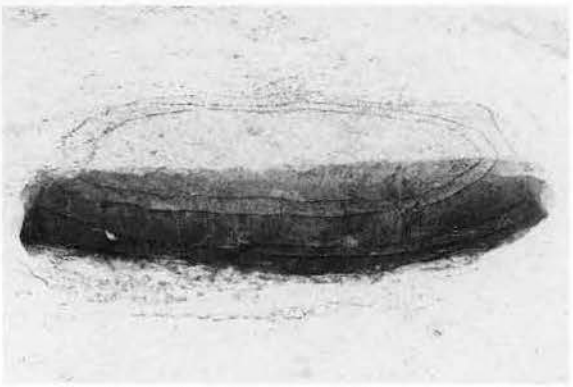
1SK011土層断面（分層後・北から）



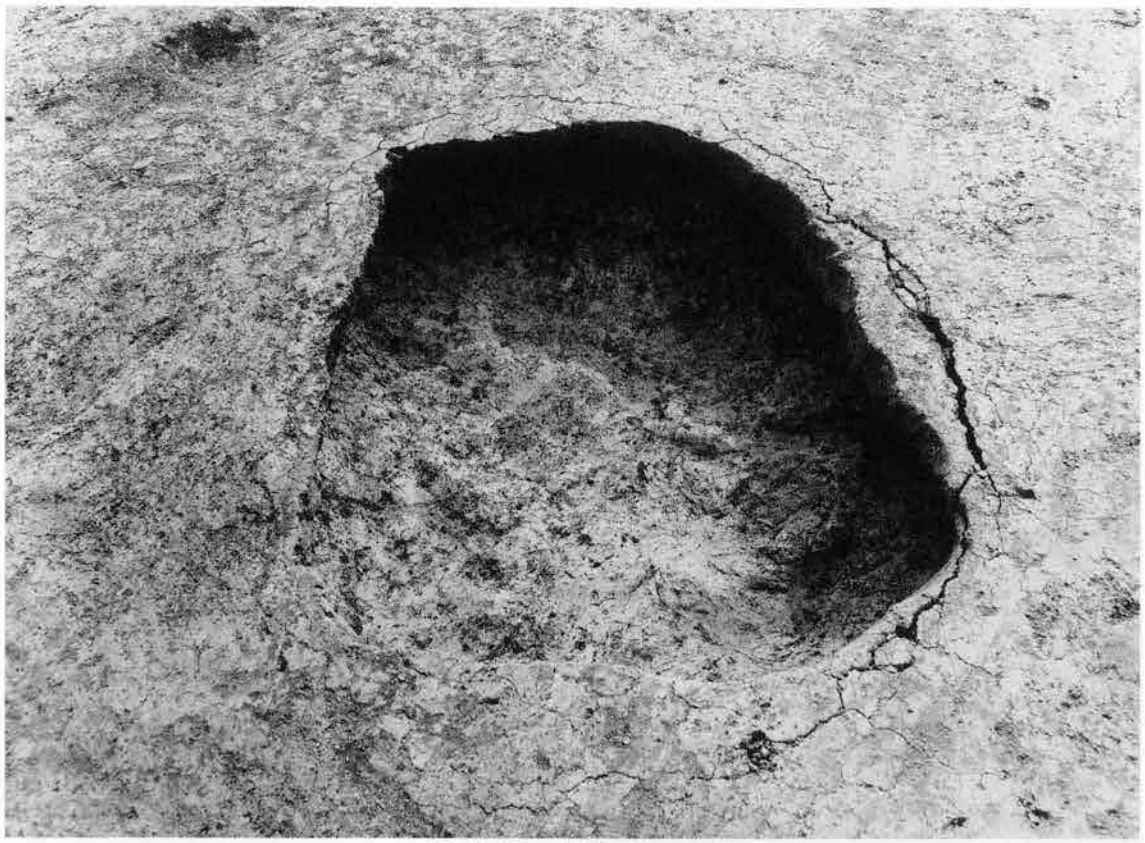
1SK011　完掘（北から）



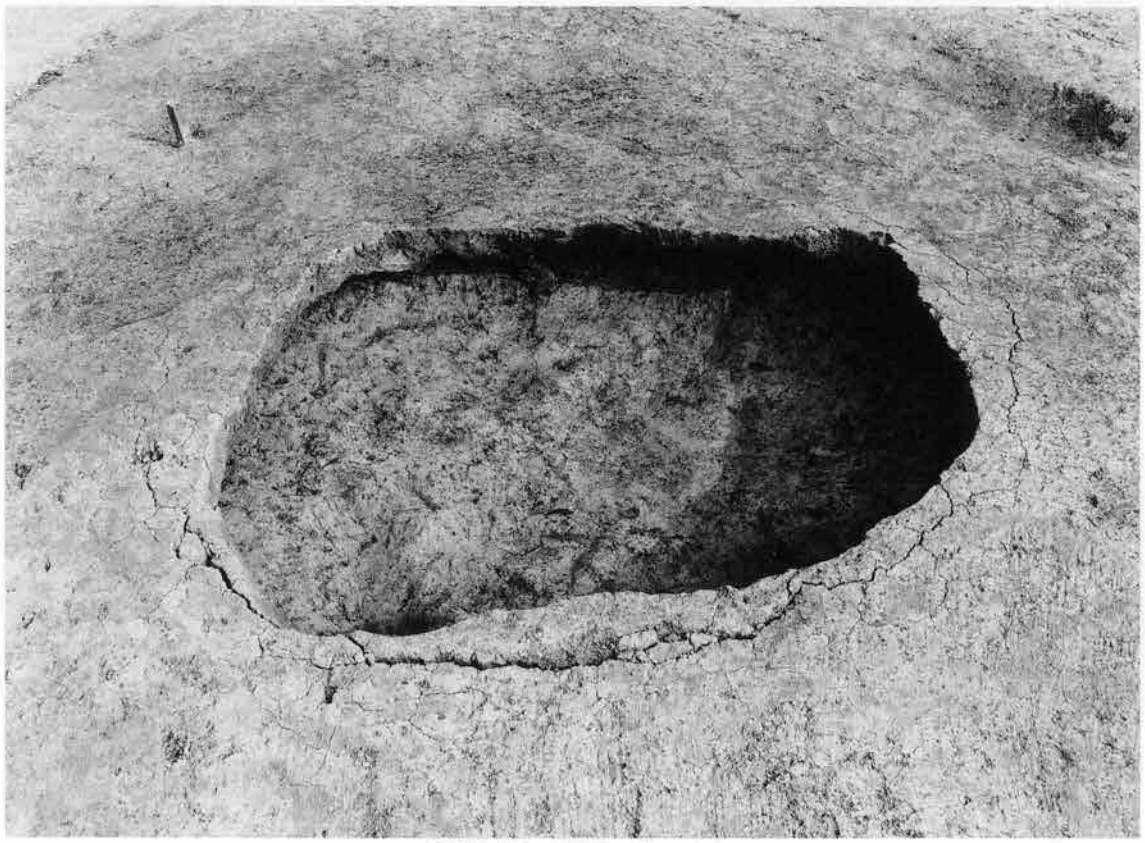
1SK012土層断面（分層前・北から）



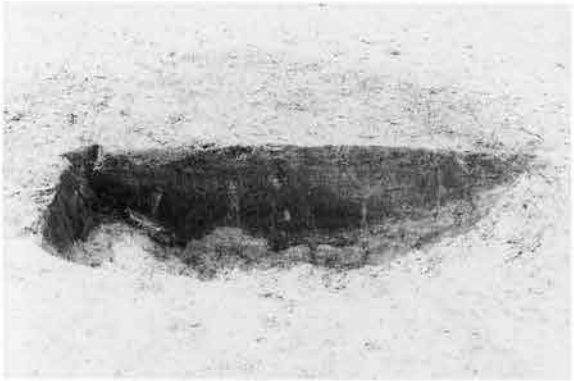
1SK012土層断面（分層後・北から）



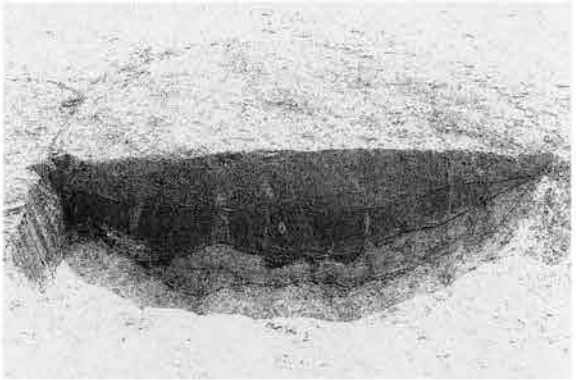
1SK012　完掘（東から）



1SK012　完掘（北から）

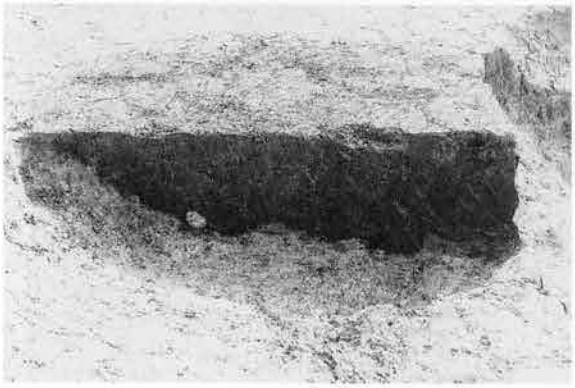


1SK023土層断面（分層前・北東から）

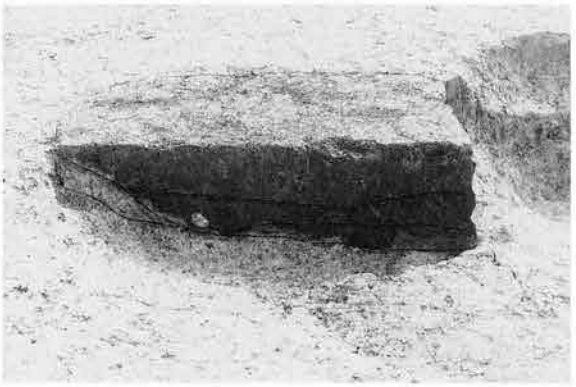


1SK023土層断面（分層後・北東から）

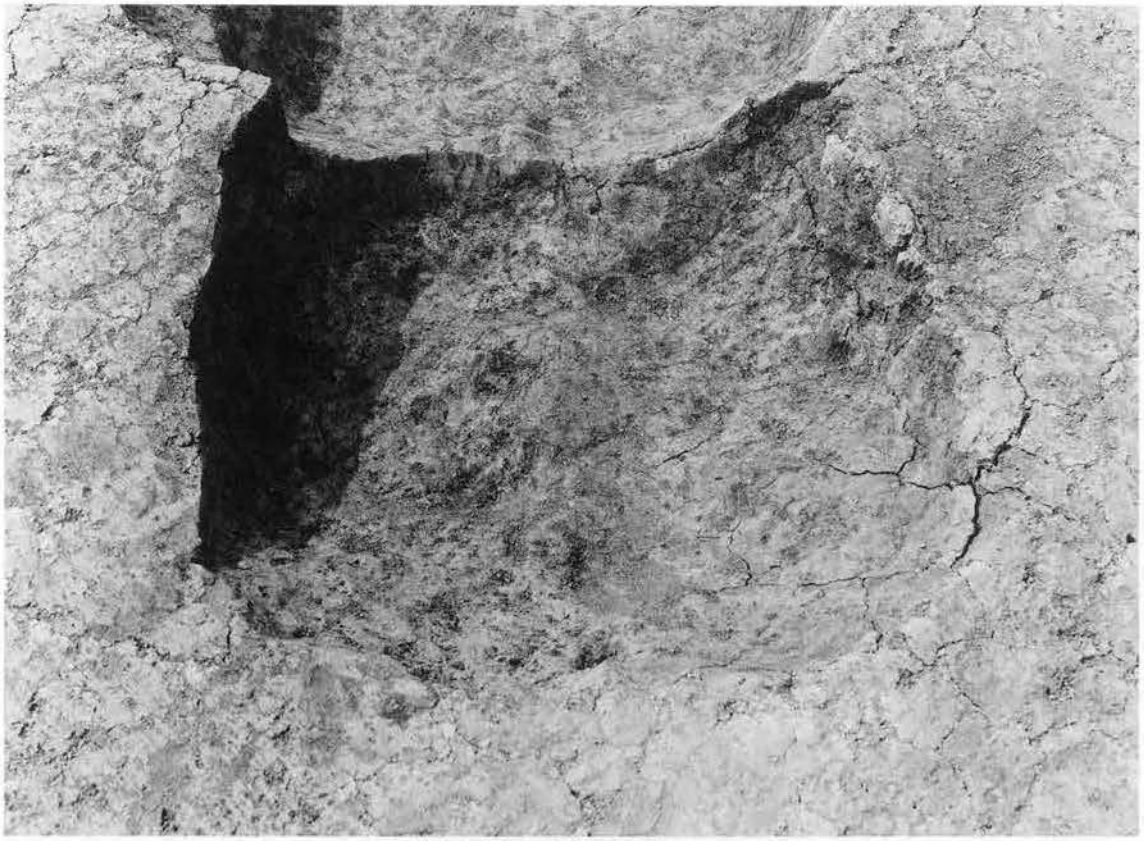
1SK023　完掘（北東から）



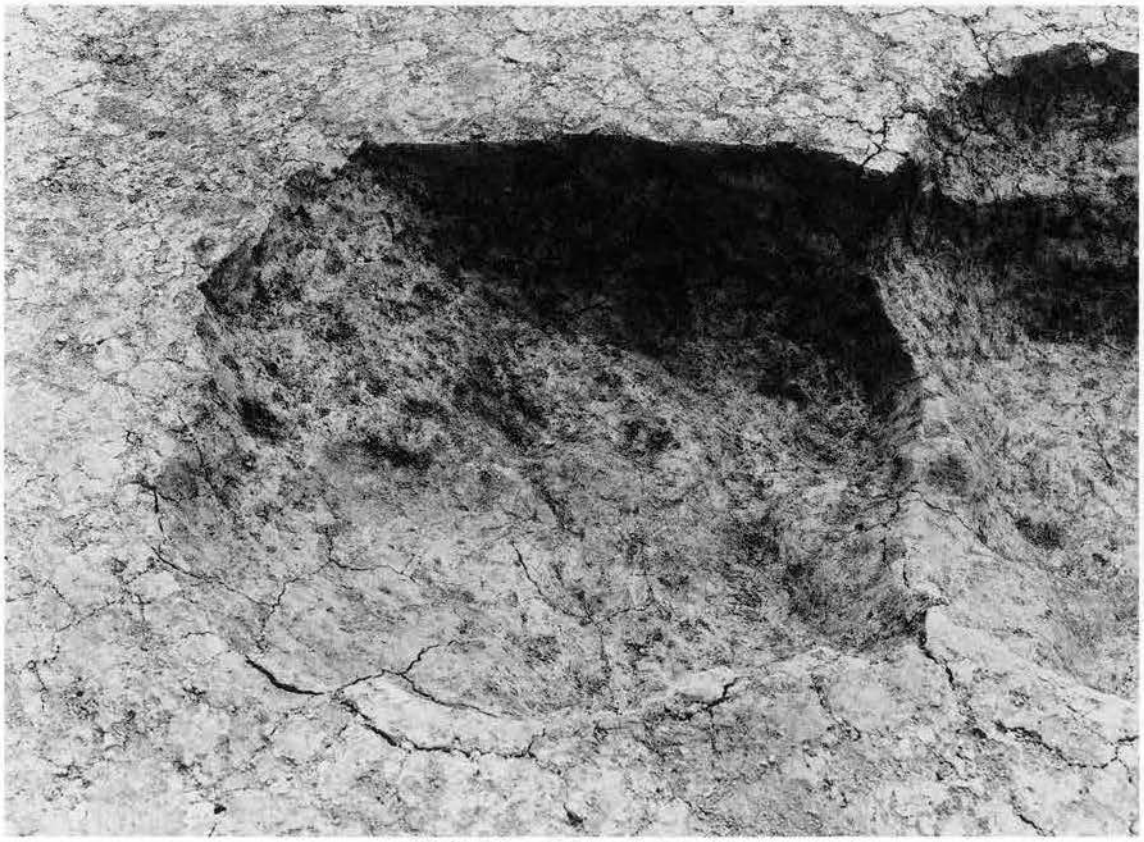
1SK024土層断面（分層前・北東から）



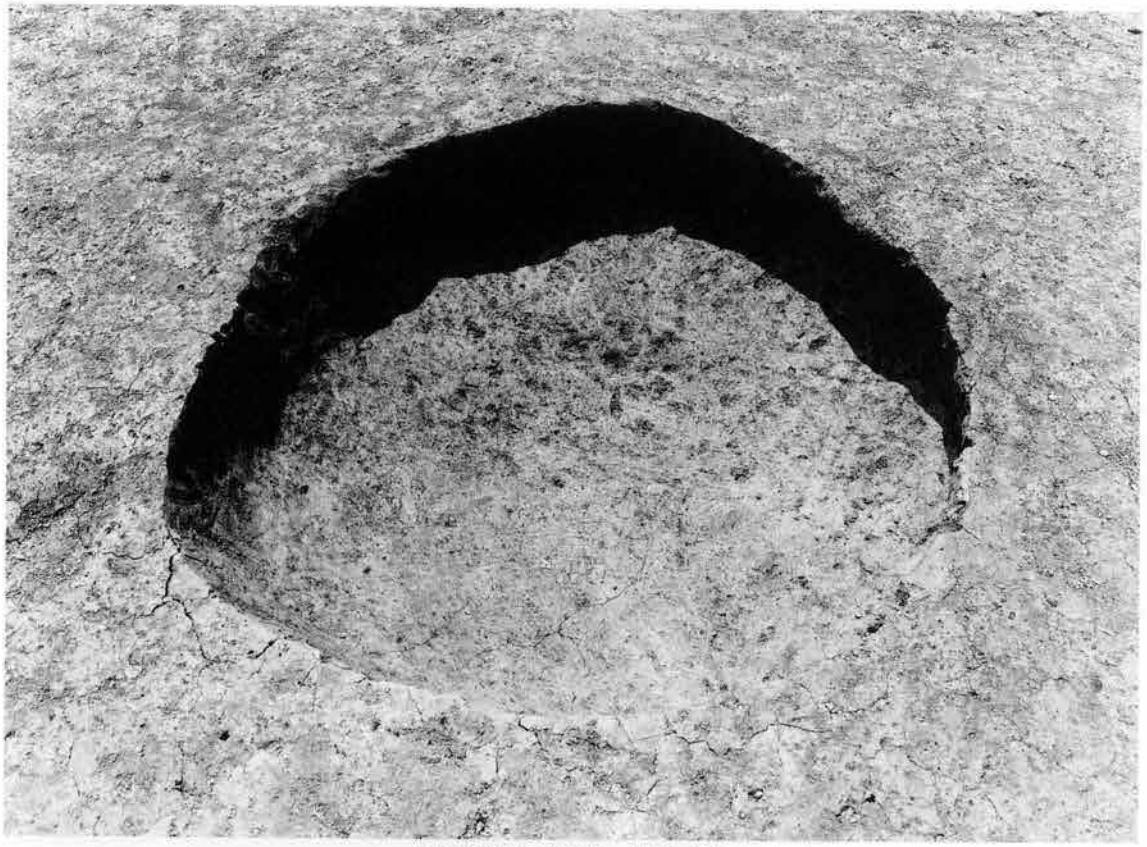
1SK024土層断面（分層後・北東から）



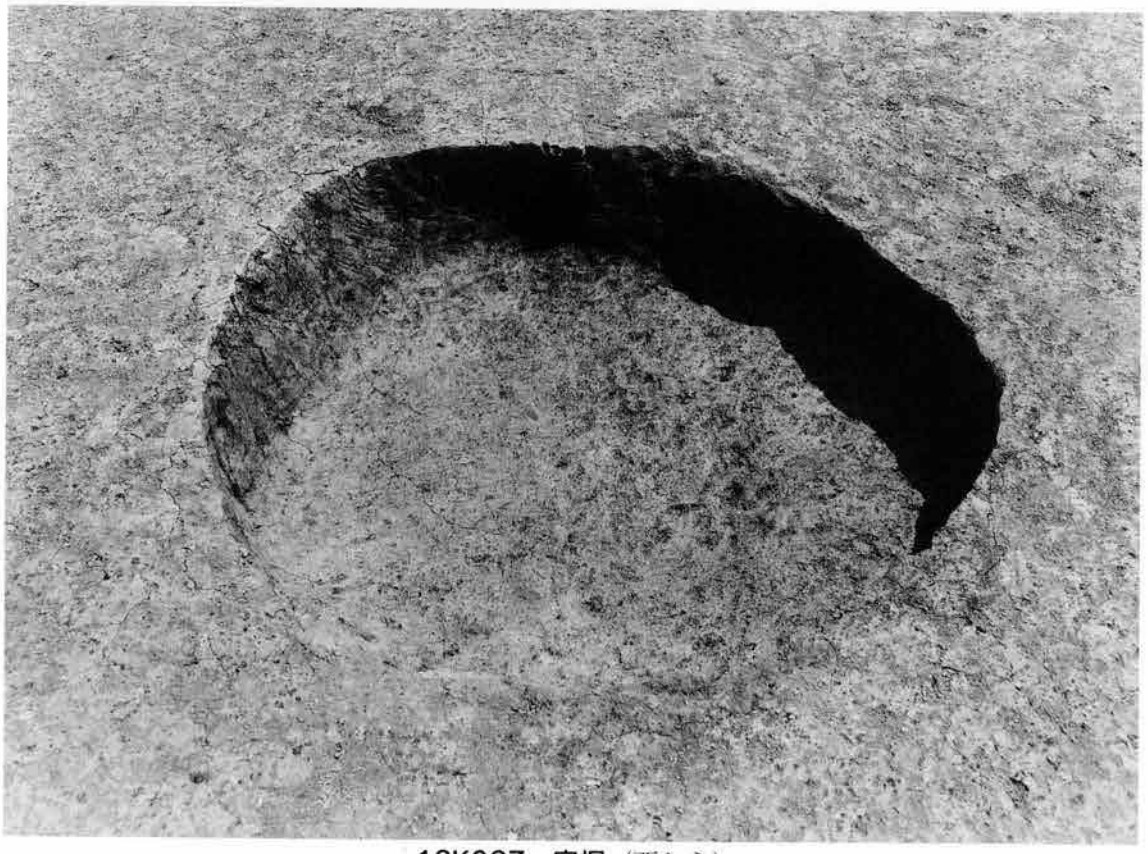
1SK024　完掘（南東から）



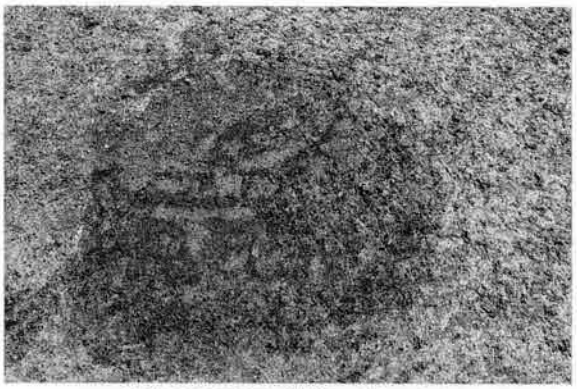
1SK024　完掘（北東から）



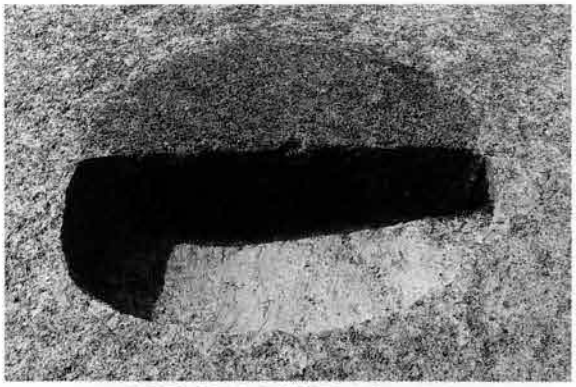
1SK027　完掘（北から）



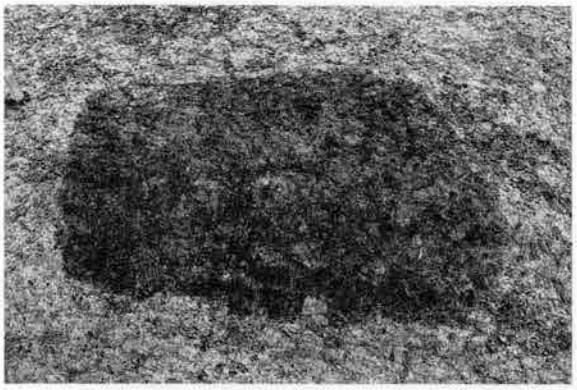
1SK027　完掘（西から）



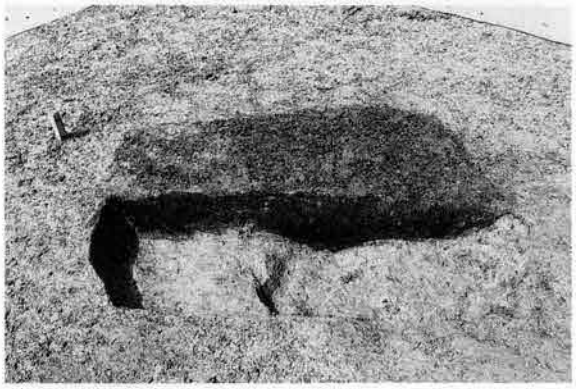
1SK027検出状況（北から）



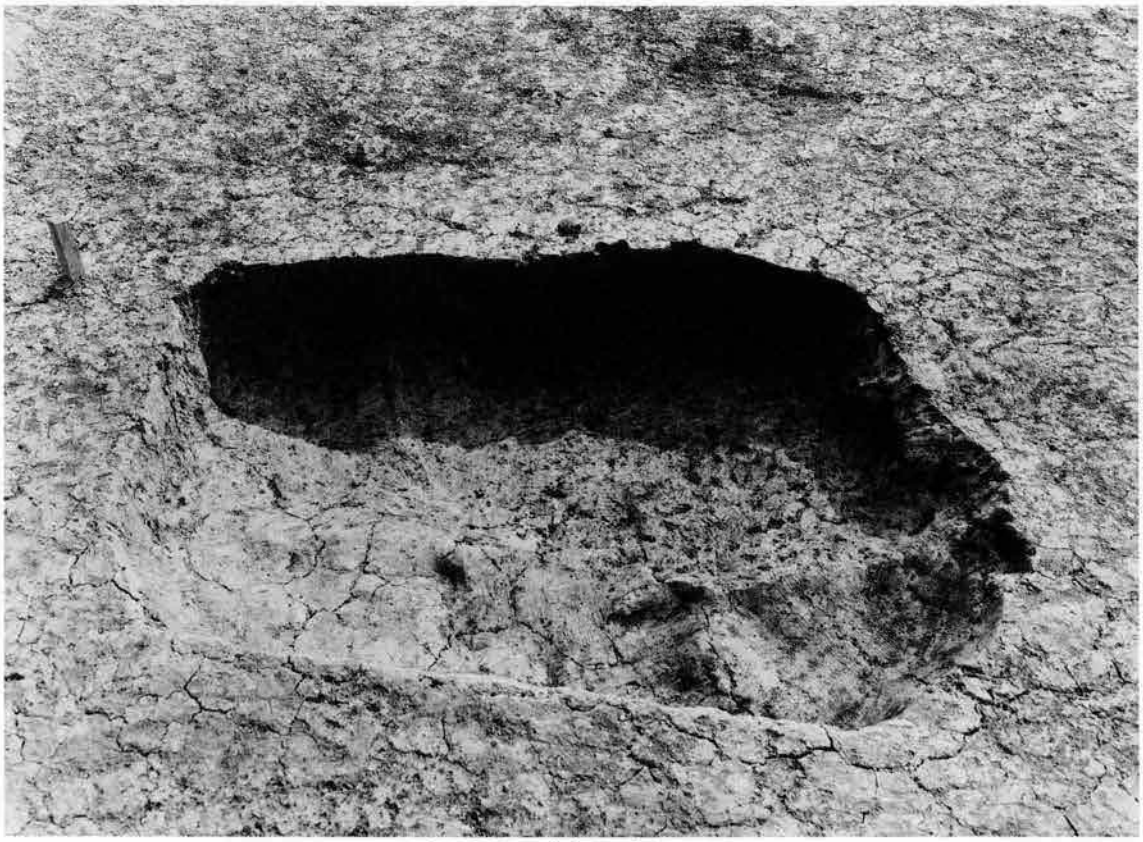
1SK027土層断面（北から）



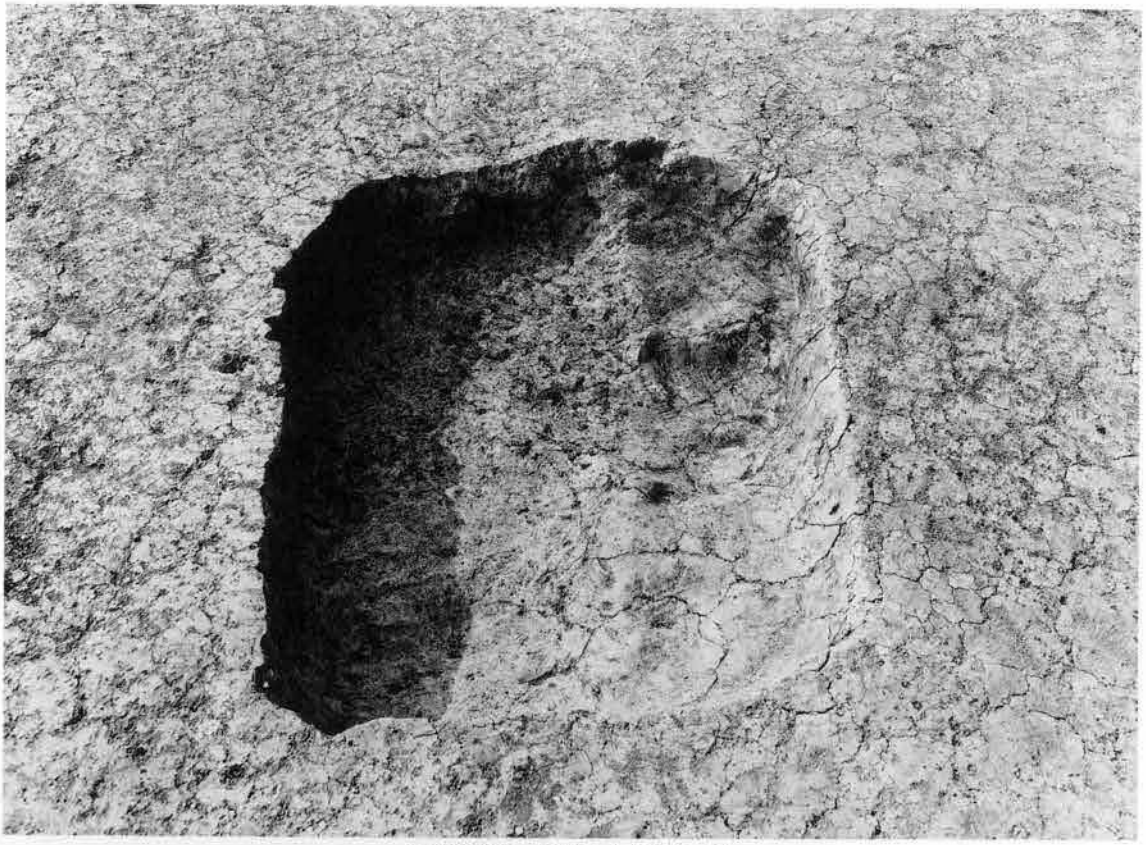
1SK028検出状況（北東から）



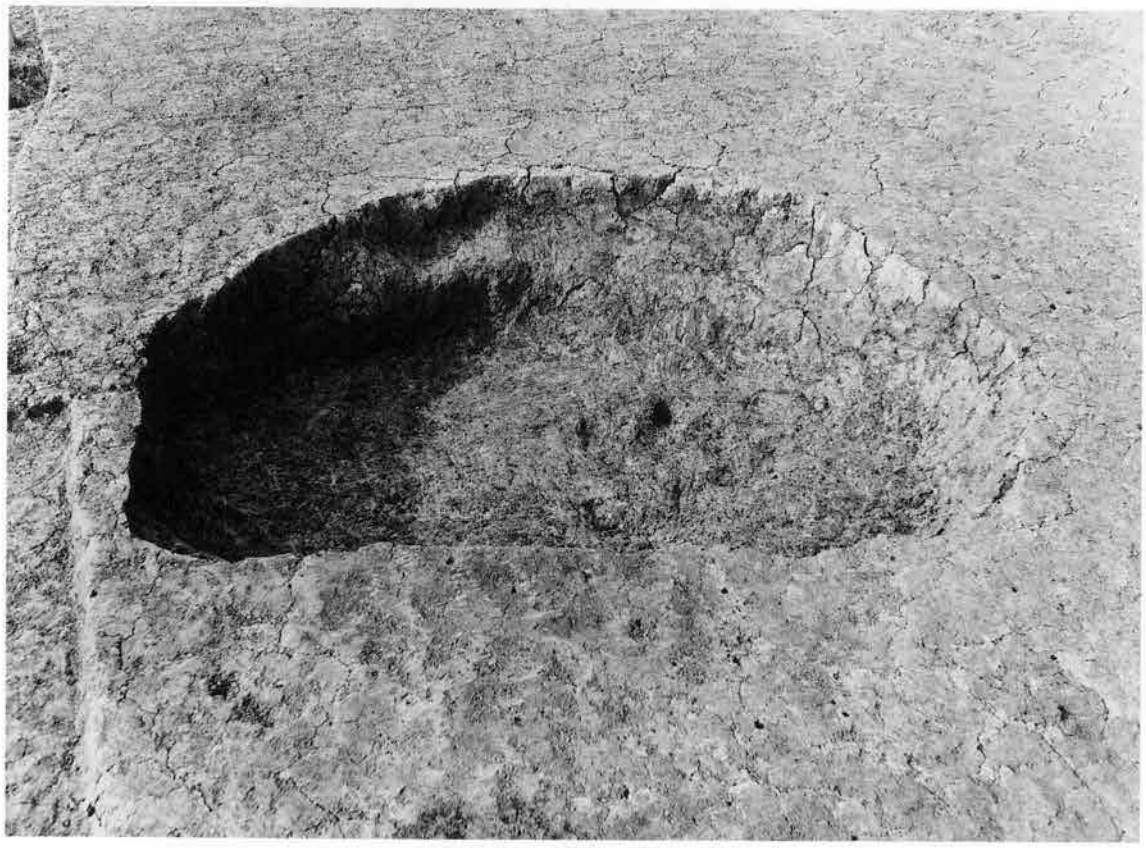
1SK028土層断面（北東から）



1SK028　完掘（北東から）

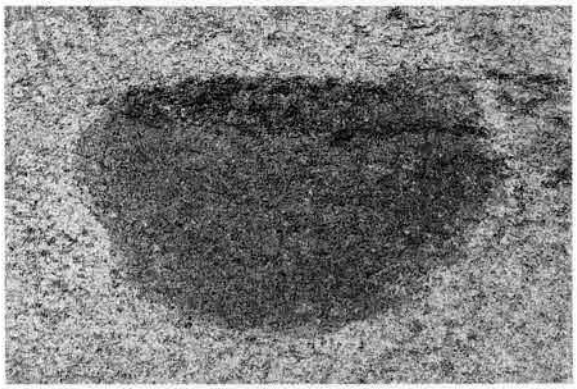


1SK028　完掘（南東から）



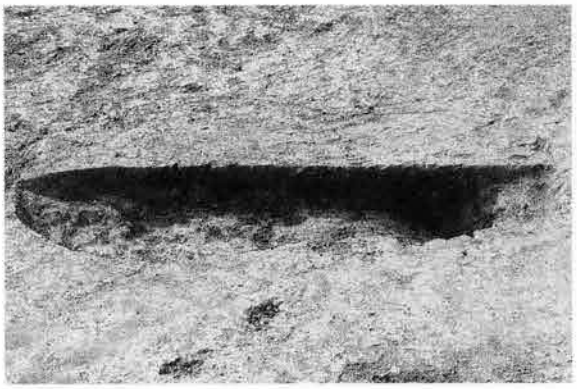
1SK029　完掘（南から）

1SK029　完掘（東から）



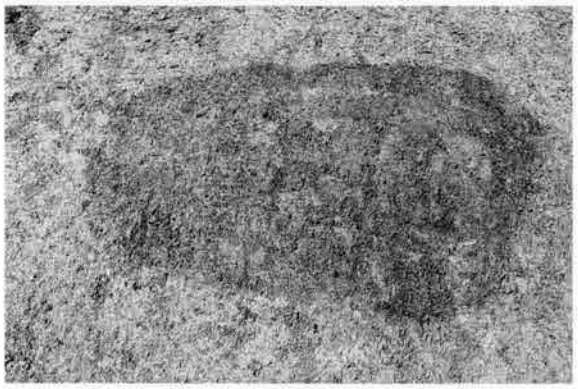
1SK029検出状況（北から）

1SK034検出状況（北から）

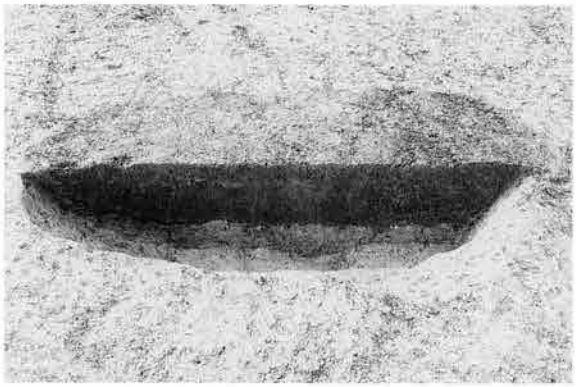


1SK034土層断面（南東から）

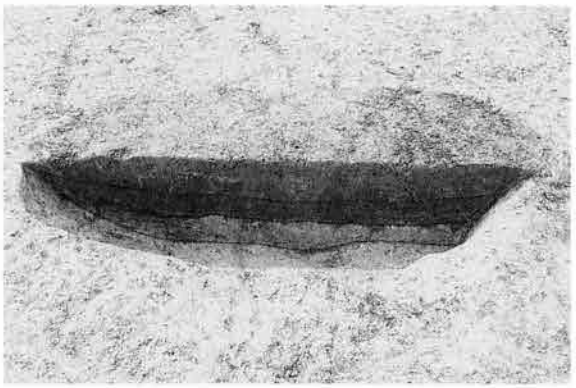
1SK034　完掘（南東から）



1SK036検出状況（北から）

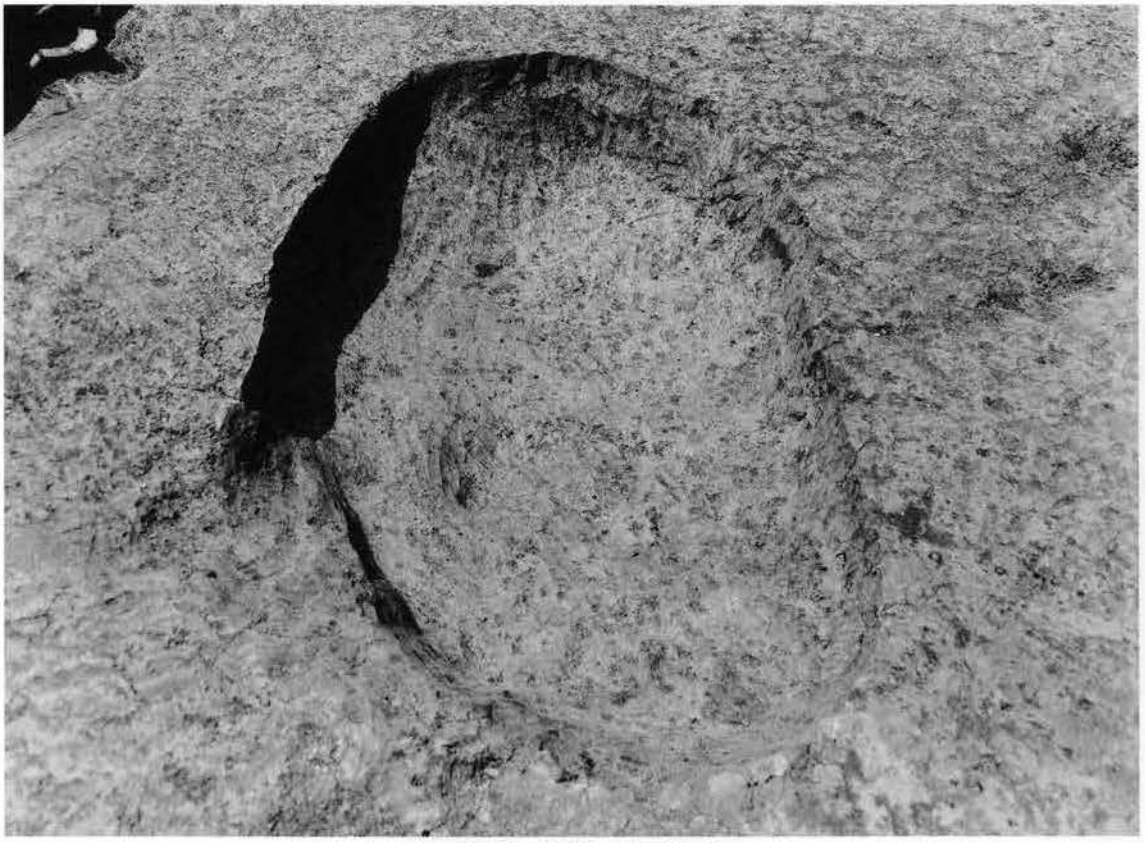


1SK036土層断面（分層前・南東から）

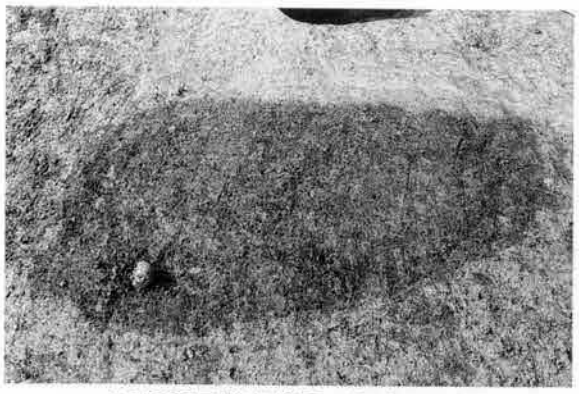


1SK036土層断面（分層後・南東から）

1SK036　完掘（北西から）



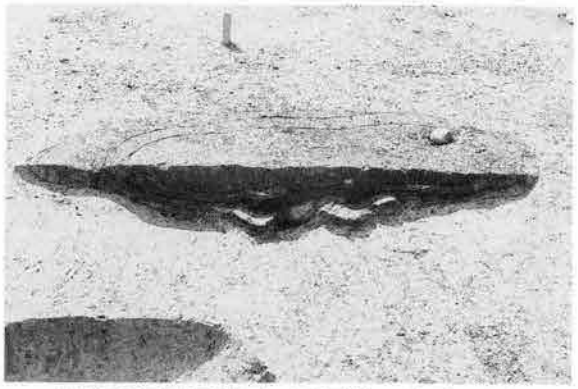
1SK036　完掘（北東から）



1SK037検出状況（南東から）

1SK037遺物出土状況（北東から）

1SK037土層断面（分層前・北から）

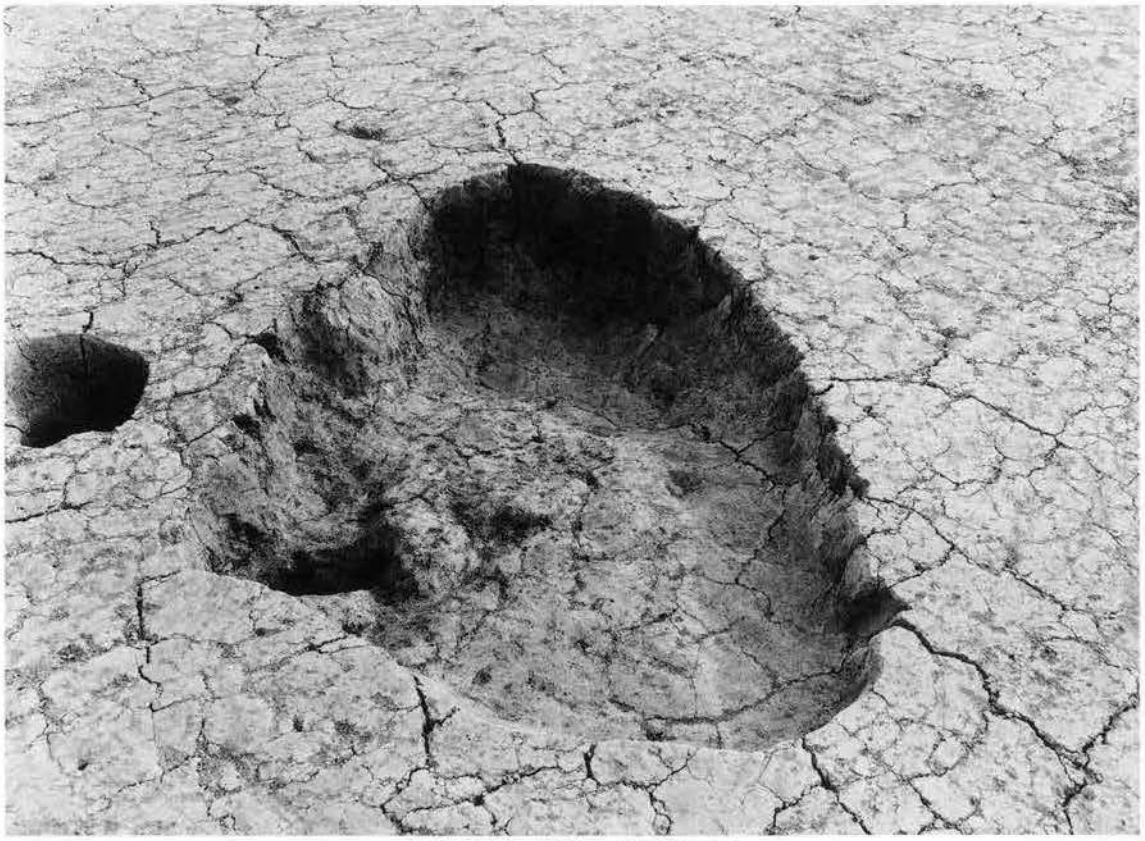


1SK037土層断面（分層後・北西から）

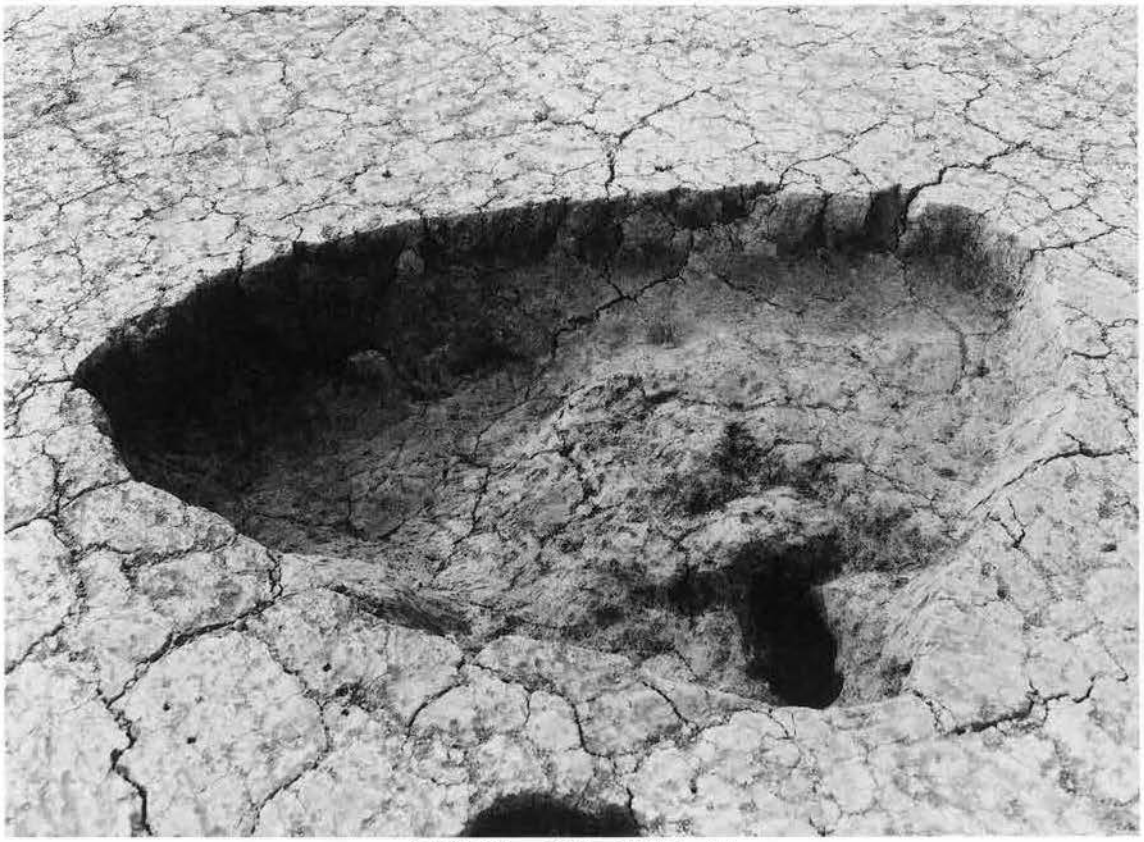
1SK040検出状況（北西から）

1SK040土層断面（西から）

1SK040遺物出土状況（北西から）

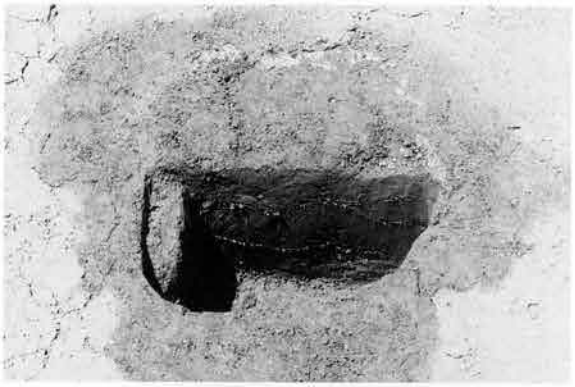


1SK040　完掘（北東から）



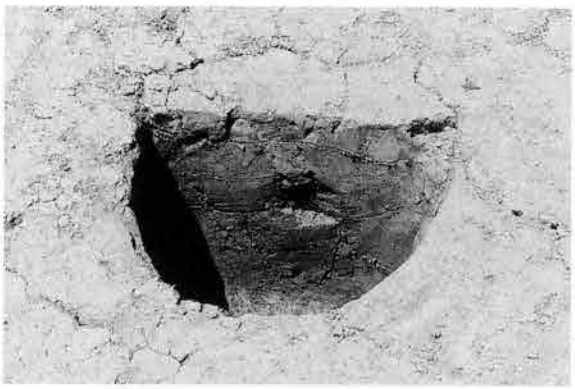
1SK040　完掘（北西から）

1SB030 (a) 土層断面（東から）

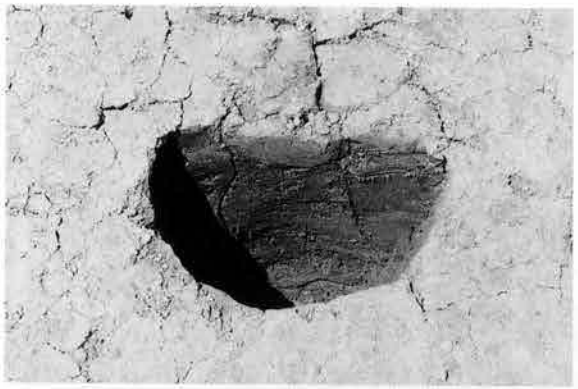


1SB030 (b) 土層断面（東から）

1SB030 (c) 土層断面（東から）

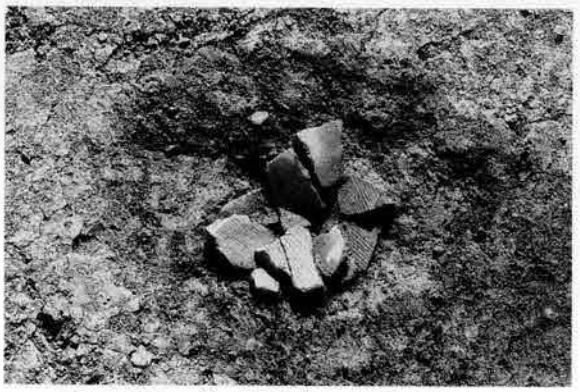


1SB030 (d) 土層断面（東から）

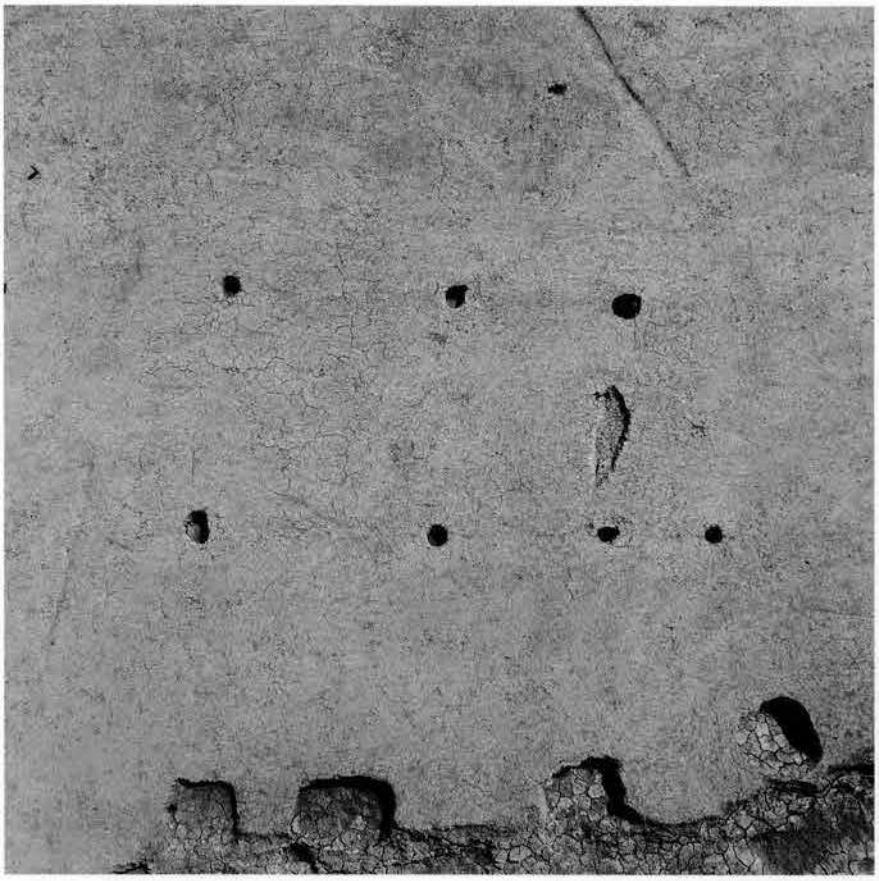


1SB030 (e) 土層断面（東から）

1SB030 (f) 土層断面（東から）



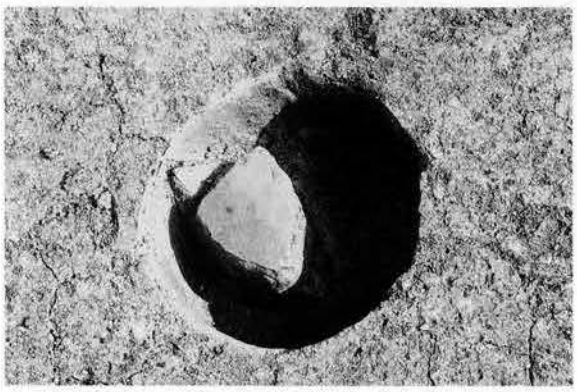
1SB030 (f) 遺物出土状況（東から）



1SB030
完掘（上が東）

1SA002 (a) 遺物出土状況（北から）

1SA002 (b) 遺物出土状況（北から）

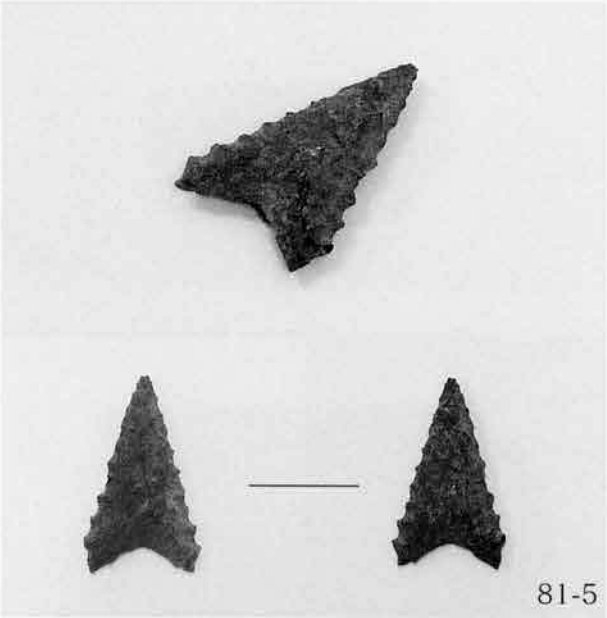


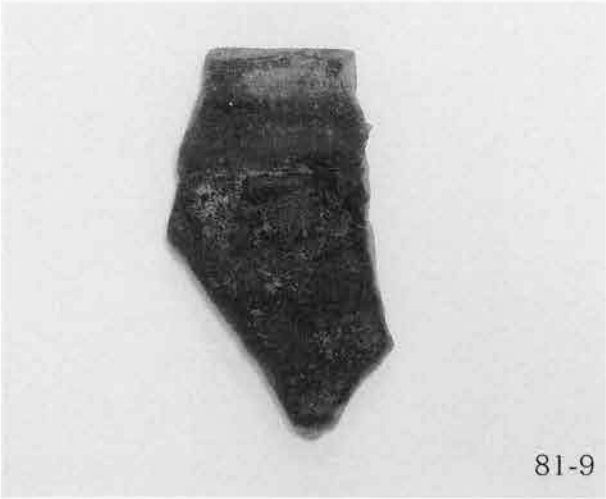
1SA002 (c) 遺物出土状況（北から）

平面図実測作業風景

東上空で発生した竜巻き（1998.7.28）

猛暑の中での作業風景


81-5


81-9

81-10

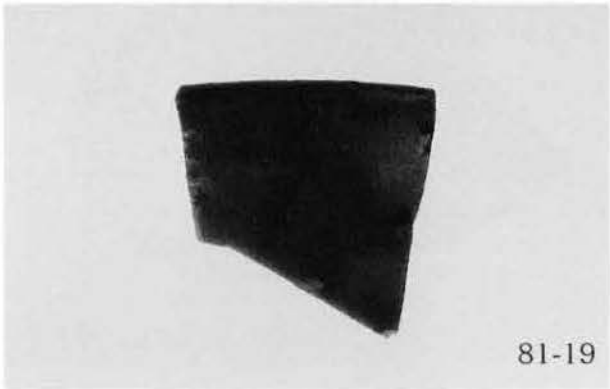
81-7

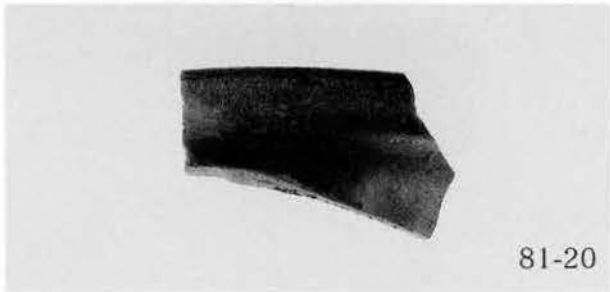
81-11

81-14

81-15

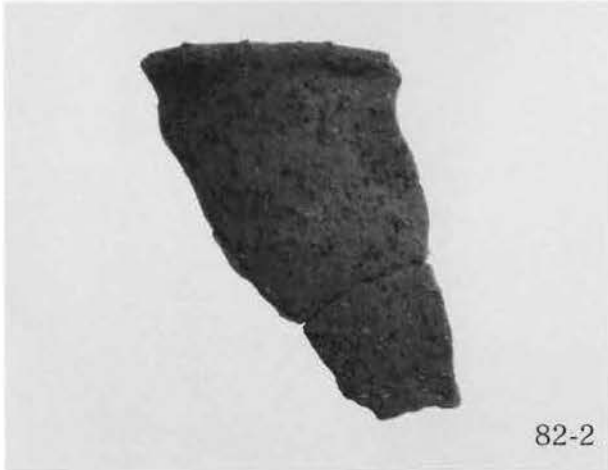
81-18

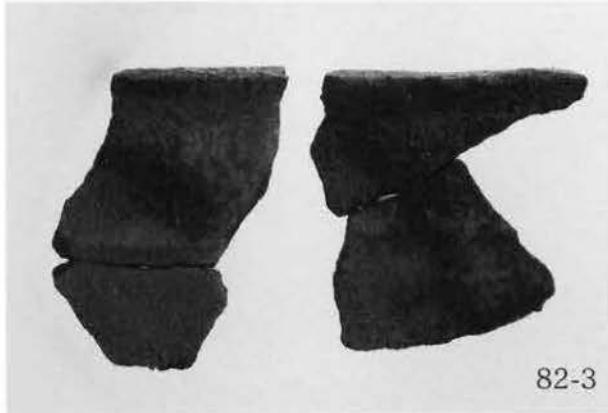

81-19

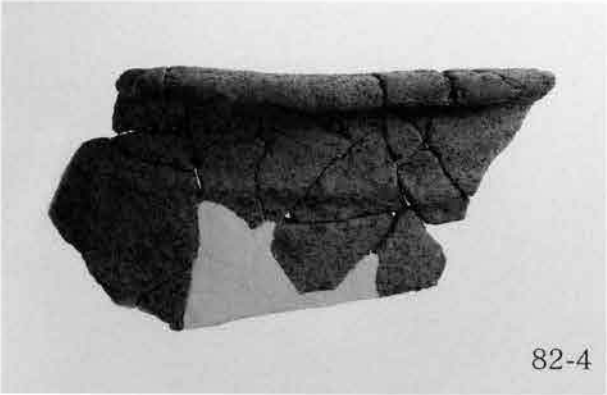

81-20

81-22

82-1

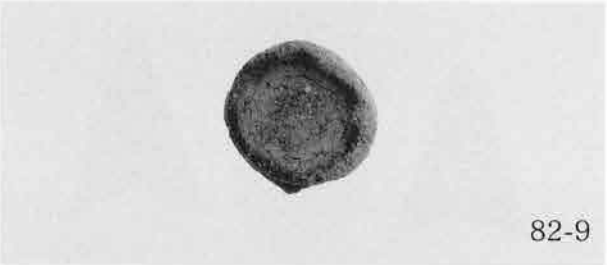

82-2

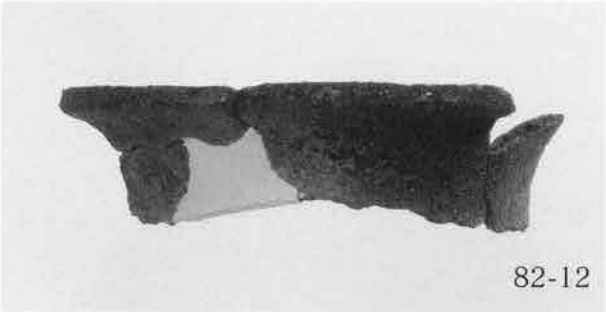

82-3

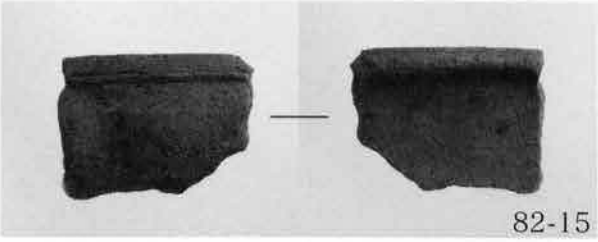

82-4

82-5

82-8


82-9

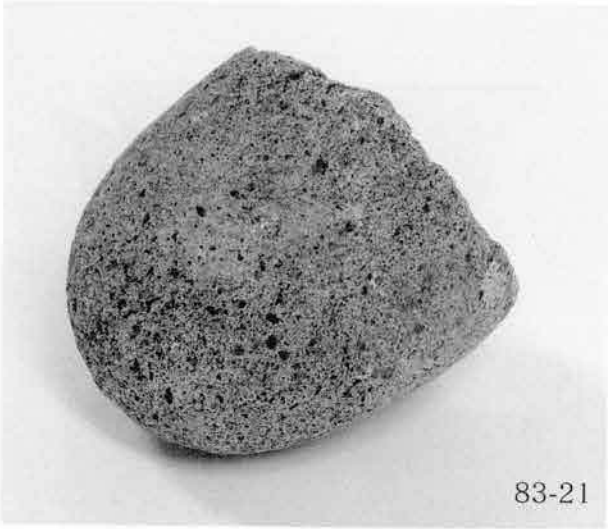

82-12

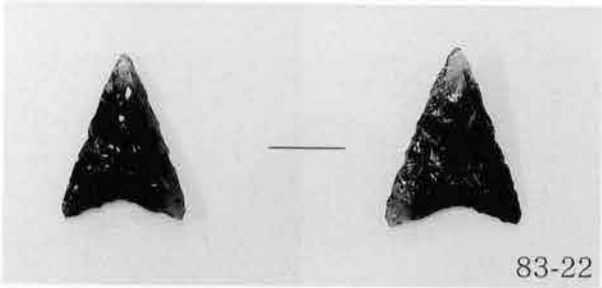

82-15

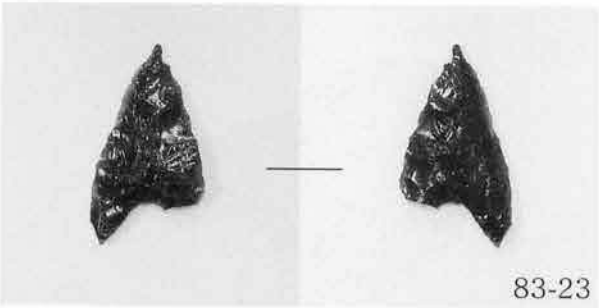
82-18

82-19

83-20


83-21


83-22

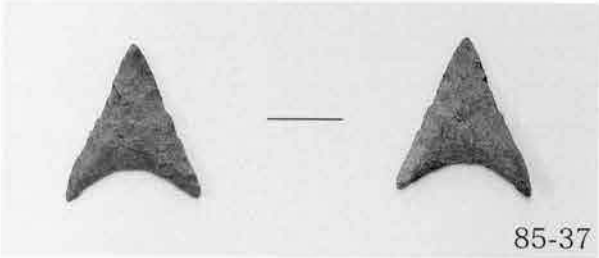

83-23

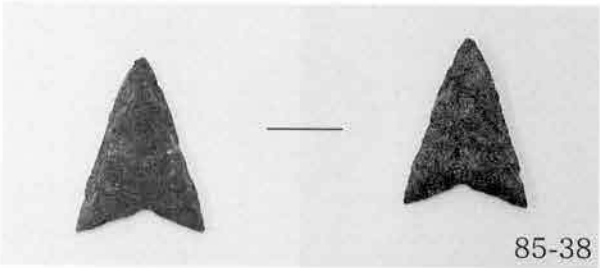
84-24

84-25

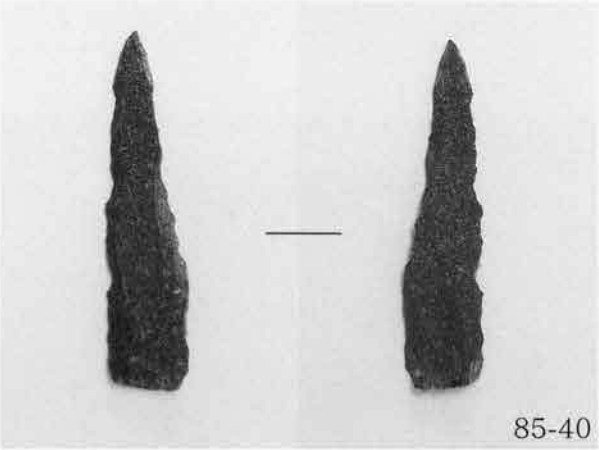
84-27

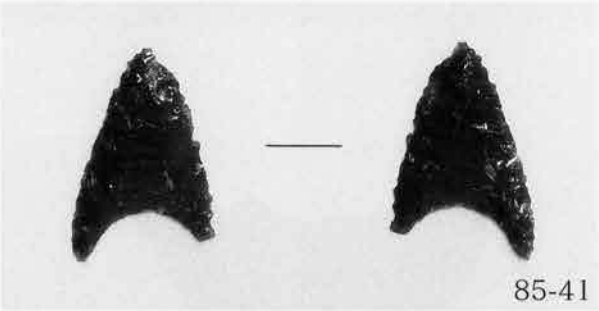
84-35

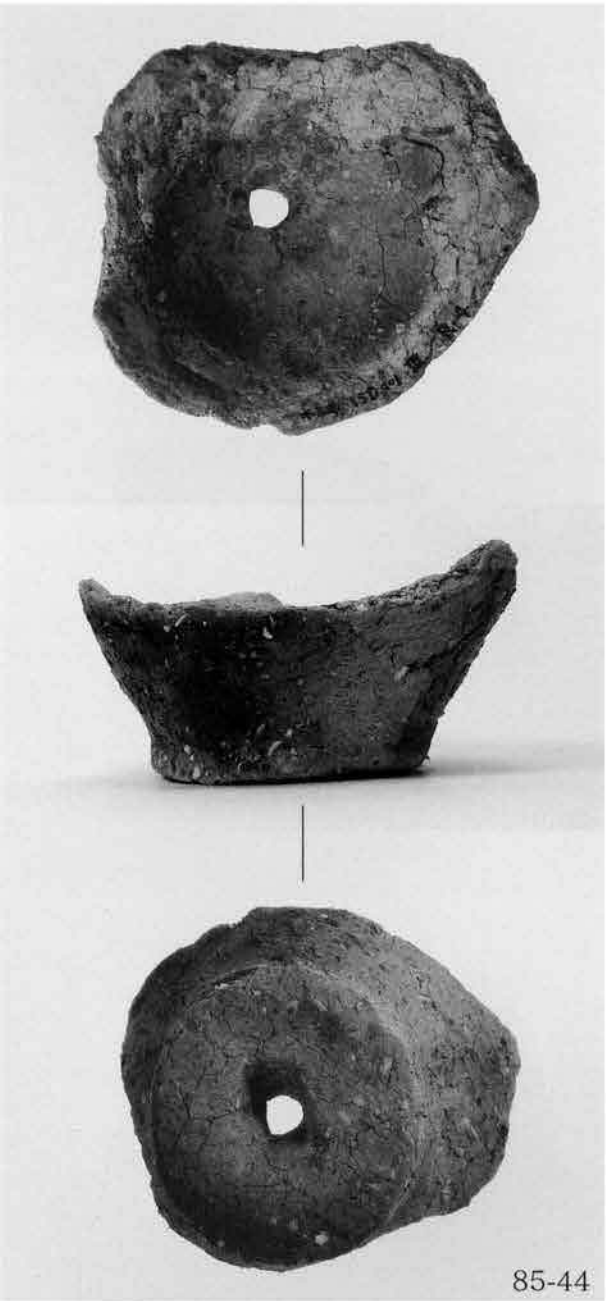

85-37


85-38

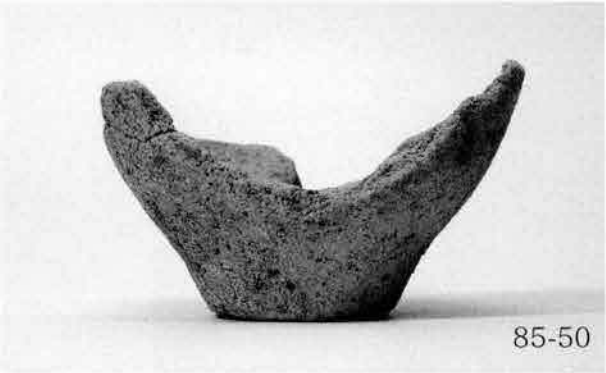
85-39


85-40


85-41


85-44

85-43


85-50

85-51

86-1

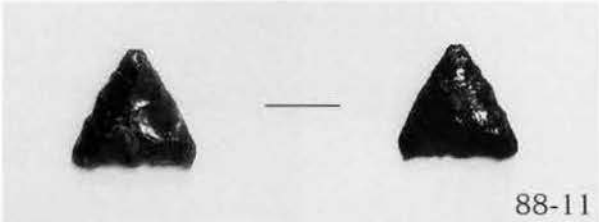
86-2

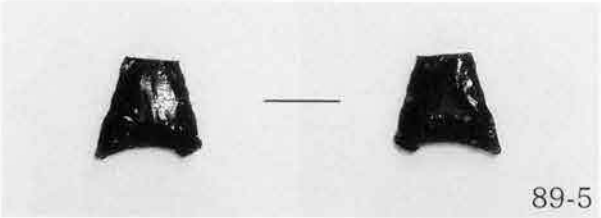
86-3

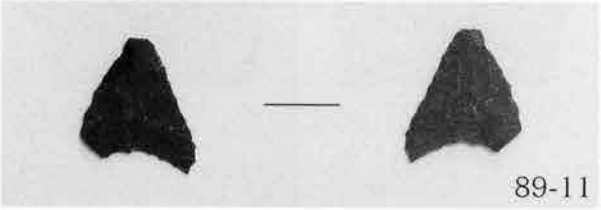
88-1

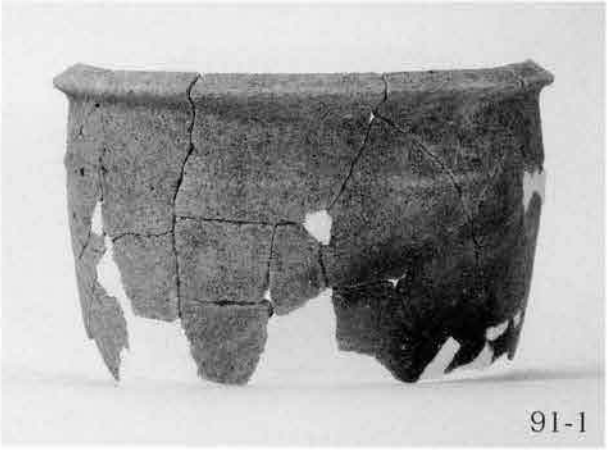
88-8

88-9


88-11


89-5

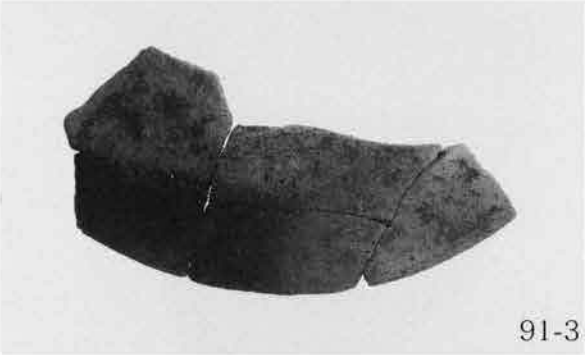

89-11


91-1

90-5

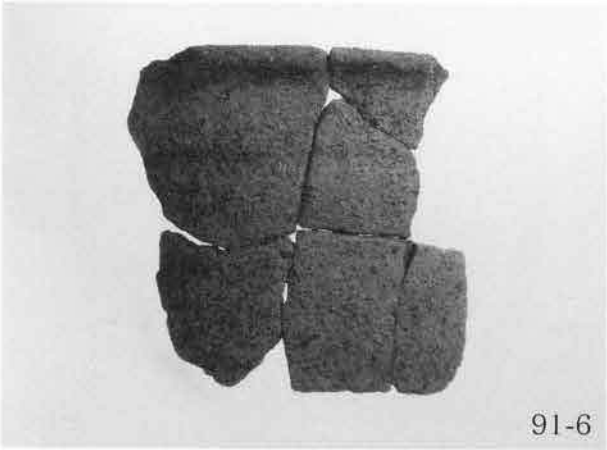
91-2

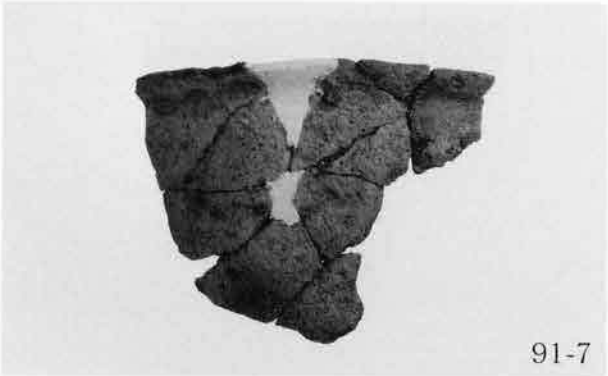
90-11


91-3

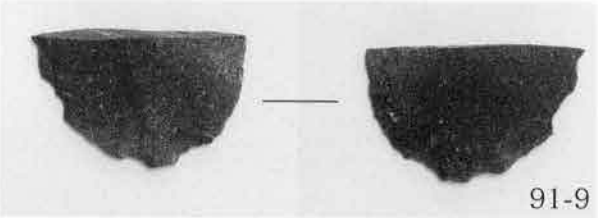
90-12

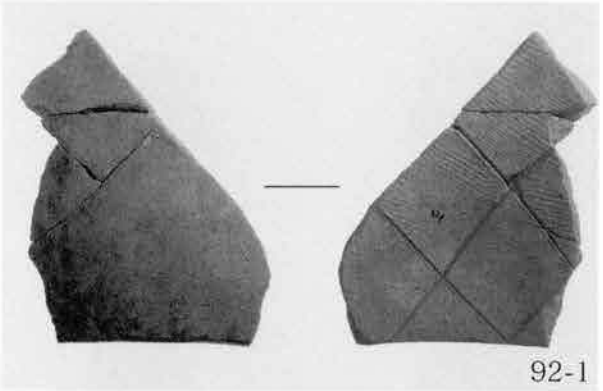
91-5


91-6

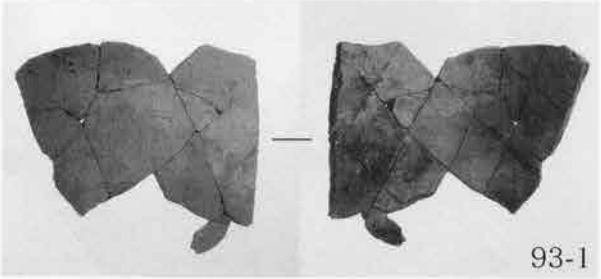

91-7

91-8


91-9


92-1

92-2


93-1

93-2

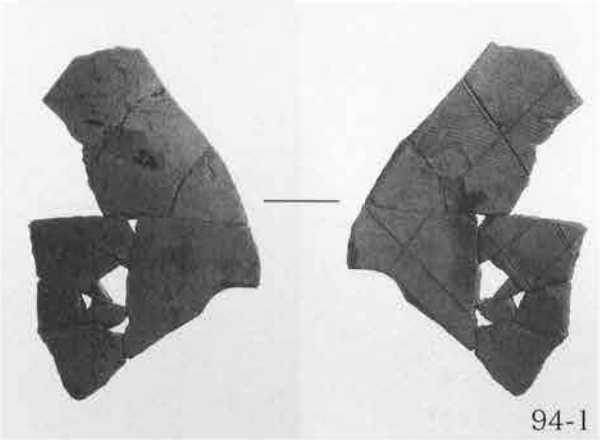
93-4

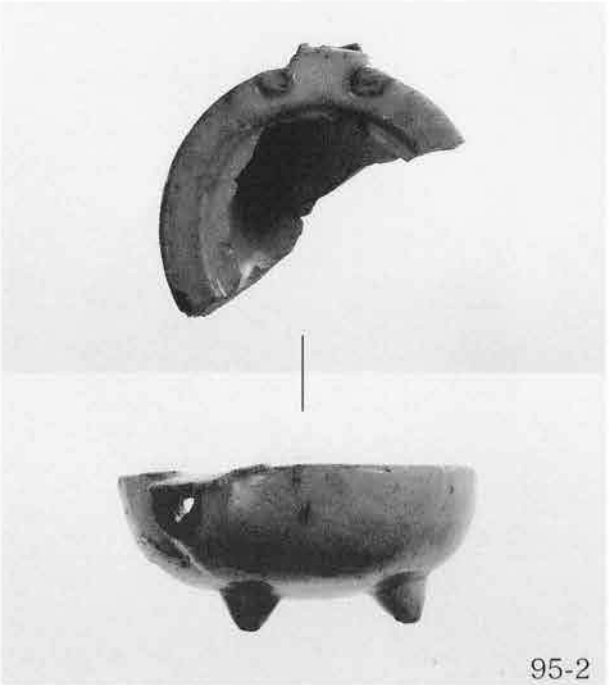
93-5

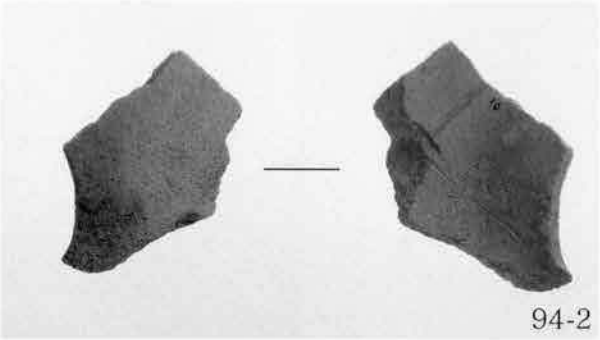
94-3

93-6

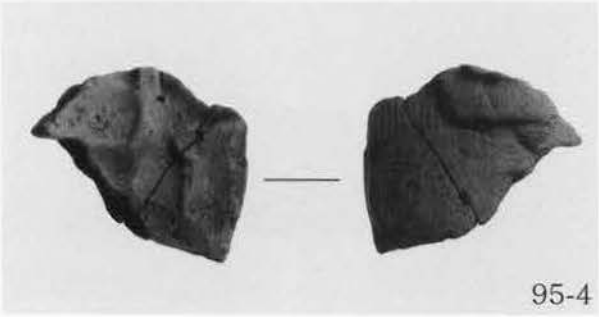
95-1


94-1

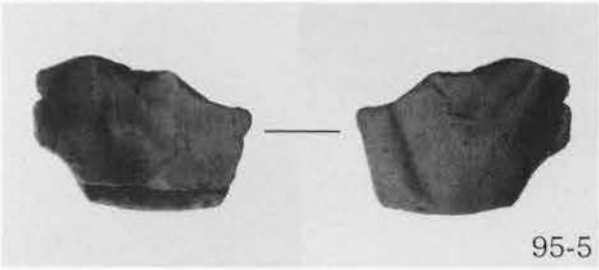

95-2


94-2

95-3



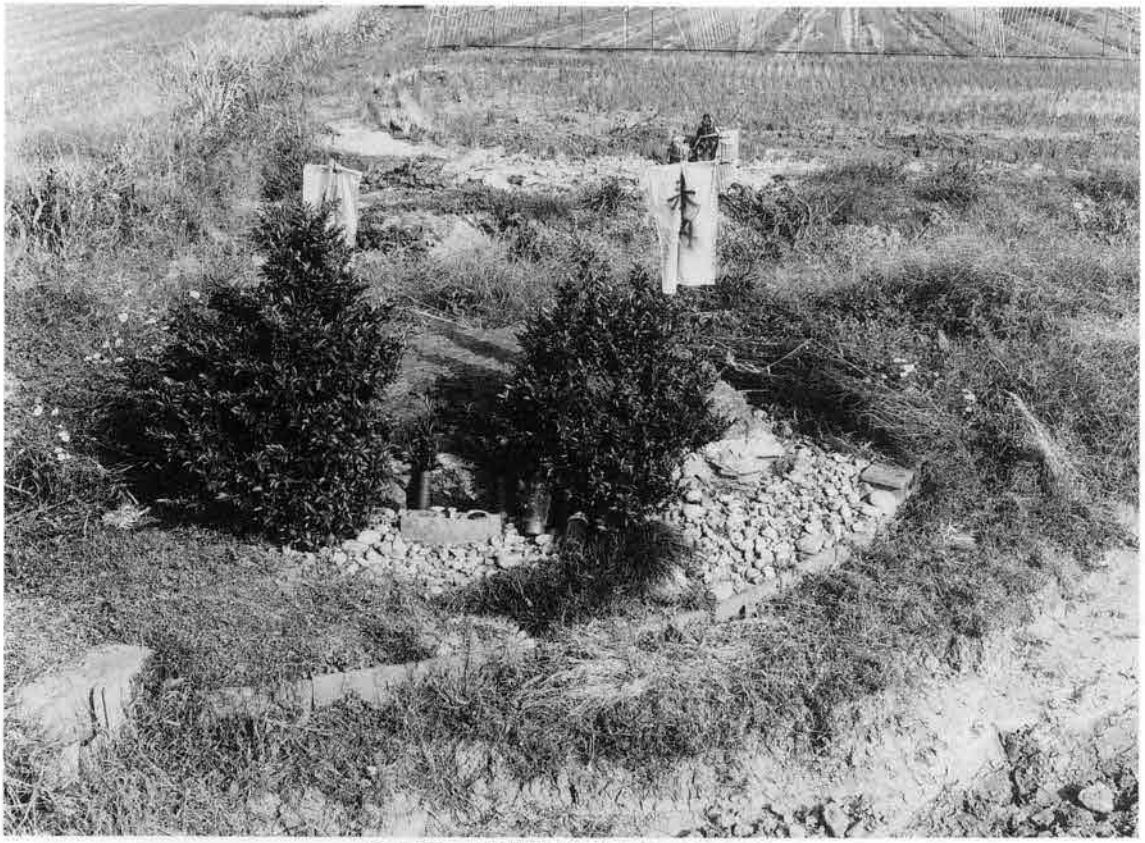
95-4



95-5

93-6

95-5

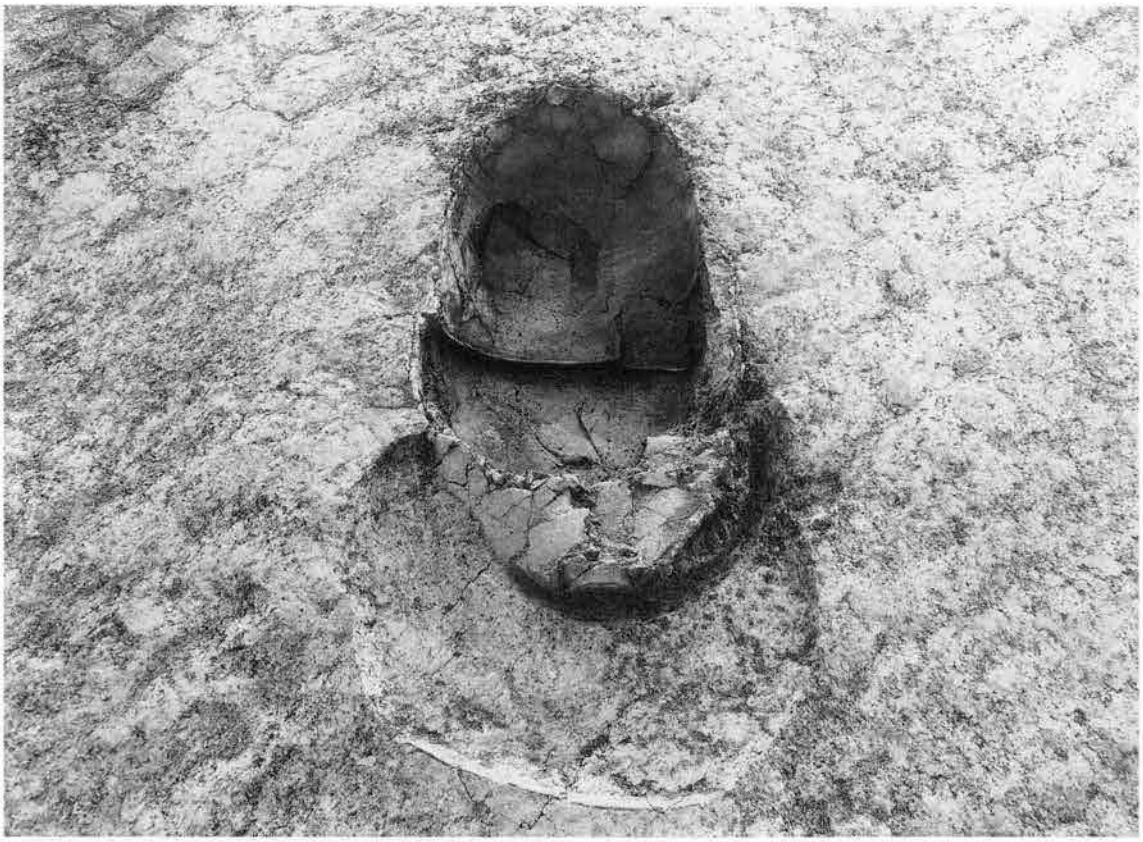


平霊石（ほ場整備施工前・南から）

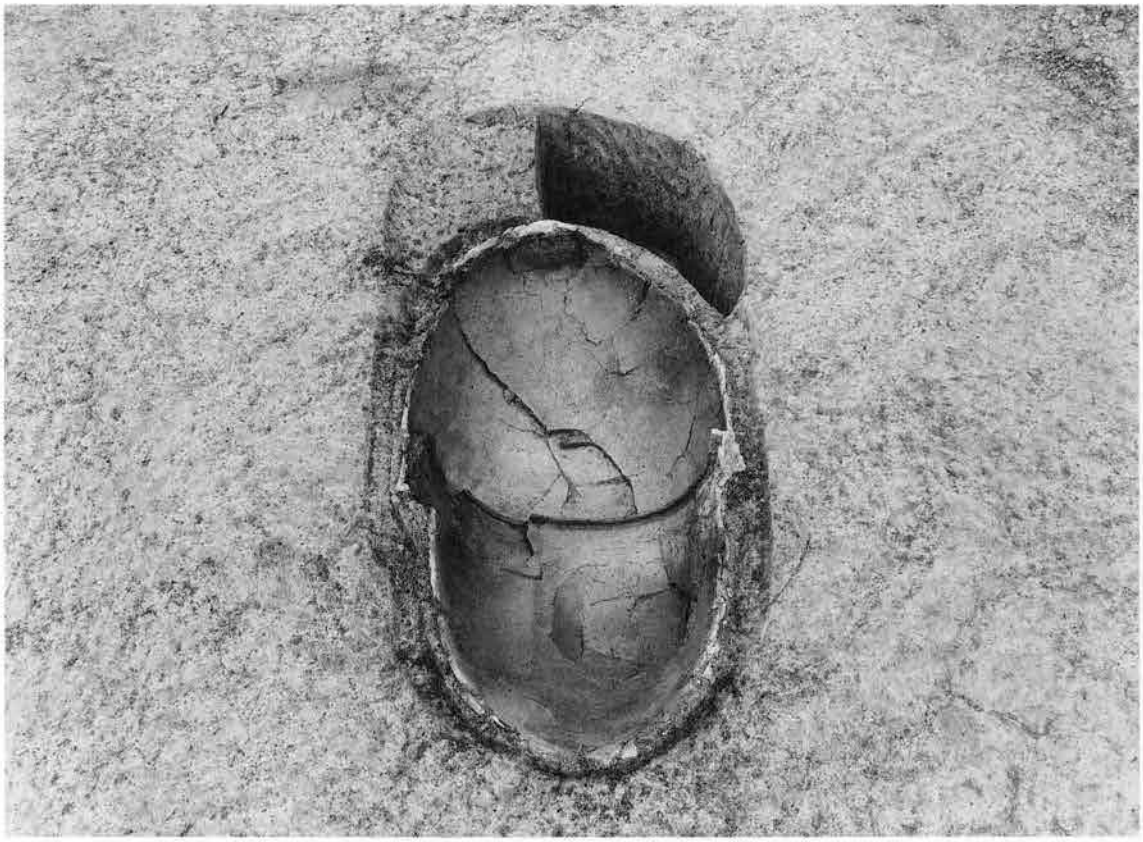
平霊石（ほ場整備施工前・東から）

甕棺検出状況（北東から）

甕棺検出状況（北東から）

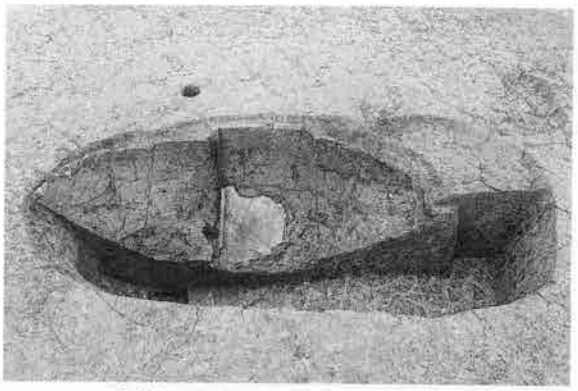


甕棺掘方完掘状況（北東から）



甕棺掘方向完掘状況（北東から）

甕棺内部土層断面（南東から）



甕棺掘方土層断面（南東から）

甕棺掘方完掘（北から）

写真撮影風景

平霊石（ほ場整備施工後・南から）

甕棺　上甕

甕棺　下甕

筑後西部第２地区遺跡群（Ⅷ）
筑後市文化財調査報告書
第57集
平成16年3月31日
発　行　筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898
印　刷　(資)四ケ所印刷
福岡県甘木市大字馬田336